瀧本弘之 編

清朝北京都市大図典

康熙萬寿盛典図／乾隆八旬萬寿盛典図（参考図）

遊子館

瀧本弘之 編

清朝北京都市大図典

康熙六旬萬寿盛典図（完全復刻）／乾隆八旬萬寿盛典図（参考図）

遊子館

清朝北京都市大図典

康熙六旬萬寿盛典図（完全復刻）／乾隆八旬萬寿盛典図（参考図）

解題

『康熙六旬萬寿盛典図』初探

『康熙六旬萬寿盛典図』初探

瀧本　弘之

緒　言

康熙帝六十歳の祝賀記念である一大祝典『萬寿盛典』を図解・記録した『萬寿盛典図』は多くの書物などでも引用され、言及されることが多い大規模な作品であるにも拘わらず、特殊な専門家以外に実物を手にとって賞玩することが、これまで一般には極めて困難を伴っていた。私はここ十年の間に幸いにして「初印」を称する複数の作品を手ずから調査することができたが、いずれも「完璧」な状態のものは少なく、ここに完全なものを提供できるのは大きな喜びである。

今回、この完全覆刻と同時に『乾隆版・萬寿盛典図』などの参考図版、併せて「図記」（康熙版）の文字（一部）を世に送り出すことになり、長年その企画を推進してきたものとして、ここに若干の鑑賞の手引きとなる解説をしてみたい（本文欄外の解説も筆者によって行った）。もとより浅学菲才のうえ、膨大な図像を料理することは困難であるから、「解題に代える」意図をもって、多方面の研究者の利便を計れるように、私の理解可能な部分と本格的研究の「露払い」にとどめたい。

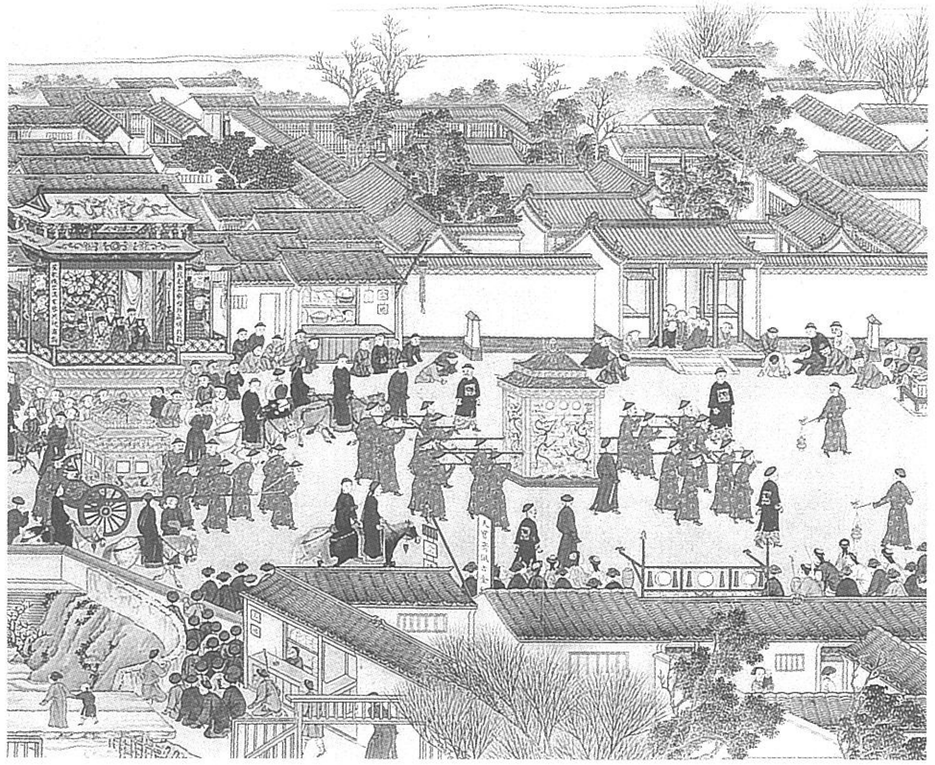
既に一九七〇年代に、碩学小野勝年博士が『萬寿盛典図』の考証に着手されていたので、大方の人々にはその解説は知られているとおもう。重複となるような解説はできるだけ避けたので、必要な方はそちらを併せてご覧になるようにお勧めする。

一　萬寿盛典とは何か

中国では歴代を通じて、最高権力者である皇帝の起居言動が最も重要なものとされたが、その誕生の祝い「萬寿節」は、長寿を祝賀する行事として極めて厳粛かつ盛大に執り行われていた。漢代に発達、普及した天人感応思想によって、皇帝の長寿は国の繁栄と長命に直接影響していると考えられたのである。あらゆる国家行事、祭事の中でも第一級の取り扱いであった。

誕生日でも節目に当たる、皇帝の「周甲」六十歳、「古稀」七十歳、「耄耋」八十歳は、なかんずく力の入ったものとなり国を挙げて祝われた。こうした行事を「萬寿慶典」と呼んだ。清初の順治八年（一六五一）には、元旦、冬至、萬寿節を毎年の三大祝典日とすることを取り決めた。この祝典に当たっては、首都の文武百官は、故宮の太和殿の前で皇帝に慶賀の意を表し、また地方の文武官員は祭壇を作って朝服正装の上、香を焚いて祝賀行事を執り行うのが通例であった。

清代において、萬寿節の行事が大規模に行われた例を挙げると、第一に康熙帝玄燁の六十歳の大寿が挙げられよう。康熙五十二年（一七一三）三月十八日に六十歳の誕生日を迎えた康熙帝玄燁の誕生祝賀行事である。これに次いで、乾隆帝弘暦の乾隆五十五年（一七八〇）八十歳の誕生祝賀、さらに嘉慶帝顒琰の六十歳祝賀、西太后の五十歳、六十歳祝賀などである。このうち我々は康熙帝の「六旬」、乾隆帝の「八旬」の祝賀の様子をそれぞれ版



●康熙萬寿慶典図（彩色絵図本）

画冊の『盛典図』などでつぶさに伺うことができ、慈禧太后の「五旬」などは『点石斎画報』で名高い画家呉友如の画によっても知ることができる。

この『萬寿盛典』図は、六十歳の誕生祝賀のため皇太后を伴って離宮から故宮に帰還する皇帝の鹵簿(天子の行列)を迎える、北京市内の臣民らの歓迎ぶりを克明に描いている。沿道の装飾から町並み、人々の生活の一こままで詳細に徹底した中国式のリアリズムで描写しきっている。いっぽう、故宮内部での実際の慶賀の祝典そのものはここには描かれず、これは故宮内すなわち宮中で執り行われた。

『大清会典』は、清代の典制について包括的に記した官修書で、ここには萬寿節の内容についての詳細な規定が記載されている。それによれば、慶典の準備として、王以下輔国将軍以上、公、侯、伯、満漢大学士、内大臣、都統、尚書、左都御史、護軍統領、前鋒、統領、副都統、満漢侍郎、直省将軍、総督、提督、総兵官らは皇帝に献上品が義務づけられていた。何がしかの貴重な記念品を進呈すべき義務を負っていたのである。このなかには、贅を尽くした珍宝の数々があり、それぞれ民間の名手の手によって、多くの傑作が生み出され故宮に運び込まれていった。

康熙五十五年(一七一六)『萬寿盛典』百二十巻が刊行され(開雕は五十四年、刊行は五十五年十一月)ここに版画によって壮大な鹵簿と歓迎の北京市内のありさまが詳細な図解と文字で記録されている。今回、刊行したものはこの『萬寿盛典』の「四十一・四十二巻」の図巻部分に他ならない。

康熙帝の「萬寿盛典」の模様は「萬寿盛典」の文字部分に加えここに影印した「版画冊」以外にも、精緻を凝らした絵画によっても記録として残されていた。

上下二巻の絹本でこれを『康熙六旬萬寿慶典図』という。手がけたのは宮廷画家の冷枚、徐探、金昆らで、これは後に故宮内部の火災で失われた。そのため後に乾隆時代に、蘇州の画家らによって再び版画の『萬寿盛典図』を粉本として新たに描き直され、これが北京の故宮博物院に伝世している。この『萬寿盛典図巻』は、「版画刷」をやや拡大しそのまま色刷りにしたようなほぼ完全な複製といってよい。先年日本でも故宮博物院展の際に展覧された。

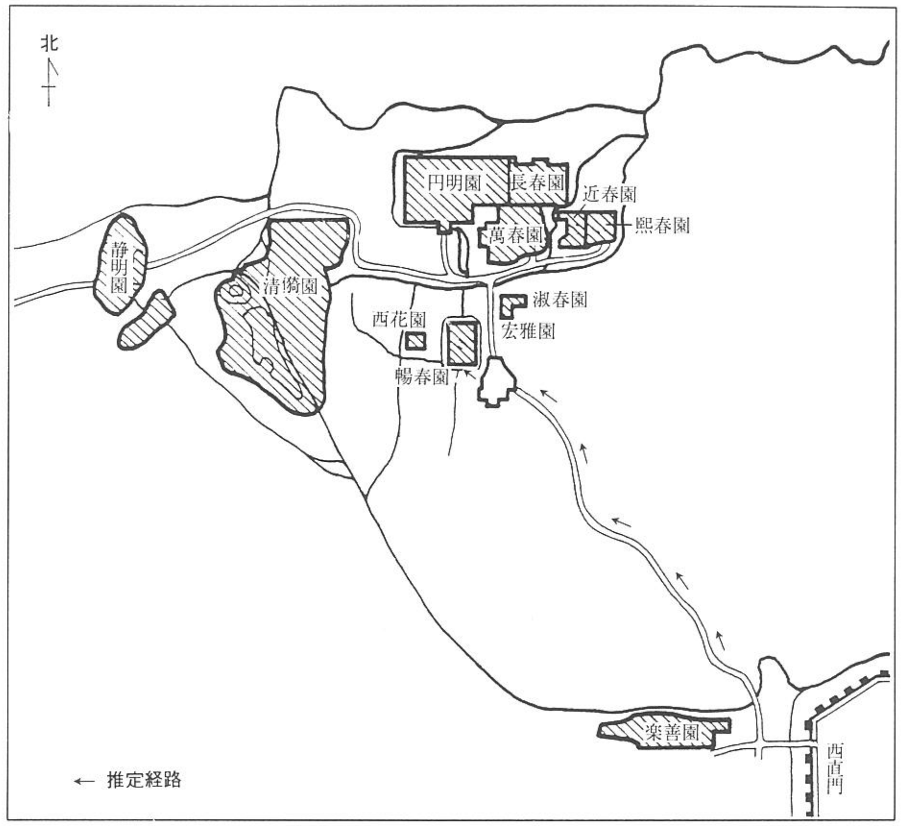
既に述べたように、誕生祝賀のなかでも康熙帝の六十歳の「萬寿盛典」は、清代を通じて最も盛大で規模の大きい趣向を凝らしたものであった。これは、一つには清代を通じてこの康熙末年が、国力において最も充実し、あらゆる点において世界に冠たる大清帝国の威光が輝いていた見証であると言えるのではないだろうか。まことに美術、文学などの文芸は歴史の忠実な写し鏡である。『萬寿盛典図』には、こうした通説がもっともよく当てはまるのである。

二　鹵簿の経路について

鹵簿が離宮を出発したのは、康熙帝の誕生日の前日の旧暦の三月十七日のことであった。誕生日当日の十八日には、故宮内部で式典が行われている。

鹵簿の経路は、右開きの版本の順序からみて、画巻の開始と逆の構成になっており、画巻が故宮から始まるのに反して、鹵簿は西郊の離宮である暢春園から出発する。この行列と逆方向から始まる構成によって、画巻を見るものは、皇帝の行列を迎える準備にあわただしい北京市中の雰囲気から時間を追って、威厳粛々たる皇帝の鹵簿の様子、それが通り過ぎた後の歓喜の放心状態の市民のありさまや、長閑な片づけの様子などを、恰も自然な時間を追ったように順番に楽しむことができるのである。これは偶然とはいえ、真に巧みな構成と言うほかはない。

故宮の神武門からでた道は、景山、北海公園の中を通って、西に向かい、西安門に至る。西安門を過ぎて大市街に突き当たり、この十字路を右折北上する。じきに四牌楼を過ぎる。真っ直ぐ北に向かい、多くの寺廟の林立する大市街を北上し、やがて新街口で左折し再び西に向く。そして西直門大街を真っ直ぐ西直門に向かい、西直門を出て城外に至る。道は西直門から西大外街に至ると北北西に折れて、北下関、上園村、大柳樹南站と北西に辿る。これは、現在の高梁橋路をほぼなぞっていると考えられる。そして、さらに北西に友誼賓館、中国人民大学のあたりを過ぎて北上すると海淀、最後に円明園の南に位置する暢春園に至る。



●西直門からの経路(「円明園」(1985年)から推定)

鹵簿は離宮である暢春園から故宮に向かっているが、版画は逆に故宮紫禁城の北側の神武門

から始まる。こうすることによって、行列のはじめから最後までを実際に見るような効果が期待できるのである。紫禁城が雲の中から登場するという始まりは、我が国の絵巻物を連想させる。そして景山から白塔の見える北海の橋を渡り、真っ直ぐ西に向かう。道路の両側には、木で作り絹を張った「采棚」「采坊」や「戯台」などの飾り付け、また町角に誂えられた香炉などがある。

鹵簿は、皇太后の騎乗した輌が康熙帝の輌に先立っている。皇太后は、十六名の担ぎ手によって運ばれ、輌には五爪の龍が黄金色の生地の上に描かれている。道端の民草は平伏しているが、その表情に畏怖は読み取れない。第二番目の輌は、鳳凰の文が描かれる。それ以降の輌に、図柄はまったくない。

康熙帝玄燁の騎乗した輌は、さすがに厳重また荘重な警護によって取り巻かれている。しかし、その威厳にもかかわらず周囲の雰囲気はしごくおっとりとした様子に描かれている。

西直門からの経路は、現在の高粱橋路から海淀路の周辺を通ったことが推定される。西直門を過ぎると、町を外れた郊外の田園風景が入り交じる。ここからは、皇帝の離宮であった暢春園までがやはり多くの寺廟などを経て描かれている。

目的地の暢春園は康熙年間に建造された皇室初めての園林で、元は明の皇戚李偉の所有していた「李園」であった。ここで康熙帝は「喧騒を避けて政を聴」いたのである。

ところでその名の高い円明園は、康熙帝が明代にここにあった庭園を改修後に雍正に賜ったもので、雍正帝は即位後にここを増築し、またしばしばここで朝政を垂れたという(したがって、円明園はこの萬寿節の時点には、未だなかったのである)。以後、乾隆から咸豊年間にかけて次々と新たな建築物を造修し、特に乾隆時代には大規模な西洋庭園が増築され、第二次アヘン戦争に伴う「アロー号事件」で一八六〇年秋、完膚なきほどに破壊されるまでその威容を誇っていた。

この暢春園には、康熙帝の還暦という大事な節目の「萬寿節」を祝う行列を送り出した後の片づけの様子が描かれ、人々の春先の行事を終えた安堵の気持ちが伝わってくる。

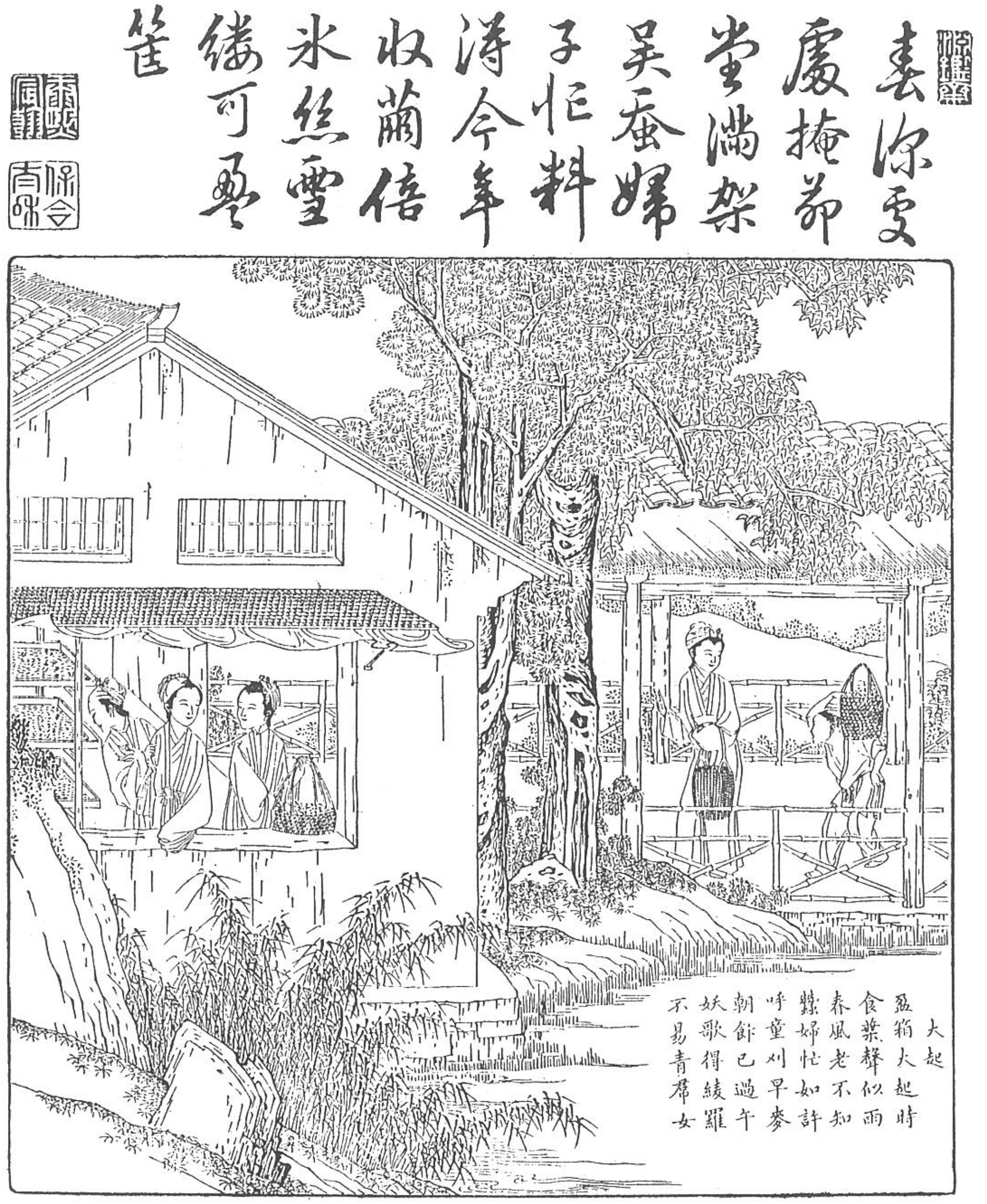
三　版画冊としての『萬寿盛典図』

ここに覆刻・影印した『萬寿盛典図』は、清代版画の代表作であると同時に、中国版画史、世界版画史においても最大規模の木版画である。

ここで明末清初からの中国の版画史の流れを、簡単にたどっておこう。

明末清初は中国版画史にとっては「黄金時代」である。特に、『三国演義』『水滸伝』『西廂記』『琵琶記』などの各種小説戯曲本が急増し、ほぼすべての書籍に挿絵がつけられ、刻工は各地の流派が腕を競い、誇らしげに挿絵に自分の名前を刻み込んだ。名のある画家、丁雲鵬、陳洪綬らが、自分の作品を挿絵として提供した。南京、蘇州、杭州、建安、徽州などが、これらの書籍版画の拠点であった。極めて自由な出版が行われていた。

こうした混沌とした状況の中から、『十竹斎書画譜』『十竹斎箋譜』『蘿軒変古箋譜』などの文人趣味を極めた贅沢な版画冊も生まれたのである。これは、印刷技術の粋を極めた「餖版」(多数の小型版木を寄せ集めて、繰り返し刷っていく技法)や「拱花」(空刷りに相当する)を用いたまことに精巧な作品集で、この時代の経済発展に対応して版画の技術も飛躍的に向上したのである。清代に入って康熙年間には有名な『芥子園画傳』も登場する。



●『耕織図』康熙35年(1696)

清初から乾隆時代にかけて「姑蘇版」つまり「蘇州版画」が、ヨーロッパ文化からの刺激を受けて誕生し、清初に日本に渡来したこれらの作品は、『芥子園画傳』などの版本類と共に、我国の彩色の浮世絵、錦絵の誕生を促したのであった。また蘇州では、名工朱圭らの活躍によって『凌煙閣功臣図』などの名作、さらに殿版の『耕織図』などが生まれた。

『萬寿盛典図』は殿版版画の傑作とされるが、一般に殿版とは「武英殿版」のことで、主に故宮内部の印刷所「武英殿」(萬寿盛典図は養心殿刻本とする資料もある)で制作された出版物の総称である。明代にも官制の図書はあったが、主に清代のものをいう。とくに活字印刷を行った『古今図書集成』や『武英殿聚珍版叢書』の百三十四種などがよく知られている。光緒年間にも、武英殿では営々として殿版が制作されていた。ただし版画として取るべきものはない。

版画関連では、康熙年間の『耕織図』『六旬萬寿盛典図』をはじめとして、乾隆年間の『八旬萬寿盛典図』や銅版画の『得勝図』類などもやはり殿版の代表作である。官制の出版物のため、採算を考慮しない贅沢で手の込んだ作り、そして精密な校勘をしているのが特色である。

康熙年間の殿版の仕上げとして登場したのが『萬寿盛典図』であり、また同時に清代版画史の頂点を示している。

文学者として著名で、中国版画の収蔵家でありまたその研究者としても不世出の人材であった鄭振鐸(一八九八―一九五八)は、この『六旬萬寿盛典図』について、次のように評価している。

> 彫り師は朱圭だが、多分一人ではなく、多くの呉郡の名手を数多く集め、彼の監督の下に完成したものであろう。この巻子は、皇室の行列、儀杖以外に、当時の北京城の内外の社会生活、民間の様々な有り様を総て差し挟んでおり、重要な歴史文献である。画家は力の限りを尽くし、彫り師はその目と手を働かせ、この絵巻の境地を精巧に伝達している。美術史上かくも綿々長々とした絵巻は、空前のものであり、ここに包括された多種多様な事物形象も空前である。山水、花卉、界画、人物から馬牛に至るまで、また道教、仏教などあらゆるものがあり、大いなる気力と修養があって、初めて可能であろう。朱圭はこのような巨大な制作、あらゆる物を描いた不朽の作品に拘わり、自らをも不朽にしたのである。我々の祖先の器量の斯くも大きなことは、しばしば想像を越えている。政治経済、文化建設を問わず、芸術創作でもしばしば人より抜きん出ているのである。これほど規模宏大な長巻は、恐らく世界でも二つとないであろう。(『中国古代木刻画史略』　拙訳による)

以上の表現に付け加えるものがあれば、それは、この画冊が殿版でも大規模なものであるため大変希少なものであるという点であろう。近年勃興した古籍オークションにもたまに登場するが、収蔵される機関は世界でも数えるほどである。

さて、ここに刻工とされた朱圭は、蘇州出身の刻工として知られる人物で『凌煙閣功臣図』『耕織図』など中国版画の名品を数多く手がけたことで名高い。

また画家の冷枚は康熙年間の宮廷画家、同じ宮廷画家で同郷の焦秉貞の弟子である。字は吉臣、号は金門外史または金門画史。山東膠県の人。人物画、界画などに秀でた。

焦秉貞は山東済寧の人で、天文学にも通じた。彼は、キリスト教宣教師で内府の欽天監正を務めていたアダム・シャール(中国名・湯若望)に西洋暦法などを学びながら、遠近法などを習得し、自身も康熙年間に欽天監五官正の役職にあった。康熙三十五年(一六九六)康熙帝の命により『耕織図』を描いたことで特に名高い。絵画作品は、肖像画や仕女画が知られている。この時の刻工が『凌煙閣功臣図』や『石濂和尚集』を彫った朱圭と、梅裕鳳であった。梅裕鳳は、やはり朱圭と共に『避暑山荘三十六景図詩』の刻工を行なっている。冷枚は師の焦秉貞同様に、遠近法を利用した俯瞰図などにも秀でていた。この『萬寿盛典図』は、版画作品ではその代表作の一つになるだろう。

四　『康熙南巡図』と『萬寿盛典図』

康熙帝は、生涯を通じて六回の「南巡」を行った。これは、鹵簿を連ねて江南地方を視察する大旅行であり、これによって大清帝国の統治の強化を図るとともに、豊かな物産や人材を中央に吸い上げる役目をも果たしていたようである。この記録の大規模絵画が『康熙南巡図』である。

『康熙南巡図』は、康熙二十八年(一六八九)に康熙帝が第二回目の南巡を実施したとき、この記録を多数の画家によって絵画に描かせたものであり、当時都察院左副御史の宋駿業がその総裁となった。

宋駿業(?―一七一三)は康熙年間の宮廷画家で字は声求、号は堅斎、または堅甫。江蘇常熟の人である。長洲の人ともいう。官職は、兵部左侍郎に至った。王翬の弟子。康熙帝の南巡の際に王翬にしたがって、北京に出た。康熙帝勅撰の『佩文斎書画譜』編纂の総裁等を務め、人物画、山水画などに秀でている。康熙五十六年(一七一七)の『萬寿盛典図』の絵を冷枚らとともに描いた。『佩文斎書画譜』は、康熙四十七年(一七〇八)に完成した勅撰の絵画論集である。孫岳頒、宋駿業、王原祁等の奉詔編纂であり、百巻に及ぶ。

王翬(一六三二―一七一七)は、清初画壇を支配した「四王」の一人である。字を石谷、号を耕煙山人、烏月山人、清暉主人などという。江蘇常熟(虞山)の人。康熙帝の命で、『康熙南巡図』制作を監督・主宰している。絵画は倣古の山水が多く、新味に乏しいが数は多い。宮廷画家としての高い地位によって弟子も多く、その一派は「虞山派」と呼ばれた。宋駿業はその一人である。

宋駿業は、師である王翬に全体の構想に就いて相談し、複数の画家の集合体でこの事業を完成した。全体の構



●『康熙南巡図』康熙33年(1694)

成を差配した王翬は、このために弟子の楊晋とともに上京して、山川、建築物などの配置などに指示を行い描かせたとされる。画巻は完成までに六年を要している。絹本で十二巻に及んだ『康熙南巡図』は、大陸以外には現在ヨーロッパやアメリカなど世界各地に散らばっており、故宮博物院には一、九、十、十一、十二を残す。その他の画巻は現在も発見されていない。

この『康熙南巡図』は、市街図、村落図、人物、河川など多数の風景を多くの視点を活用しながら展開していく。このような大規模な長巻の多数の画家による共同制作の経験は、故宮、北京市内から城外の暢春園に至る景観を追いかける『萬寿盛典図』の構想や実制作にとって大きな参考となったはずである。

明代までの画院でもしばしばこうした画巻が制作されていたが、現在故宮博物院に収蔵されている画巻を見ると、これはそのいずれをも上回る質と量で見るものを圧倒する。乾隆時代にやはり六回の南方視察を果たした高宗は、祖父玄燁に倣って『乾隆南巡図』を制作させたが、その内容ははるかに及ばないとされる。また、故宮には宮廷の式典の記録も多数残されているが、いずれも江南各地を巡回する優美繊細でかつ記述性に優れた『康熙南巡図』に芸術性で遠く及ばないのである。

この『康熙南巡図』は制作された時代の近接、作者群の近似によって『萬寿盛典図』の先駆的作品となり、またその記述性や絵画性、そして藝術性に大きな影響を与えたことは特筆しておくべきであろう。

五　刻工朱圭の半生

刻工の朱圭に就いてのべよう。

朱圭は蘇州の人で、生没年は不明、康熙時代に蘇州と北京で活躍した。清代を通じて最も知られた、またもっとも技巧のあった刻工である。字は上如、別に柱笏堂とも署名する。

康熙八年（一六六九）劉源絵図本の『凌煙閣功臣図』を彫った。『凌煙閣功臣図』は、朱圭の宮廷入り前の作品で、当時の蘇州版画の特徴をよく表した作品である。この時期には『柱笏堂墨戯』（劉源絵編・康熙刊）、『石濂和尚集』（康熙二十九年（一六九〇））を彫った。こののち康熙三十年（一六九一）前後に北京に行き、内府に入り奉職した。康熙三十五年（一六九六）、梅裕鳳とともに遠近法を取り入れた宮廷絵画として、よく知られている『耕織図』の刻工を行った。康熙五十年（一七一一）には、『避暑山荘三十六景詩図』を手がけた。これは熱河承徳の離宮、避暑山荘の風景に各時代の詩句を編纂してまとめたもので、沈喩が絵図、刻工は朱圭、梅裕鳳、内府刊本、二色套印である。

続いて康熙五十五年（一七一六）には、冷枚、宋駿業らの描いたこの『萬寿盛典図』を彫った。

付け加えれば、このように民間の刻工として宮廷入りした朱圭だが、その出世はかつて共に『凌煙閣功臣図』を制作した劉源の推挙による可能性がある。また恐らく康熙帝の南巡とも関連があるだろう。

劉源は清初の画家。多芸を謳われ、作墨、作硯、磁器にも才能を発揮し、工芸デザイナー的な才能にも長けていた。河南祥符、また洛陽の人ともいう。朱圭の手がけた『凌煙閣功臣図』の原画を描いたとされる（別人の作と

する説もある）。『清朝画家筆録』には、河南駐防漢軍鑲旗人とする。書画に長じ、康熙年間内府に入った。作墨の技術ももっていたため、故宮には劉源の作になる墨が遺されている。また、制硯の技をも持っていたので『西清硯譜』には、劉源作の硯が掲載されている（『端石雙龍硯』、康熙十八年作）。さらに江西の景徳鎮御窯では、数百種の瓷様を作ったが、巧妙に新意を出し、人物、山水、花鳥の絵付けにも優れ、その精美は明代の諸窯を超えたとされる。

いずれにせよ、劉源、朱圭のような名人が同じ時期にそろって宮廷に入ったことは、記憶してよいだろう。『萬寿盛典図』ののち朱圭の手がけた作品は知られていない。また、弟子であった梅裕鳳も名前が知られない。『凌煙閣功臣図』を二十歳で手がけたとしても、朱圭は順治年間の生まれであろうから、萬寿盛典図の制作時期には、既に七十歳の高齢である。この作品が最後の勤めとなったであろう。

朱圭の出身は順治年間の蘇州で、当時は「蘇州版画」の勃興時期である。明末清初の混乱の王朝交代を経て、年画産業が大きく変化する時期でもあった。清初は征服王朝の清が実施した徹底した言論弾圧で、小説戯曲本の出版が困難となり、多くの刻工がこうした民間版画へと転身したのであった。

朱圭の育った蘇州は、当時最大の貿易都市で外国との往来も頻繁であり、出版業も盛んで、版画を手がけるには最適の条件がそろっていた。『凌煙閣功臣図』には、外国との往来で磨かれた蘇州の先進的なデザイン感覚、繊細な蘇州人の趣味を満足させる高い芸術性が現れている。康熙帝は、六度にわたる南巡によって、こうした朱圭や劉源のような民間の人材を北京の故宮に吸い上げ、清王朝の文化をさらに強固なものにしようと考えたのであろう。

十七世紀末から十八世紀にかけて、突如として殿版の精巧な版画が多数現われる。これこそ、征服された側の蘇州文化からの北京への「凱旋」であり、また一種の「同化」でもあったといえる。朱圭の手がけた『凌煙閣功臣図』は純然たる民間版画であったが、『耕織図』は『萬寿盛典図』と並んで官制の殿版の最大傑作の名に恥じない出来ばえである。とりわけ、余りにも名高くなり、また墨などの文房四宝をはじめとして陶磁器や鼻煙壷など多くの工芸品にそのデザインを流用された『耕織図』に比べると、この『萬寿盛典図』の知名度の低いのは否めない。その理由としては、この制作が余りにも膨大な規模であったため、翻刻が不可能であったためにもよろう。また、やや単調な市街の行列であるため中心的な場面が少なく、これぞ「盛典図」という派手な画面が乏しいと言うこともあったのであろう。それに比べて、わずか四十八図しかない『耕織図』は、農業国中国の伝統や「西洋遠近法」の珍しさにも幸いされて、清代を通じて翻刻を繰り返し、また渡来した我が国でも木版、銅版などで模刻されている。

しかし、『萬寿盛典図』の内容は、農業図の敷延という単純な画面の『耕織図』に比べて格段に複雑かつ奥行きのあるものである。康熙時代の特定の時点における、極めて重要な特定の国家行事を、当時の世界で繁栄を極めていた帝国の首都に限って、一日の数時間を切り取ってみせたこの絵図は、その時代のあらゆる事象の萌芽を宿している。当時の風俗習慣は言うに及ばず、歴史、社会、経済、商業、都市、建築、儀礼、制度、演劇、美術、風俗……。いうまでもなく、登場する人物をはじめとしてさまざまな「もの」に就いての圧倒的な数量は、もちろんこうした版画冊では最大であろう。

この『萬寿盛典図』は、美術、文学、演劇、経済などいずれの分野を取ってみても、参考にならないものはないほど多彩にして該博な内容を包摂している画冊であると言えるだろう。ここから現代の人間が汲み取れる材料は



●『凌煙閣功臣図』康熙8年（1669）

限りなく豊かなものがある。その意味でこの朱圭の畢生の傑作『萬寿盛典図』の刊行は、版画研究史上の一代記念碑となるばかりか、周辺の歴史、文学、社会、風俗、美術などさまざまな分野を刺激しつづけるのである。

六　二つの『盛典図』—『六旬図』と『八旬図』の比較

『萬寿盛典図』は、康熙帝の「六旬」を記録したものと、その孫に当たる乾隆帝の「八旬」を記録したものの二種類が制作されている。そのうち、「六旬」には同時に制作された画巻があったが、既に述べたように、これは後に火災で失われ、改めて「六旬」の図巻を元に制作した彩色の図巻『萬寿慶典図』が現在も故宮に伝世している。今回の影印にあたっては、「六旬」の全部に参考のため「八旬」の一部を付け加え影印している。

乾隆帝の八十歳の萬寿節は、乾隆五十五年(一七九〇)の八月十三日に執り行われたが、その前の六十歳、七十歳の祝典は、母の崇慶皇太后の長寿祝いを優先したため、盛んなものはなかった。

八十歳の「十全老人」は、この時ばかりは祖父の康熙帝に倣って、史上最大規模の萬寿節を希望したようである。行列が円明園から故宮に向かったのは、誕生日の前日で八月十二日であった。康熙帝が三月十八日であったのと比べると、炎暑のやや収まった北京の秋口である。ちょうど早春の叙景を行う『六旬』から五か月後の初秋のことであった。翌日の十三日には故宮で荘厳盛大な式典が執り行われたのであった。

旧暦三月の『六旬』図には同八月の『八旬』図と五か月の季節のずれがあり、そして年月は八十年近くの歴史経過を見ている。その間の歴史の流れがこの絵巻きのなかにどう現われているかを読み取るのも興味尽きないことであろう。

『六旬』と『八旬』を全体的に比べてみると、主な相違点は第一に経路、そして第二に版刻の精密さの違いである。経路については、それほどの違いはない。基本的には、離宮である暢春園から故宮(六旬)、円明園から故宮(八旬)であり、とくに目立つ相違点は、故宮の入口が『六旬』では北側の神武門であるのにたいして、『八旬』では、西に面した「西華門」である点である。「西華門」に至る経路は、西安門を通って白塔を眺めており「団城」を過ぎて南に右折したわけである。

また、版刻についてはこれは名人朱圭の手がけたものとされる『六旬』に比べて『八旬』は、画家も版刻者も伝わっておらず、構成や描写では一歩も二歩も譲るところは隠せない。

しかしながら歴史資料としてみれば、話は別である。興味深いのは、沿道の装飾が康熙時代と乾隆時代では明らかに異なっていて、特に西洋趣味が弥漫していた円明園からの鹵簿であるうえに、沿道に設置された綵坊や綵棚などの仮説建築に、複数の西洋楼があるのは特筆すべきだろう。

康熙時代にはこうしたヨーロッパ趣味をうかがわせるものは一つも見当たらなかったのに対して、乾隆時代では、こうしたヨーロッパ的なものが、「臣民」の中からごく自然に飾り立てられている。まさに、「中西融合」した慶祝装飾活動なのである。こうした事実が、北京という首都に萬寿節におこなわれるということは、何を示すのだろうか。

中国の文化が外国からの異文化の進入に寛容であった時代は、歴史的にいくつか知られている。最も特徴的なのは、前漢の武帝の時代と、唐の時代であろう。前漢の時代、武帝は匈奴を征伐し西域・安南・朝鮮を攻略し、儒教を国家の政治教化の基と中央集権制を確立した。とりわけは西域からシルクロードの交通を固め、漢の国際国家としての地位は上がった。また唐の太宗李世民は父をたすけて天下を統一し、人材を登用して善政をしいた。その貞観の治から玄宗の開元の治までの間、大唐帝国は、国際的に最も繁栄した。

いずれの時代の藝術にも、排他的・国粋的な色彩がなく、海外、とくに西方からの異文化が自由に流入し、中国文化は華やかな色彩をいや増したのであった。

乾隆時代のヨーロッパ文化からの影響が随所に見られるこの『八旬萬寿盛典図』は、その時代の国際化と繁栄を具体的に市街図で記録している点に大きな価値があると思われる。そして中国の文化にとって極めて幸せな国際化の行われていた時代の図画記録として、興味深いのである。

版刻の精密さについては、取りたてていうほどのことはなく一目観ればどちらがより丁寧に写実的な制作であるかは理解できる。しかしそれ以上に描写について観察していくと、極めて特徴的なことは、盛典以外の背景部分の描写についての差異であろう。

『六旬』には、とりわけ詳細に盛典の背後で生活する市井の人々の有り様が事細かに描かれていたのに対して、『八旬』ではその描写が殆ど見られないのである。描かれているのは、一様に盛典に参加し、それを眺めている人物だけで、たとえば『六旬』の家の中で赤子をあやす女性などの細部は、残念ながら見られない。

これは画家の注意がこうした部分に行き届かなかったからであろうか。おそらく、『八旬』では、そうした部分の描写にはじめから余り意義を見出さなかったのではないだろうか。これは、康熙と乾隆という二大皇帝の治世を比較する際におのずと考えられることのように思われる。

結びに代えて

長巻の風俗絵巻と言えば、誰しも張擇端の『清明上河図』を思い出すであろう。故宮博物院に収蔵されるこの北宋時代の風俗画は彩色の絹本である。一般には汴梁城外での清明節における風光を描いたとされるが異説もあ

り、写実性に富むものの完全な「実景」とは考えにくい。それに比べ、この『萬寿盛典図』は、形式こそ違え、時間、場所、内容において確定され、写実性や資料性、スケールにおいては前者をはるかに凌駕するものである。ただ、それほどの知名度のないこと、利用の便の計られていなかったことが「活用」の幅を狭めていたのである。

今回、影印に当たっては、図版の理解に資するため必要な「図記」の文字部分を併せて掲載した。この完全覆刻によって、史上最大規模の版画冊が広く学界に活用され、研究に寄与することを切に願うものである。

参考文献

『萬寿盛典図』があらゆる分野を網羅しているので、ここでは主要なものに限って参考文献を挙げた。北京の市街についての記録は、『京師五城坊巷衚衕集・京師坊巷志稿』『道咸以来朝野雑記』『宸垣識略』『天咫偶聞』『京城古蹟考・日下尊聞録』『宛署雑記』『日下旧聞録』『光緒順天府志』『旧都文物略』など種々の古籍に数多く見られる。

『乾隆皇帝』杉村勇造　二玄社　一九六一年

『明清北京城図』地図出版社　一九八六年

『円明園』三聯書店香港分店・中国建築工業出版社　一九八五年

『萬寿盛典図考證』小野勝年著　『ビブリア』五十二号　天理図書館　一九七二年

『故宮博物院展』西武美術館　一九八五年

『蘇州版画—中国年画の源流』瀧本弘之等著　駸々堂　一九九二年

『清代院画』紫禁城出版社　楊伯達著　一九九三年

『中国美術全集10　清代絵画　中』上海人民美術出版社　一九八八年

『清代宮廷絵画』故宮博物院編　文物出版社　一九九五年

『中国古代木刻画選集』鄭振鐸編　人民美術出版社　一九八五年

『中国古代版画展図録』瀧本弘之編　町田市立国際版画美術館　一九八八年

凡　例

一、本書には、『萬寿盛典』一百二十巻（康熙五十五年〈一七一六〉刊行、開雕は五十四年、刊行は五十五年十一月）の「四十一巻・四十二巻」の全図版（通称『康熙六旬萬寿盛典図』）と、対応する「第四十三巻図記一」「第四十四巻図記二」を収録し、参考図版として『萬寿盛典図』一百二十巻二十冊（乾隆五十七年〈一七九二〉刊行（通称『乾隆八旬萬寿盛典図』）の一部を収録した。

一、『康熙六旬萬寿盛典図』ならびに『乾隆八旬萬寿盛典図』はほぼ原寸大で収録し、『康熙六旬萬寿盛典図』の図記「第四十三巻図記一」「第四十四巻図記二」は縮小して収録した。

一、『康熙六旬萬寿盛典図』には、適宜、図解説ならびに地図を付し、資料読解の便をはかった。『乾隆八旬萬寿盛典図』にも図解説を付した。

一、解題（『康熙六旬萬寿盛典図』初探）を収録。歴史資料としての解説をほどこした。解題の末尾には主要な参考文献を収録した。併せて活用されたい。

一、康熙六旬萬寿盛典図「寺廟・道観・地名等一覧」を収録し、その該当ページを示した。図記と共に利用されたい。

資料等協力者

本書の編集にあたり次の機関、個人の方々にご協力をいただいた。記して感謝を申し上げる。以下敬称略。
国立国会図書館、国立公文書館、東京都立中央図書館、北京図書館、中国版画史研究会、董志民、呉敏生。

『康煕六旬萬寿盛典図』寺廟・道観・地名等一覧

一、『康煕六旬萬寿盛典図』にみられる寺廟・道観・地名等を掲出し、その該当ページを示した。

一、＊は『康煕六旬萬寿盛典図』には文字の記載がないが、「図記」に記載があるものを示す。

康熙六旬萬寿盛典図『図記』

（初集巻四十三慶祝二図記一
初集巻四十四慶祝二図記二）

萬壽盛典初集卷第四十三

慶祝二 圖記一

自
暢春園至西直門臣民建棚慶祝者凡十有九
所爲記八
圖以臣民北面仰瞻摹繪而成故始
神武門而竟於
暢春園宫門記以
御輦所經次第先後而作則始

暢春園而竟於
神武門義各有取爾也由
暢春園花洞迤東過雙闈至宫門前直南五色
錦繒大綵牆一座結萬壽無疆四字左右大
綵坊各一過小東門東偏有寺曰清梵
諸皇子於内建
萬壽經壇直壇演劇綵臺一旛竿二寺外結大綵
坊一有聯曰普天共效三多祝大地齊呼萬
歲聲左右綵坊一坊外鼓亭各一先是有

乾清宫太監等亦於清梵寺建
萬壽經壇寺前結綵坊坊外夾道爲綵廊各八楹
中懸百老圖南頭仍蔽以横坊既
諸王經壇建乃撤所設於西廠今圖兼仍其舊
也
由清梵寺前徑南稍折而東曰太平莊爲直
隷九府臣民慶祝界道旁有通州進魚回民
百餘人陳魚於道左稍前過街大綵坊一進
坊左右鼓亭一又前路左演劇綵臺一臺前

有淮揚徐沿河耆民及河兵千餘人建黄幛
綵坊上書聖駕臨視河工指示方畧小民豐衣足食感戴天恩等語前列
萬壽亭左右旗仗宫燈黄繖中陳進
上袍帽及土宜食物又前路右有漕運旗丁數百
人慶祝陳設與淮揚耆民同又前夾路綵廊
左爲耕圖右爲織圖用絹爲田夫紅女按農
桑事次第各錄
御製詩一篇凡四十楹又前路左竹式演劇臺一
木質而竹理又前折而南爲葡萄長亭以綠

綵爲葡萄横蔭數畝中設
御座旁翼以百蝶小軒外周以花籬前有小橋過
橋稍折而東路右連像歌臺一歌始北方以
童子結束歌甘凉西音佐以絃索過臺爲小
關帝廟有鐥房諸臣慶祝經壇廟前爲龍棚
棚前有綵坊曰壽齊天地坊左右爲鼓亭循
鼓亭折而前過街綵坊二左曰鸞翔鳳翥右
曰日升月恒前立表棚一旛竿五出日升月
恒坊路右演劇綵臺一稍前路左有菴曰興

隆有算法人員慶祝經壇菴前燈坊一坊有
聯曰百生逢此日萬壽願齊天坊左右燈樓
各一直坊路右表棚一旛竿三又前爲節節
高歌臺節節高以童子結束聳立人肩從高
歌舞頗類連像尤加恢詭云又前連像歌臺
一路左雕木演劇臺一前接杏花林周遭花
闌六十丈内十番平臺一顔曰清音長草亭
一曰酒市方草亭一曰松峰六角草亭一曰
團瓢右前路右有原任包衣昂邦馬武同弟

李榮保慶祝龍棚前建綵坊有經壇在通慧寺圖不及又
前路右有廟曰皇莊關帝廟廟旁爲松亭又
前松牆百餘丈路左鼇山重臺一座高四丈
五尺周二十一丈下演劇上節節高歌臺前
爲牡丹圃圃下爲荷池池底以板爲之清波
瀠洄錦鱗翔泳臺後石山矗起林木蔚然皆
繒繭結撰者又前爲直隷臣民接
駕處路左有坊曰多士嵩呼路右有坊曰老人華
祝又前爲

萬壽寶閣閣三層高五丈五尺絶鉅麗閣前有綵
坊曰日華雲爛坊左右爲綵屏屏下綵獅六
各高丈有二尺直坊路右大綵牆一座結
天子萬年四字牆左表棚一又前有包衣人鄧光
乾張鼎升慶祝龍棚棚外旛竿二左右鼓亭
前立綵坊曰萬年有道坊下有綵橋過橋旛
竿四又前路右演劇綵臺一鼓亭二又前夾
道綵坊二右坊曰萬國咸寧自太平莊至此
夾道燈牆綵廊曲折凡三里

經萬國咸寧坊稍前有綵坊曰民和年豐進
坊爲蘇州臣民慶祝界坊左鼓亭一路右有
演劇樓臺曰雲中天樂臺脊樓結衢歌巷舞
四字又前爲
皇棚綵簾四映周欄爲黄幔三層下繞以朱欄中
設
御座座旁大理石屏二後設紅哆囉呢幔金書九
如詩棚後闢小軒五楹陳設文玩盆花左右
園林小景曲廊横亘竟左有松亭曰雲生松

棟竟右有柏亭曰翠柏長春亭外雜植桃李
掩映飛動前建大綵坊曰聖壽同天有聯曰
萬年人慶長生節三月天開四海春坊左右
爲燈廊中設慶祝表屏坊前有耆老貢獻土
物百盤坊下綵橋一左右小紅橋二過綵橋
路右大綵牆一座廣四丈綵結大壽字五左
右爲抱角燈棚又前路右有演劇樓臺曰萬
國歡心臺脊樓結民安物阜四字直臺路左
爲耆老接

駕棚前設
龍亭御仗旗繖後張百壽黄幔長三丈繡壽字百
圖中
御輦直
皇棚前羽葆翠華照曜雲日臣民皆跪衣冠萬衆
魚鱗相切彌望無際耆老執爵上
萬歲壽
天顔有喜又前過街綵坊一曰四海昇平坊右鼓
亭一自民和年豐坊至此夾道綵廊四百楹

花檻燈牆繽紛浩闊計長一里半
過四海昇平坊爲江南江常等十三府慶祝
界路右有候選候補官員建黄棚一内設
萬壽圖屛金書壽字各體者萬左右鼓亭各一又
前路左爲松江府在籍諸臣及耆民慶祝
皇棚一座左右綵廊直棚路右爲表棚又前夾路
綵坊二左曰六合同春右曰萬年一統又前
路右爲演劇綵臺又前爲小景樓亭亭前爲
花籬駭綠紛紅蔓延二十餘丈又前路左爲

十三府慶祝
皇棚中設
御座前陳古鼎蟠桃長生花萬民宴萬民衣左右
綵廊木施陛楯右平左墄高數尺棚前大綵
坊曰天子萬壽有聯曰皇極建而歲月日時
無易聖德大而祿位名壽並隆棚左右松柏
亭各一花架四外周以綵廊廊外左右鼓亭
直坊路右爲表棚棚左右燈樓各一又前路
右演劇臺一又前夾道綵坊二左曰舜日光

華右曰堯天浩蕩徑兩坊間折而東路左有
菴曰百祥自四海昇平坊至此燈廊花檻數
百楹紅橋二十一花樹數百計長一里半
百祥菴前有綵坊曰數天湛露過坊爲浙江
臣民慶祝界坊左有通州坐糧廳慶祝
龍亭設大鼎一龍燭二燭長丈又前有通漕七省
旗丁陳設慶祝
龍亭香亭又有一統萬年清亭萬年清草名高尺
餘葉菁葱可愛四時不凋一名千年運又前

有過街綵坊曰天長地久過坊路右演劇綵
臺一又前有過街綵坊曰皇州春色過坊路
右有扮演故事臺演海上羣仙又前有過街
綵坊曰萬壽同天過坊路左爲
皇棚顔曰太和元氣中設
御座旁引兩廊雜陳古玩廊外左右鼓亭前建綵
坊曰瑞現星樞直坊路右燈棚一棚左右故
事臺二左三星右五老又前有過街坊曰海
晏河清過坊路左爲浙江耆民接

駕棚又前路右故事臺一演瑶池仙樂又前有四
角擊壤亭中設玻璃屏書擊壤頌又前有過
街綵坊曰一人有慶過坊稍折而東路右有
廟曰茶棚關帝廟廟前爲江寧蘇州杭州三
織造慶祝經棚棚前有綵坊曰聖壽天齊左
右爲鼓亭直坊路右爲表棚又前路左有綵
坊曰瑞叶青陽過街綵坊曰增輝紫極過坊
路左有演劇綵臺曰萬國謳歌又前香亭一
夾道鼓亭二自百祥菴至此曲檻花廊計長

一里半
由茶棚關帝廟東行有過街綵坊曰萬福攸
同進坊爲福建山東江西河南廣東廣西六
省臣民慶祝界路左爲耆老接
駕棚路右演劇綵臺一又前路左木龍亭一亭八
角前柱金龍對蟠鱗爪騰攫飛動中設
御座左右燈廊雙引前闢捲棚五楹棚前有大綵
坊高三丈餘木幹綵章流蘇瓔珞藻繡綸連
下接於地顔曰萬壽有聯曰兩地參天日月

岡陵開壽域錫疇斂福鳳麟河嶽獻禎符區
聯皆銅質洗磨如鏡光閃爍奪目麗日燭之
不可廹視坊下綵獅二尤猙獰亭左右各闢
小園花闌周數畝園愡曲徑杳篠相通牡丹
荼蘼丁香桃李諸名花森發條豎各建小軒
珠燈密布與花柳映發爭妍出花闌由
萬壽坊前過小橋直坊路右爲表棚棚左右鼓亭
各一又前路右有重樓曰金聲玉振上懸名
燈下奏十番清樂又前松亭一亭下三面周

以花關又前路左有綵坊曰厚德無疆又前
路左八角演劇臺一有聯曰天樂動南薰彩
鳳高臨青玉案瑶池供壽酒形雲輕護紫霞
杯路右六角演劇臺一又前路左牡丹棚一
路右柏亭一又前路左有燈樓曰光被四表
過樓稍折而東地名大柳樹有古柳一株萬
絲拂空垂蔭盈畝自萬福攸同坊至此綵廊
數百楹間以荔牆繡錯綺分計長三里
過大柳樹有過街綵坊曰風動時雍進坊爲
四川陝西山西湖廣貴州雲南六省臣民慶
祝界路左五綵重臺一上以絹製羣仙下陳
設古玩過臺稍折而南有綵坊曰羲軒風景
路左有綵坊曰德洋恩溥又前路左柏亭一
路右樓亭一又前路左有燈樓曰萬物皆春
路右演劇臺一又前路左爲
皇棚棚據高地俯視平疇澶漫靡迤陛楯鬱律歷
級而上三階重軒鏤檻文榱干霄蔽日中設
御座前列秬敉如壽桃者數千棚外大綵坊曰萬

邦惟慶有聯曰天申命用休四方來賀皇建
其有極萬福攸同左右鼓亭一直坊綵橋一
橋三洞經以綵闌雁翅參差望之屹然如偃
月垂虹蜿蜒數丈觀者訝爲神速蓋木質施
以丹繪儼然石梁也棚左右龍旗二竿絶高
縹緲拂霄漢直坊路右十番綵臺一臺前表
棚一又前路左有燈樓曰光華復旦又前有
演劇綵臺曰鈞天廣樂又前夾道綵坊二左
曰三台玉燭右曰八表金甌又前有清音臺
曰萬籟和鳴又前有過街綵坊曰華渚神光
出坊有寺曰慈獻自大柳樹至此綵廊數百
楹繡栭雲楣曲折參差長三里
過慈獻寺有寺曰隆昌有長蘆衆商人於寺
前建慶祝
皇棚棚前有綵坊曰萬年景運直坊爲牓棚棚左
右鼓亭一又前路右故事臺一演木公金母
諸仙又前路左節節高歌臺一又前路右爲
小花園園中六角亭一又前夾道演劇臺二

鼓亭二過亭綵坊二左曰六龍時御右曰天
地同春又前路左有寺曰廣通有五旗
諸王建慶祝經壇於內寺前綵坊三中曰德配
乾坤左曰壽同悠久右曰福竝升恒左右折
而前過街綵坊各一右坊外路右爲
諸王接
駕處直中坊路右牓棚一旛竿五棚後迤右演劇
綵臺一又前路左有廟曰天仙過天仙廟爲
眞武廟有巡捕三營將校建慶祝經壇於內
廟前爲
龍亭亭中以童子演八仙陳蓬瀛仙樂左右綵坊
一左曰萬年玉曆右曰三祝華封直亭有綵
坊曰悠久無疆稍前有菴曰五聖菴旁牓棚
一又前路左有演劇綵臺曰萬年歡又前路
右有西直門市民建綵坊曰共樂堯天徑南
有綵坊曰天子萬福近坊折而東有綵坊曰
萬年景福有經壇在元静觀圖不及出坊過石橋有過街
大綵坊曰普天同慶過坊進西直門有過街

大綵坊曰萬國來朝則皆提督九門步軍統
領臣隆俄多所建也圖中
大駕鹵簿始於此迤邐夾道直接太平莊

萬壽盛典初集卷第四十三

總督廣東廣西等處地方軍務兼理糧餉兵部右侍郎兼都察院右副都御史臣趙弘燦
總督管理直隸巡撫事務兵部右侍郎兼都察院右副都御史世襲拜他喇布勒哈番臣趙弘燮
刑部雲南清吏司郎中臣趙之垣謹校刊

萬壽盛典初集卷第四十四

慶祝二圖記二

自西直門至
神武門臣民建棚慶祝者凡三十有一所爲記
四
進西直門過萬國來朝坊路左樺皮廠衚衕
內有廟曰西三官廟有吏户二部尚書以下
諸臣建慶祝經壇於內臨街設
龍亭一亭前有綵坊曰天成地平坊左右鼓亭循
亭折而前過街綵坊各一左曰華祝三多右
曰嵩呼萬歲路右直兩坊間綵坊一坊後燈
樓一樓下爲牓棚棚後旛竿五棚左演劇綵
臺一又前路右馬香兒衚衕內有廟曰關帝
廟有西四旗前鋒統領護軍統領以下諸臣
建慶祝經壇於內臨街結綵坊三中曰天人
胥慶左曰金闕垂光右曰瑶池獻壽坊前綵
結須彌座座上爲
萬壽景命亭亭後設金書百壽字圍屏左右堆紗

屏各一屏外爲鼓亭亭外周以綵牆廣十有
七丈循牆折而前爲過街綵坊二左曰德邁
古今右曰道參天地直中坊路右牓棚一旛
竿五棚右有五綵重臺曰祝堯歌舜臺高六
丈廣稱之下演劇上放飛鳥棚後有
皇十四子小綵坊二又前路右有寺曰崇壽有
寧壽宮太監等建慶祝經壇於內寺前
皇棚一棚外有大綵坊曰慶洽天人坊左右鼓亭
循亭折而前過街綵坊二左曰運獻長庚右
曰天開壽域路左牓棚一旛竿五又前路左
北草廠內有菴曰萬福有
寧壽宮老福金建慶祝經壇於內臨街建
皇棚棚外綵坊三中曰建中錫福左曰雨順風調
右曰日升川至左坊外鼓亭一折而前有過
街綵坊曰堯天舜日右坊外鼓亭一折而前
有過街綵坊曰景星慶雲路右牓棚一旛竿
五棚左右有綵坊左曰春臺右曰壽域出堯
天舜日坊有放生綵臺曰放鳥雀無算廠內

又有寺曰萬壽有內務府正黃旗包衣參領
以下護軍以上建慶祝經壇於內臨街建
皇棚一棚外八字綵牆中闢圜門門外綵亭一左
右鼓亭旛竿各一前結大綵坊三中曰允執
厥中左曰羣黎歡慶右曰列聖鑒臨左右折
而前過街綵坊各一左曰祥洽萬方右曰壽
同南極直兩坊間路右牓棚一旛竿七出祥
洽萬方坊演劇綵臺一又前路左有廟曰東
三官廟有大理寺太常寺卿以下諸臣建慶
祝經壇於內臨街建八角
萬壽松樓左右松棚各一棚右演劇綵臺一樓前
鼓亭二過亭綵坊三中曰萬國尊親左曰慶
集三辰右曰德周八表左右折而前過街綵
坊各一左曰七曜騰輝右曰五雲絢采直兩
坊間路右牓棚一旛竿七棚左右松棚各一
又前路左有觀曰崇元有正黃旗滿洲蒙古
漢軍都統以下建慶祝經壇於內臨街爲經
棚棚左右爲鼓亭前建綵坊三中曰聖壽無

疆左曰慶洽同文右曰光昭大象左右折而
前爲過街綵坊左曰道超九聖右曰德覆萬
方直兩坊間路右牓棚一旛竿五出道超九
聖坊過石橋路左演劇臺一臺左右綵結海
山如赤城霞起巑屼可觀又前路左有寺曰
北廣濟寺有禮部刑部國子監光祿寺鴻臚
寺尚書祭酒卿以下諸臣建經棚於內寺外
左右鼓亭一前結綵坊三中曰壽節天開左
曰咸歌舜日右曰同祝堯年左右折而前過
街綵坊二左曰百祿是荷右曰萬福來同直
兩坊間路右牓棚一旛竿五萬福來同坊外
演劇綵臺一過此爲新街口折而南矣
由新街口折而南路右有寺曰祝壽有兵工
二部尚書以下諸臣建慶祝經壇於內寺外
左右鼓亭前結綵坊三中曰文武聖神左曰
寶曆弘長右曰金甌永固左右折而前過街
綵坊二左曰皇仁廣運出坊演劇綵臺一右
曰帝德覃敷直兩坊間路左爲牓棚棚前

上諭龍亭一上諭內書棚後旛竿五又前路右有寺
曰龍泉有都察院通政司太僕寺順天府六
科及宛大二縣五城兵馬司諸臣建慶祝經
棚於內寺外左右鼓亭前結綵坊曰日麗星
輝坊前大綵坊三中曰天開壽域左曰九龍
洽聖折而前爲過街綵坊曰瑞靄千門右曰
五緯聯光折而前爲過街綵坊曰春明九陌
直兩坊間路左牓棚一旛竿五出春明九陌
坊路左演劇臺一又前路右有東四旗滿洲
蒙古漢軍都統以下建百老獻壽臺顔曰南
天門臺九級扮百老人各執金壽字層累而
上有經壇在大佛延禧法華境靈四寺圖不及又前路右帽兒衚
衕內有廟曰關帝廟有東四旗前鋒統領護
軍統領以下護軍以上建慶祝經壇於內衚
衕口有綵坊曰同登仁壽出街有綵坊曰太
平有象坊前鼓亭二右有綵坊曰金輪現采
左有綵坊曰寶曆呈祥又左有綵坊曰翠柏
長春左右過街綵坊二左曰乾坤交泰右曰

大綵坊曰普天同慶過坊進西直門有過街
天舜日坊有放生綵臺日放鳥雀無算厰內
長春左右過街綵坊二左曰乾坤交泰右曰

宇宙同春旛竿各二直兩坊間路右牓棚十
六楹棚前綵亭二棚後旛竿十四出乾坤交
泰坊路右演劇臺一路左綵坊三中曰集聖
大成左曰大地山呼右曰鈞天雅奏又左有
過街綵坊曰日麗天衢又前路右有寺曰寶
禪有九門步軍統領以下將校建慶祝經壇
於內寺前綵坊一曰卿雲五色稍折而左有
綵坊曰寶曆萬年出街大綵坊一曰九州向
化坊前鼓亭二左右過街綵坊各一左曰瑞
輯共球右曰祥開景慶直兩坊間路左牓棚
一旛竿五瑞輯共球坊外路右演劇綵臺一
出祥開景慶坊又前路右有寺曰普慶有內
閣翰林院詹事府中書科諸臣建慶祝經壇
於內有綵坊曰聖人首出寺外爲經棚左右
鼓亭棚前綵坊三中曰化日舒長左曰德輝
三五右曰道煥古今過街綵坊二左曰就日
瞻雲右曰參天贊地直兩坊間路左牓棚一
旛竿五出參天贊地坊外演劇綵臺一又前

路右石碑衚衕內有寺曰西方有鑲紅旗滿
洲蒙古漢軍都統以下建慶祝經壇於內寺
前有綵坊曰萬年鴻祚稍前有綵坊曰南極
呈祥出衚衕左右鼓亭前結綵坊三中曰與
天齊壽過街綵坊二左曰九天花雨右曰萬
國衣冠直兩坊間路左牓棚一旛竿五出萬
國衣冠坊外路左演劇臺一又前路右有菴
曰般若有鑲藍旗滿洲蒙古漢軍都統以下
建慶祝經壇於內菴前綵坊一左右鼓亭前
結綵坊三中曰乘乾景運左曰玉曆凝休右
曰皇圖永固左右折而前過街綵坊二左曰
聖德光華右曰皇仁浩蕩路左兩坊間爲牓
棚棚內
萬壽詩屏二棚後旛竿五出皇仁浩蕩坊路右演
劇綵臺一又前爲毛家灣路左有副都統賴
都母吳蘇氏接
駕龍亭一又前爲街心觀音菴有大市街北小民
建慶祝經壇於內菴外經棚一旛竿二又前

路右有廟曰眞武有正紅旗滿洲蒙古漢軍
都統以下建慶祝經壇於內廟前綵坊三中
曰壽嶽巍峩左曰萬年永命右曰九德當陽
坊前綵門一左右爲綵牆牆左右爲鼓亭循
鼓亭折而前過街坊二左曰四海騰歡右曰
六符御極直兩坊間路左爲牓棚棚後旛竿
五出六符御極坊路左面北演劇臺一臺以
五色繒帛結爲流蘇網户當目輒嵌小鏡燦
若千星亦奇觀也又前路右有廟曰雙關帝
廟有直省督撫提鎮率所屬來京諸臣建慶
祝經壇於內廟前綵坊曰萬方仁壽坊前鼓
亭旛竿各一左右爲綵牆近牆綵坊一綵亭
二左右過街綵坊二左曰河山永固右曰雲
日增輝直兩坊間路左爲牓棚棚後旛竿五
出雲日增輝坊路右演劇綵臺一又前路左
有寺曰栴檀有
莊親王建慶祝經壇於內臨街爲
皇棚棚外綵坊三中曰雲開兜率左曰花連上苑

右曰樂應中和坊左右鼓亭折而前過街綵
坊二左曰天衢耀彩右曰輦路嵩呼直兩坊
間路左爲牓棚棚後旛竿五左右綵坊二左
曰盛德凝圖右曰鴻庥協極出天衢耀彩坊
路左演劇綵臺一又前爲四牌樓圖中旗手
衛樂器自此陳設直至西安門
四牌樓徑南市民夾道爲燈廊百餘楹有過
街綵坊曰慶洽無疆竟南頭有坊曰恩光普
被（出恩光普被坊路左有寺曰普恩有宗室阿哥建慶祝經壇圖不及）近坊折
而東有過街綵坊曰如日之升圖中陳設鹵
簿始此巨象神駒與
御輦間列望之如山嶽如雲霞然又前過街綵坊
曰物被仁風過坊路左有廟曰關帝廟有西
安門外小民建慶祝經壇於內廟前有綵坊
曰九州同慶直坊路右有綵坊曰萬靈効順
又前爲
皇城西安門
進西安門路左西十庫口內有上三旗三十

家包衣人因天王殿舊址建寺諷經慶祝
萬壽奉
勅賜名慈雲寺前夾道新植松柏百餘株臨街爲
綵坊曰福祿來同坊左右鼓亭亭外濟貧錢
棚循棚折而前過街綵坊二左曰八方壽域
右曰一氣鴻鈞直兩坊間路右爲演劇綵臺
臺左爲濟貧餅棚右爲牓棚棚後旛竿六出
一氣鴻鈞坊路左有包衣婦女千百人於此
接
駕又前路左有包衣三旗廣儲司人員慶祝綵坊
曰卜年兆億左右鼓亭一循鼓亭折而前過
街綵坊二左曰乘六御乾右曰兼三出震右
綵坊內路左演劇綵臺一（有經壇在三佛寺圖不及）出左
坊稍前路左有內務府官學教習及官學生
慶祝綵坊曰五福陳疇左右鼓亭循亭折而
前爲過街綵坊左曰大德曰生右曰至誠無
息直兩坊間路右爲牓棚棚後旛竿三（有經壇在
清涼菴圖不及）出大德曰生坊稍前路左有古北口

大糧庄頭等建演劇綵臺一左右爲過街綵
坊左曰人壽年豐右曰時和世泰（有慶祝經壇在靜默
寺圖不及）出人壽年豐坊稍前路左有二月分新
選諸臣建慶祝
皇棚棚爲六角飾以五彩左右六角鼓亭前結大
綵坊曰太平景象過街綵坊二左曰億萬斯
年右曰受天之祜直兩坊間路右牓棚一旛
竿五（有經壇在興隆寺後殿圖不及）出億萬斯年坊又前爲
金鼇玉蝀橋過橋由團殿後折而北登堆雲
積翠橋望隔河西北有寺曰栴檀有上三旗
內大臣延喇嘛千衆建慶祝經壇於內梵聲
殷地旛影拂空縹緲隱現間過橋有寺曰白
塔有上三旗包衣佐領等建慶祝經壇於內
壇前大綵坊曰健配天行坊外左右鼓亭由
堆雲坊北折而東路左爲經棚棚左右爲燈
棚折而前過街綵坊二左曰瑞叶斗樞右曰
光流華渚直兩坊間路右爲演劇綵臺出瑞
叶斗樞坊稍折而北路右有

御前太監等設接
駕龍牌儀仗又前有過街綵坊曰菁葱佳氣過坊
路右有演劇綵臺遥望西岸團殿東有鑲黃
正白二旗包衣護軍叅領以下將校演劇綵
臺若相應和焉（二旗有慶祝經壇在興隆寺前殿圖不及）又前過
石橋進雪池紅門夾道燈廊數百楹半道左
右鼓亭各一又前有過街綵坊曰誕膺多福
過坊夾道綵坊二左曰翠籙凝庥右曰紫苞
輦泰又前僧道經棚各一夾道綵牆直接景
山南瞻
禁城雙闕聳出霄漢北顧五龍亭波光森動周
遭繡幕相連笙歌互起金石千聲雲霞萬色
蓋莫能殫述焉
是時京城內外金碧相輝錦綺相錯華燈寶
炬霏霧氤氲彌漫周匝其
輦路所經既已繪圖系之以記至於
翠華未歷之境慶祝同心幾無隙地若海淀則
有上清正一嗣教眞人張繼宗建金籙醮壇

於永寧觀翰林院編脩高輿率領浙江耆老
三百餘人建千佛道場於
萬壽寺地安門外則有
養心殿武英殿
御書處景山玻璃廠各監造諸臣建經壇於藥王
廟正陽門內則有太醫院諸臣建經壇於衙
門內外城則有提督四譯館太常寺少卿以
下諸臣行人司司正以下諸臣各建經壇於
衙門內候補候選諸臣三百九十二員建經
壇於仁威長壽觀正陽門外士民商賈萬餘
人建經棚於珠市口郊畿則有兩淮商人集
黃山僧衆建經壇於西頂廣仁宮莫不樹坊
立木張樂然燈寶榭層樓成於俄頃宮牆綺
陌忽改常觀至於溢巷闐街肩摩轂擊琳宮
梵宇繙瓊籤貝葉之篇火樹銀花放鐵鎖星
橋之禁周遭百里延歷數旬萬户千門繁絲
脆竹深坊小巷繡額珠簾雖游騎輕車莫能
窮際誠非丹青所及詳毫翰所勝載矣

先是三月初二日
上自霸州回鑾有
旨云朕昨進宮見臣民慶賀爲朕祈福者不計其
數朕若先知必令止之今已成矣難毀衆志其
即傳之各處必祈雨暘時若萬國咸寧爲先大
哉
王言眞天地父母之心也臣等伏惟自古聖人繼
天立極將建非常之功必有非常之壽是以
三皇踰萬五帝盈百孔子曰大德者必得其
壽理固然也稽古華封祝堯首曰聖人多壽
書言欲至萬年詩稱萬壽無疆蓋上之深仁
厚澤所以壽身壽世者既久且長而臣民忠
愛其君之甚無可以報稱者亦惟有祝君壽
考而已若夫緣情之禮因時而作竭臣子之
情顯邦家之慶紀乃誕日崇以美名聖節所
由昉也有唐開元十七年降誕節宴百僚於
花蕚樓丞相源乾曜張說率百官上表請以
八月五日爲千秋節著之令甲布於天下咸

令宴樂休假三日羣臣是日獻甘露醇酎上
萬歲壽酒王公戚里進金鏡綬帶士庶以絲
結承露囊更相遺問村社將壽酒宴樂唐開
元之治號稱絶盛然典禮不過如此降至有
宋壽寧天申瑞慶諸節歲脩故事盛典無聞
未有合千八百國之歡心聚四海九州之方
物稱觥獻斚隨
輦路而樂太平飛閣雕甍徧康衢而邀
聖豫

王言雖曰勿亟民心自切子來如
今日之盛者也蓋我
皇上道集大成化超隆古四海臣民登仁壽者五
十餘年於茲矣平時天施地生所以益民者
旣已無方乃恭逢
大慶愈沛鴻施典禮方行軫念雨暘不忘萬國益
動而巽日進無疆固宜普天率土莫不尊親
航海梯山極於無外而衢歌巷祝直接陶唐
氏之風也然則是圖也即豳風繪屏猶不足
以擬其美盛又豈王會職貢所能仰希萬一
也哉其
慶祝表文經壇詞疏附著於篇用紀頌禱之實
焉

萬壽圖畫紀

臣聞梁有職貢之圖唐有王會之圖圖者所
以比物象形寫茲盛美以昭示來世者也然
或失則侈或失則誣僅爲鋪張揚厲以藻繢
太平之象而無當於勤民愛物之心是以雖

盛而弗傳也惟昔帝堯氏之有天下也地平
天成六府三事允治其時之民則有含哺鼓
腹者矣有巷舞衢歌者矣有請祝聖人者矣
而後之人或有繪爲擊壤圖以傳其熙熙皞
皞之風者至今覽之猶有餘慕焉我
皇上至仁覆育大化翔洽五十二年以來德洋恩
溥物靡不得其所當茲三月十八日喜
天甲之初周慶
皇恩之大沛先一日
駕由
暢春園還
宮千官雲擁萬國山呼祝嘏之盛曠古未聞惟
我
皇上之心即帝堯之心故民氣雍和風俗淳美熙
熙皞皞而祝聖人之多壽者亦即與帝堯時
先後同符也
皇上與民同樂
特允臣民之請繪爲長圖傳之萬世以垂永久兵

部右侍郎臣宋駿業經始其事分爲五十餘
處而臣原祁復受
命續成勾摹數月進
呈初本幸蒙
嘉賞抃舞莫勝臣又惟自古有圖則必有史是以
恭請
恩綸纂修盛典凡
宸章之璀璨
聖德之高深與夫恩賚之廣大典禮之詳明歌頌
之洋溢無不備載罔有鈌遺矣而於臣民慶
祝之處旣案其里地悉其規模一一詳列於
書而猶恐未足以盡其曲折也特就長圖裁
爲短幅次第臚列共計百有四十餘頁定爲
上下二卷亦欲使後之披圖者如登春臺如
遊樂國旣幸生
聖人之世爲
聖人之民得親見
聖朝之鉅典鴻規與

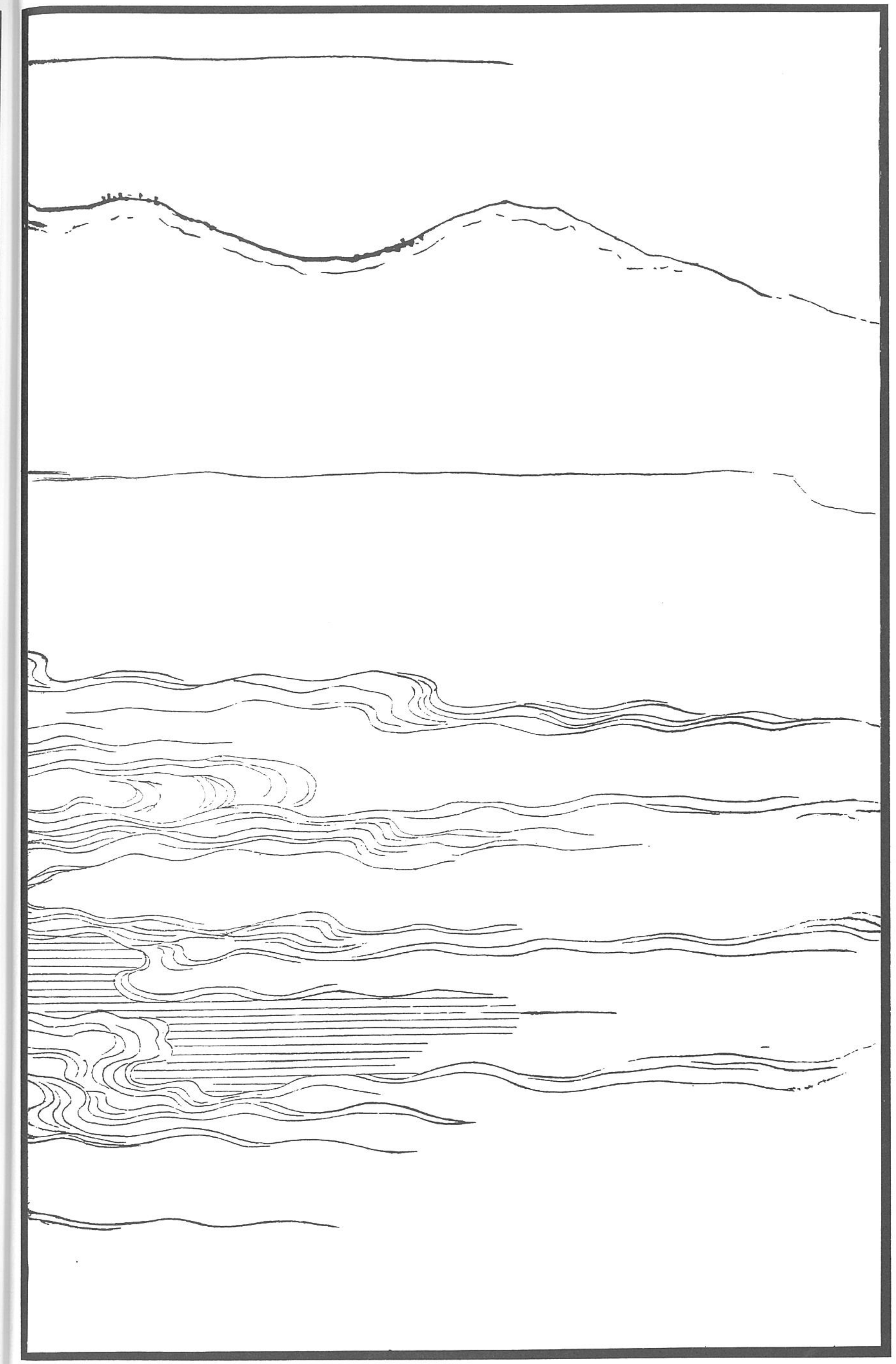
聖世之時和年豐嘉祥協應如此其章章可攷歷
歷可指也而我
皇上勤民愛物之心亦庶幾藉是以少傳其萬一
此亦擊壤圖之遺意云爾
經筵講官户部左侍郎加一級臣王原祁恭紀

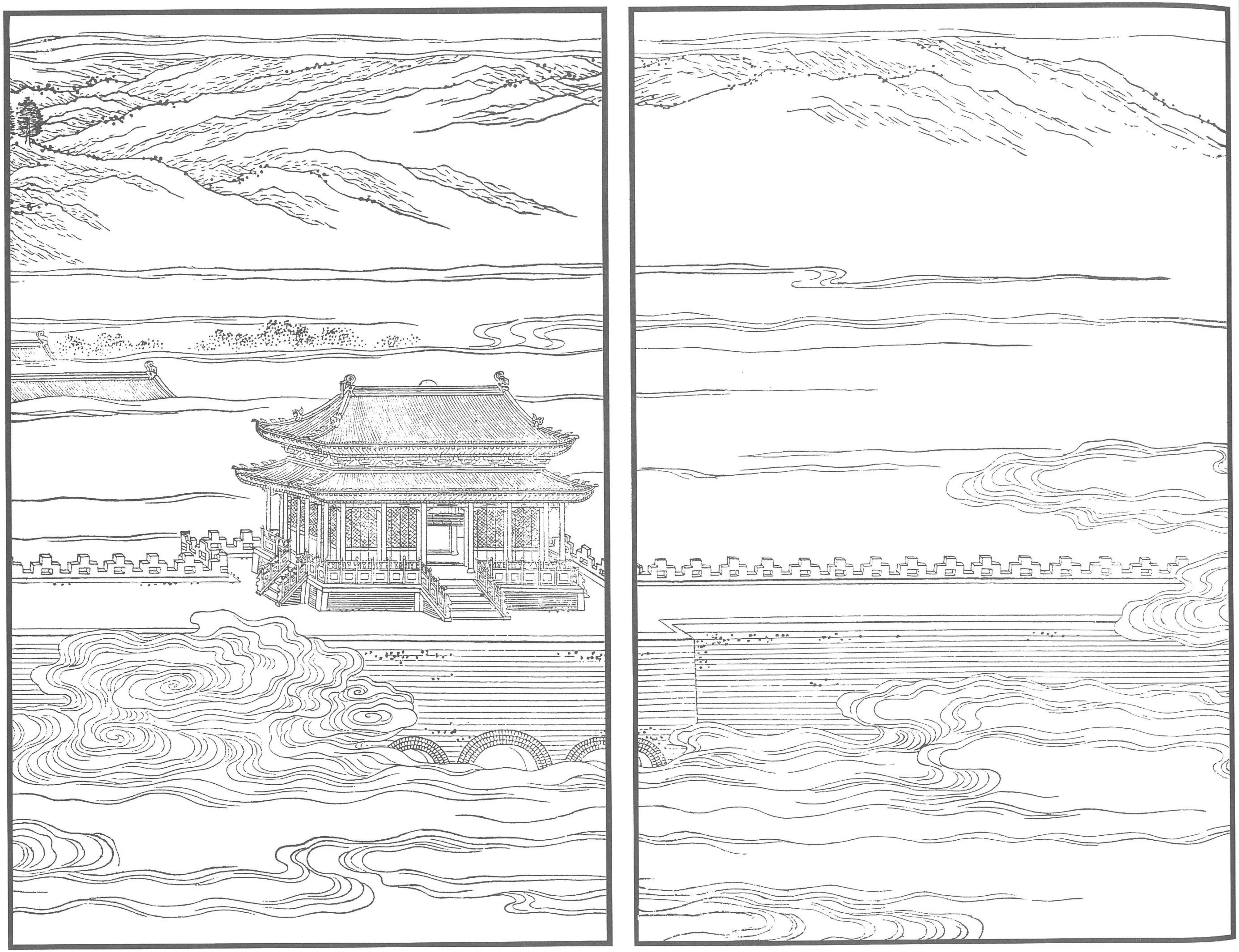
萬壽盛典初集卷第四十四

總督廣東廣西等處地方軍務兼理糧餉兵部右侍郎兼都察院右副都御史臣趙弘燦
總督管理直隸巡撫事務兵部右侍郎兼都察院右副都御史世襲一等精奇尼哈番臣趙弘燮
刑部雲南清吏司郎中臣趙之垣謹校刊

康熙六旬萬寿盛典図

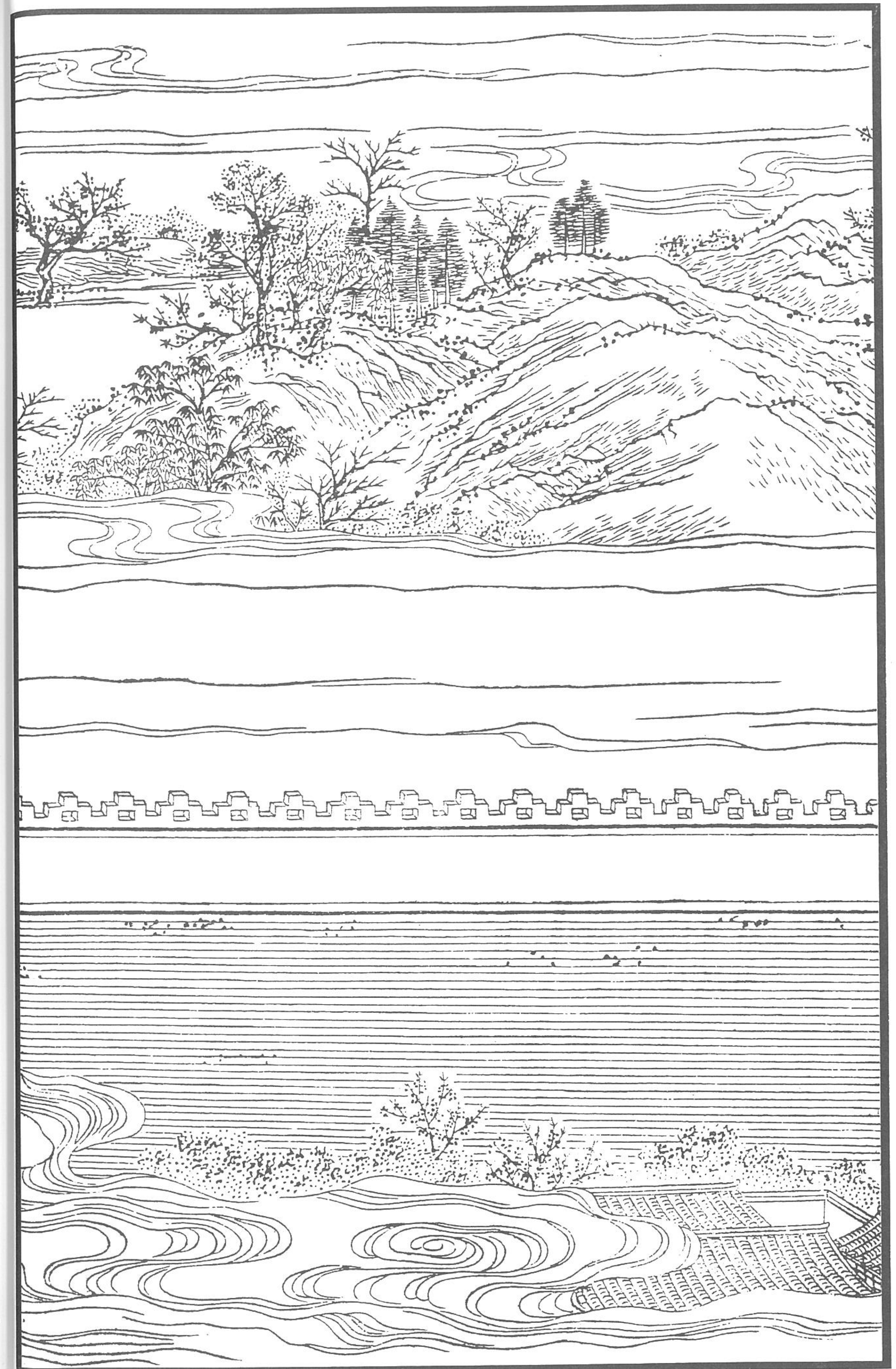
（一七一六年刊・完全復刻）

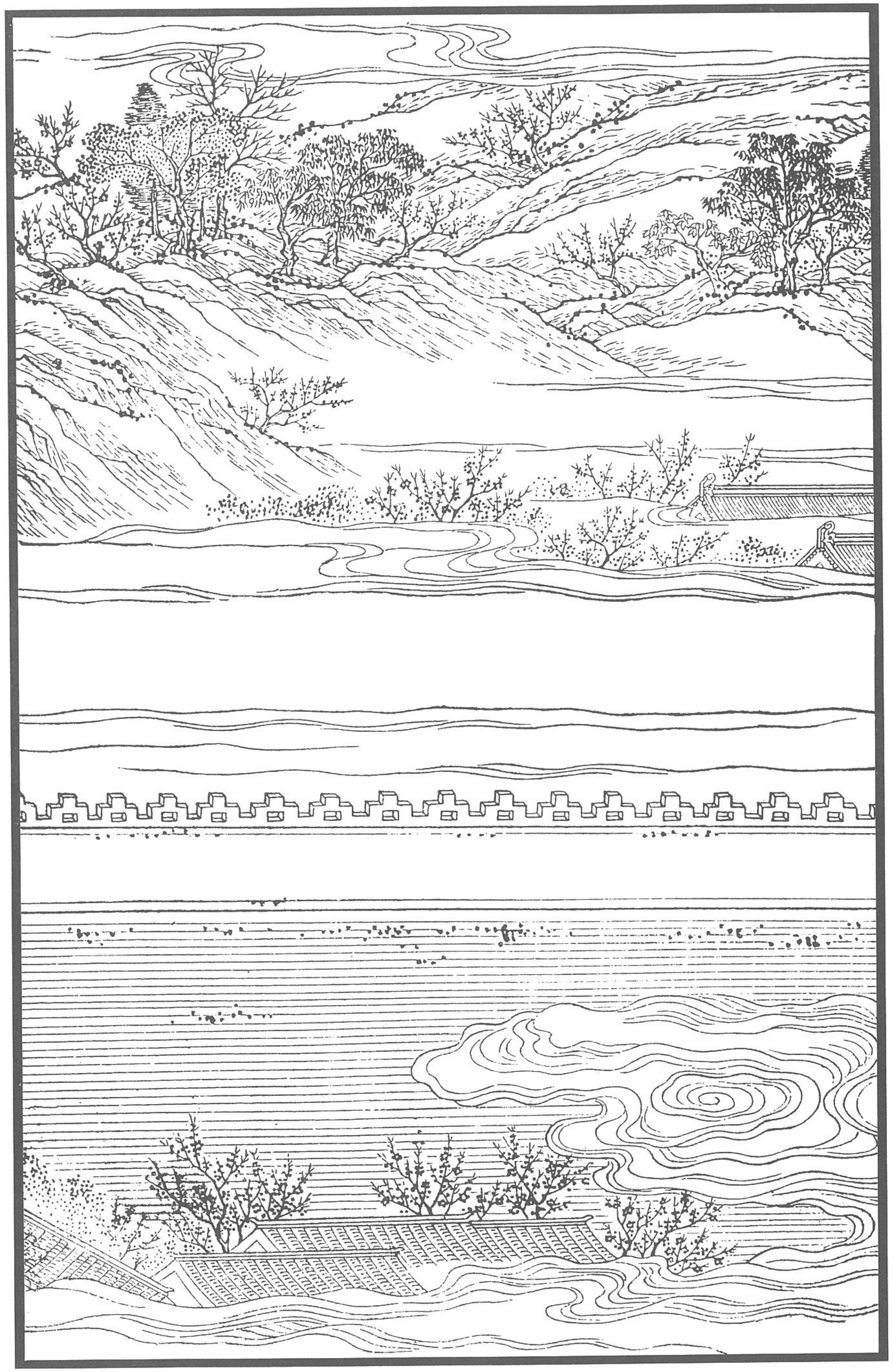


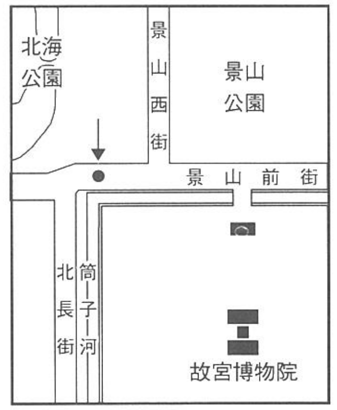


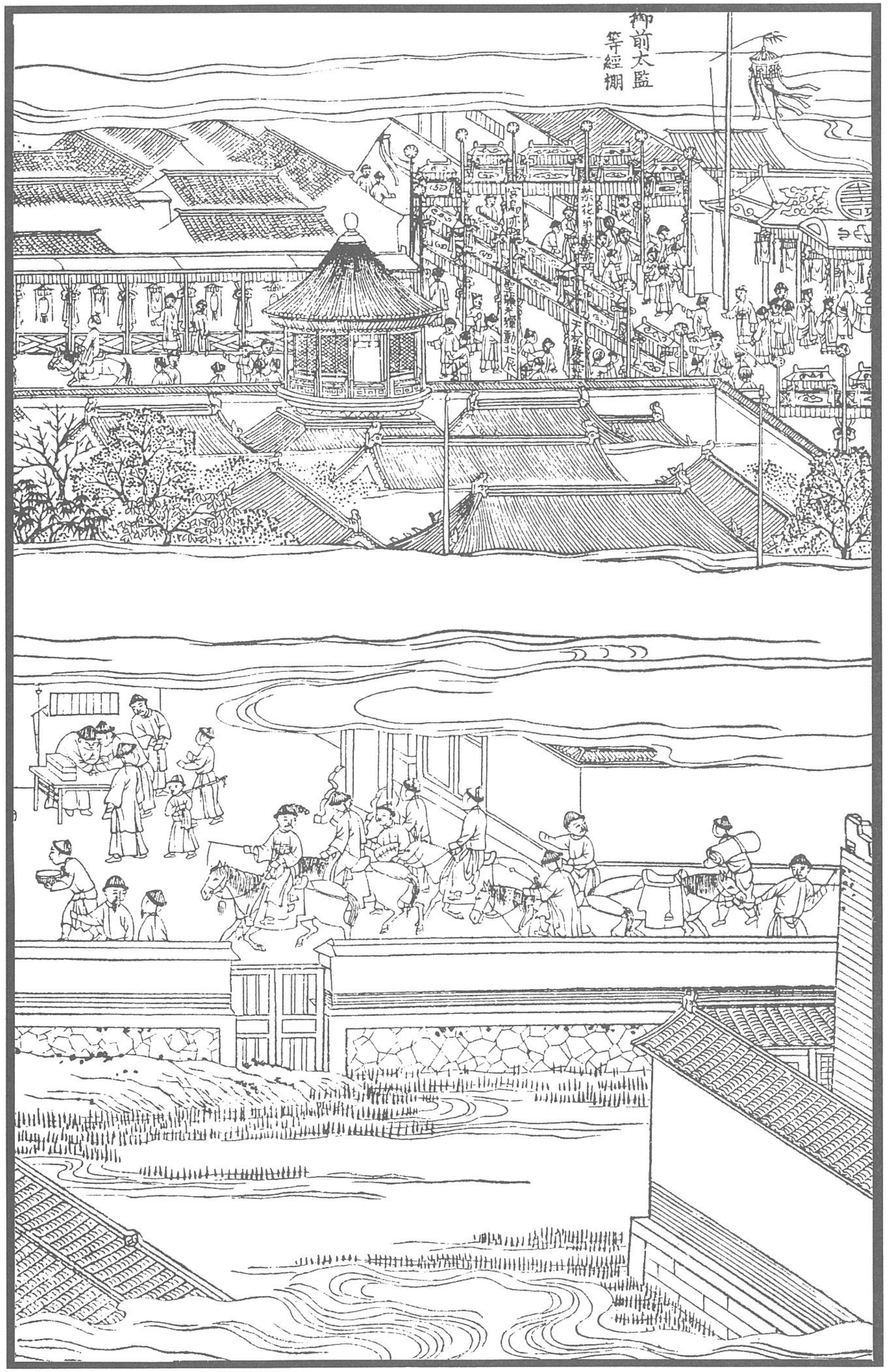
風景は霞の中から姿をあらわす小山によって始まる。これは、故宮の裏門である神武門に向き合った位置にある景山で、またの名を萬歳山という。

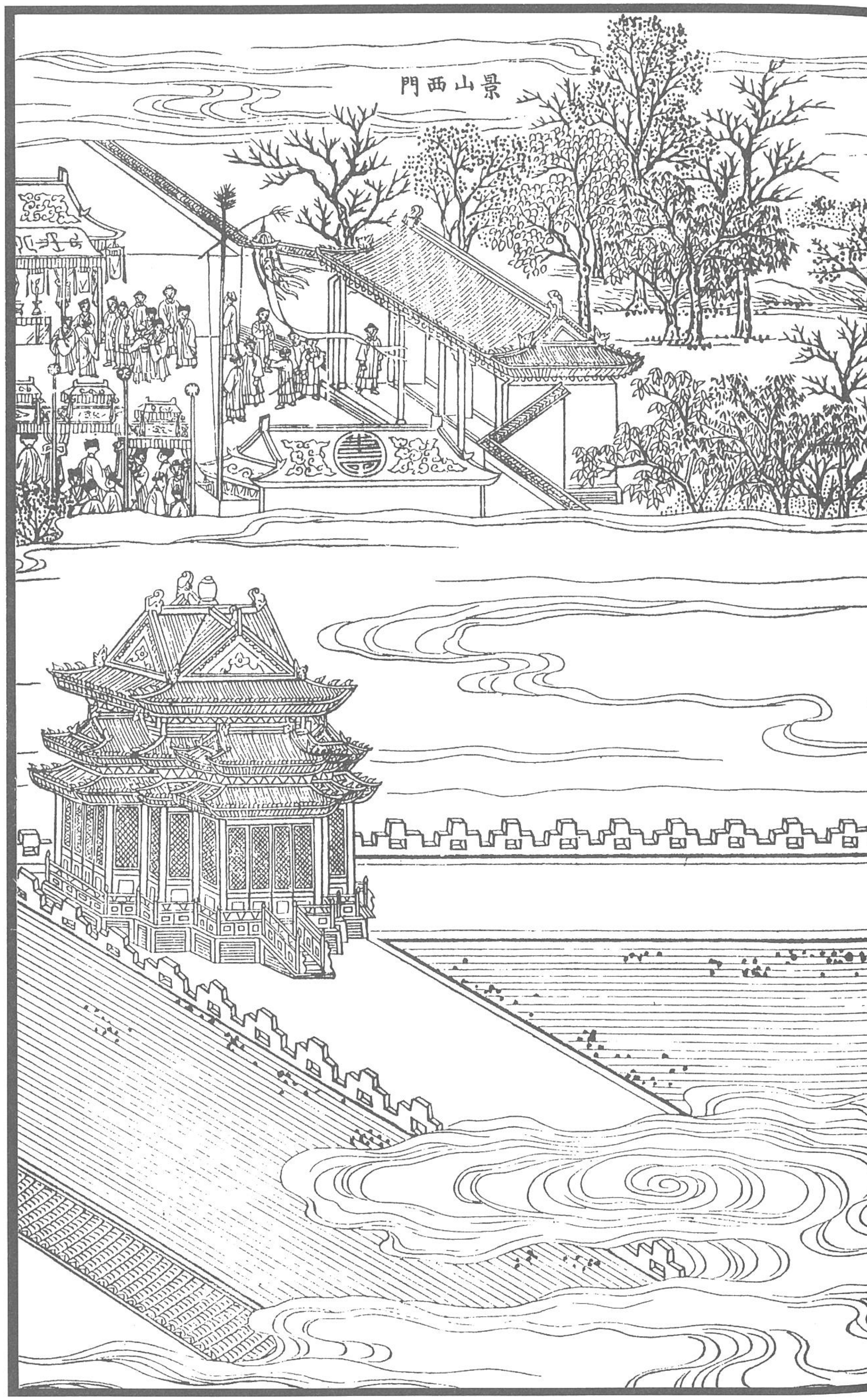
ここを俗称では煤山、鎮山とも呼んだ。山の周囲は一キロメートル程度、周囲には柏樹が林立していた。東麓に古い槐があり、ここで崇禎四十四年(一六一六)、明の最後の皇帝である崇禎帝が縊死したと言い伝えている。清に入って、順治十二年(一六五五)に萬歳山を景山と改称している。



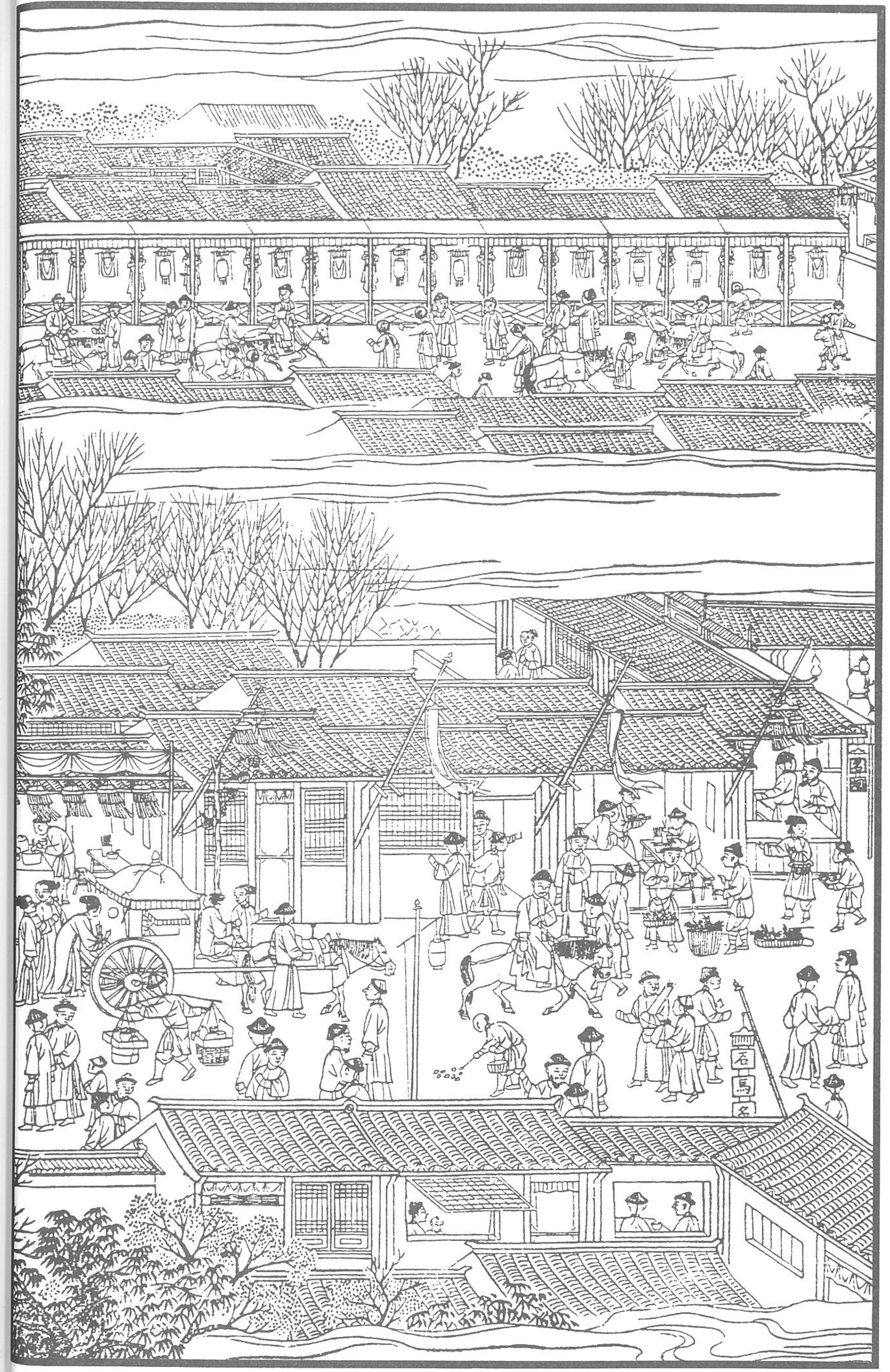


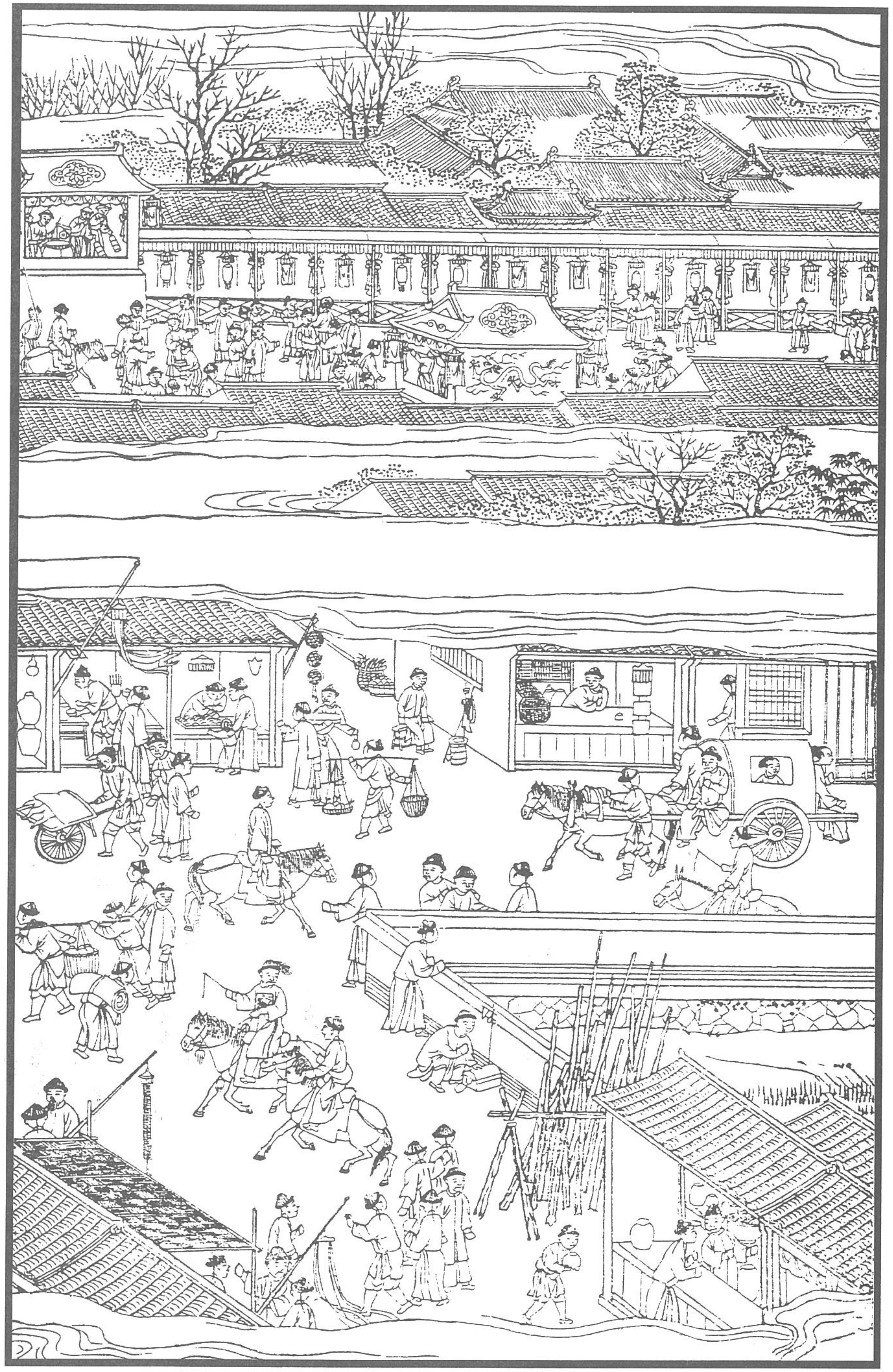

北海
公園
景山西街
景山
公園
景山前街
北長街
筒子河
故宮博物院

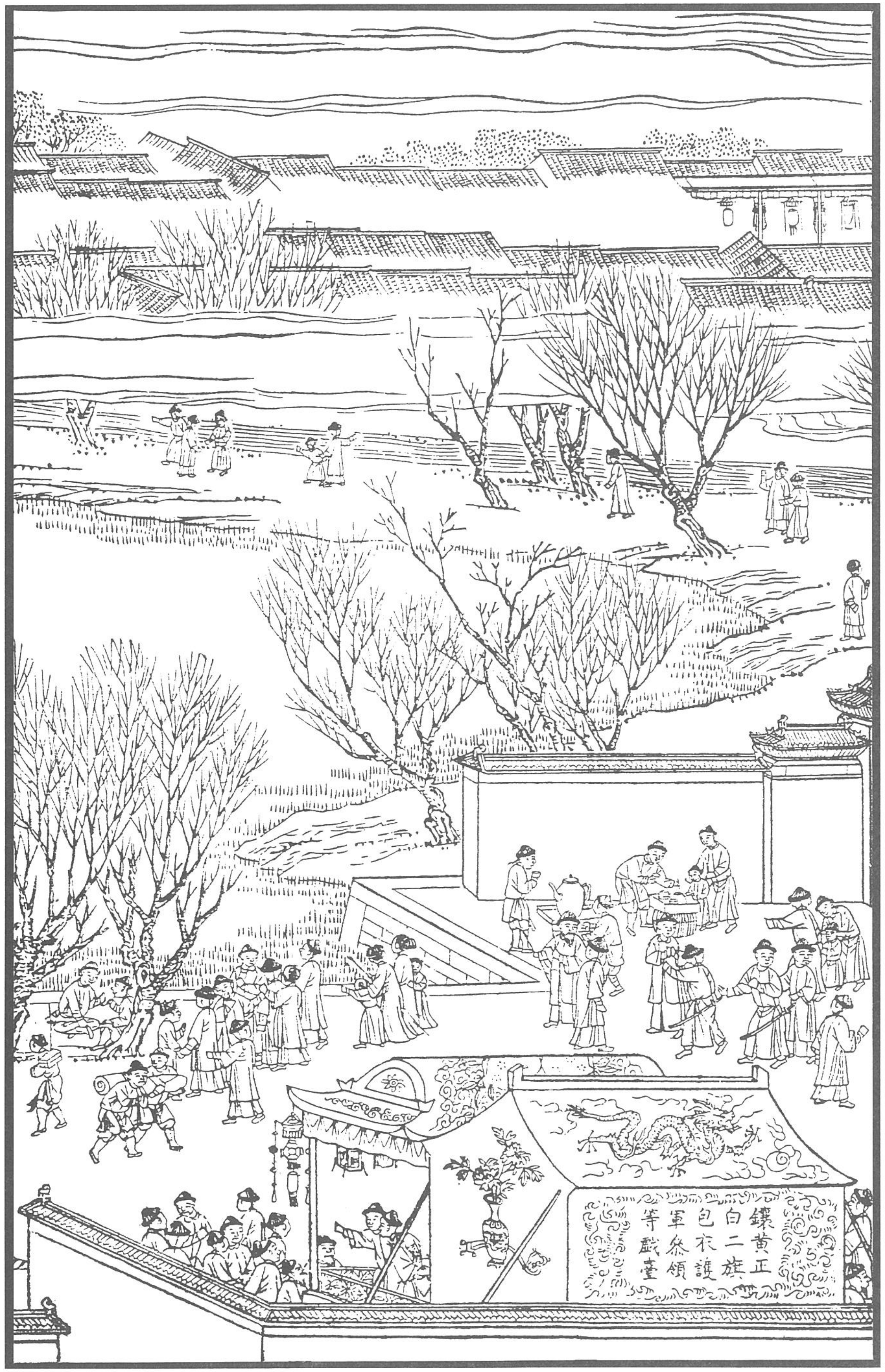


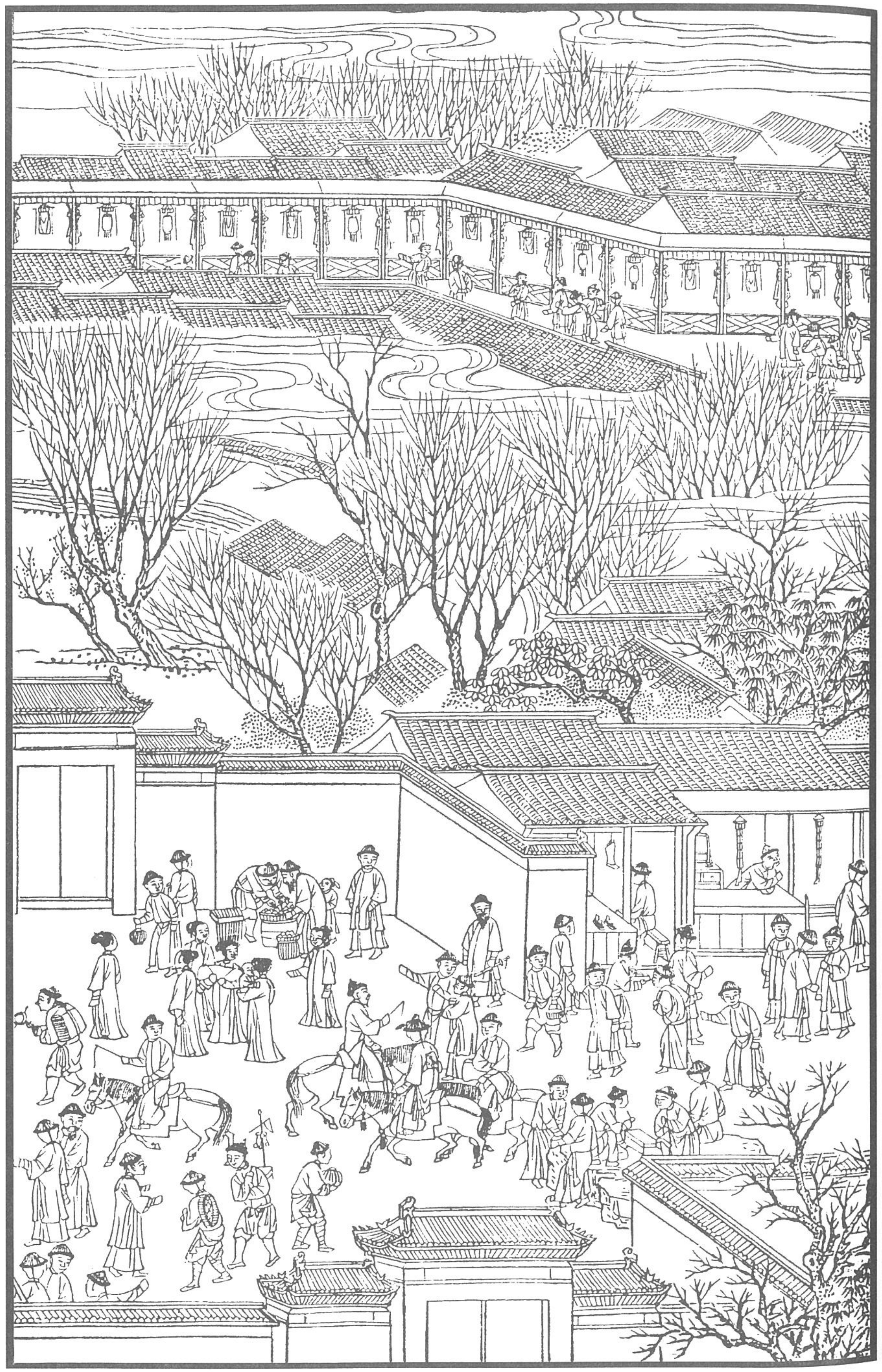


故宮の外壁の角に建つひときわ目立つ建築物は、現在も四方の角に見られる「角楼」である。故宮の外壁の周囲を流れる外堀の川は、「筒子河」である。

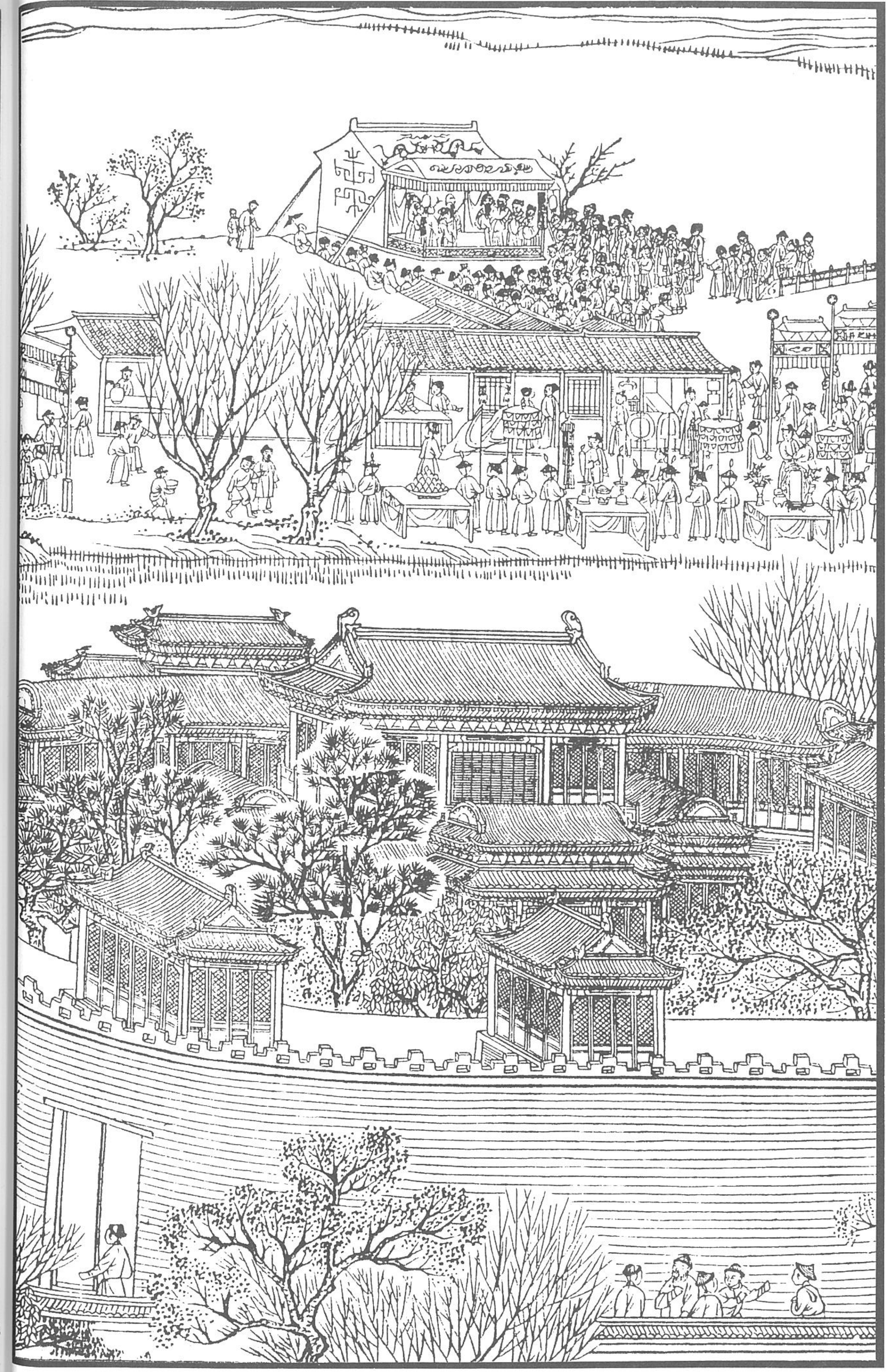


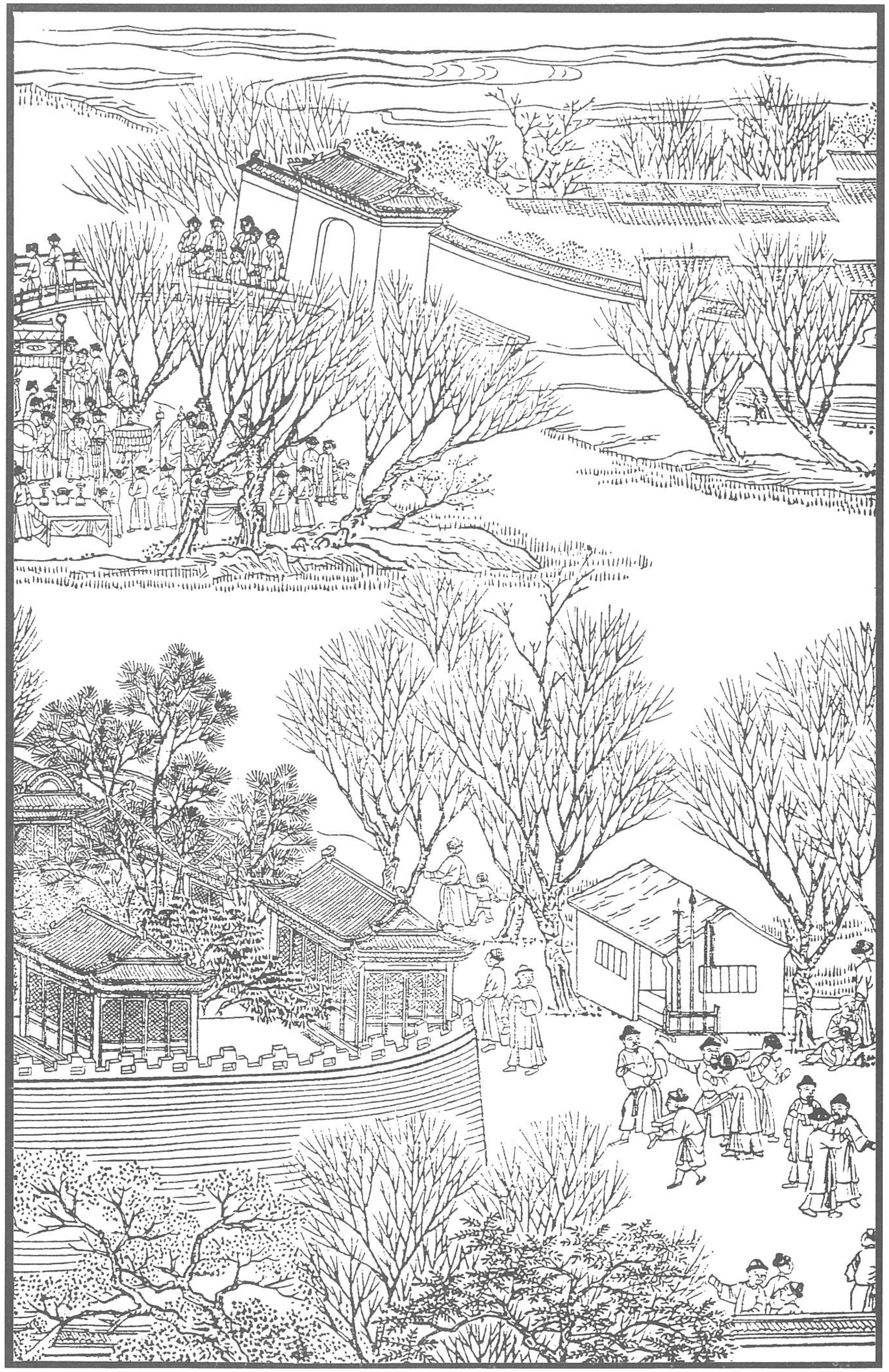






手前には人々が行き交う通りがあり、向うには鹵簿を迎えるために灯篭を吊って飾り付けをしている道の準備風景が眺められる。同じ時間に、すでに暢春園を出発した行列は、西直門にかかろうとしている。



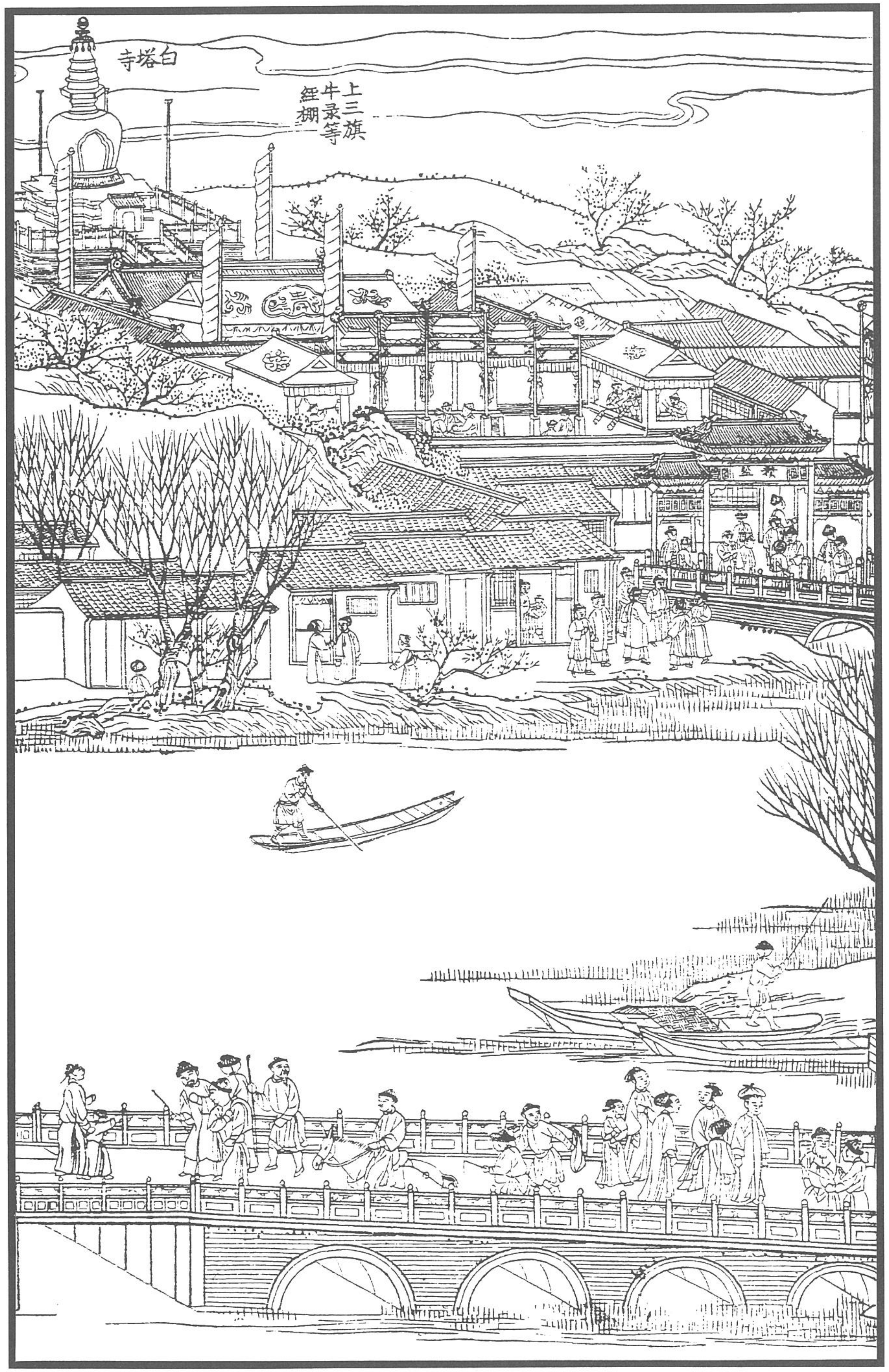


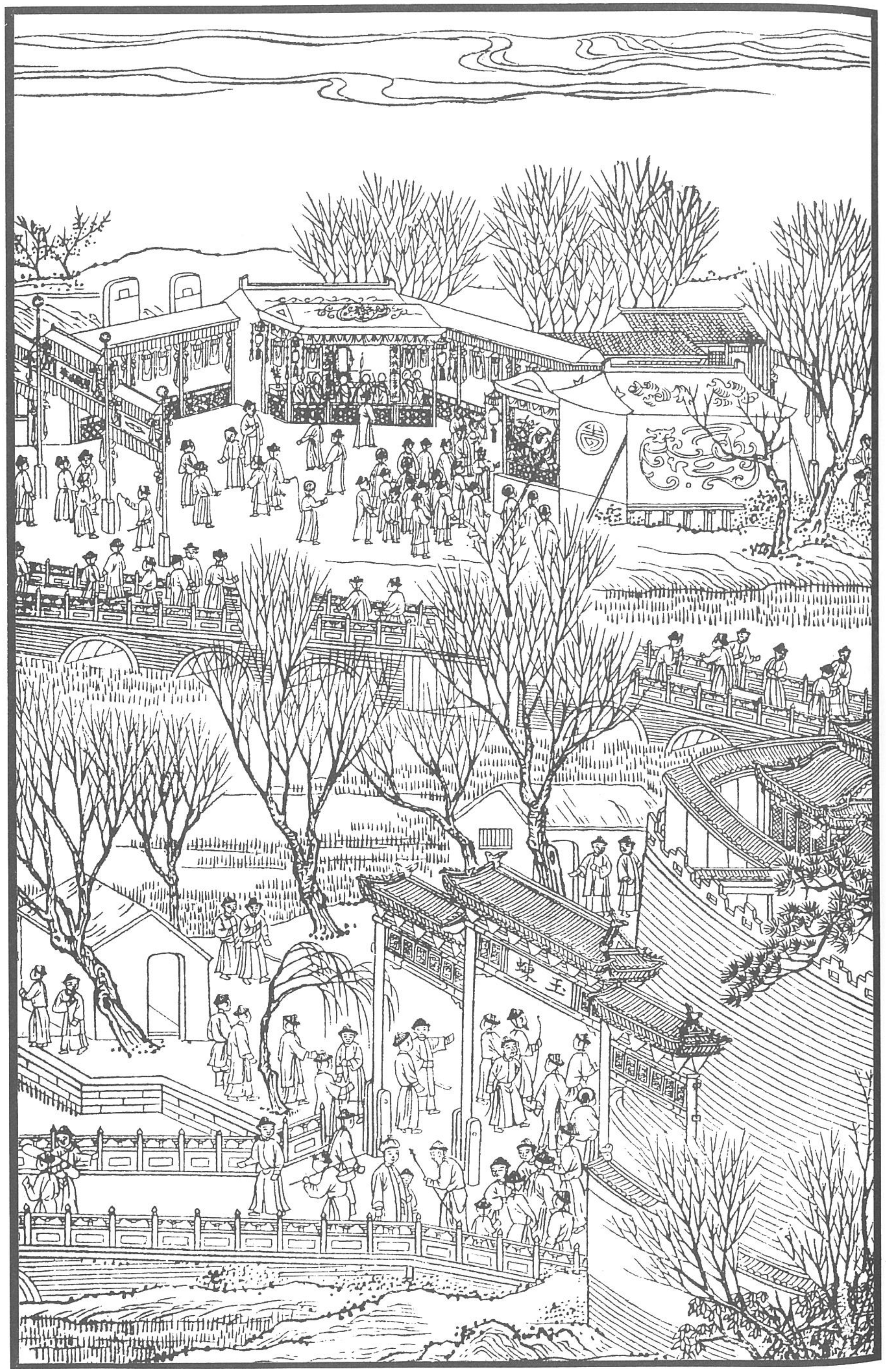
手前の建物は団城の中央にある「承光殿」である。団城はもと太液池のなかの小島であったが、金の時代に離宮の一部となった。承光殿は元代に起源があり、明に重修され、康熙時代にこの名前に改称した。殿内部には白玉の仏像一座を置き、これには一九〇〇年義和団事件の際に八か国連合軍が略奪したときにつけた刀傷があるという。

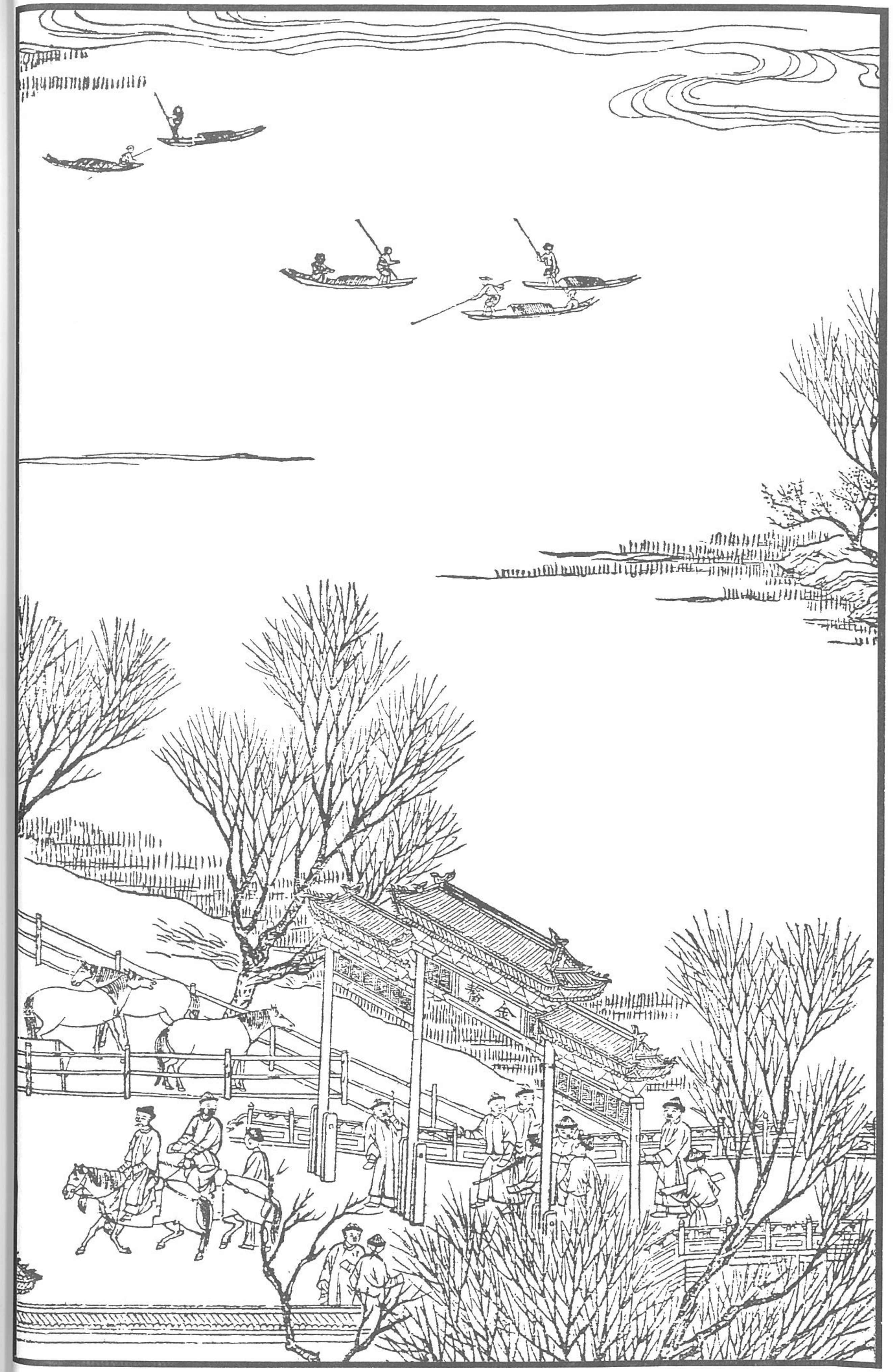
東西に広がる池、北海は皇城の太液池の一部であって、王室の庭園としては最も古い。その始まりは、遼・金の時代に溯るとされ、明清に現在の形に近づいた。

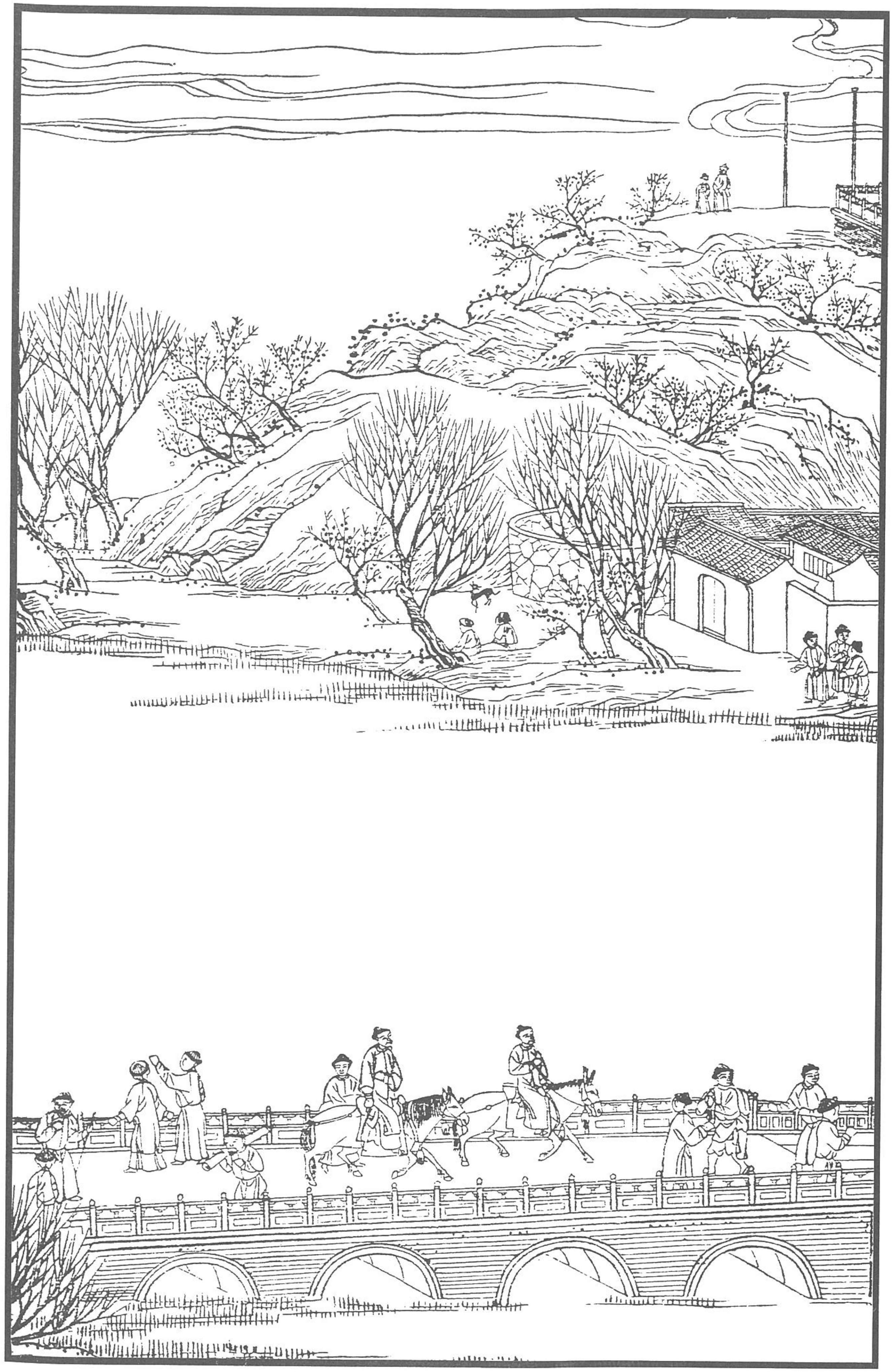
左側に瓊華島があり、その中央に現在も白塔がそびえている。

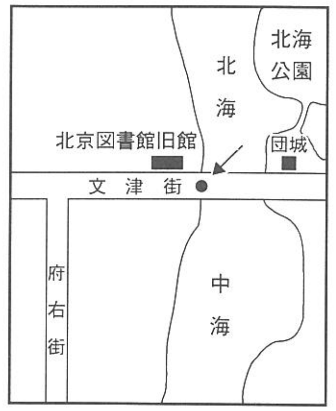
緩やかなスロープで横に北海を横断している橋は「金鼇玉蝀橋」と呼ばれ、大理石である。瓊華島には春を告げる桃の花がここそと咲き誇っている。

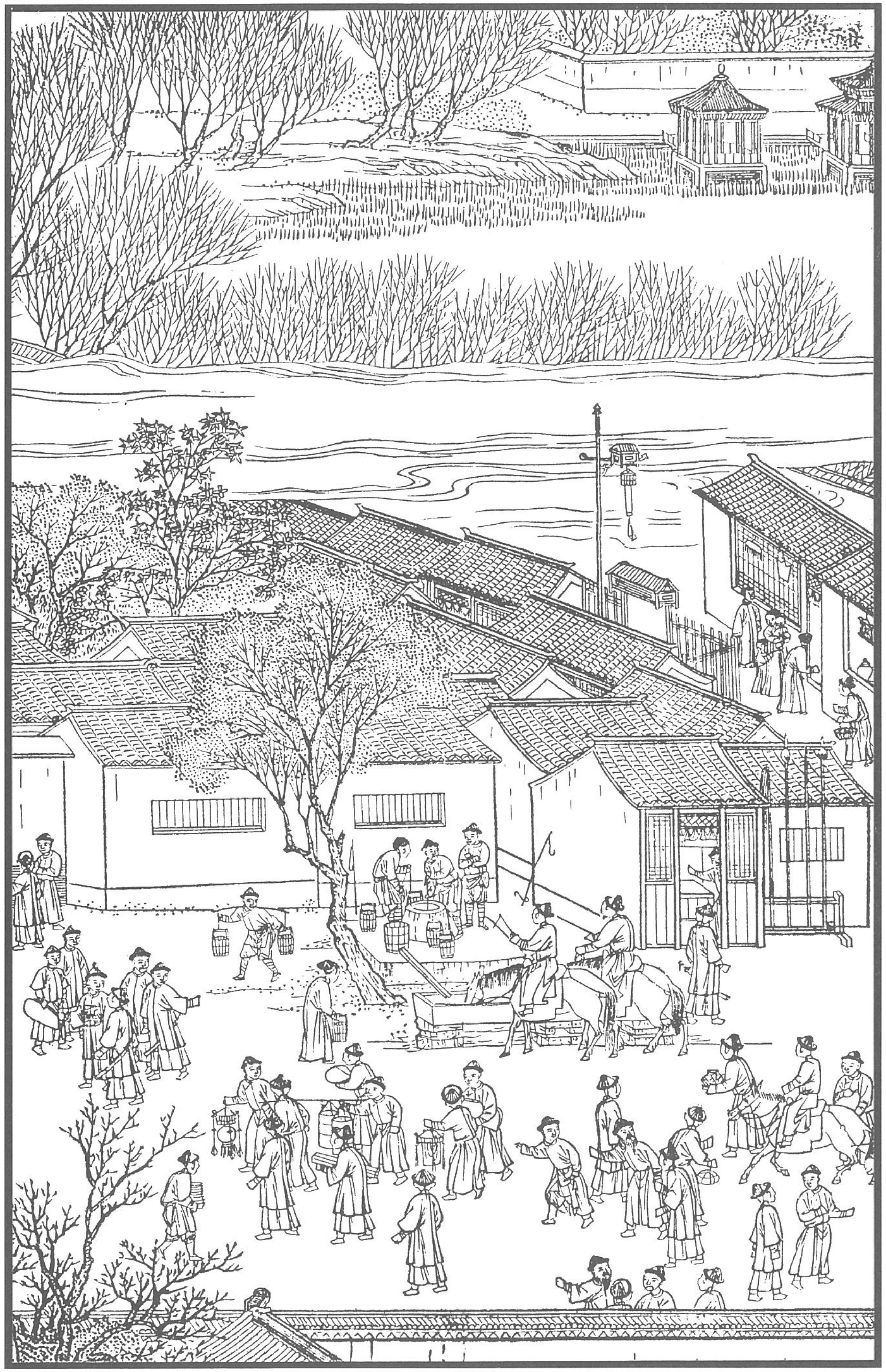


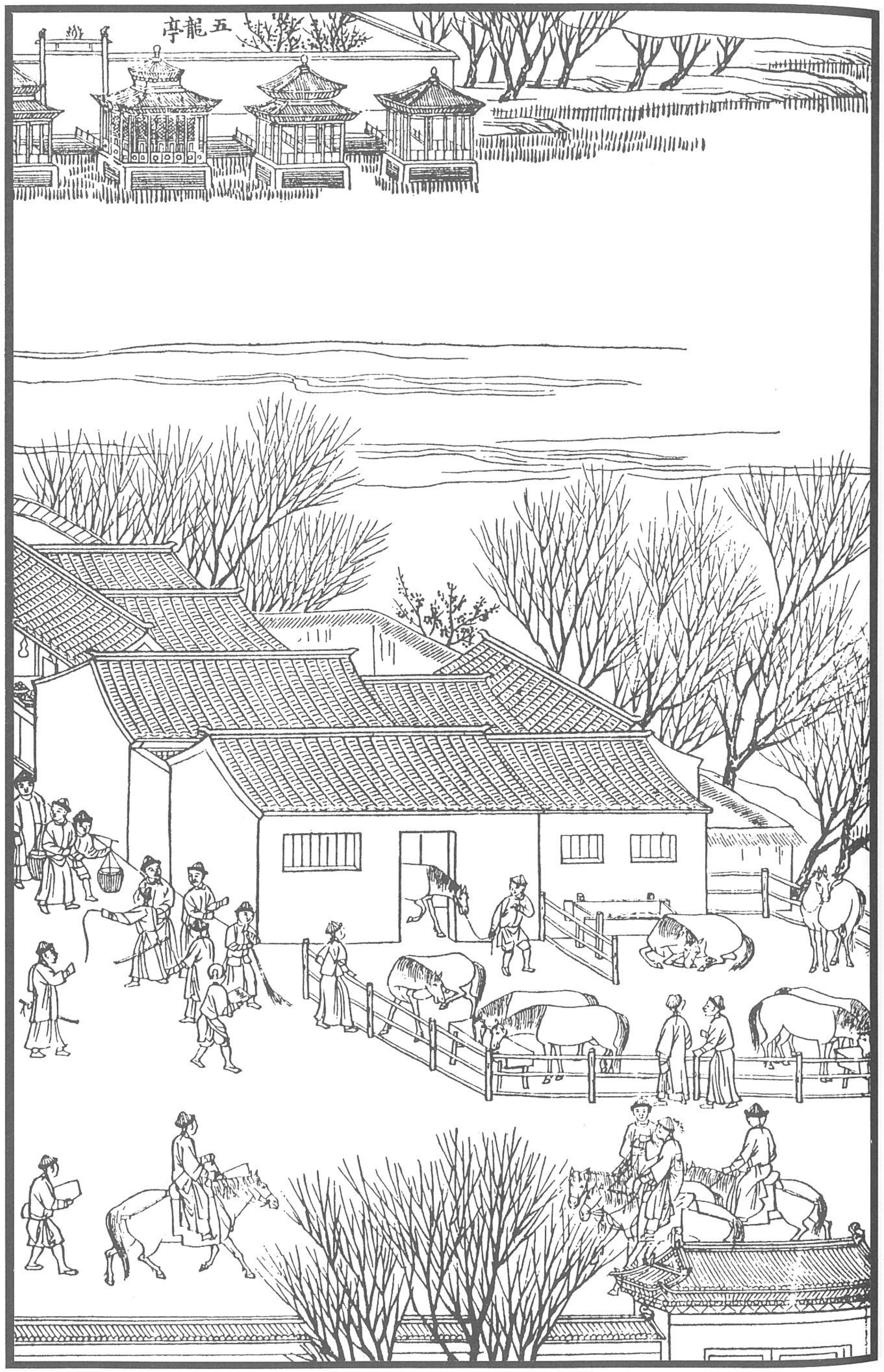




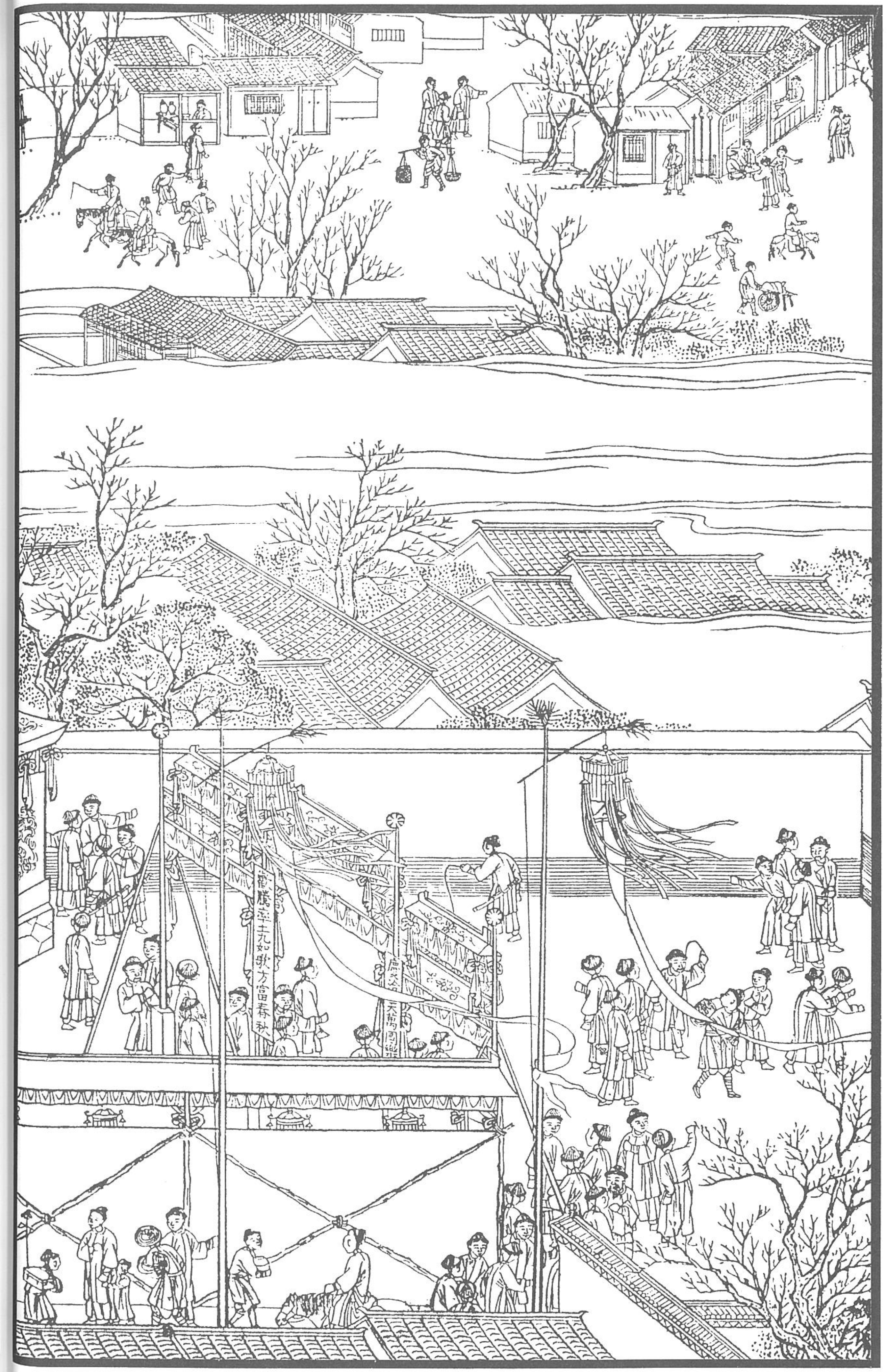


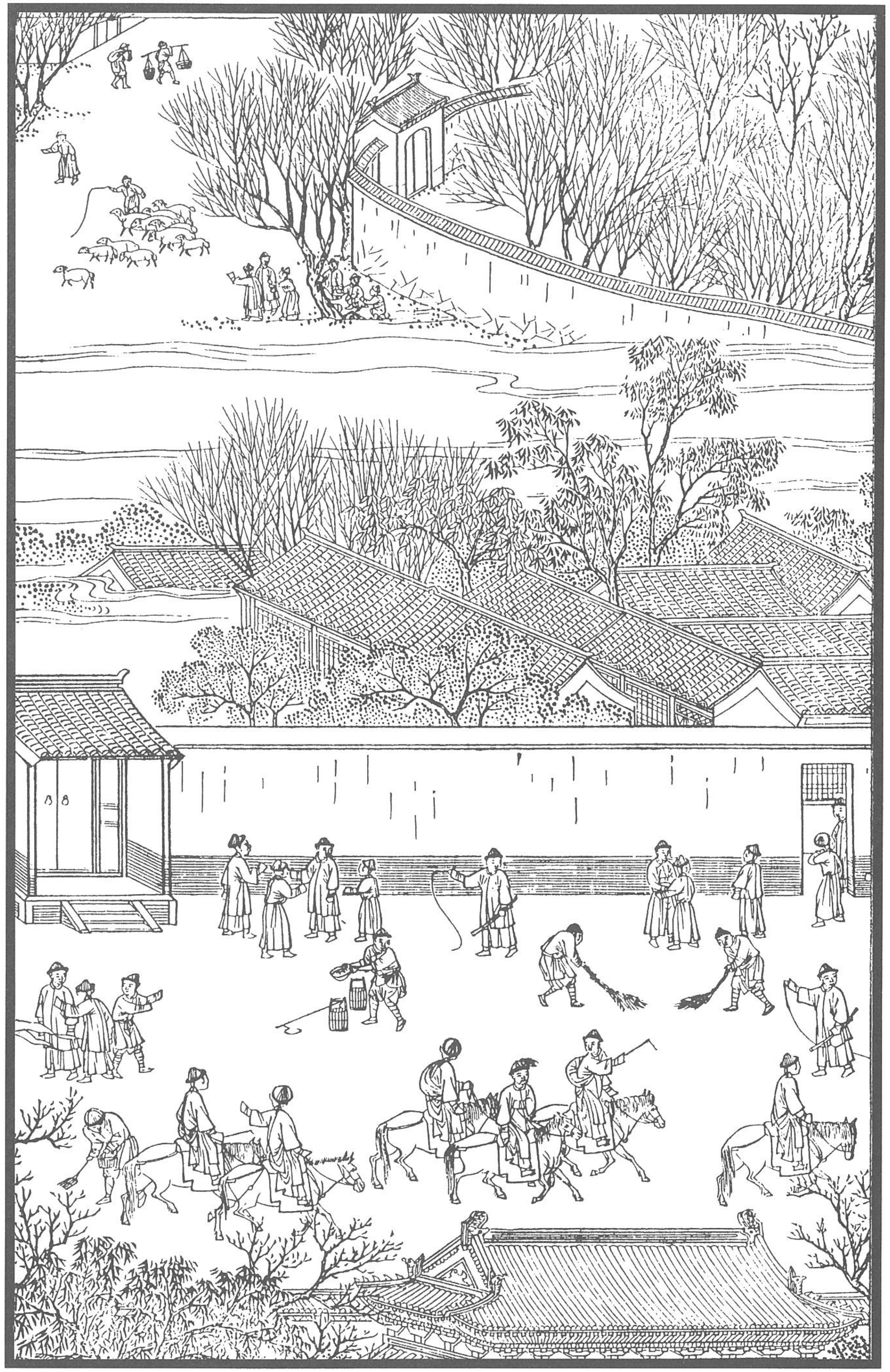

北海公園
北海
北京図書館旧館
団城
文津街
府右街
中海

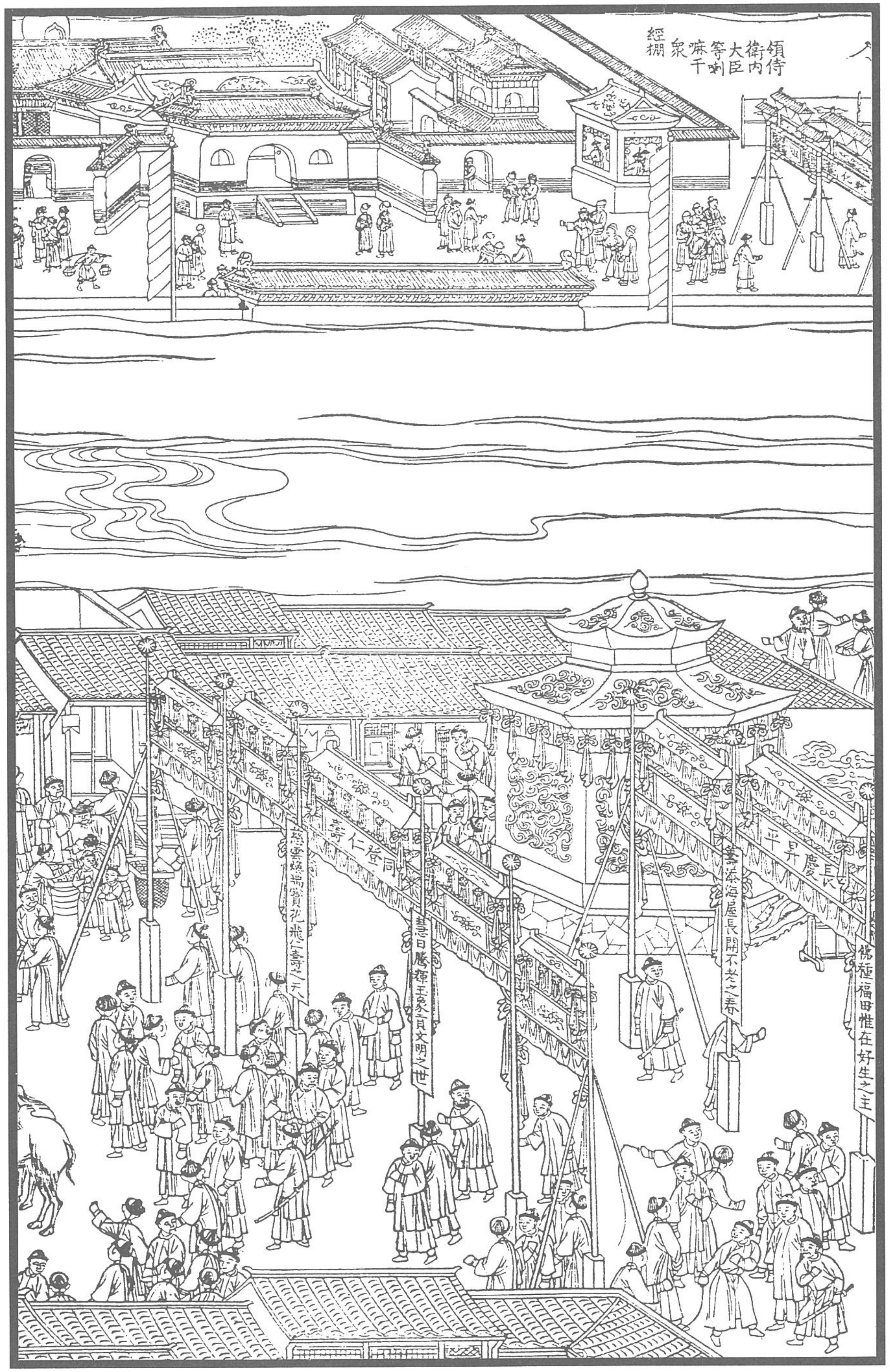




はるか向うに「五龍亭」があり、手前には「馬圏」があって馬が飼われている。ここは、民国時代に北京図書館がおかれ、現在ではその旧館となっている。この通りは「文津街」となる。
「五龍亭」は明の天順年間の創設で、太素殿といった。

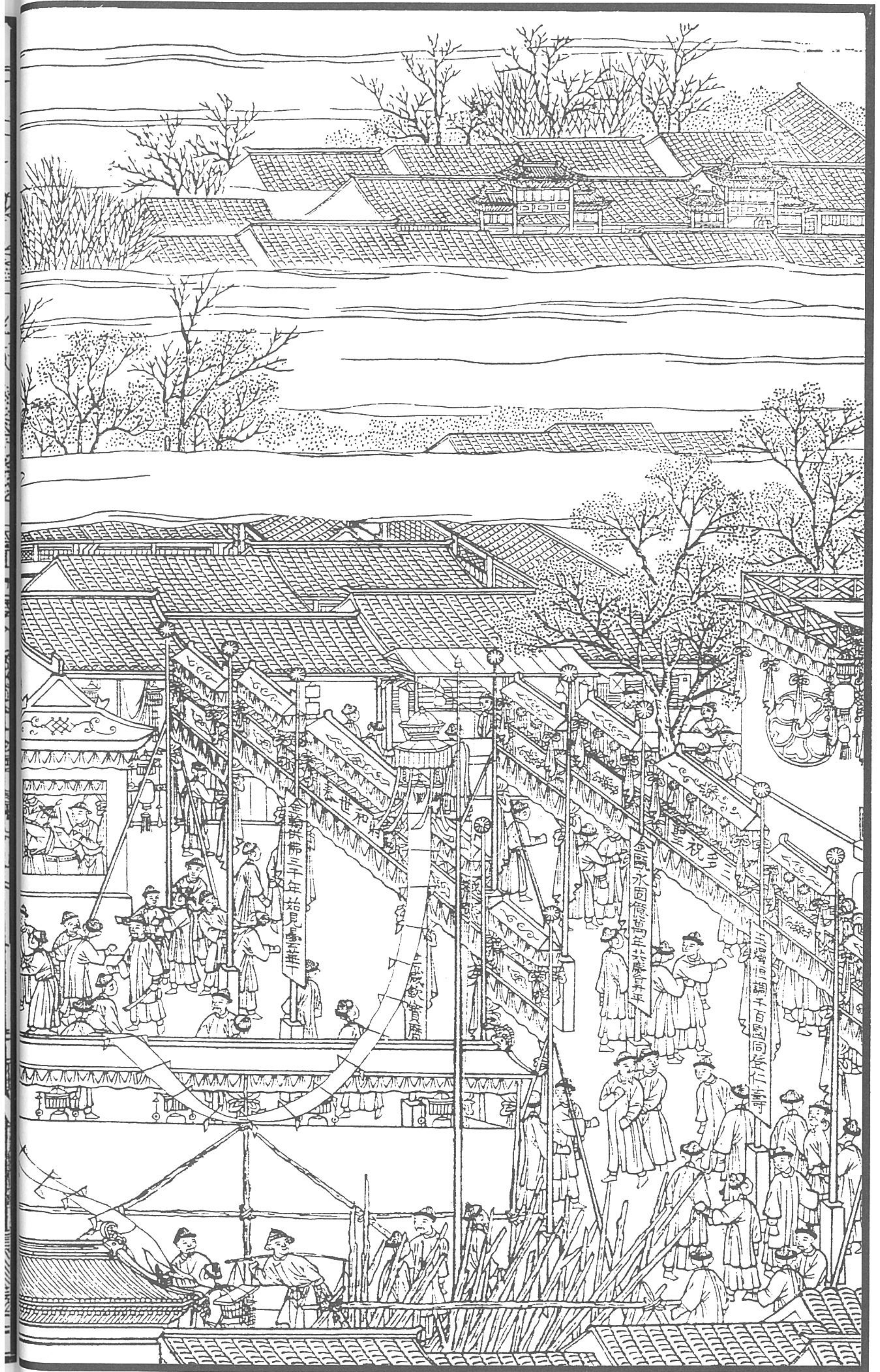


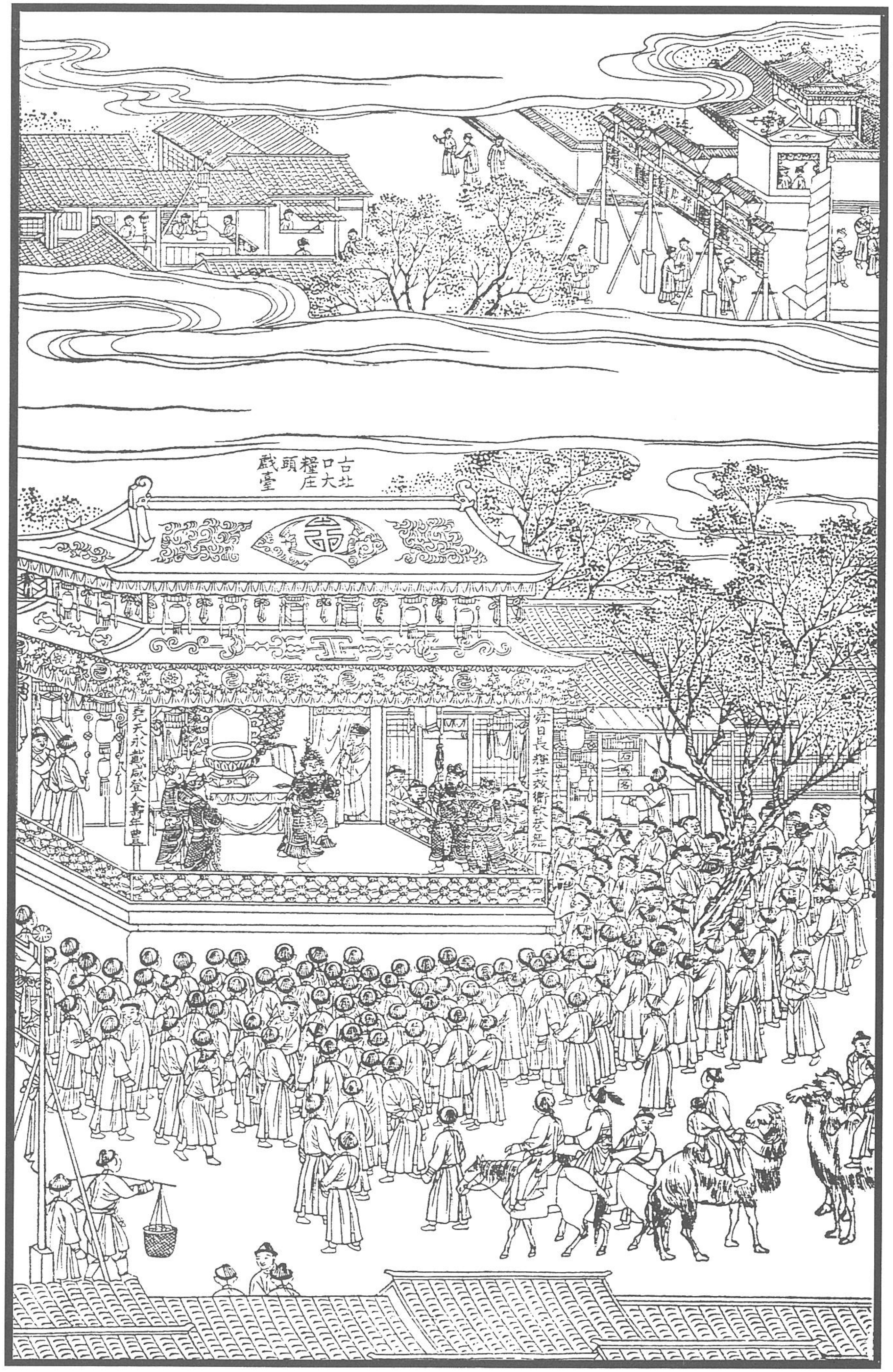


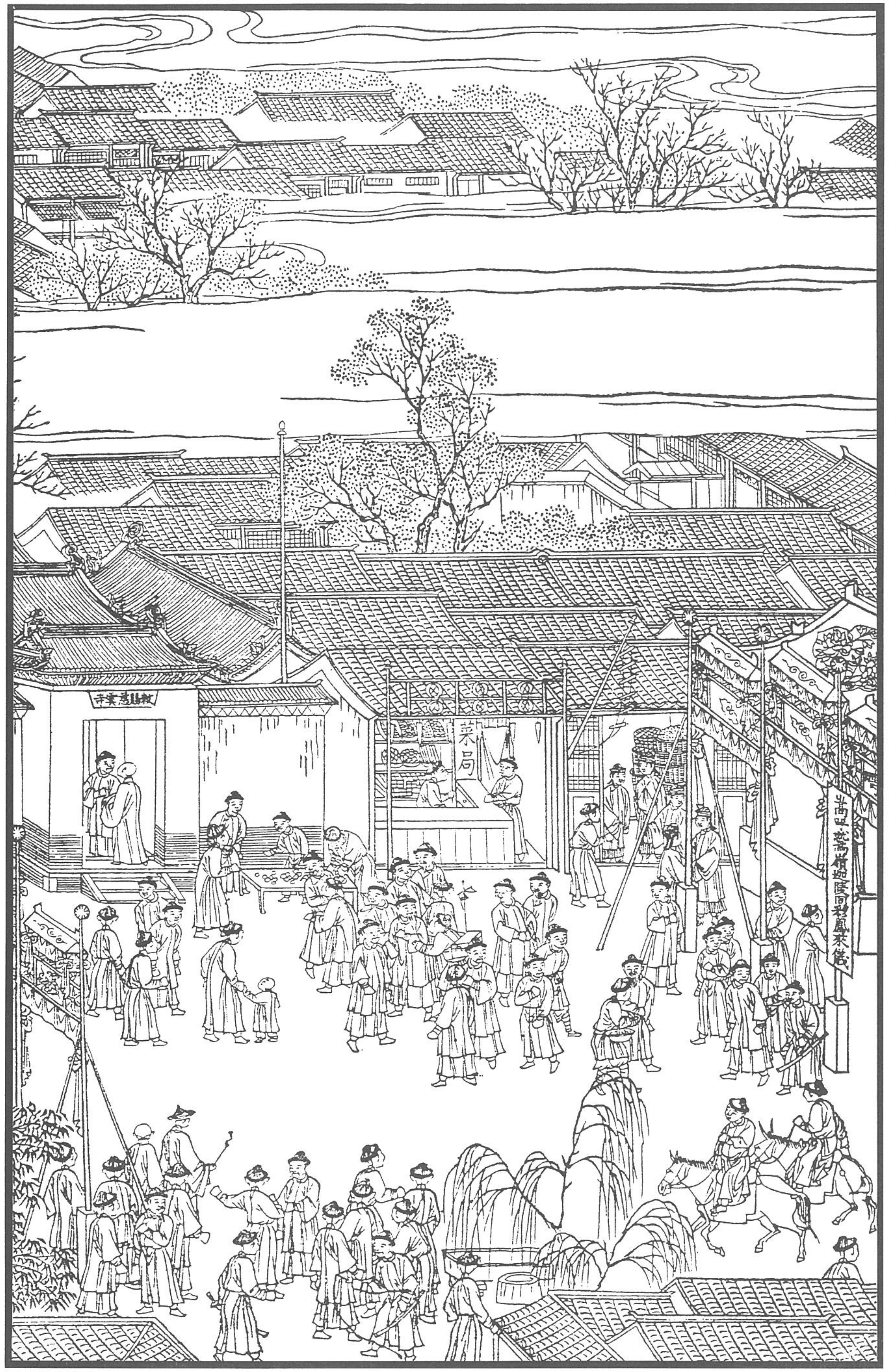


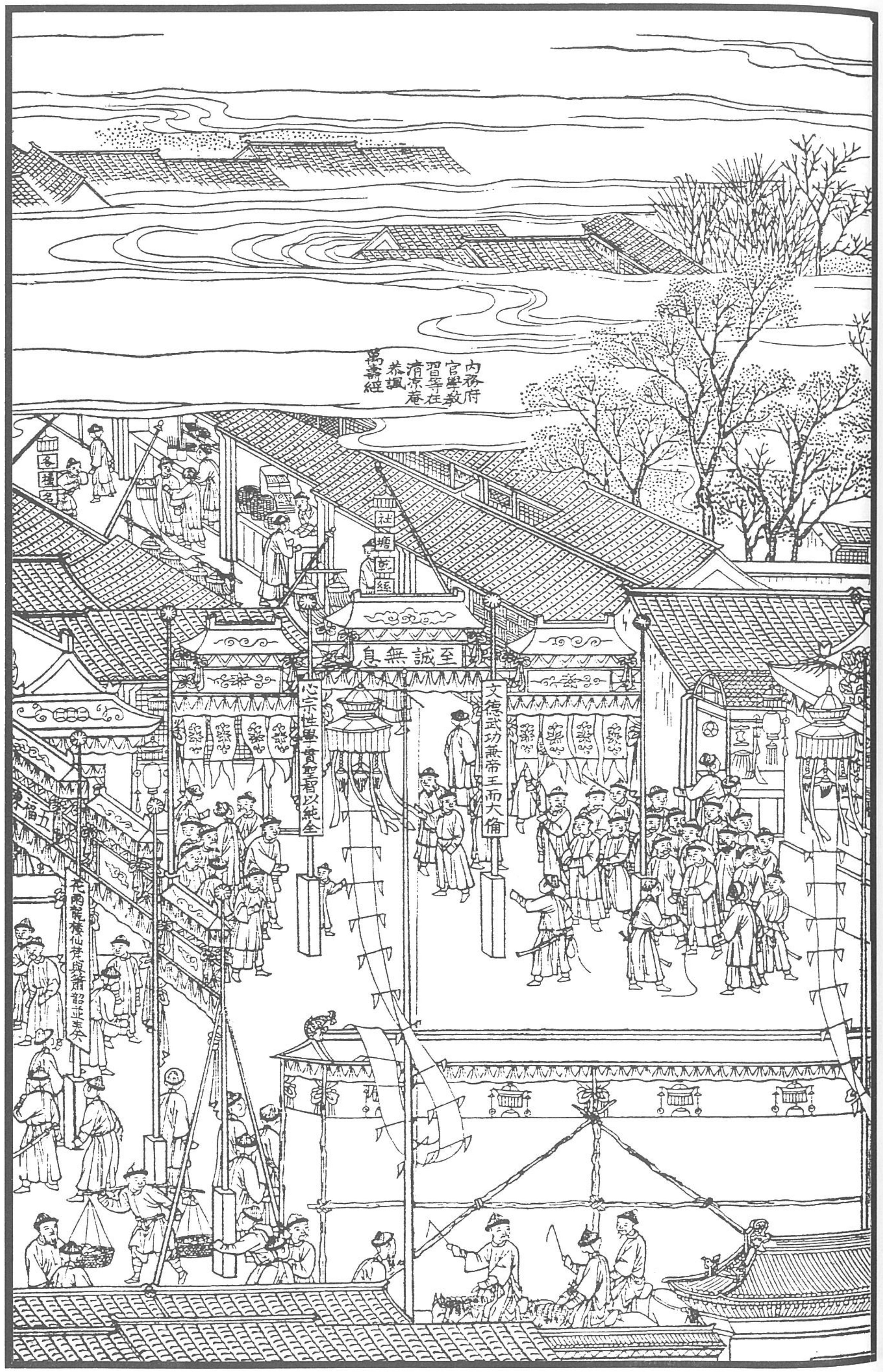


遠方には、羊を放牧している様子が描かれている。また、馬の放牧もある。遠方であるため、中間地帯を霞によってあらわし、距離感を出している。手前に箒で道を掃く人物や馬糞を拾う人物が描かれている。鹵簿の到着を待って街を清掃しているのであろう。



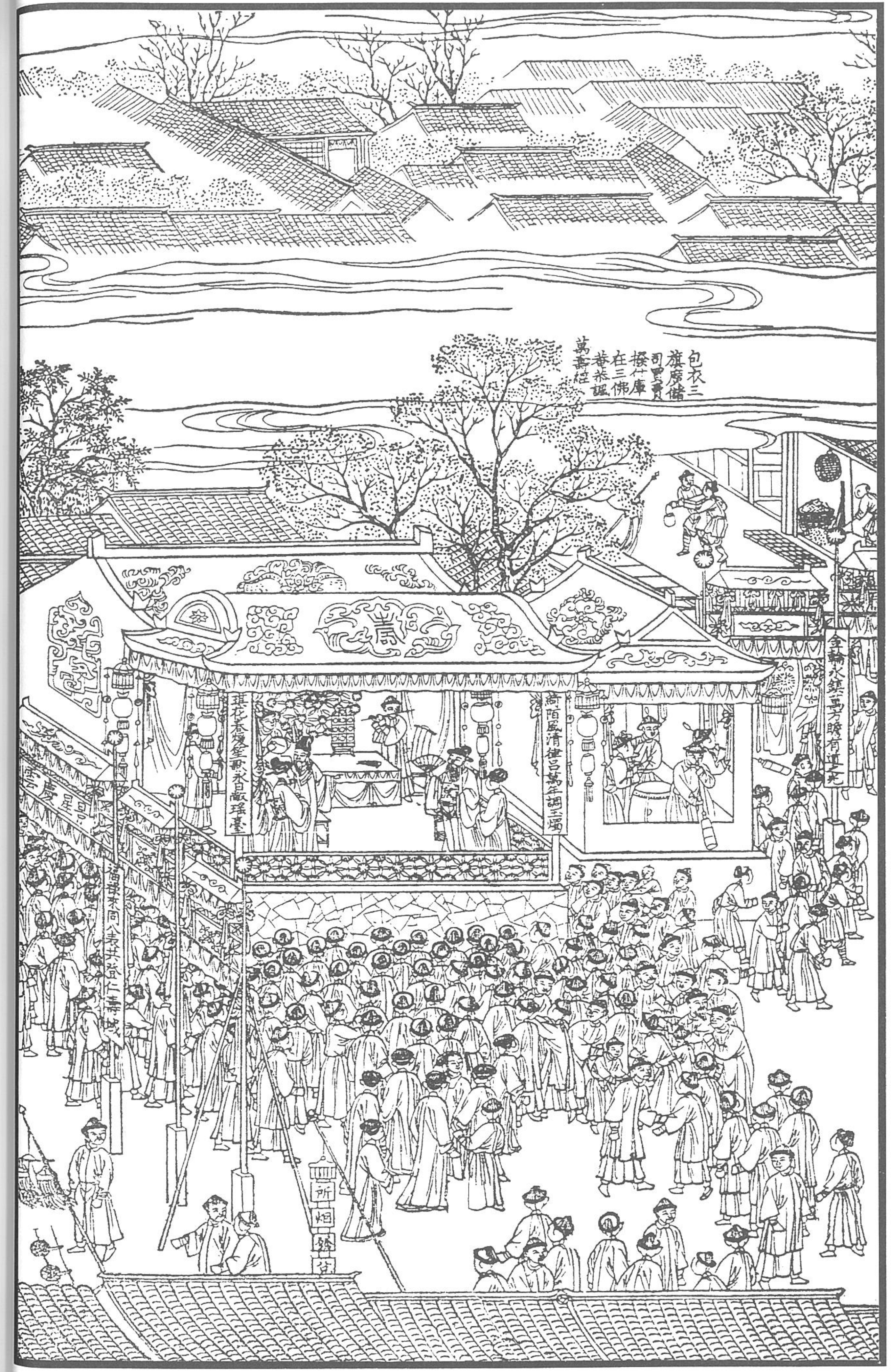

古北口大糧庄頭戲臺

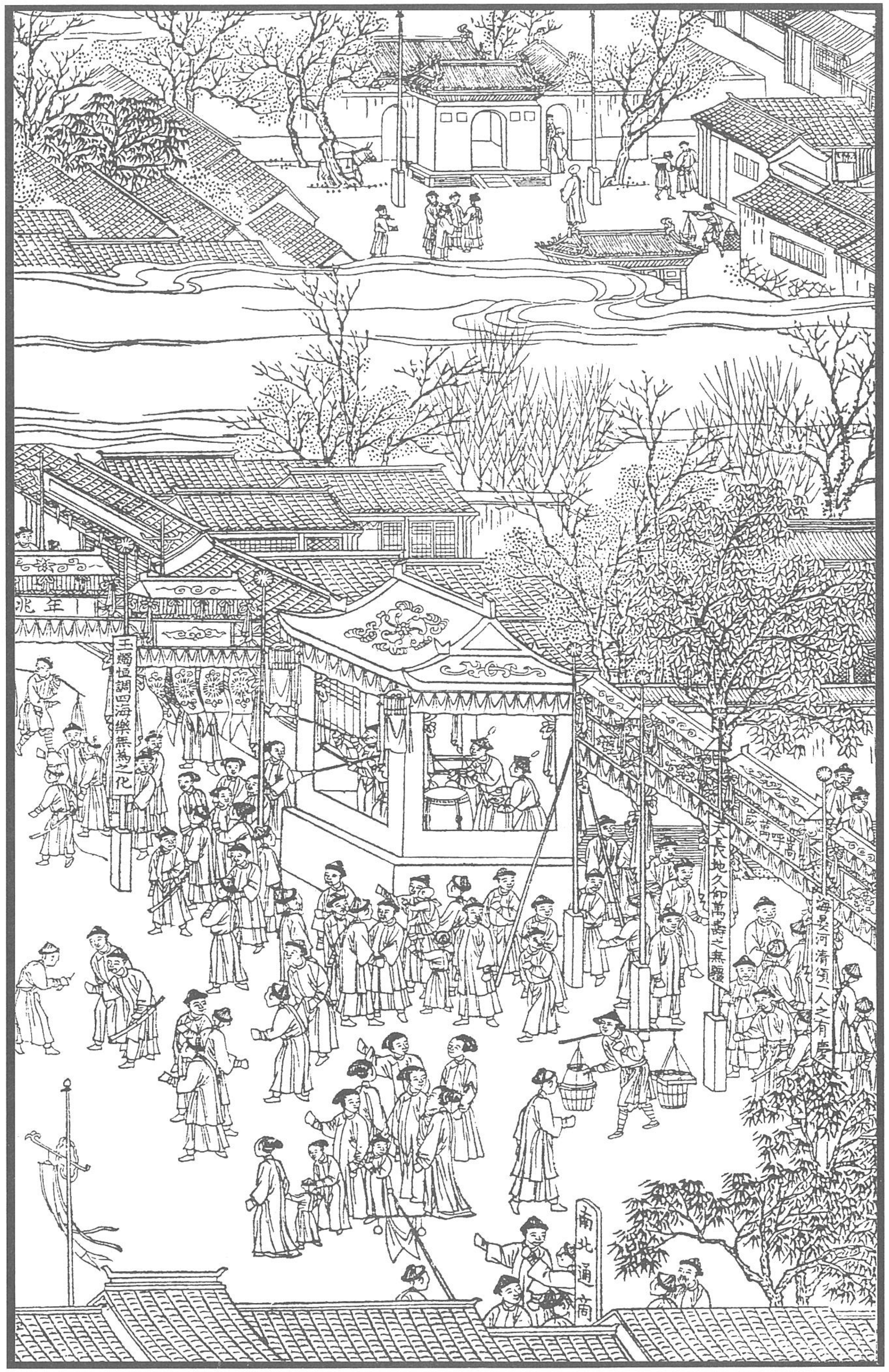


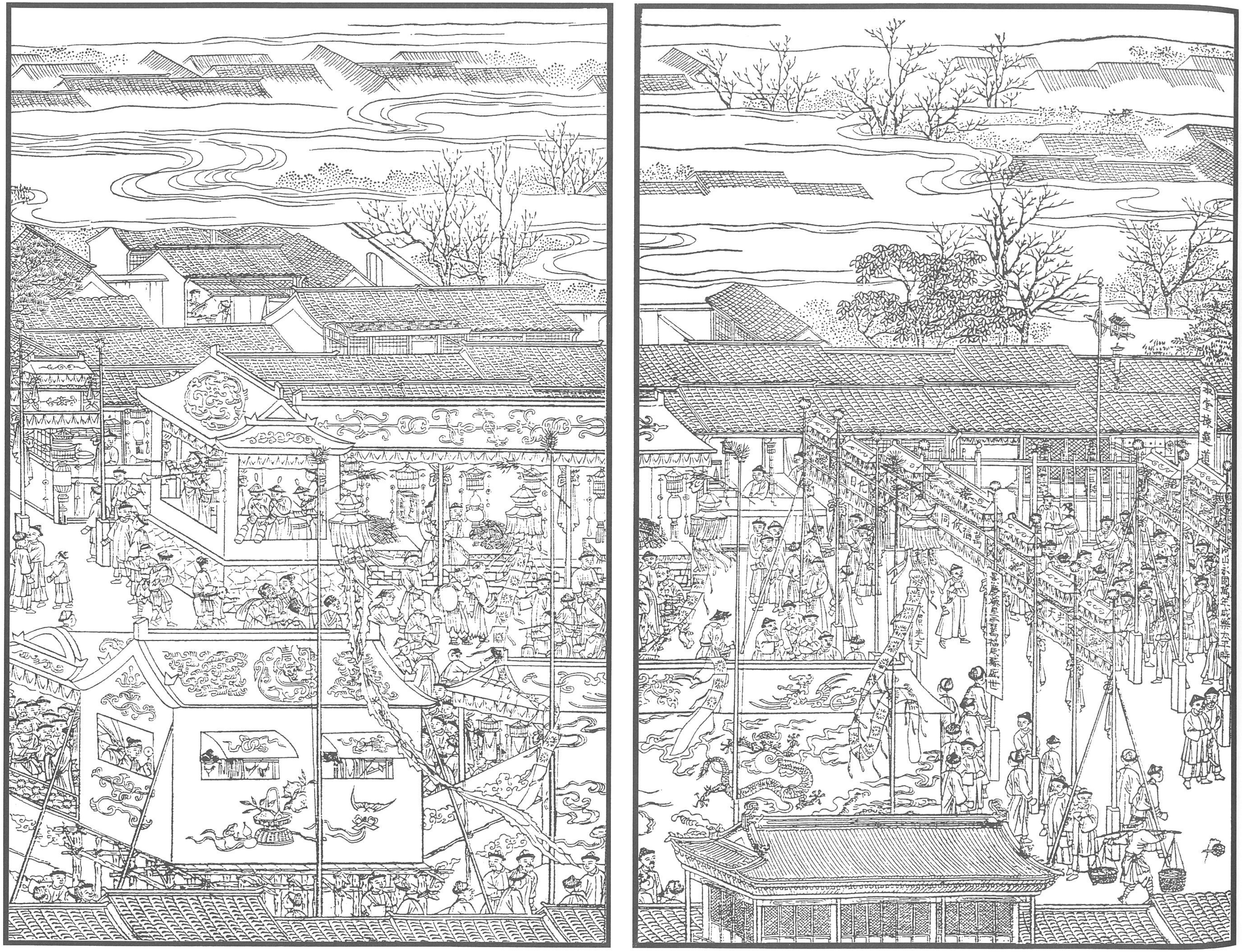


駱駝の姿があるのは、さすがに北方の北京らしい。子どもを乗せた人物が「戯台」の演劇に見とれている。舞台では、仏の台座から降りたらしい主人公が舞っているらしい。長寿を祝うめでたい芝居なのであろう。

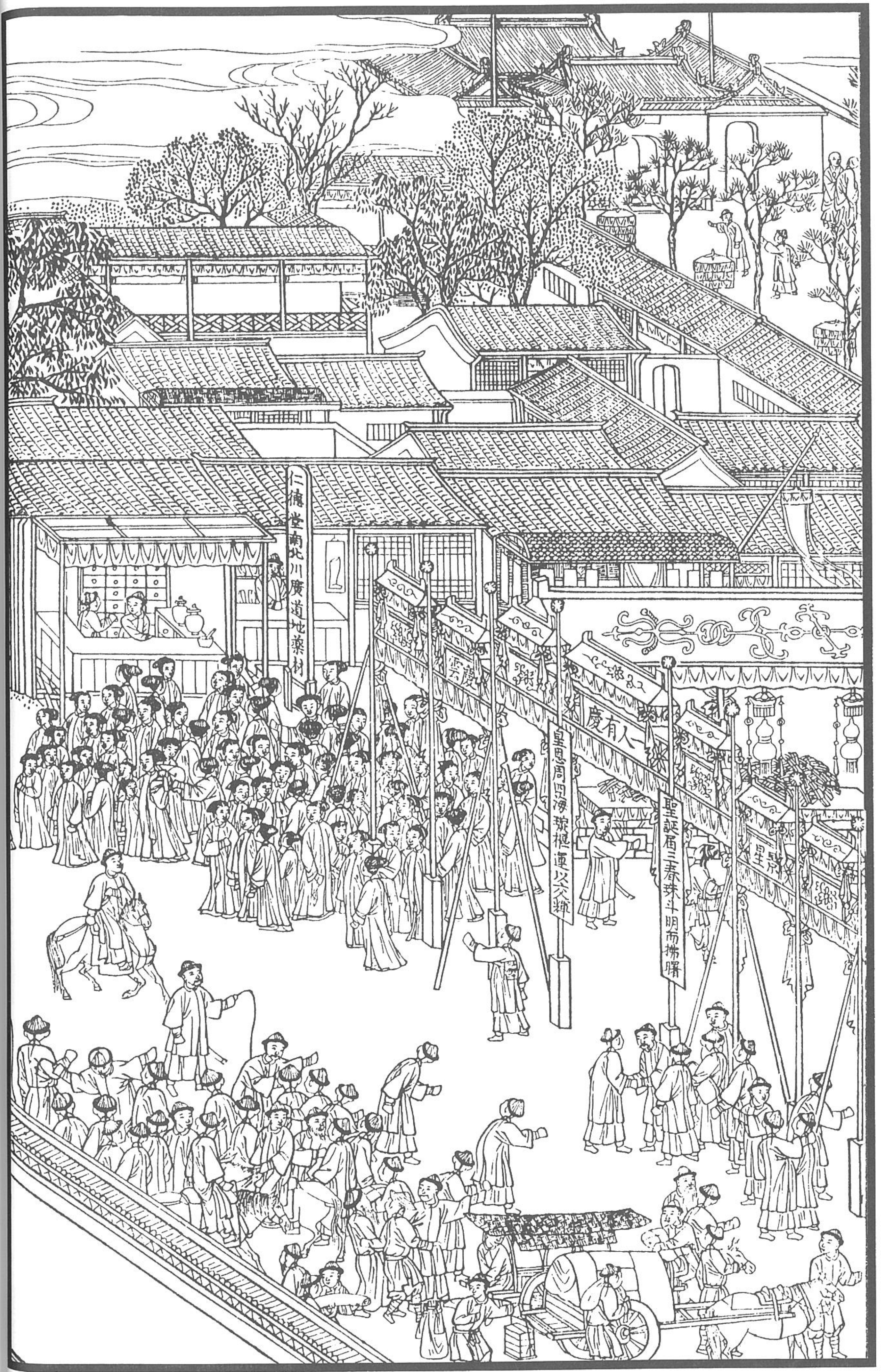
「菜局」の隣にある寺「慈雲寺」に「勅賜」とあるのは誤りで、これは後からの名称だとされる。手前には、馬でなく驢馬に騎乗する人物が行く。


包衣三旗廣儲司買賣擺什庫在三佛菴恭祝萬壽經
琪花春煖金歌永日敞瑶臺
綺陌風清律呂萬年調玉燭
金輪永鎮萬方瞻有道之光
福祿來同八表共登仁壽域

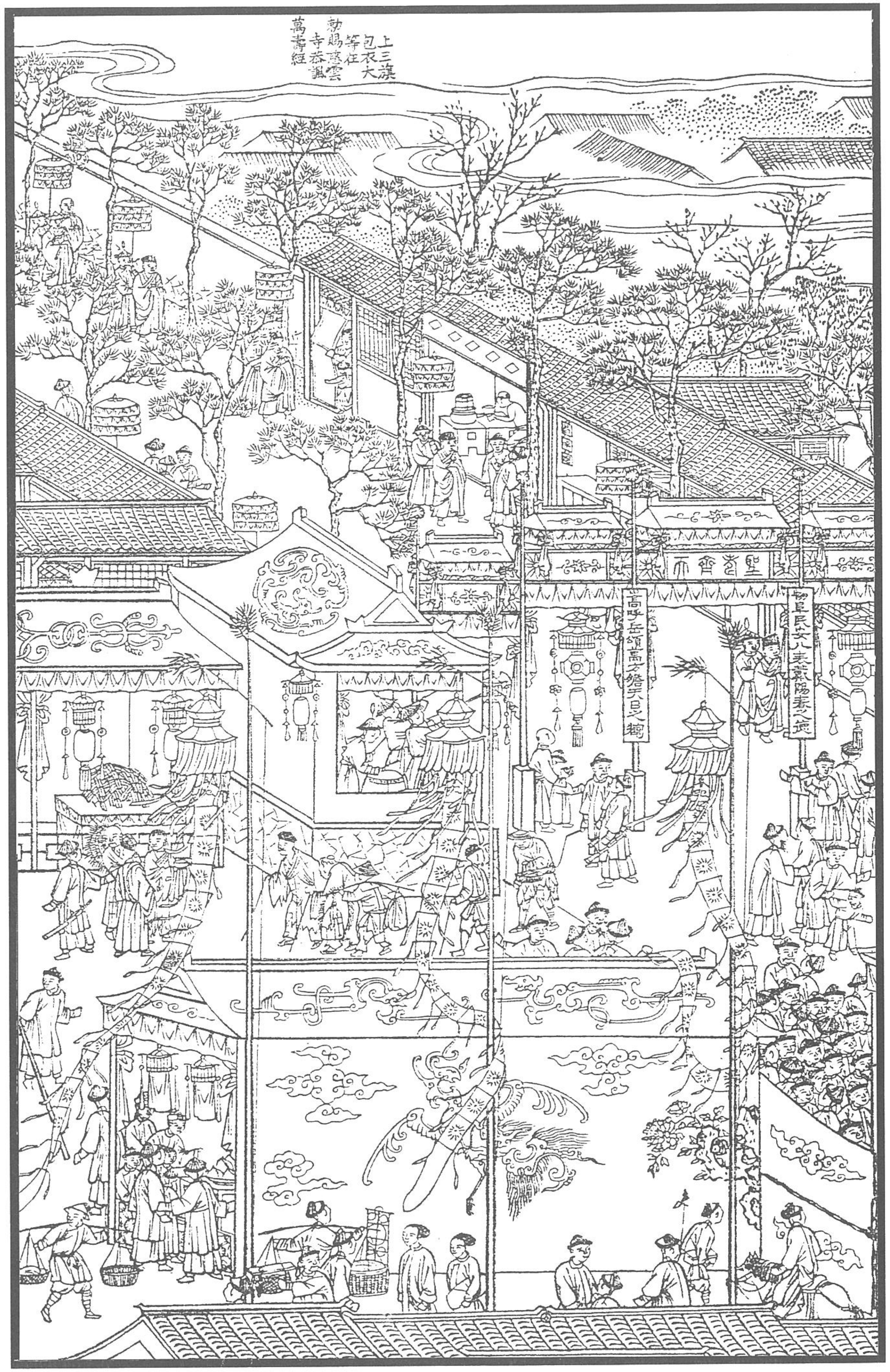

玉燭恒調四海樂無為之化
天長地久仰萬壽之無疆
嵩呼萬歲
海晏河清頌一人之有慶
南北通商



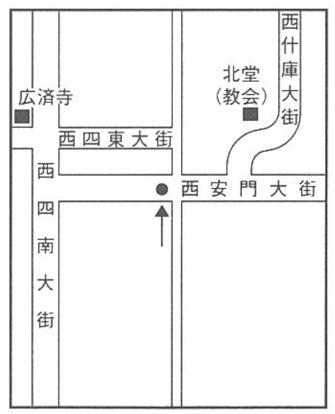
道は真っ直ぐに西に向かい、にぎやかさを増している。町角の戯台にはめでたい芝居が演じられ、また楽器を吹き鳴らす楽隊が見え、楽しそうな喧騒の中に奉祝気分が満ちている。



仁德堂南北川廣道地藥材
慶雲
一人有慶
皇恩周四海璇極運以交輝
聖誕届三春珠斗明而拂曙

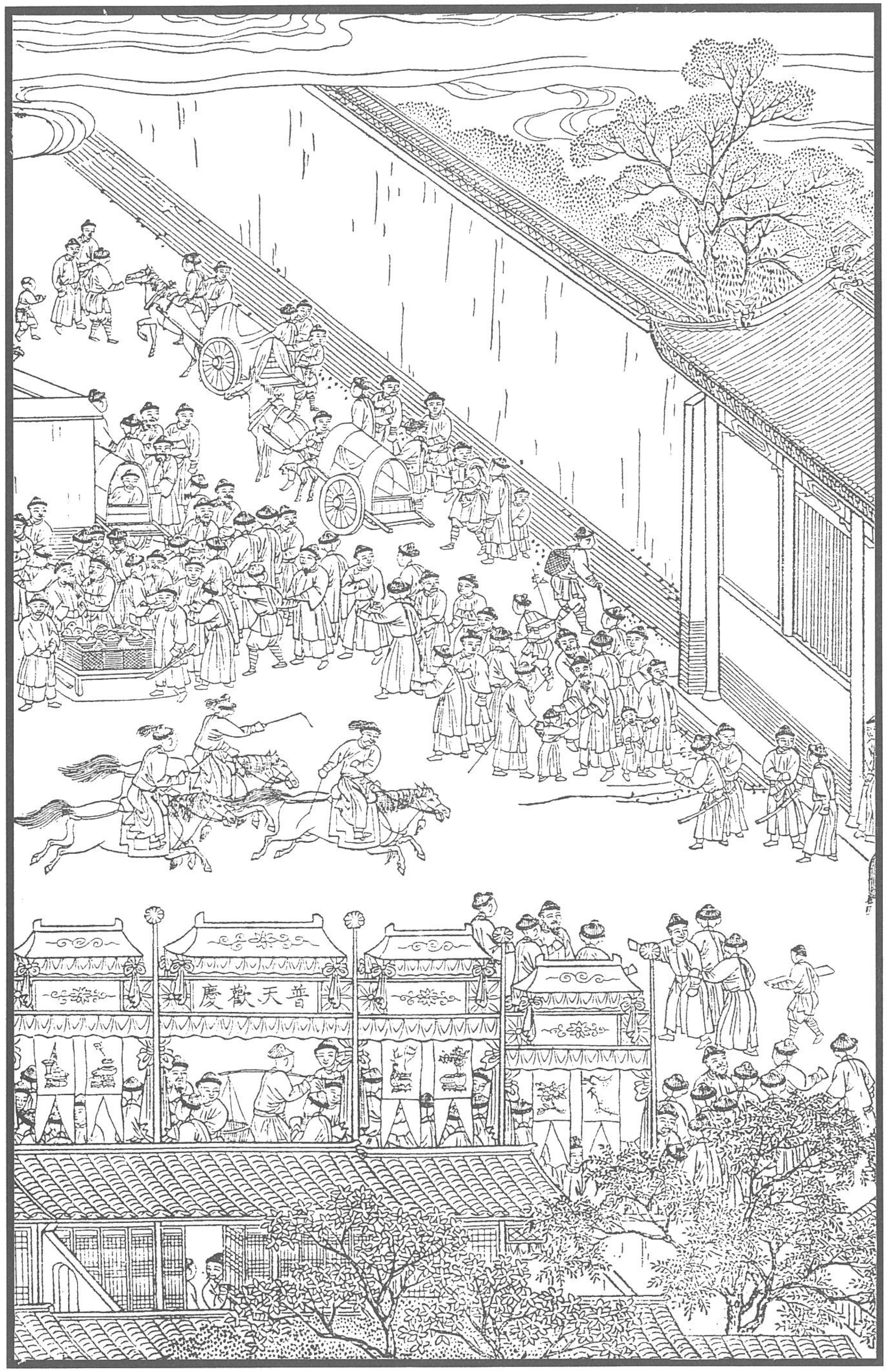


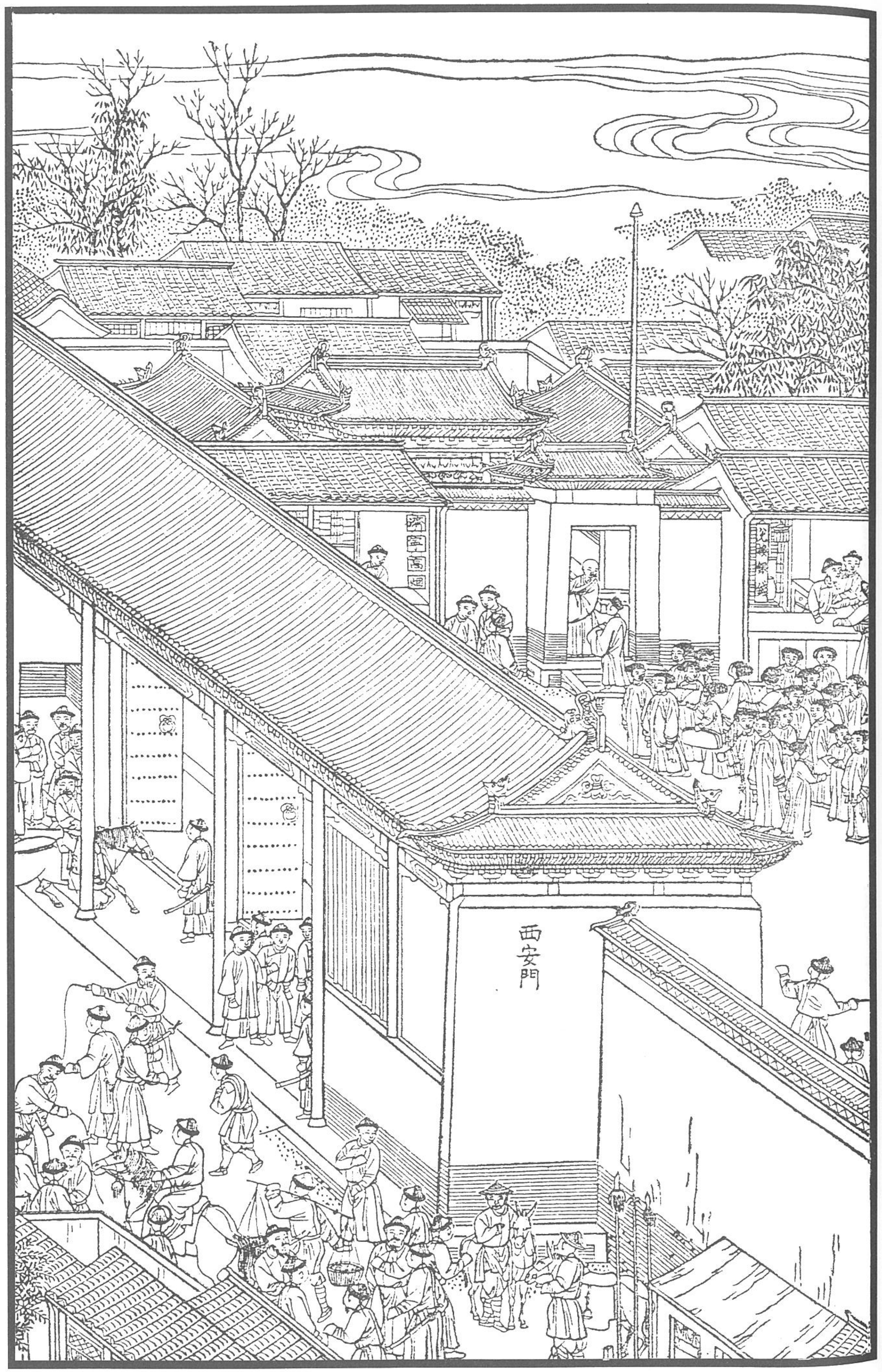
上三旗包衣大等在敕賜慈雲寺恭祝萬壽經
聖壽齊天

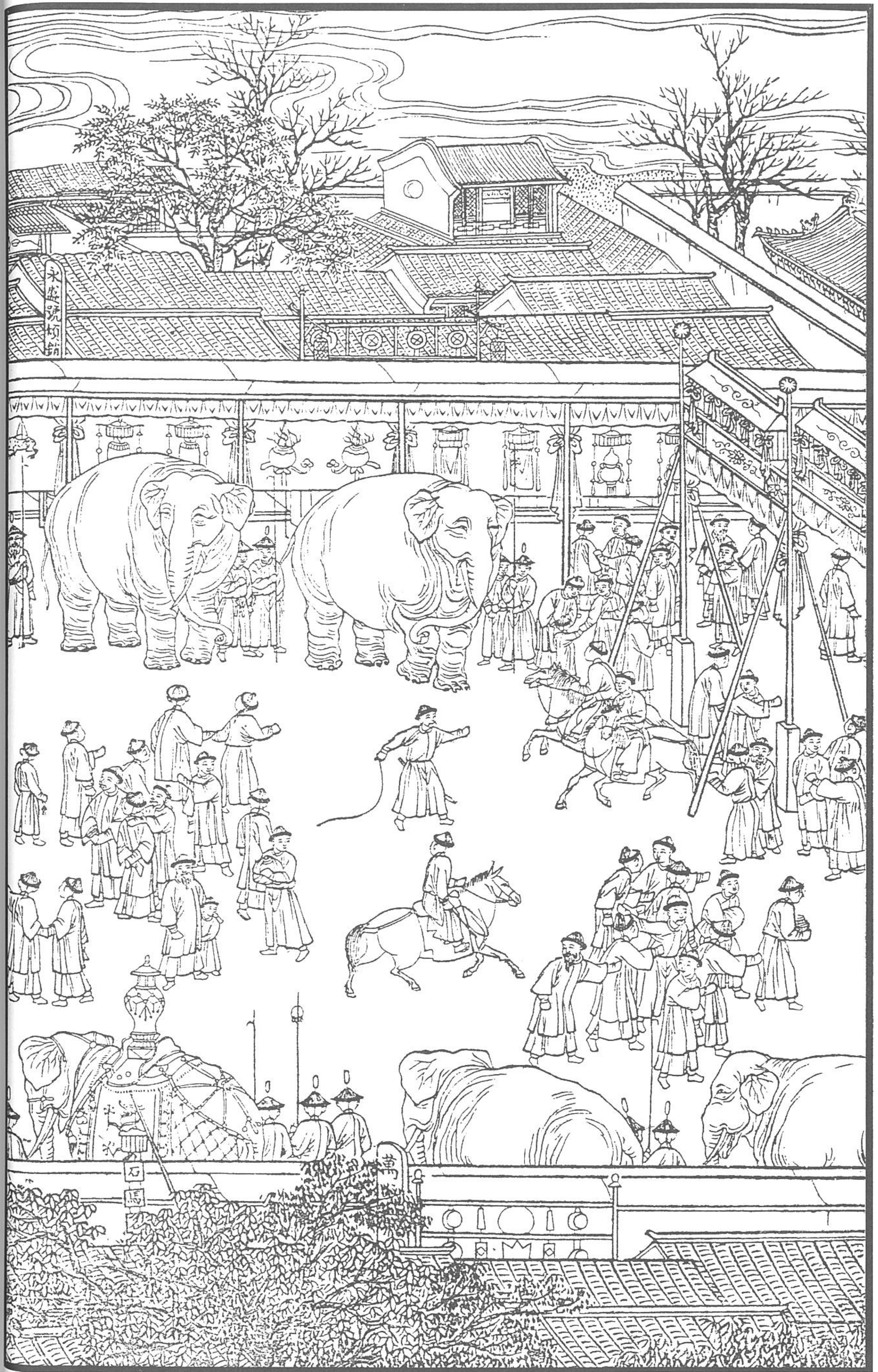


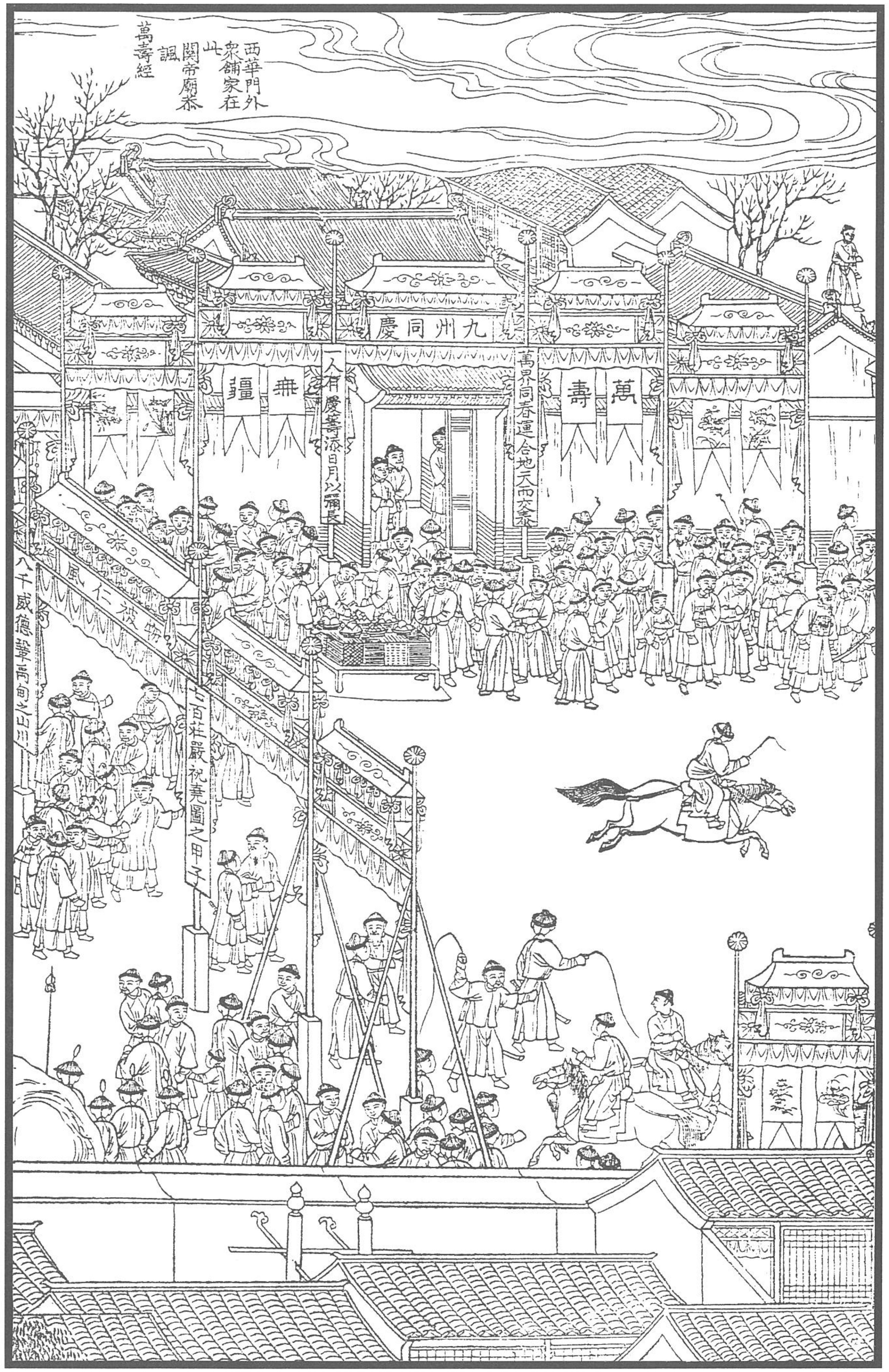
広済寺
北堂（教会）
西什庫大街
西四東大街
西安門大街
西四南大街

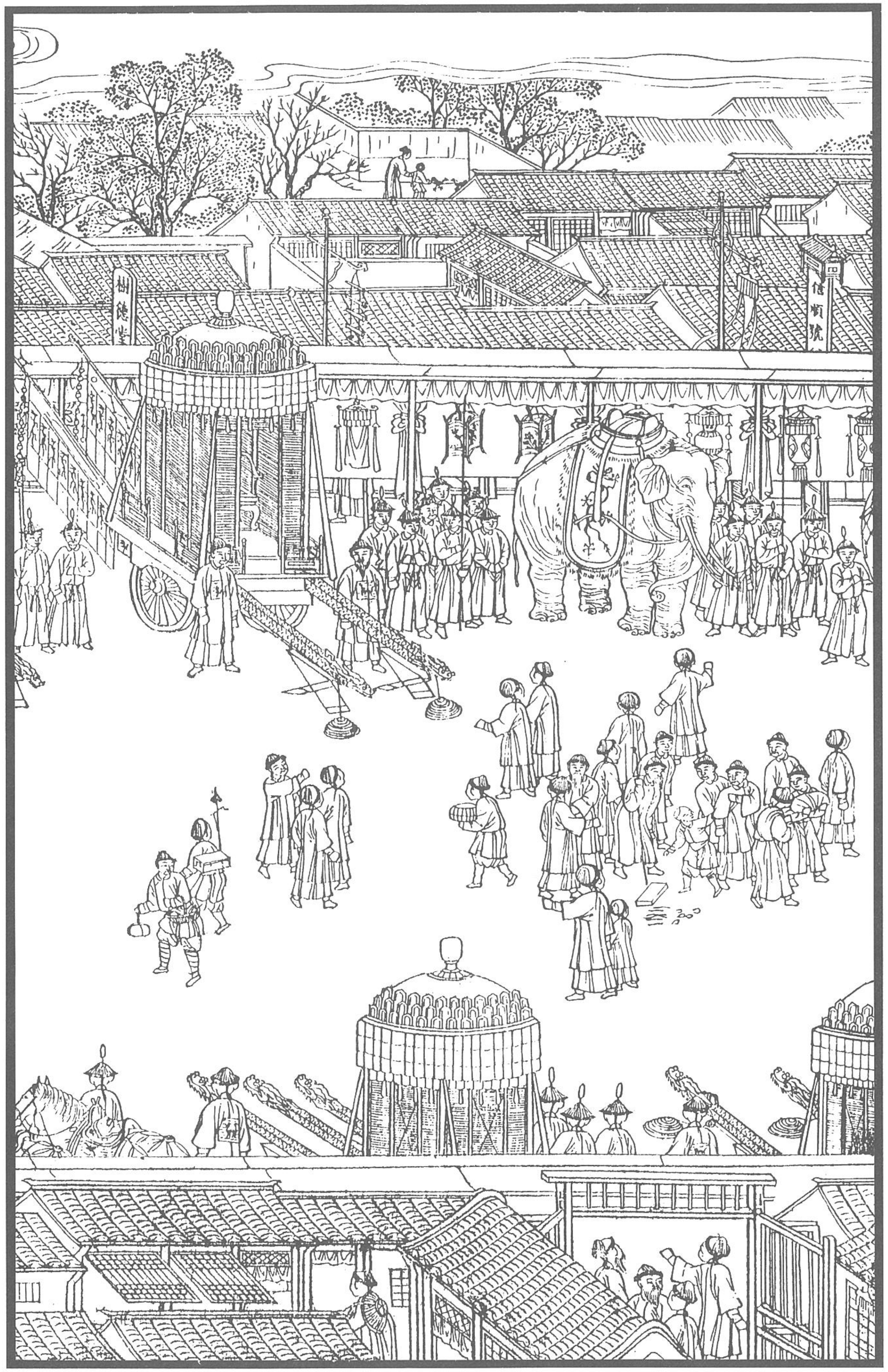
ここは「西安門大街」で、人通りの中には親子連れの物乞いの姿も見える。
「仁徳堂」と書かれた薬局の前には、一群の女性が集まって鹵簿の到着を待っている。
西安門は解放後に取り払われたため、現在はなくなっている。画面では、門に先触れの馬が到着した模様である。

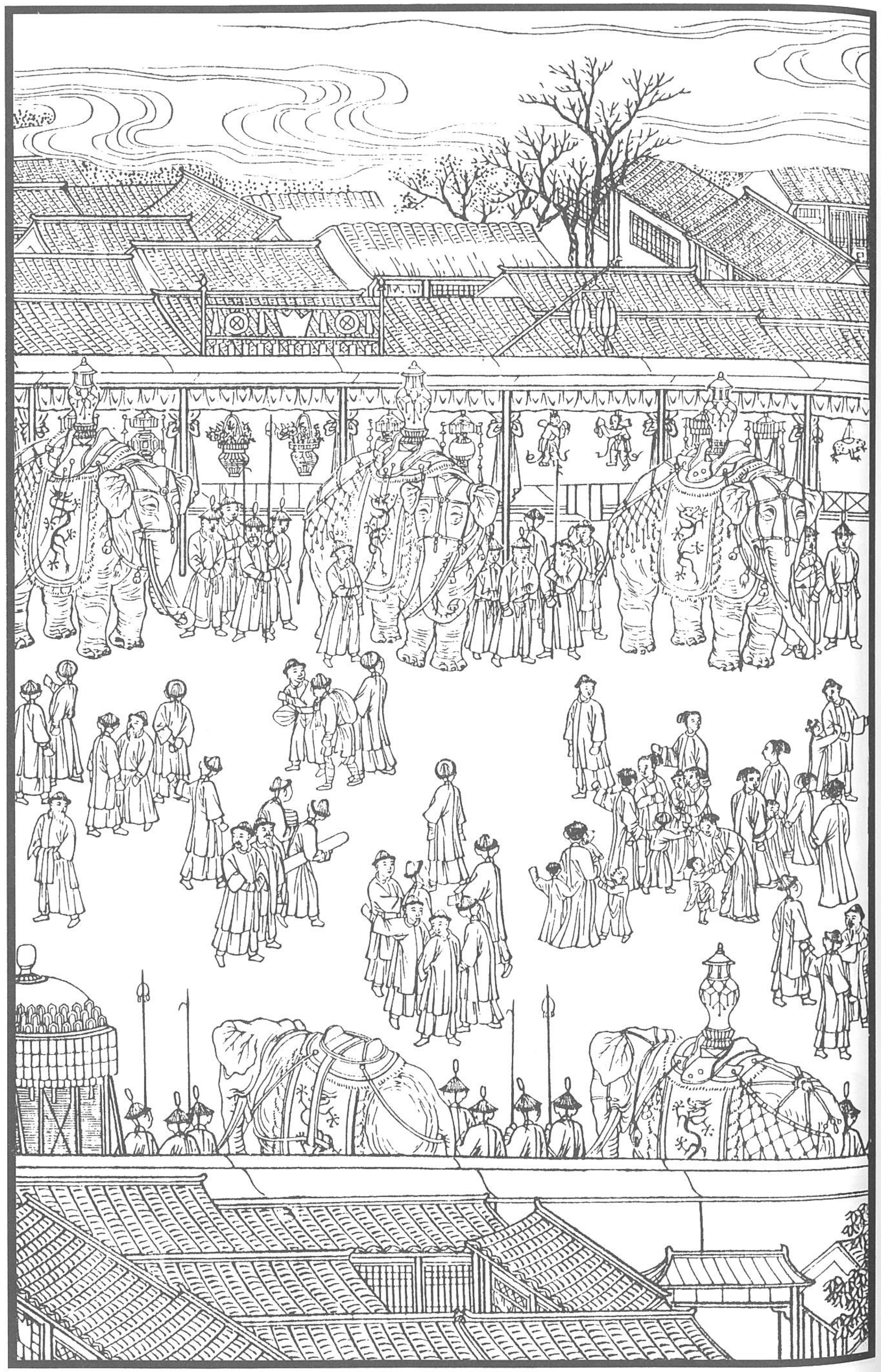




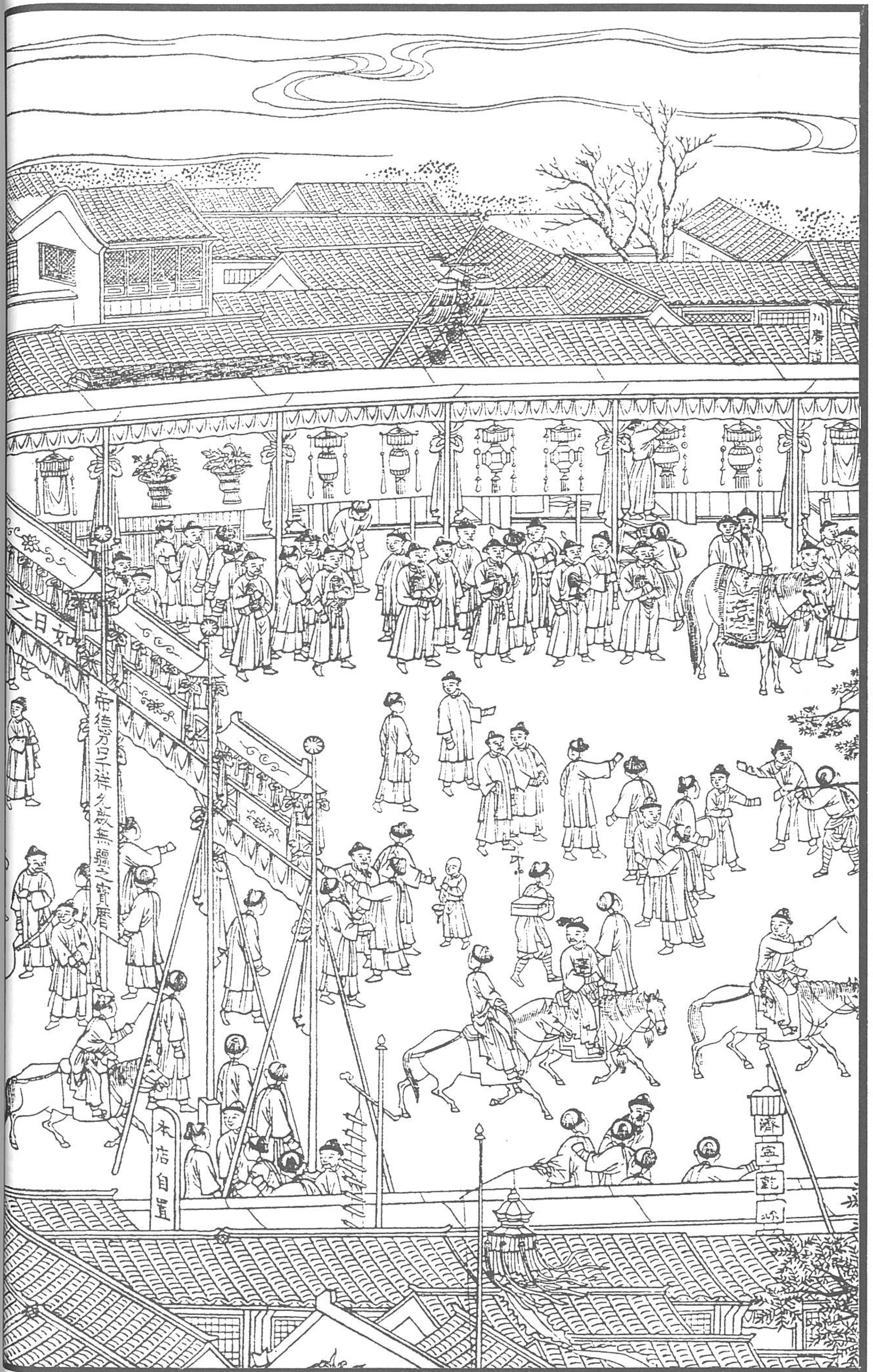


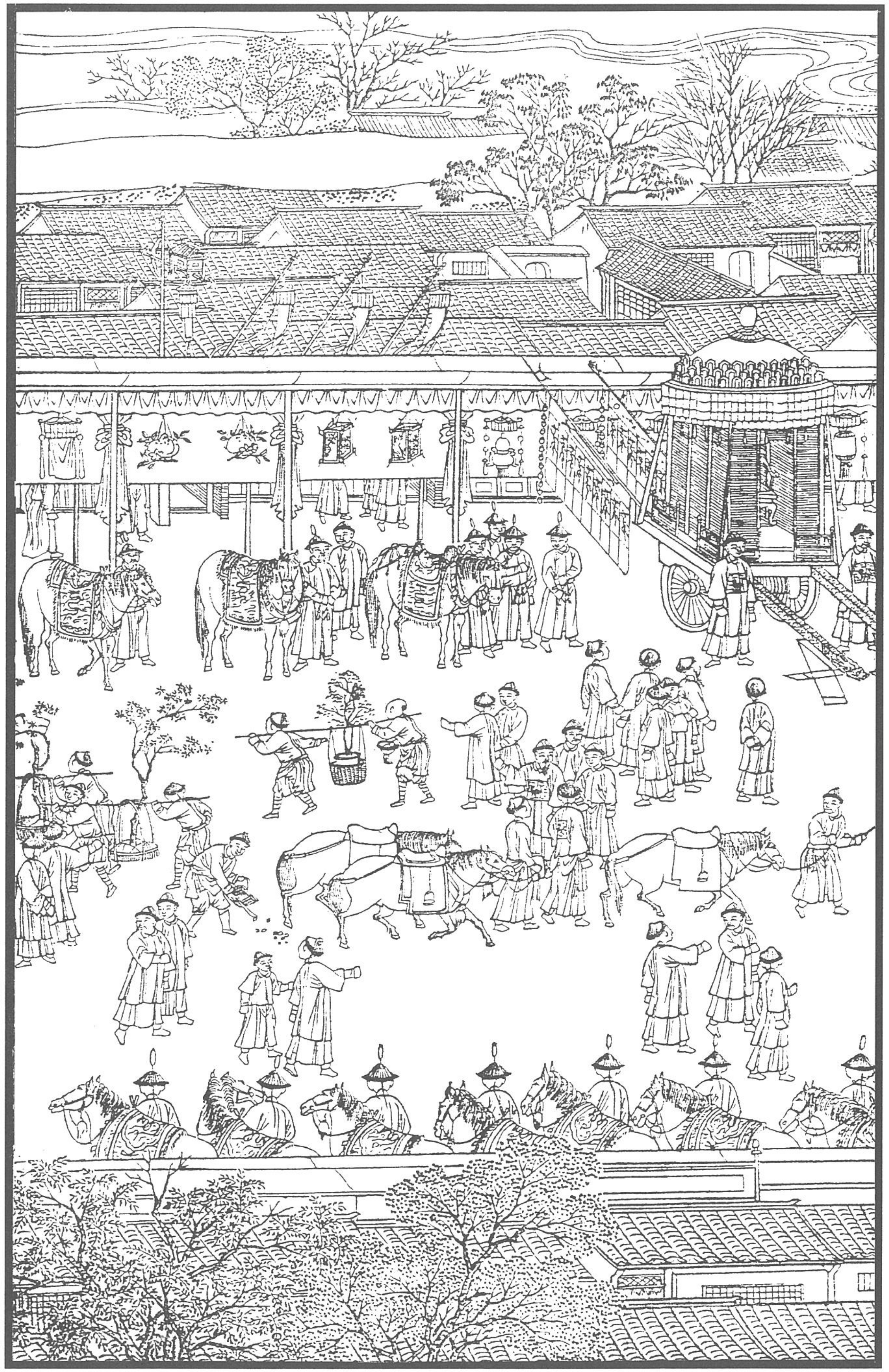

西華門外衆舖家在此關帝廟恭諷萬壽經
九州同慶
無疆
萬壽
一人有慶壽添日月以彌長
萬界同春運合地天而交泰
物被仁風
七百莊嚴祝堯圖之甲子

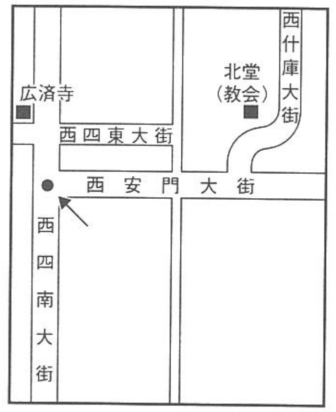


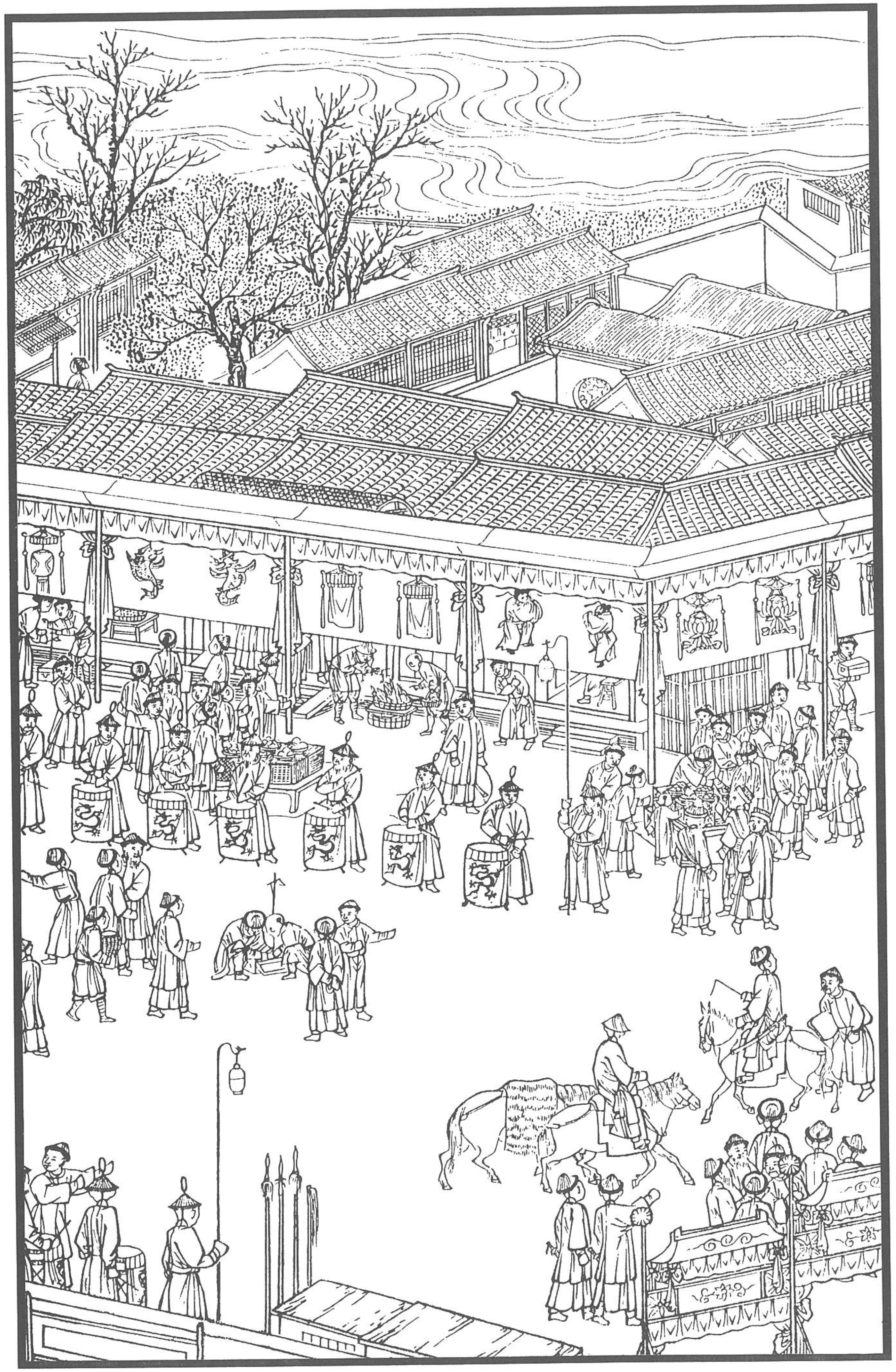


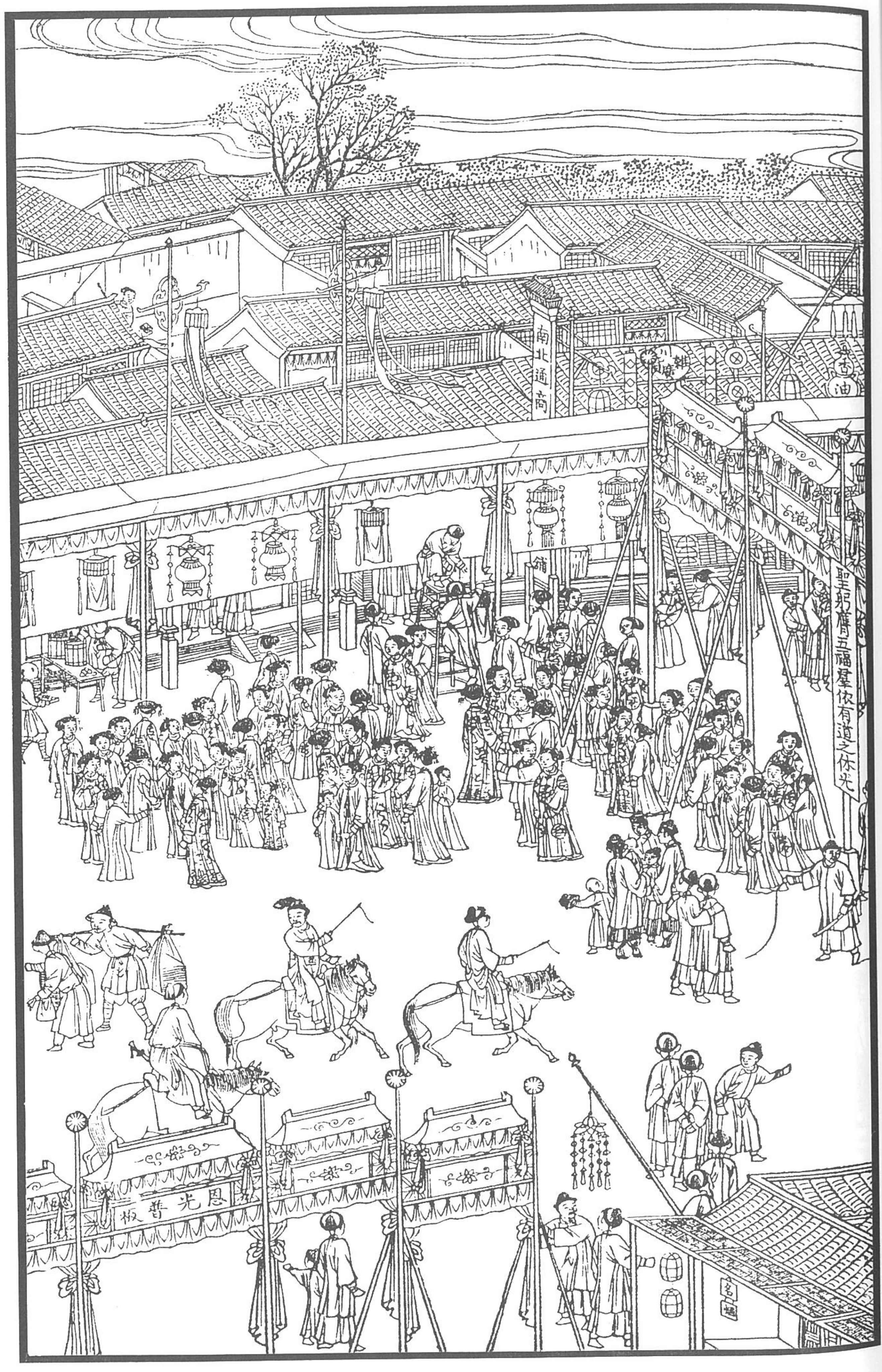
奉祝の儀式に参列する象が見えてきた。これらの象は宮廷直属の「象房」で飼育されていたもので、安南などから献上されたものという。専門の飼育係がいて、相当数が清末まで飼われていた。象の背中に乗せているのは「宝瓶」(瓶＝平)で「大平有象」と吉祥語に掛けているのである。


本店自置



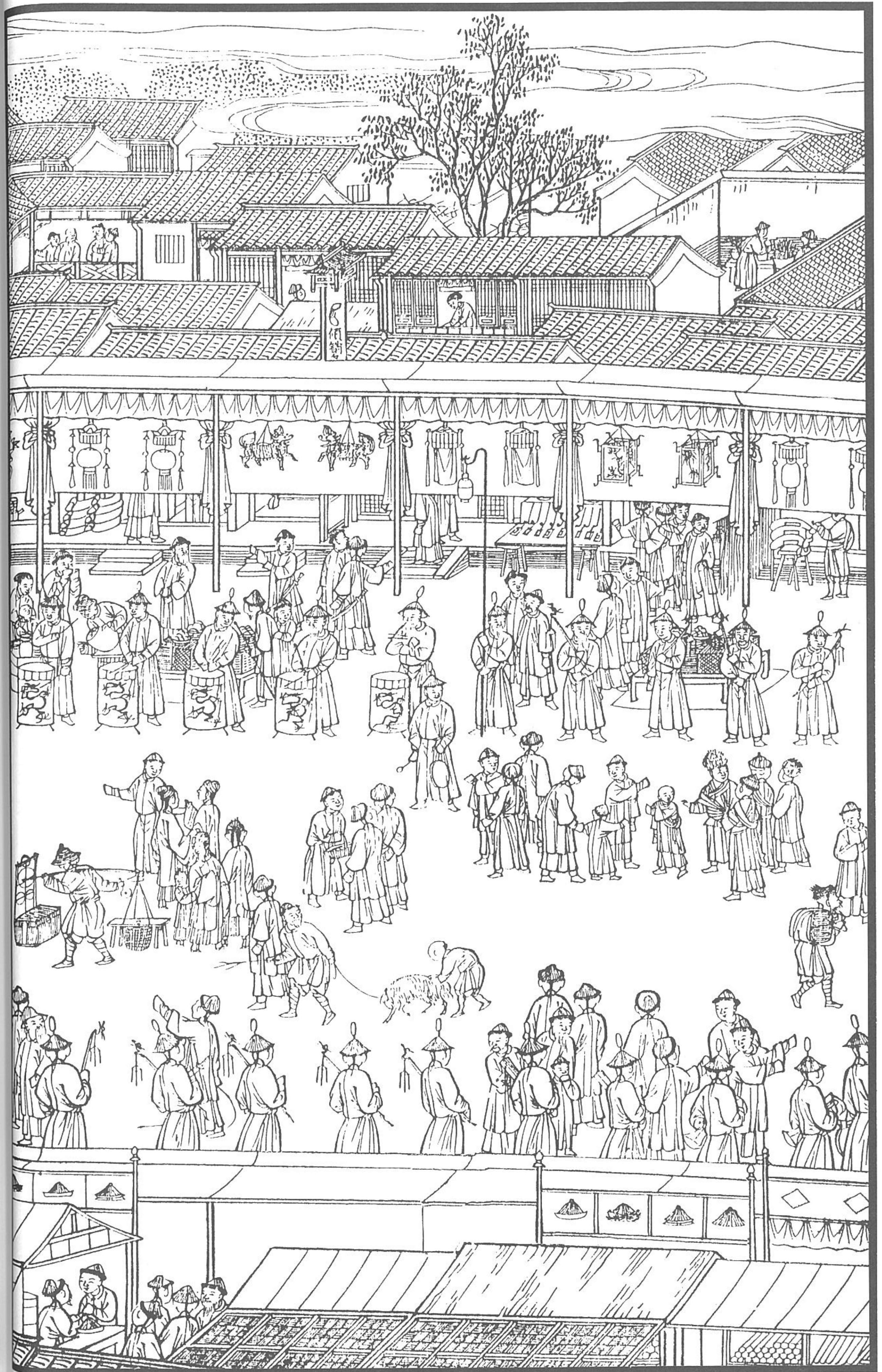

西什庫大街
北堂
(教会)
広済寺
西四東大街
西安門大街
西四南大街

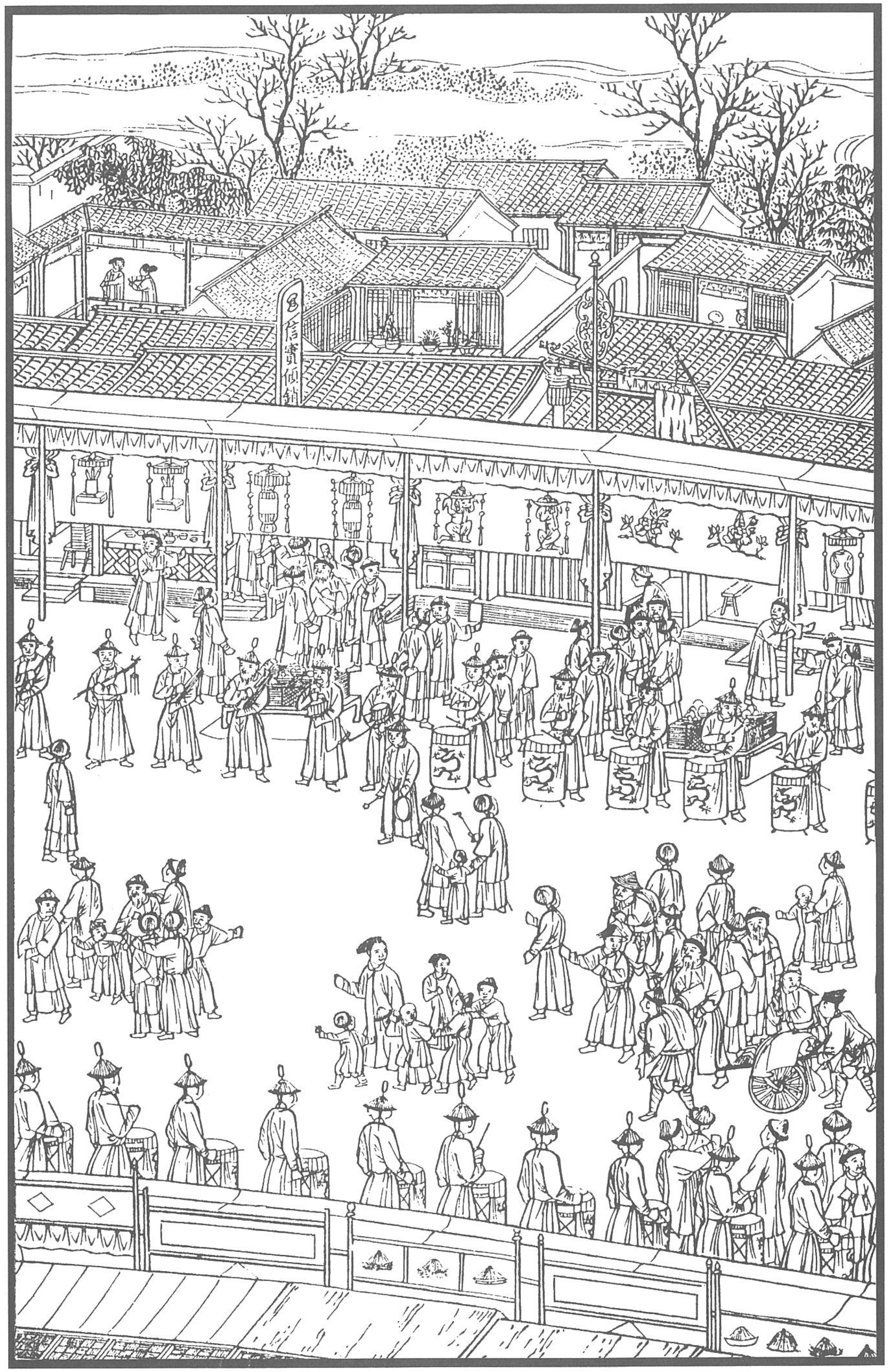


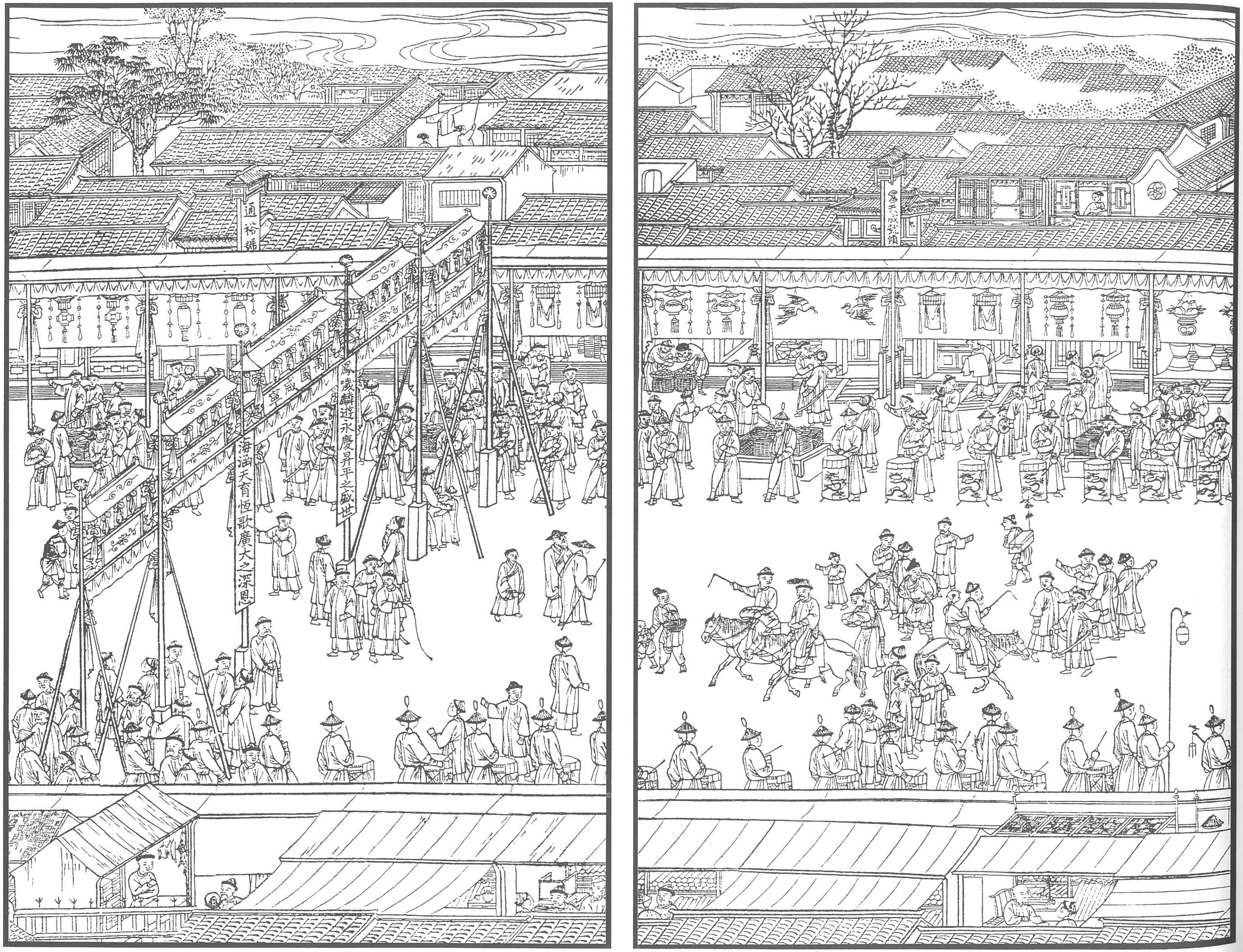


道は西安門大街を真っ直ぐ西に進むと、やがて西四牌楼のやや南で北に折れる。

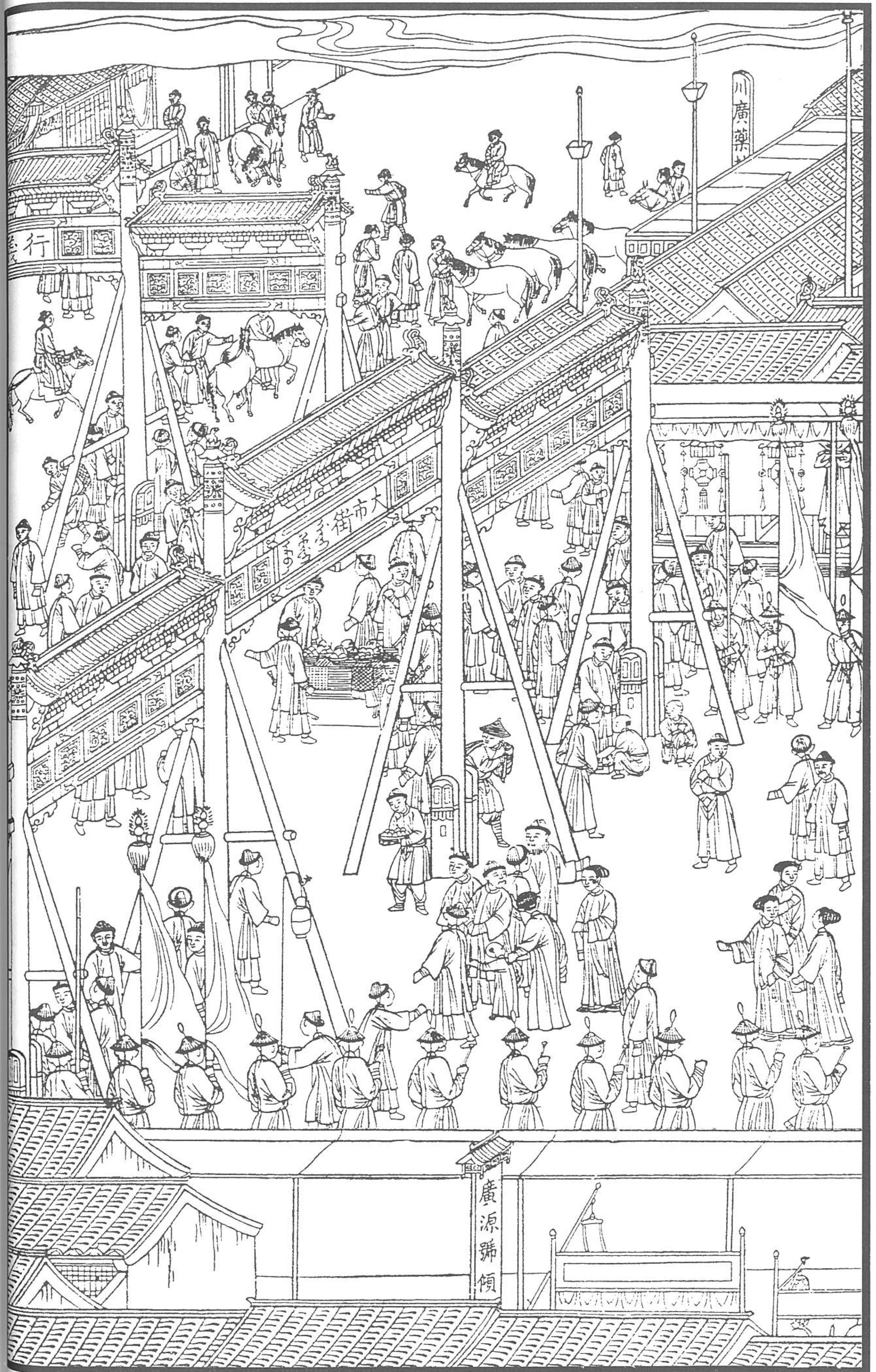
向こう側に設えられた「綵棚」には、さまざまな形の灯篭や、吉祥のものをかたどった模型が吊るされたり描かれているようである。

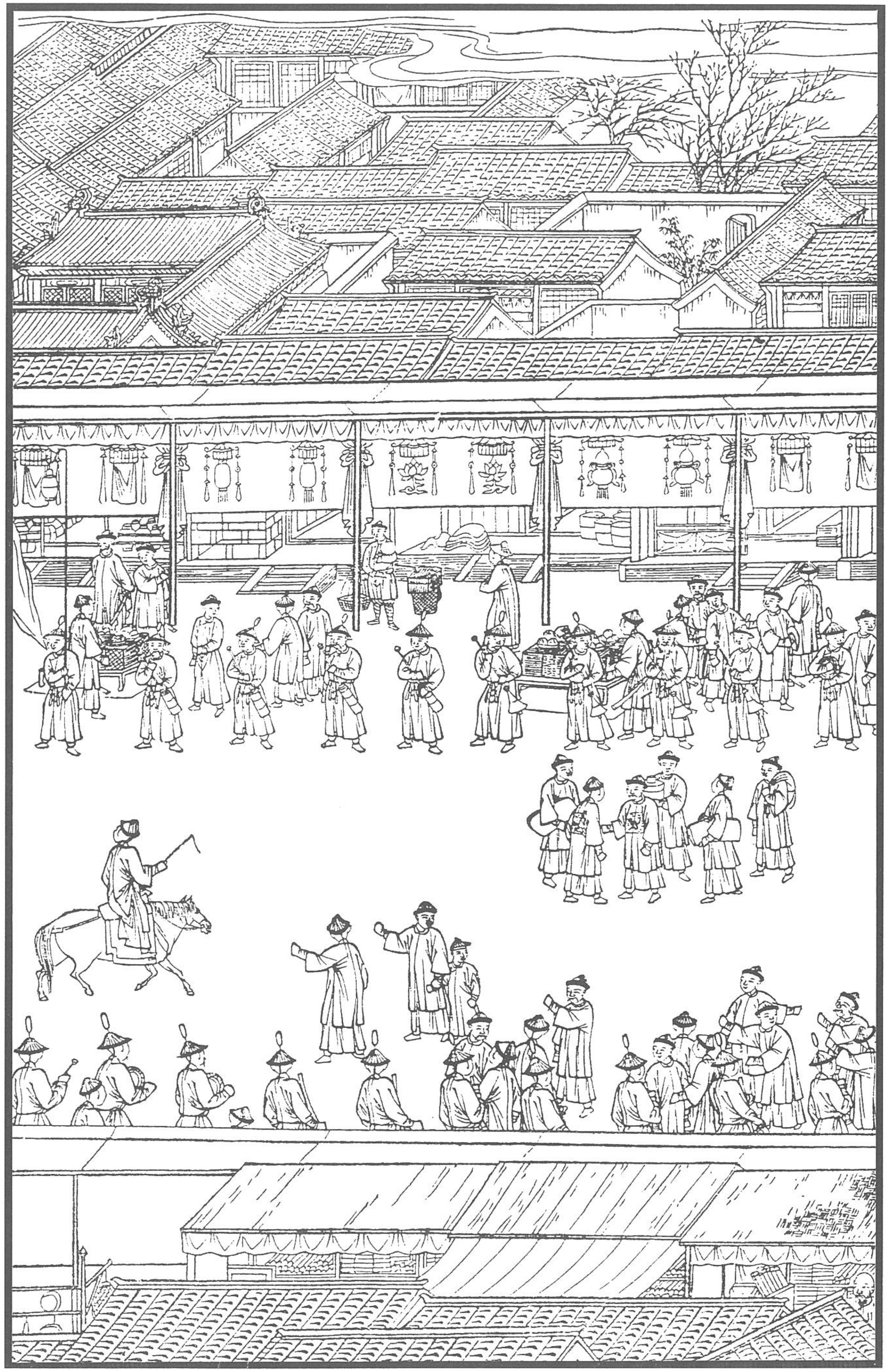


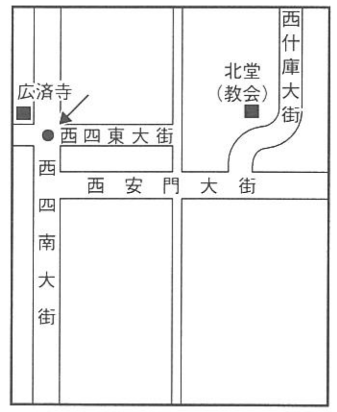


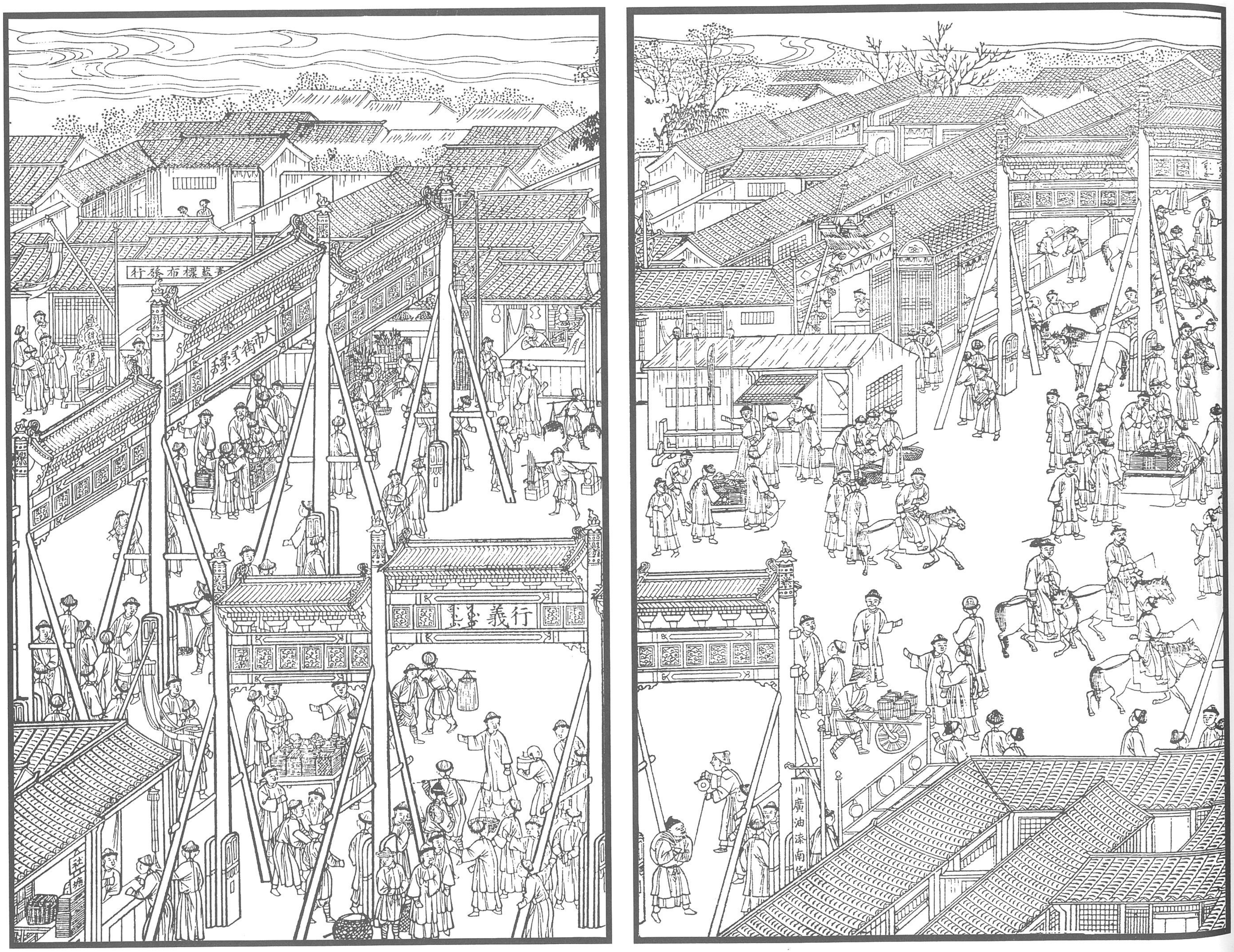


道はここで北に向けて右折して、大市街を新街口まで一気に北上する。太鼓を抱えた儀仗兵が並び、歓迎の人波はますます多くなっている。

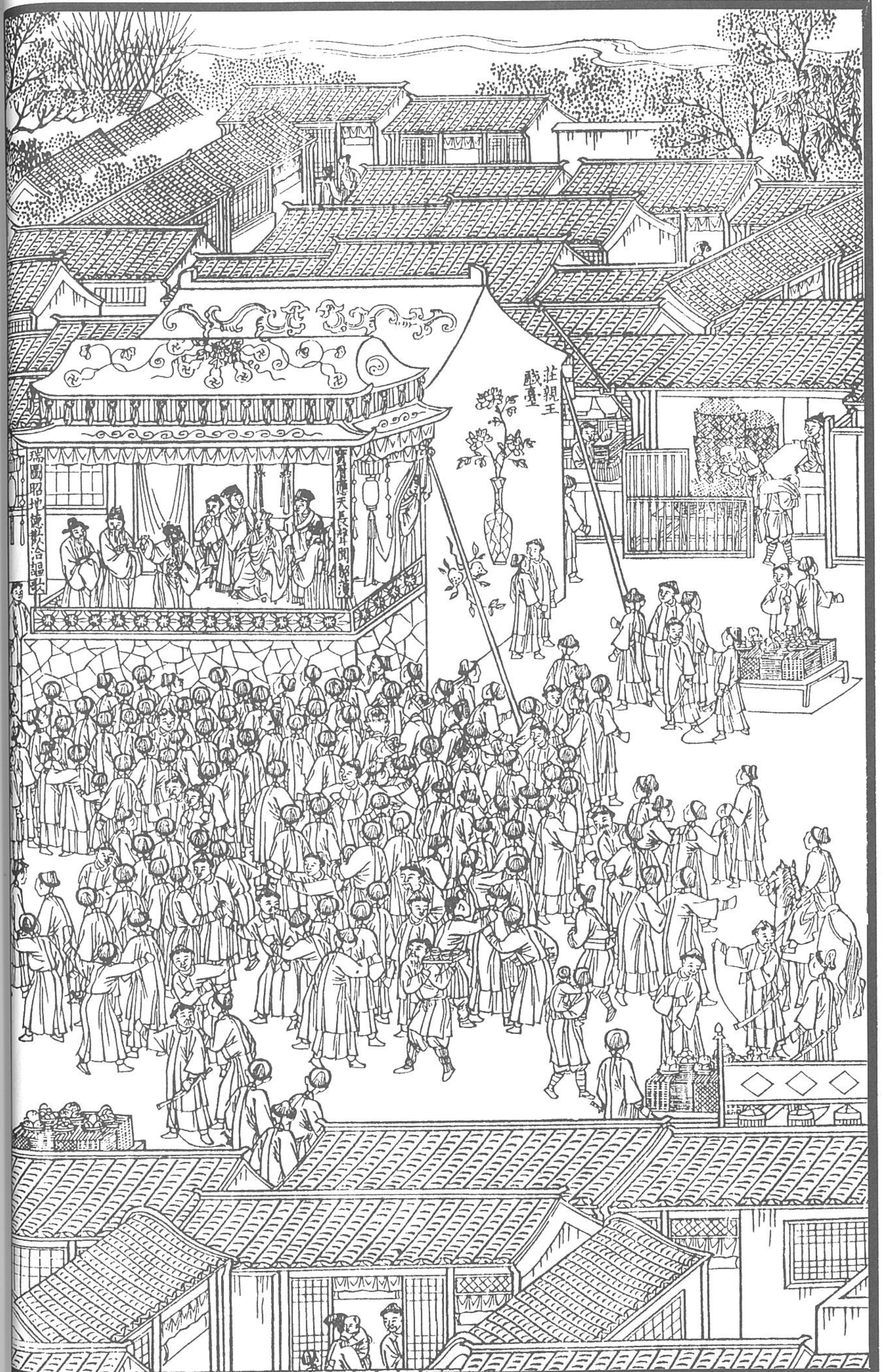

行
川廣藥
大市街

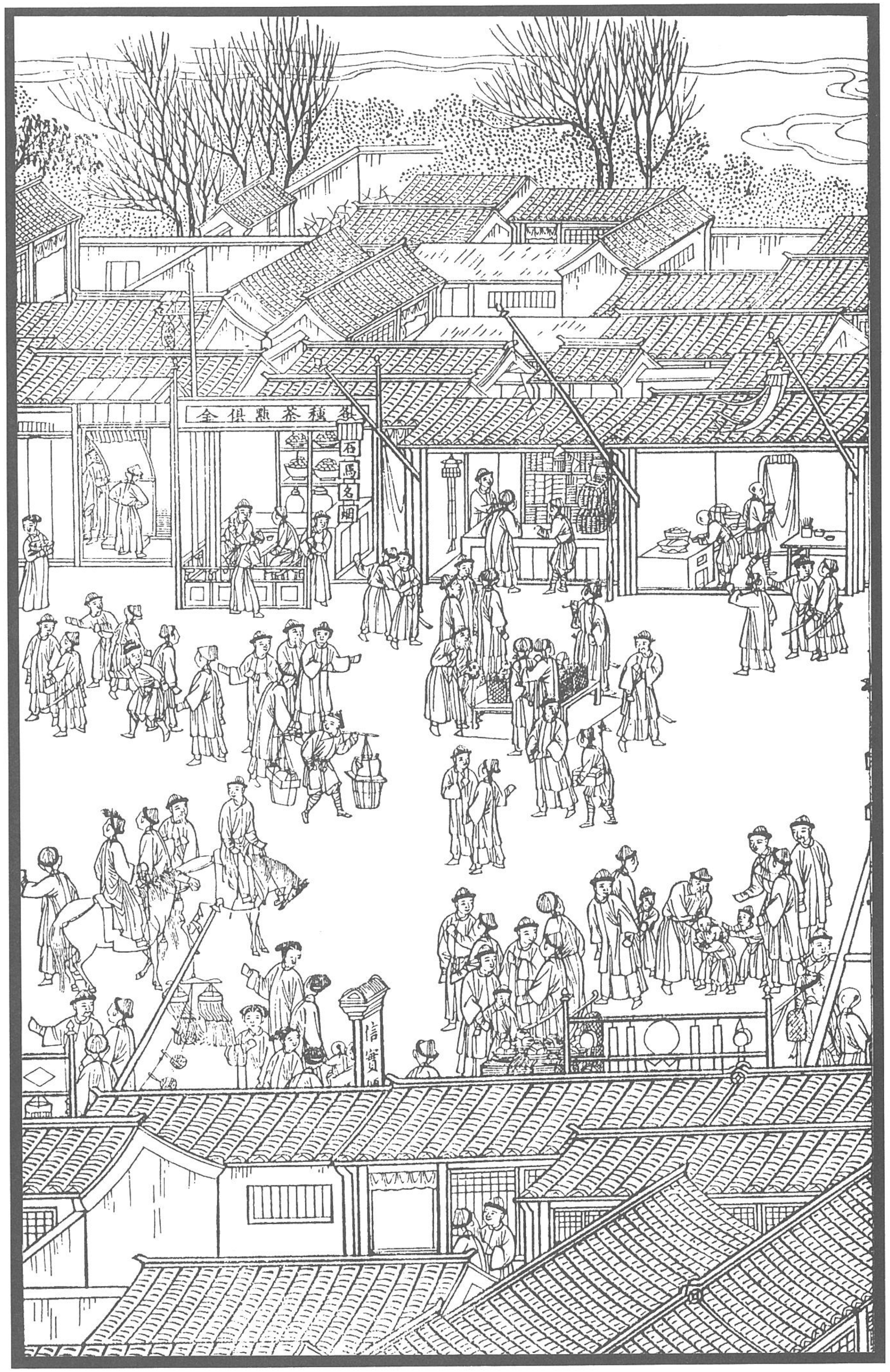



西什庫大街
北堂
(教会)
広済寺
西四東大街
西安門大街
西四南大街



牌楼は「西四牌楼」で、中央の字は「大市街」「行義」と書かれている。この十字路を西に行けば阜成門となる。

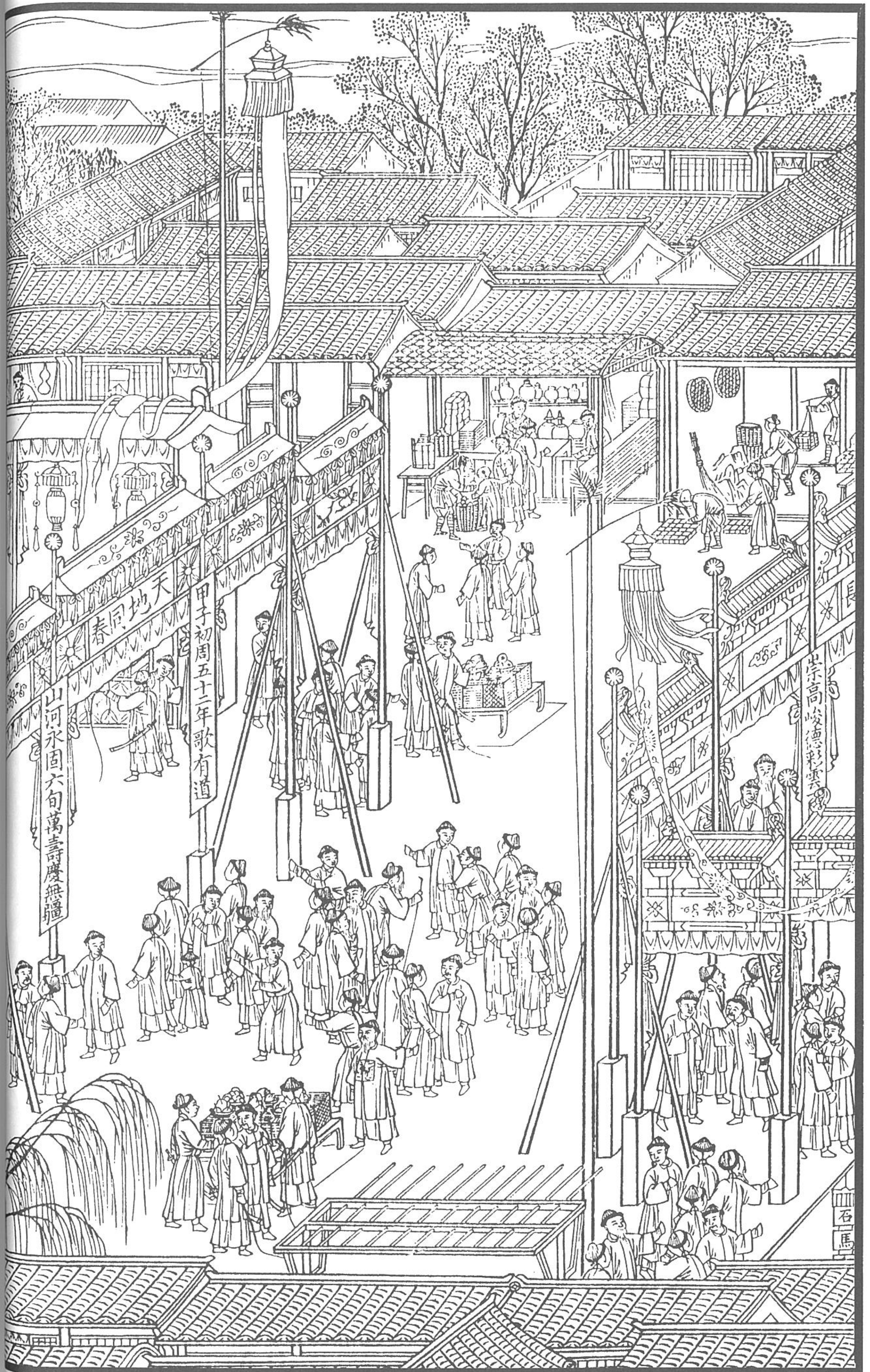

莊親王戲臺

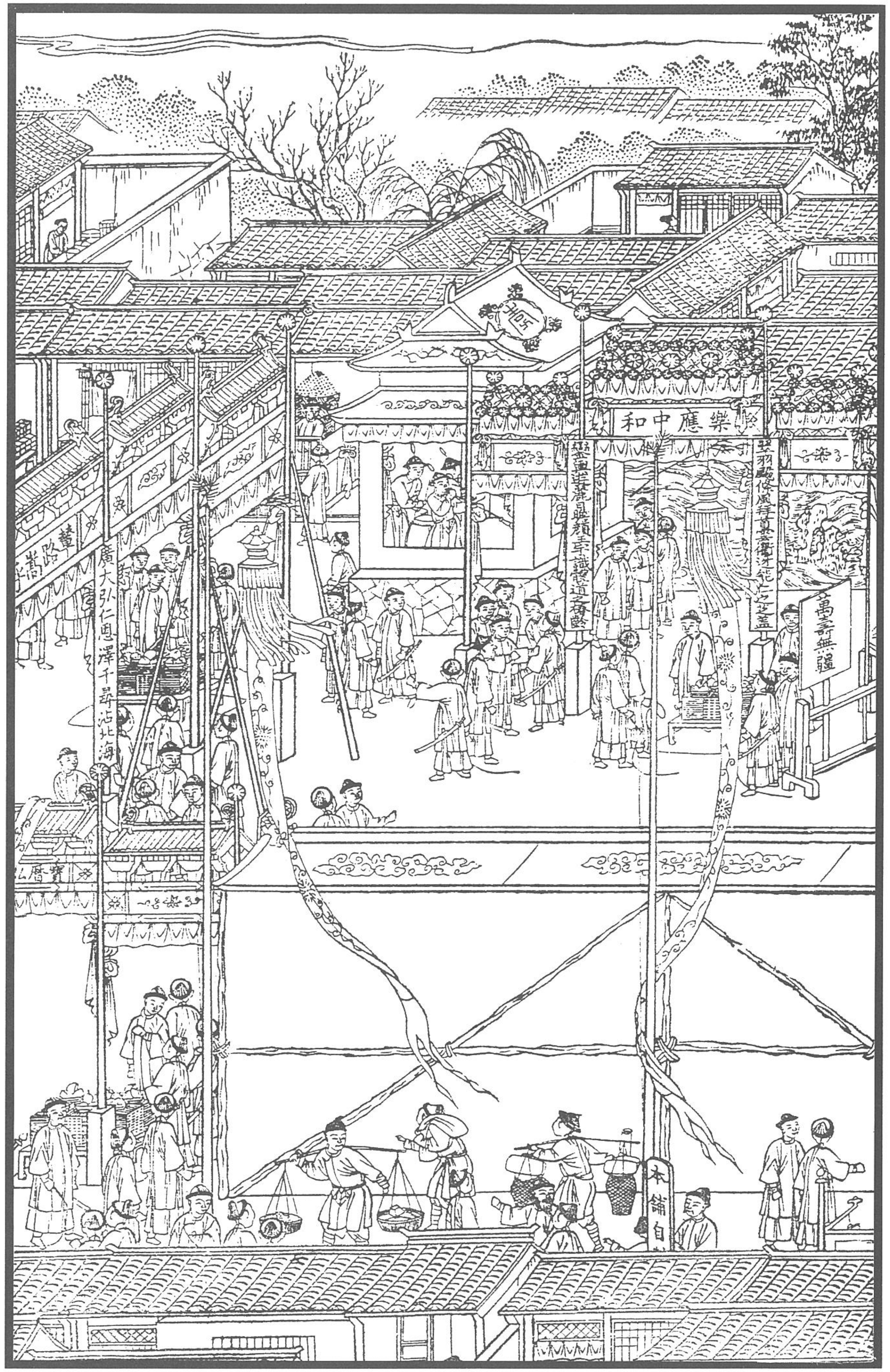

各種茶點俱全

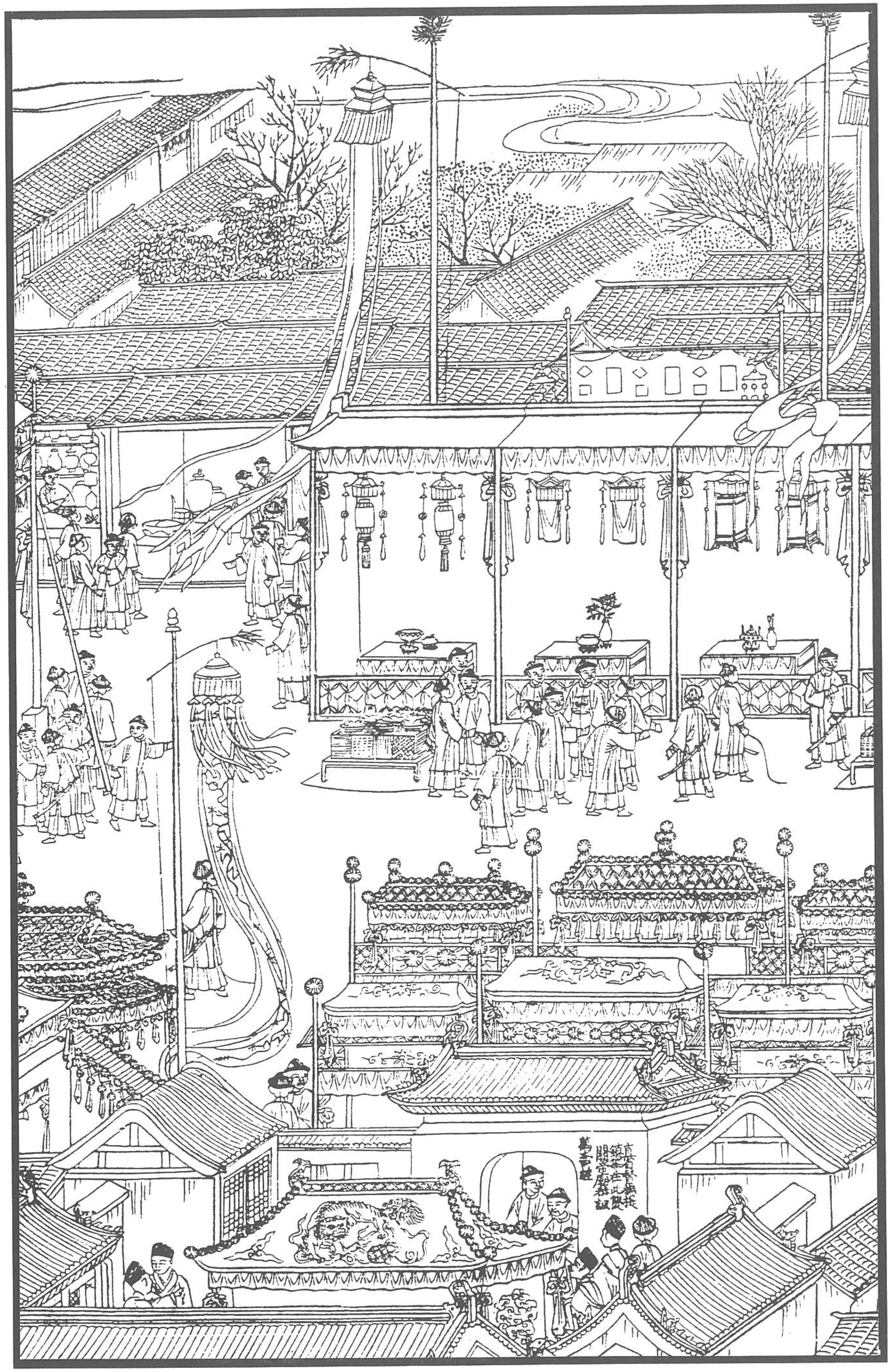


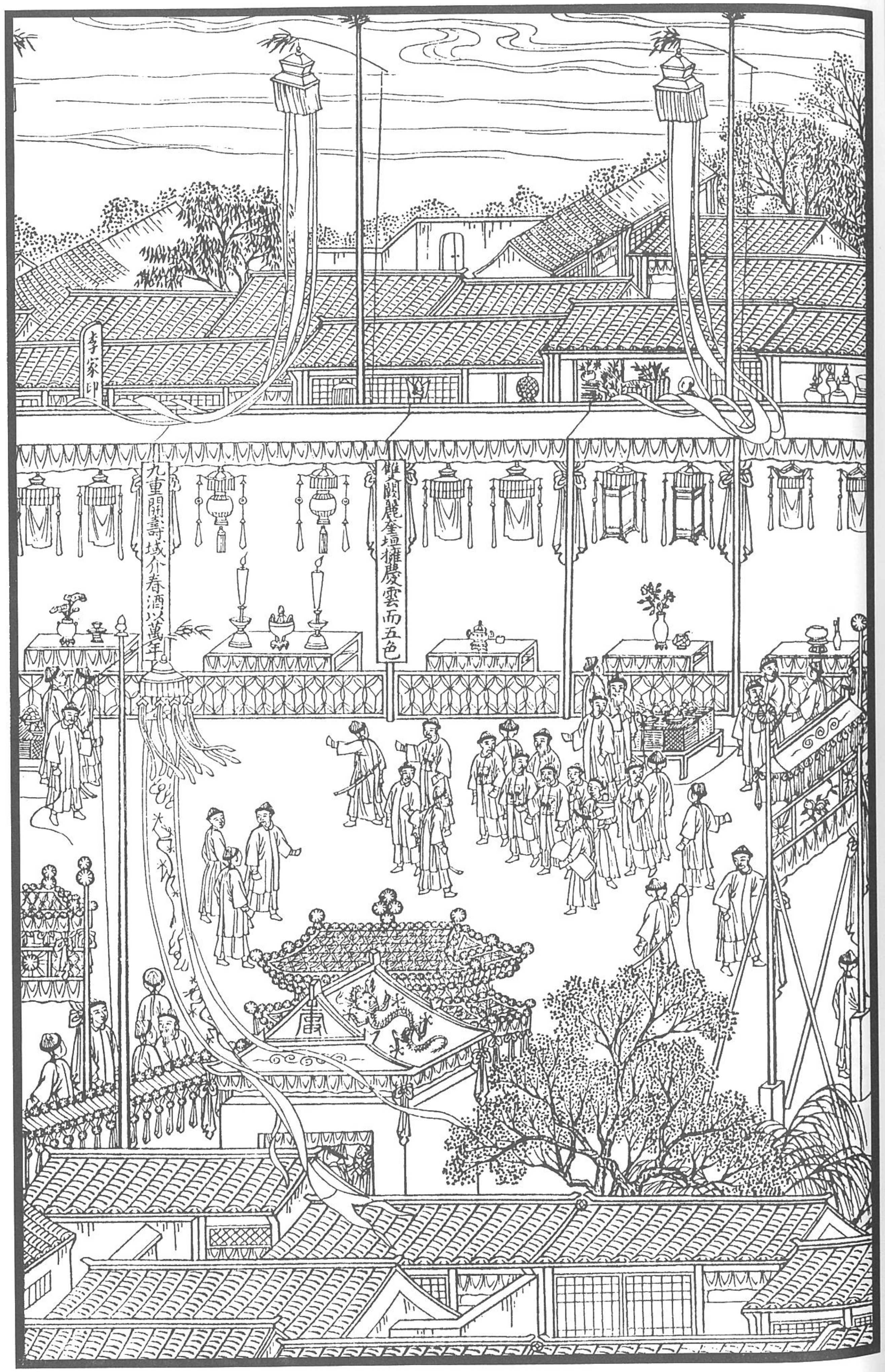


右端は食べ物を商う店で、形で業態を示す「幌子」が翻っている。店の入口には大きな竈が見え、中の部屋に向かう人物は手に碗のようなものを捧げ、次の部屋との間は仕切りが垂れている。

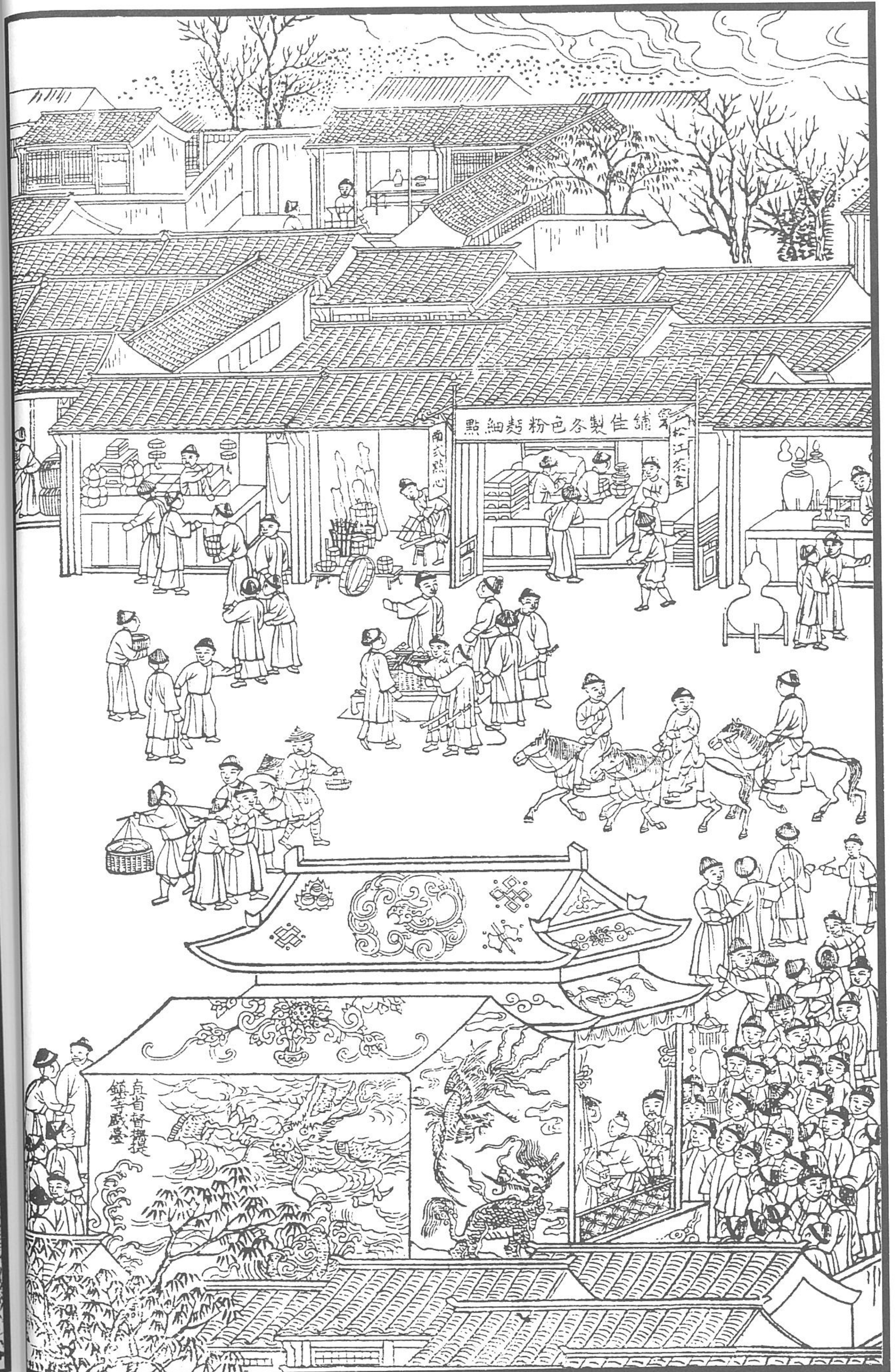

天地同春
山河永固六旬萬壽慶無疆
甲子初周五十二年歌有道


樂應中和
萬壽無疆



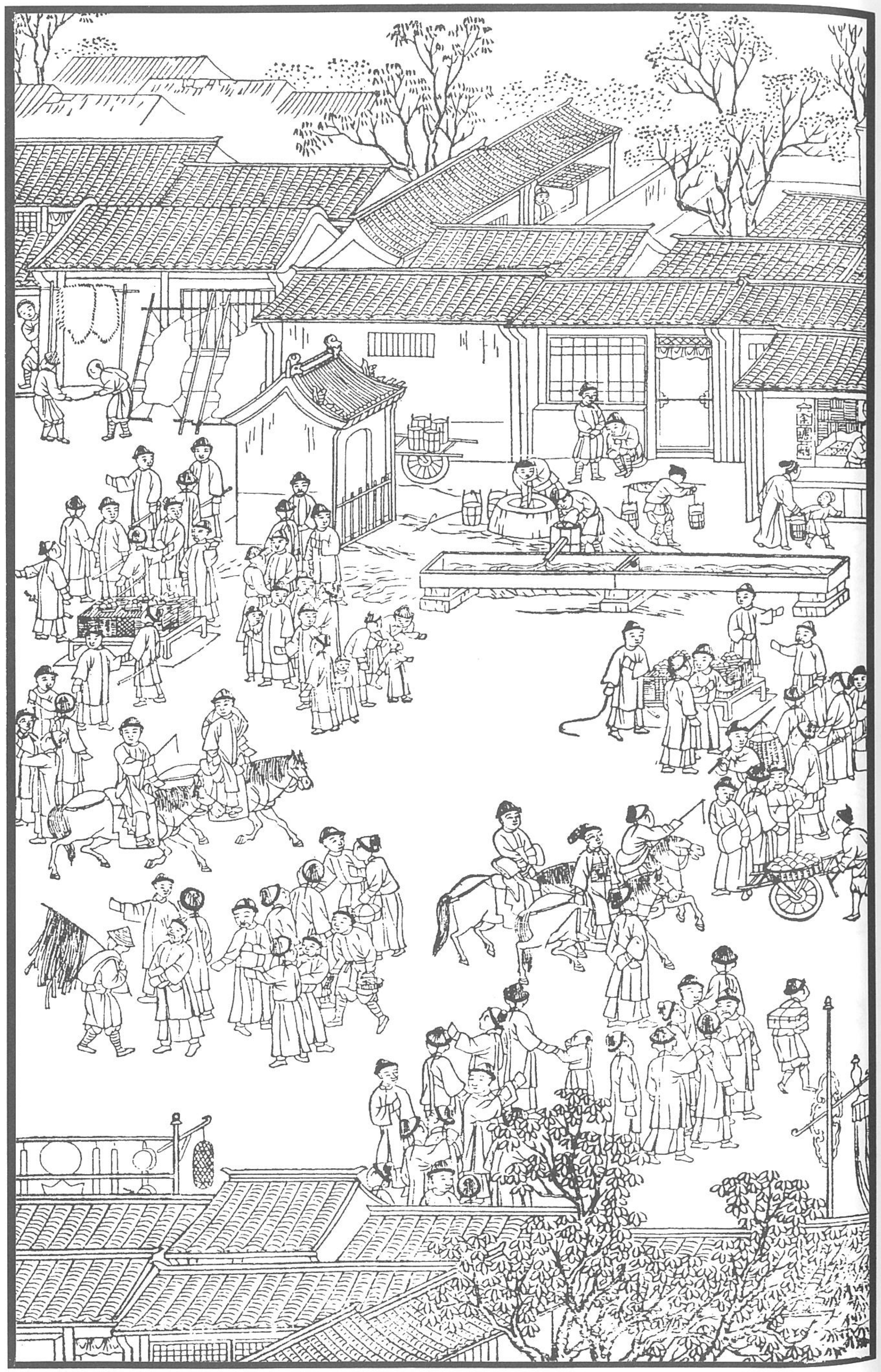


左手前には「関帝廟」があり、その対面には灯篭や絹の廊下の飾り付けがされている。九つ設置された祭壇には、香炉と吉祥物が備えてある。

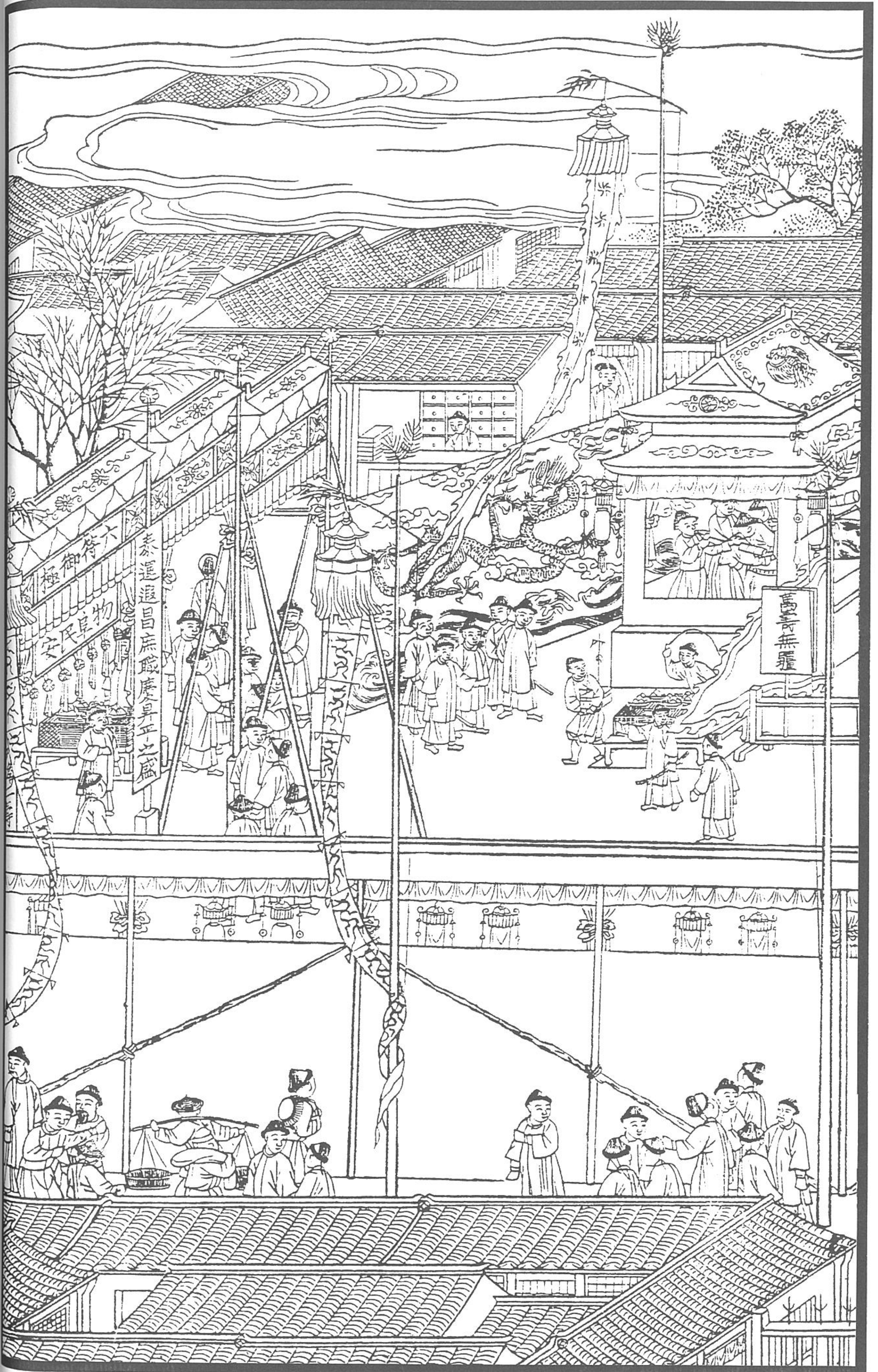

舖佳製各色粉麪細點
南式點心
松江茶食

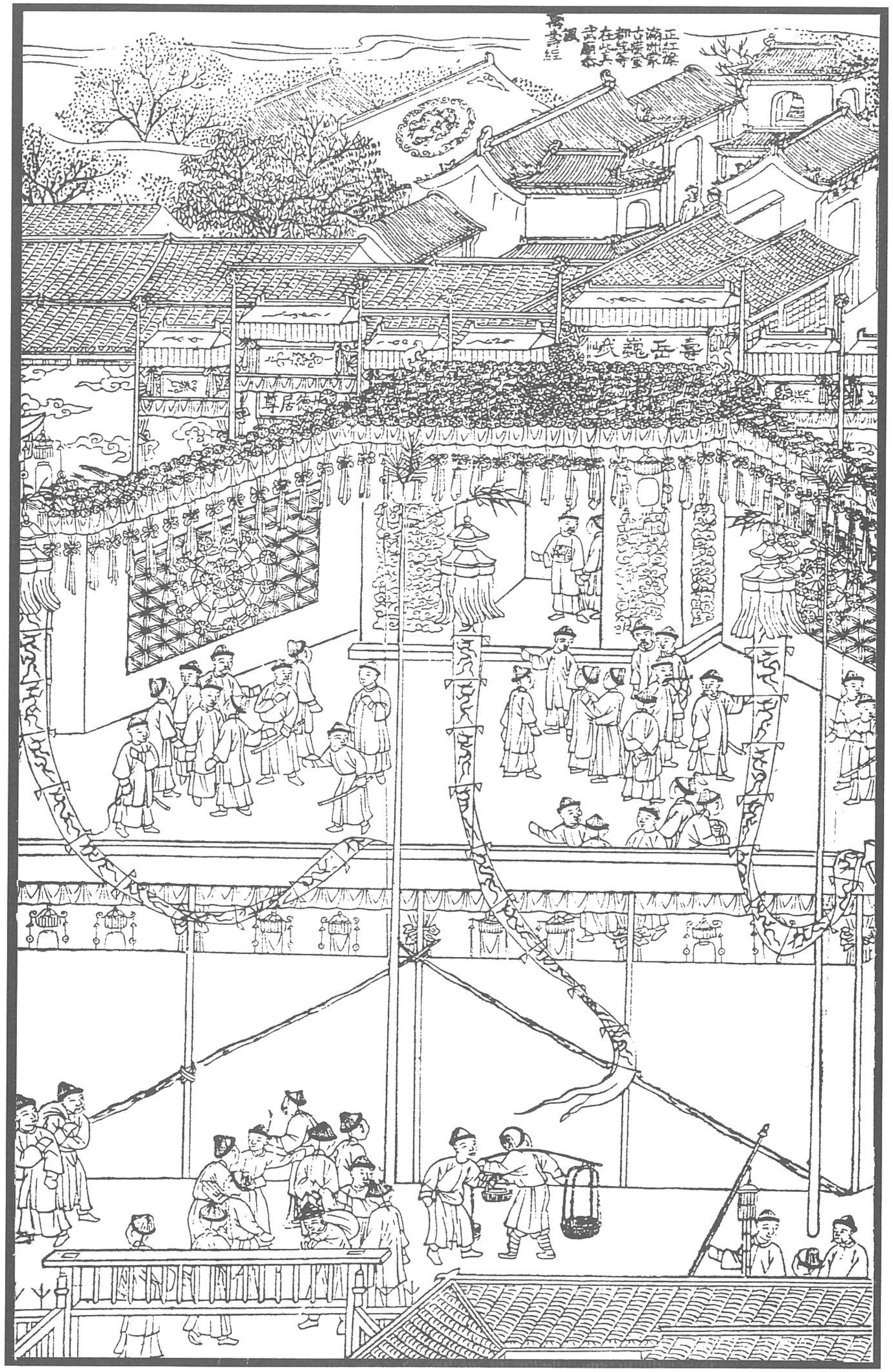

河山永固
寶曆呈祥春麗一天花雨
金輪煥彩晨趨萬國衣冠





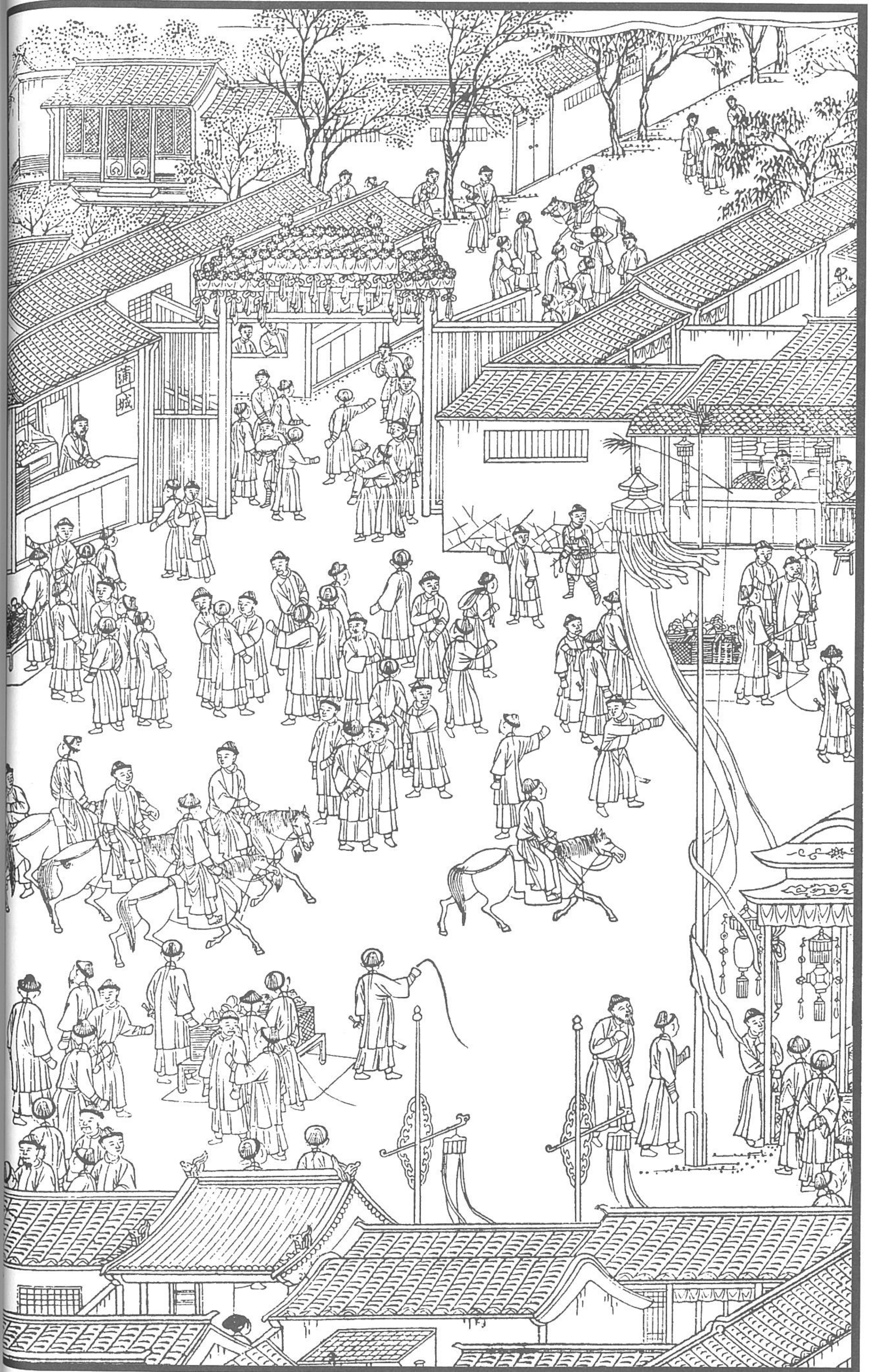
小さな店が並ぶなかに井戸が見られる。その隣には、動物の皮を剥いで干してある光景が描かれている。道は真っ直ぐ北上し、正面が東の方角になる。


六符御極
物阜民安
萬壽無疆

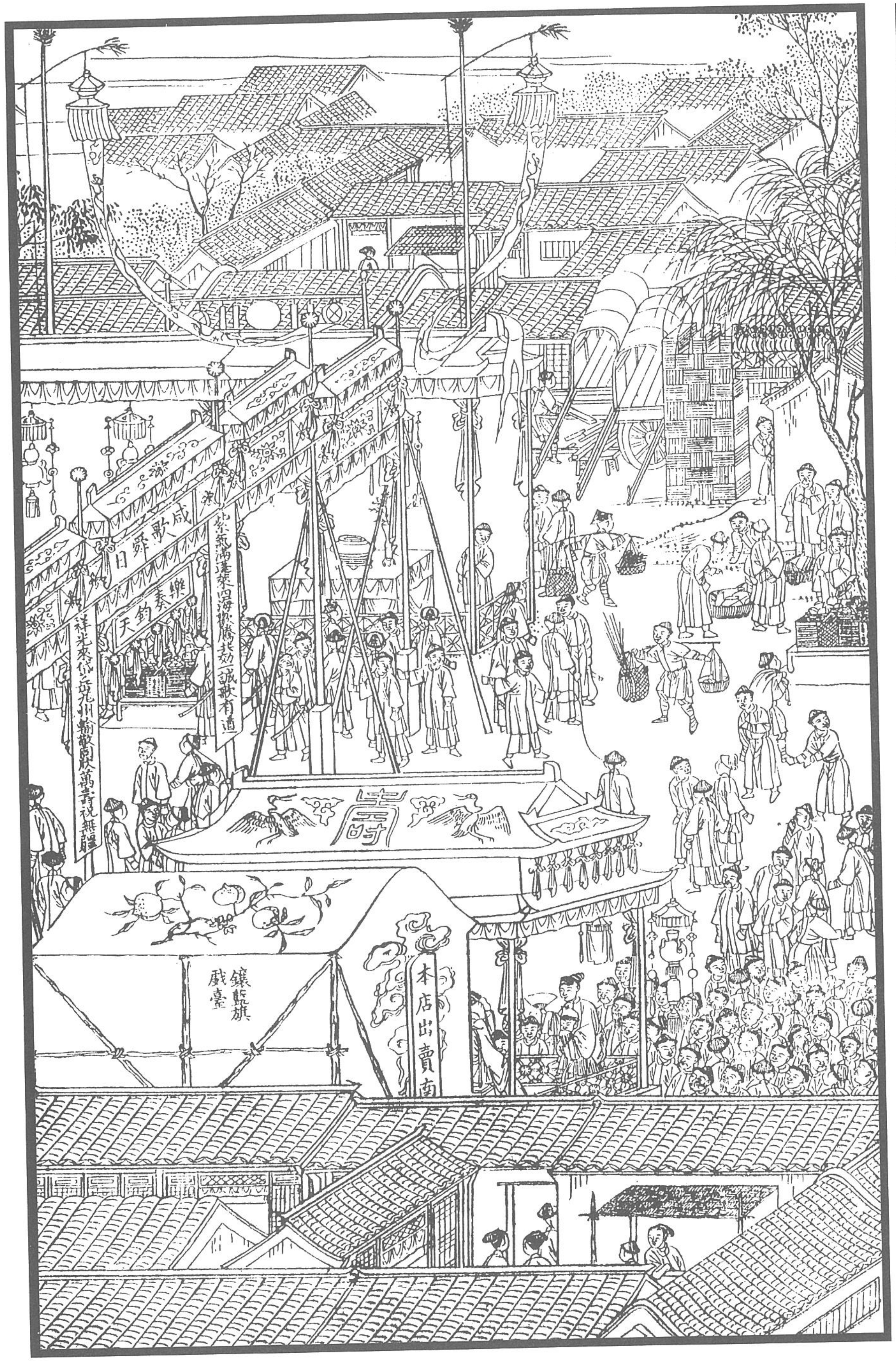




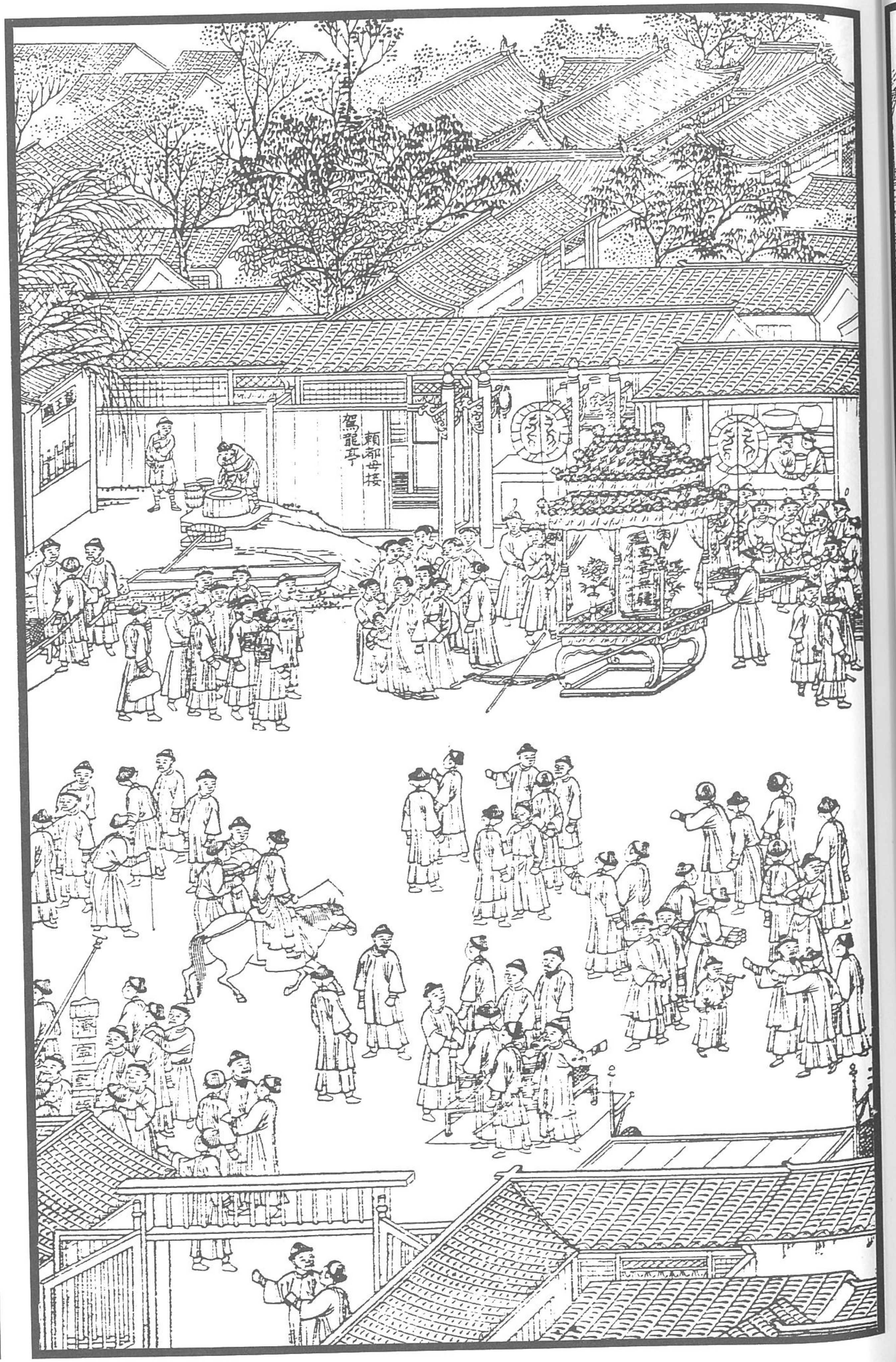
右手奥の「真武廟」では、正紅旗満州蒙古軍都統等が「萬寿経」を読経している。門前の飾り付けはとりわけ豪華になっている。左手の「正紅旗」の戯台には大勢の見物が集まり、「鳳凰」をあしらった吉祥図が描かれている。左側には「酒屋」「八百屋」などが見られる。


蒲
城

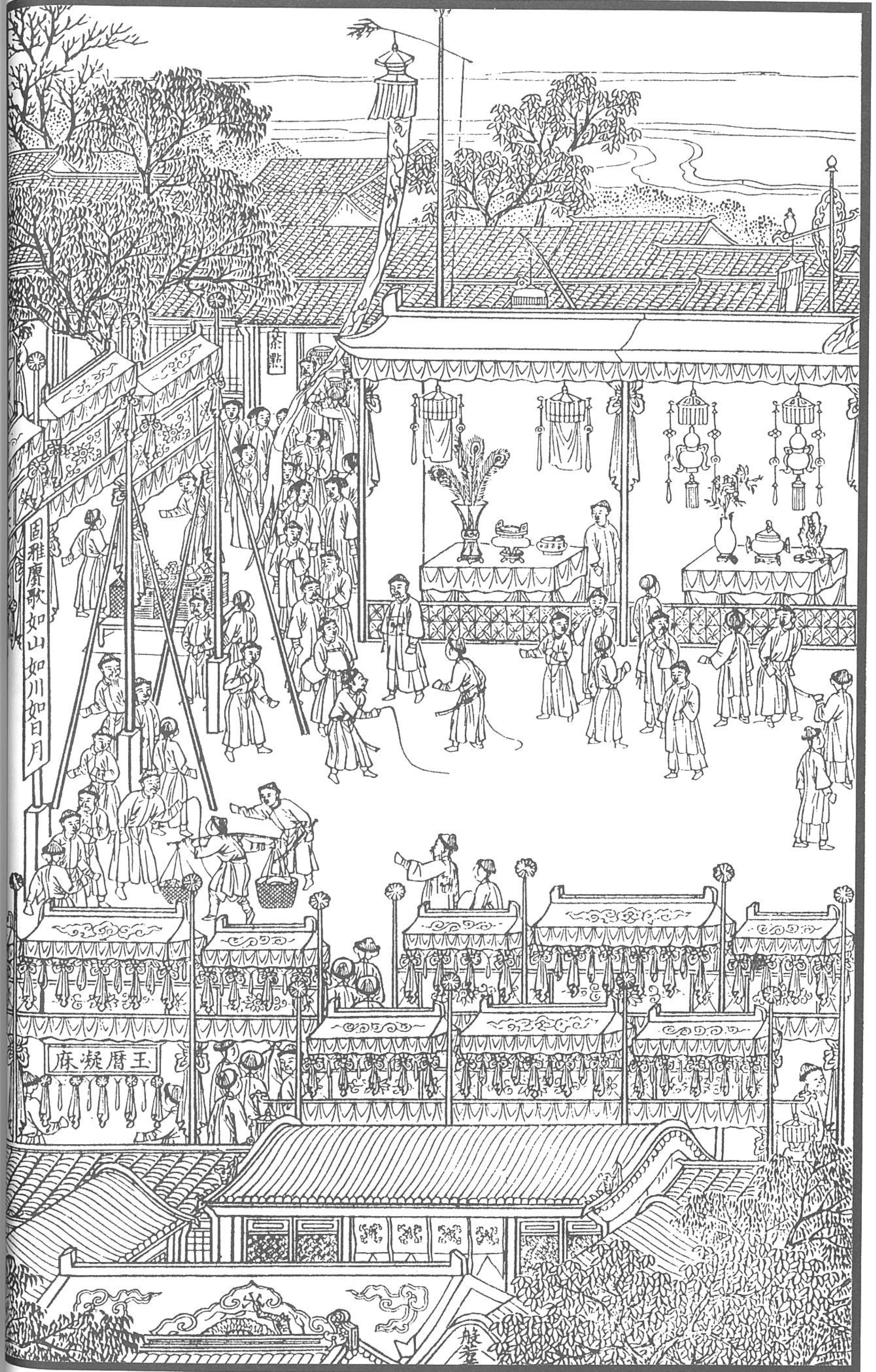

皇圖鞏固
萬壽經
此觀音庵恭國
四牌樓北衆買賣人在

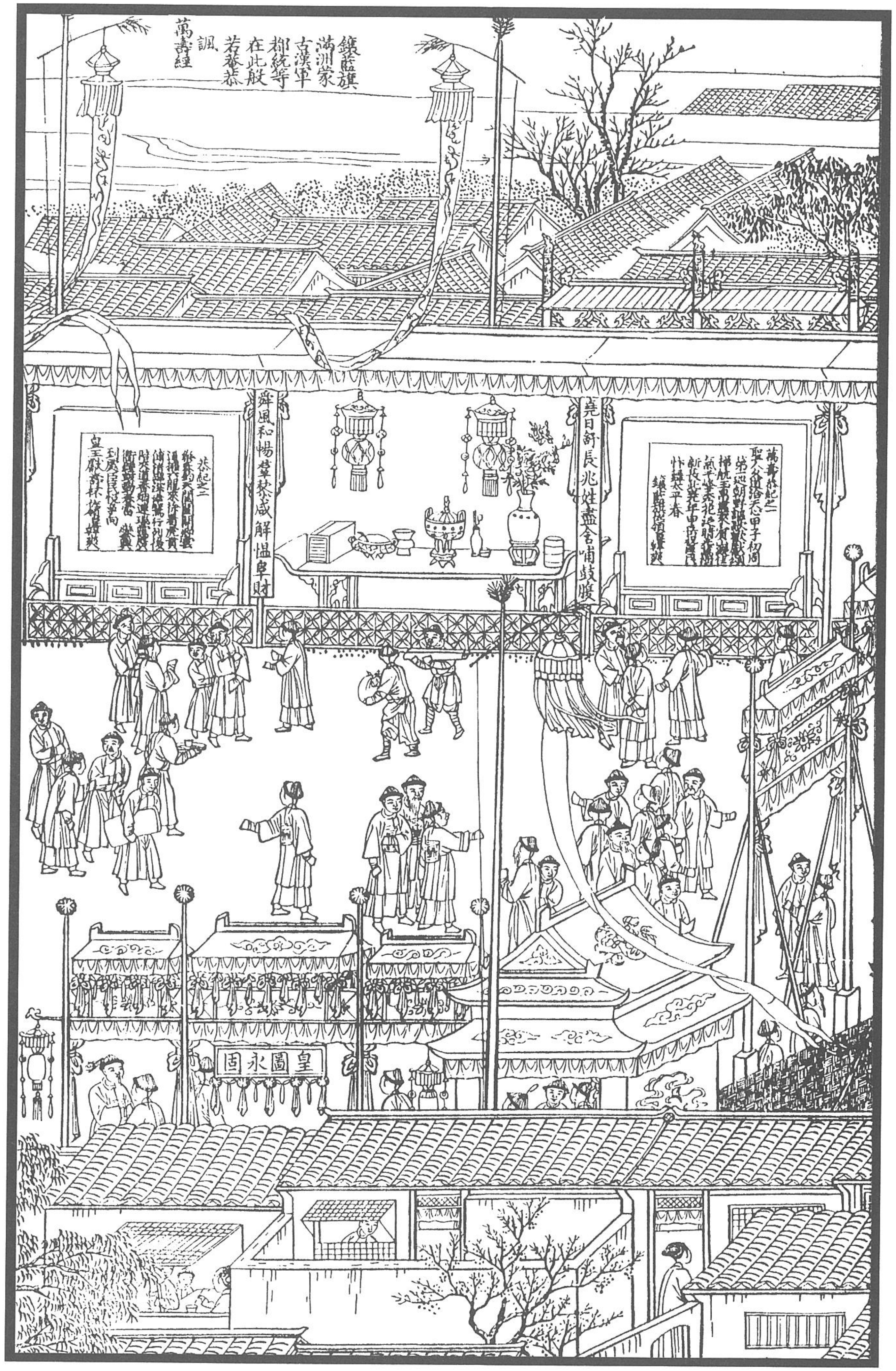


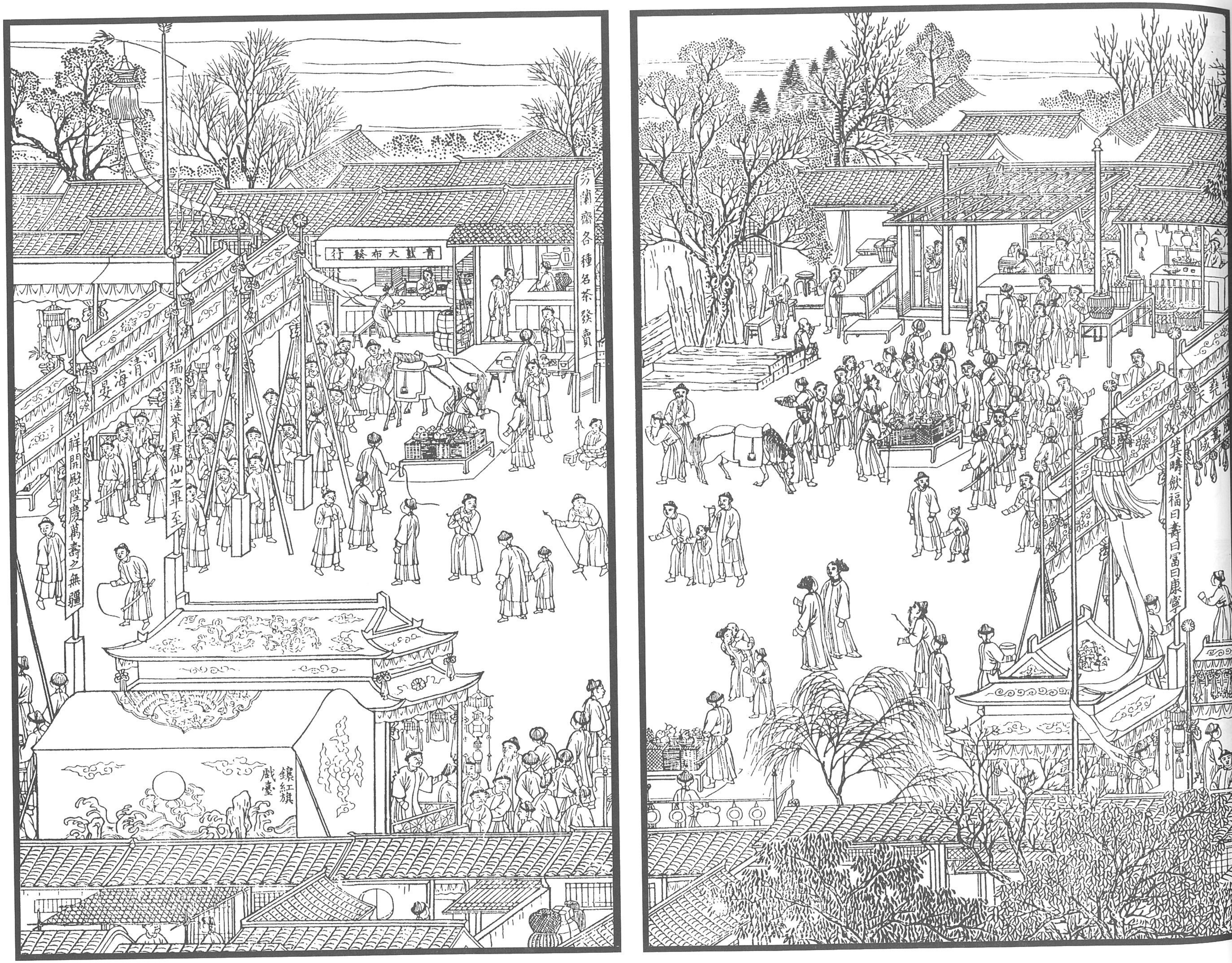
咸歌舜日
樂奏鈞天
鑲藍旗
戲臺
本店出賣南



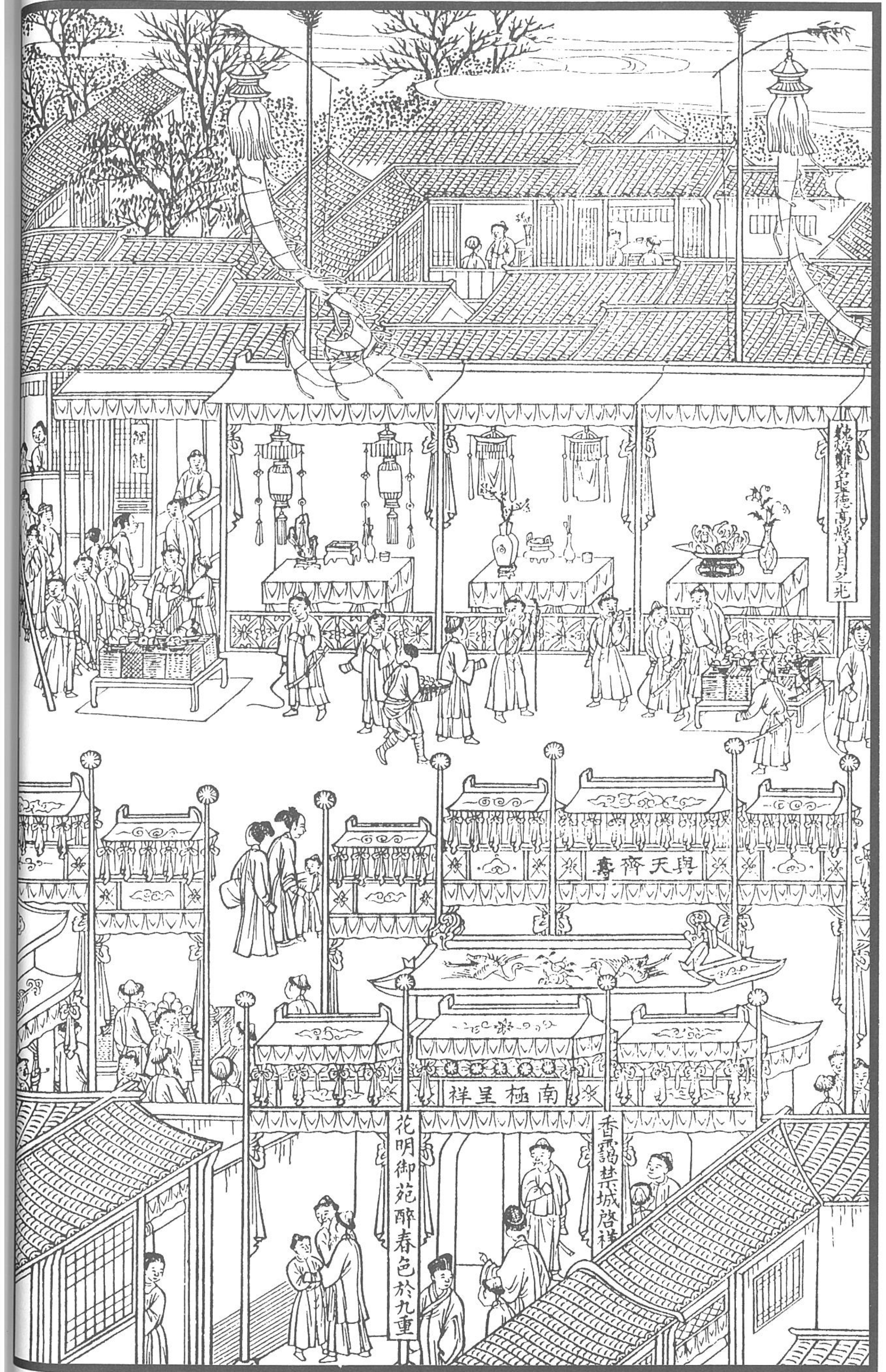
駕龍亭


固雅賡歌如山如川如日月
王曆凝庥

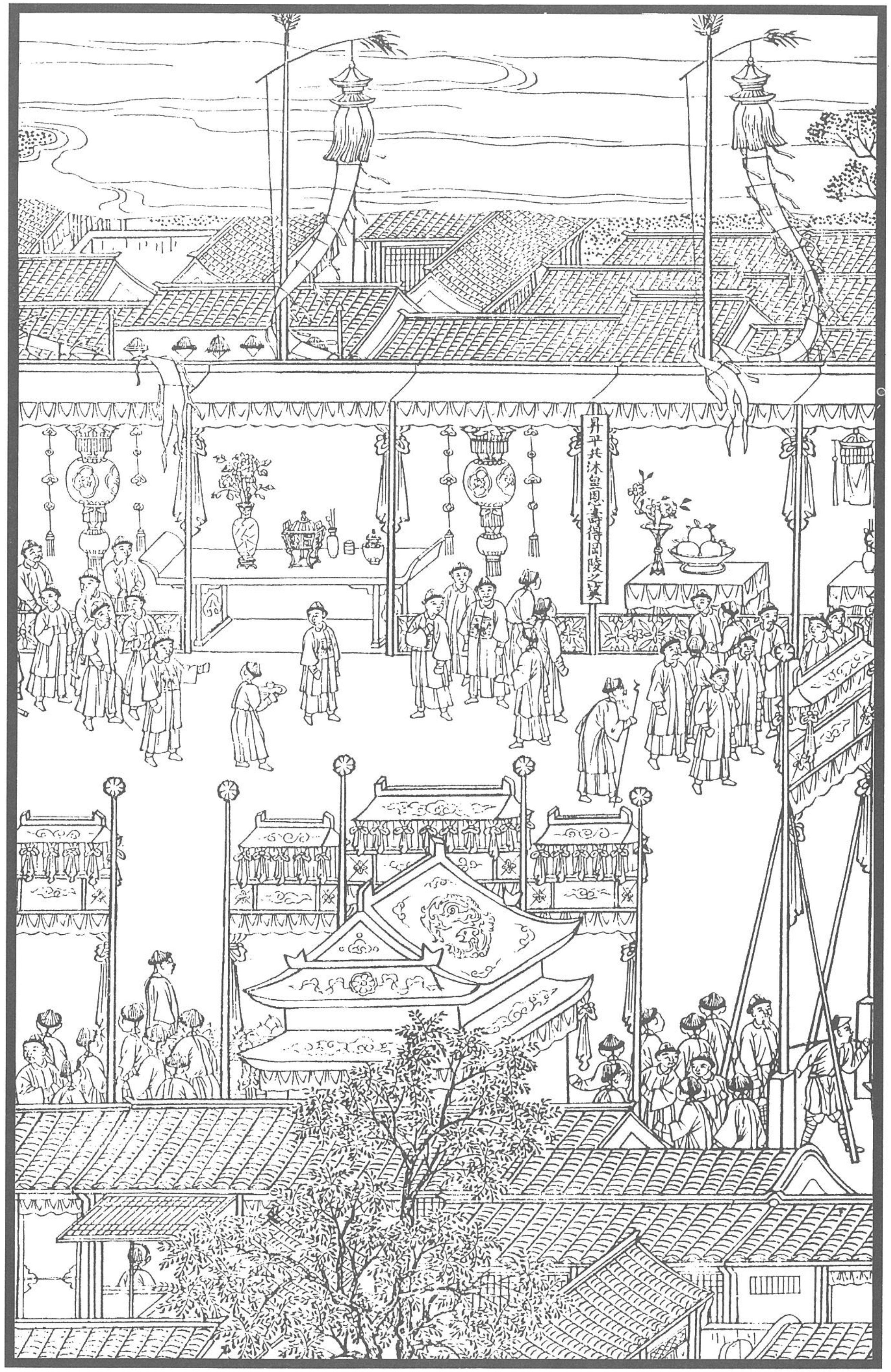

鑲藍旗滿洲蒙古漢軍都統等在此敬若恭
諷
萬壽經
舜風和暢草木咸解慍阜財
堯日舒長兆姓盡含哺鼓腹
皇圖永固



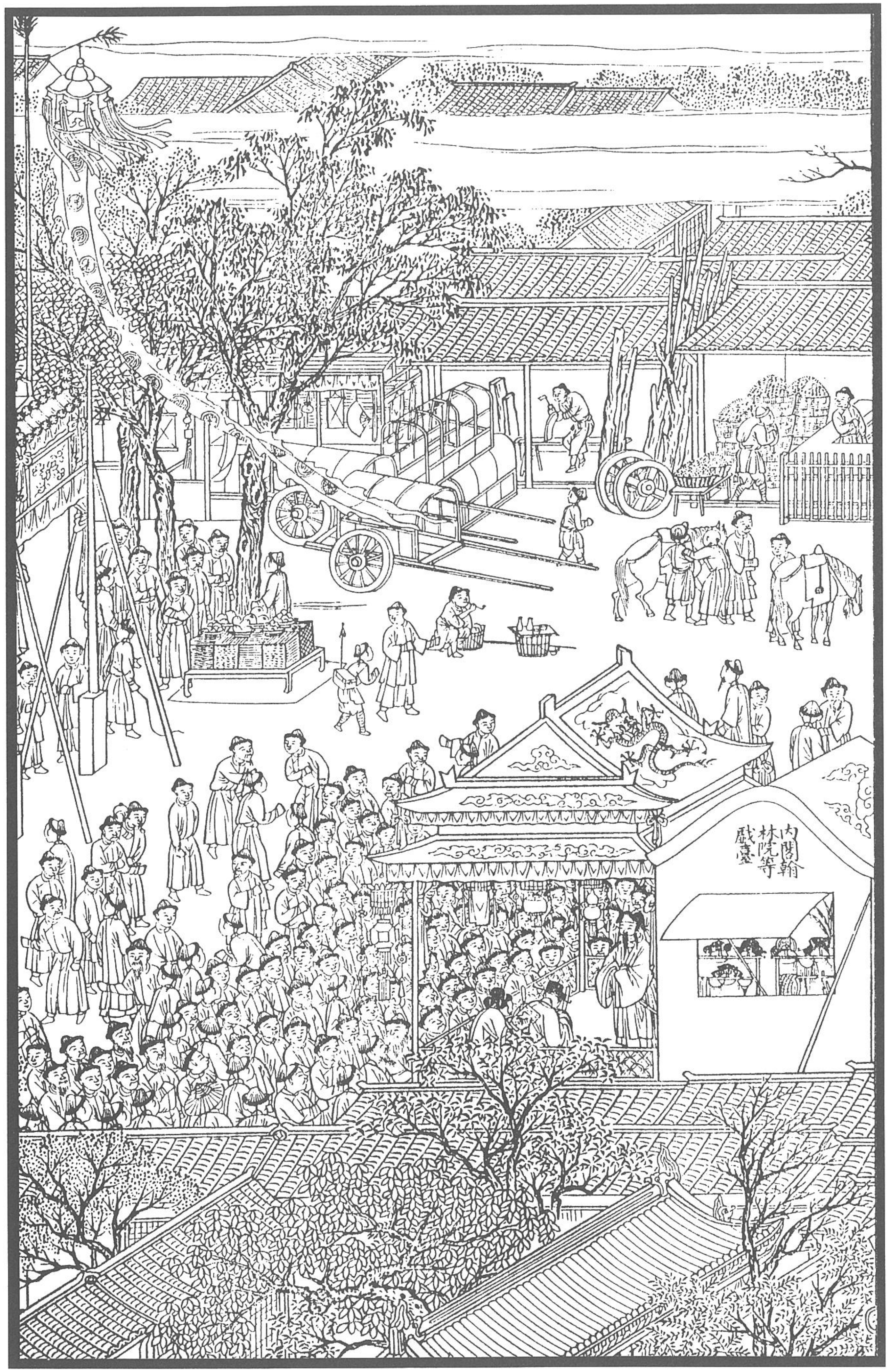
右側には皇帝を称える「萬寿恭記」が「綵棚」に大きく張り出されている。

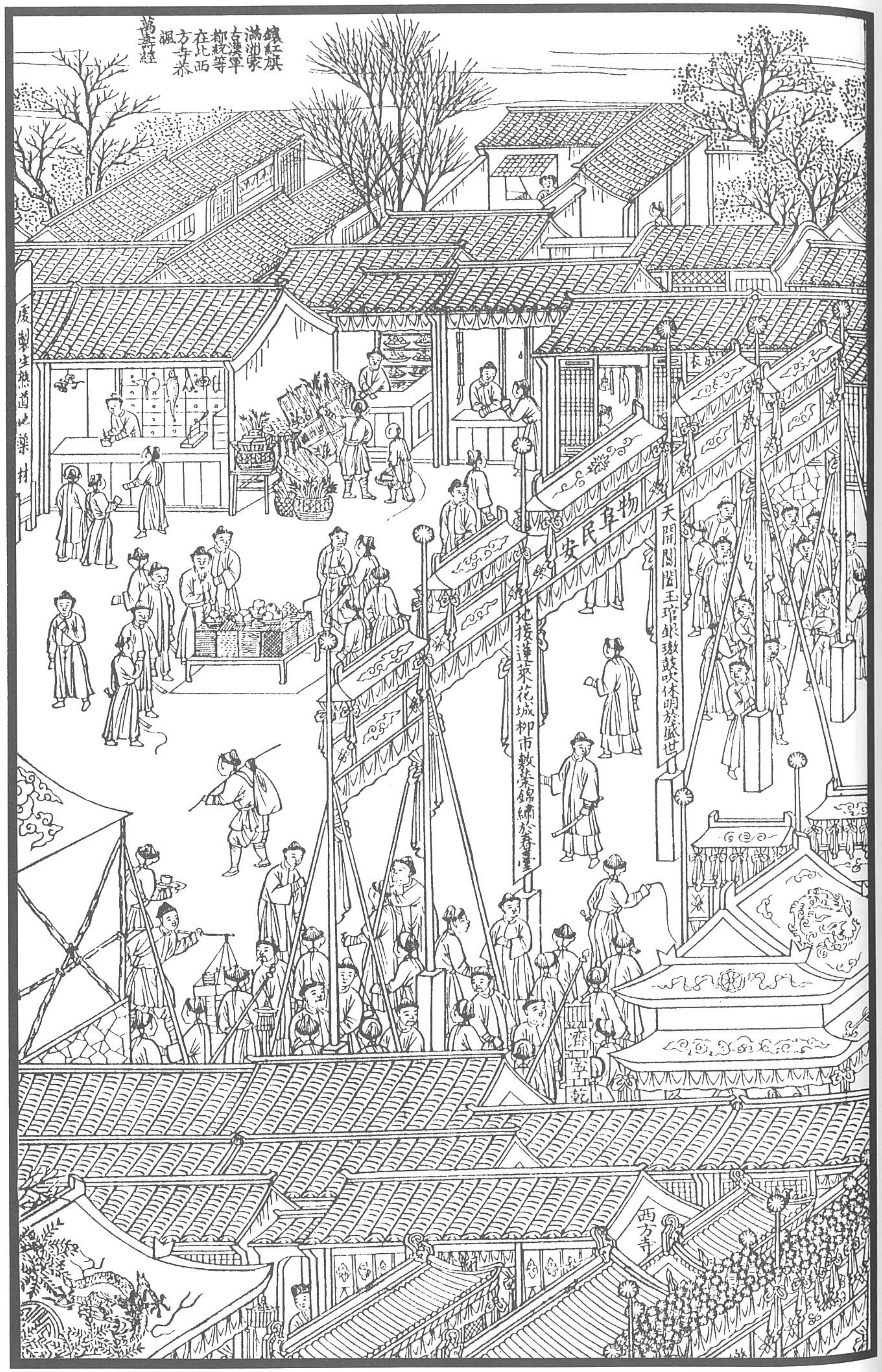


與天齊壽
南極呈祥
花明御苑醉春色於九重
香靄禁城啓

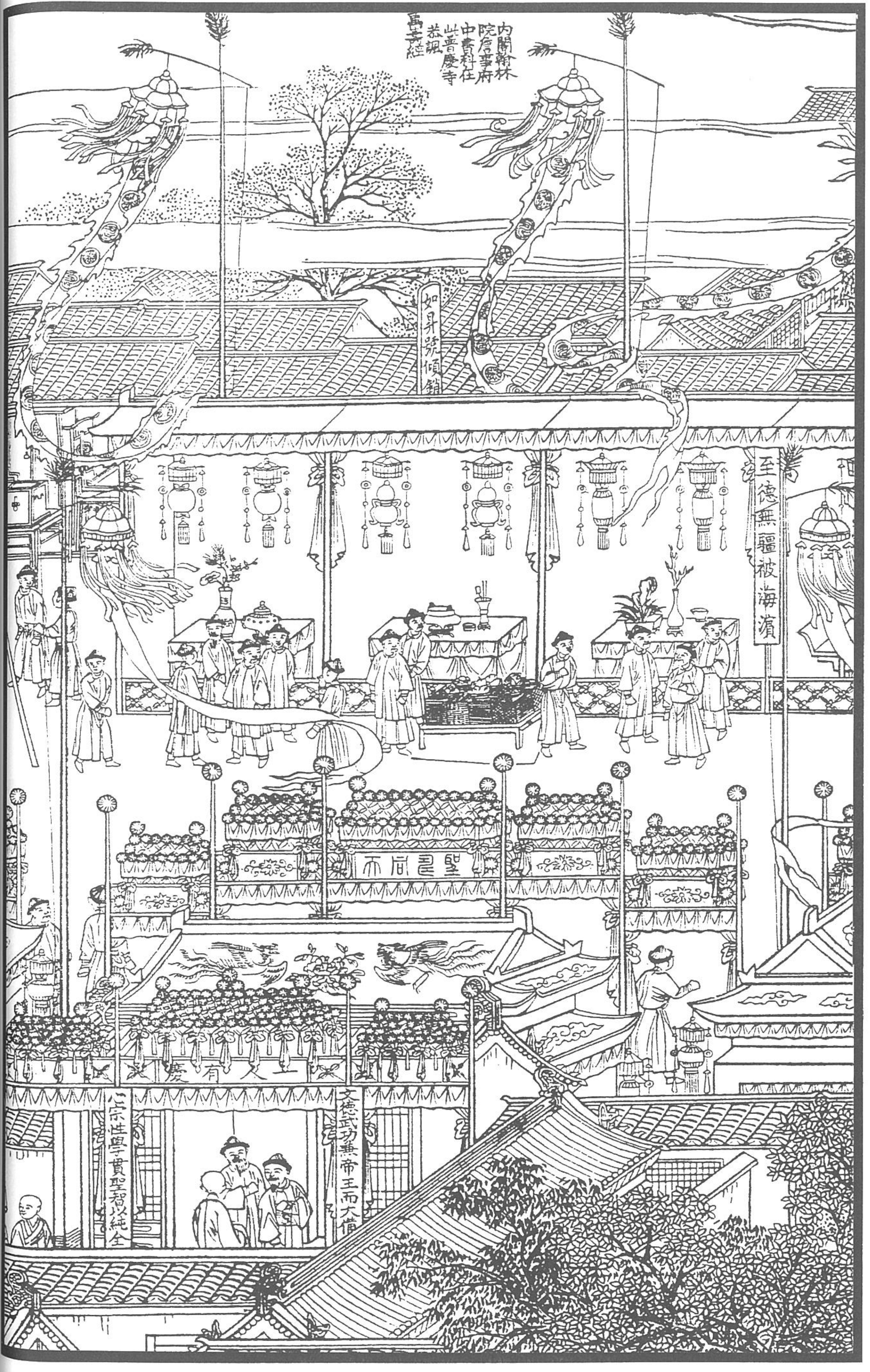


昇平共沐皇恩壽得岡陵之算

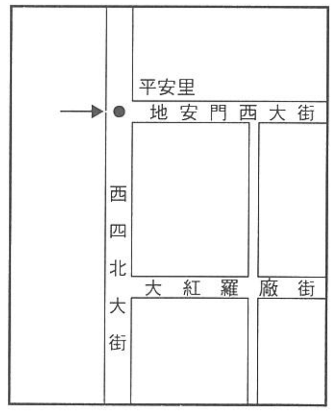


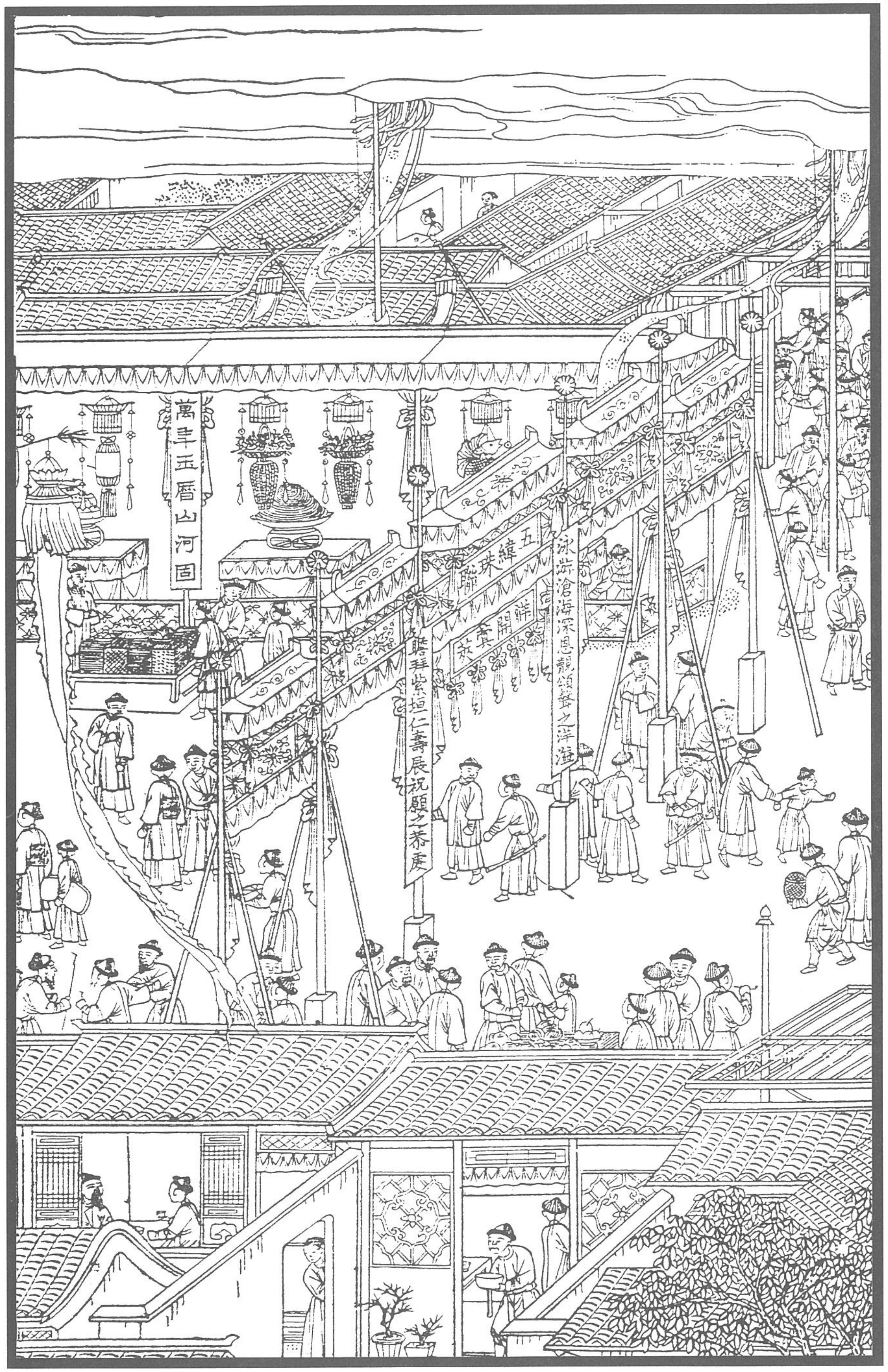


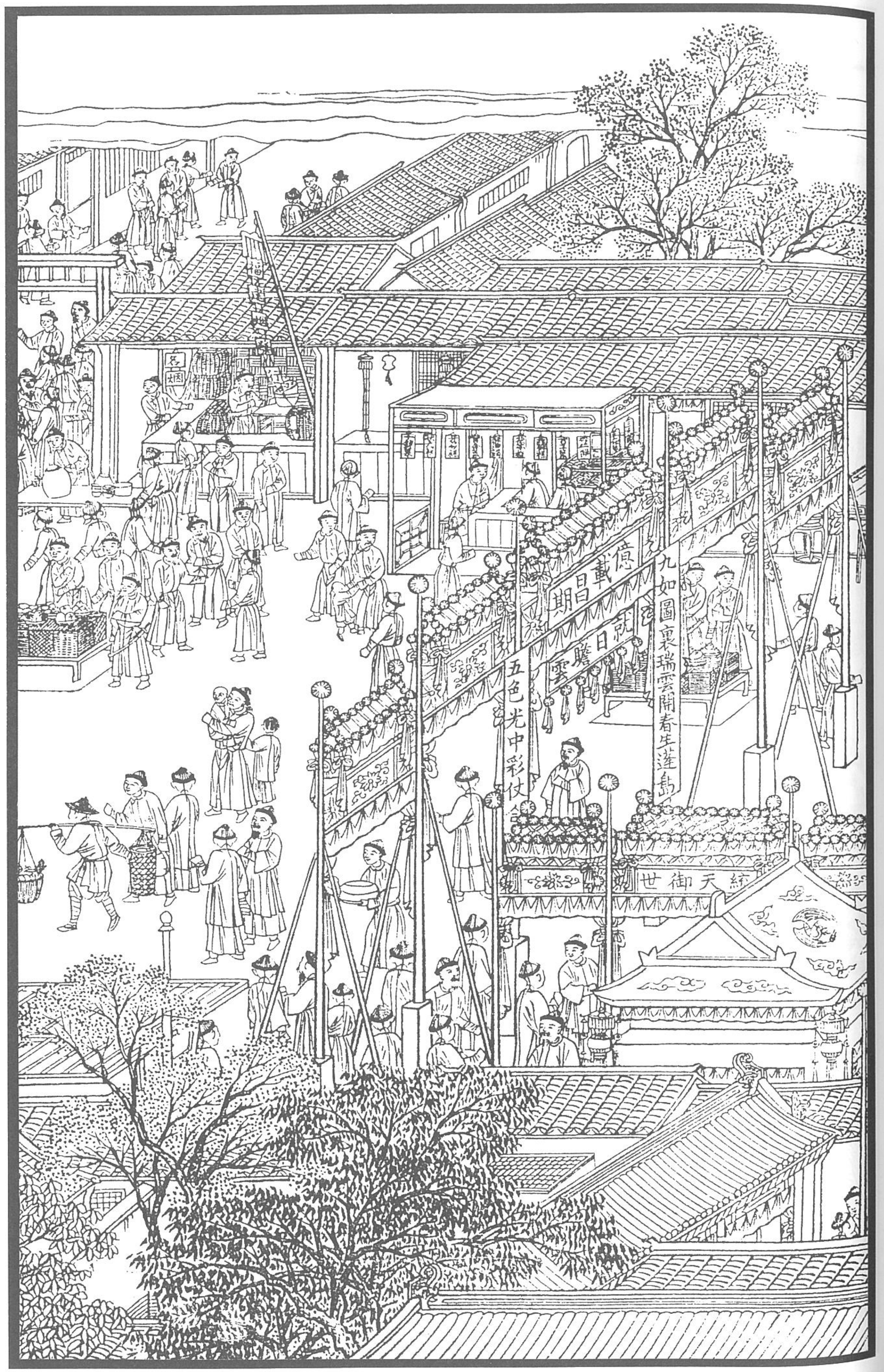
左手前の内閣翰林院戯台等では、楽屋にならべられた俳優の被り物が覗いている。


內閣翰林
院詹事府
中書科在
此普慶寺
恭祝
萬壽經
至德無疆被海濱

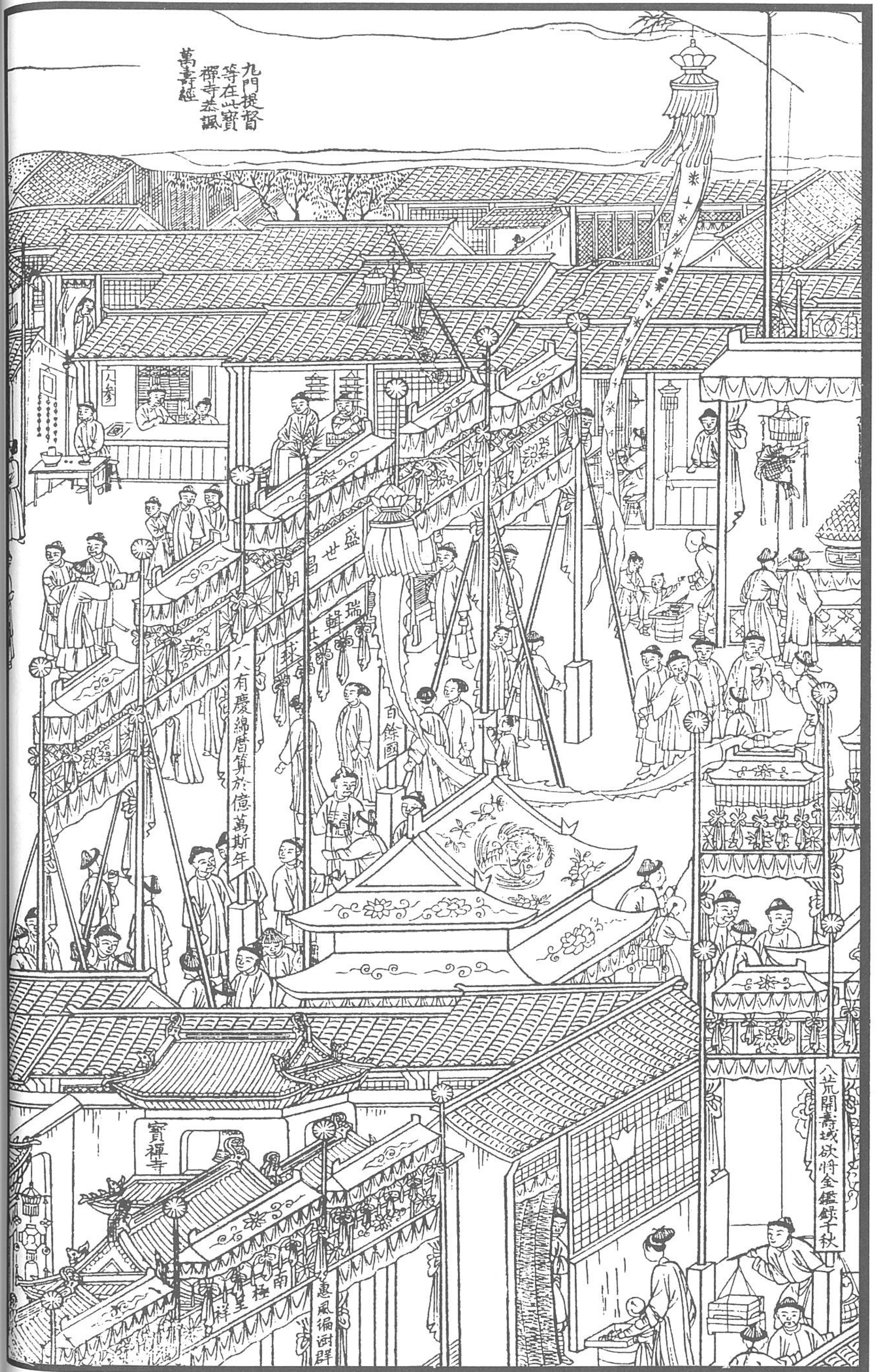

深仁有道開文運
光被四表

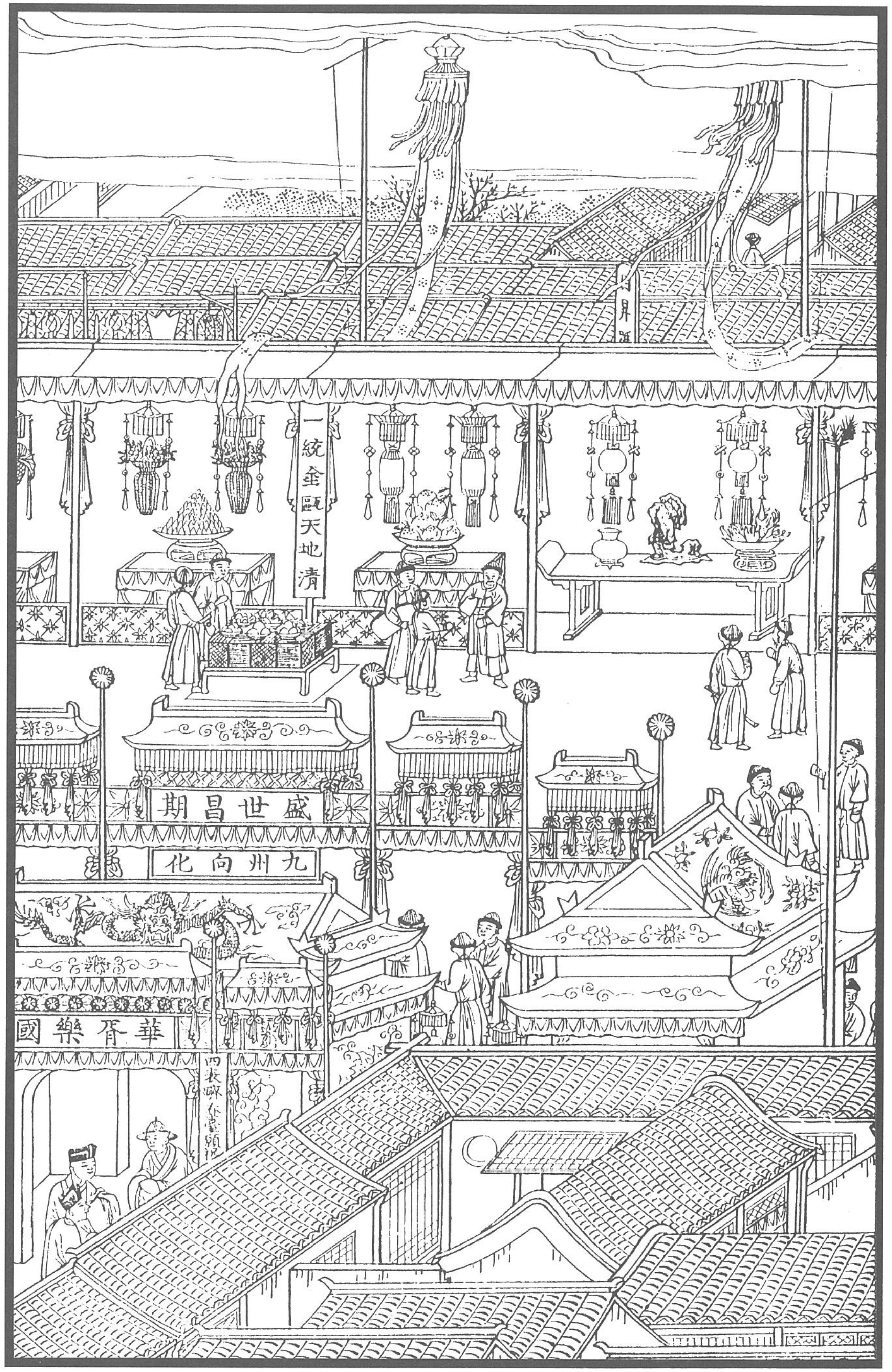

平安里
地安門西大街
西四北大街
大紅羅廠街

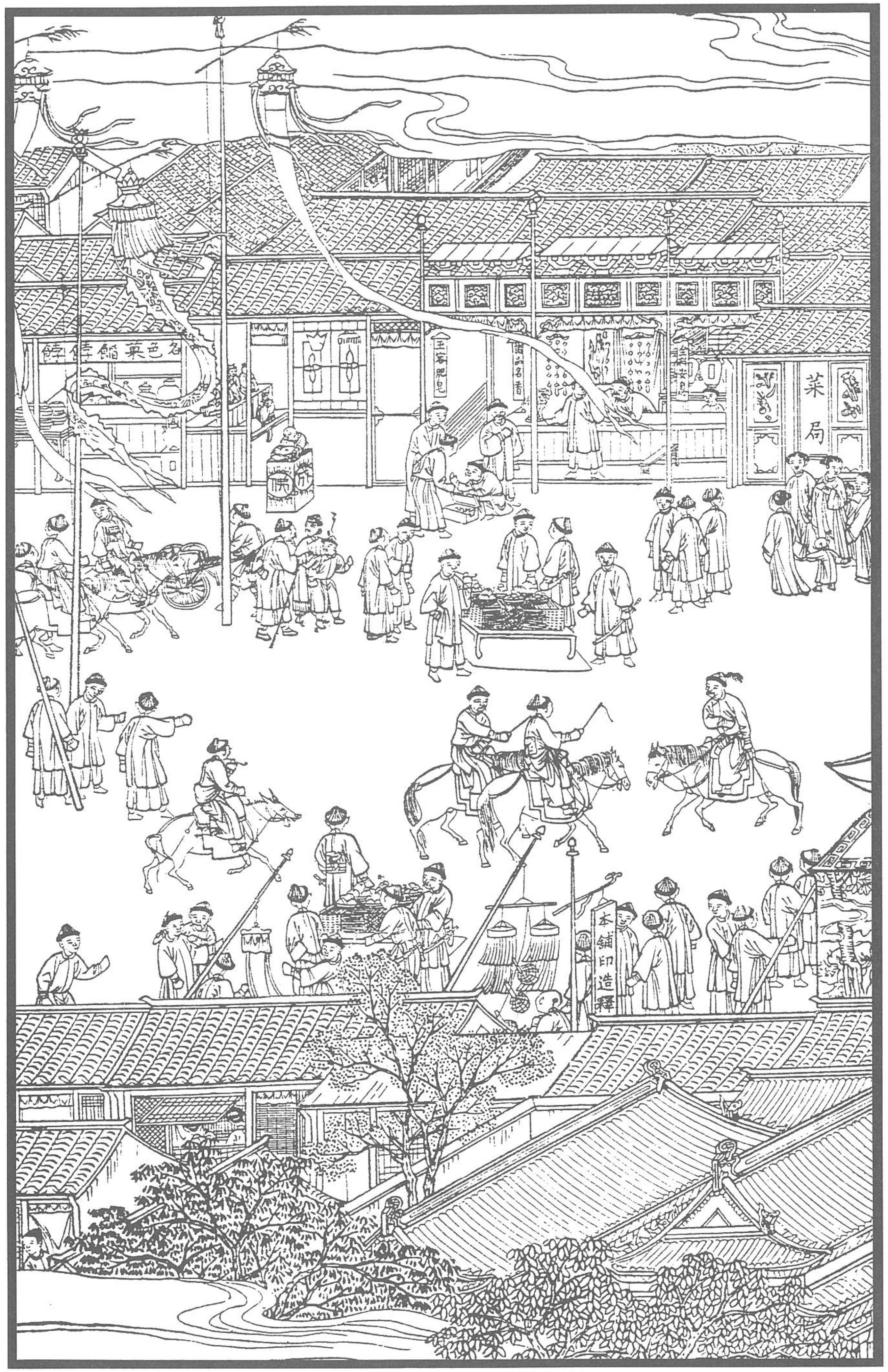


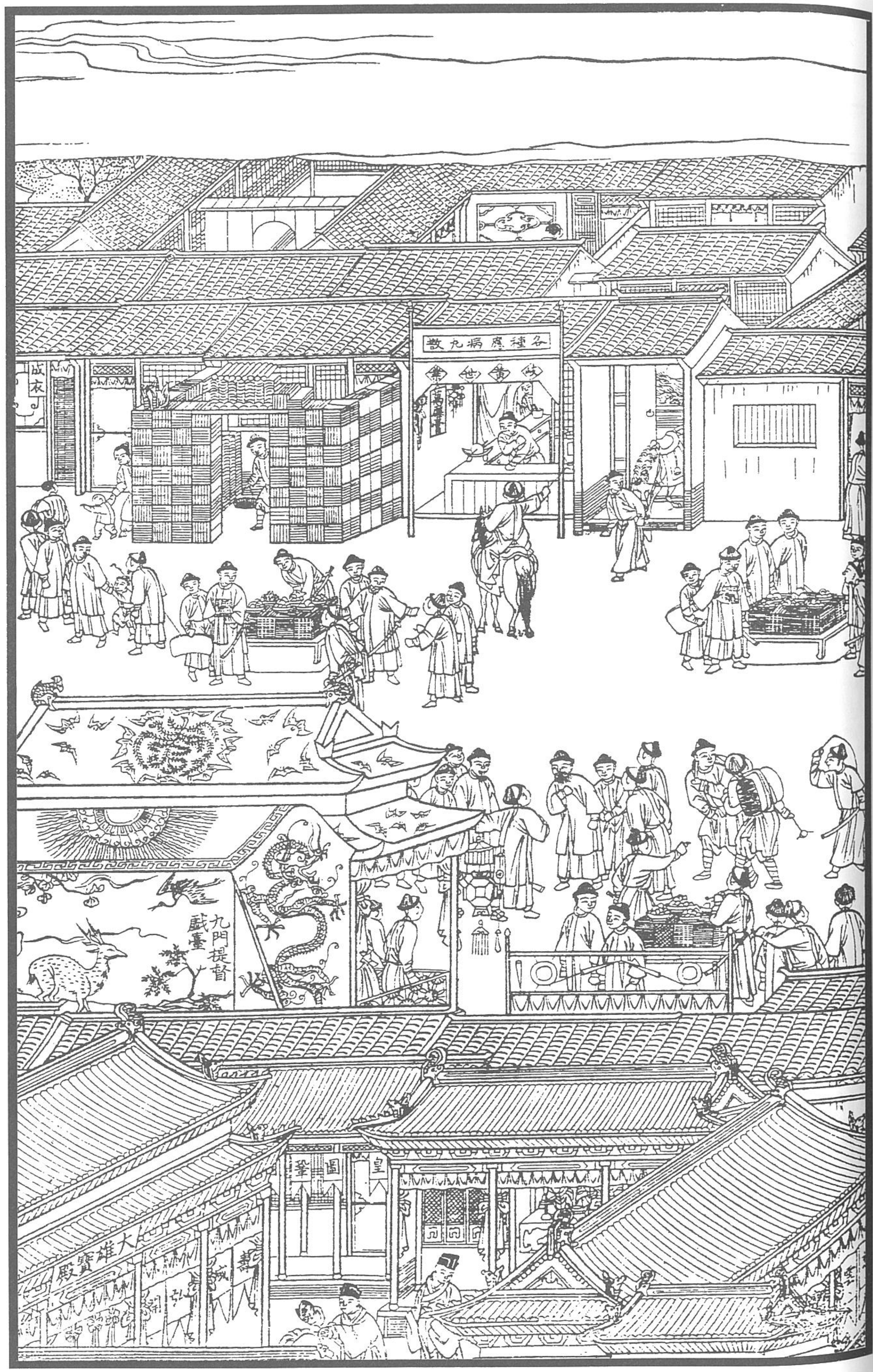


手前の寺廟は「普慶寺」で、僧侶の姿が屋根越しに見える。ここでも「萬寿経」の読経が行われている。正面の綵棚の飾り付けはとりわけ装いを凝らしたものである。佛手柑、珊瑚、霊芝、牡丹などのもろもろの吉祥物が見える。これらは、季節からいってすべて作り物のようである。大型の菓子であろうか。


九門提督等在此寶禪寺恭祝萬壽經
盛世昌期
人有慶綿曆算於億萬斯年
寶禪寺
八荒開壽域欣將金鑑錫千秋

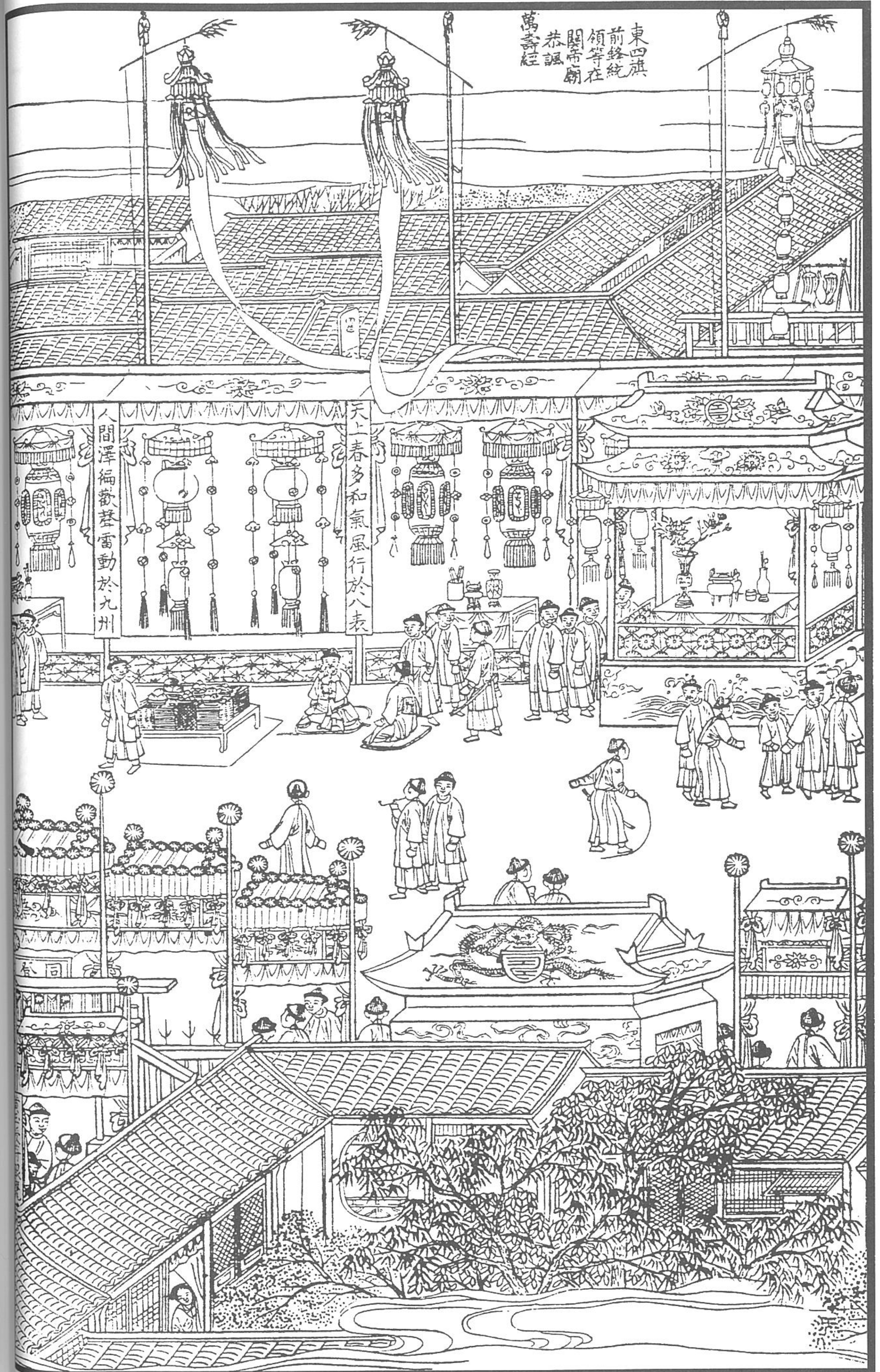

一統金甌天地清
盛世昌期
九州向化
華胥樂國

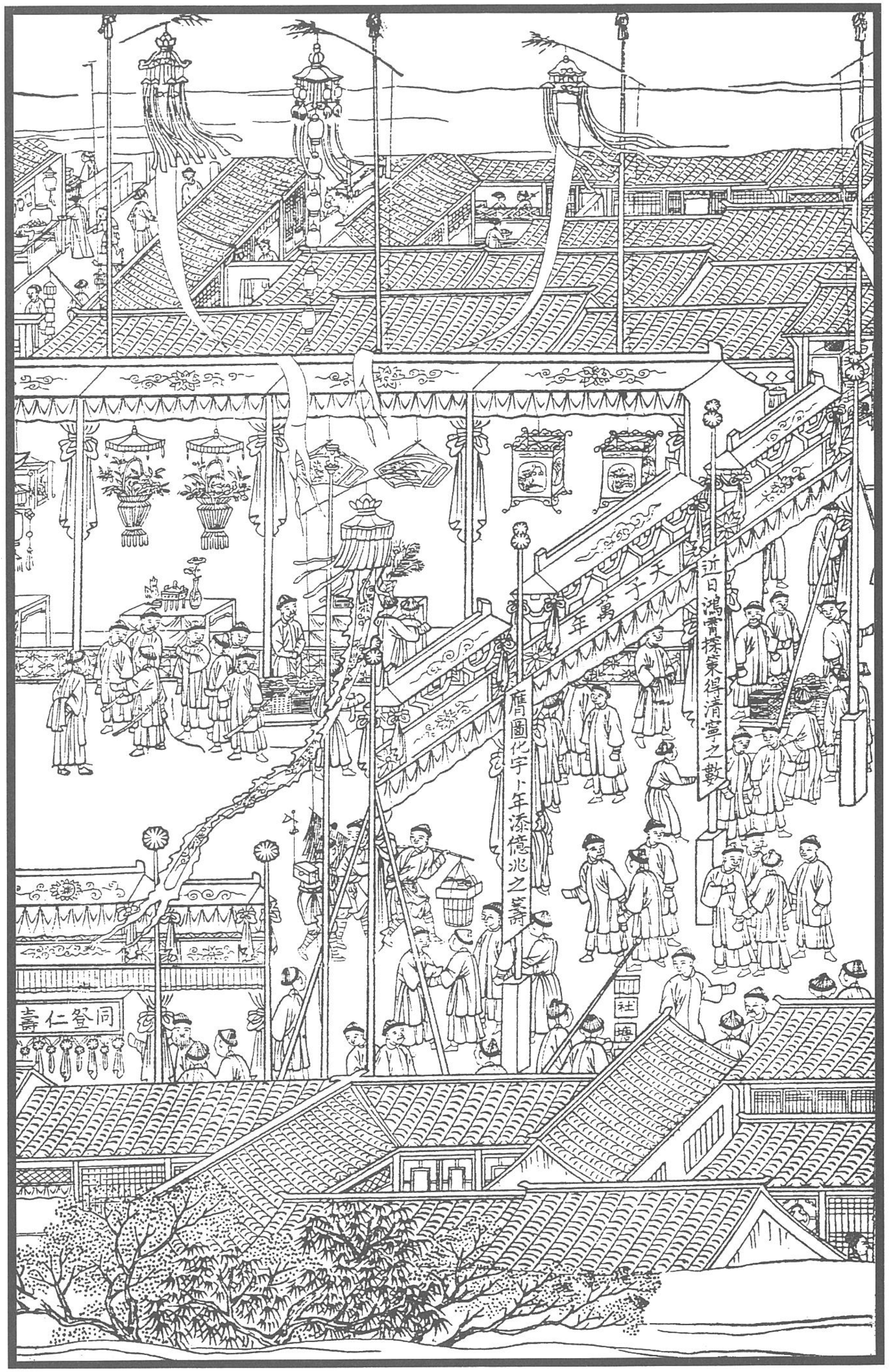


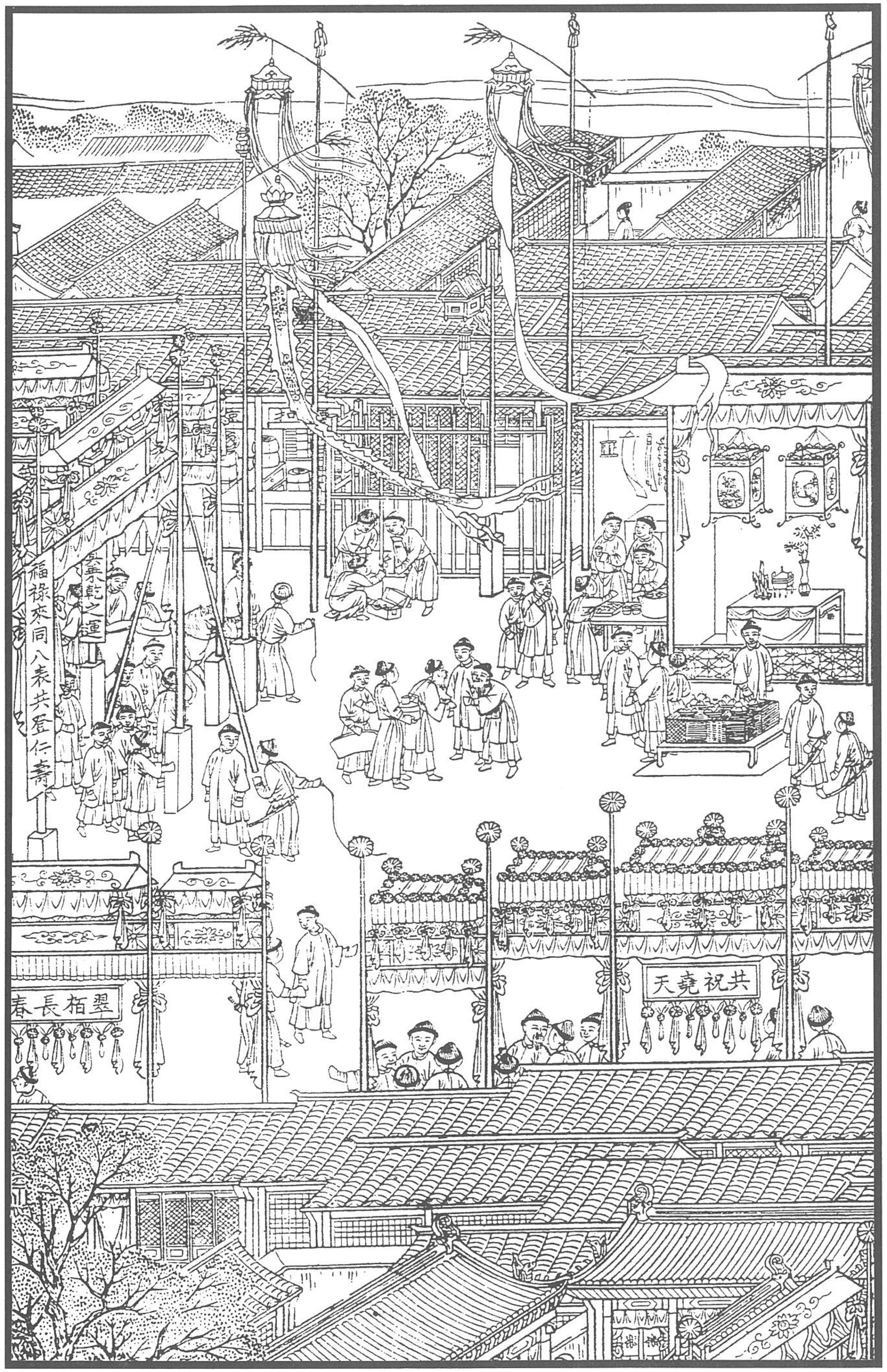


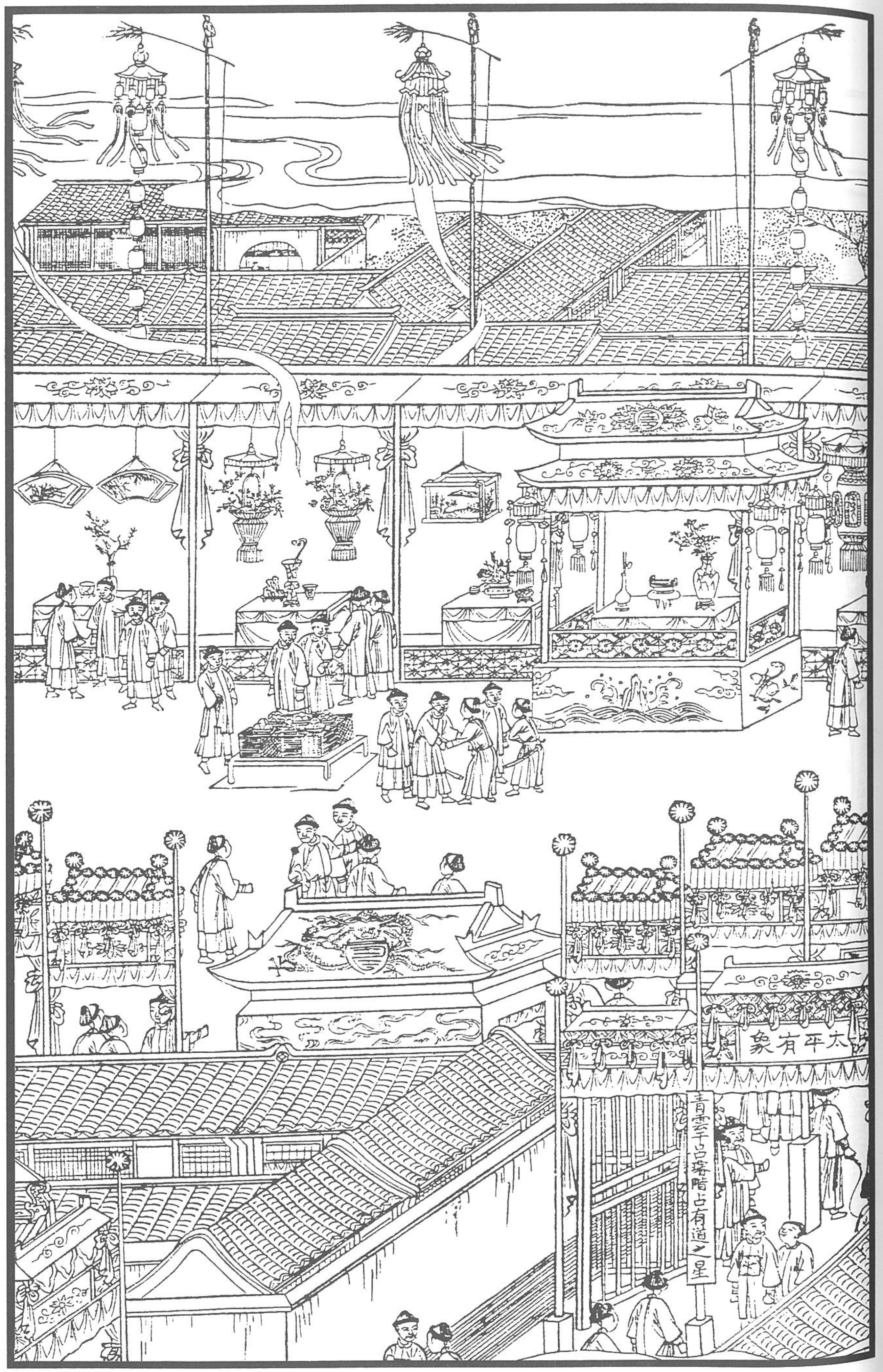
手前の寺廟は宝禅寺で、かなり広大な大型の寺である。門前の向かいには「人参」を売る店や薬屋、また線香を商う店などがある。

左手の道路中央には、祝賀の菓子を下賜する場所が設けられている。

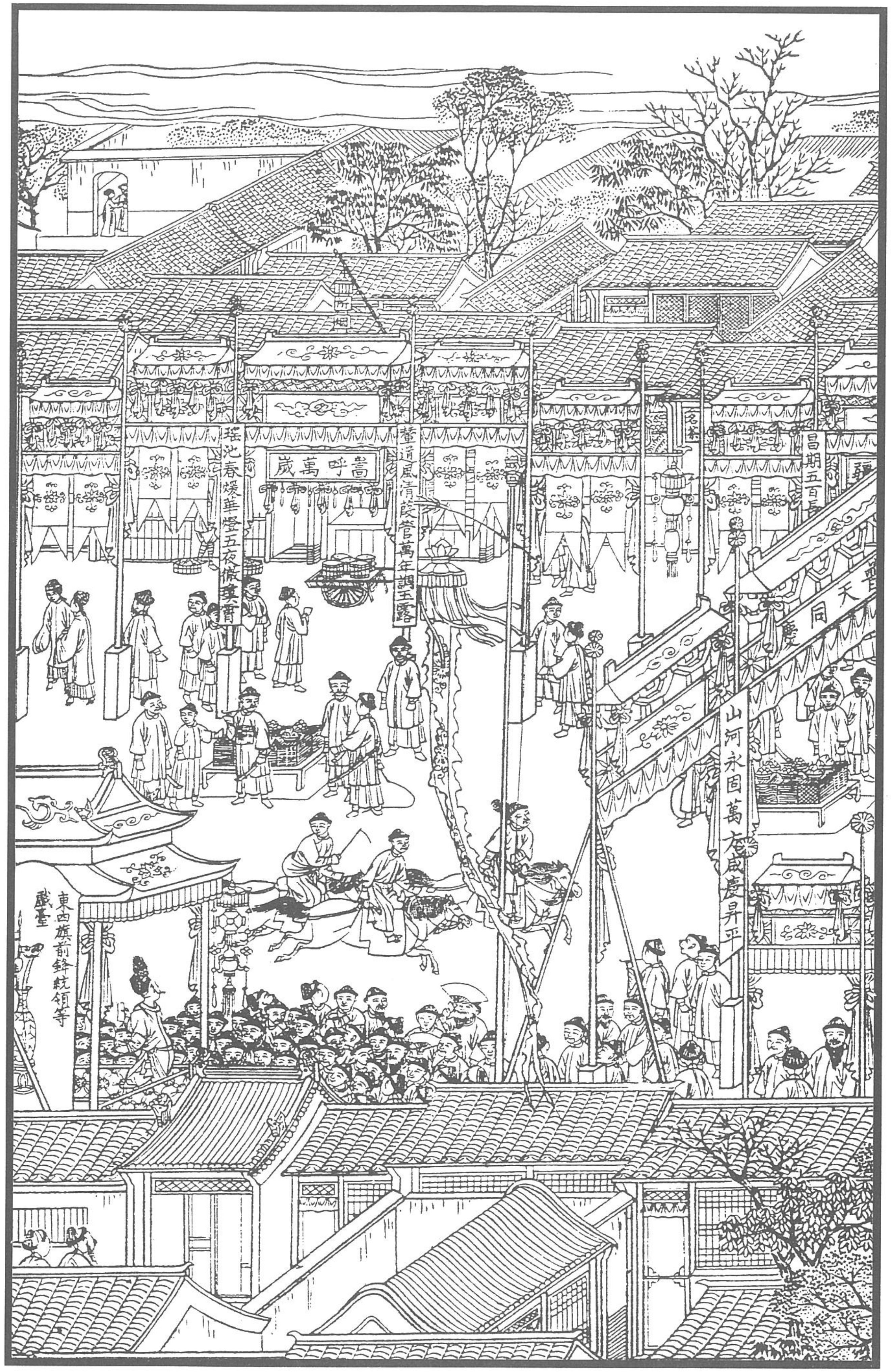

東四旗前鋒統領等在關帝廟恭誦萬壽經
天上春多和氣風行於八表
人間澤徧歡聲雷動於九州

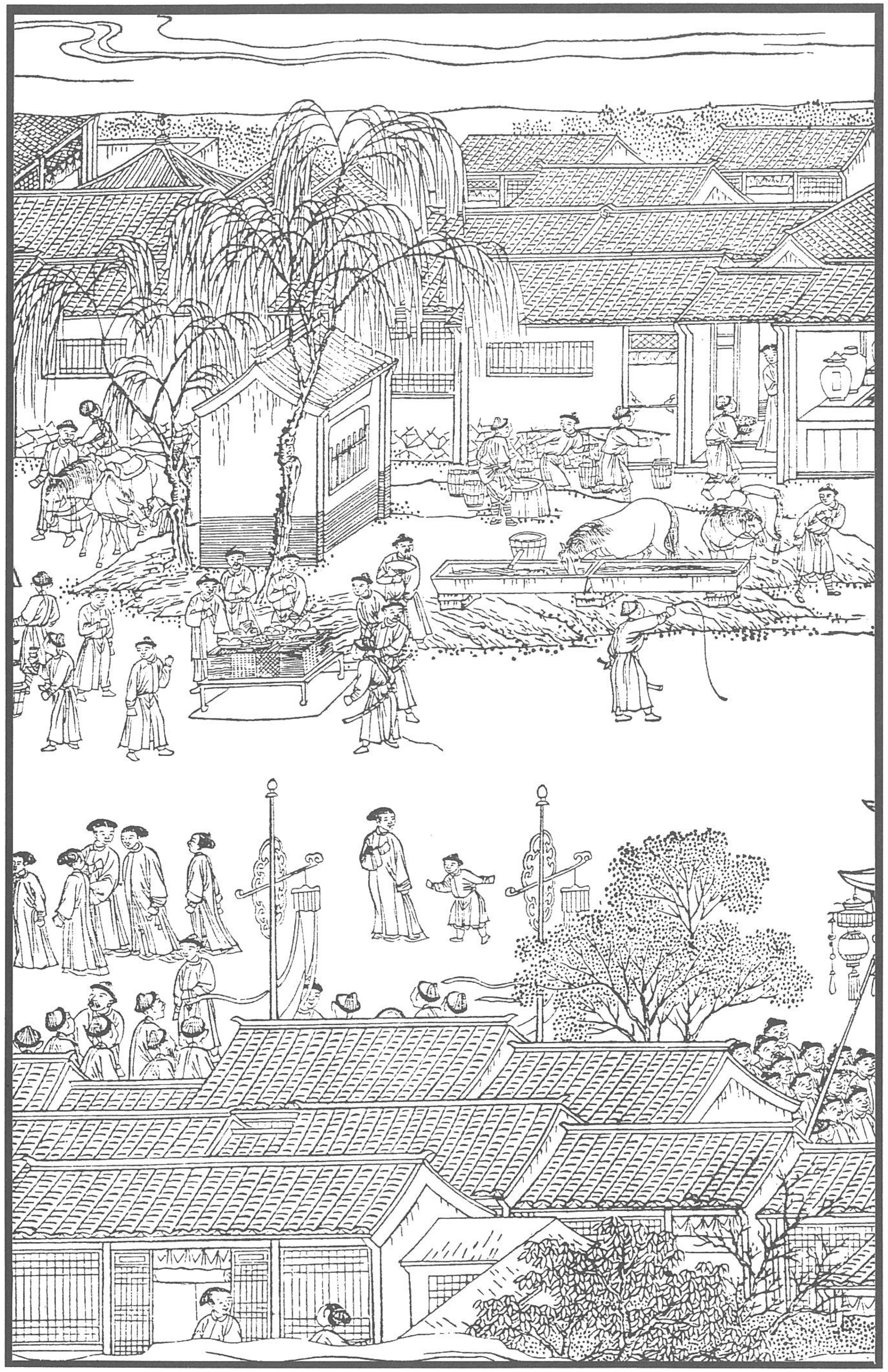

天子萬年
膺圖化宇卜年添億兆之壽
同登仁壽

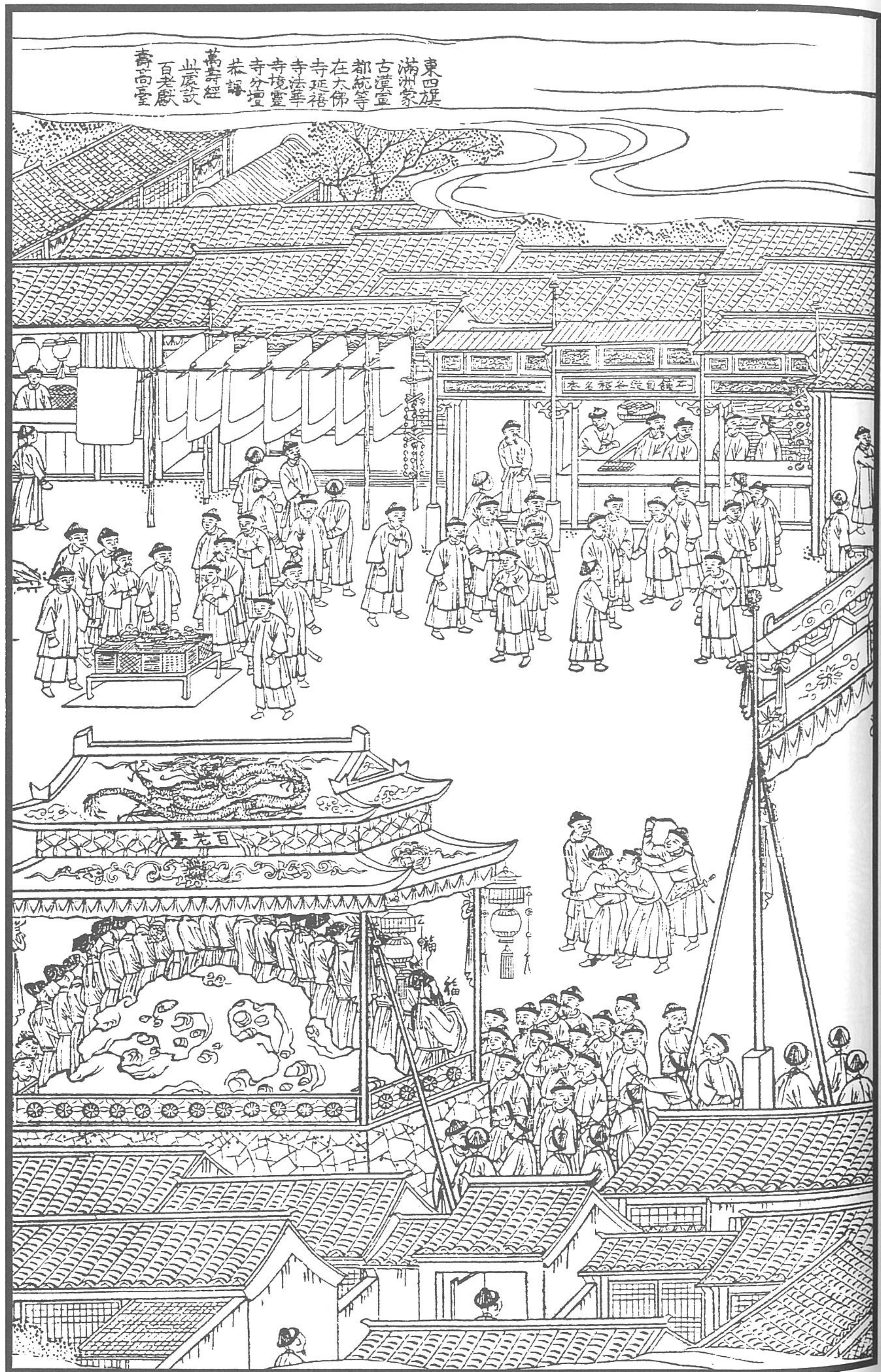

福祿來同八表共登仁壽
翠栢長春
共祝堯天


太平有象


日華雲爛
四海昇平
日麗天衢
瑞草瑶芝携得蓬壺之春色
花雨龍樓仙苑與簫韶並奏
本舖自流

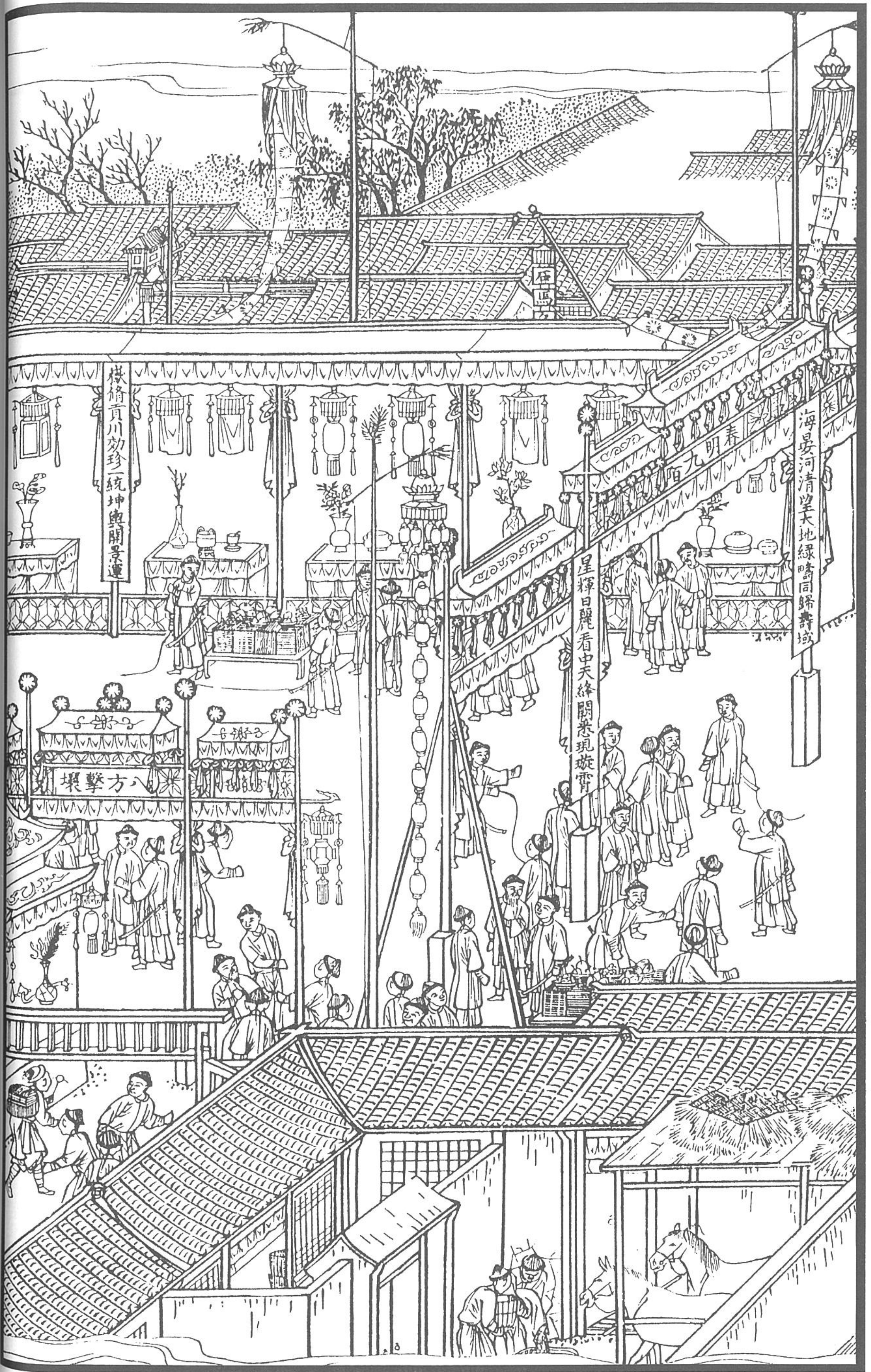

嵩呼萬歲
瑶池春煖華燈五夜慶昇平
山河永固萬方咸慶昇平
普天同慶
東西旗前鋒統領等
戲臺

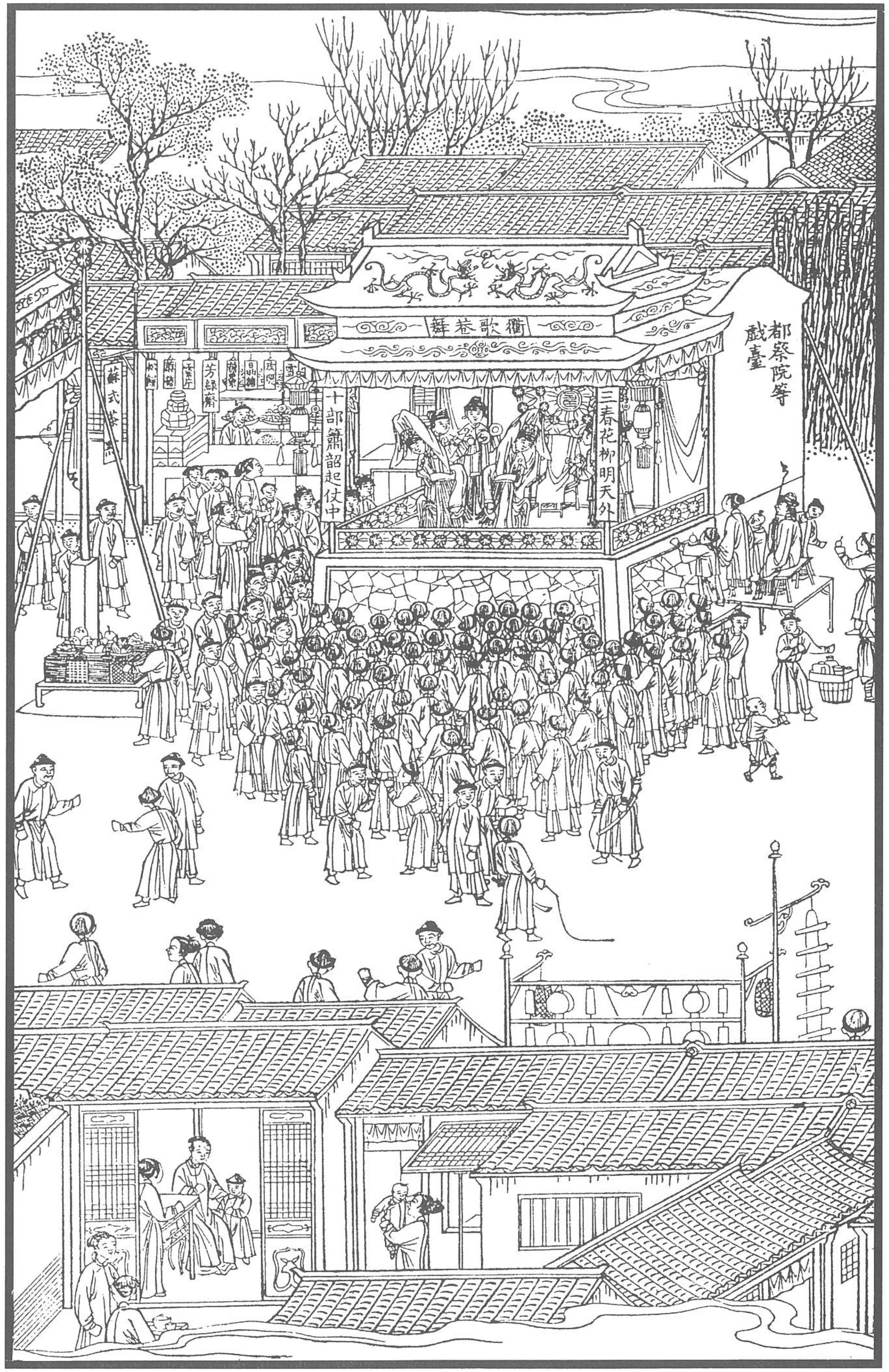




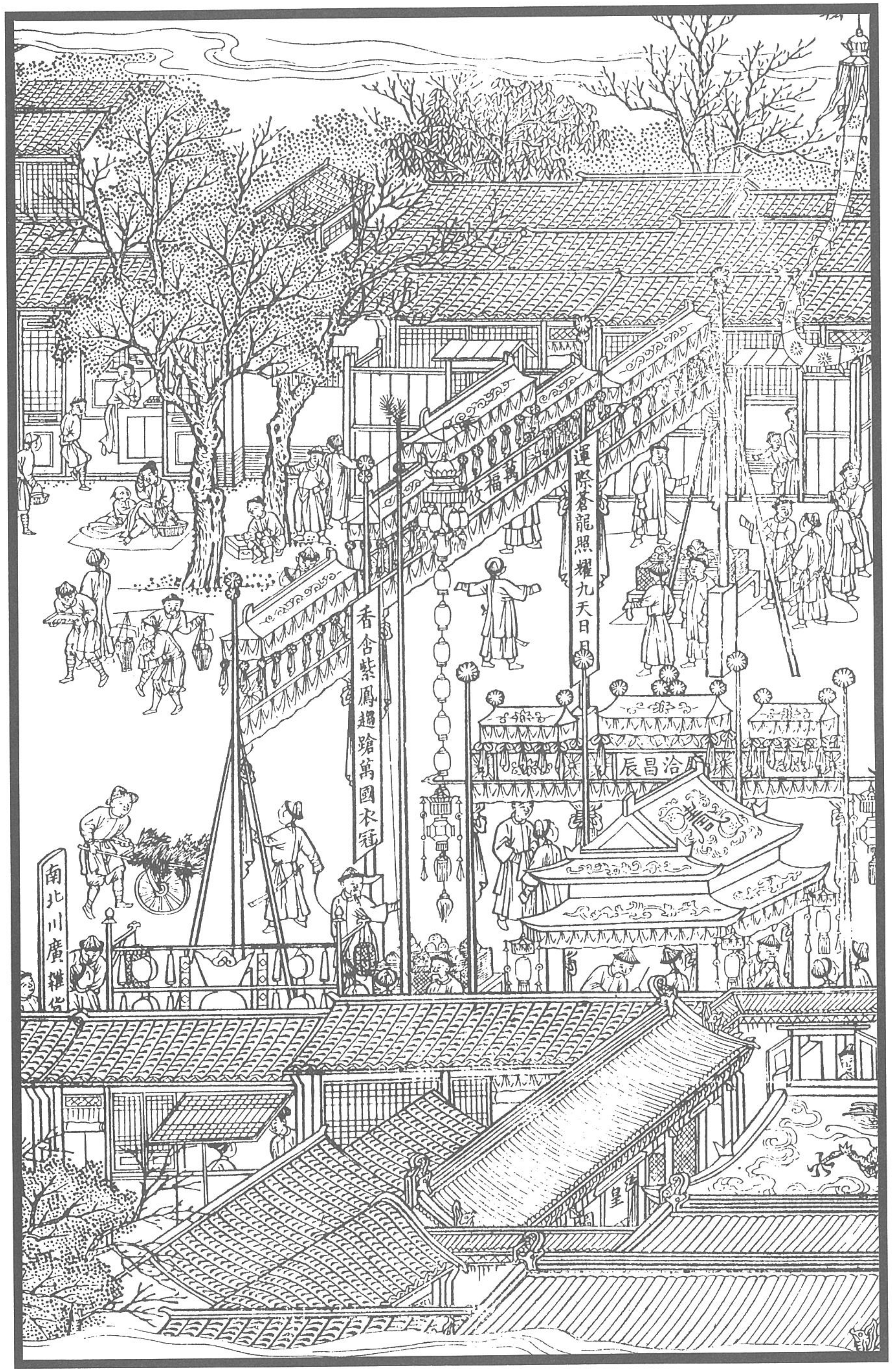
このあたり一帯は、寺廟が数多く集中している。関帝廟、大佛寺、延禧寺、法華寺などの寺廟があったことが文字から判明する。現在はいずれも消滅している。

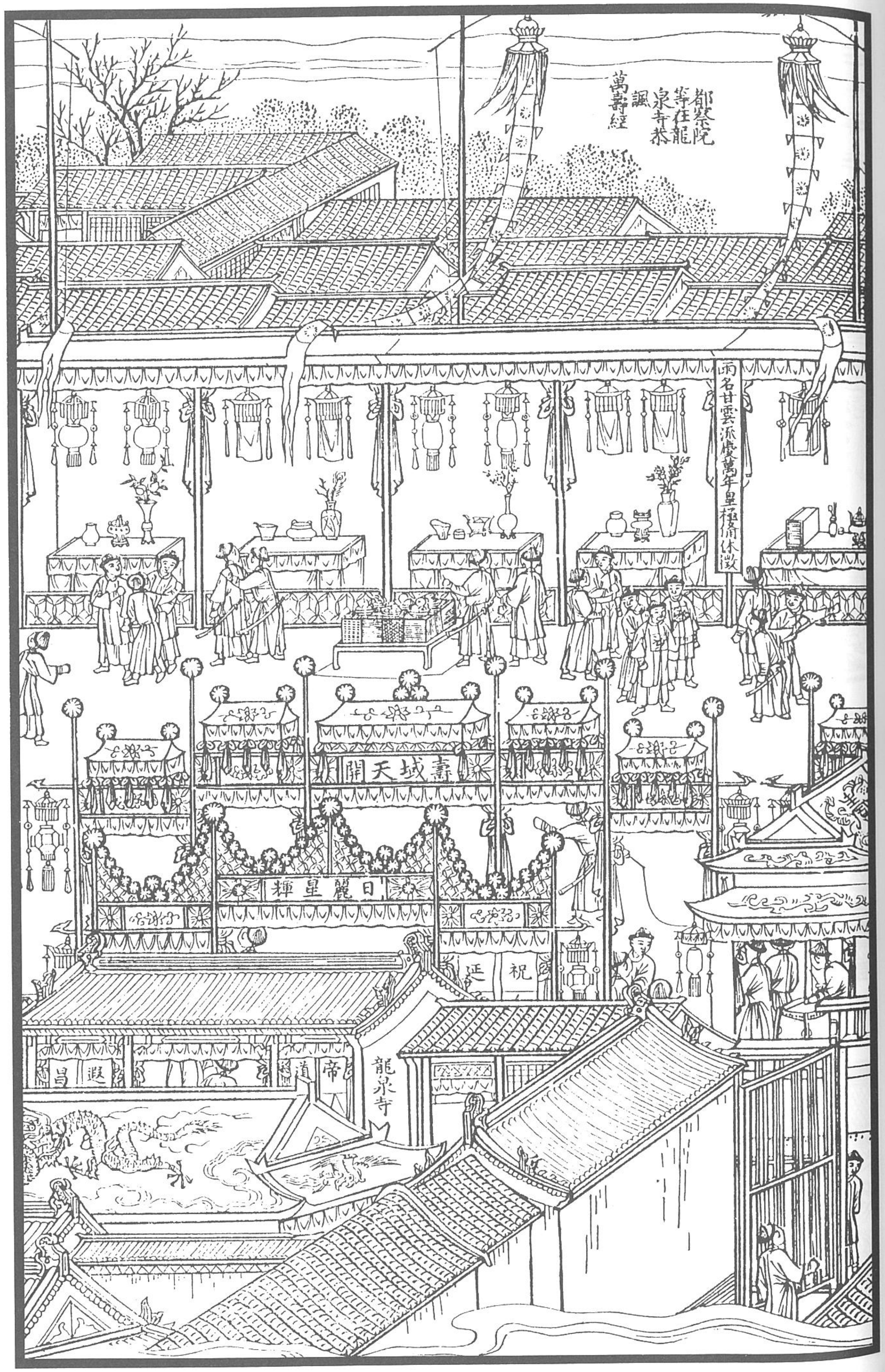
「百老台」は、後ろ向きでよく見えないが、「福」などの字をあしらった杓ようのものを手にした老人の姿をした人物が多数奇岩の上に勢揃いしている。これを「百老献寿台」と言ったようである。


梯航貢川効珍一統坤輿開景運
春明九陌
海晏河清望大地綠疇同歸壽域
星輝日麗看中天絳闕悉現琁霄
八方擊壤

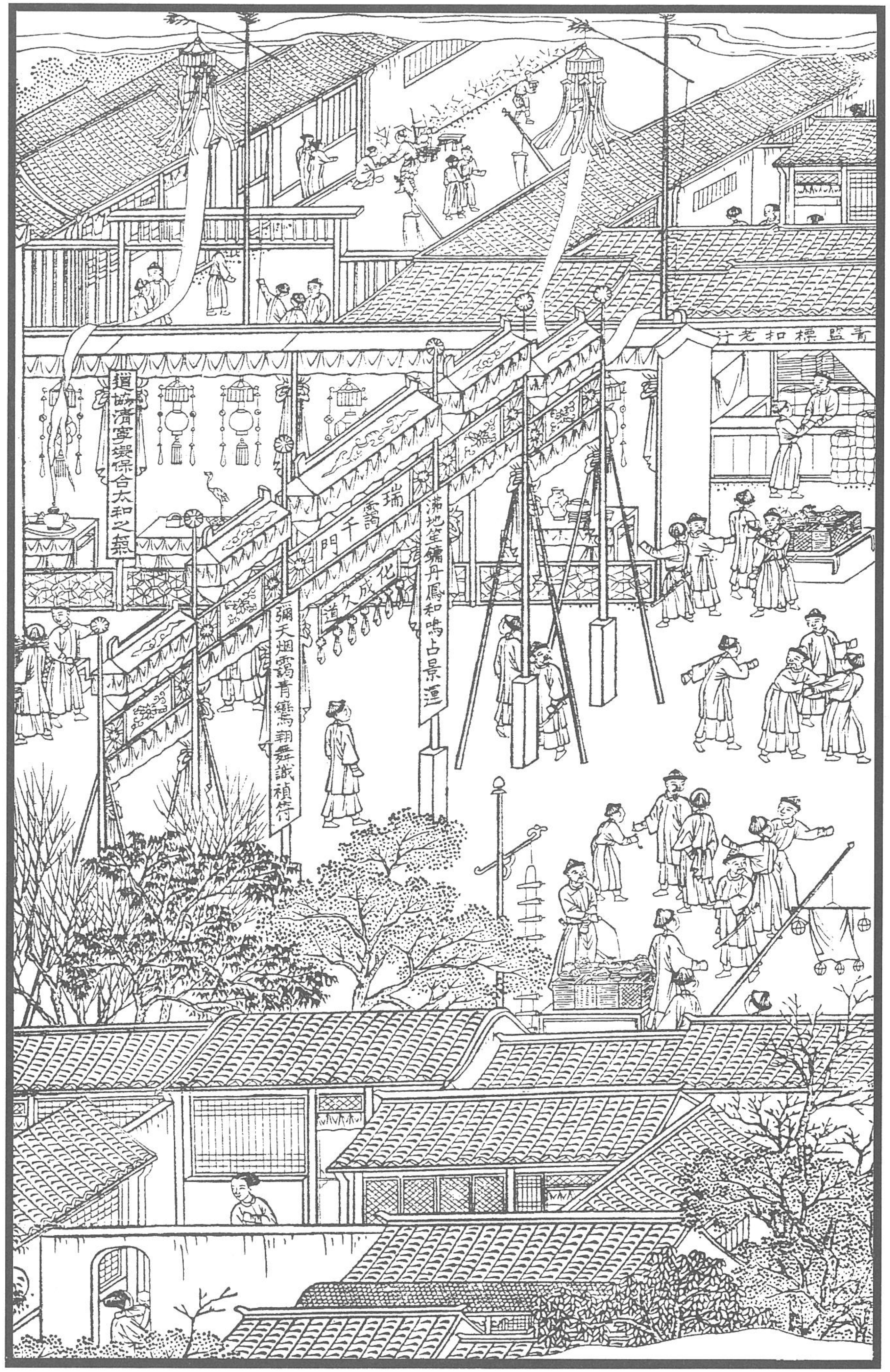

衢歌巷舞
都察院等戲臺
十部簫韶起仗中
三春花柳明天外
芳綠齋

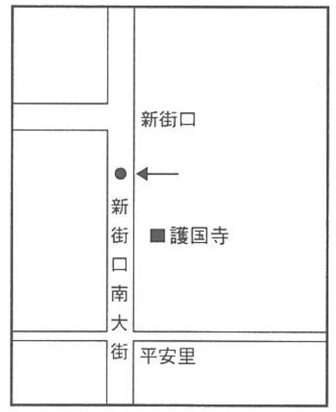
戯台には、四人の若い女性が舞っている。右の老人のための「特別席」には、長い杖を手にした婦人が子どもらと共に観劇する。
手前の龍泉寺では「都察院」のものたちが、「萬寿経」を唱えていた。
画面左側には、茣蓙を引いて休む親子、その手前に天秤を担ぐ人、そしてその手前には「推車」を推す人物が描かれている。

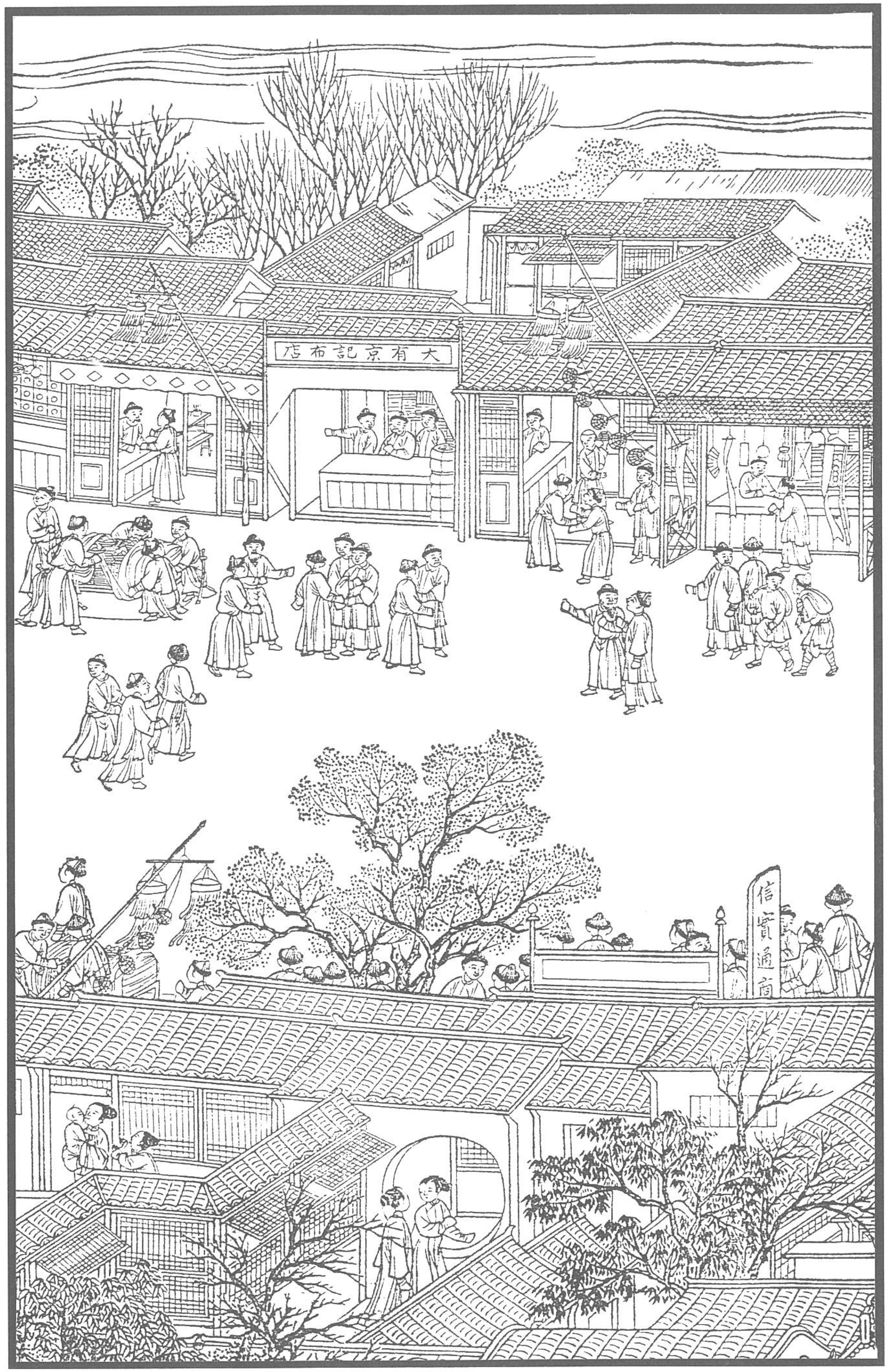


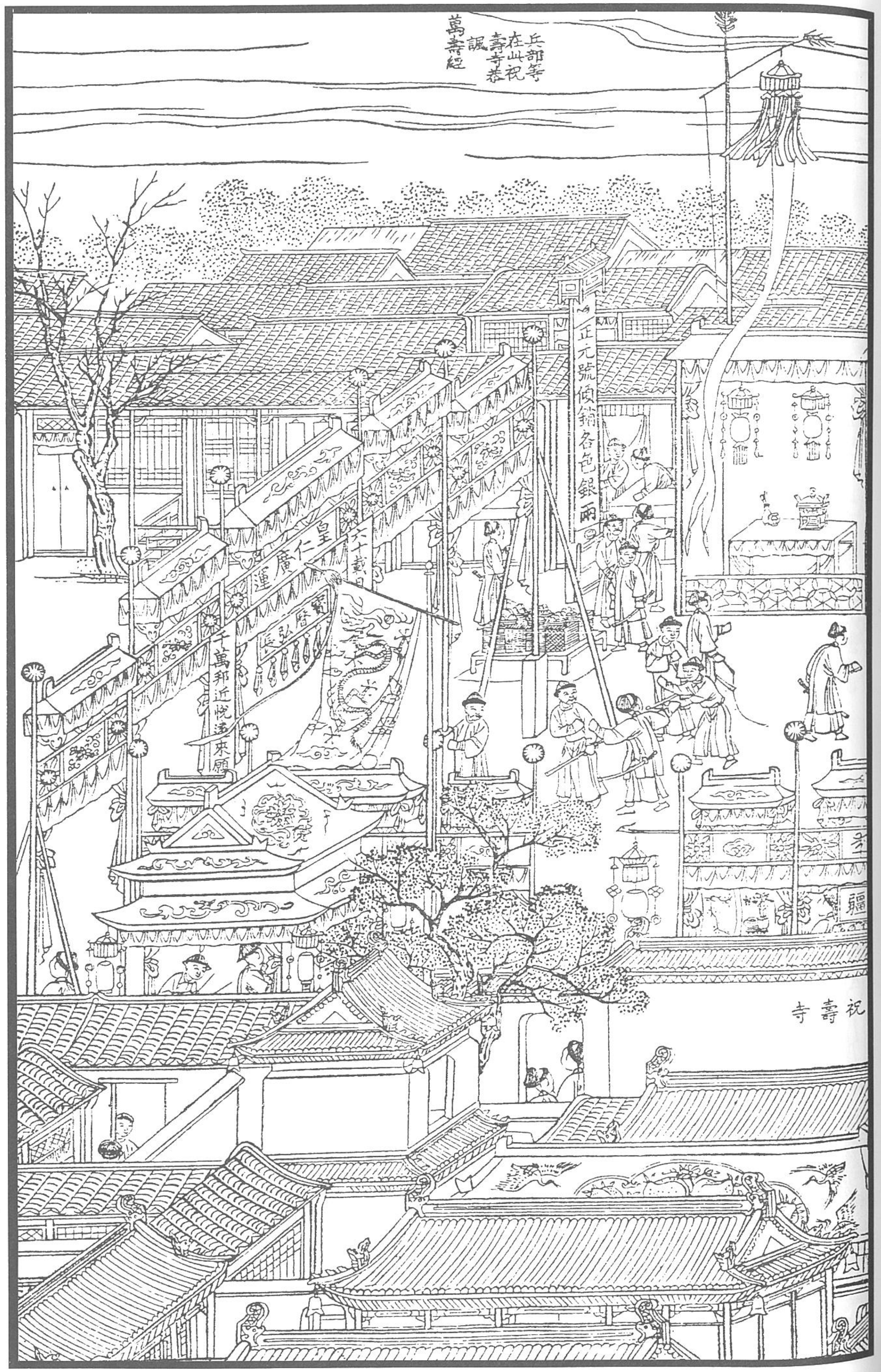



諭王貝勒大臣九卿詹事科道朕昨進京見各
處為朕六十壽慶賀保安祈福祝延者不計其
數朕實涼德自覺愧汗從來帝王之治天下罔
不以民生為念若為一己之私即不能攜而衆
之矣朕若先知必令止之令已成矣難毀衆志
夜來思之達旦朕所以為天下萬國蒼生之主
者萬世安即朕之安天下福即朕之福若能近
禱雨暘時若家給人足則朕安寢飽食可以却
病延年此朕之求福非有安想也傳之各處凡
有祝延者必求雨暘時若萬邦咸寧為先朕体
老矣有若無實若虛夙夜匪懈須薄臨深之念
與日並增豈敢自有滿假乎特諭
壽考之庥
無德厚

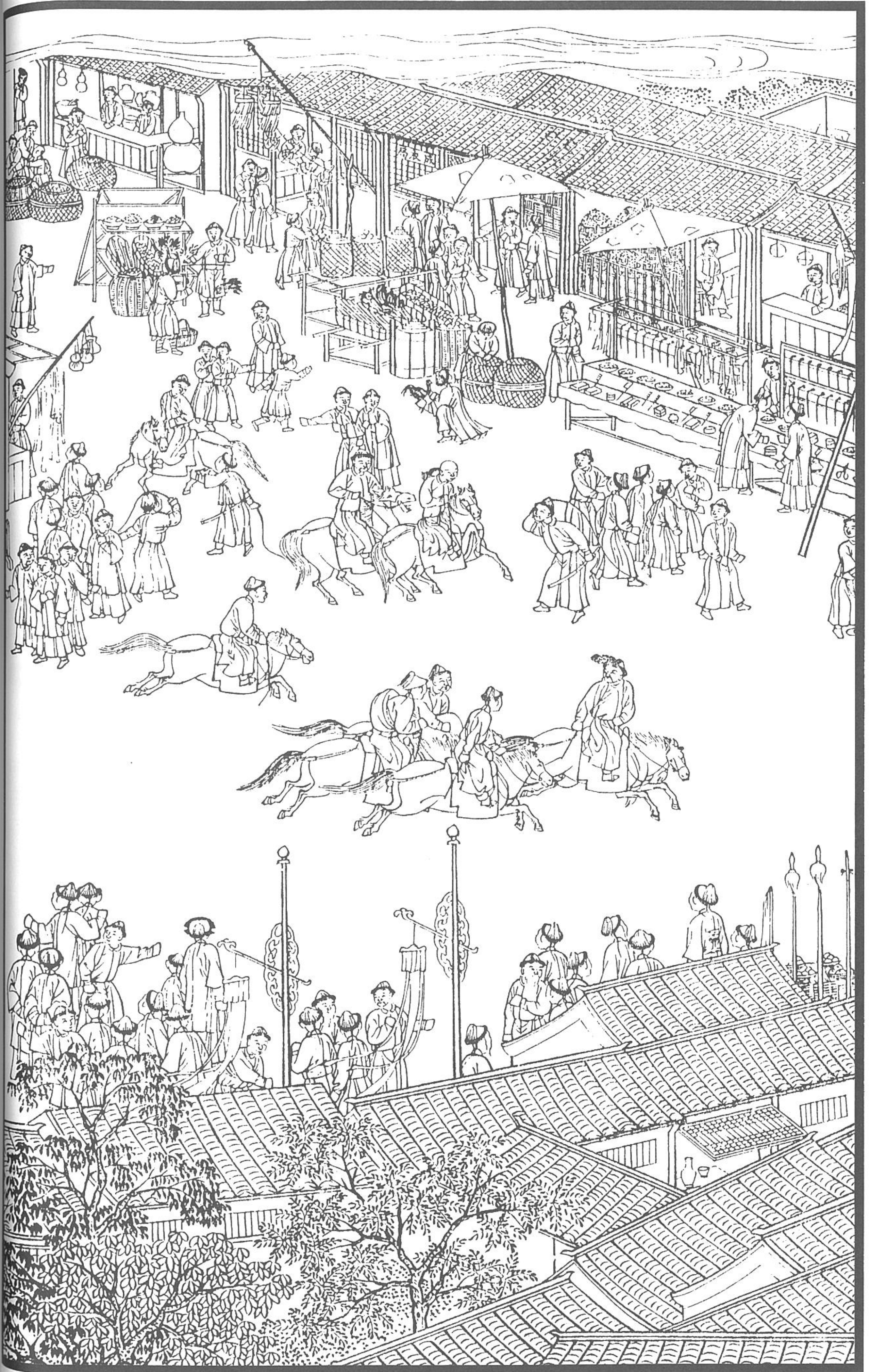

道協清寧與保合太和之氣
瑞靄千門
化成久道
彌天烟靄青鸞翔舞識禎符
滿地笙鏞丹鳳和鳴占景運
青監標扣老行

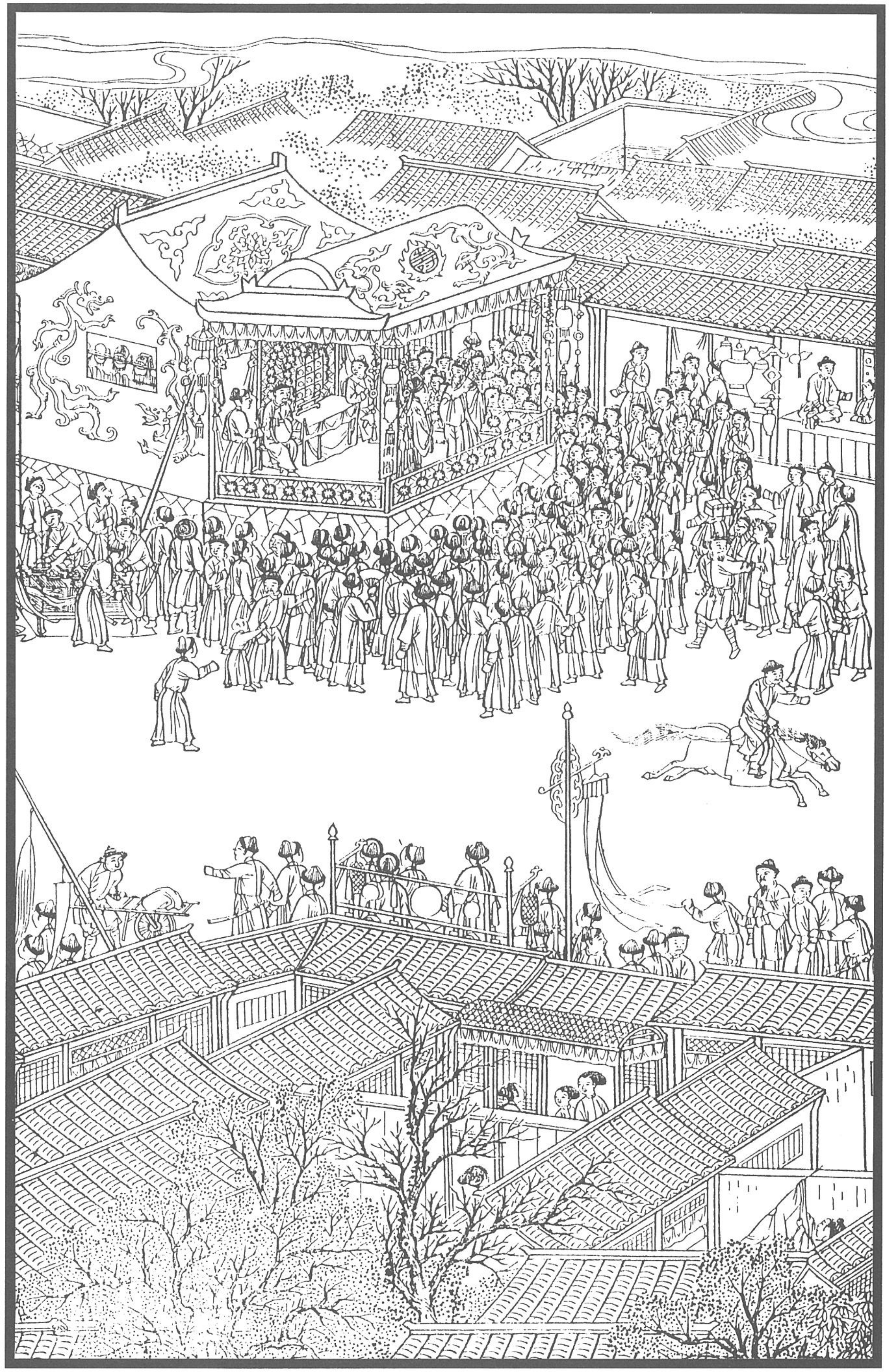

新街口
新街口南大街
護国寺
平安里

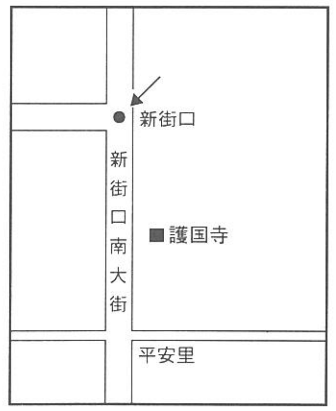




右の画面には天子から臣民に対する諭しである「勅諭」が大きく書かれ、供え物がされている。画面の中央の手前にある祝寿寺では、兵部等が「萬寿経」を唱える。左の画面では、「大有京布店」と大きく漢字の看板を掛けたが店があるが、隣は表示がなく「幌子」で「飲食店」の標識を出している。画面下の赤子をあやすさまが可愛らしい。






新街口
新街口南大街
護国寺
平安里

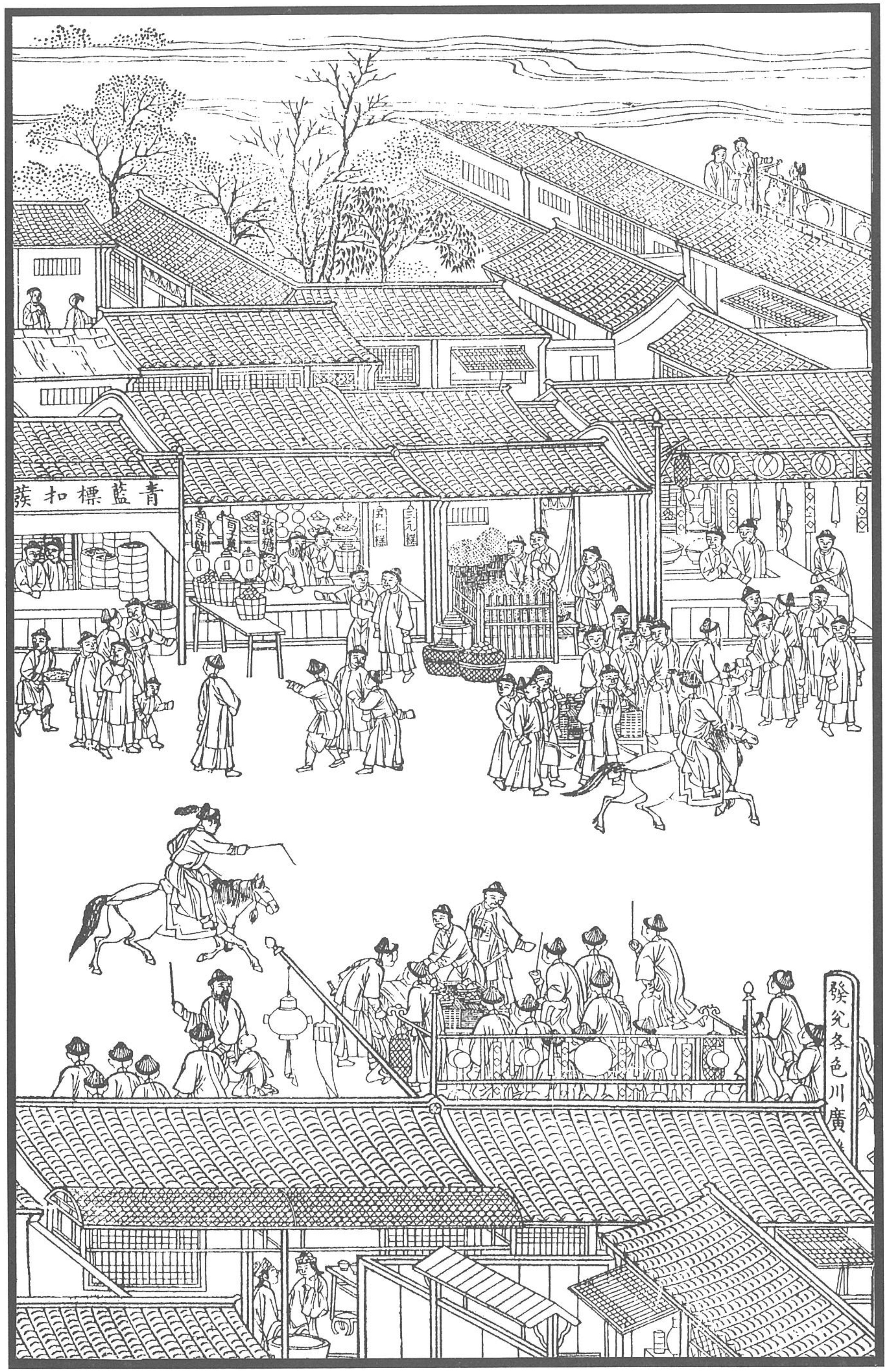
ここは新街口である。道は北から西向きに左折する。

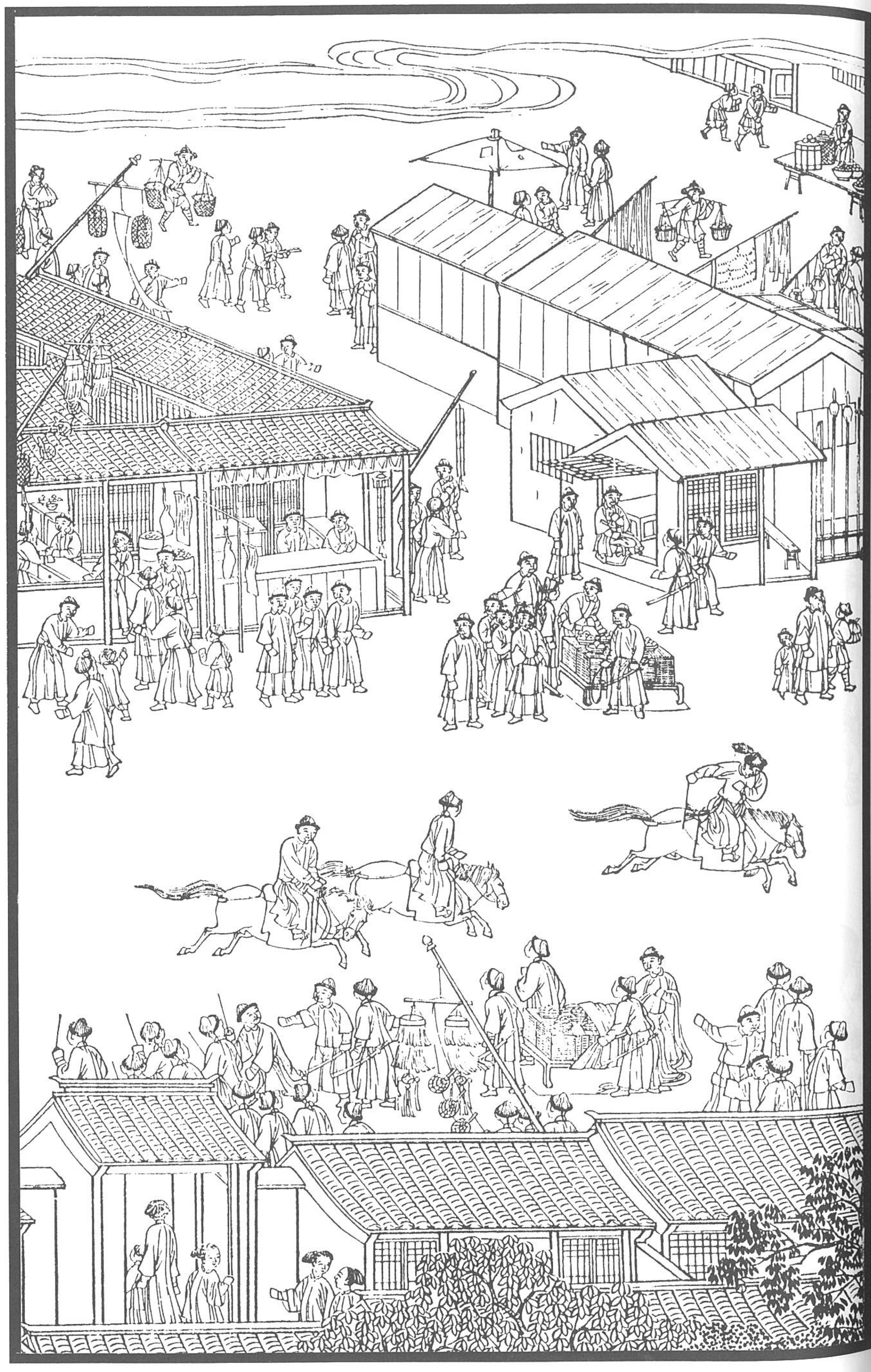
画面は、鹵簿の行列の前触れを告げる馬が通りかかるところである。

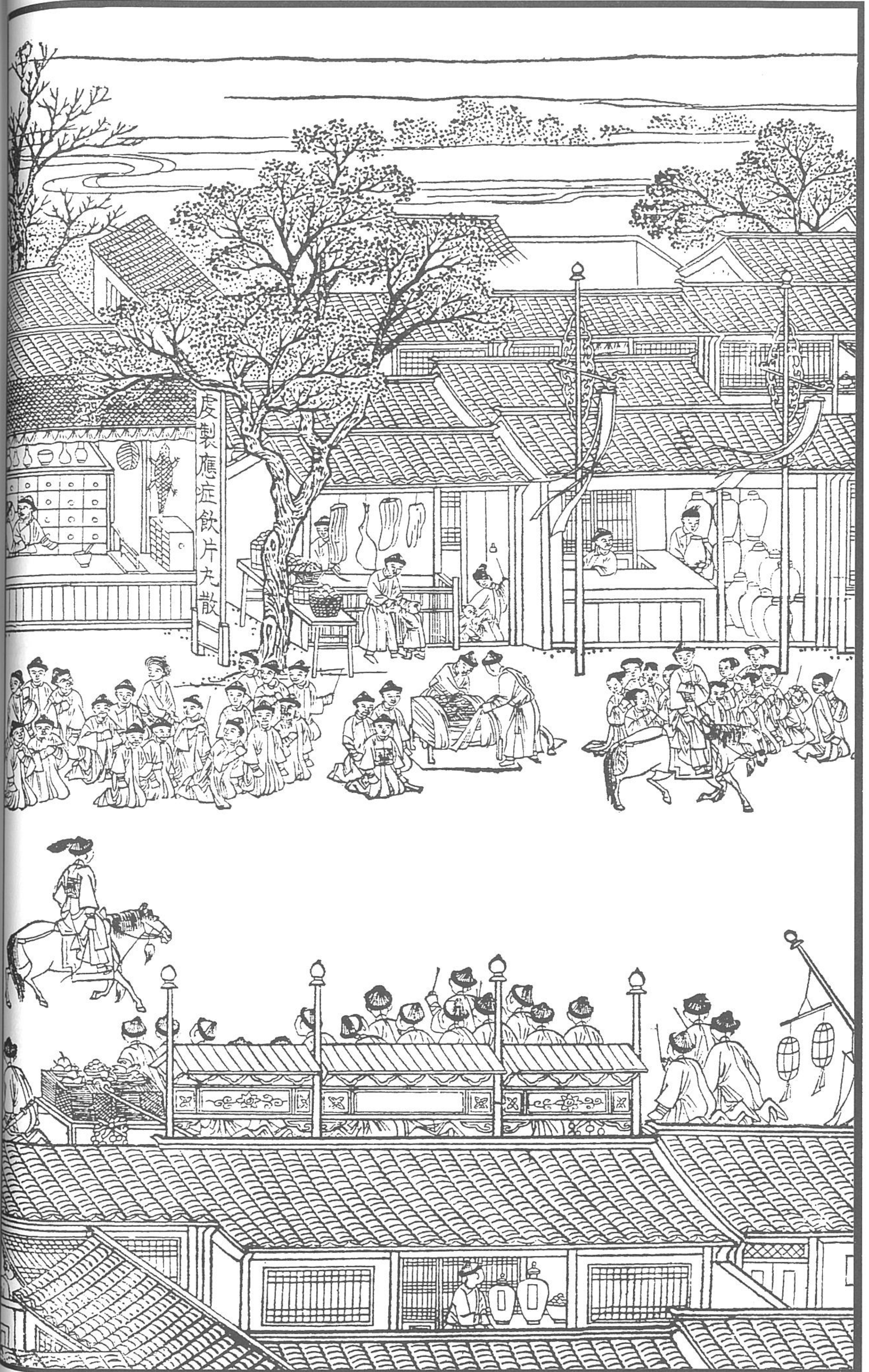
下には洗濯物を干す女性がいる。右の画面では戯台の上で演劇が上演されている。めでたい演目であることは言うまでもない。俳優の被り物が窓を通して外側に覗いている。

前触れを告げる騎馬の人物が続く。幾頭もの馬の姿態は一つとして同じ形がなく、画家の技量の格段の高さを示している。

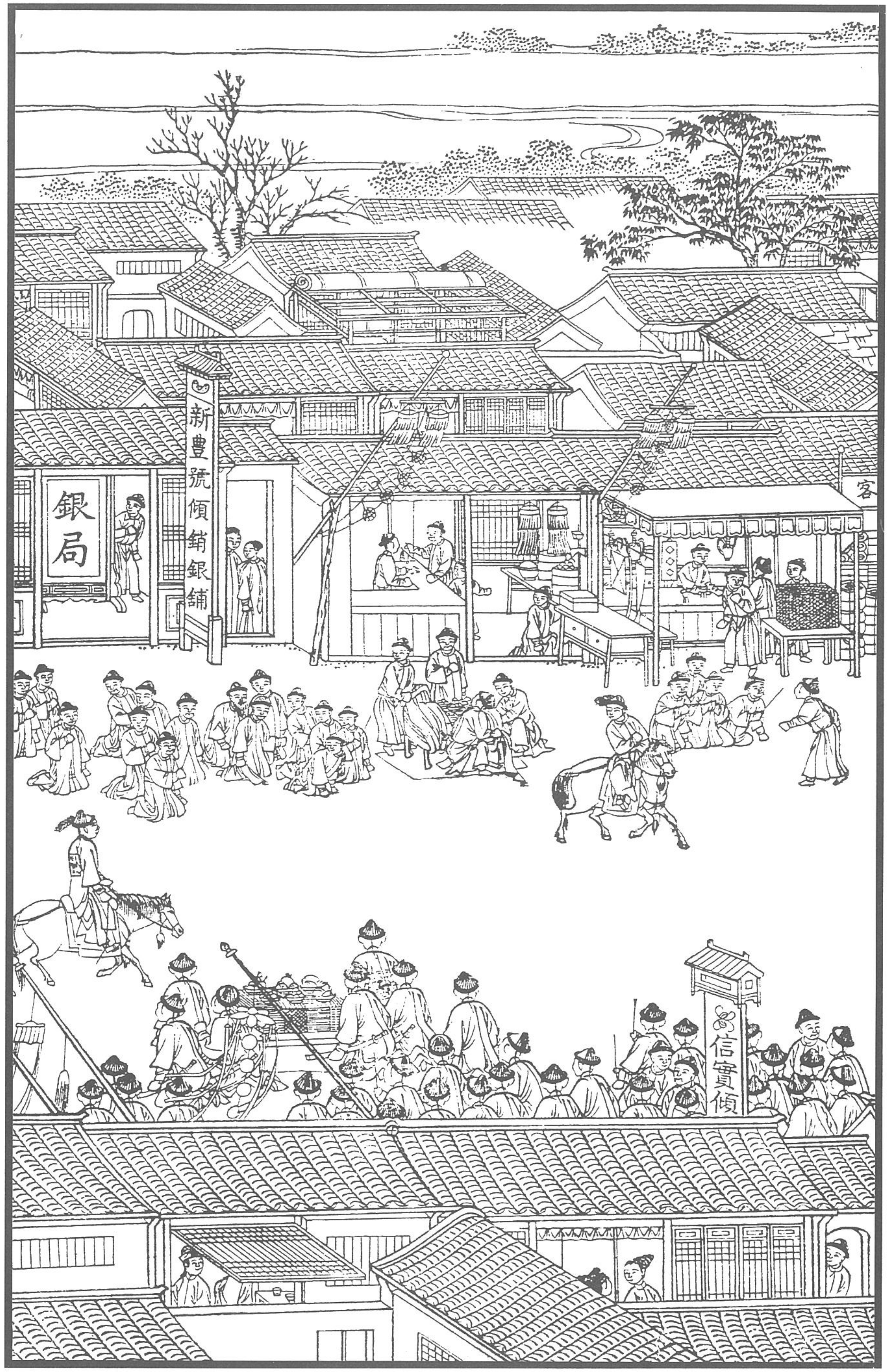
向かいに並ぶ商店は、「幌子」あり「漢字」の看板ありで、興味深い。「三元糕」「五仁糕」「百子菓」「百合餅」などいずれも吉祥の名前をもつ菓子である。



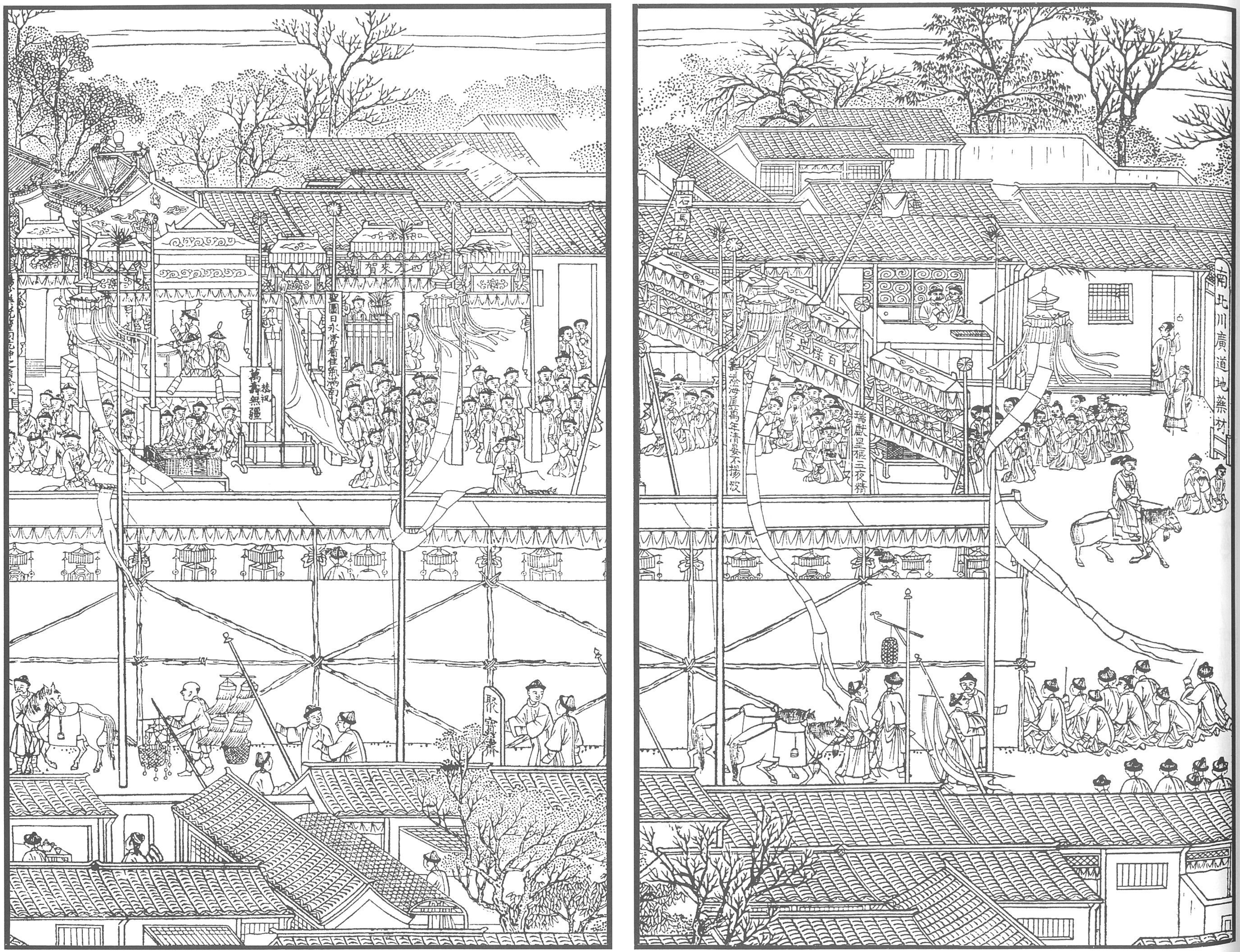




皮製應症飲片丸散



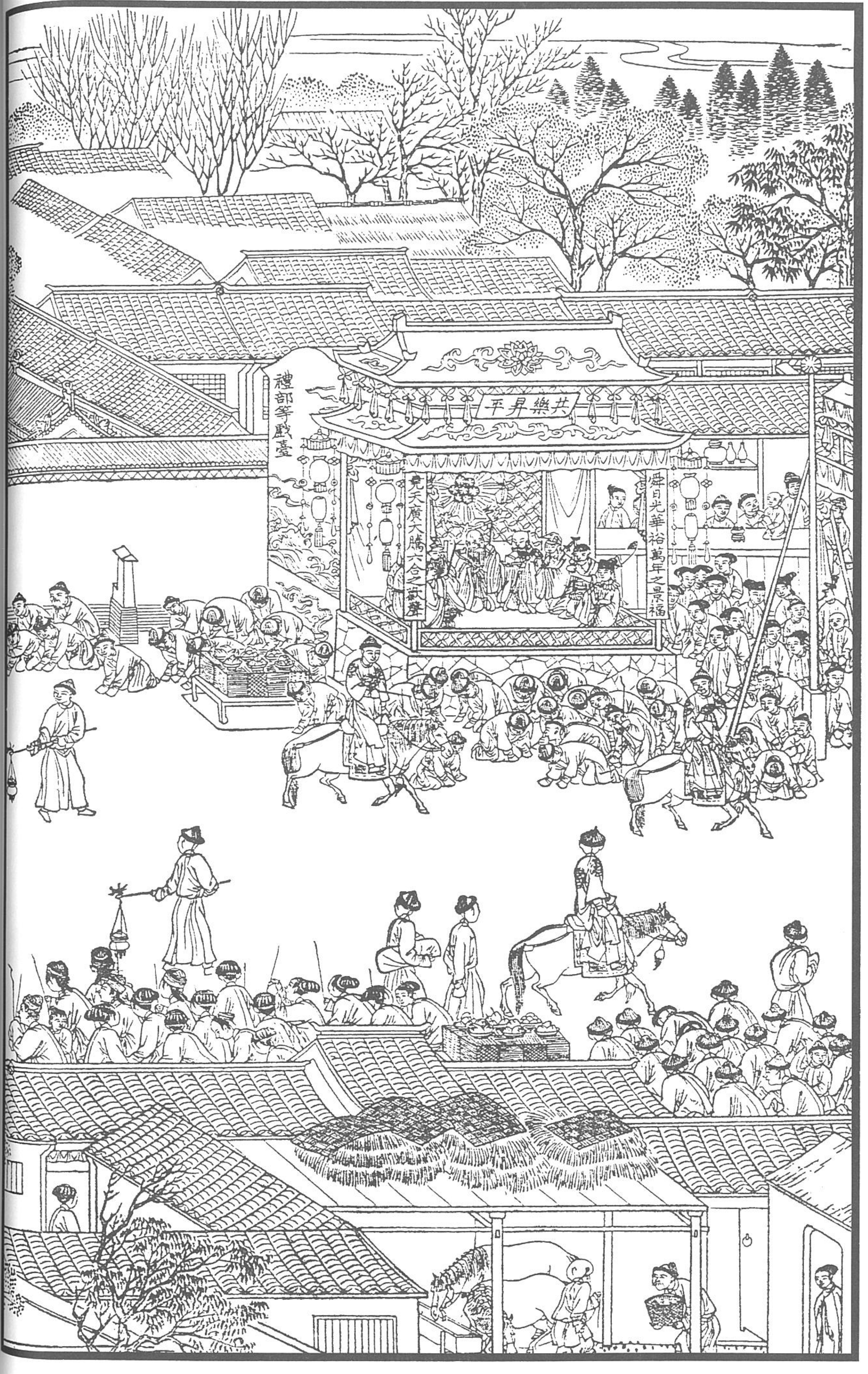
新豐號傾銷銀鋪
銀局
客
信實傾

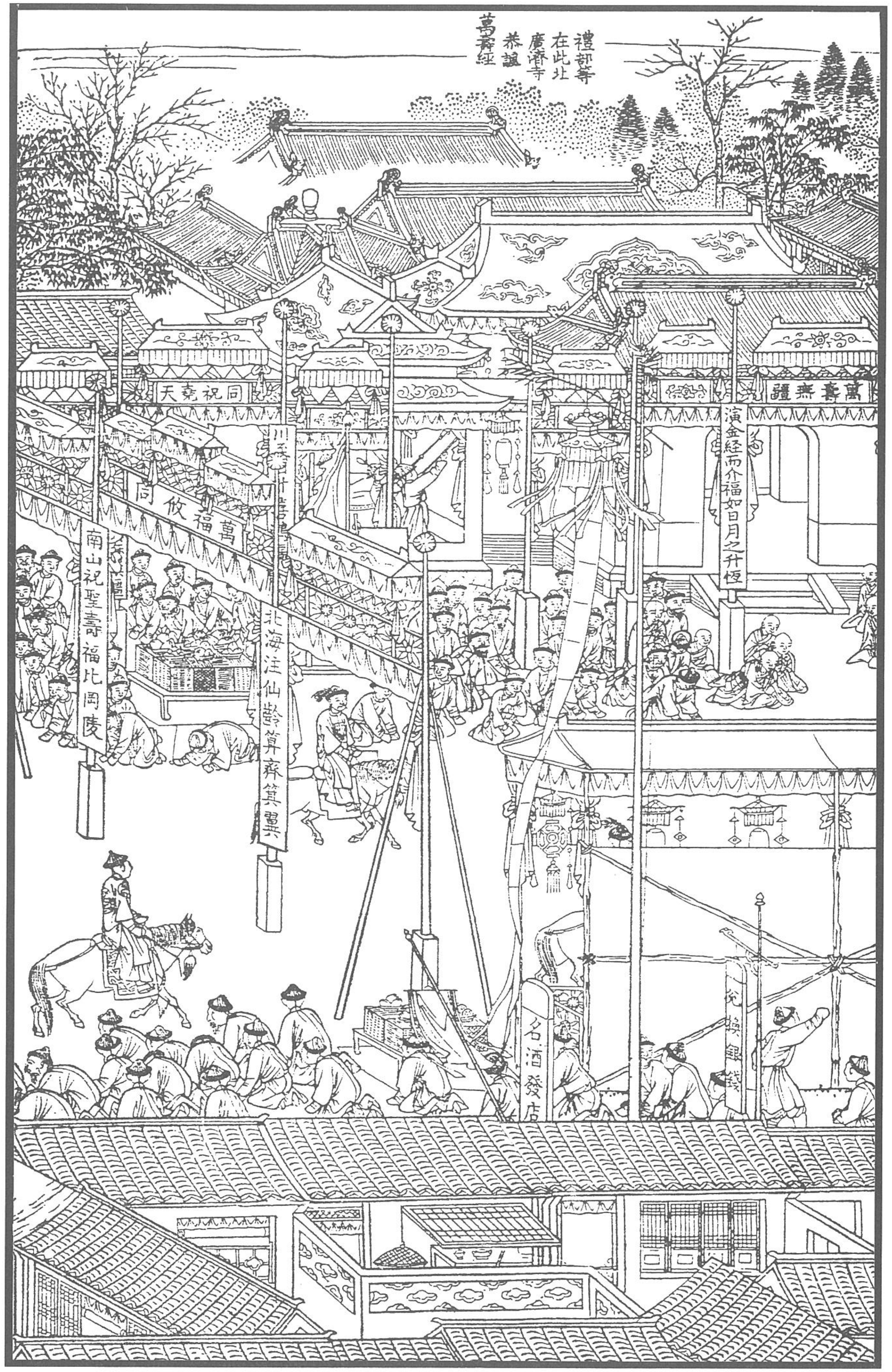


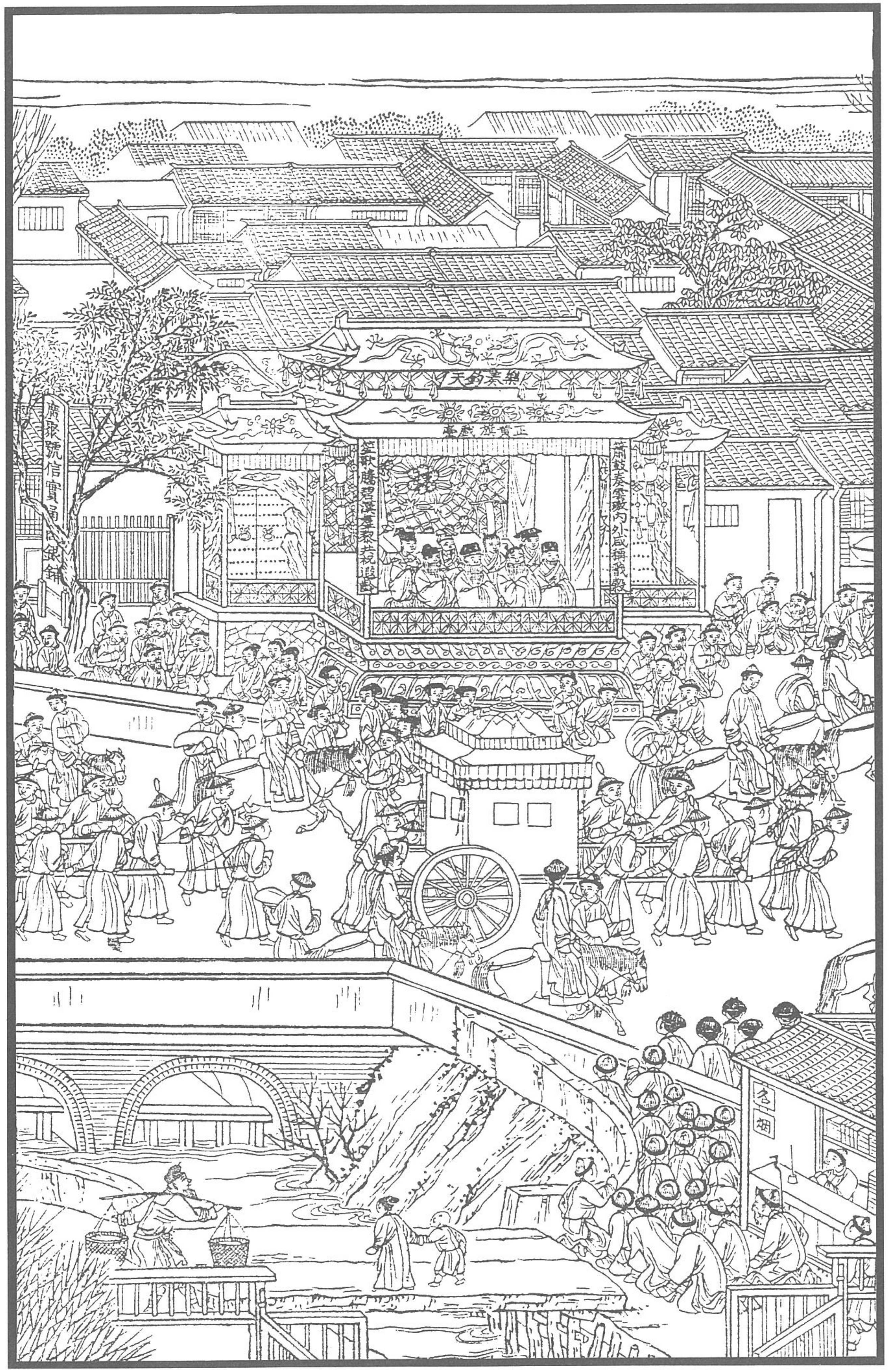
いよいよ鹵簿を迎えるとあって臣民は跪き始めている。手に持っているのは線香であろう。馬も静静と歩むさまが活写されている。

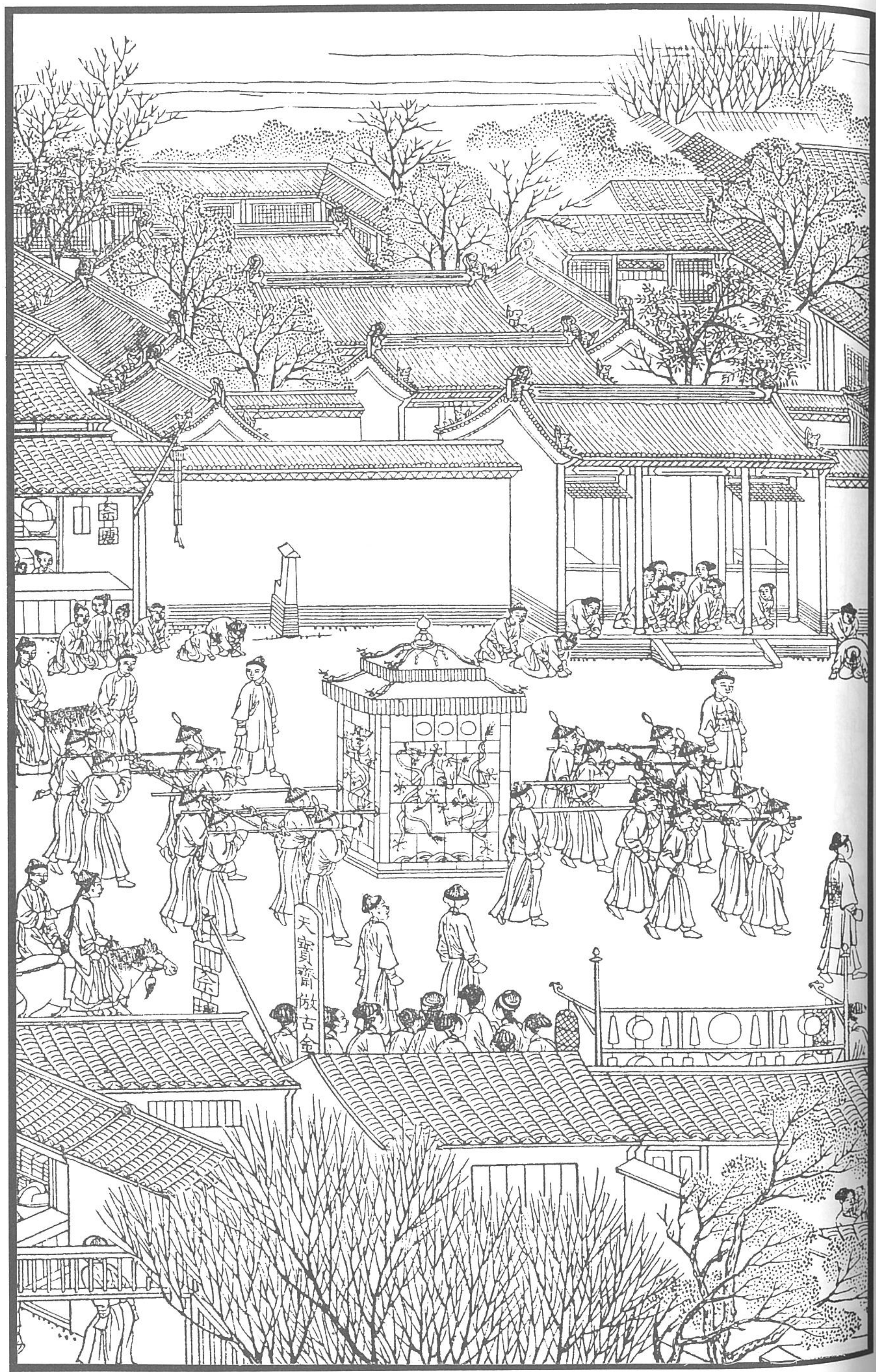
銀局は両替商、左の山椒魚を吊るしている店は薬局である。

画冊は、鹵簿を迎える街道に張られた絹の「綵棚」（目隠し）の裏側をも克明に描いている。薬局の正面の店は反物屋で、台の上には算盤が見える。左の「恭祝萬寿無疆」と書かれた台の上では、楽隊が妙なる調べを奏でている。「萬寿無疆」は天子の長寿を称える言葉で、「無疆」は限りないことをいう。


禮部等戲臺
共樂昇平
堯天廣大騰六合之歡聲
舜日光華裕萬年之景福


禮部等在此北廣濟寺恭誦萬壽經
同祝堯天
萬壽無疆
萬福攸同
演金經而介福如日月之升恆
南山祝聖壽福比岡陵
北海注仙齡算齊箕翼
名酒發店



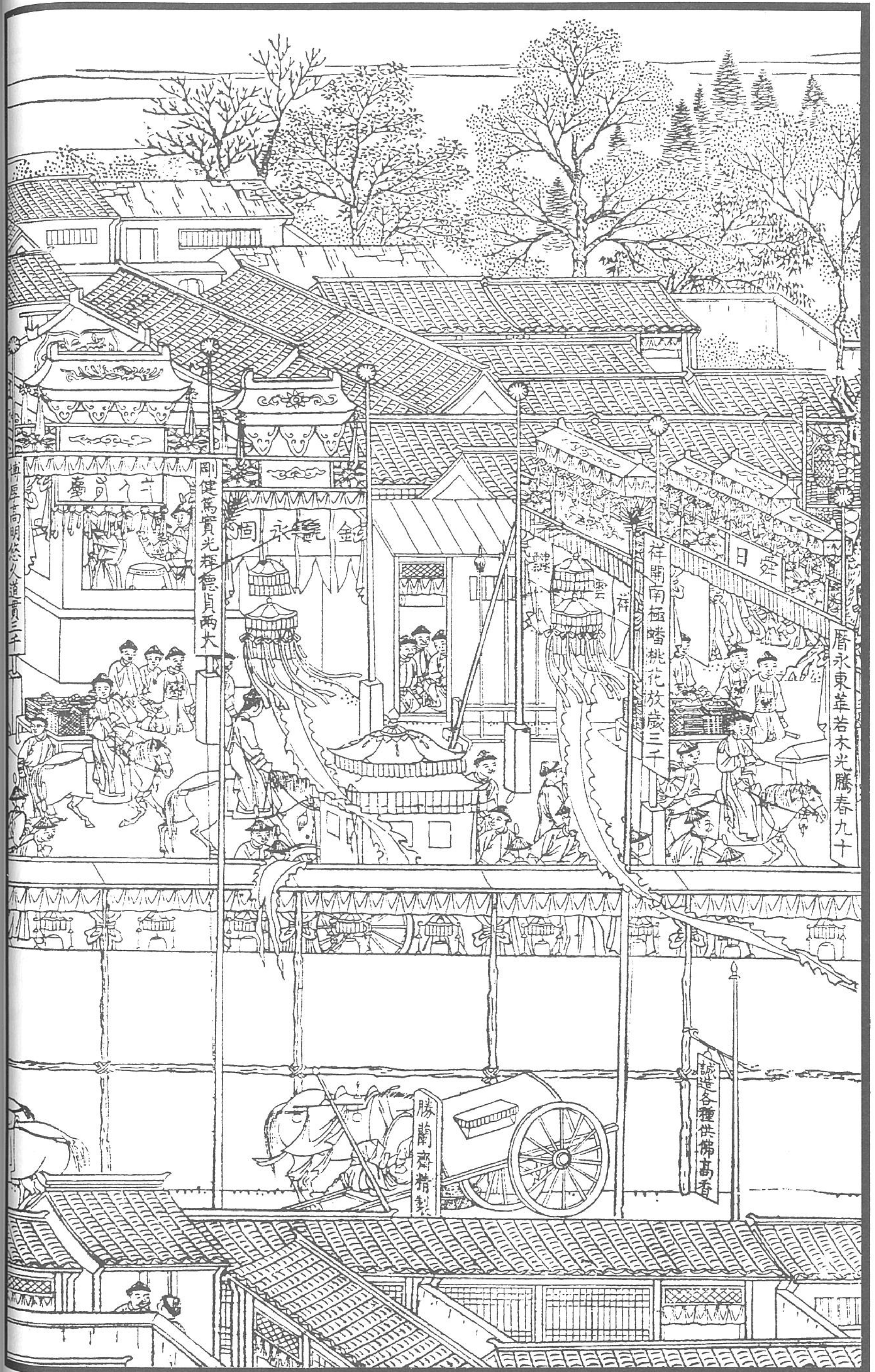


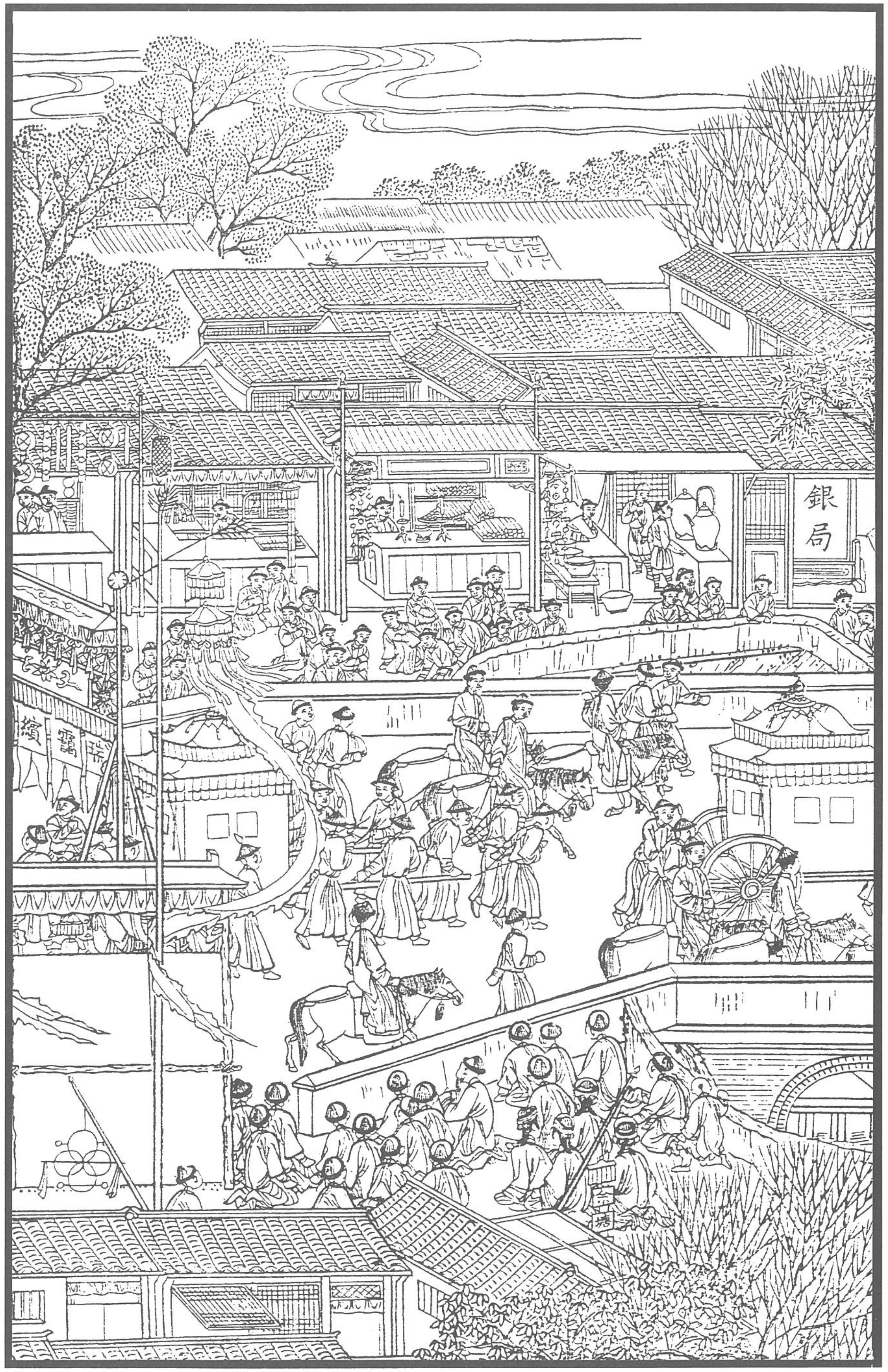
右上は広済寺で、ここでは礼部等が「萬寿経」を唱えた。寺には「萬寿無疆」の額を飾り、門前には僧侶の跪く姿がある。現在の広済寺は阜成門大街にあり、場所は異なっているが、明代の地図には四牌坊の西側のほかに、この場所にも広済寺を記している。

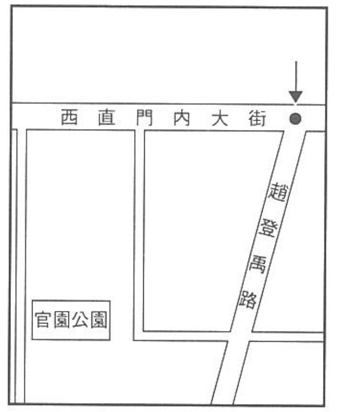
右の戯台では、扮装を凝らした楽隊によって祝寿の音楽が奏でられている。彼らの扮装は見るところ「八仙」(鍾離権・張果老・韓湘子・李鉄拐・曹国舅・呂洞賓・藍采和・何仙姑)であろう。

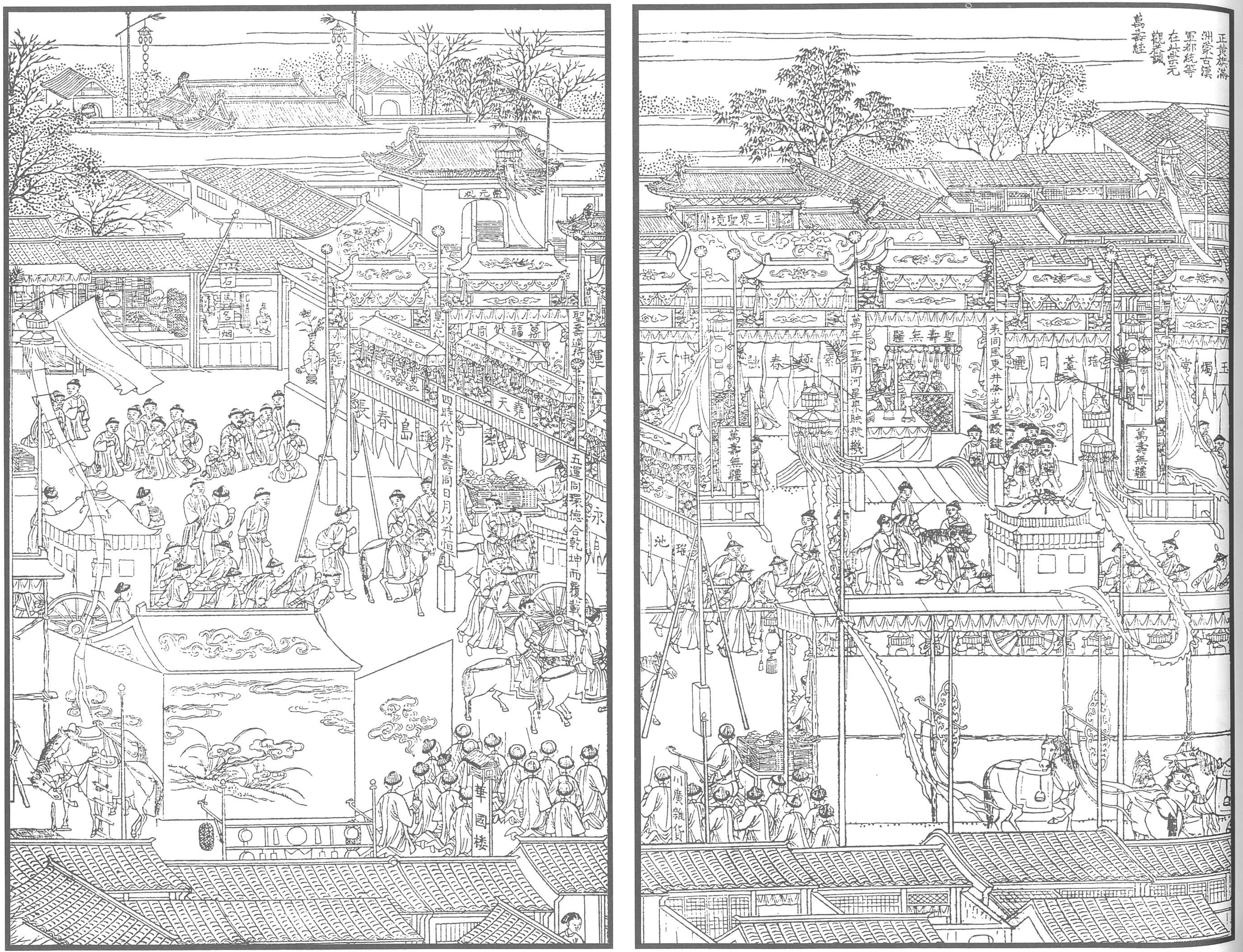
十六名の担ぎ手によって龍の文様がある「轎」が担がれて進む。ここに乗っているのは皇太后と考証されている。

左の橋は明代には「紅橋」、清末には「横橋」といった(旧都文物略)ようである(「八旬萬寿盛典図」には「紅橋」の文字を記す)。橋のたもとの「名烟」と看板を出した煙草屋では、線香を一本立てている。左の戯台では、俳優も跪座して行列を見送っている。


博厚高明悠久道貫三千
剛健篤實光輝德貞兩大
祥開南極蟠桃花放歲三千
曆永東華若木光騰春九十
誠造各種供佛高香
勝蘭齋精製


銀局

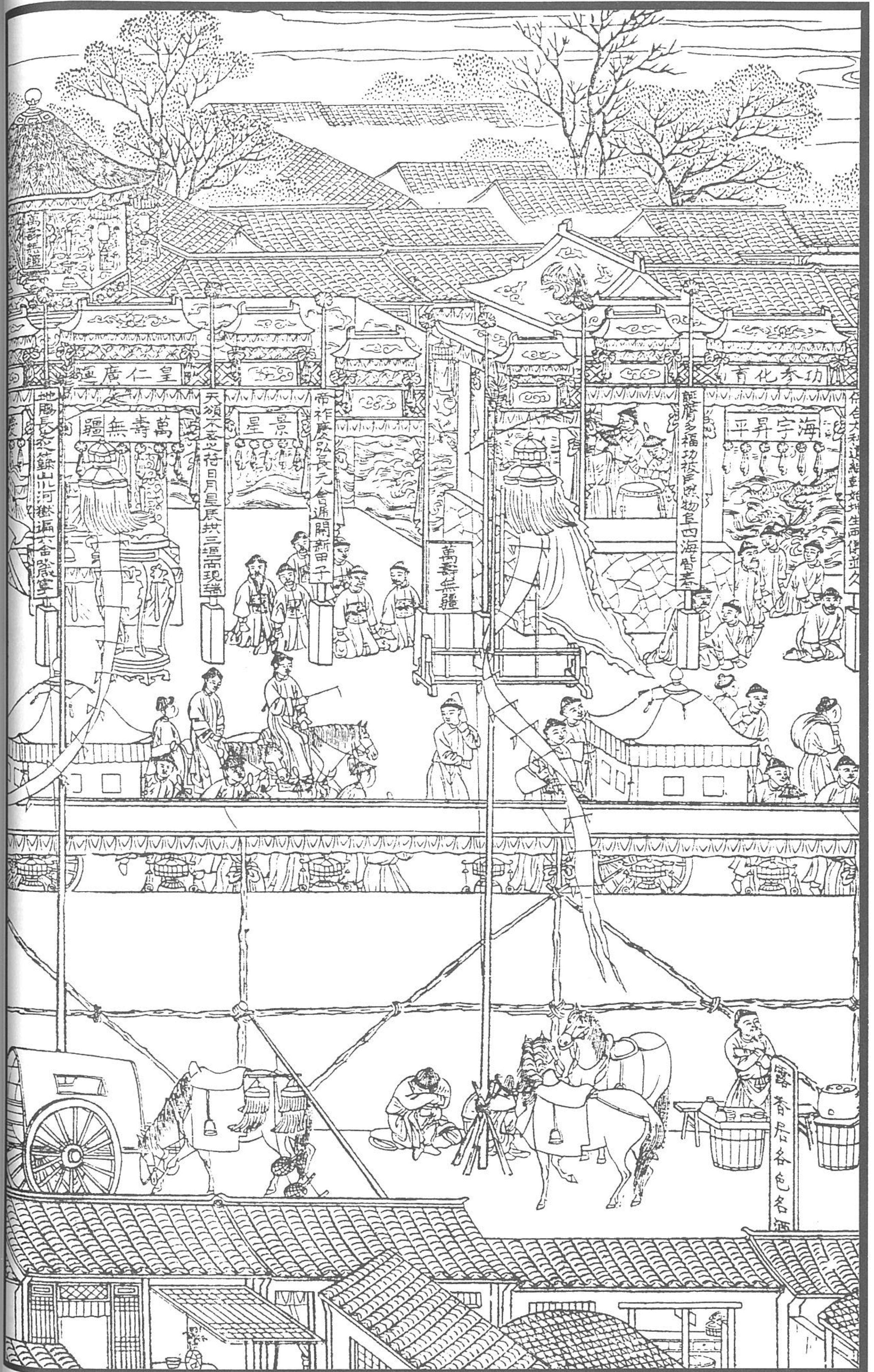

西直門内大街
趙登禹路
官園公園

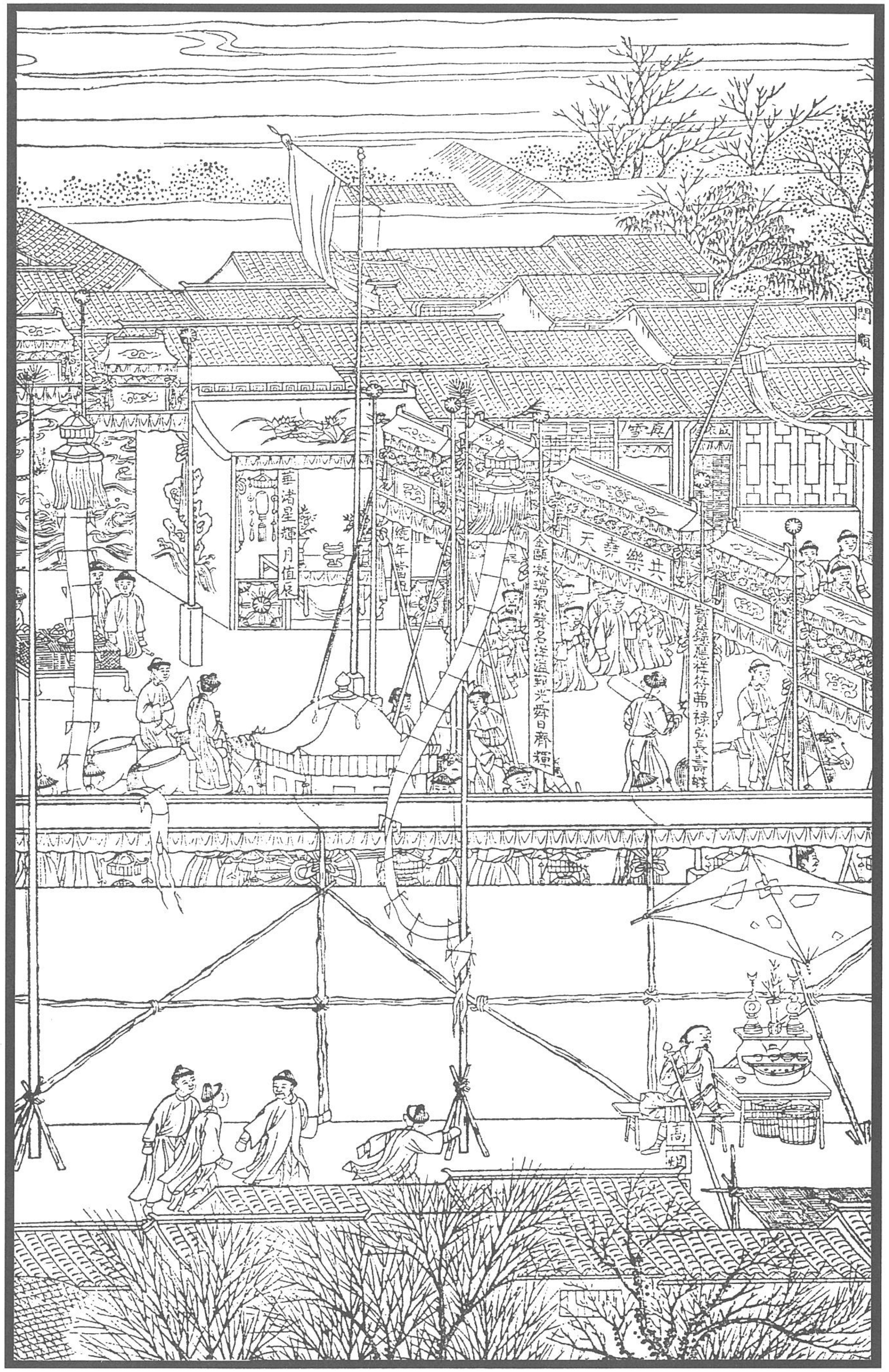


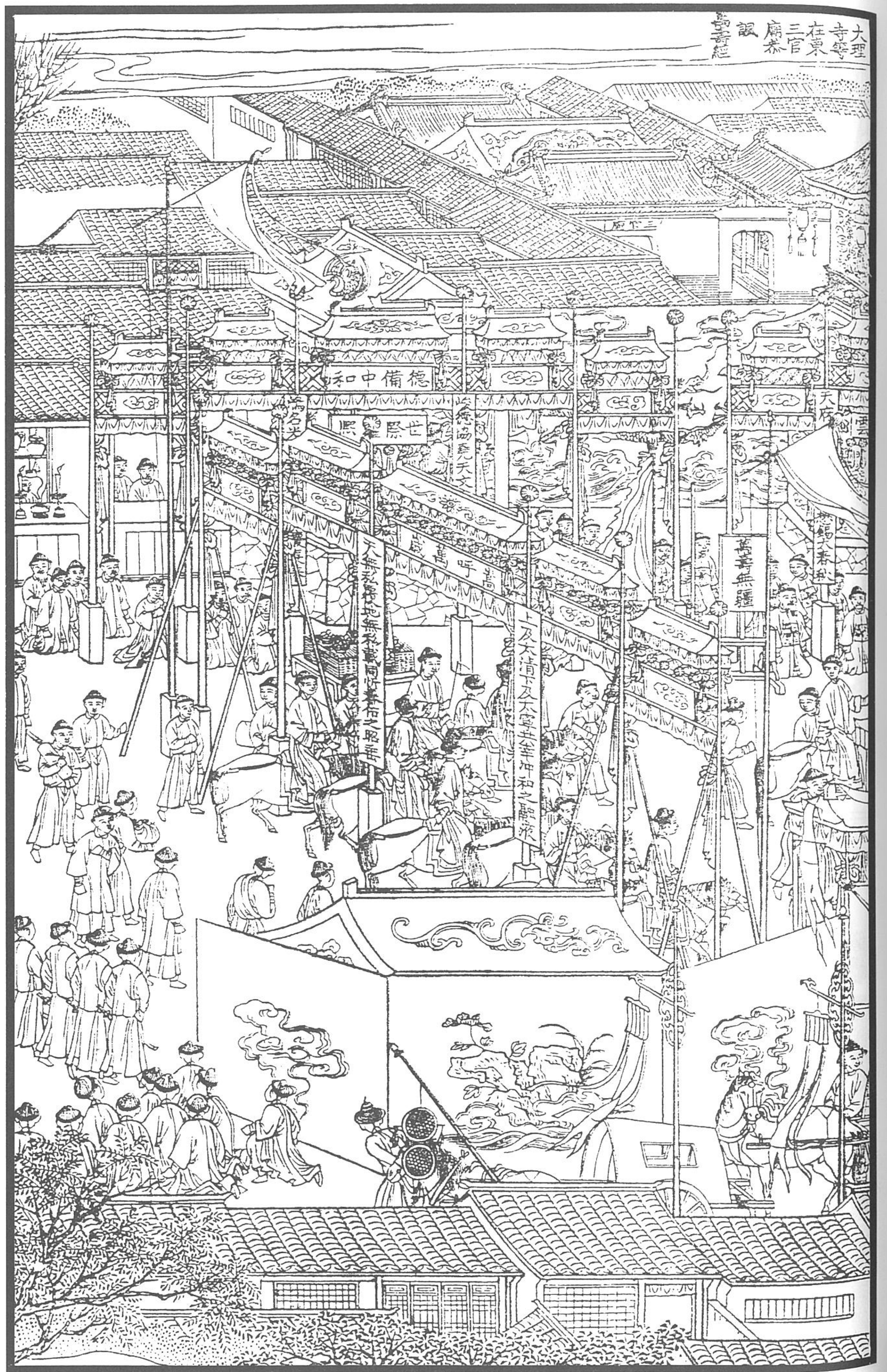
右の馬車を警護している中には、多数の騎馬の女性が見られる。服装は長めのコートを羽織っており、男性とは異なっている。

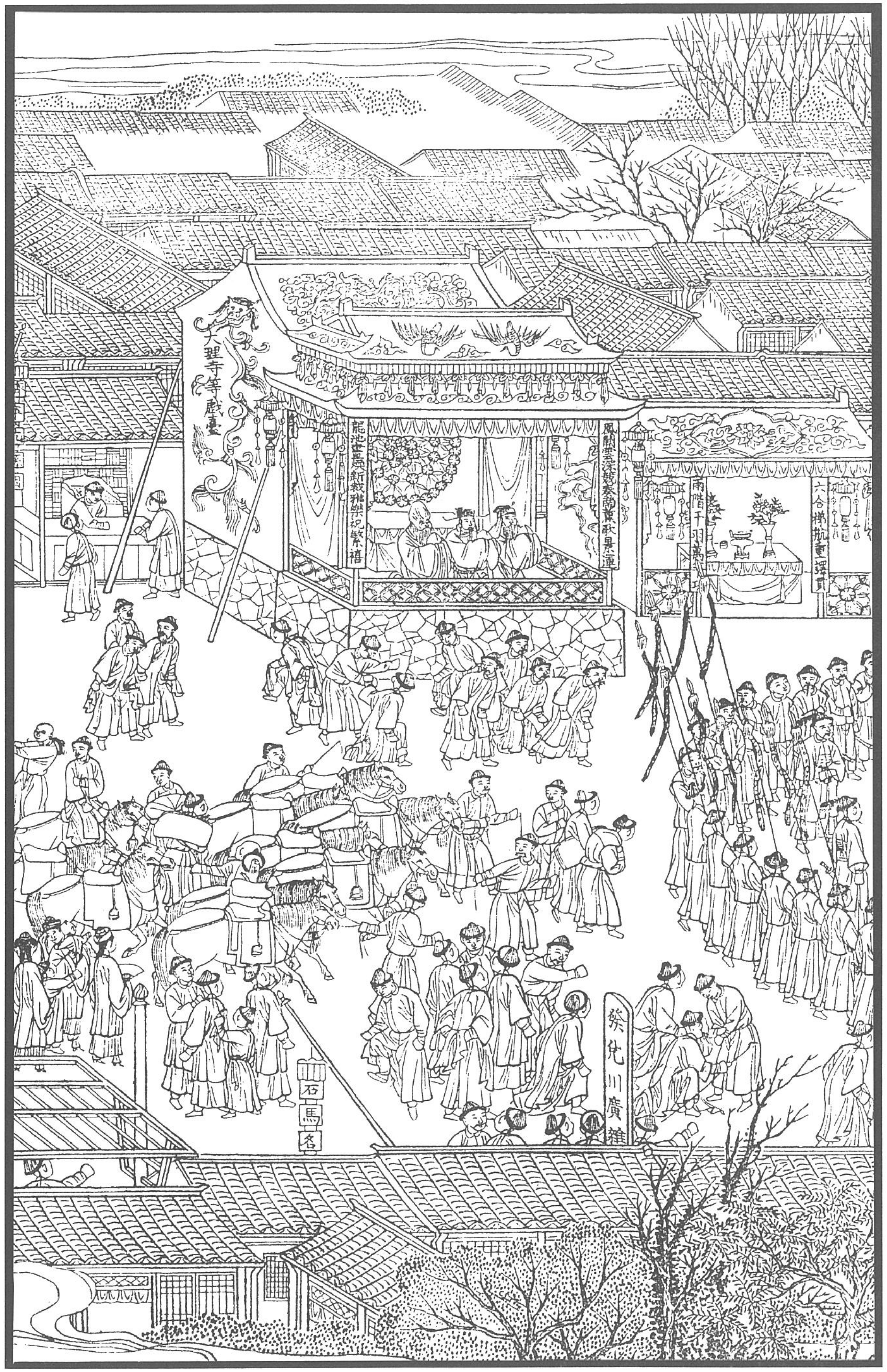
「三界聖境」と題したひときわ立派な「牌坊」が作られている。

左手前の「川広雑貨」は「四川」「広西」の雑貨を扱う店か。左向かいの寺廟は「崇元観」、壮大な規模の道教寺院である。

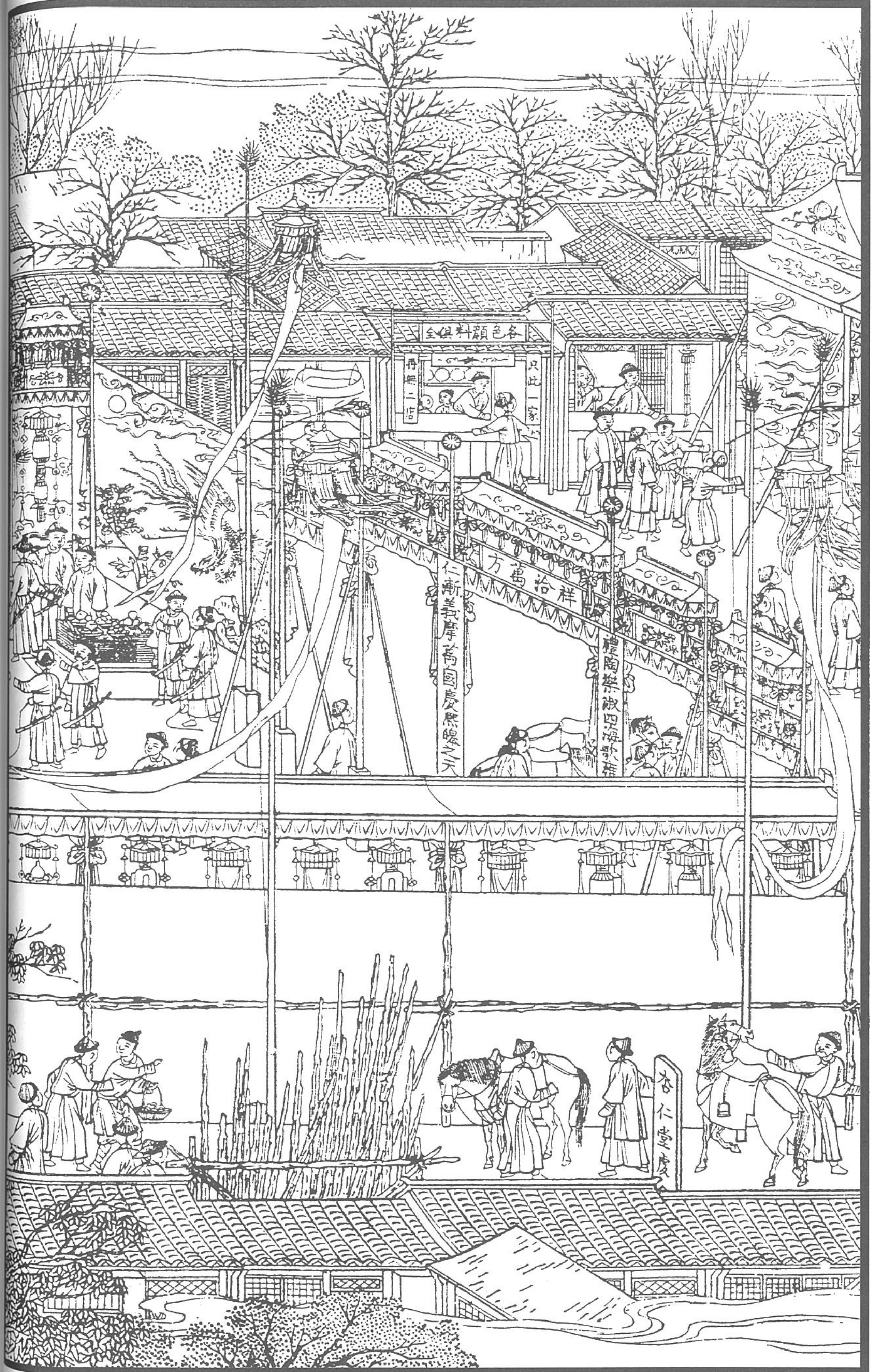


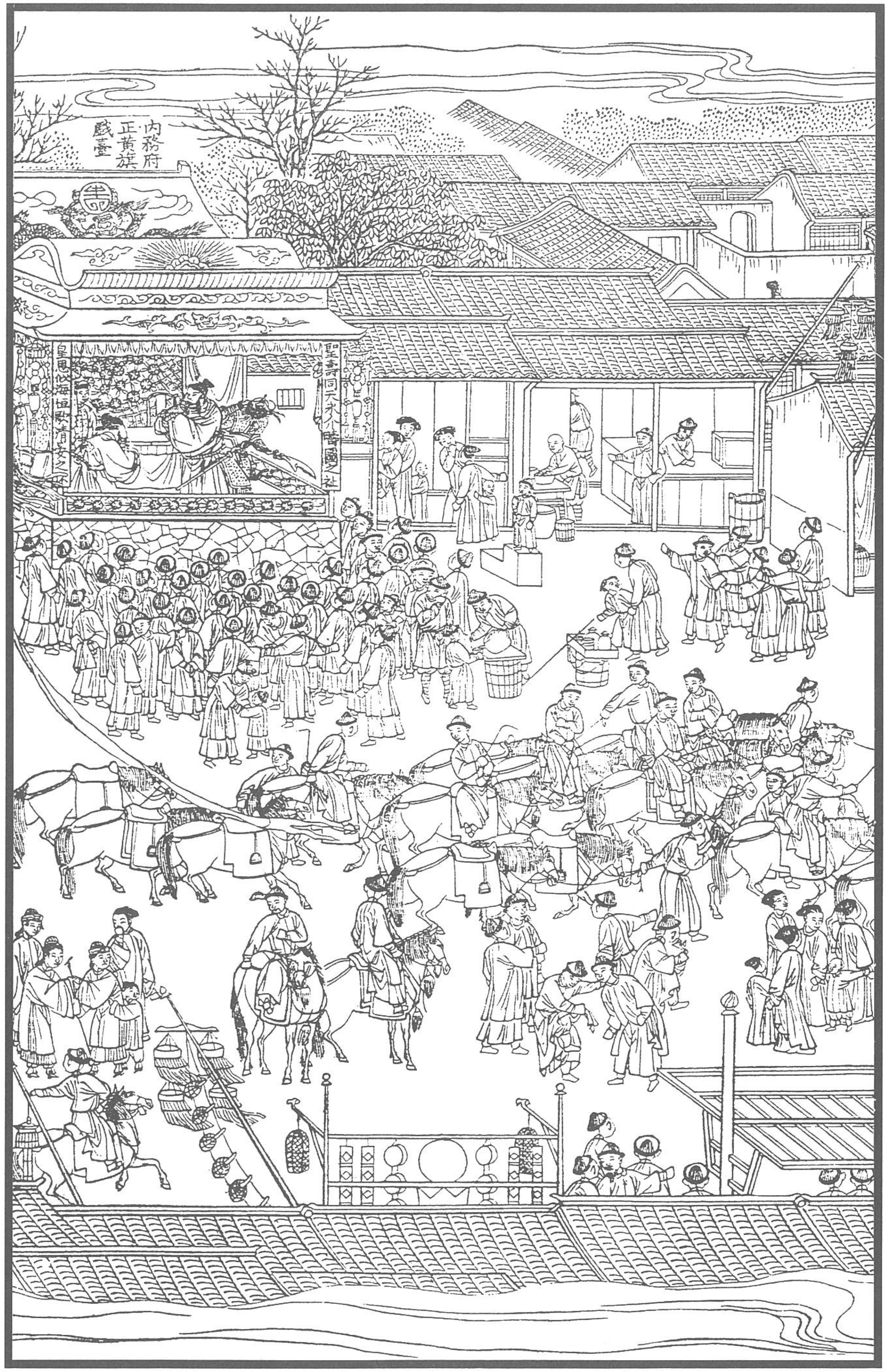


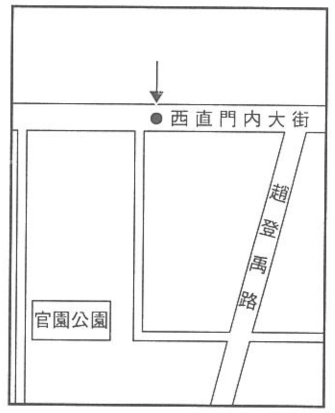


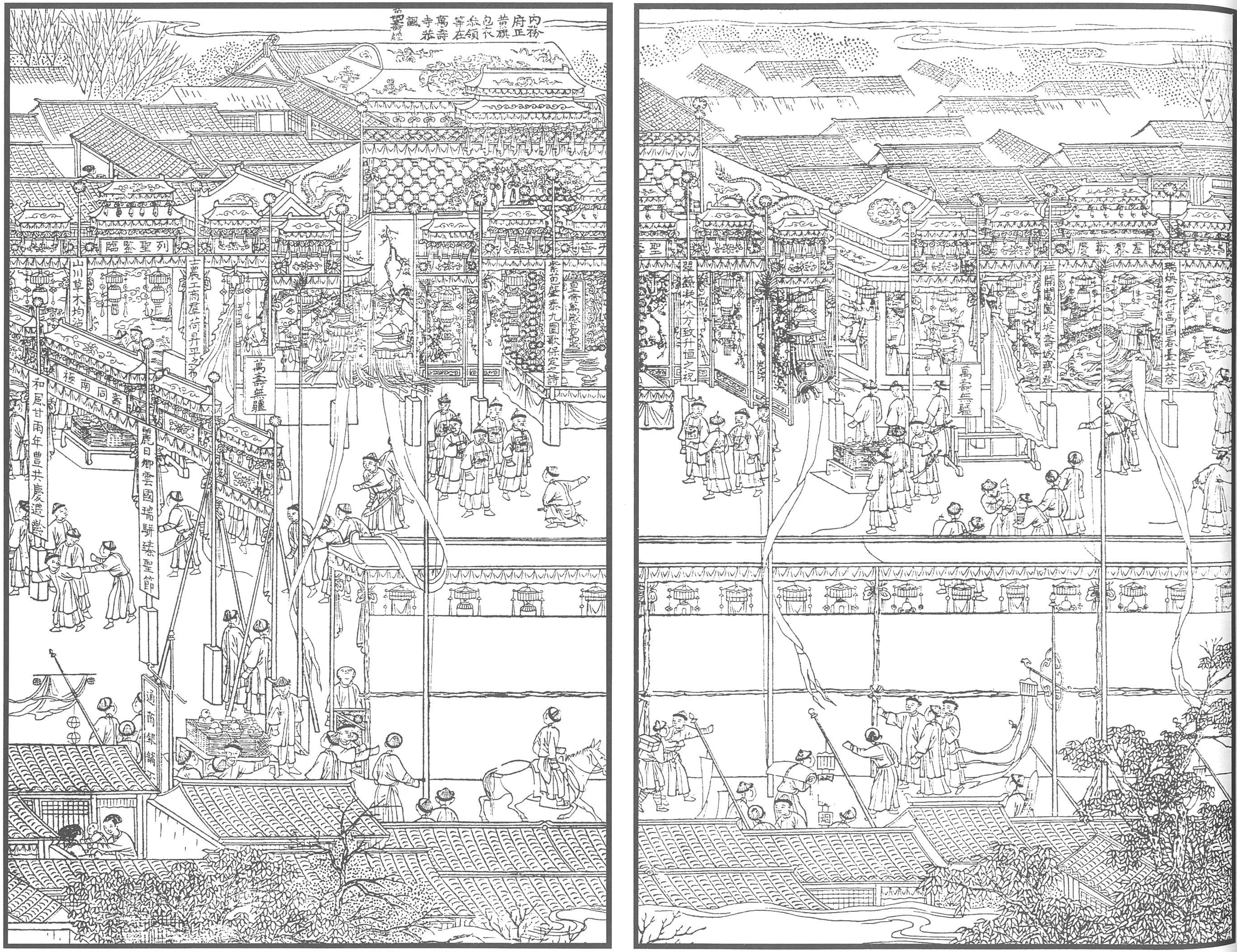


延々と続く絹のガード「綵棚」。その後ろ側に見える人間模様も活写する。破れを補修した覆いの下で縁台に腰掛けて、寛ぐ男。その左に馬を繋いで寝込む警護の者。隣には、飲み物を売る商人が腕組みをしている。


各色顔料俱全
只此一家
祥洽萬方

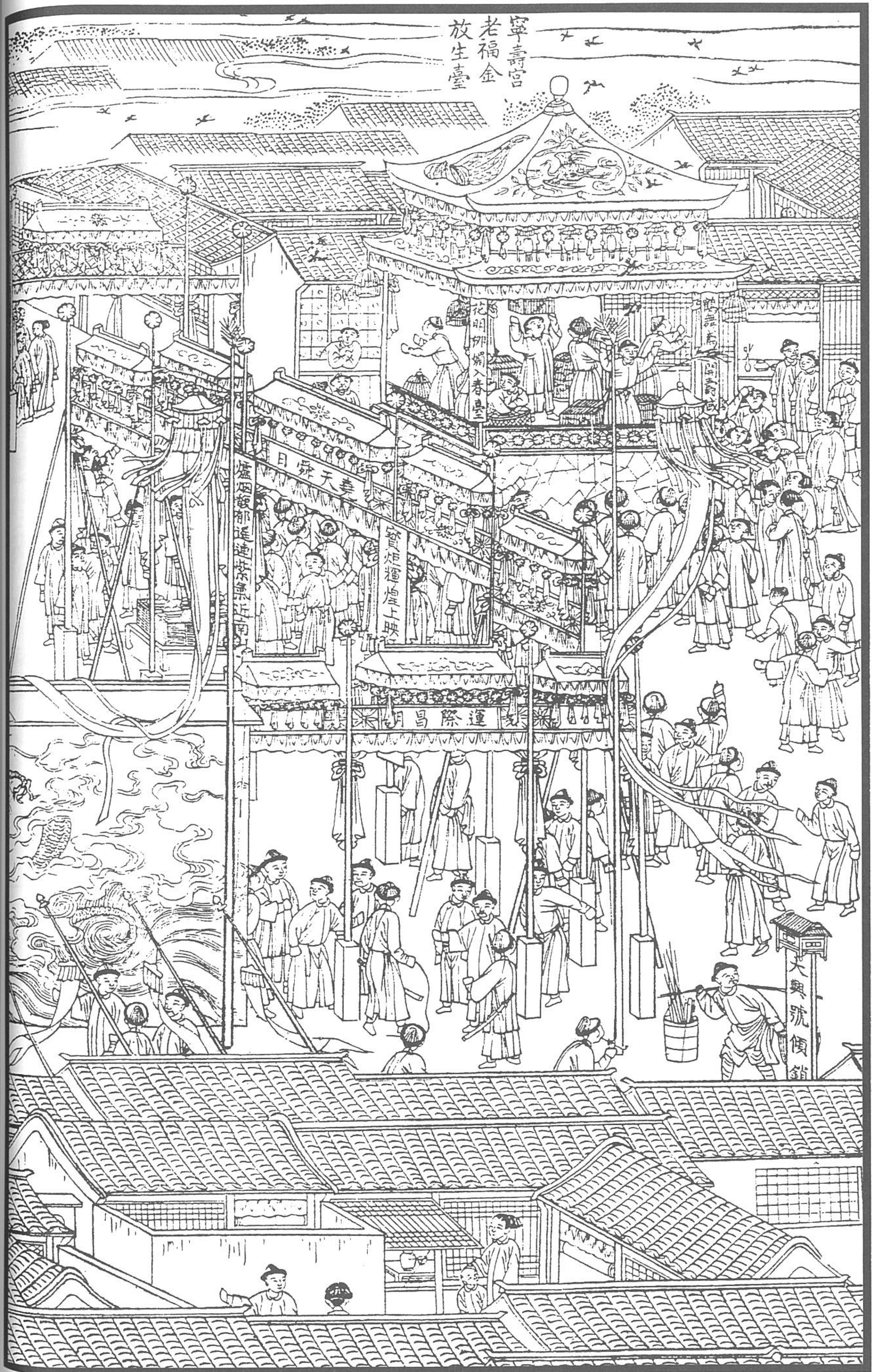

内務府
正黄旗
戲臺


西直門内大街
趙登禹路
官園公園

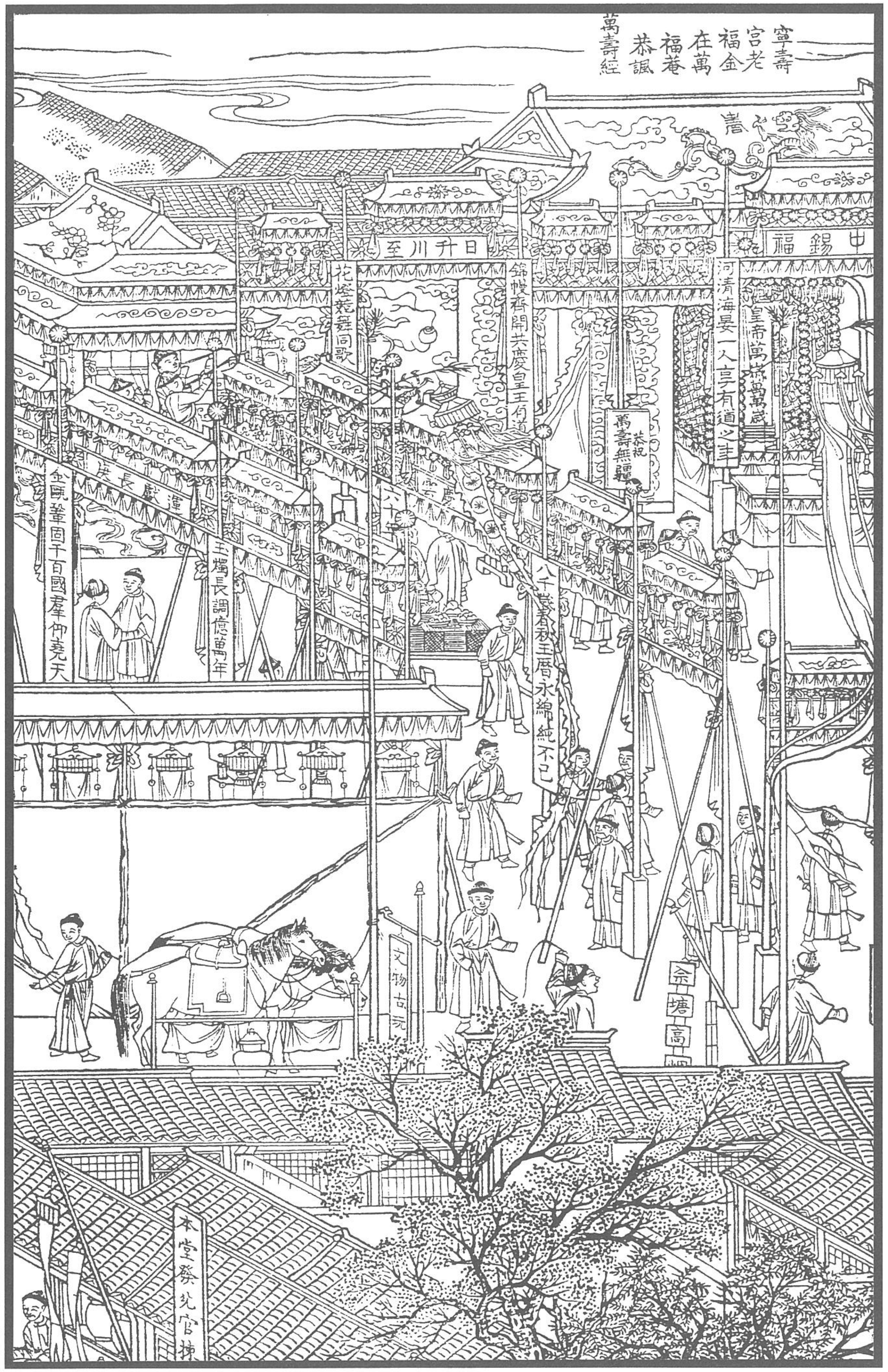


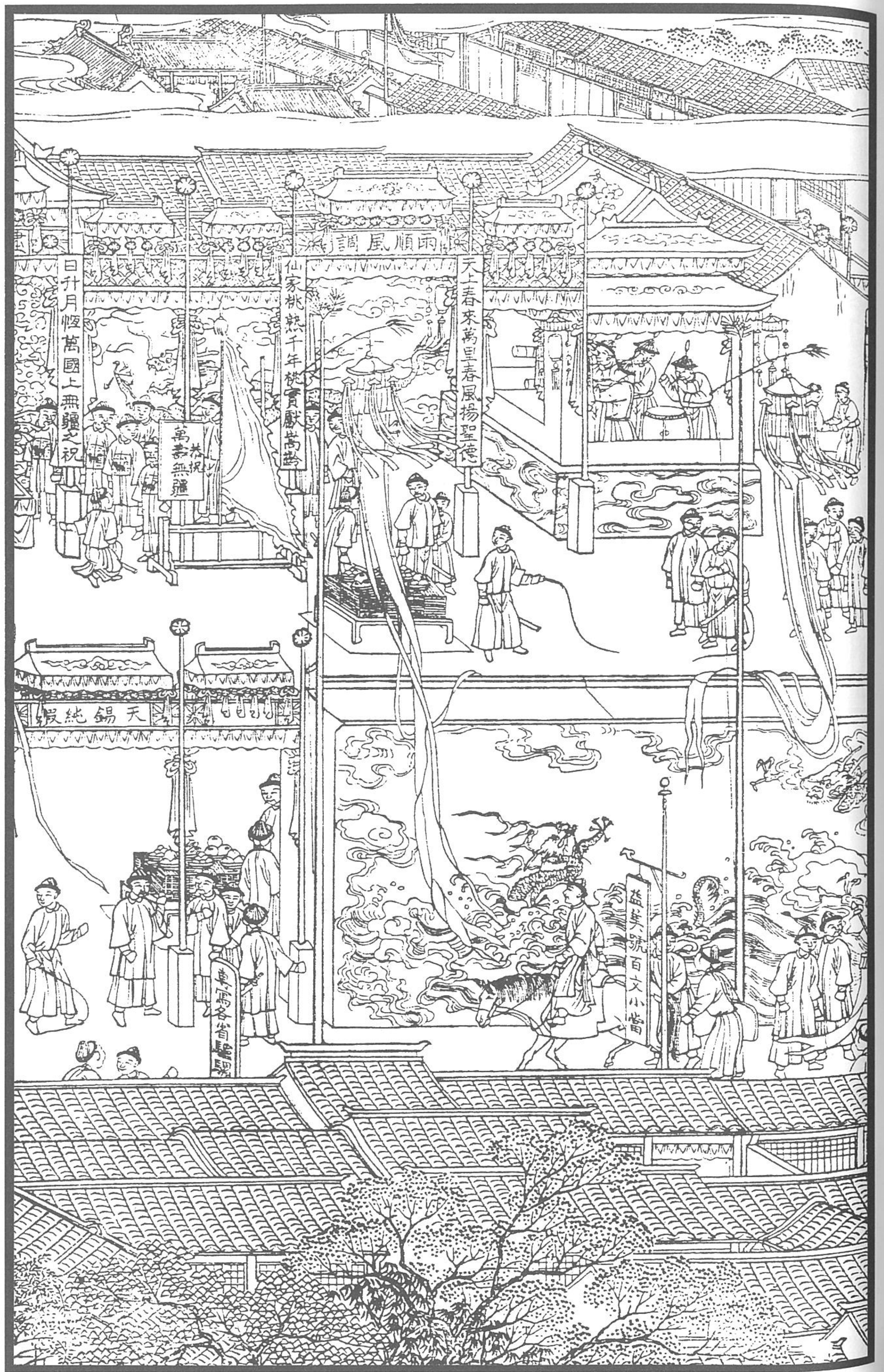
右手の戯台で演じられている戯曲はどうやら三国志の関羽にまつわる「関公戯」であるらしい。立派なひげを付けた役者に従う武者は、周倉の持つような大振りの青龍刀を携えている。

　芝居に疲れたものたちのために、後ろで飲み物を振る舞っている。


寧壽宮
老福金
放生臺


本行發賣各種雜貨

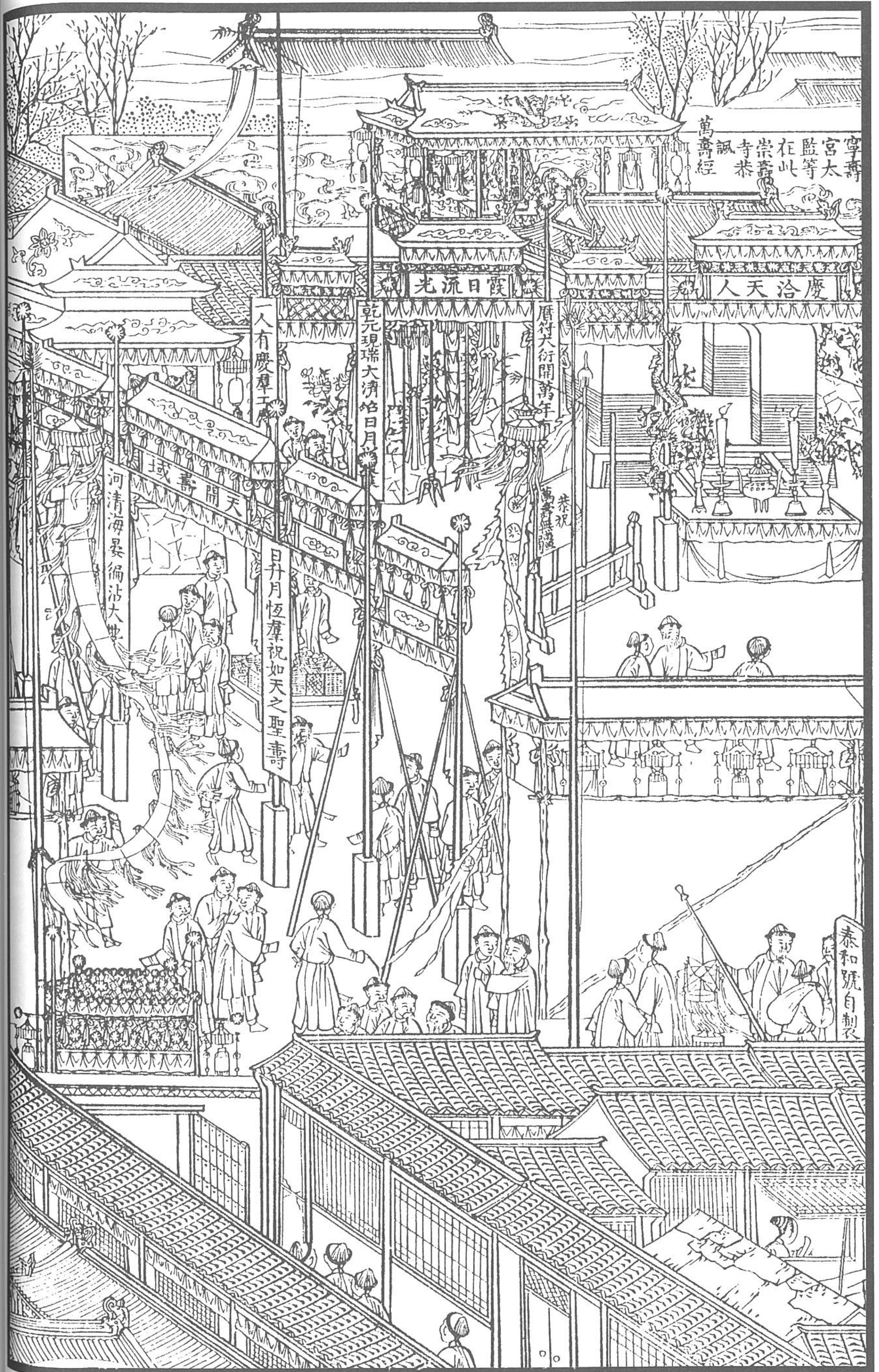


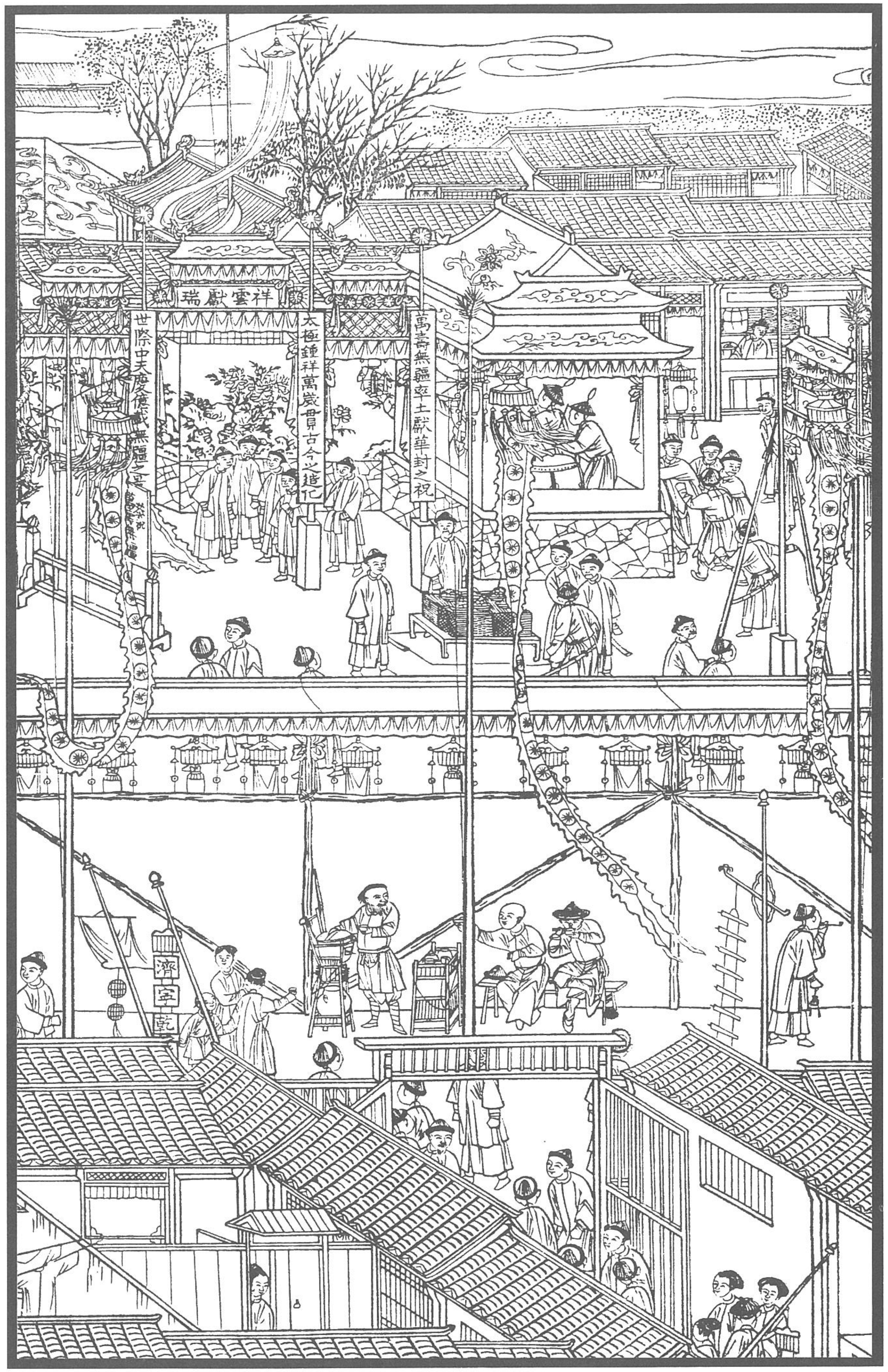


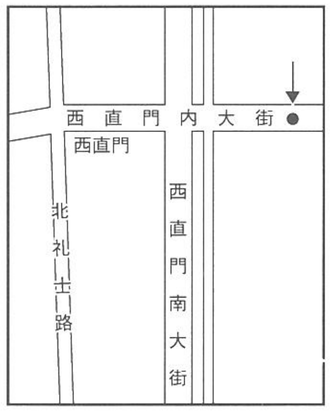
右手の下には子どもの喜ぶおもちゃなどの雑貨を担ぐ「売貨郎」（雑貨を商う男）がいる。「でんでん太鼓」を持っている子どももいる。売貨郎の手にも「でんでん太鼓」が見え、担いだ雑貨の中には、各種の面、泥人形などが見える。

左の放生台では、籠に入れた鳥を「放生」している最中である。放たれた鳥が家並みの彼方に飛んで行くさままで、細かく描き込んでいる。放生会は仏教の不殺生の思想に基づいて、捕えられた生類を山野や池沼に放ちやる儀式のことをいう。本来は八月十五日に行うが、長寿を寿ぐために、ことさらにこうした儀式を萬寿節に行ったのである。

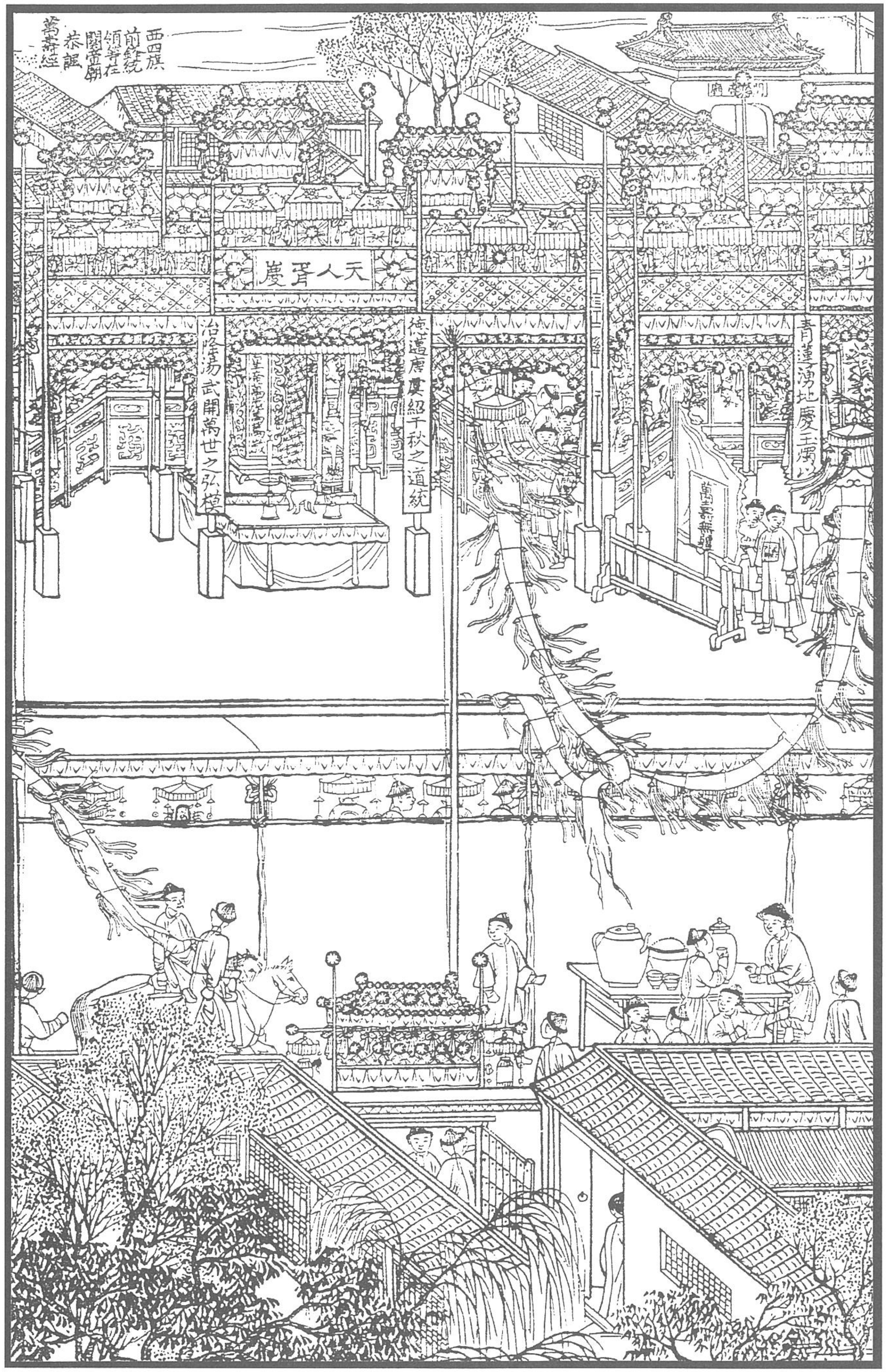
左下には、「人参」を商う薬材店が描かれ、その上には「文物古玩」と書かれた看板を出した骨董商の店がある。

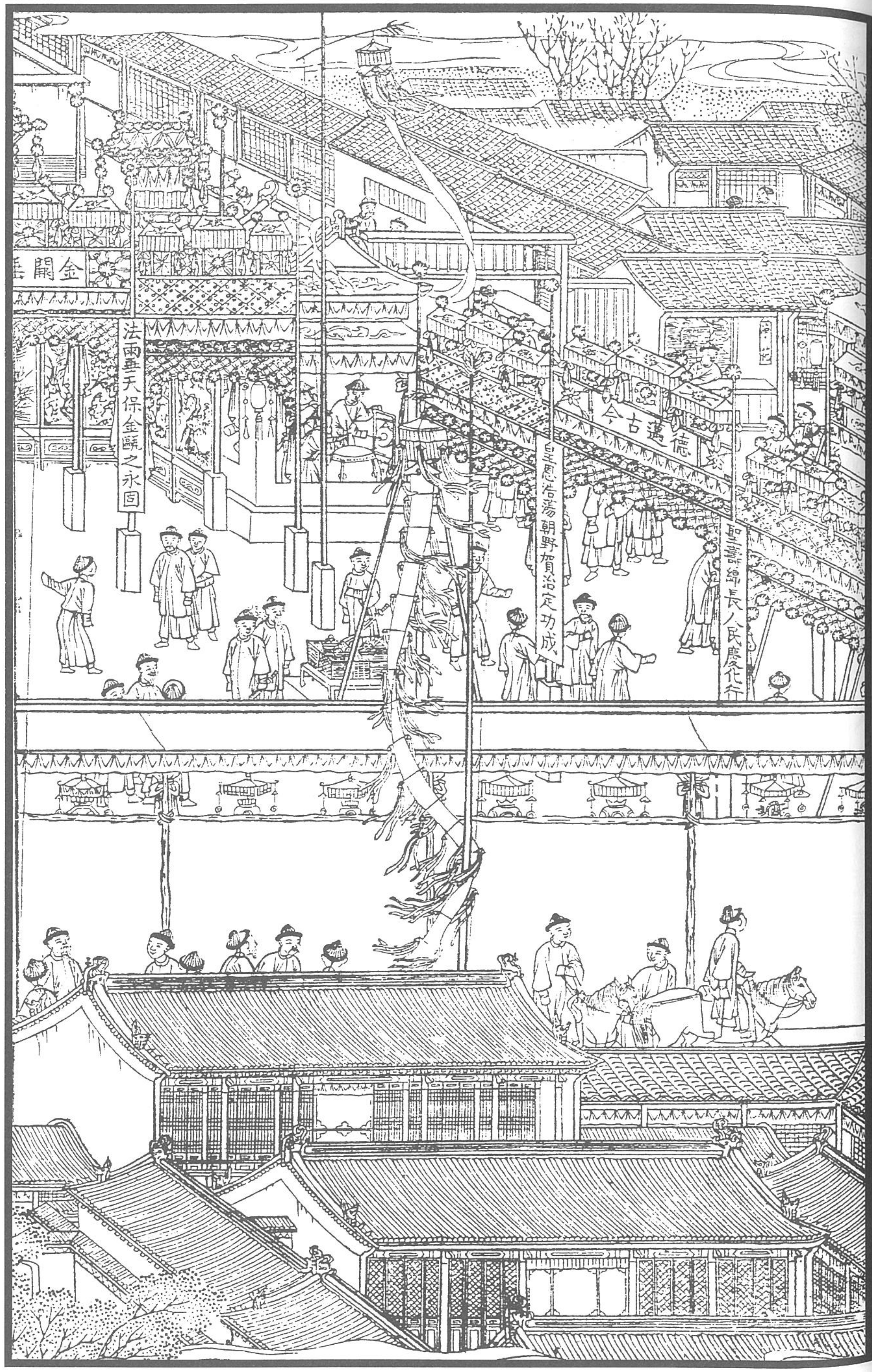

寧壽宮太監等在此崇壽寺恭諷萬壽經
霞日流光
慶洽天人
一人有慶
乾元現瑞大清皓日月
曆符大衍開萬年
天開壽域

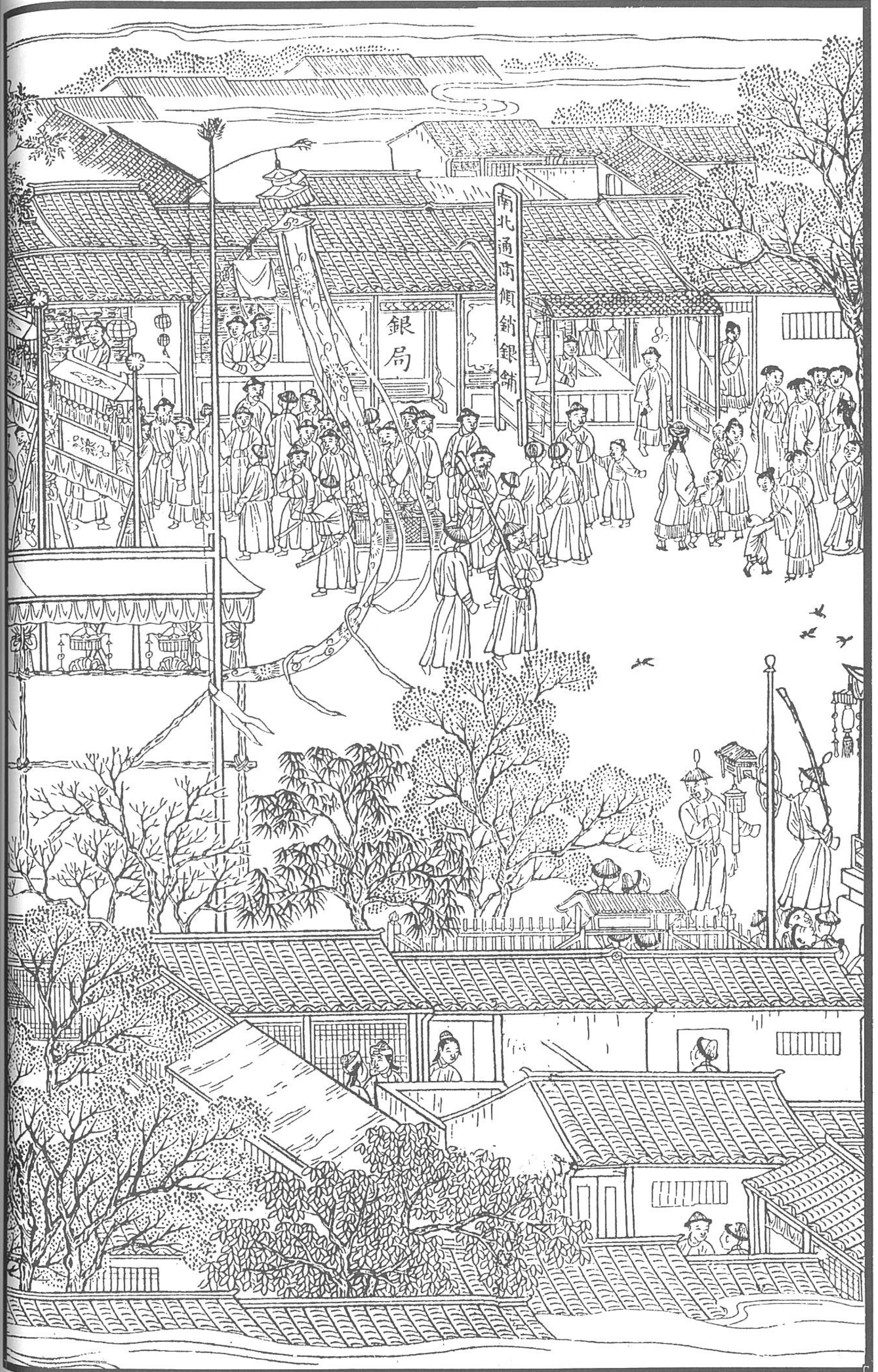

祥雲獻瑞
世際中天慶衍無疆之曼
太極鍾祥萬歲貫古今之進化
萬壽無疆率土獻華封之祝

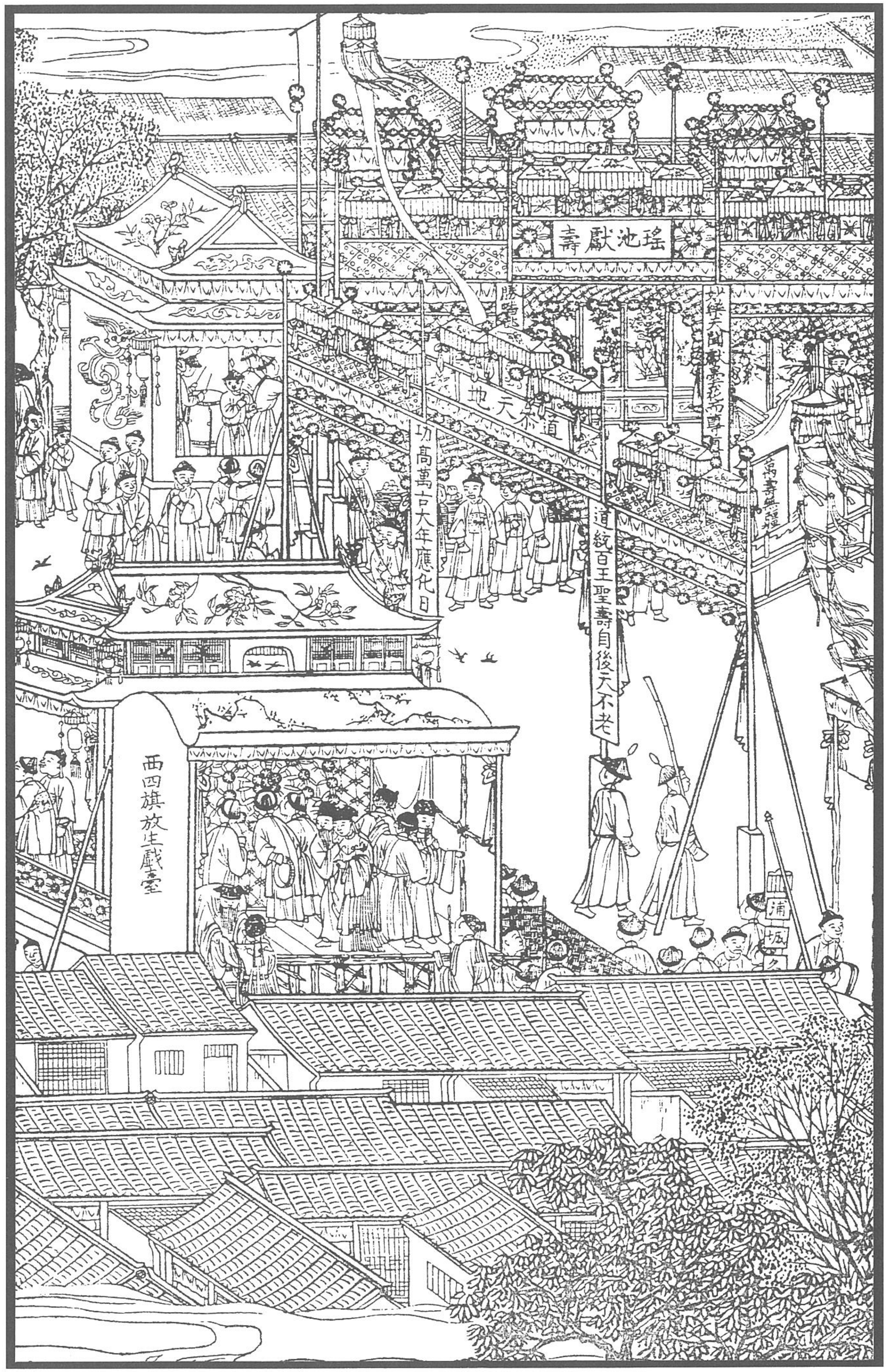

西直門内大街
西直門
北礼士路
西直門南大街

絹の覆いの裏側には「小喫」の商いをする男がいる。腰掛けに二人が座り、一人は帽子を脱いで話し掛けている。もう一人は箸を持って食べている最中である。その右には、煙管で煙草を吸う男の後姿がある。
左手奥には「関羽」を祀る「関帝廟」がある。





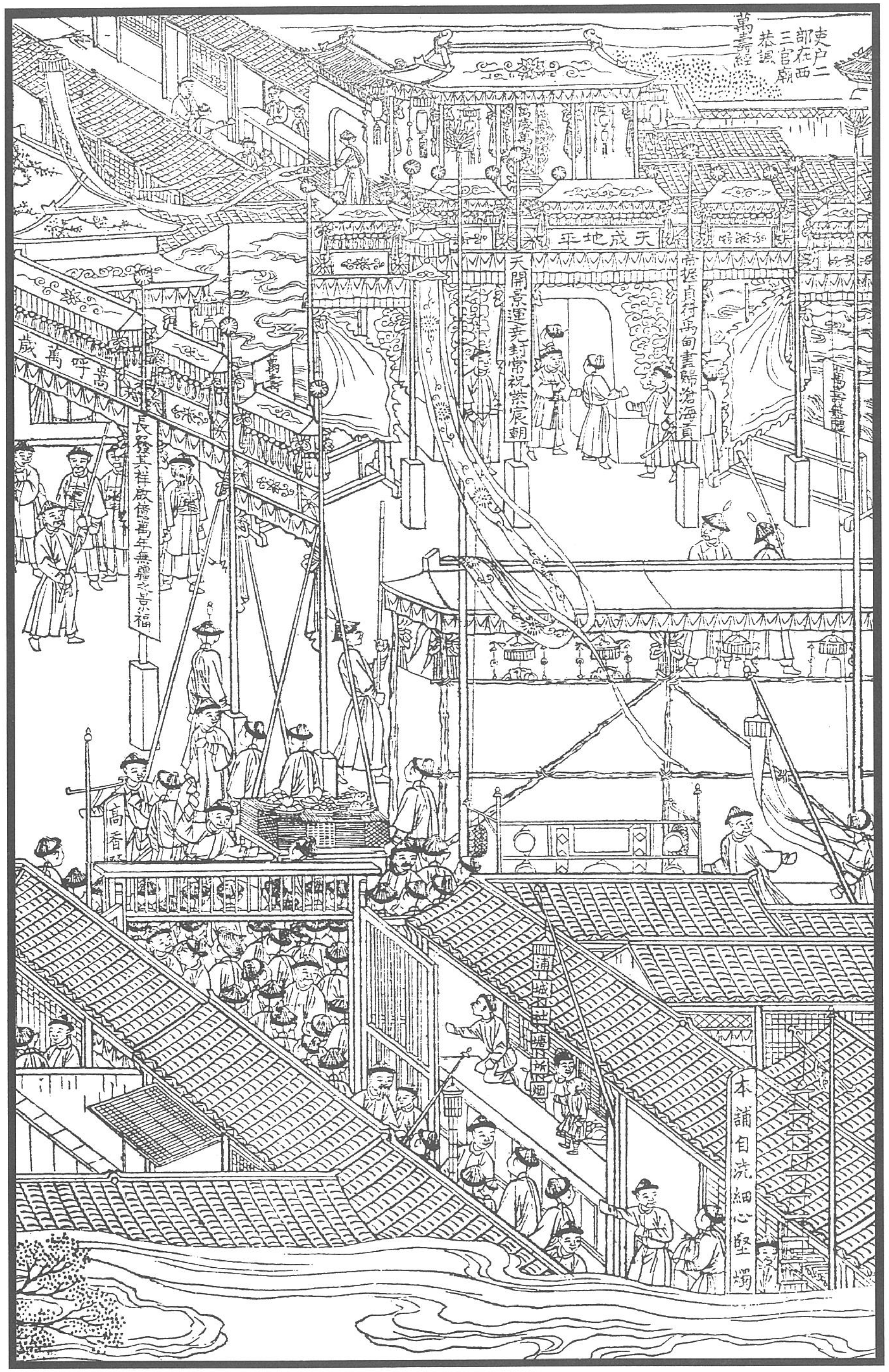

南北通商傾銷銀舖
銀局

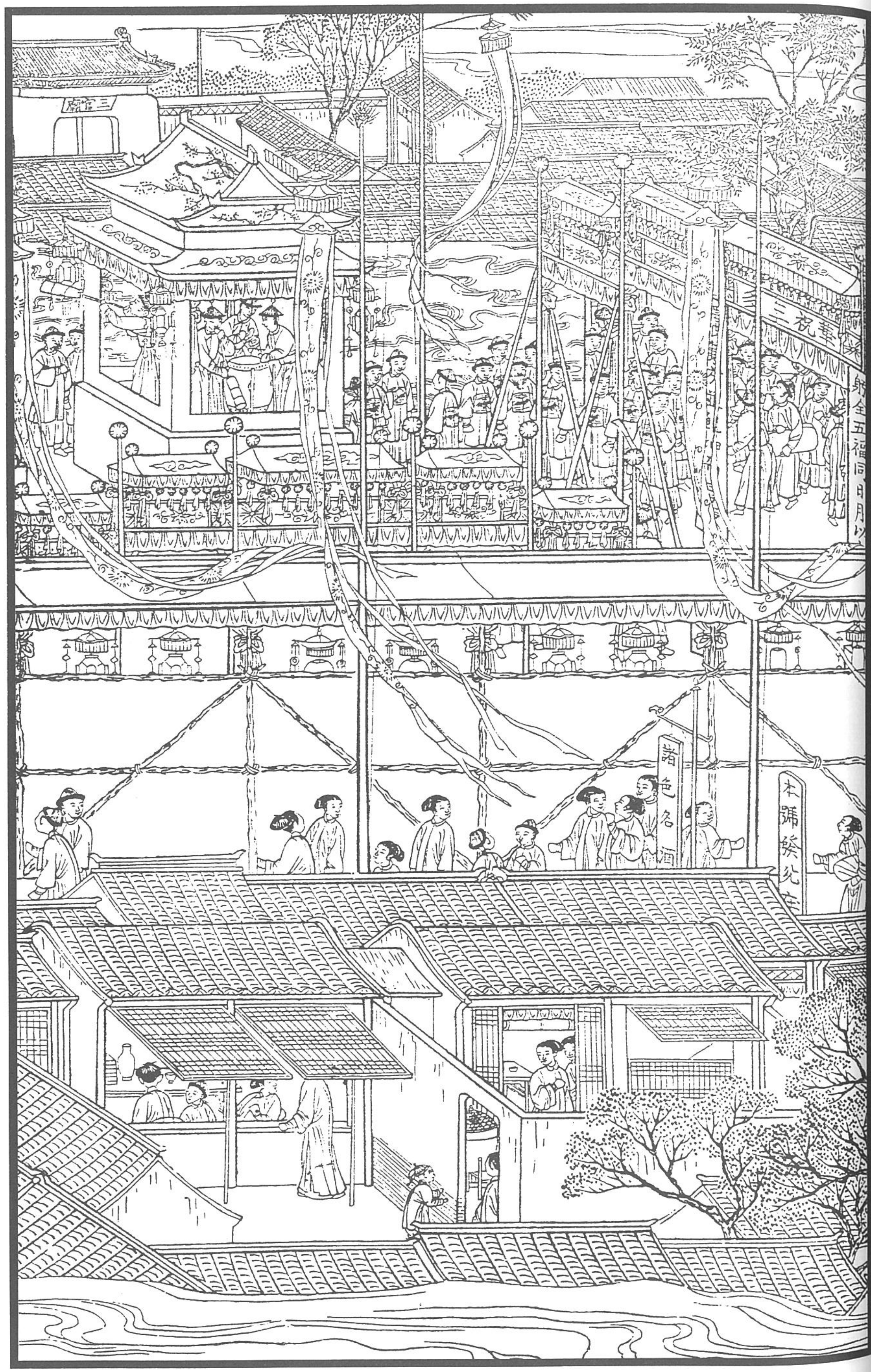

瑤池獻壽
道叅天地
功高萬古大年應化日
道統百王聖壽自後天不老
萬壽無疆
西四旗放生戲臺

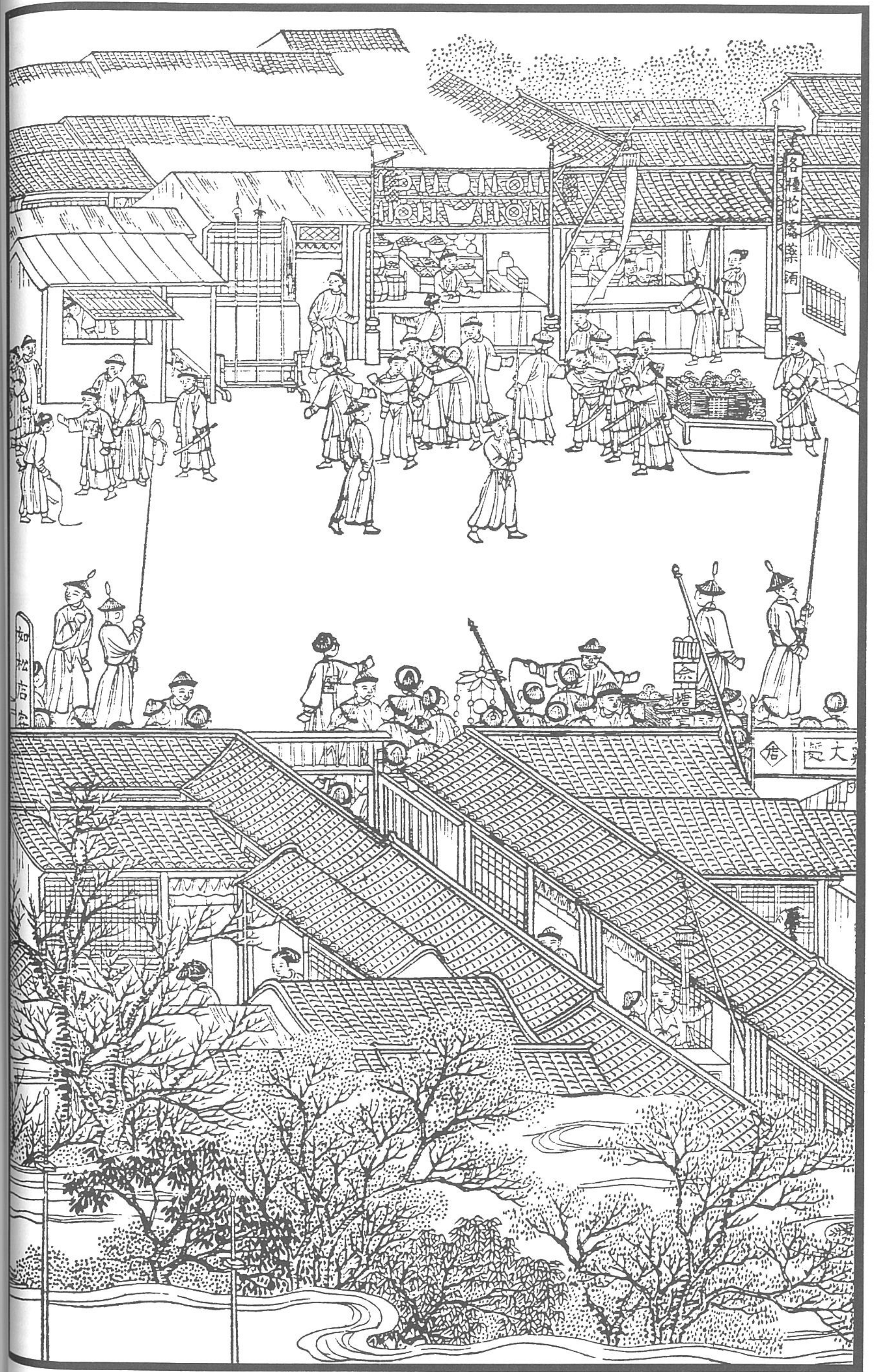
ここにも「放生戲台」が設置され、放たれた鳥が飛びかっている。手前の家の中の女性三人の被り物はいっぷう変わっている。

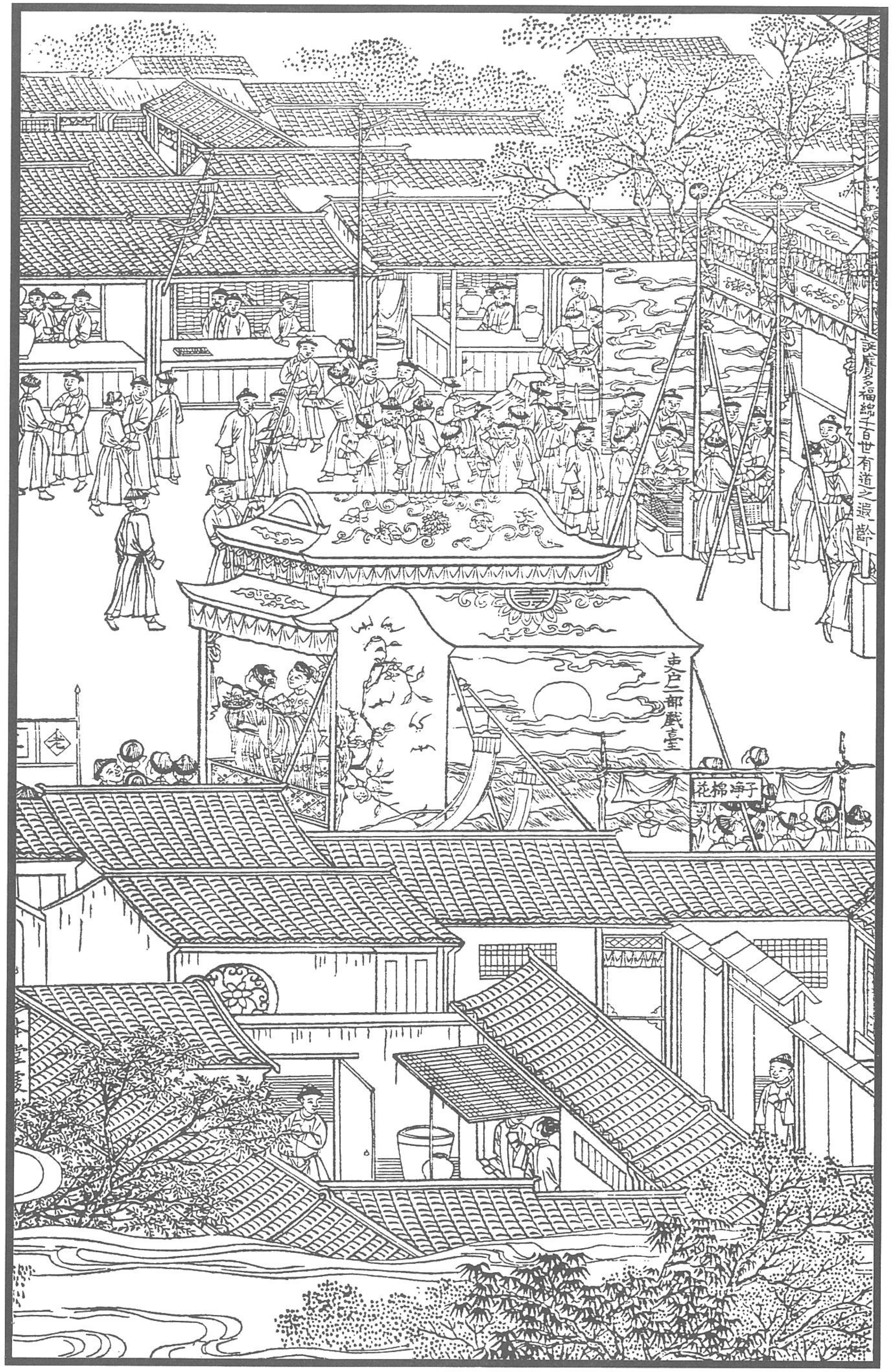
家の周囲の植物の描き分けぶりが、誠に巧みである。

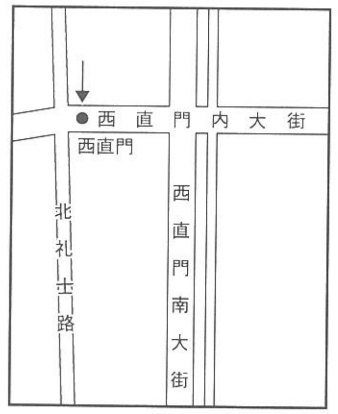
左手の横丁には「蝋燭」を売る店がある。その隣は「浦城社塘所烟」と書いた煙草屋である。これを含めて描かれた煙草屋は大変数が多く、この時期に喫煙の習慣が極めて深く民衆の間に浸透していたことが知られる。

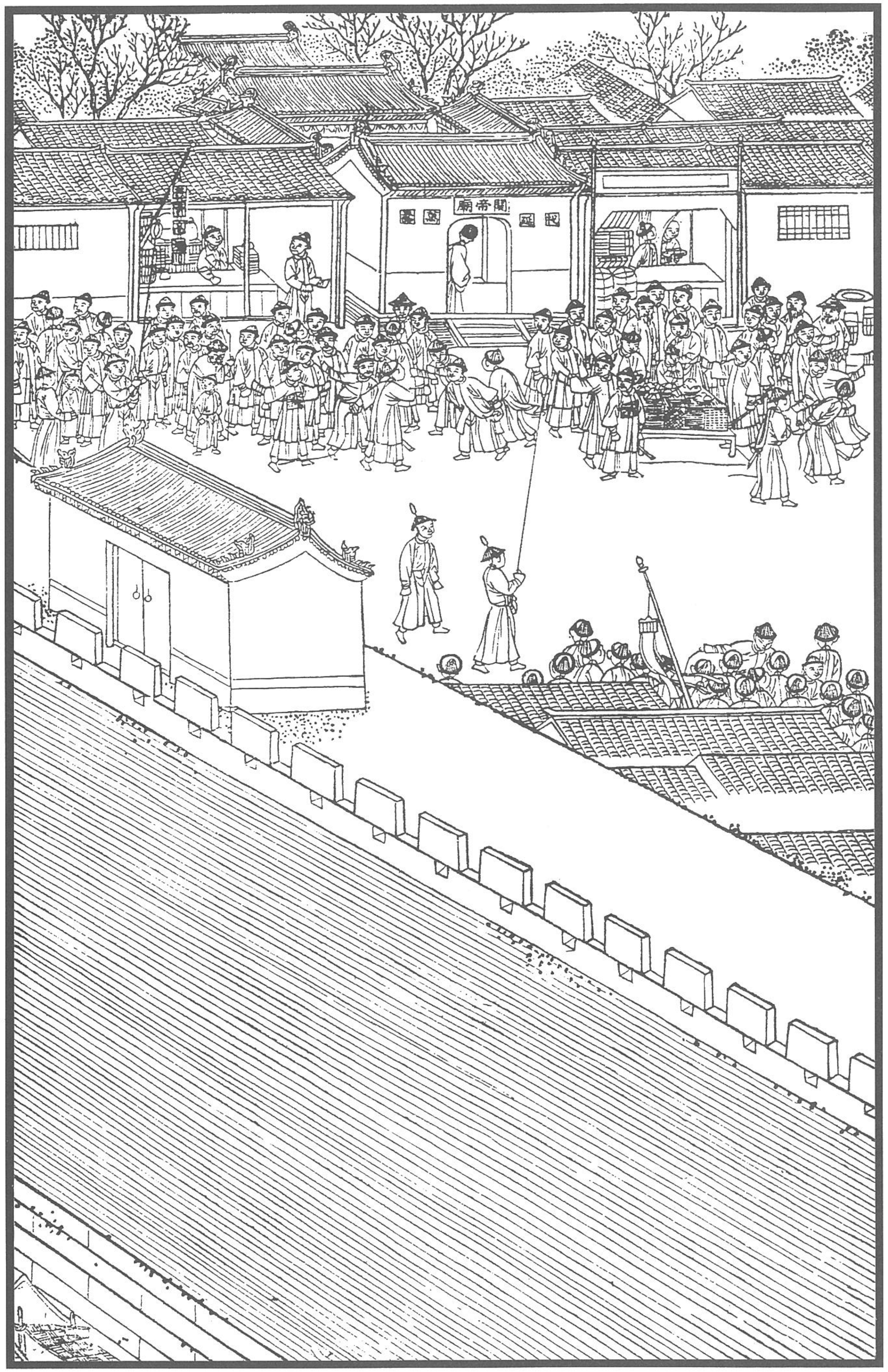


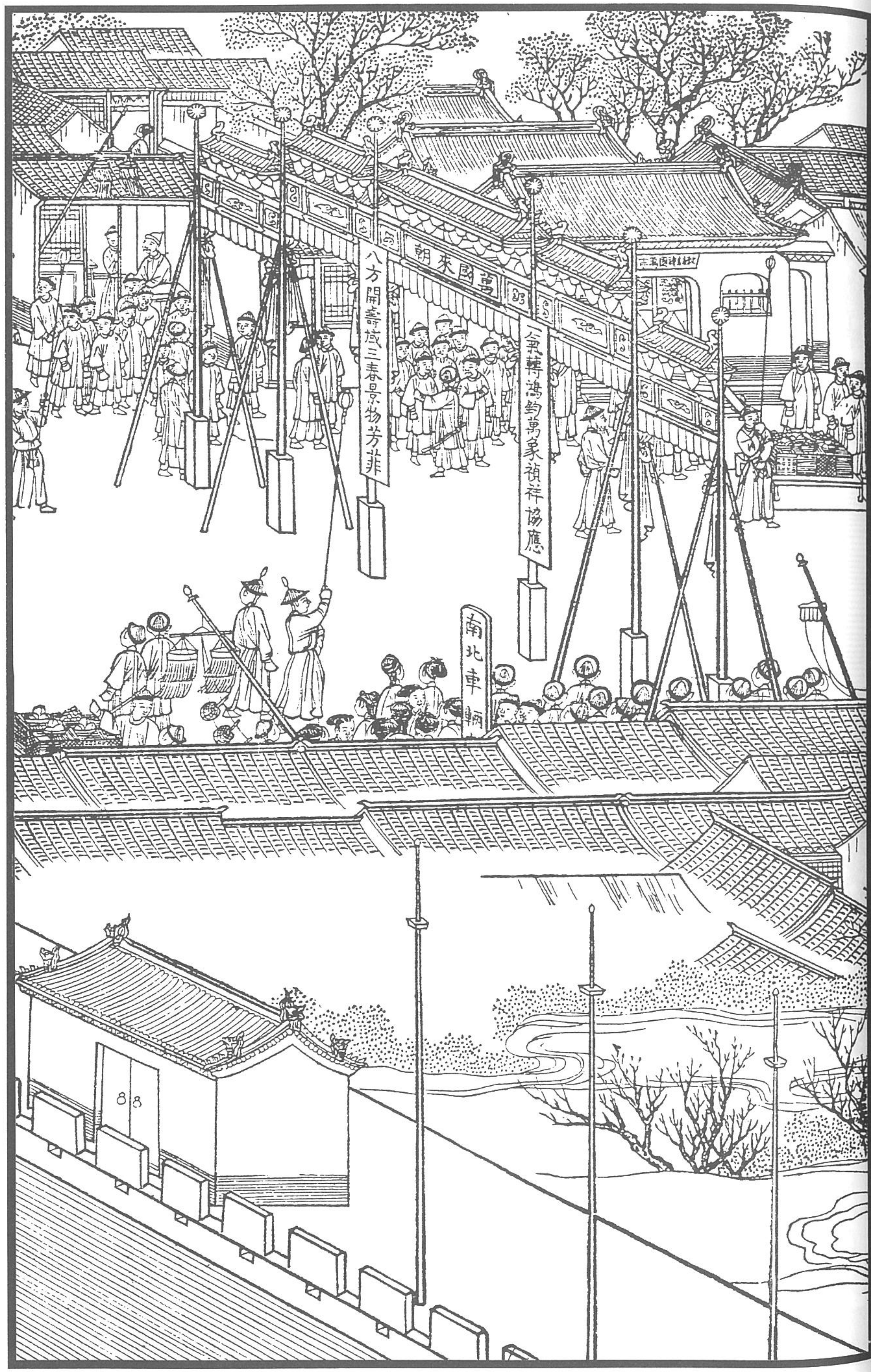




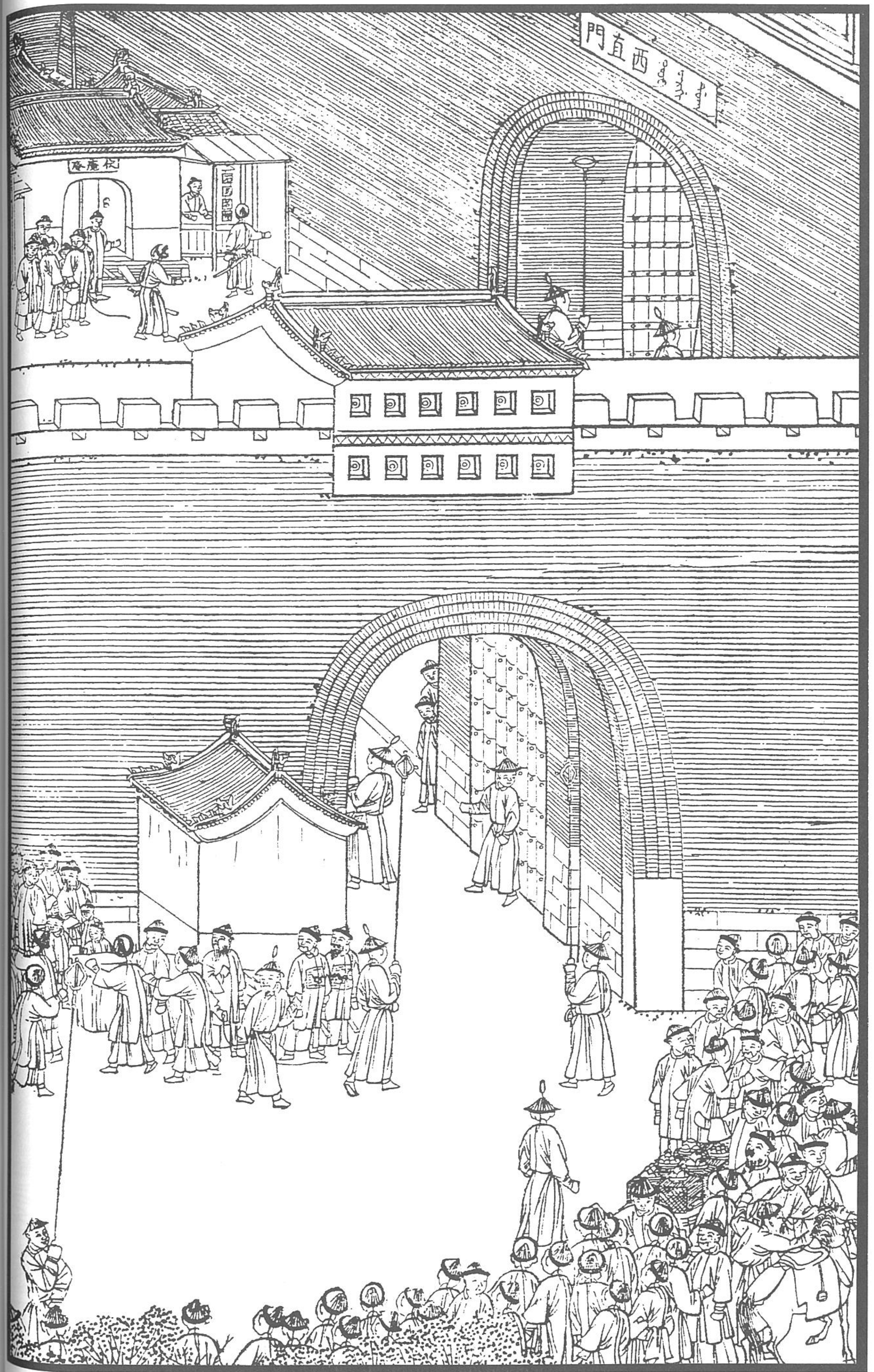


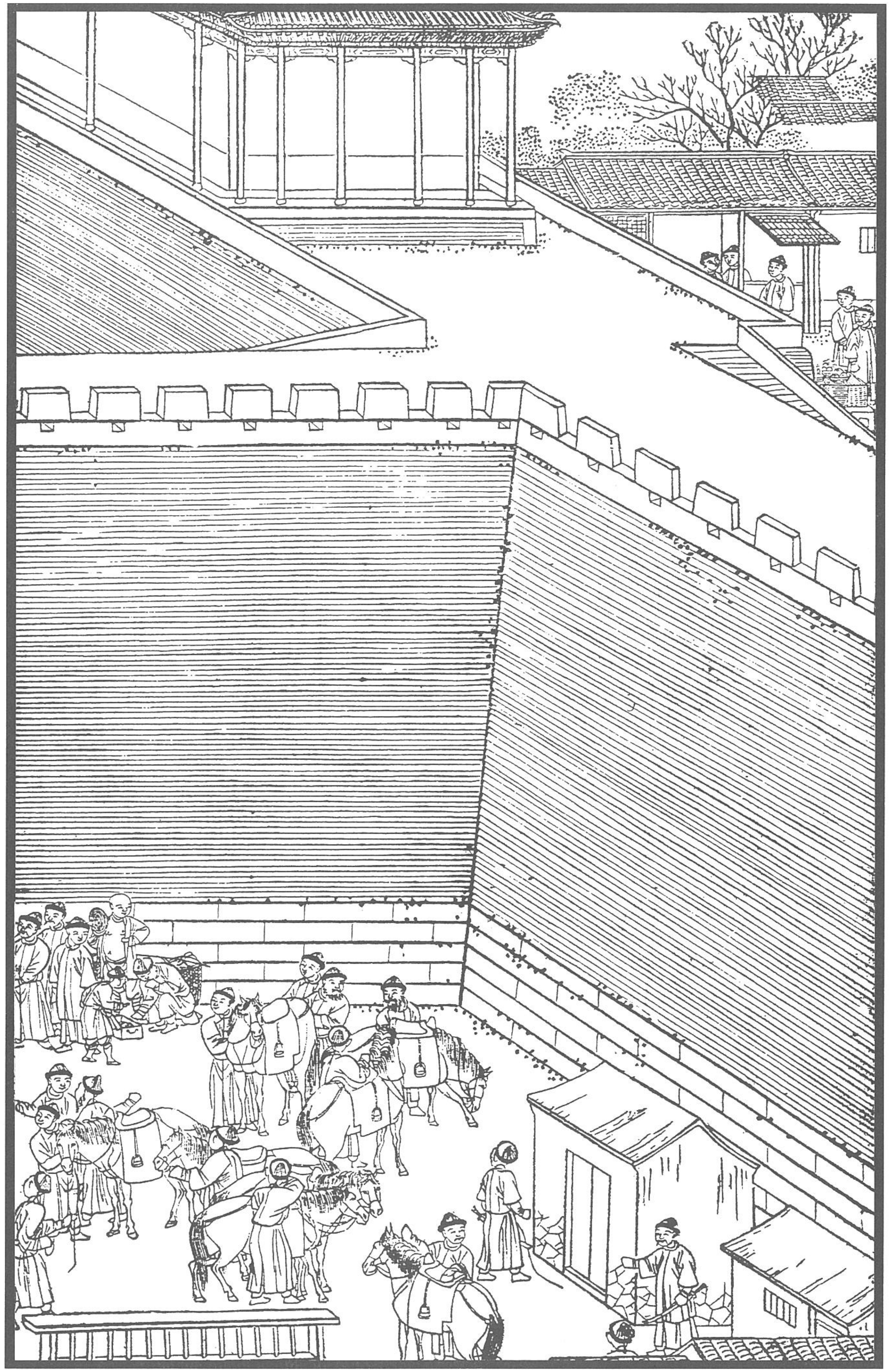

西直門内大街
西直門
北礼士路
西直門南大街

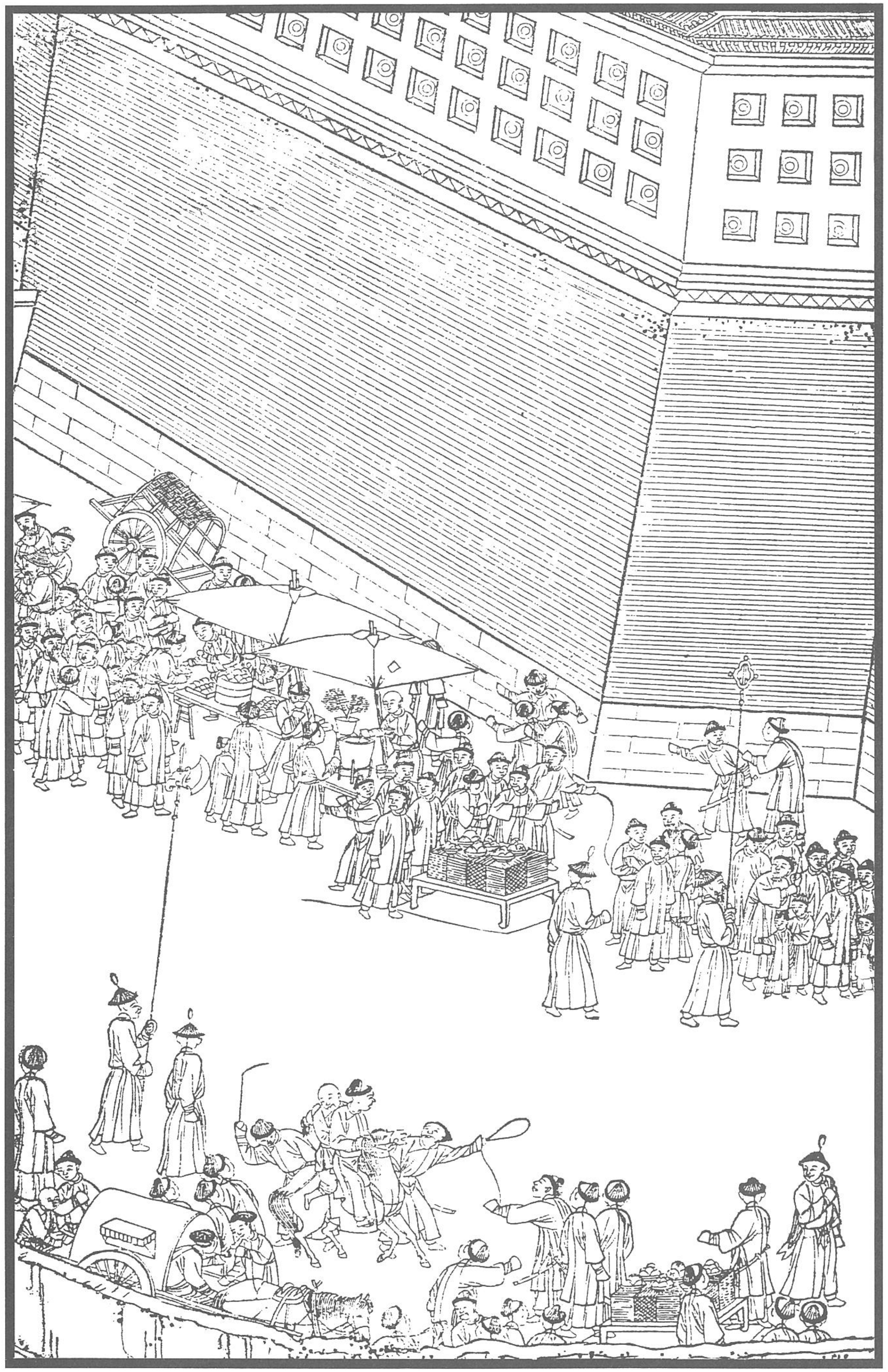


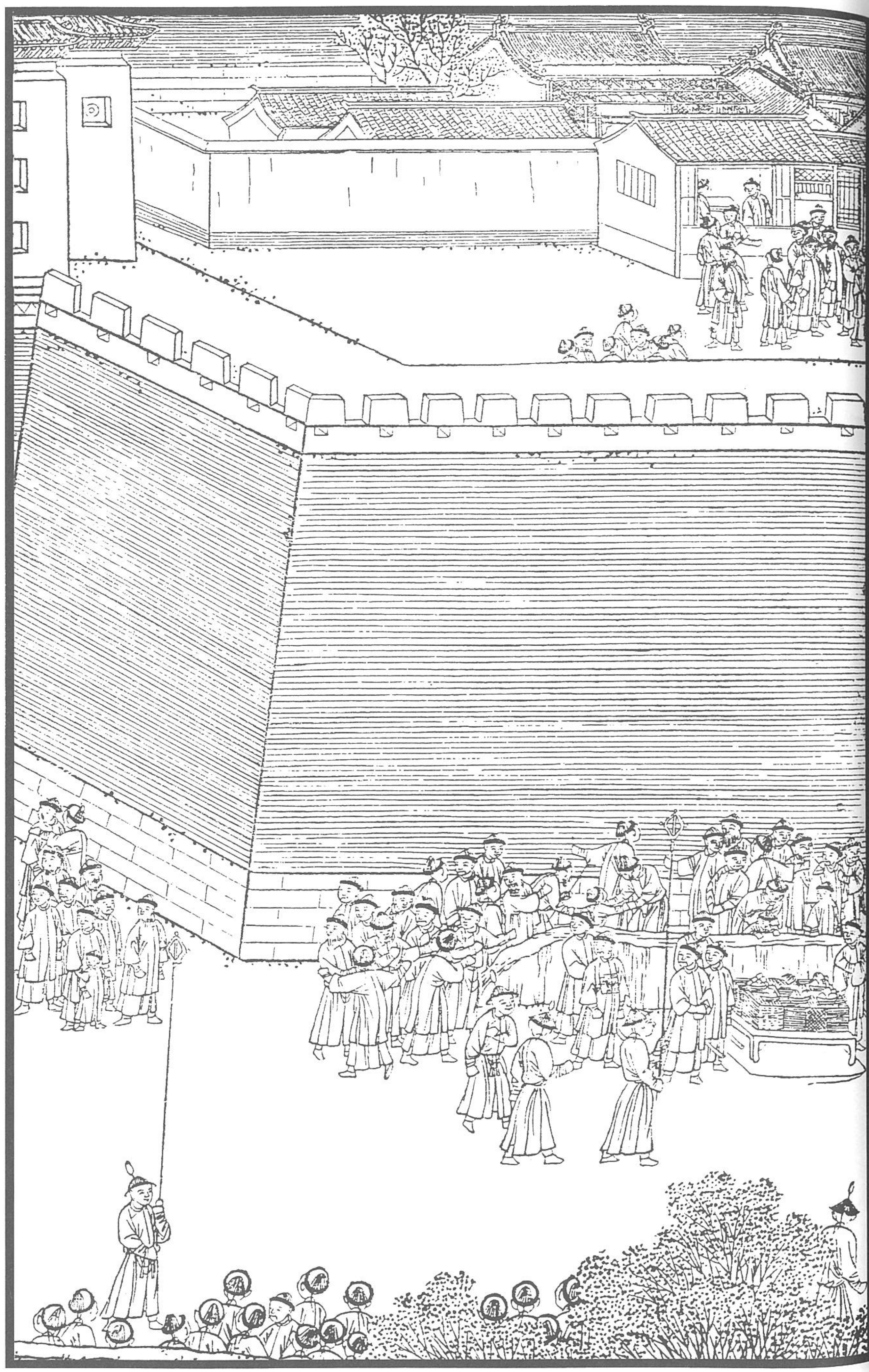


右中央「三鮮大麺」「老店」と大きな看板を掛けた店が向こう向きにある。いわゆる「老舗」の大店であったのであろうか。
いよいよ西直門に近づいてきた。右の上にある寺廟は「勅賜護国萬寧(宮)」と読める。
左奥にはまた「関帝廟」がある。

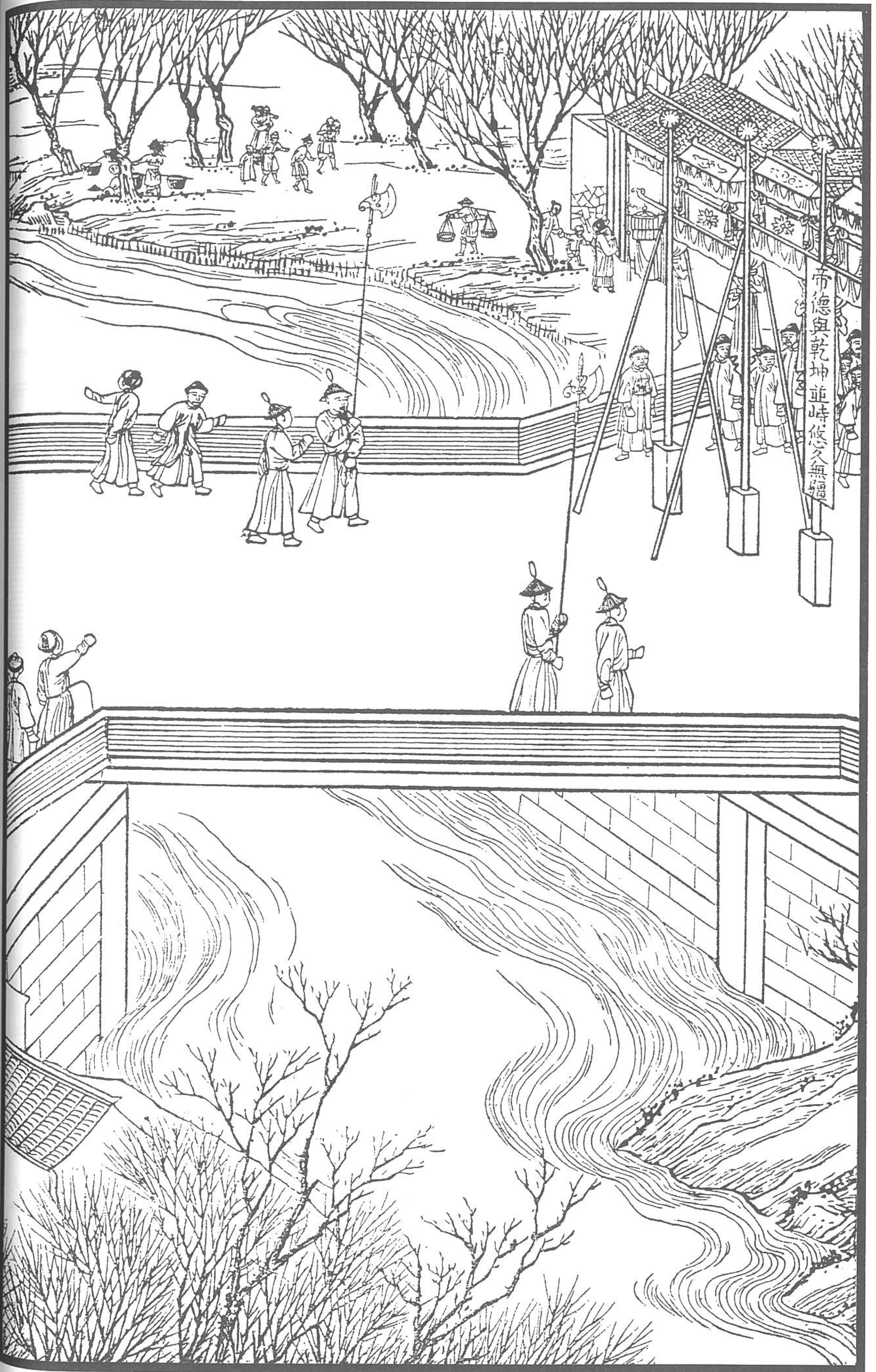

西直門

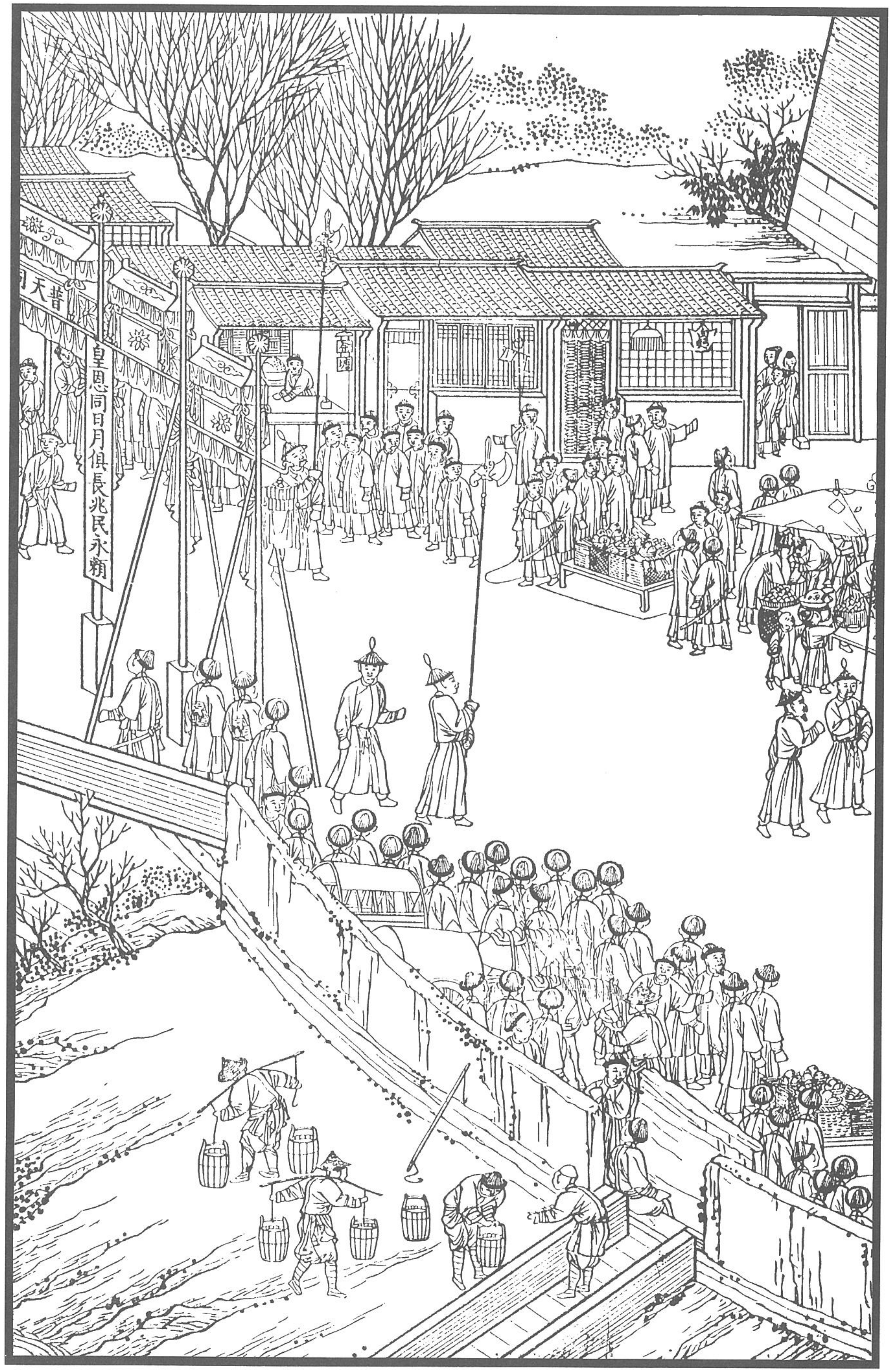




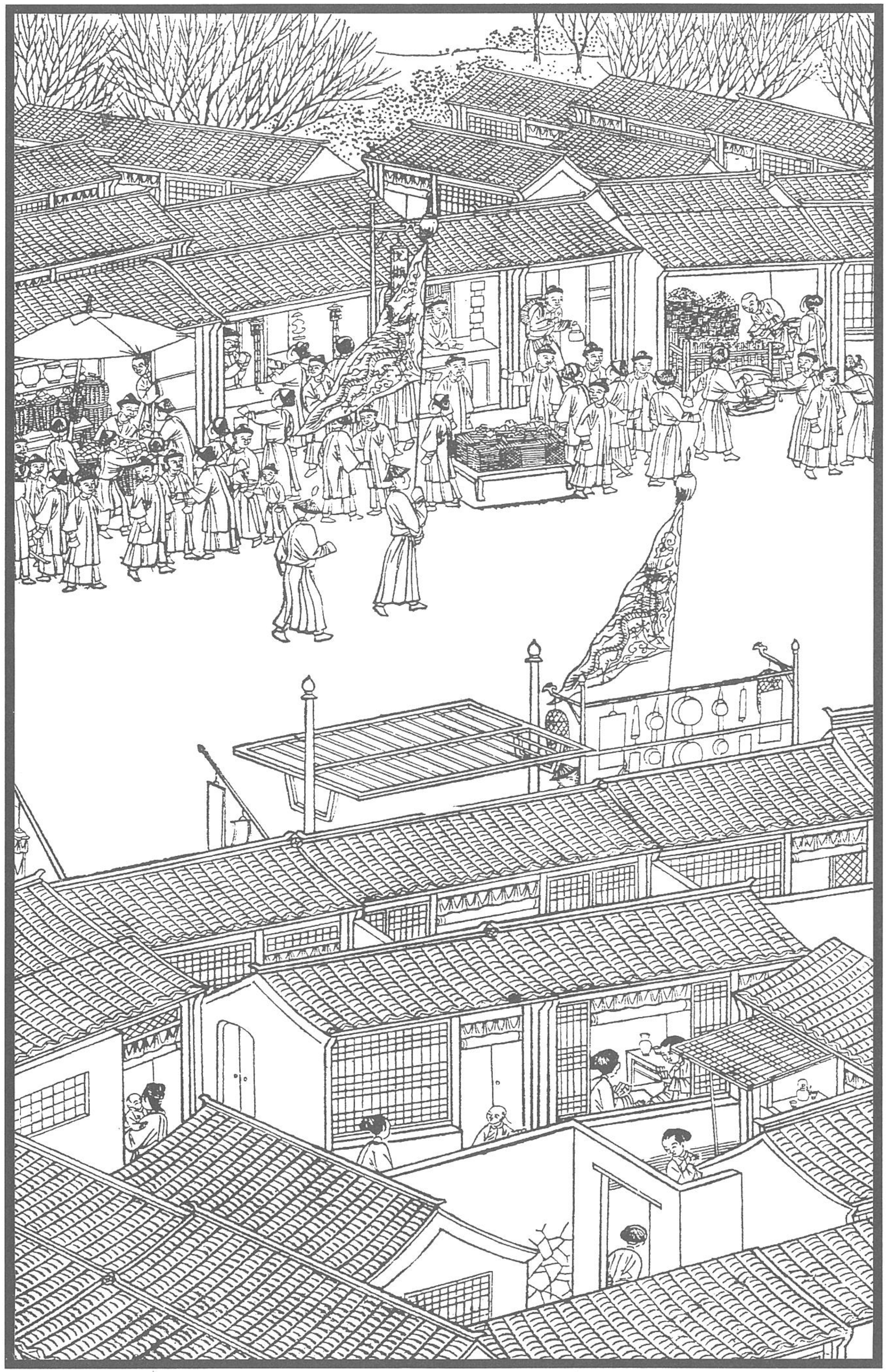


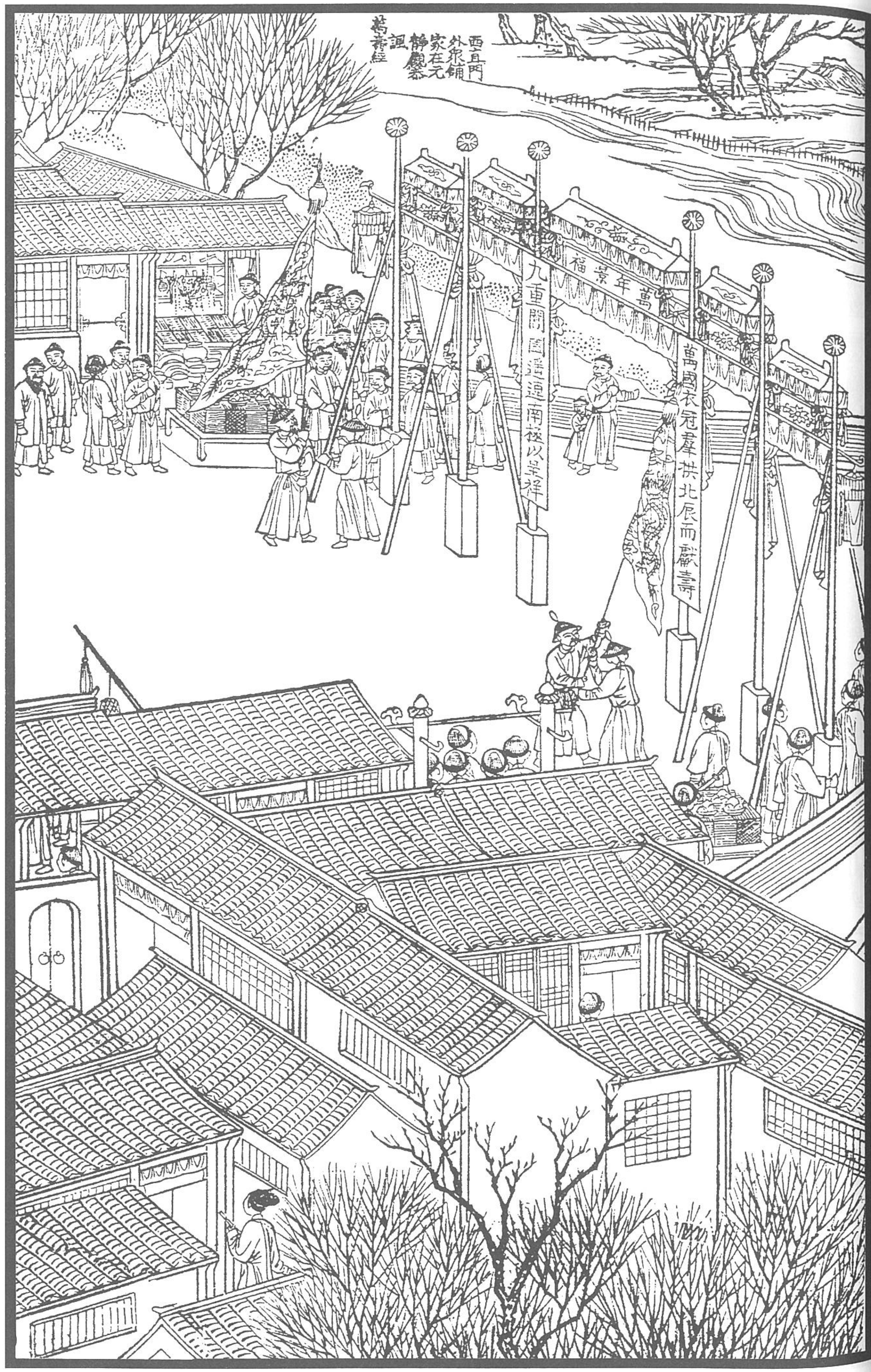
西直門は「漢字」と「満文」で額が書かれている。城門の様子が詳細に描かれていて、建築の資料として興味深い。
城門外の露店があるかと思えば、その手前には馬に二人が相乗りしててこずっている様子がかかれている。
各所に菓子などを供する台と思われるものがあり、たくさんの供物が積まれている。これらの菓子は、桃などの吉祥、長寿の含意のあるものを配布している。

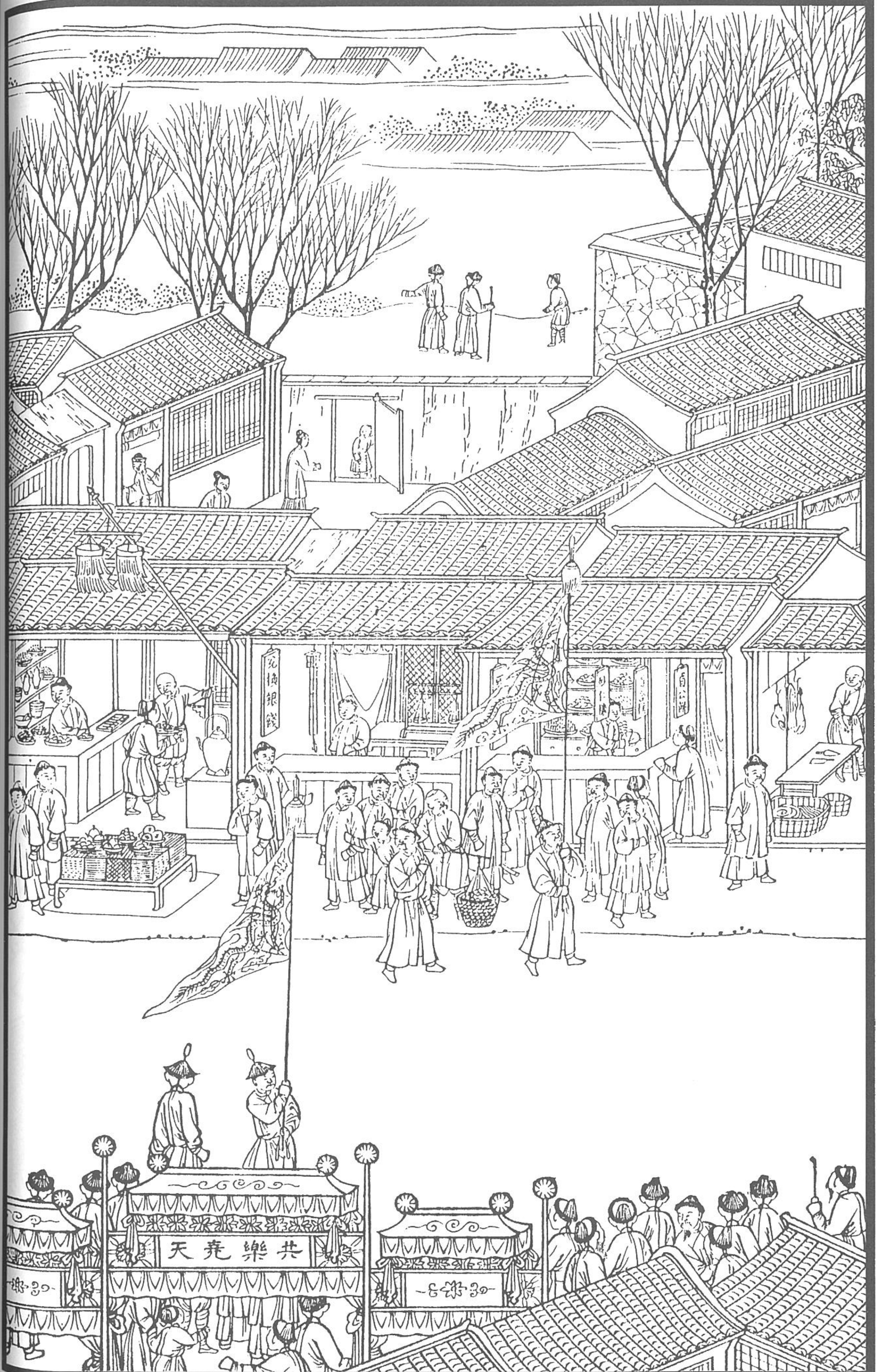

帝德與乾坤並峙悠久無疆

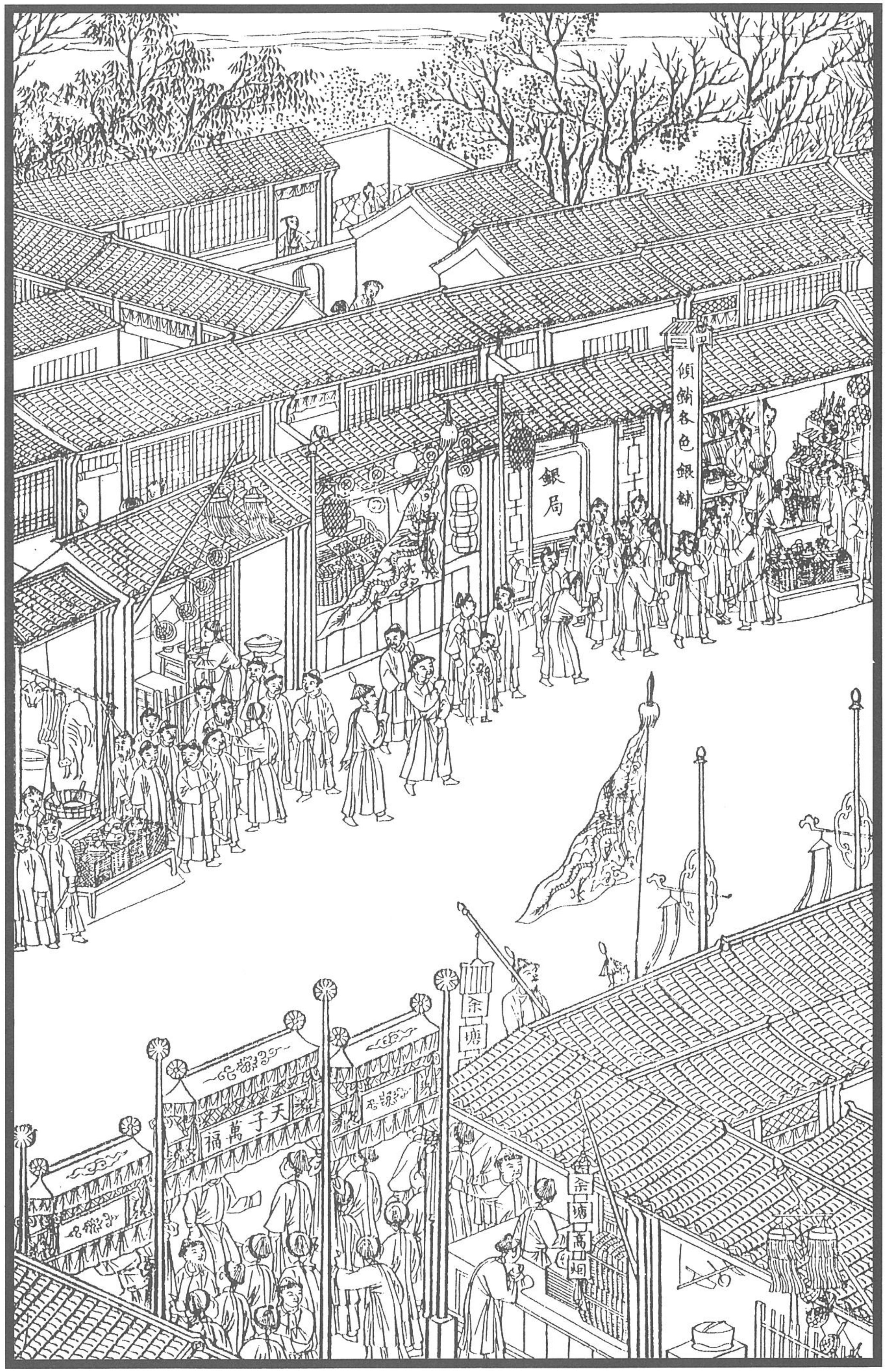

皇恩同日月俱長兆民永賴

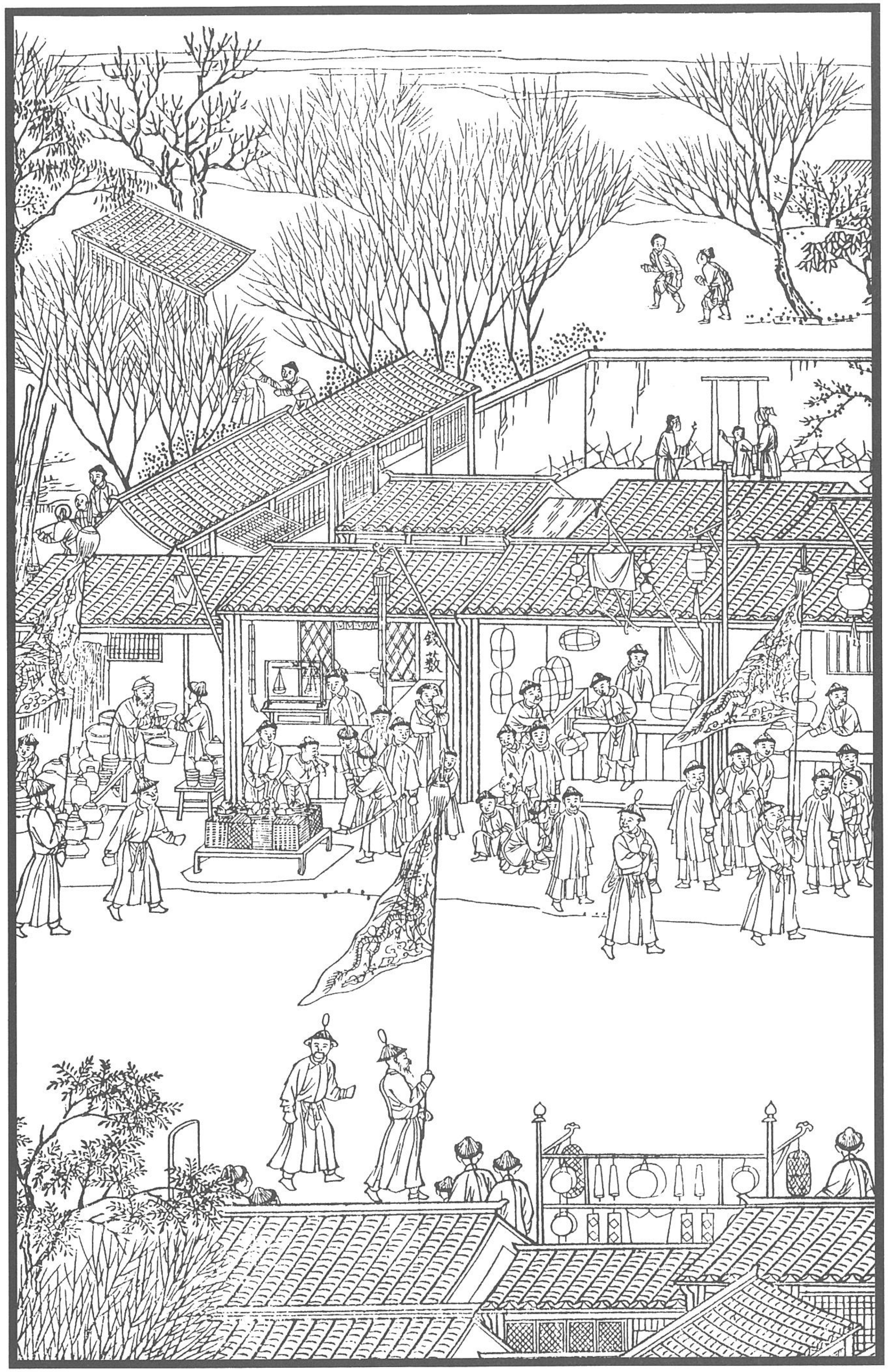
手前の川は、外城の周囲の堀で四周と、中南海などは水流がつながっていた。水汲みをする人々がいる。
橋を渡ると人影がやや少なくなり、いよいよ城外であることがわかる。現在の西直門外大街である。
画面上方には、現在ではやがて展覧館、動物園などが続くことになる。

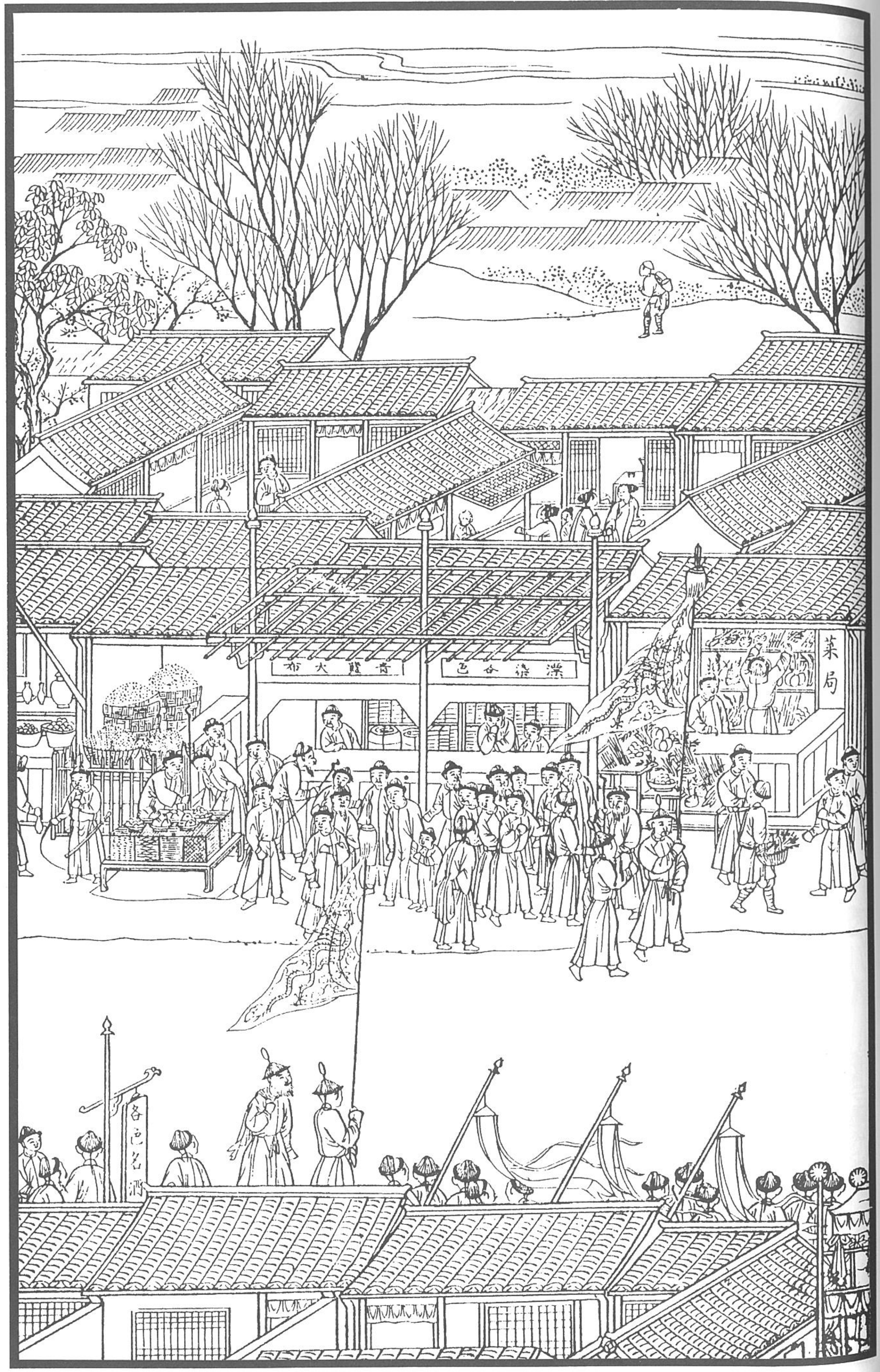




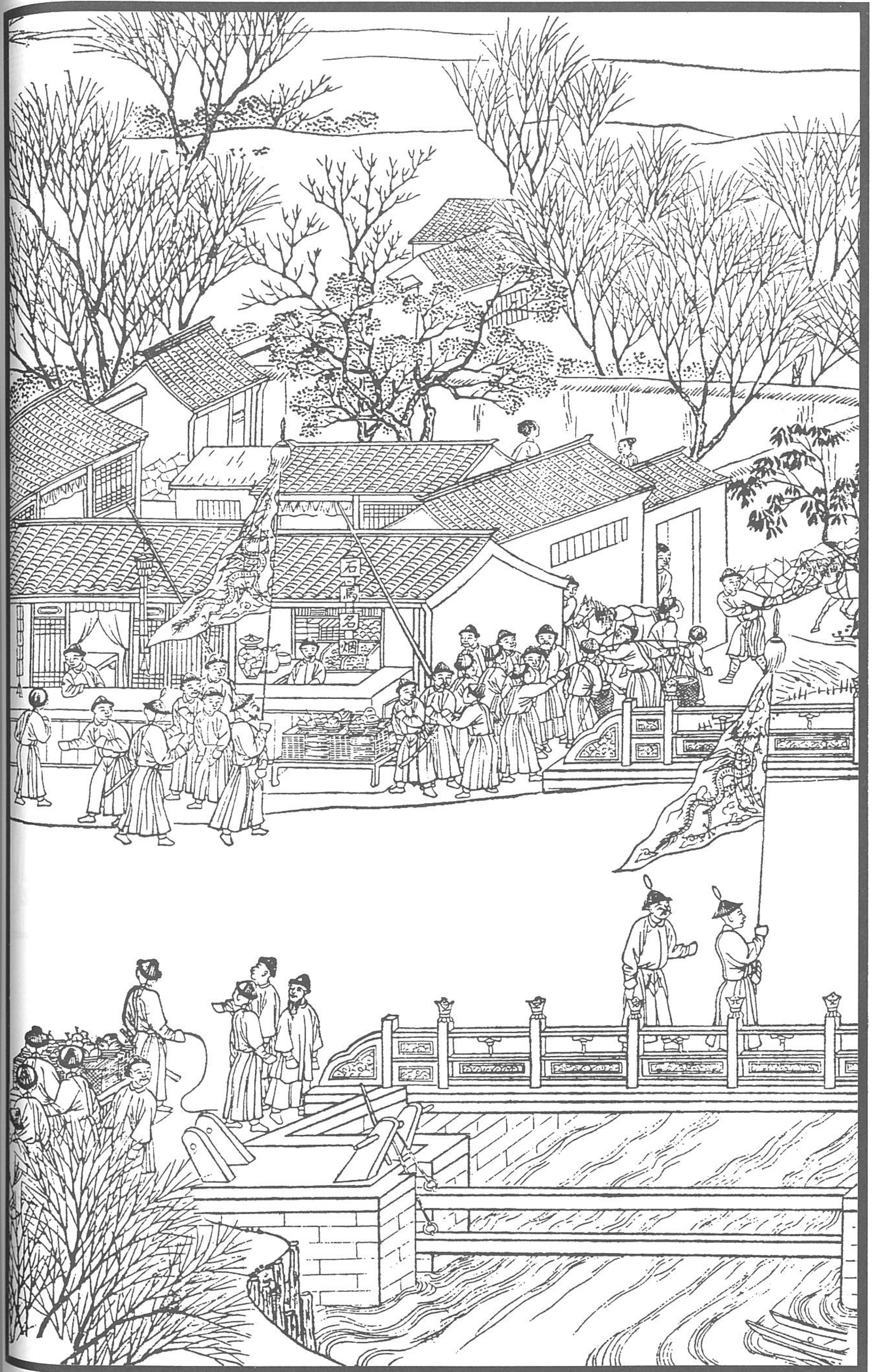

兌換銀錢
共樂堯天

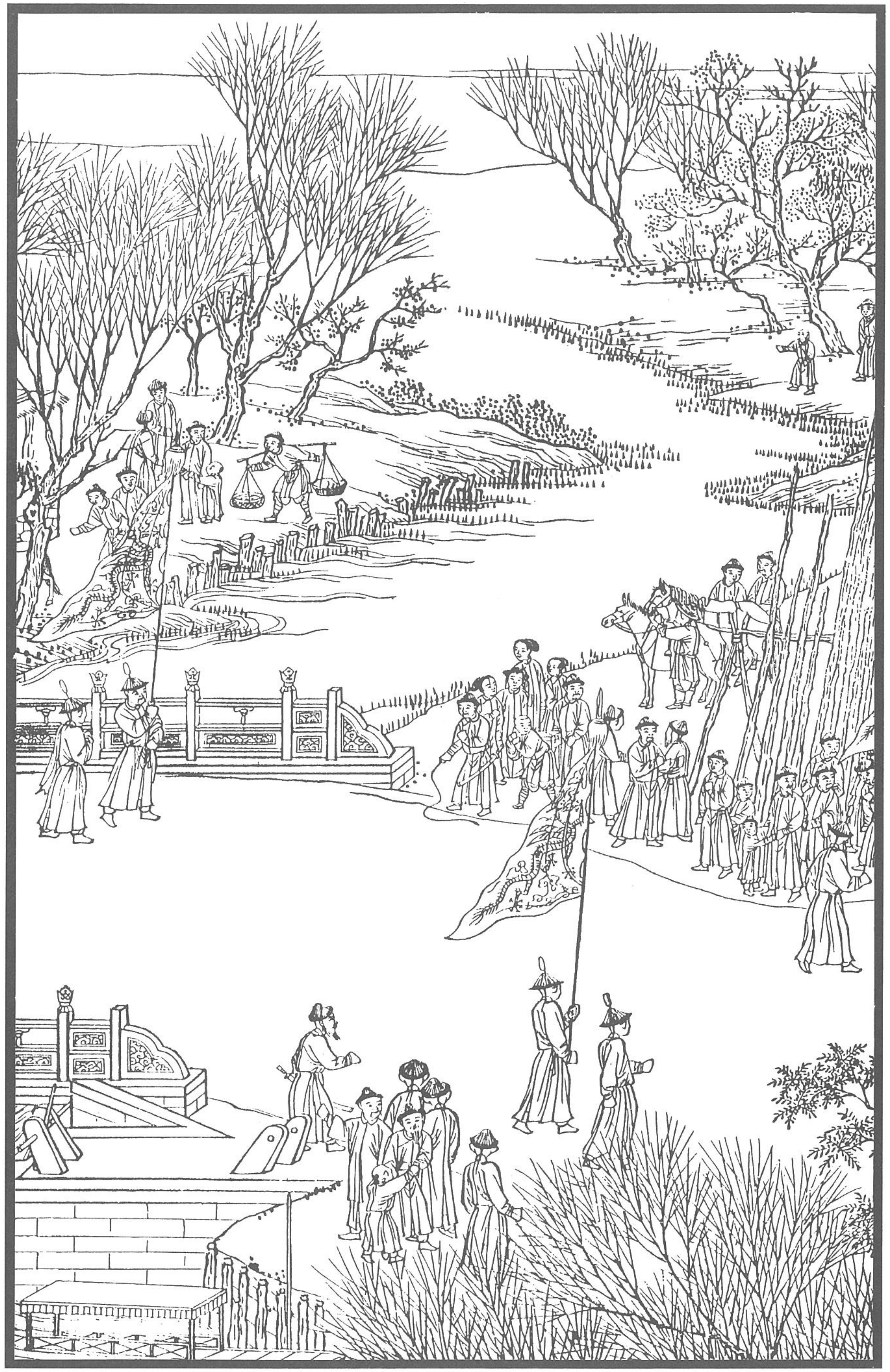

銀局
傾銷各色銀
余塘
天子萬福
余塘高烟

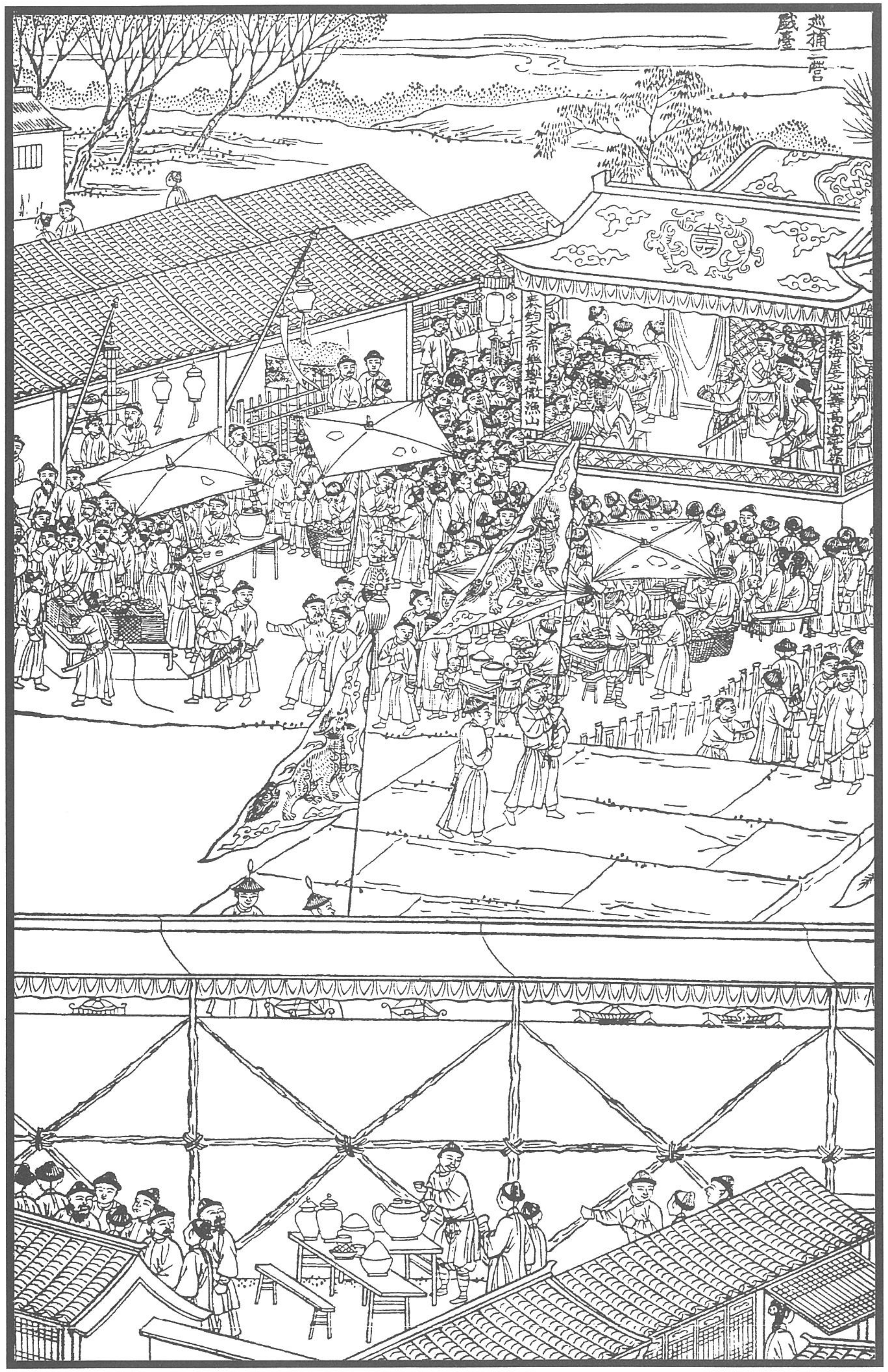


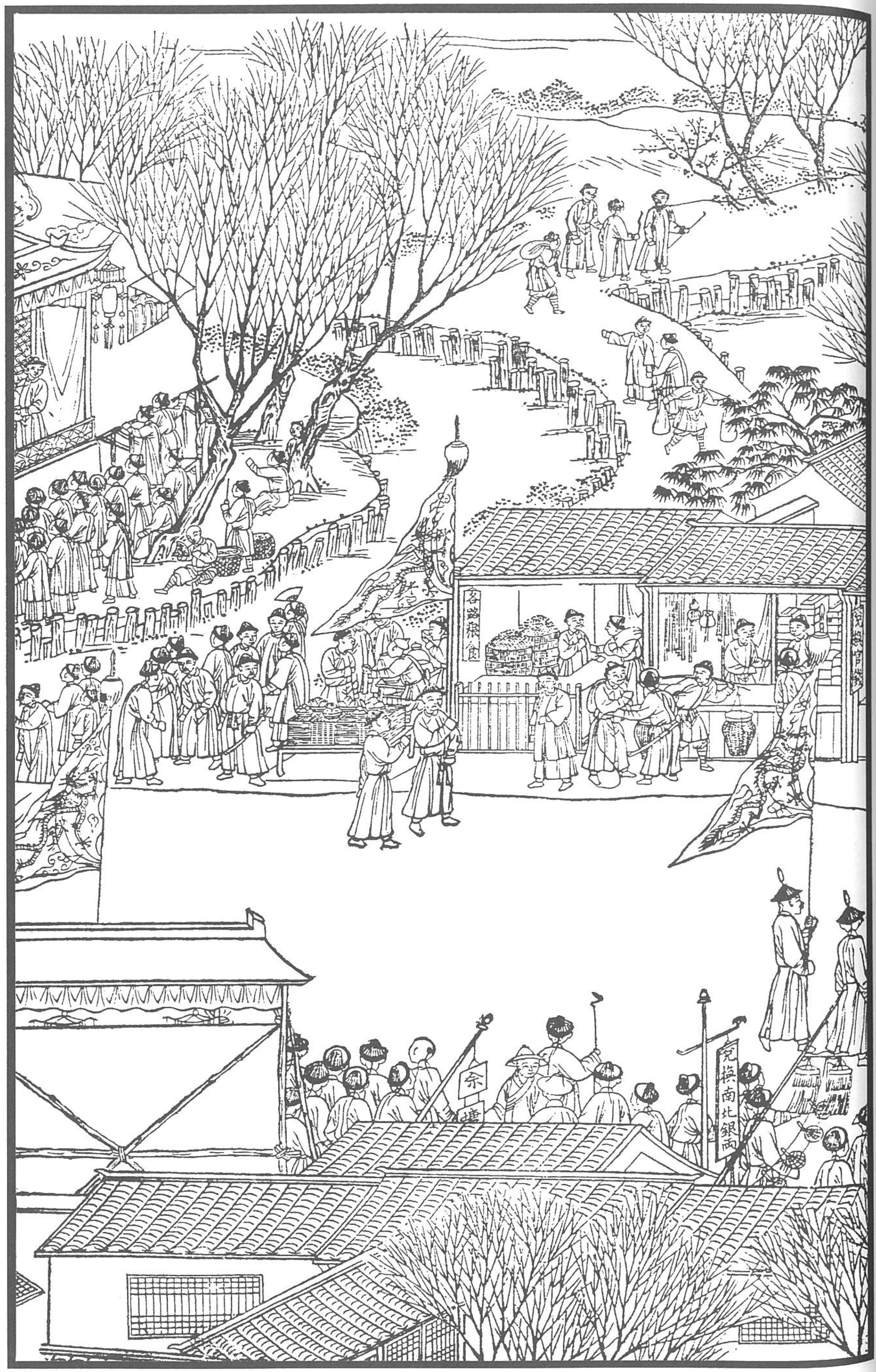


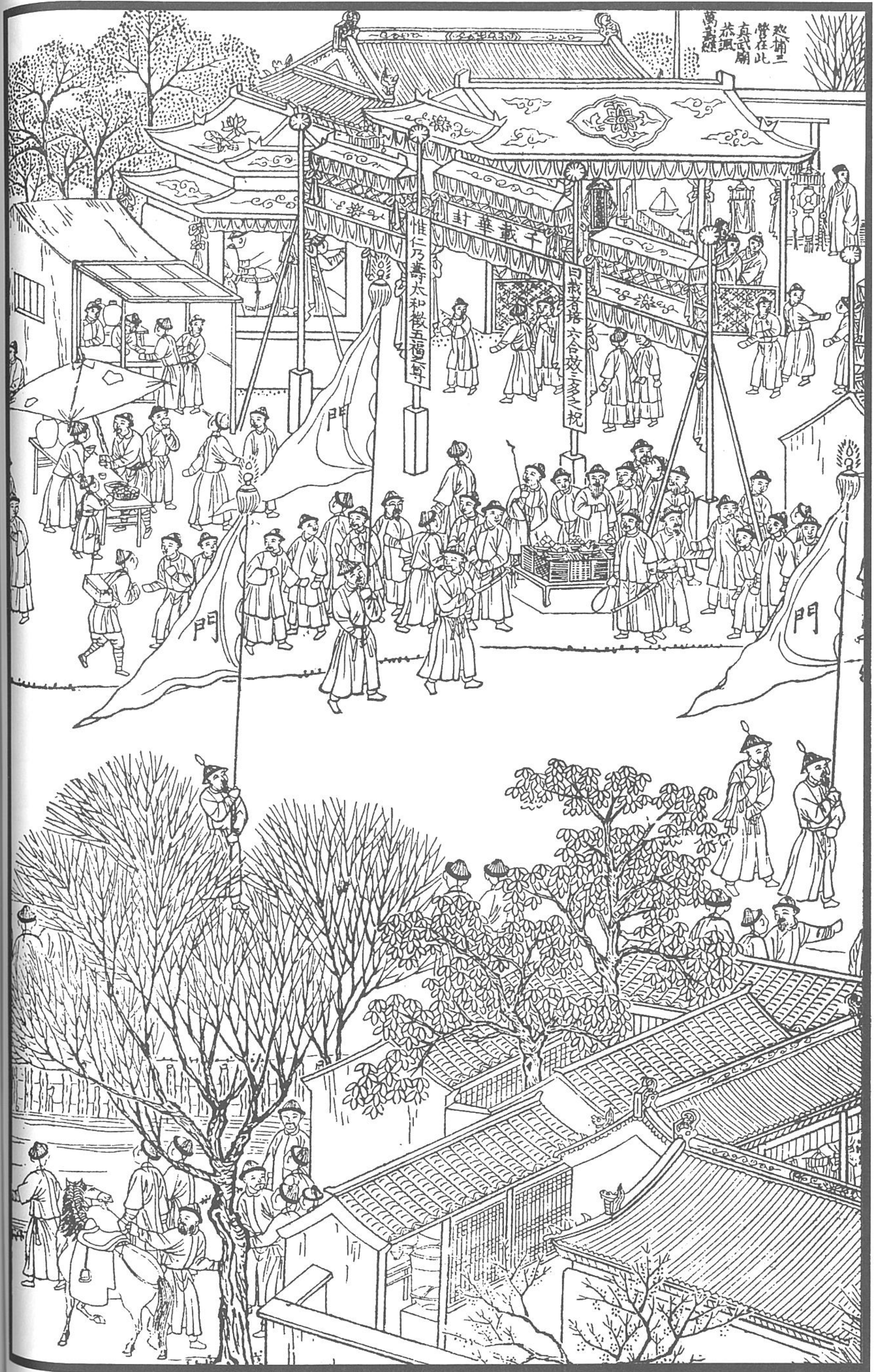
描写がやや遠景を引いて見る形となってきた。郊外の風景を遠くに取入れ、人物はその分小ぶりになる。「菜局」は青果店、店先に細々と野菜をならべている。
隣には染め物屋、また「銭蔹」と書いた両替屋もある。

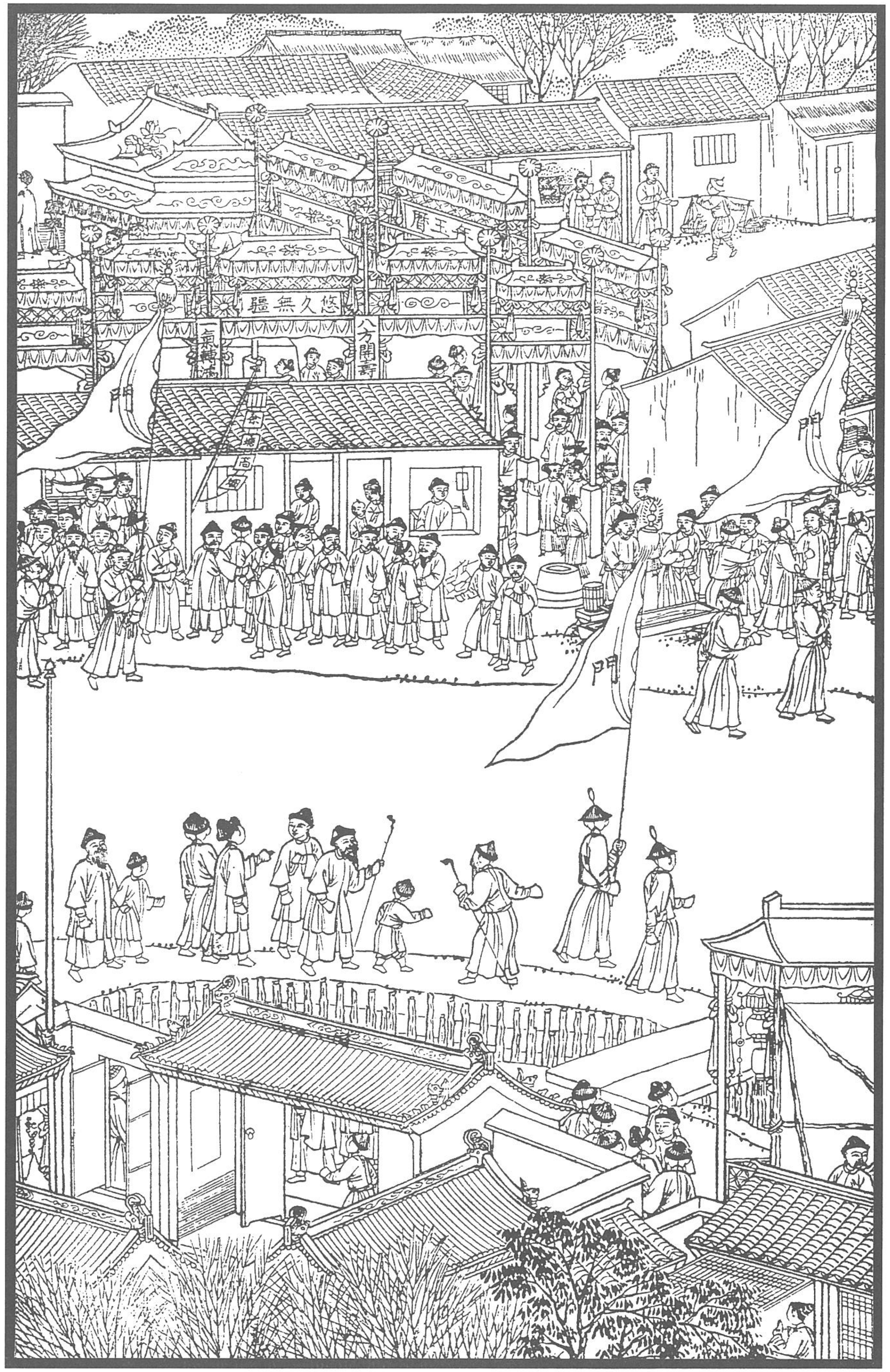

石馬名烟

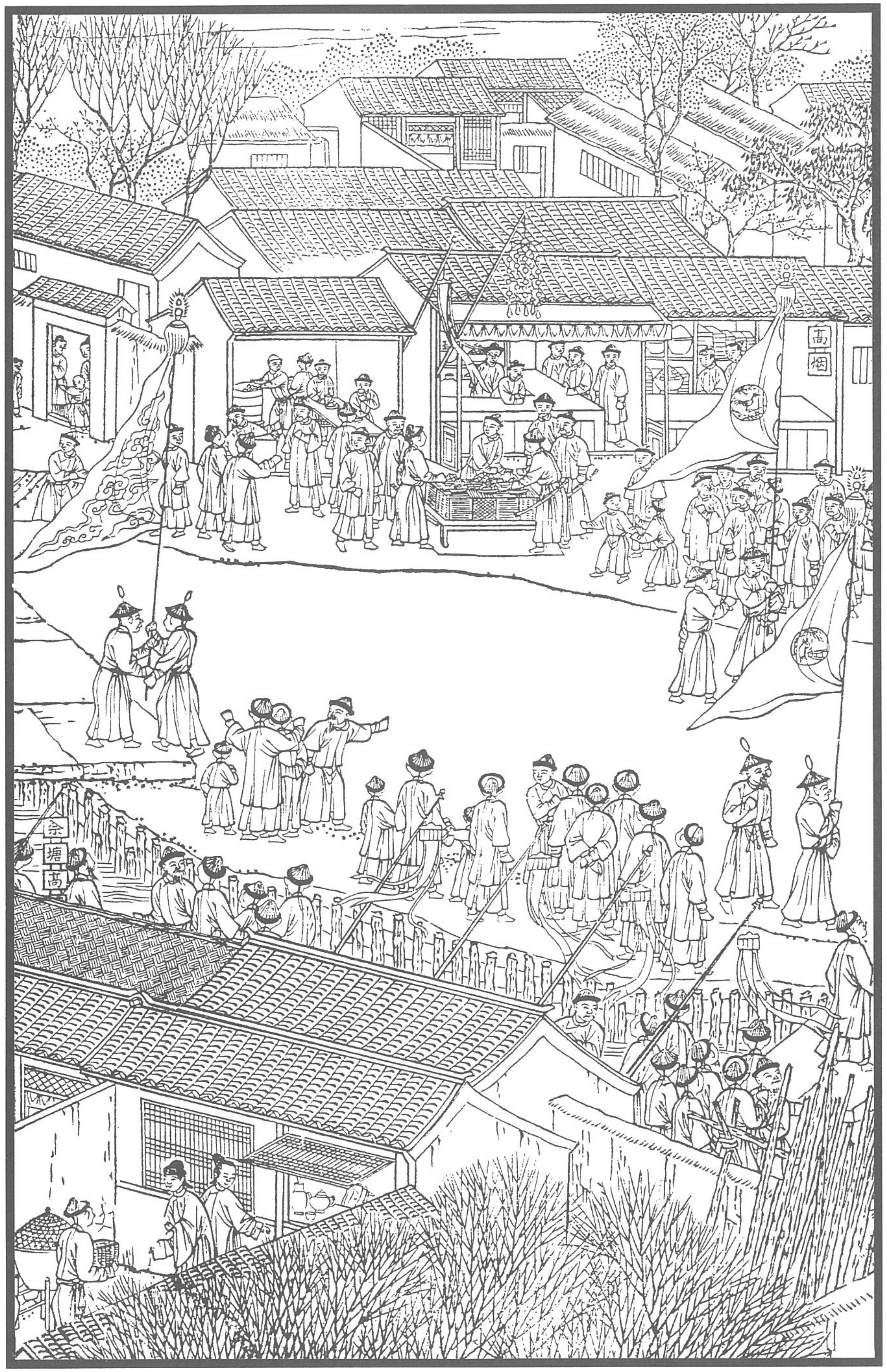


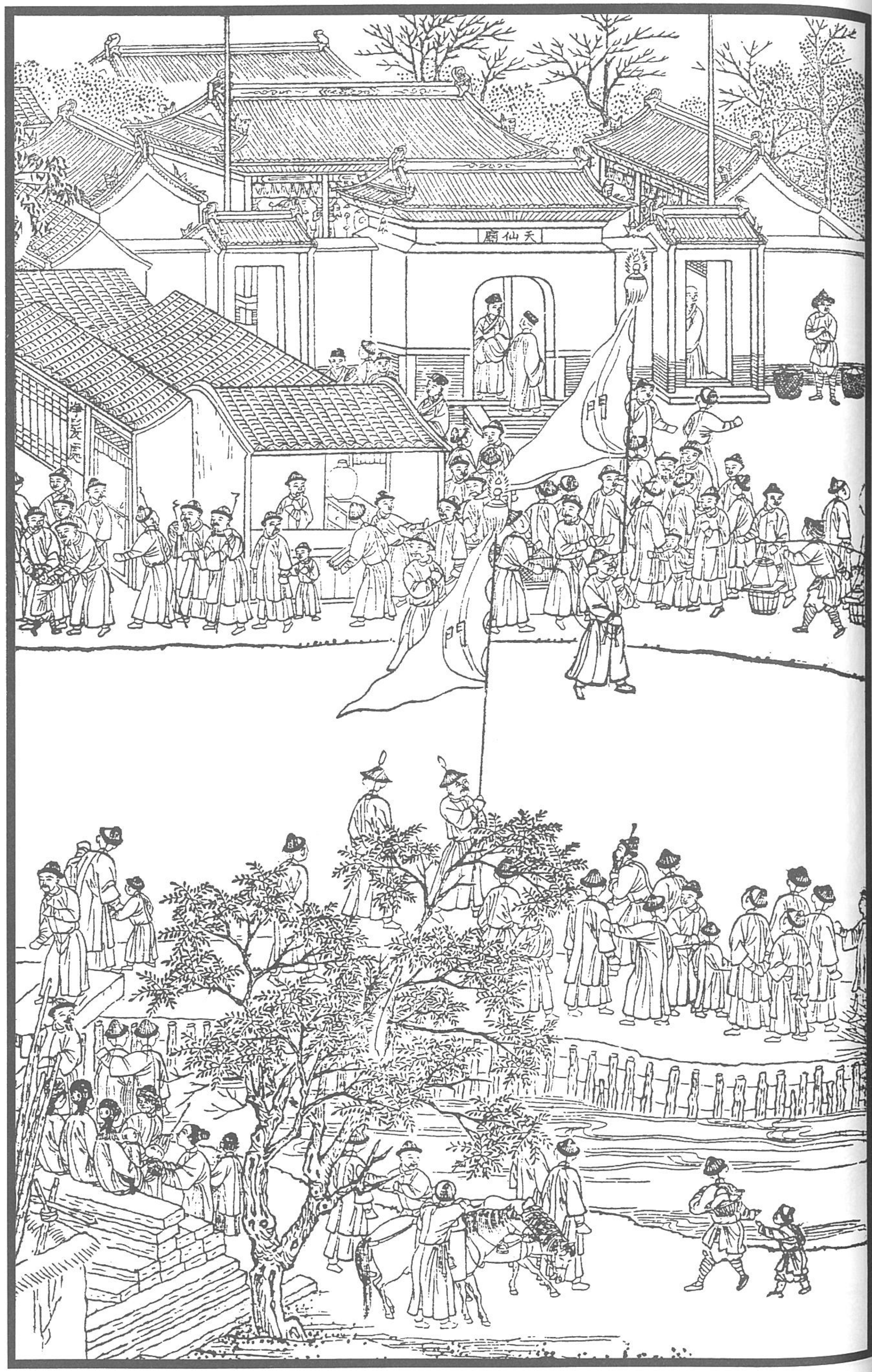

巡捕三營
戲臺

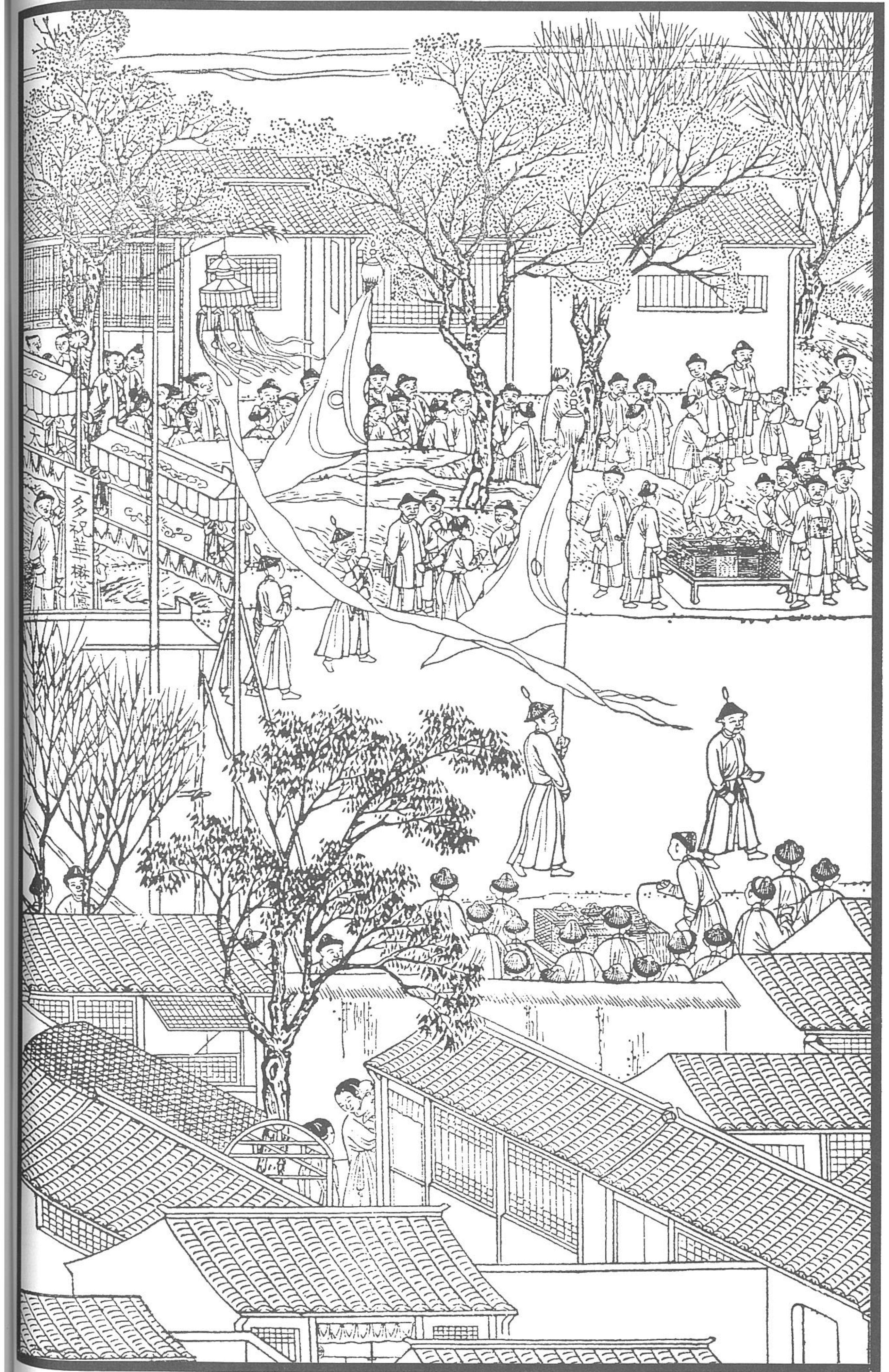

兌換南北銀兩

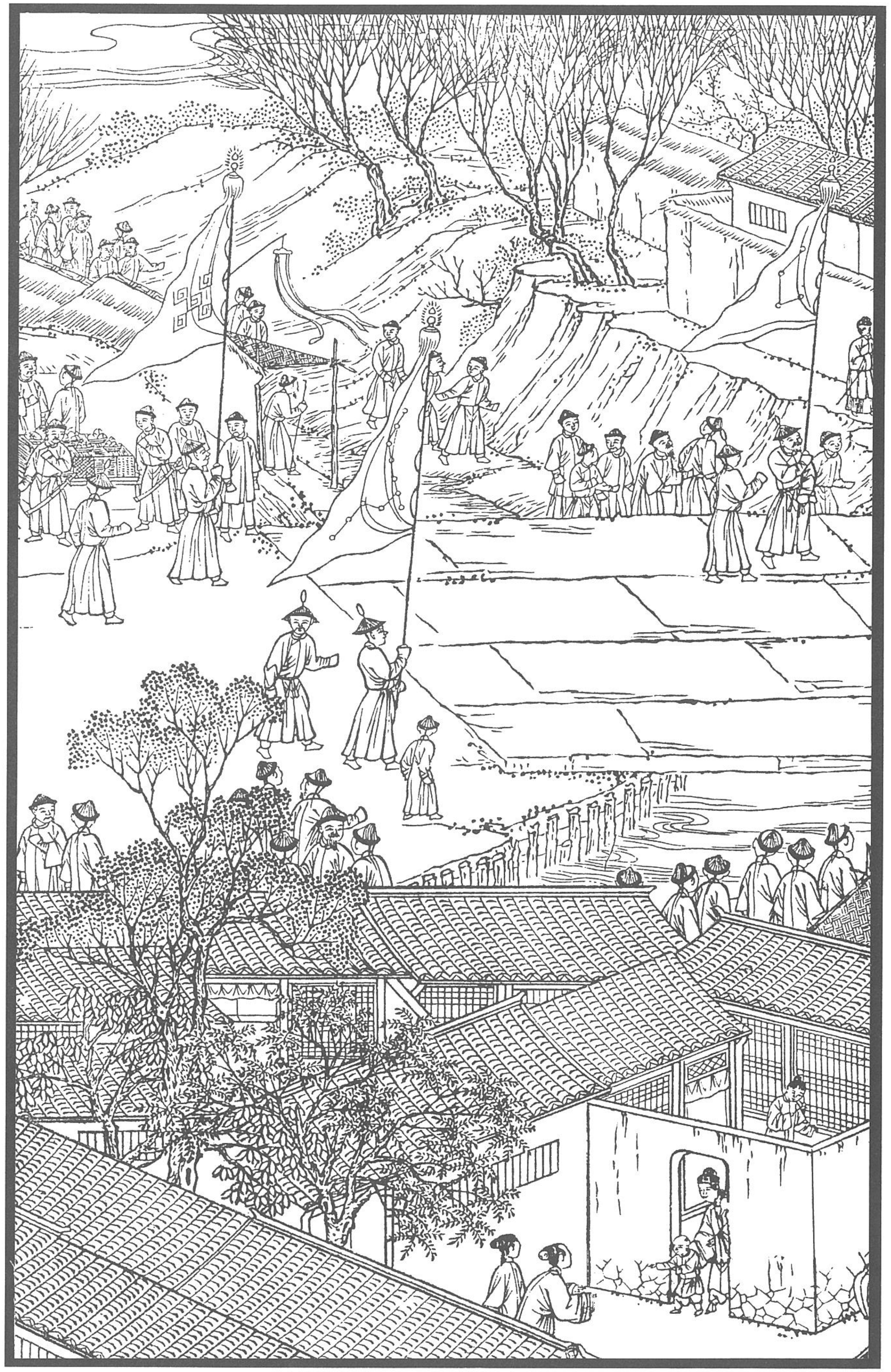

營在此
真武廟
恭諷
萬壽經
千載華封
惟仁乃壽太和敷五福之尊
六合效三多之祝
門
門
門

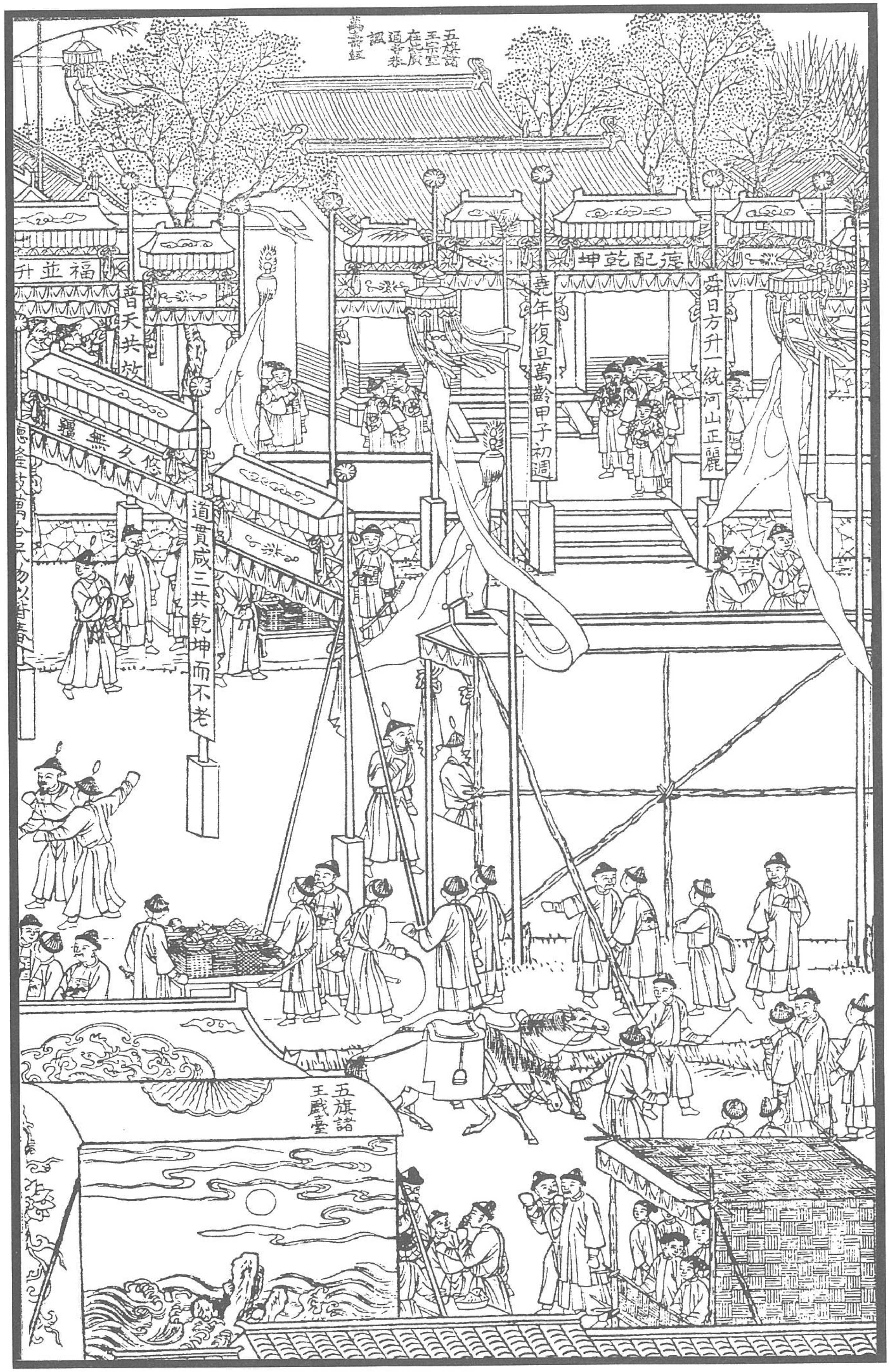

悠久無疆
八方開壽
門
門
門

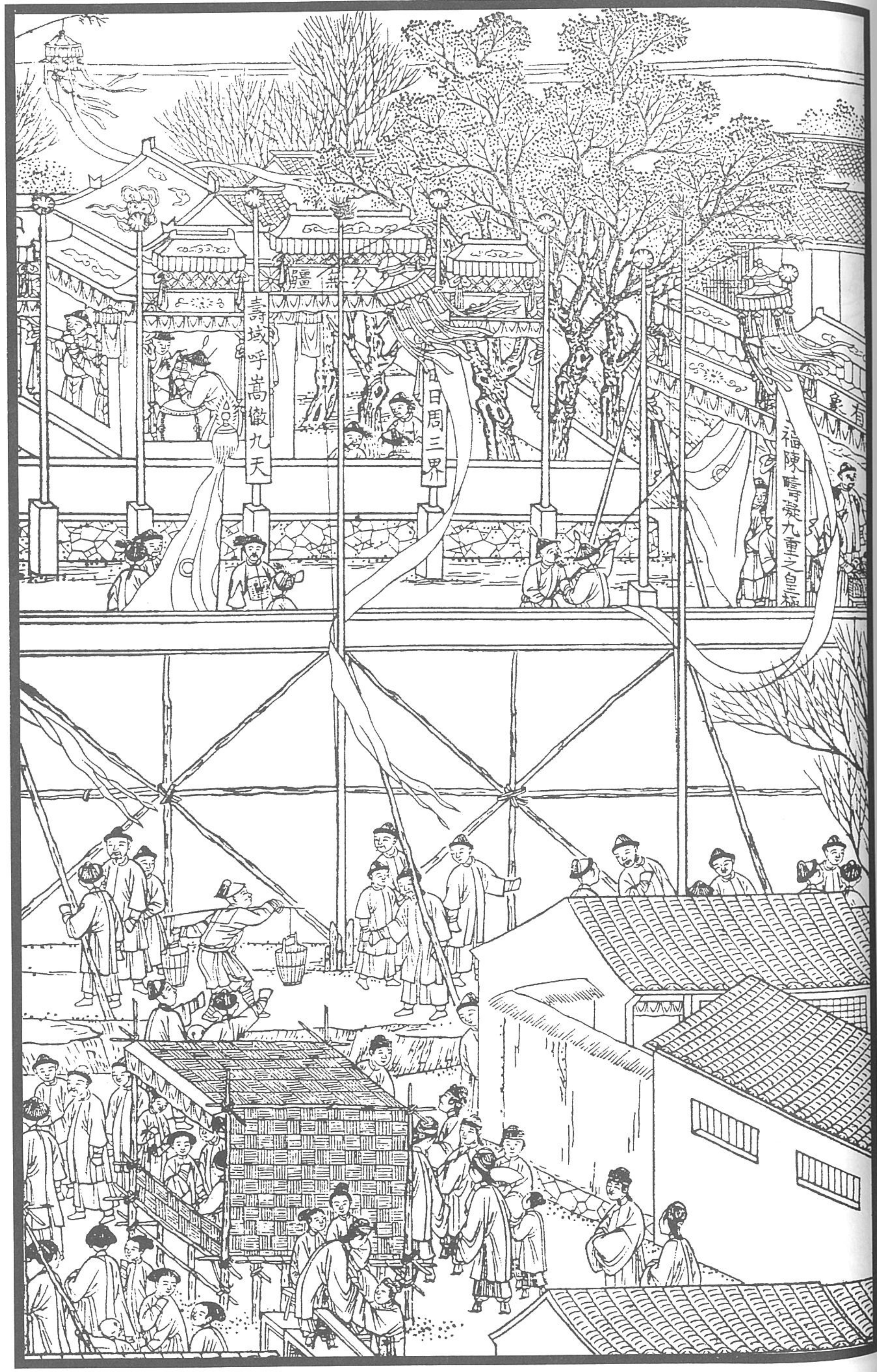

高
烟
余
塘
高

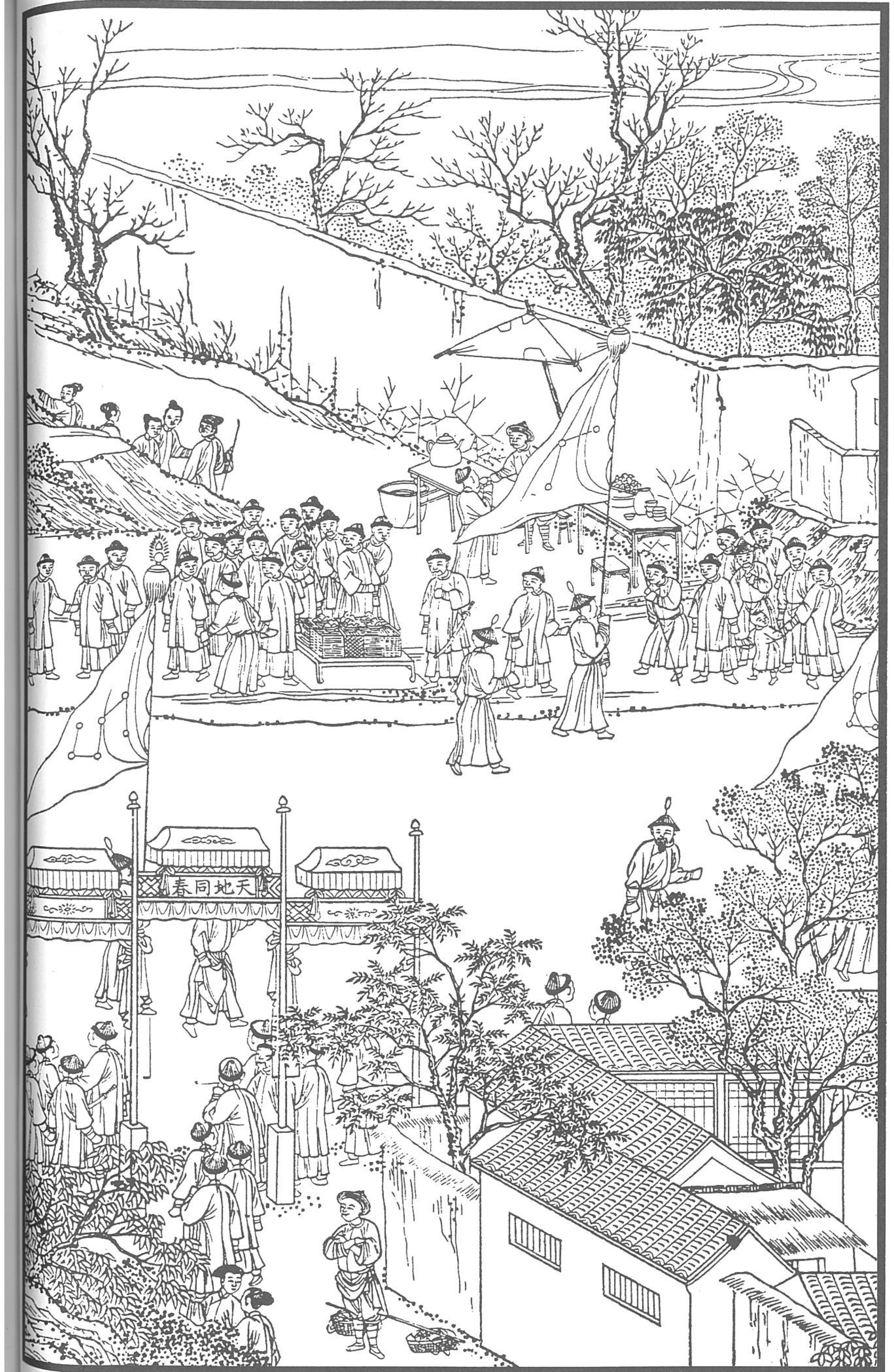

天仙廟

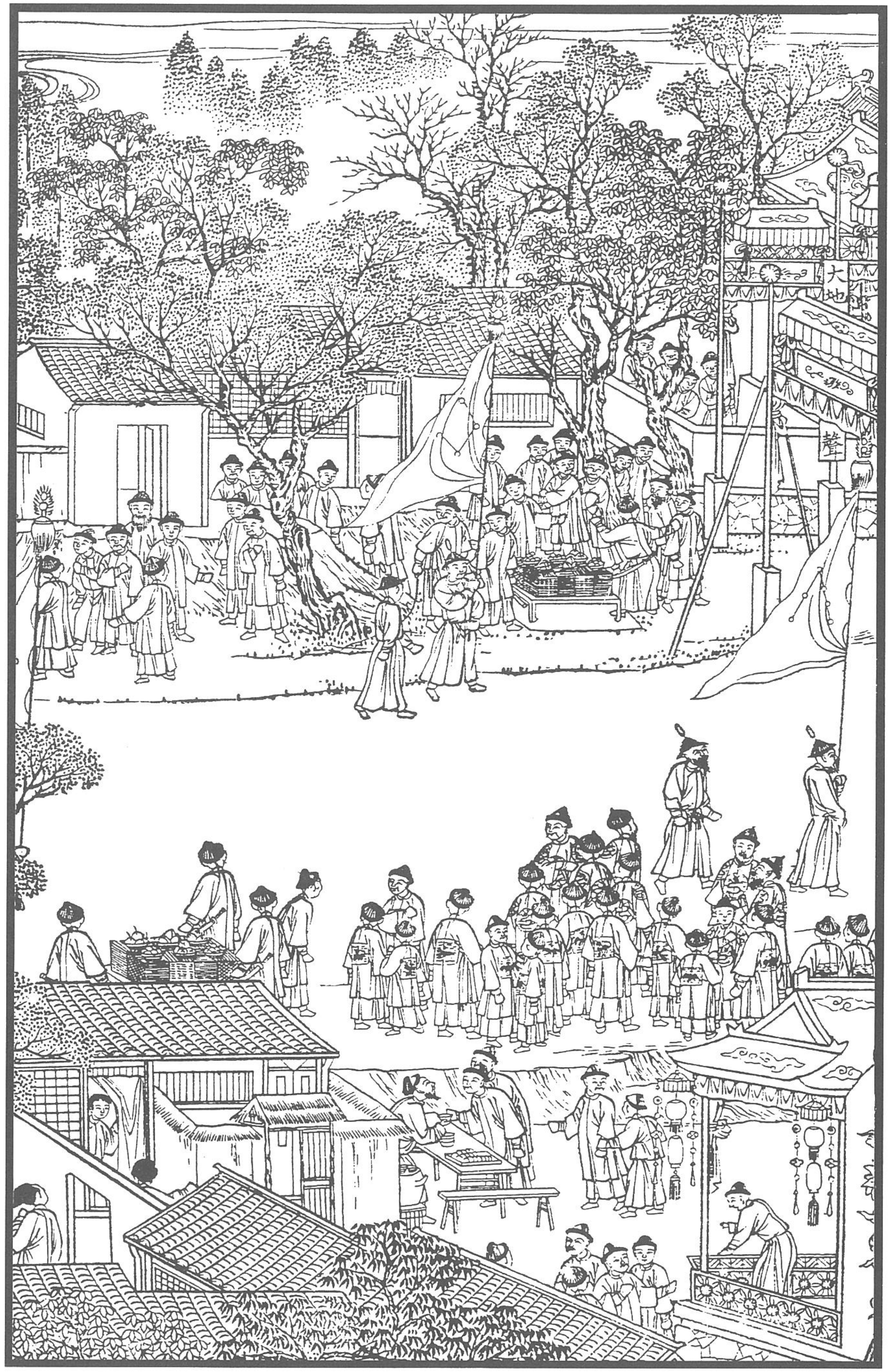

三多祝華

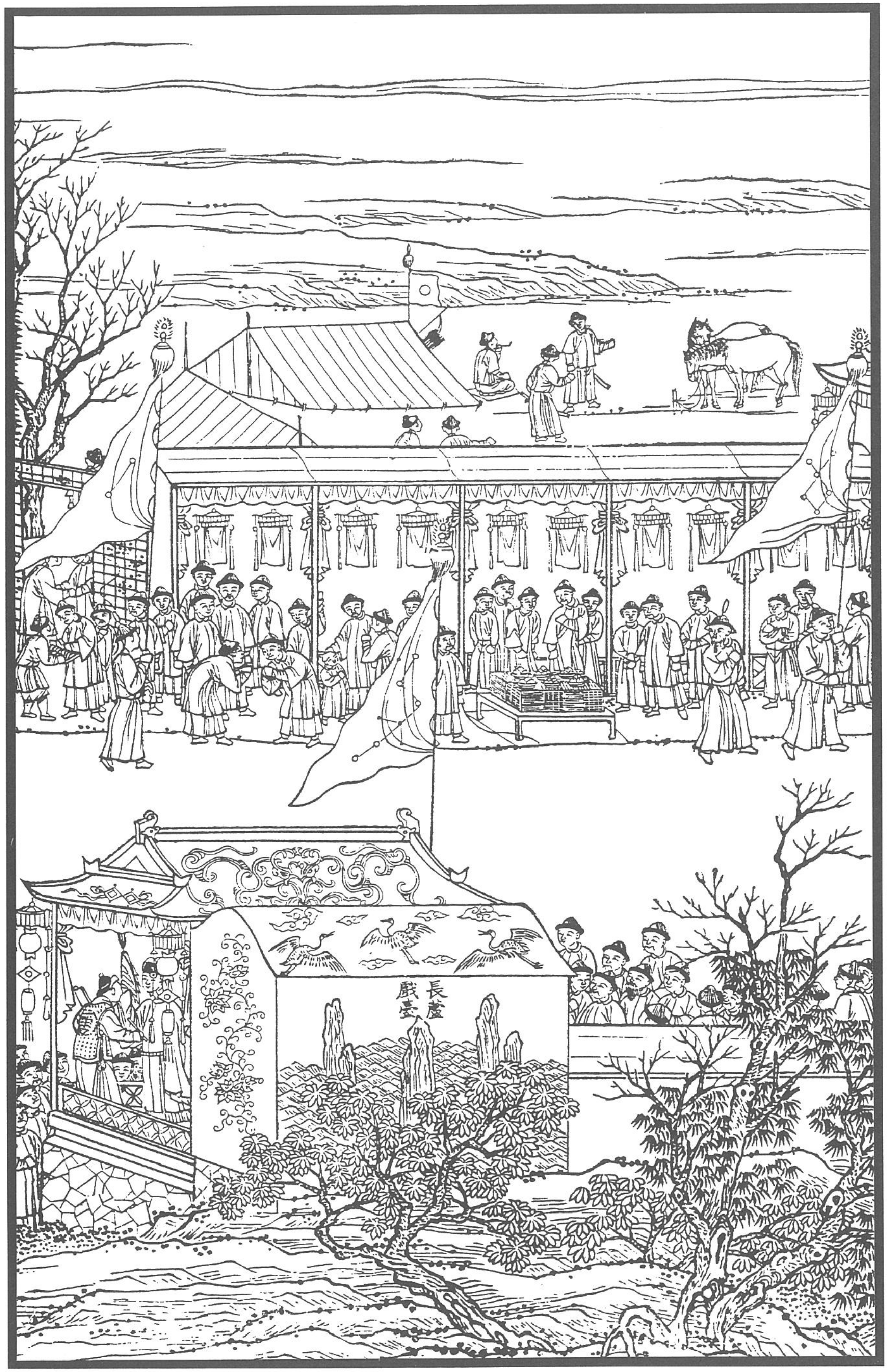


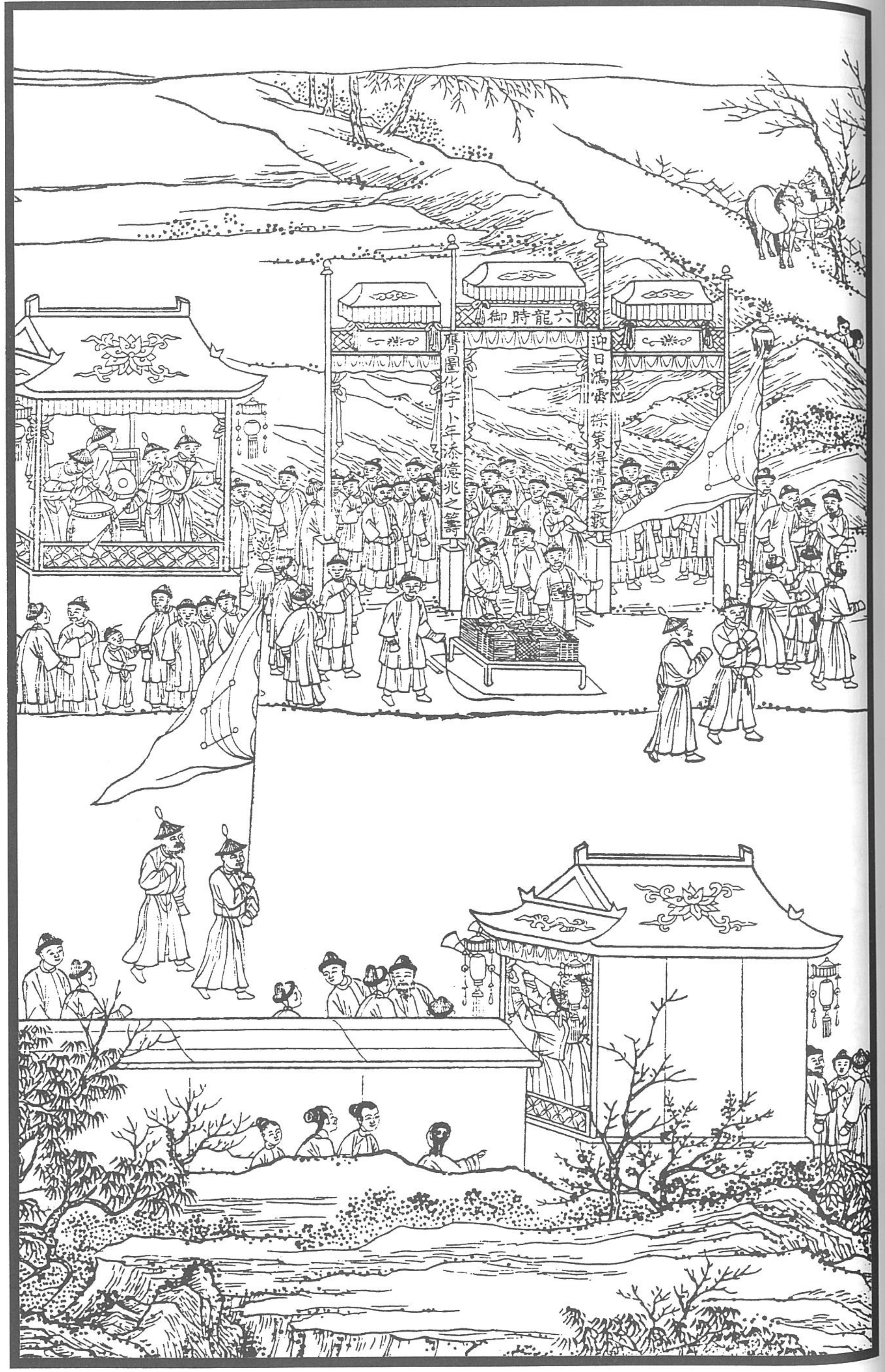

德配乾坤
福並升
悠久無疆
普天共放
堯年復旦萬齡甲子初週
舜日方升一統河山正麗
道貫咸三共乾坤而不老
五旗諸王戲臺


壽域呼嵩徵九天
日周三界

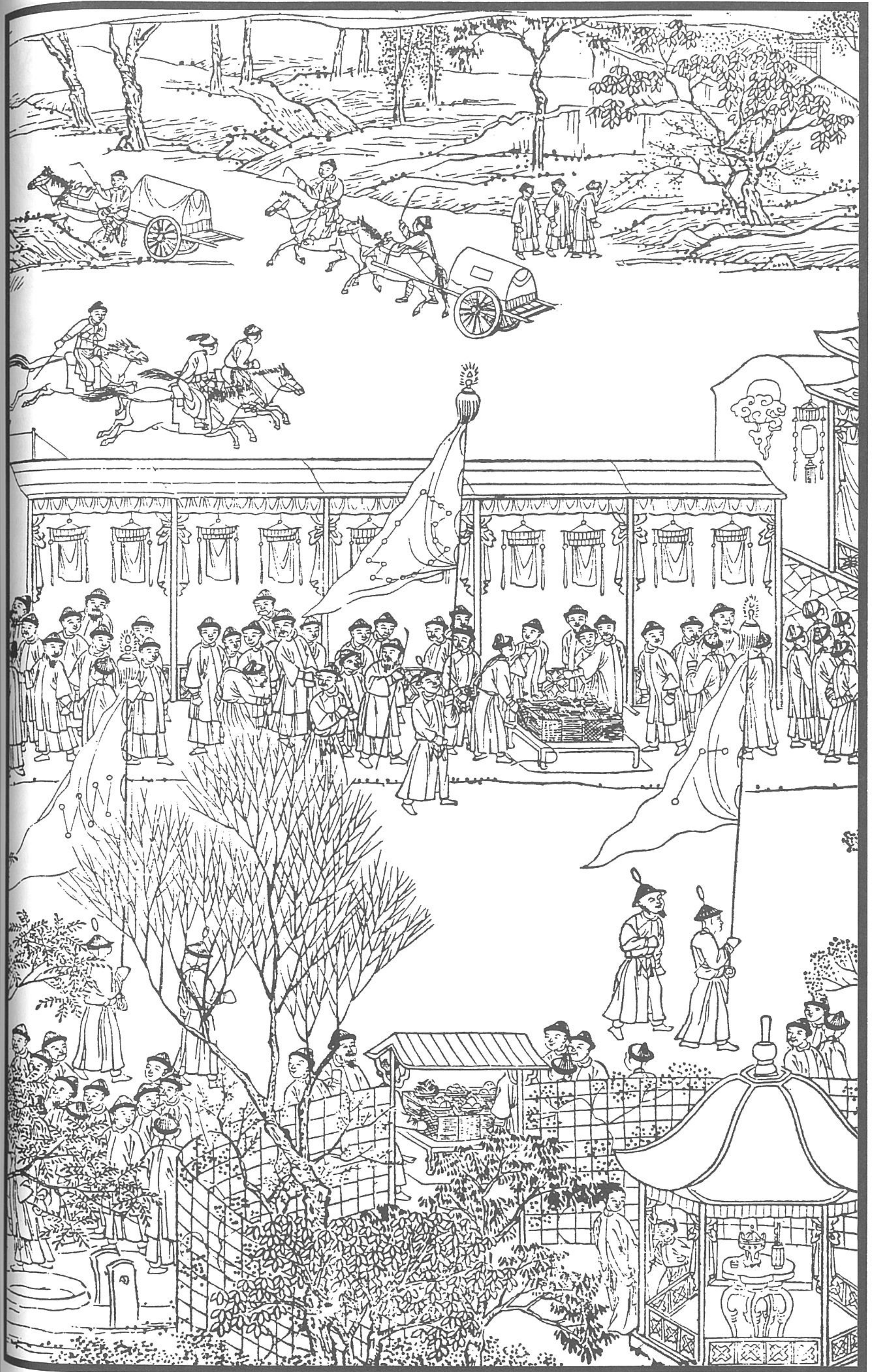

天地同春

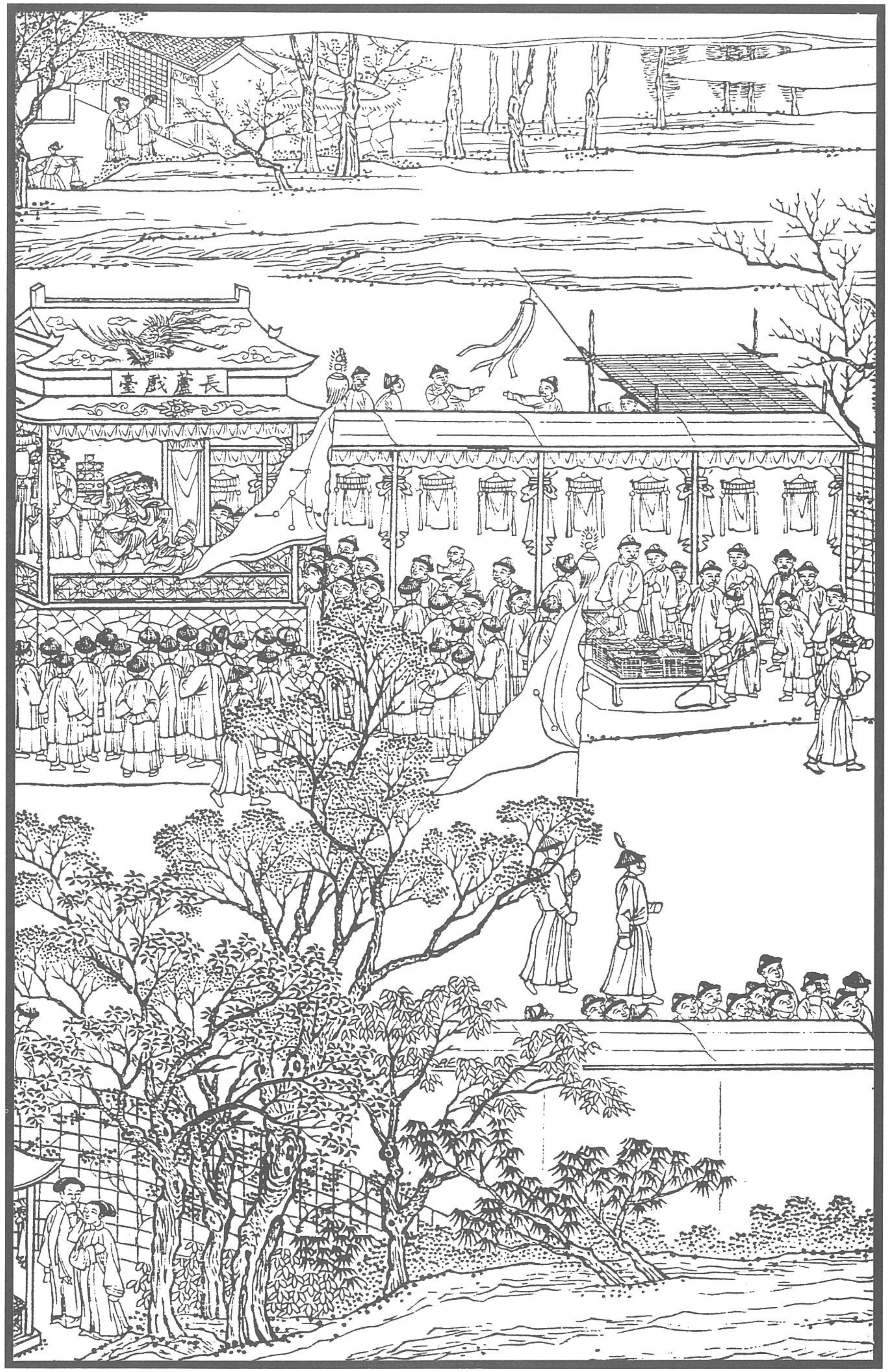


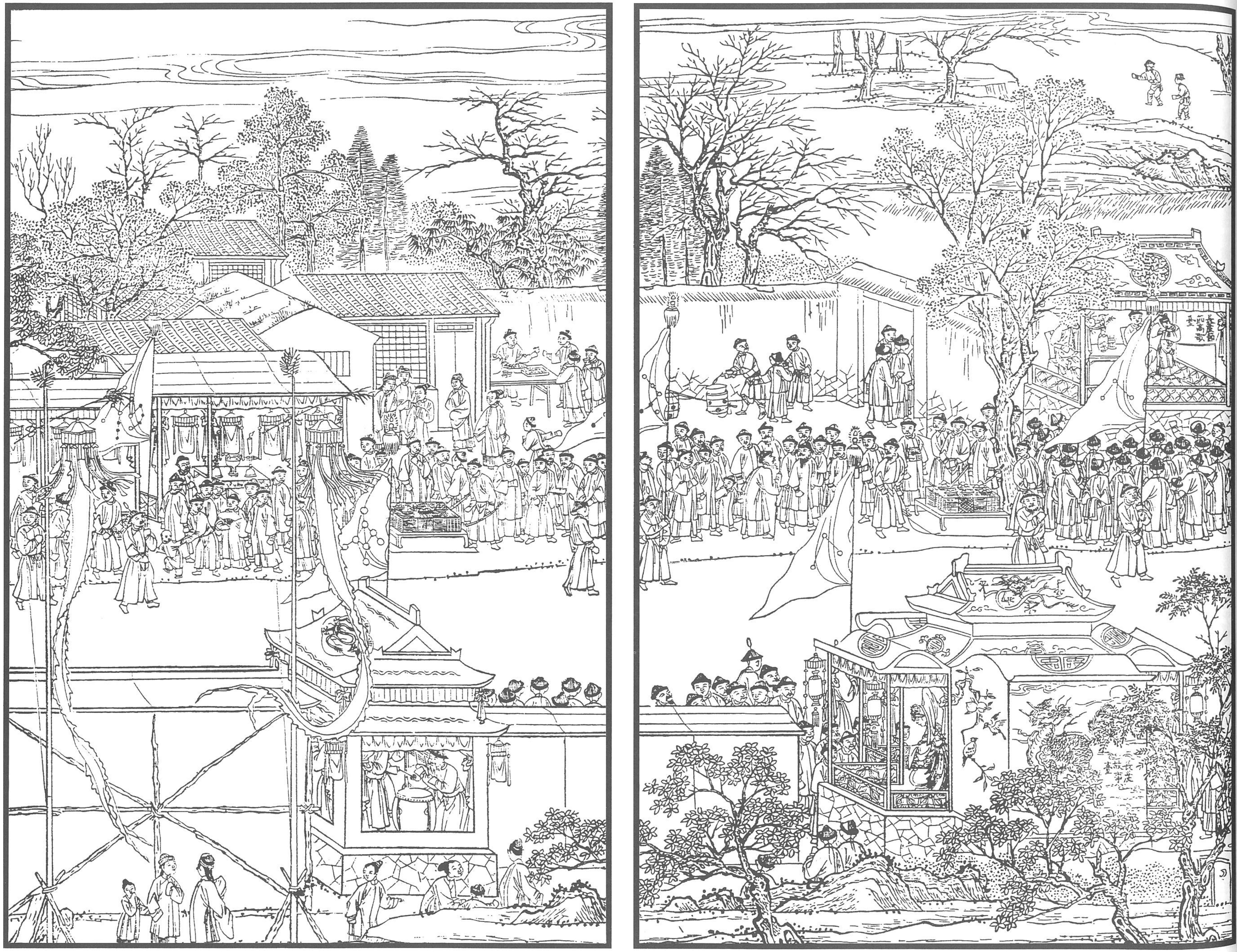




掲げて進む旗には、「二十八宿」（角・亢・氐・房・心・尾・箕・斗・牛・女・虚・危・室・壁・奎・婁・胃・昴・畢・觜・参・井・鬼・柳・星・張・翼・軫）の星座をかたどっている。ただし、そのなかのあるものの形は「清会典図」とは一致しない。

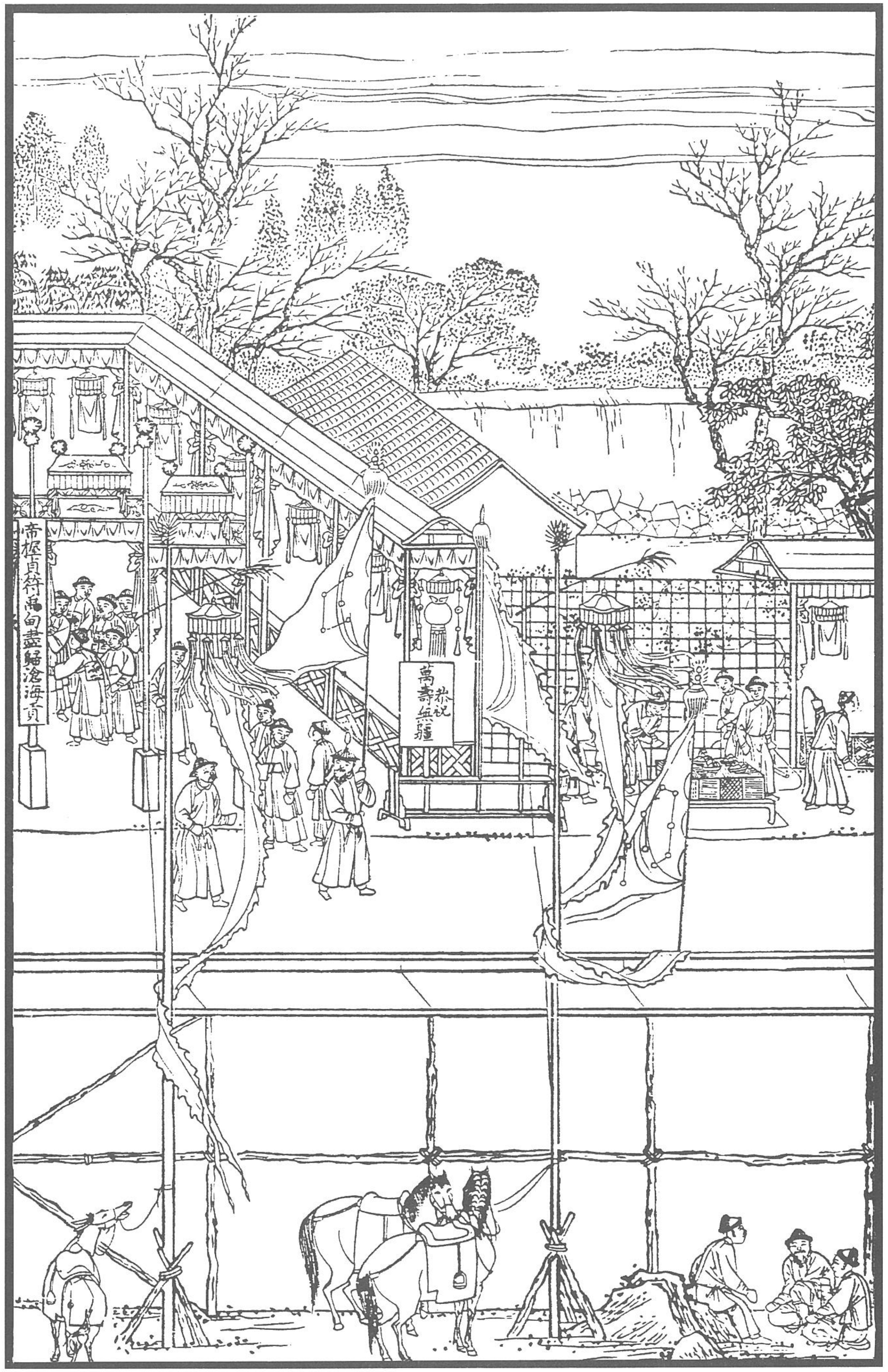


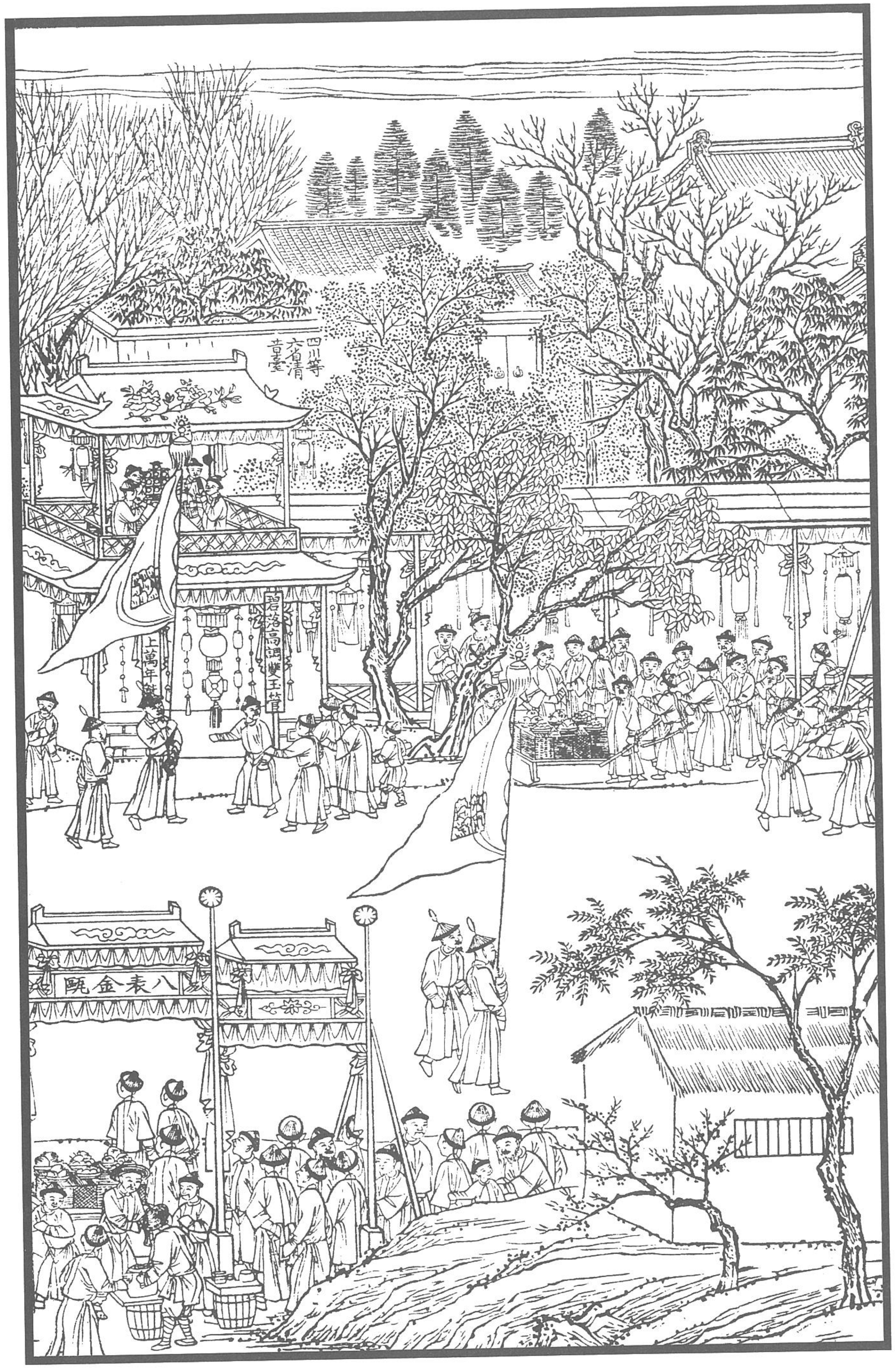

長蘆戲臺

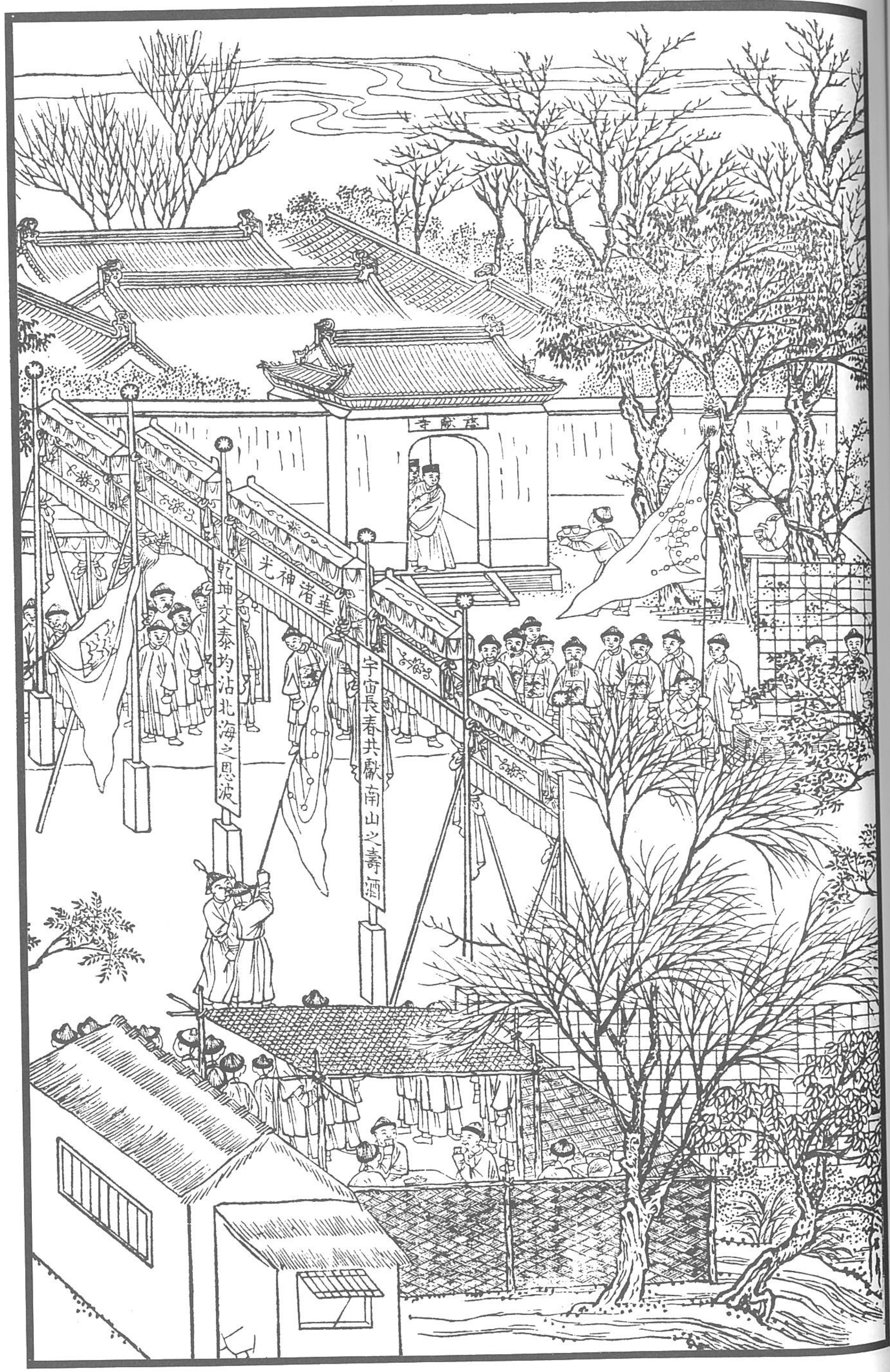


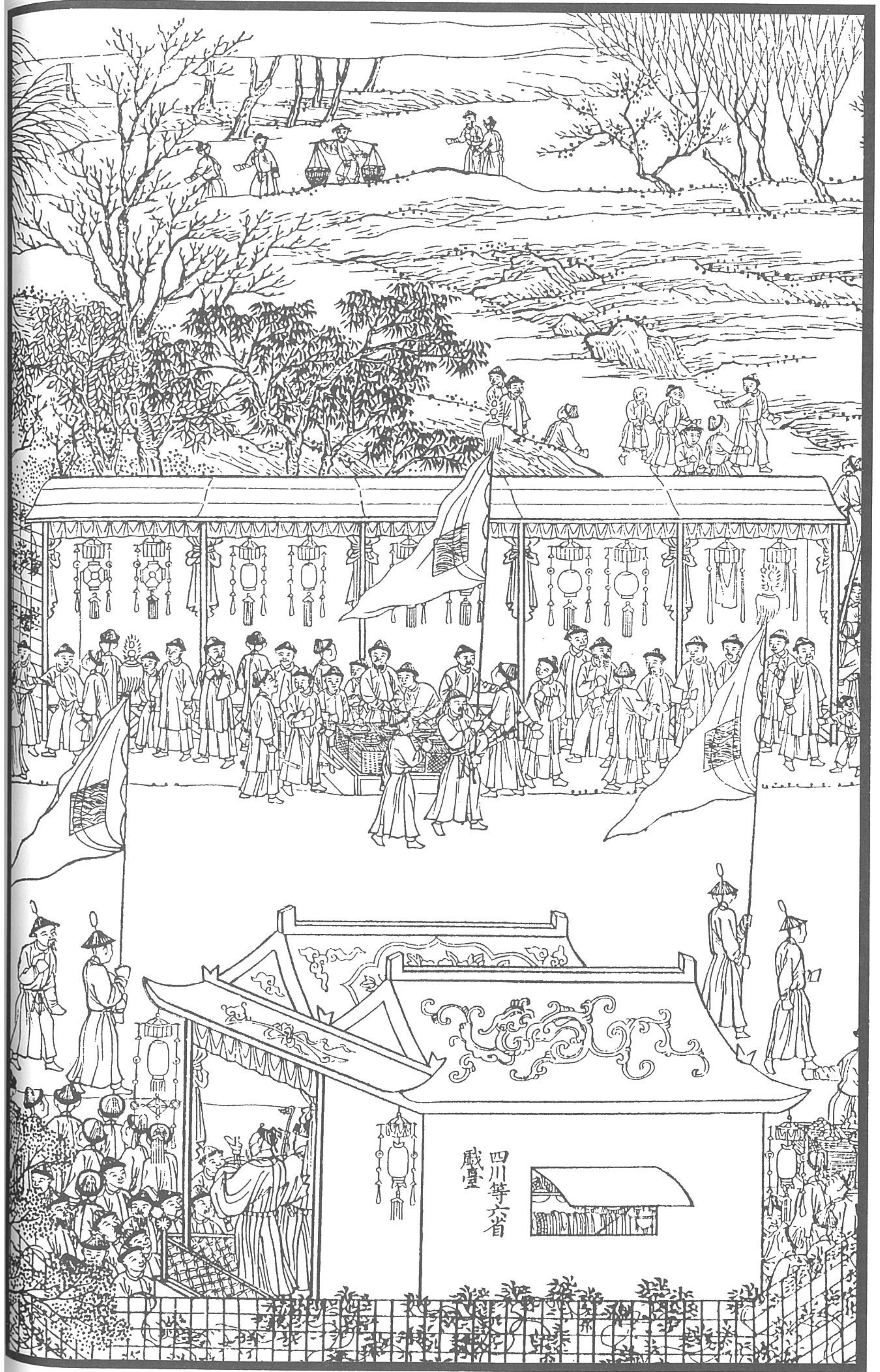
長蘆戯台の上では、桶のようなものから何かを飲む所作の人物が見られる。手前の「故事台」では女性の舞踊の姿がうかがわれる。長蘆は、製塩で知られる河北天津付近の地名。

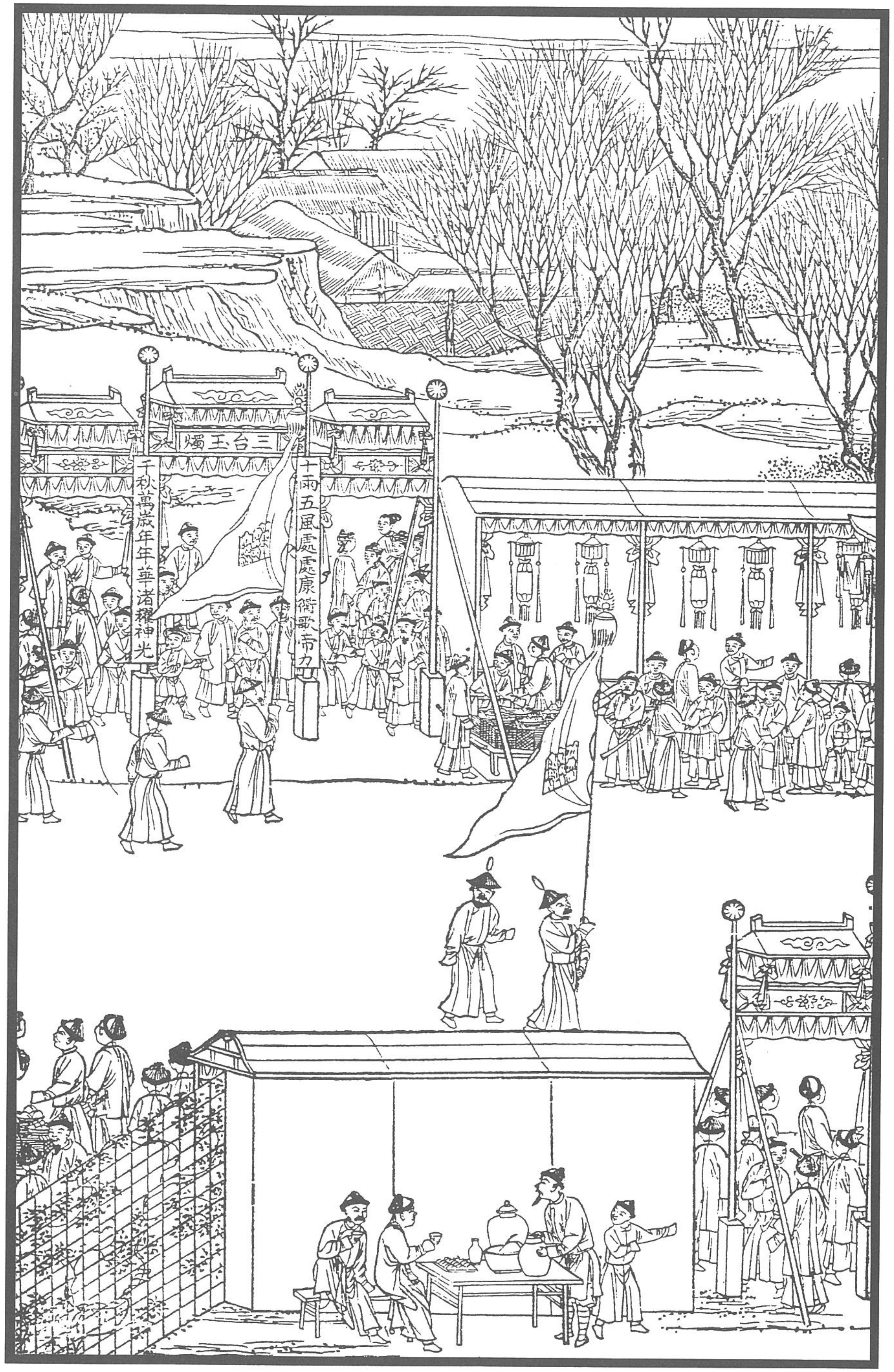

長蘆商人
萬壽經
長蘆龍棚
恭祝
萬壽無疆

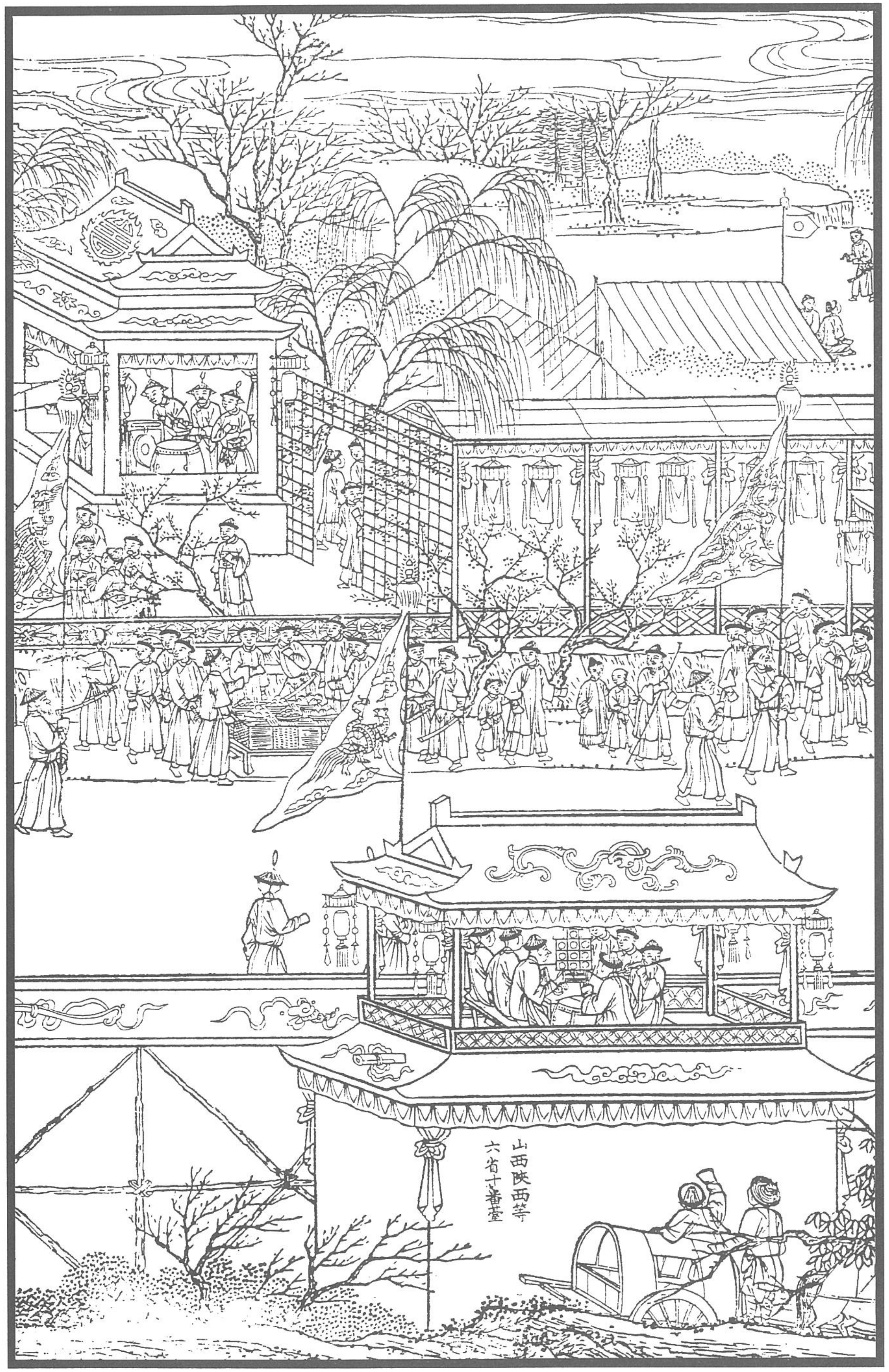

恭祝
萬壽無疆

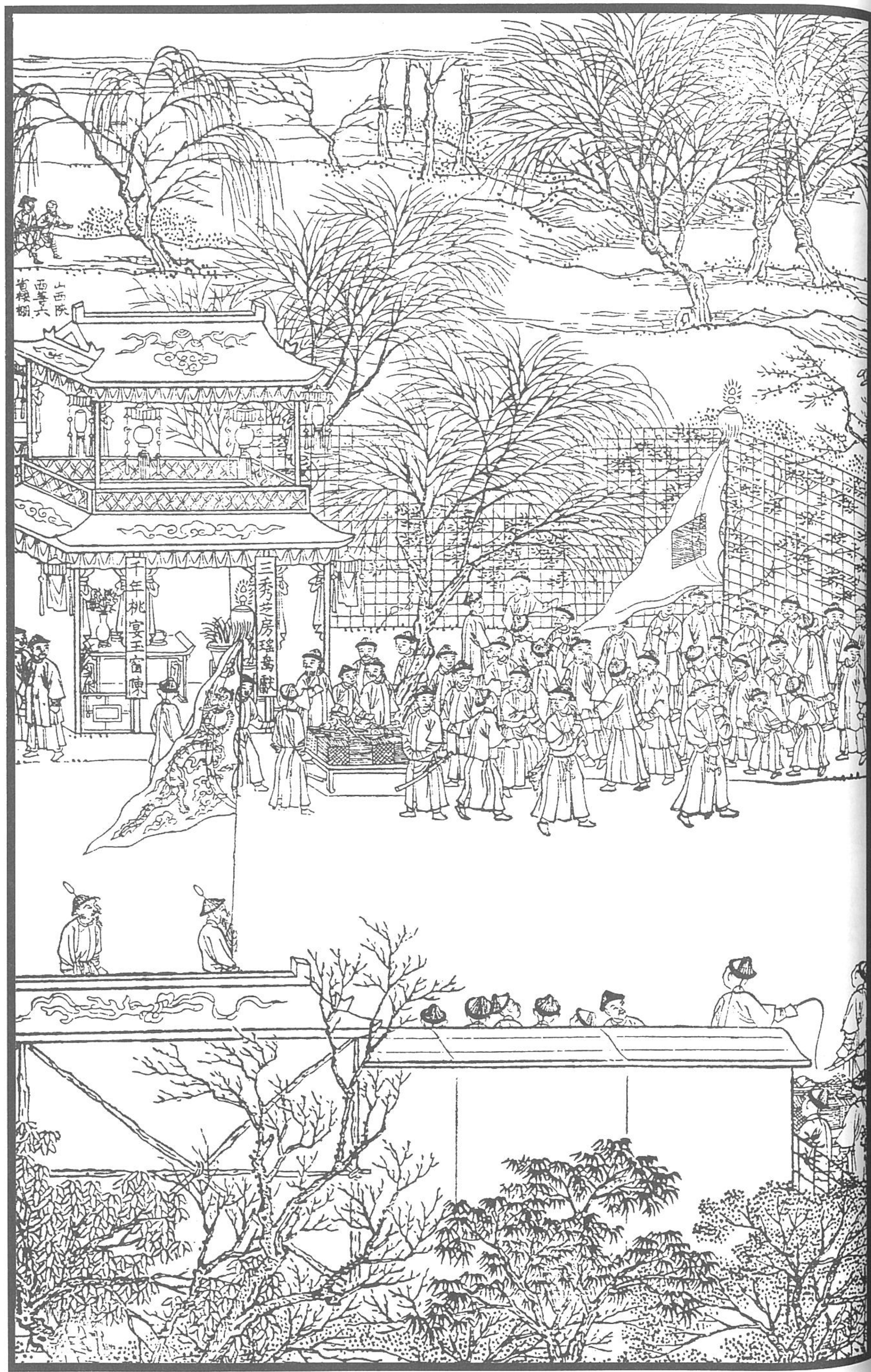

四川等六省清音臺
八表金甌


華渚神光
乾坤交泰均沾北海之恩波
宇宙長春共獻南山之壽酒

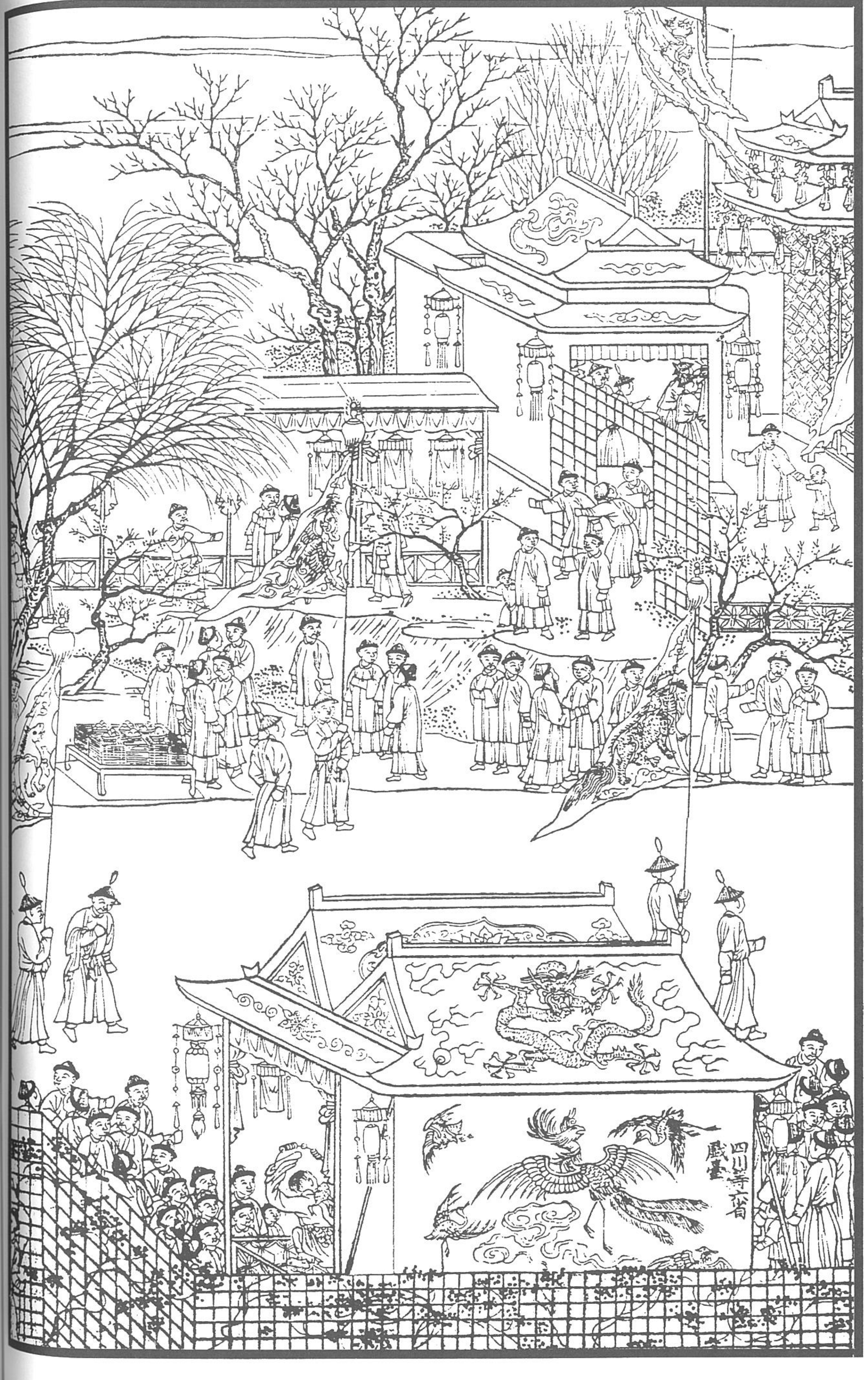

四川等六省
戲臺

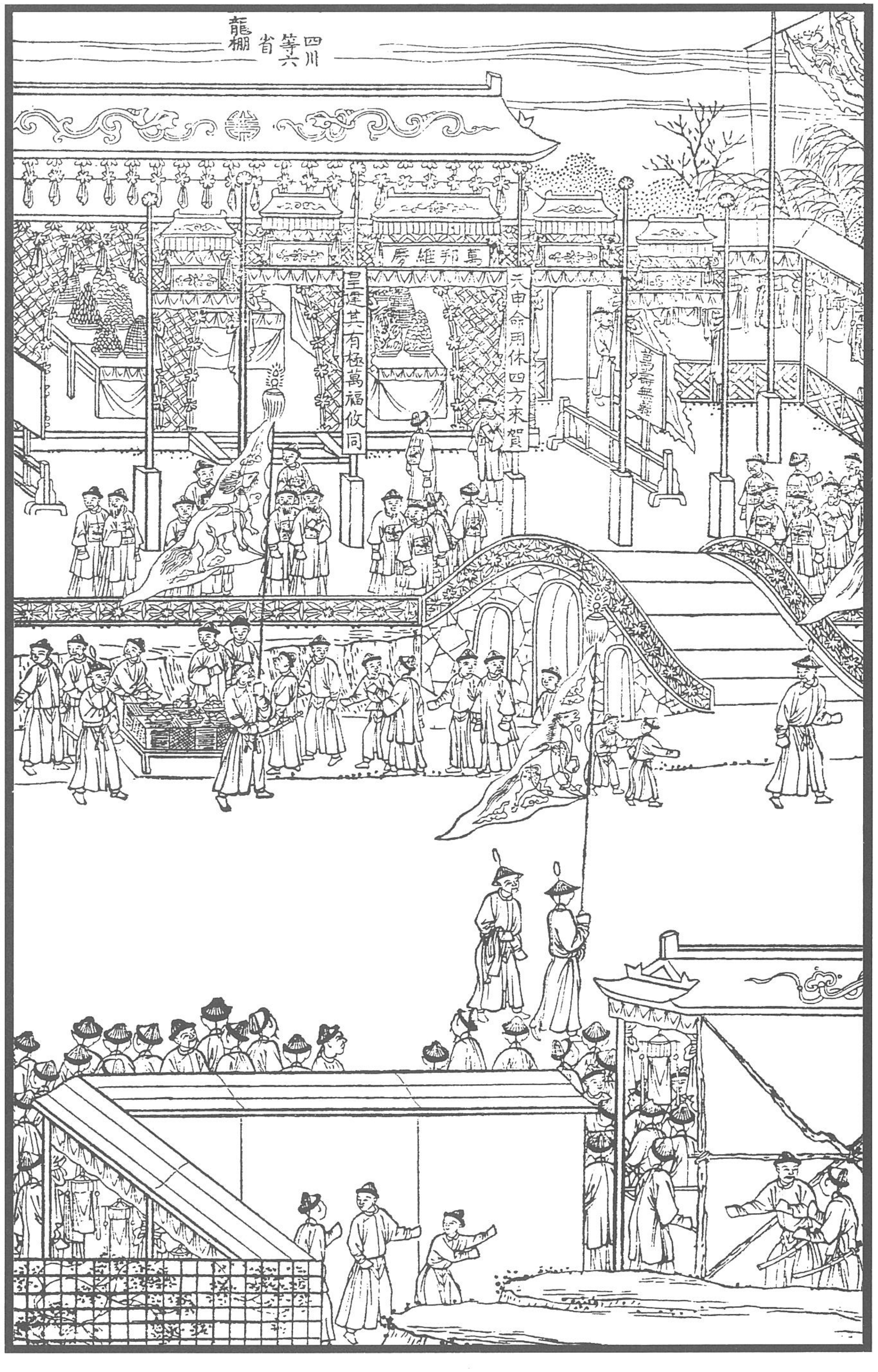

三台玉燭
千秋萬歲年年華渚耀神光
十雨五風處處康衢歌帝力

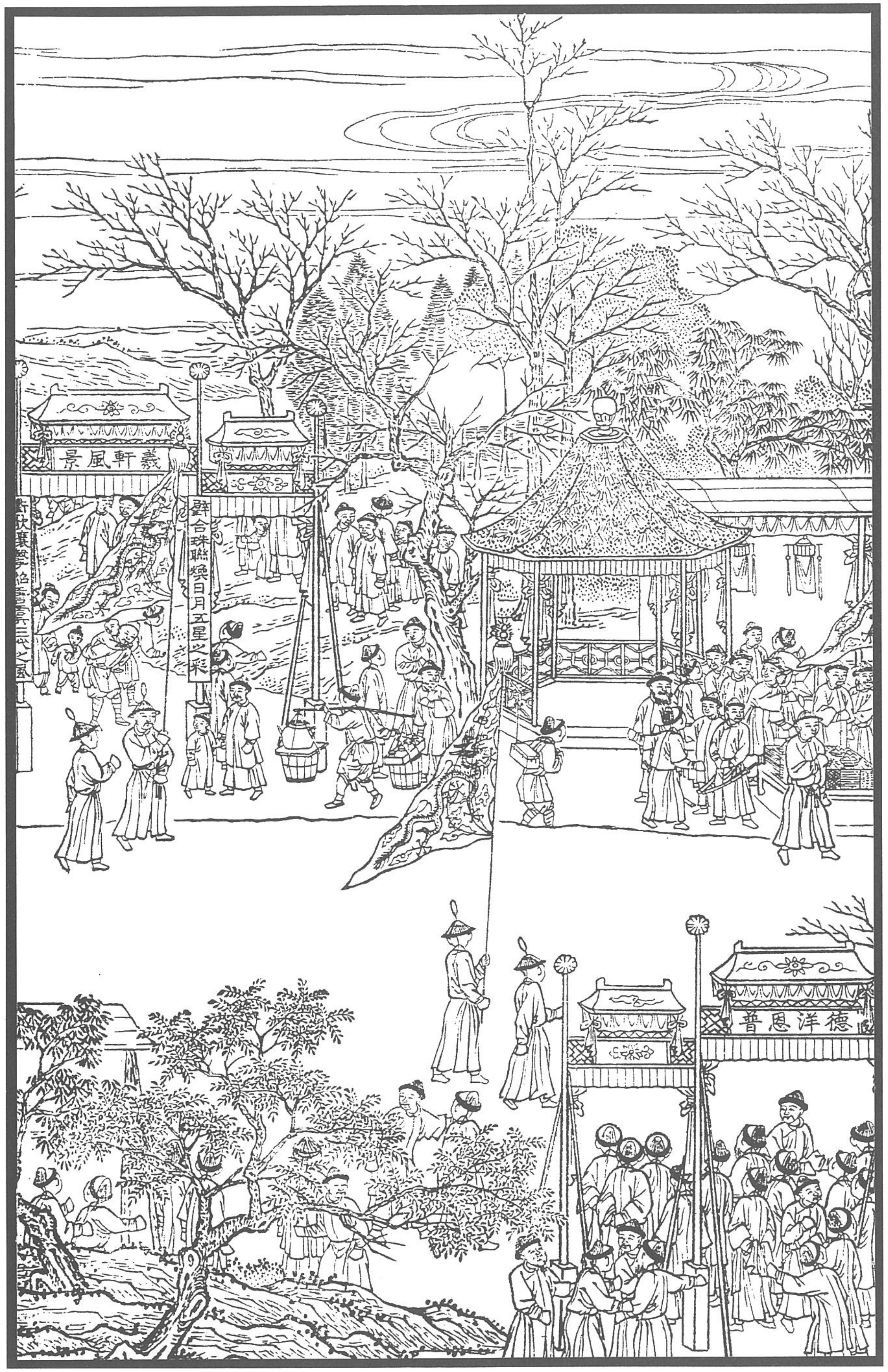


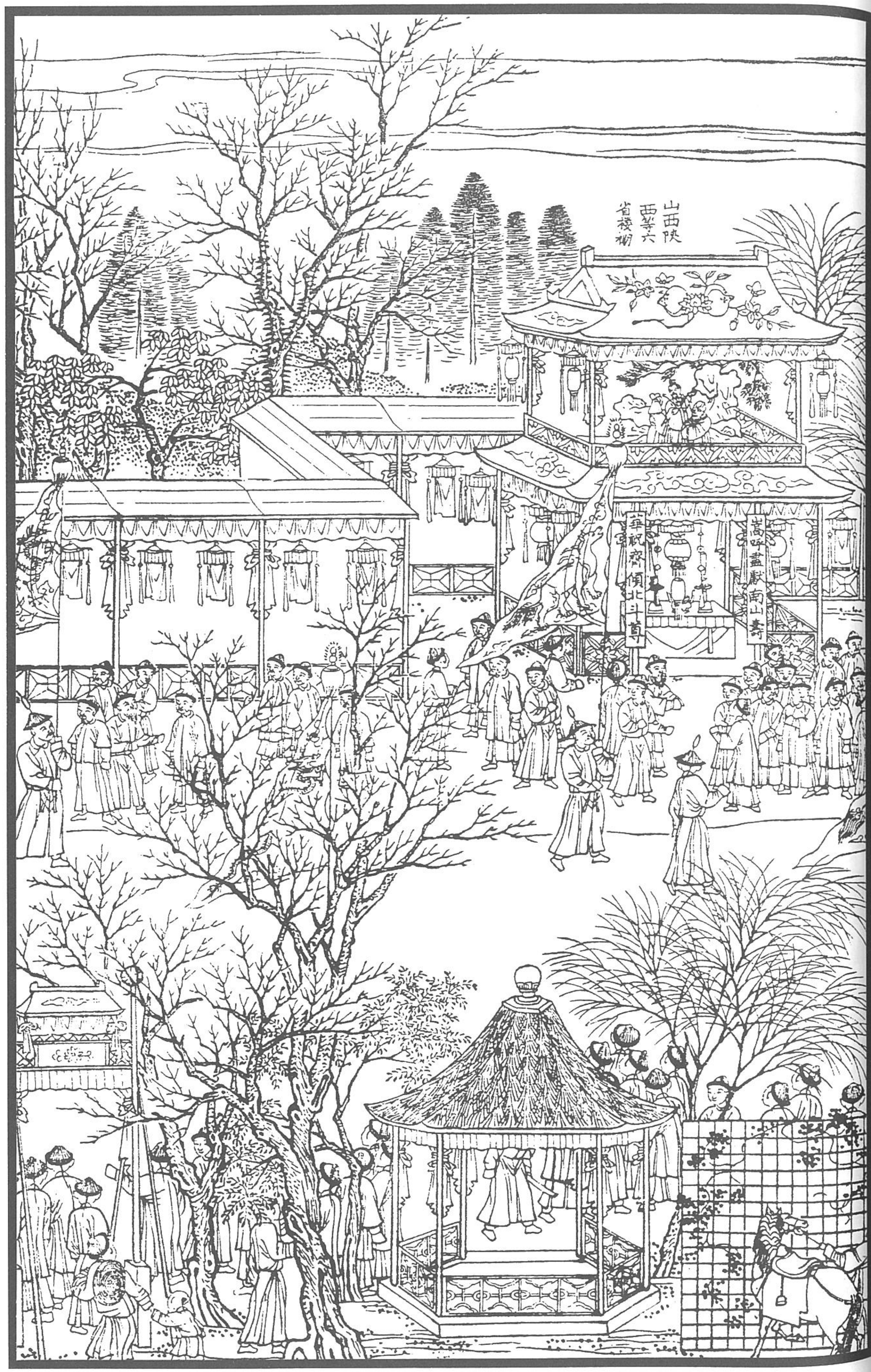


旗を掲げた儀仗兵が行進する。左側の旗には「龍」や「玄武」などの図案が見える。

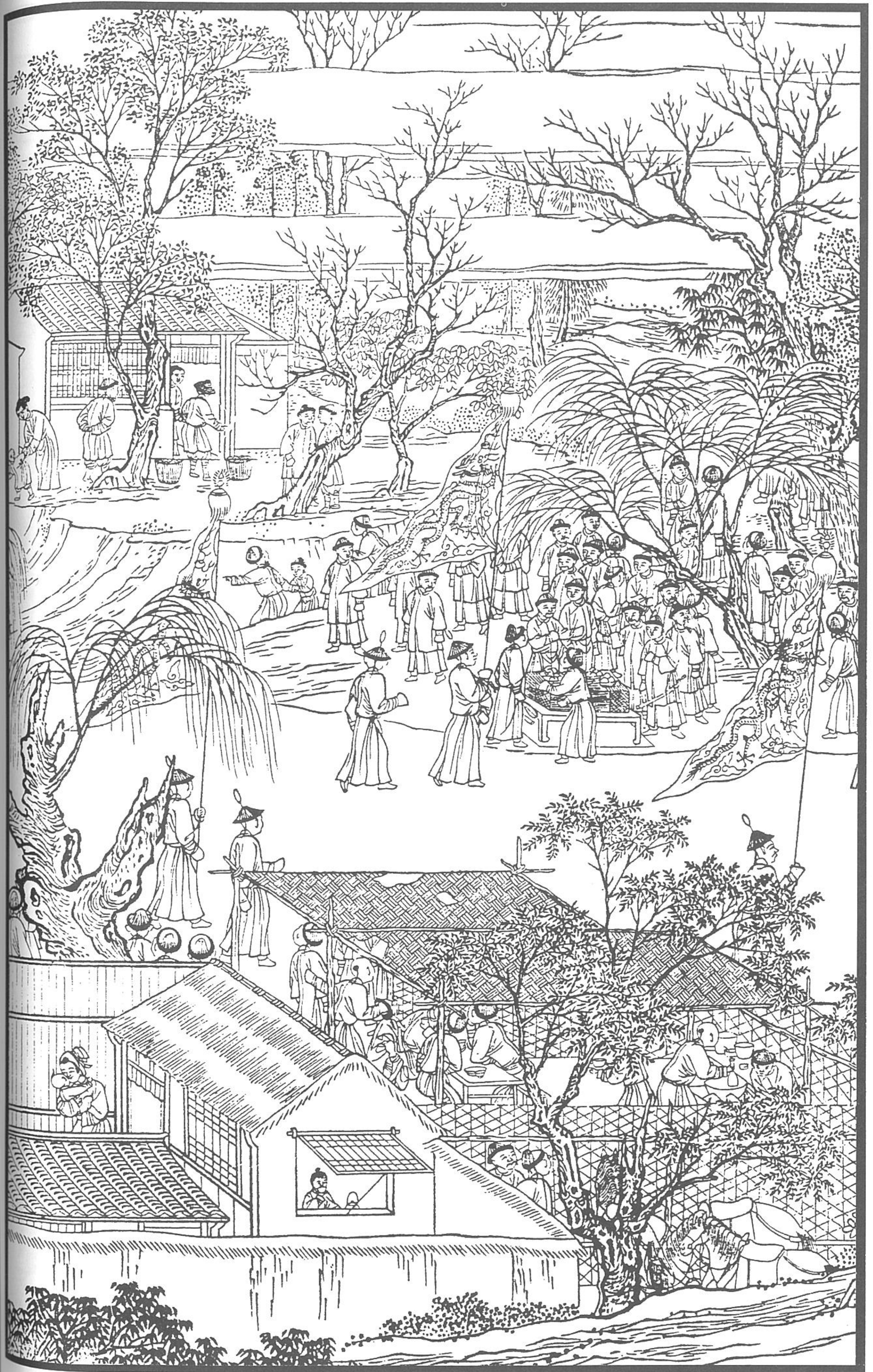

四川等六省
戲臺

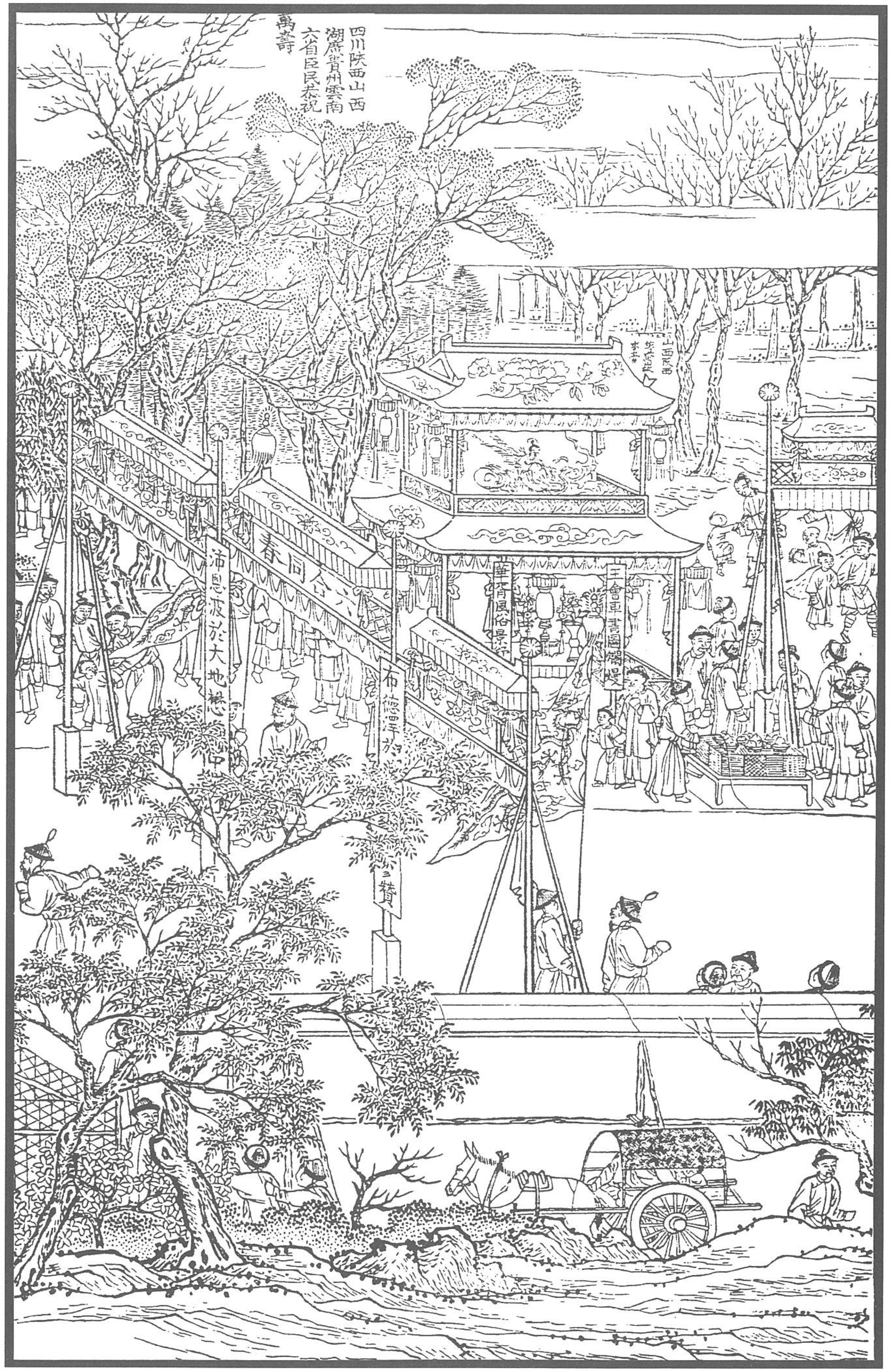

四川等六省
龍棚
萬邦維慶
皇建其有極萬福攸同
天申命用休四方來賀
萬壽無疆

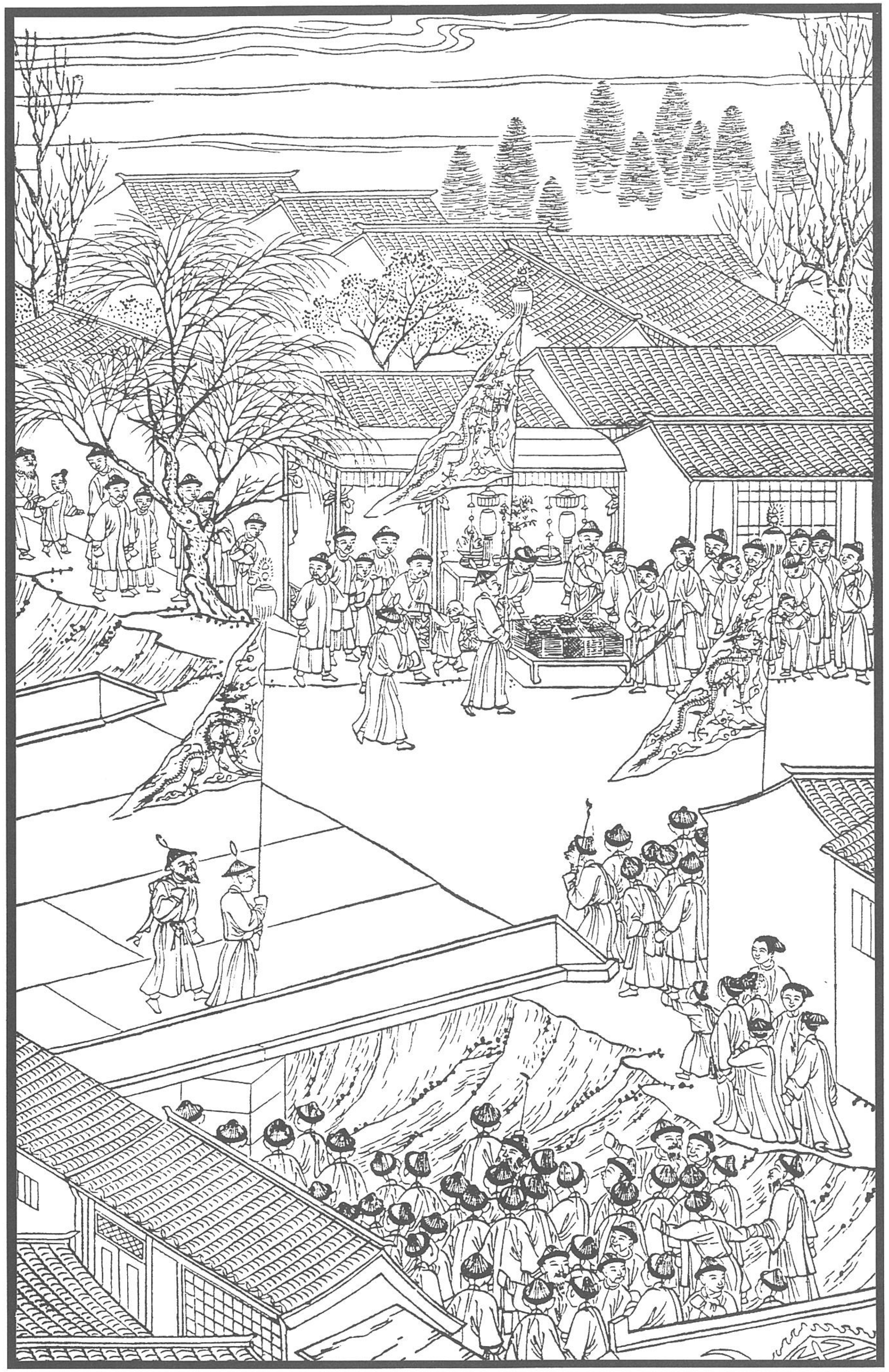


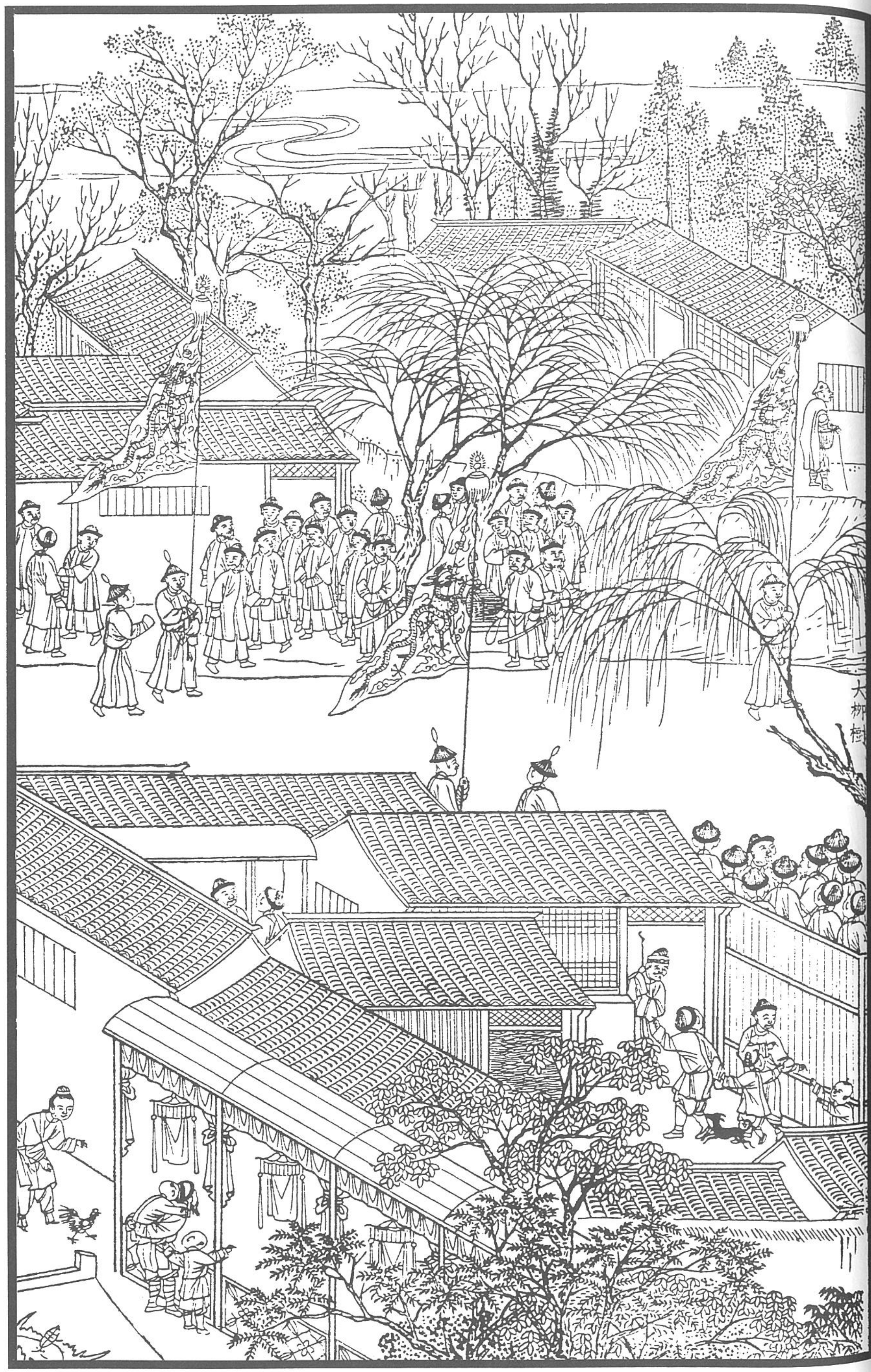


山西、陝西等六省楼棚は二階建になっており、一階は対聯が掛けられ、飾り付けがされている。二階には三人の仙人が姿を見せている。長寿を寿ぐため、一人は西王母、もう一人は寿星のようである。

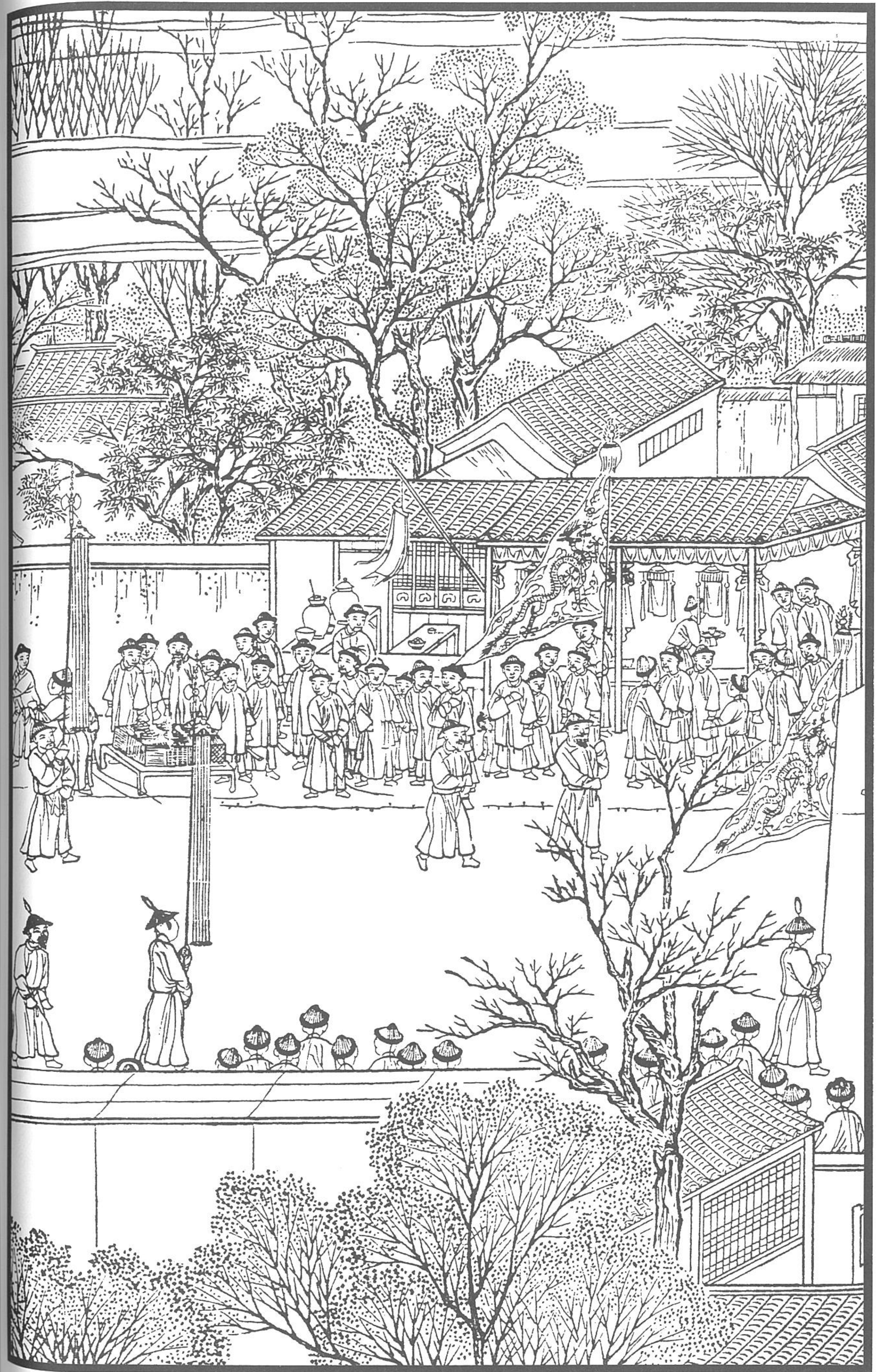


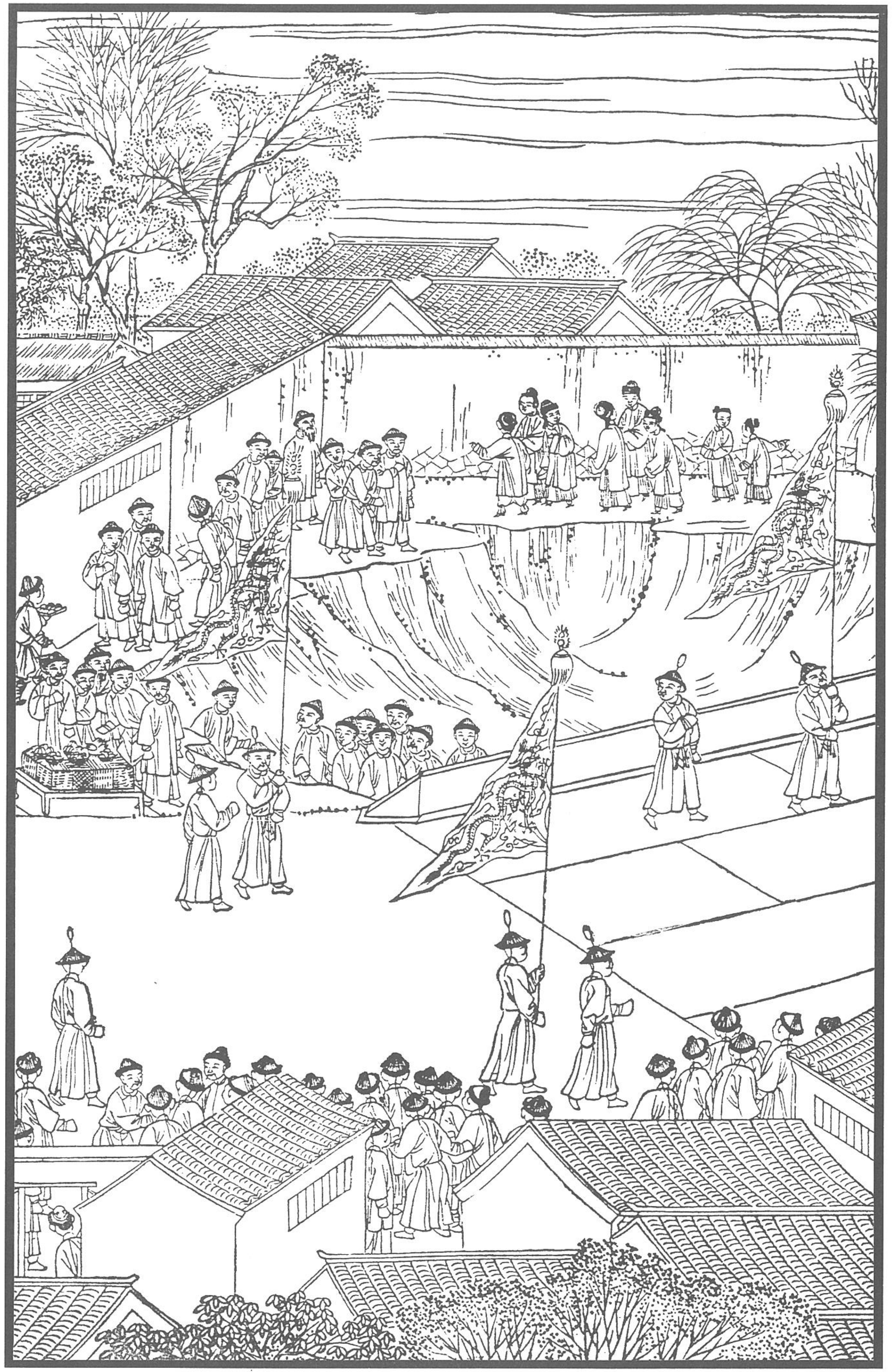

四川陝西山西
湖廣貴州雲南
六省臣民恭祝
萬壽
六合同春

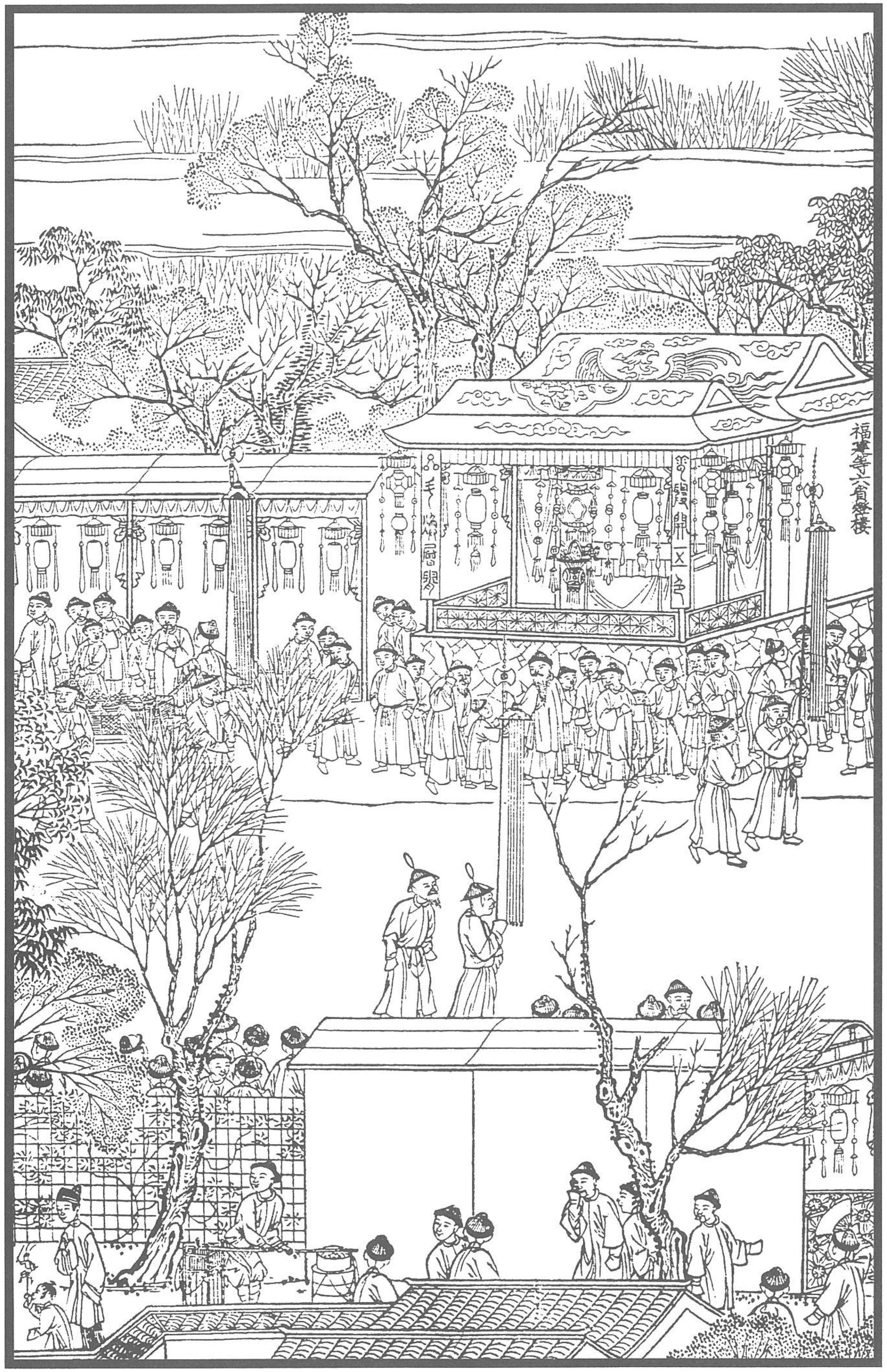


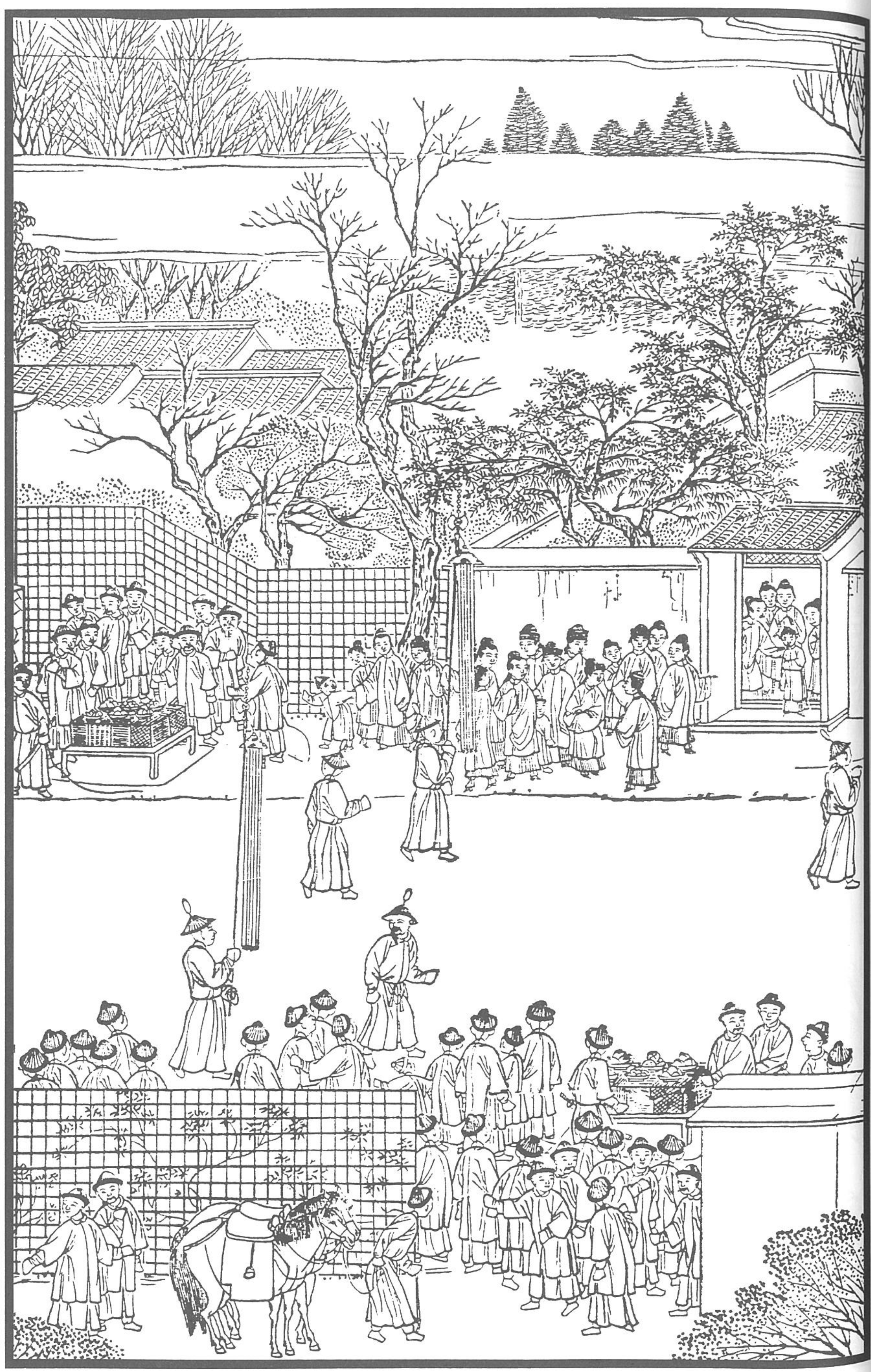


山西、陝西等六省故事台も二階建になっており、一階は女性が一人いる。その手前の驢馬の引く車の中には、横たわって居眠りをする人物が描かれる。左ページの家の中庭ではしゃぐ子どもと黒い犬が珍しい。その左には鶏も描かれている。

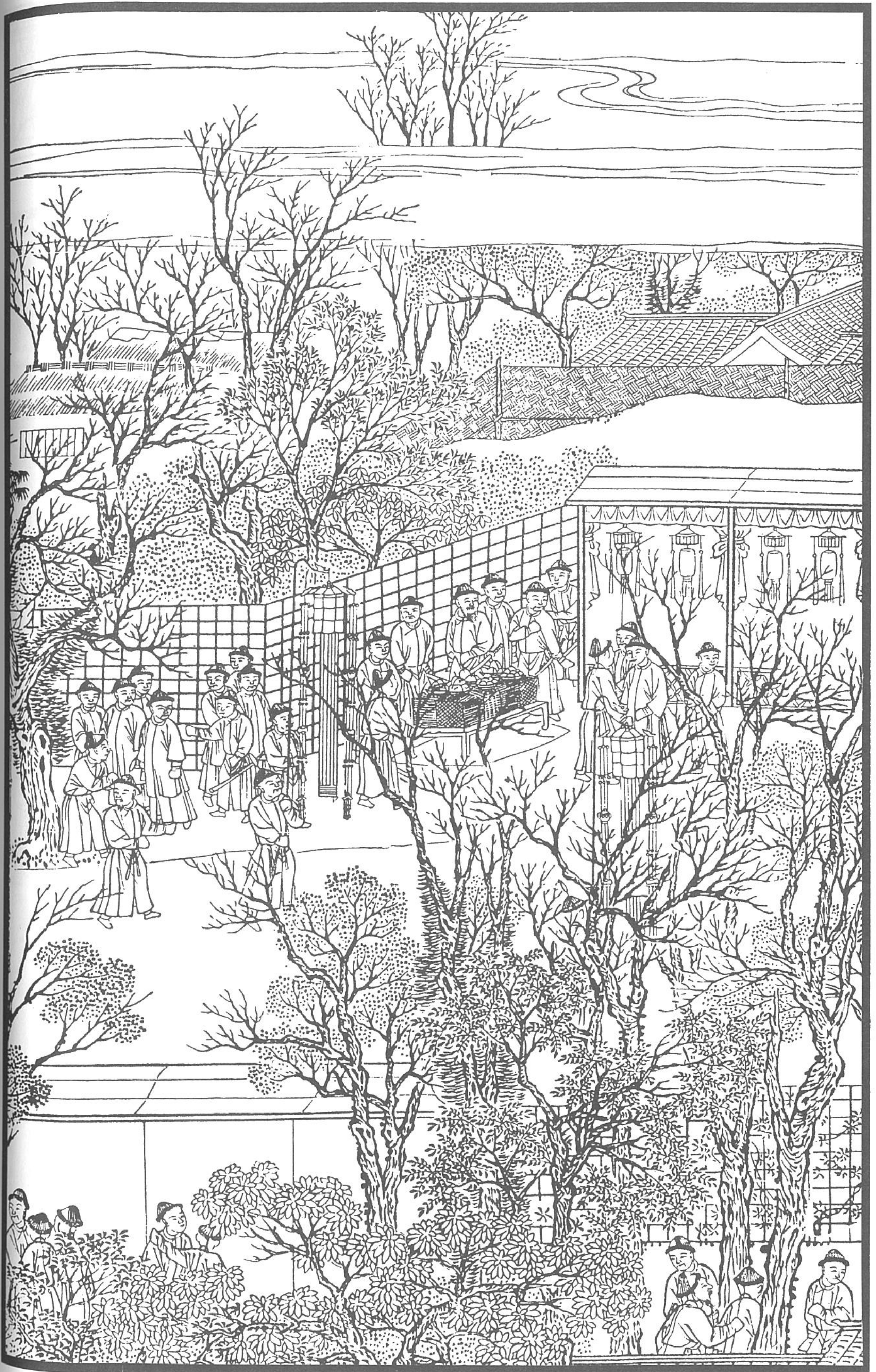


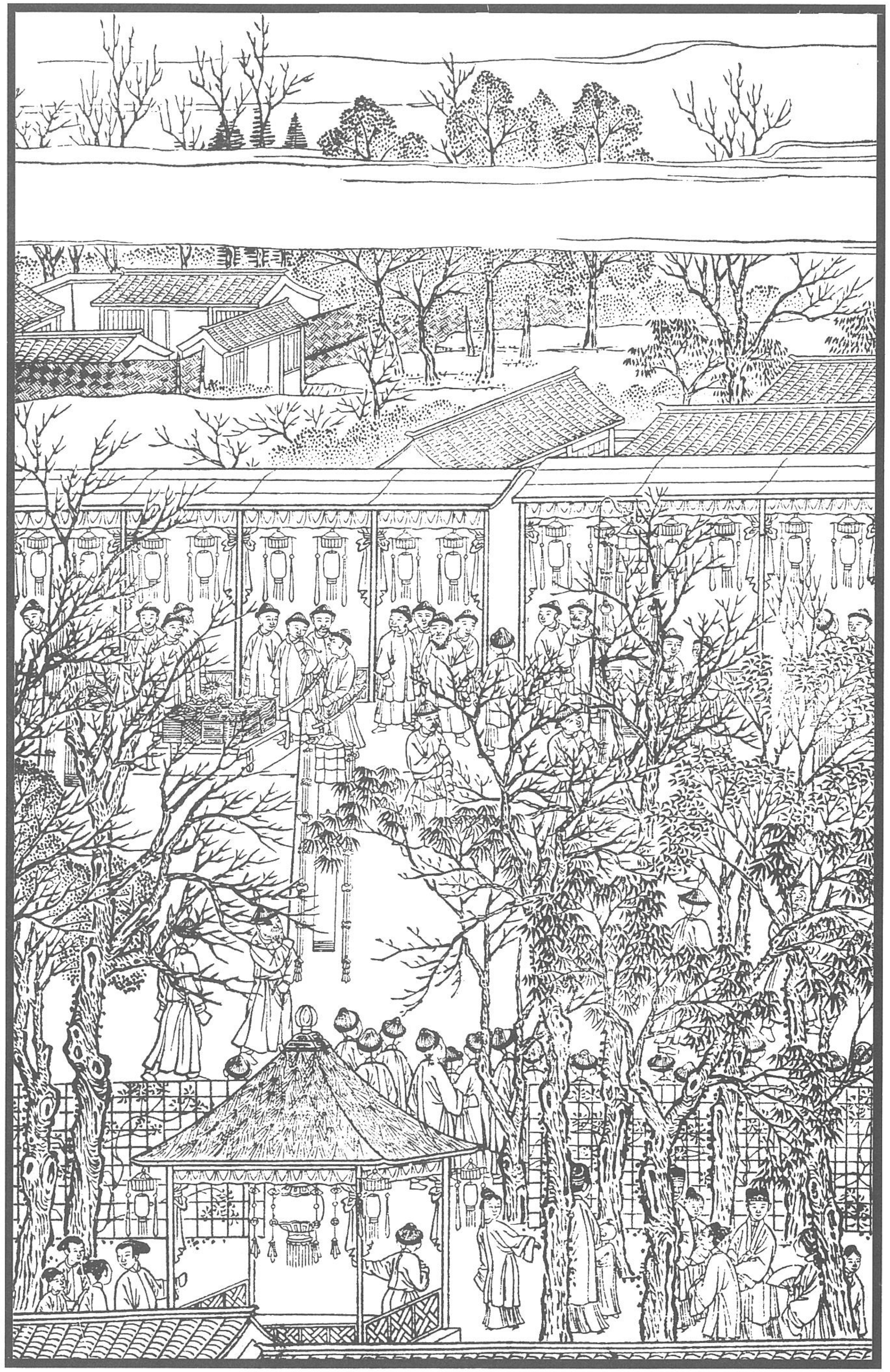


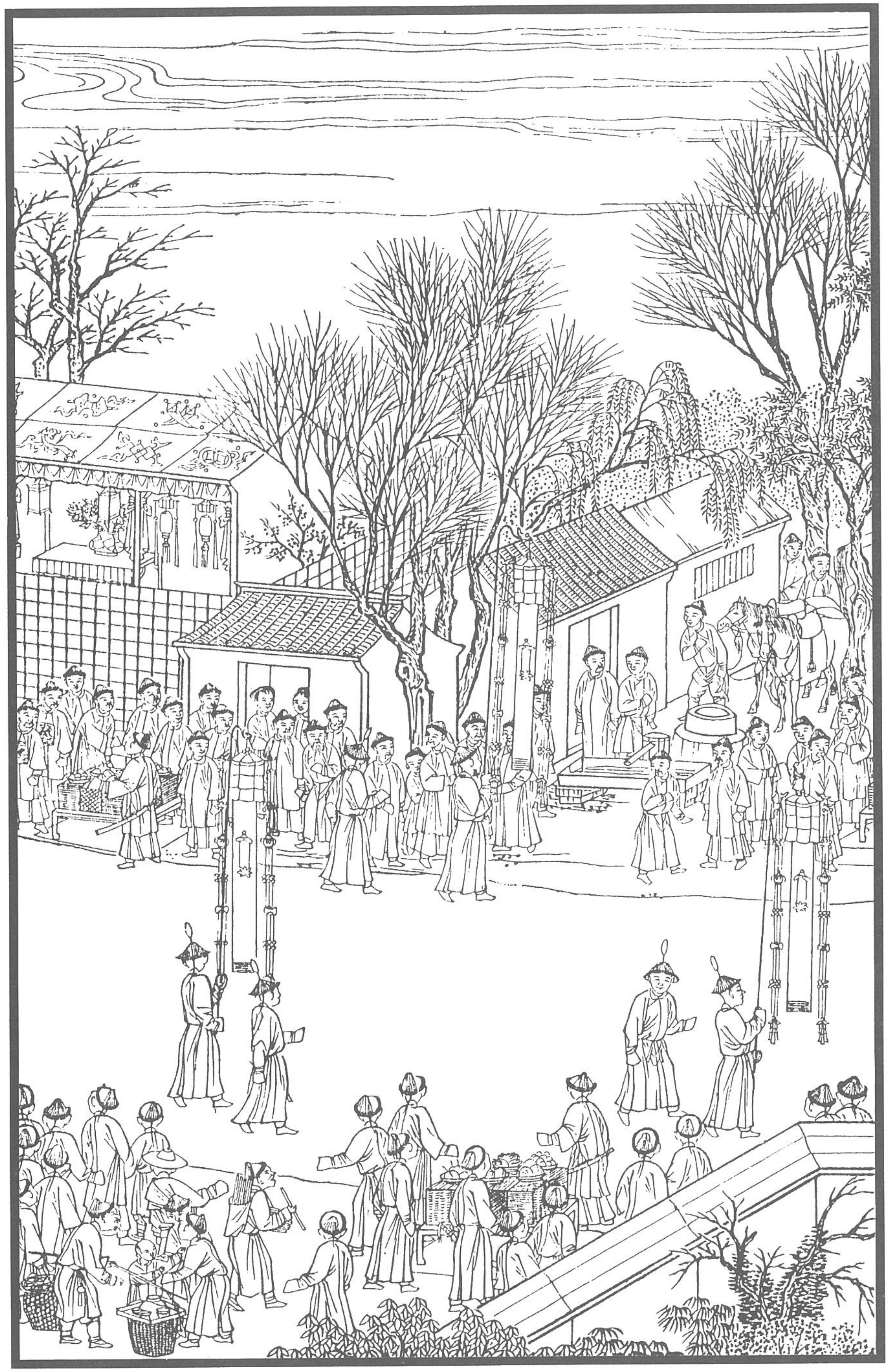


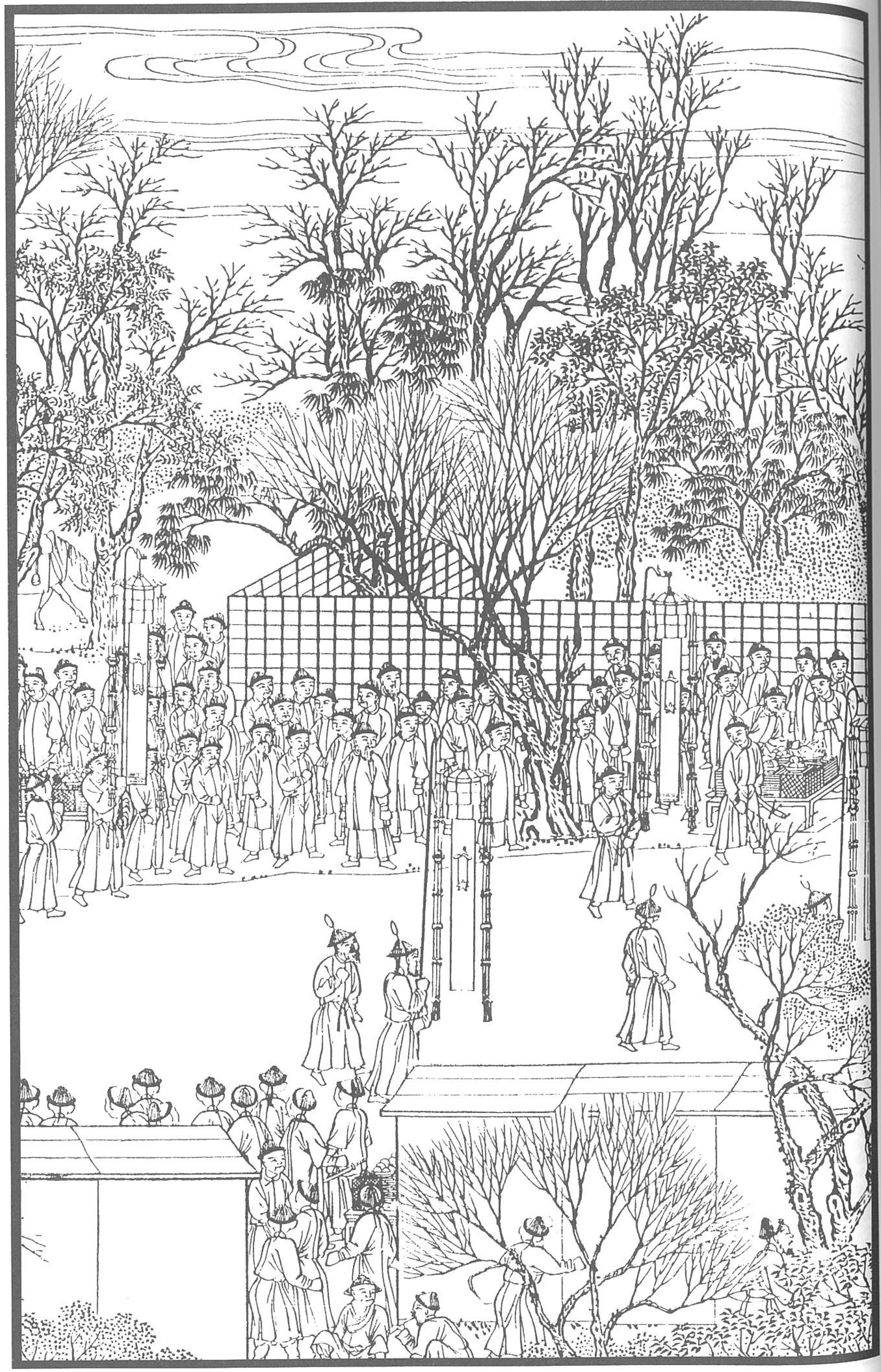


左端に影絵人形「皮影」を手にした児童が、母親と思しき人物と描かれている。
西直門の手前の大通りに描かれた売貨郎もこの「皮影」を売っていた。

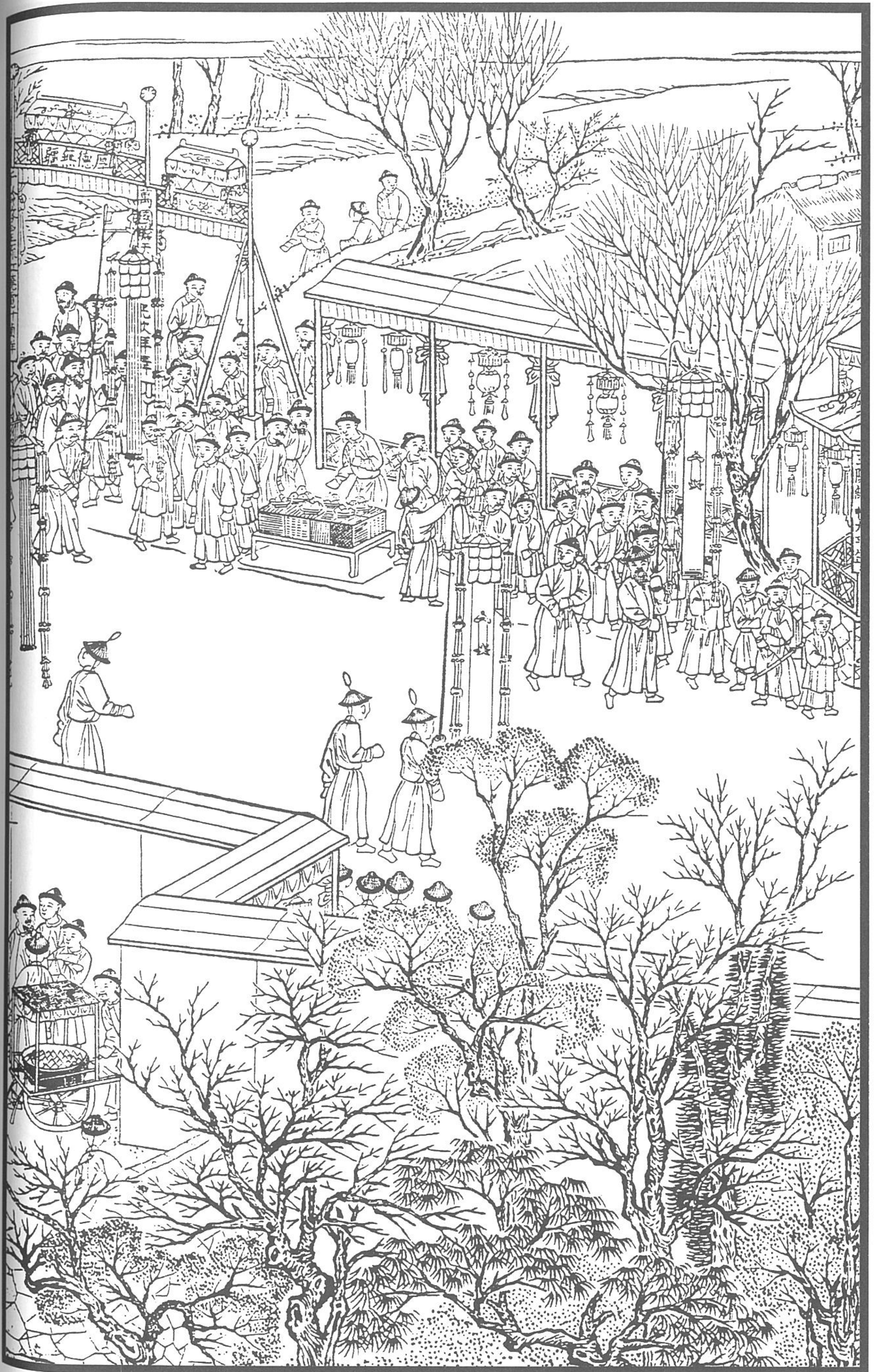


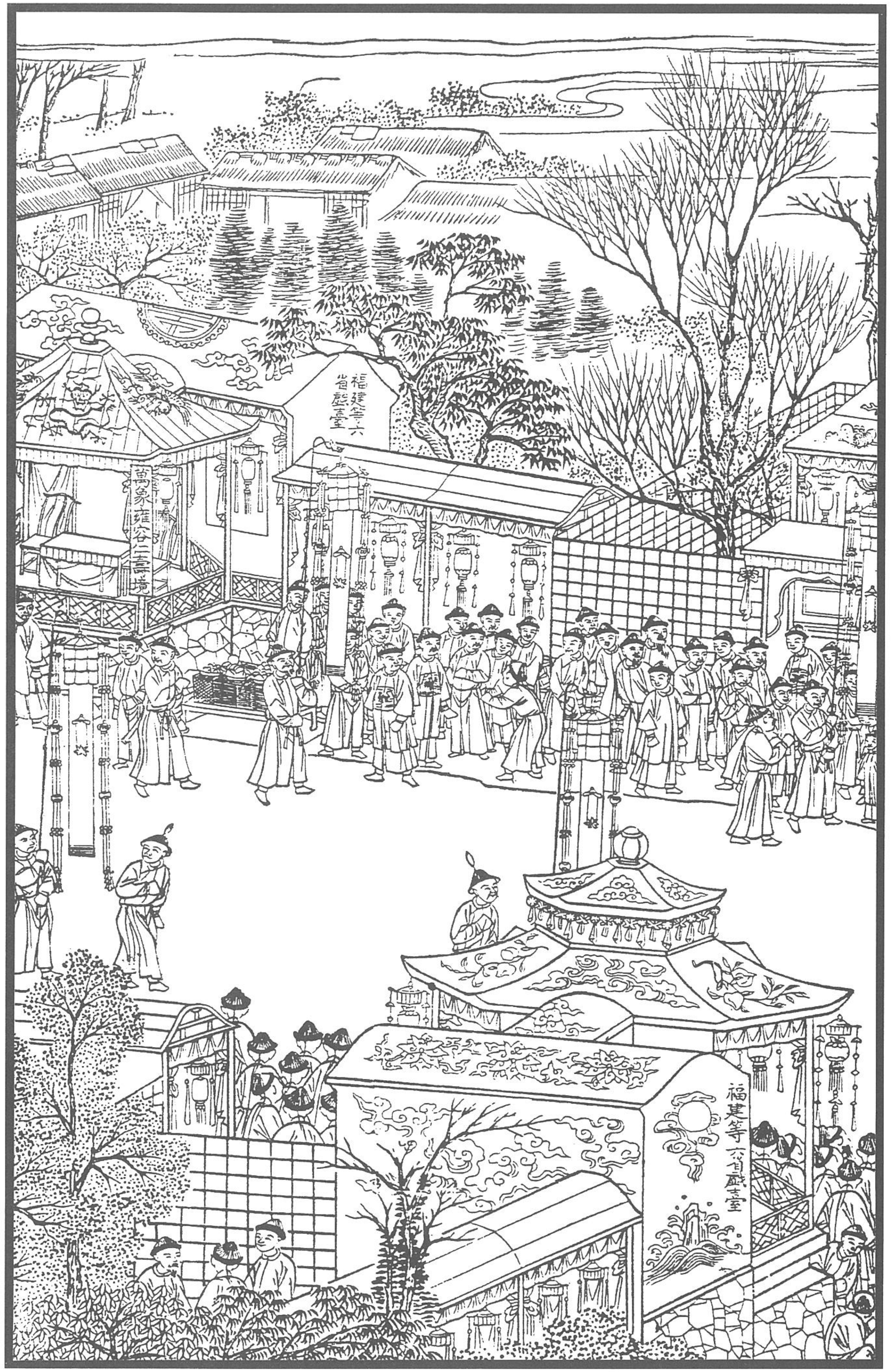


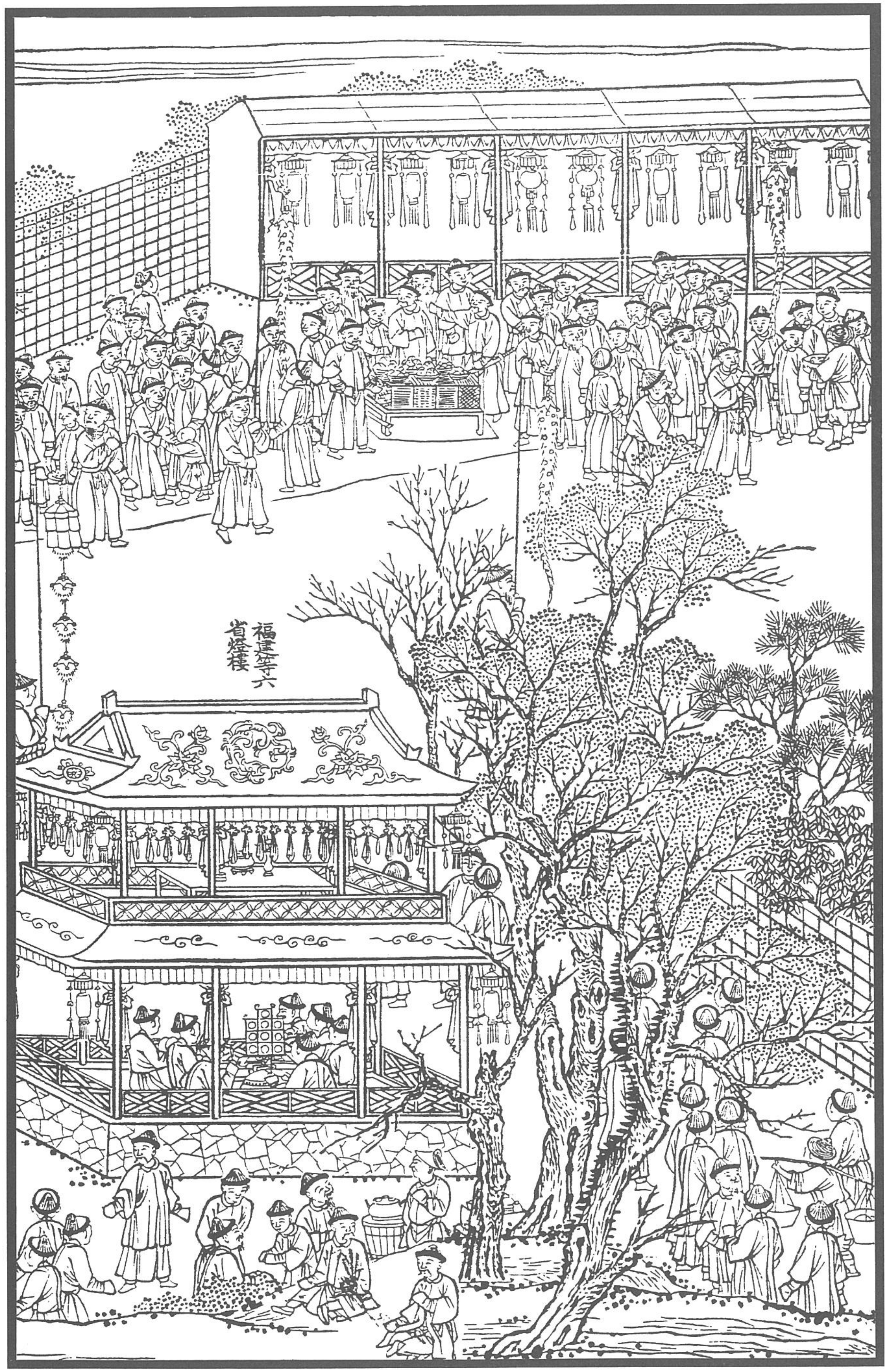


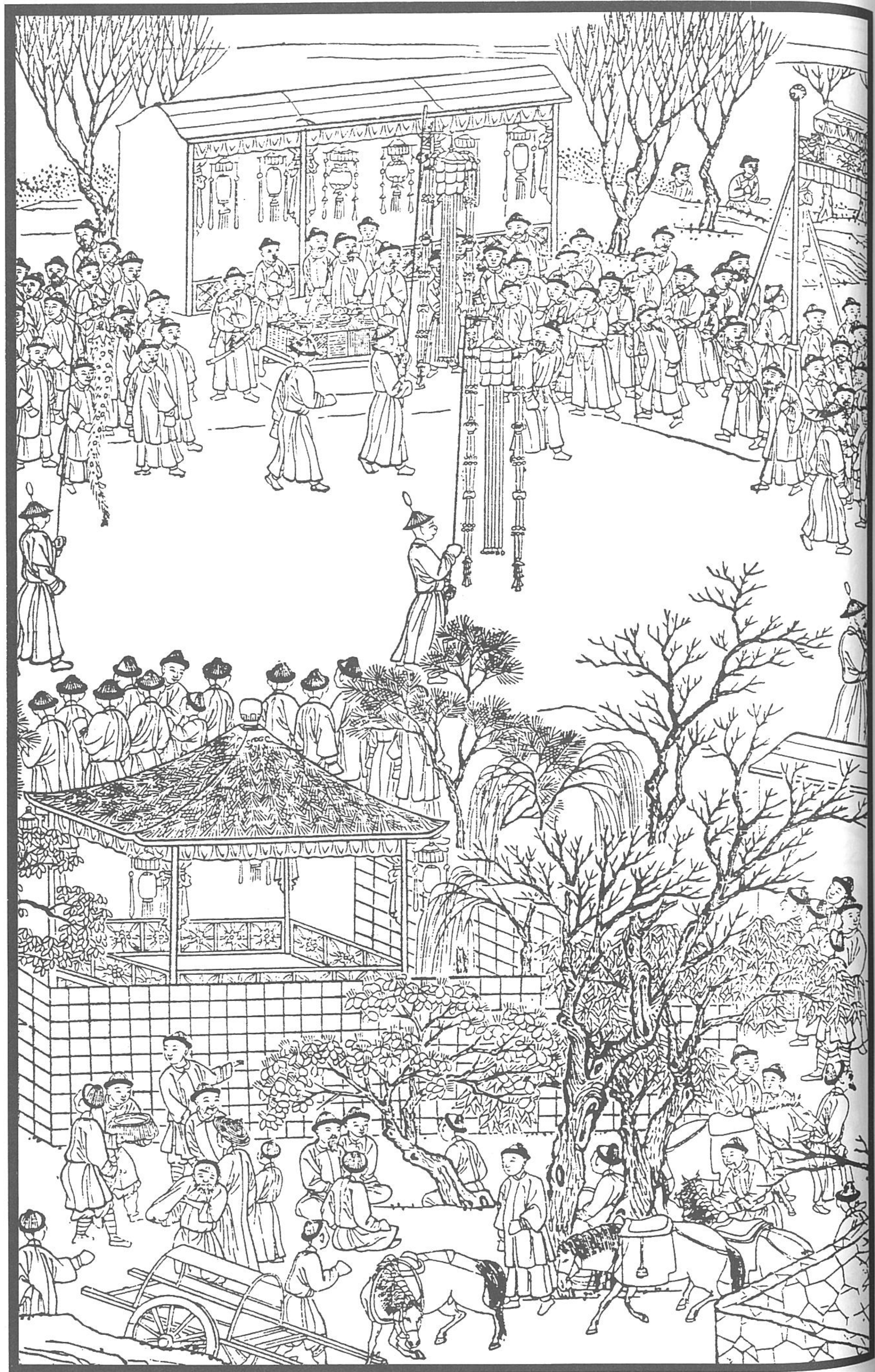


季節は旧暦の三月十八日で、木々が芽吹く時期である。梅の花は終わりに近づき、桃が咲く時期であろう。また常緑樹もある。こうした季節の木々の葉の茂りようを、写実的に描く画家の技量は並外れたものがある。

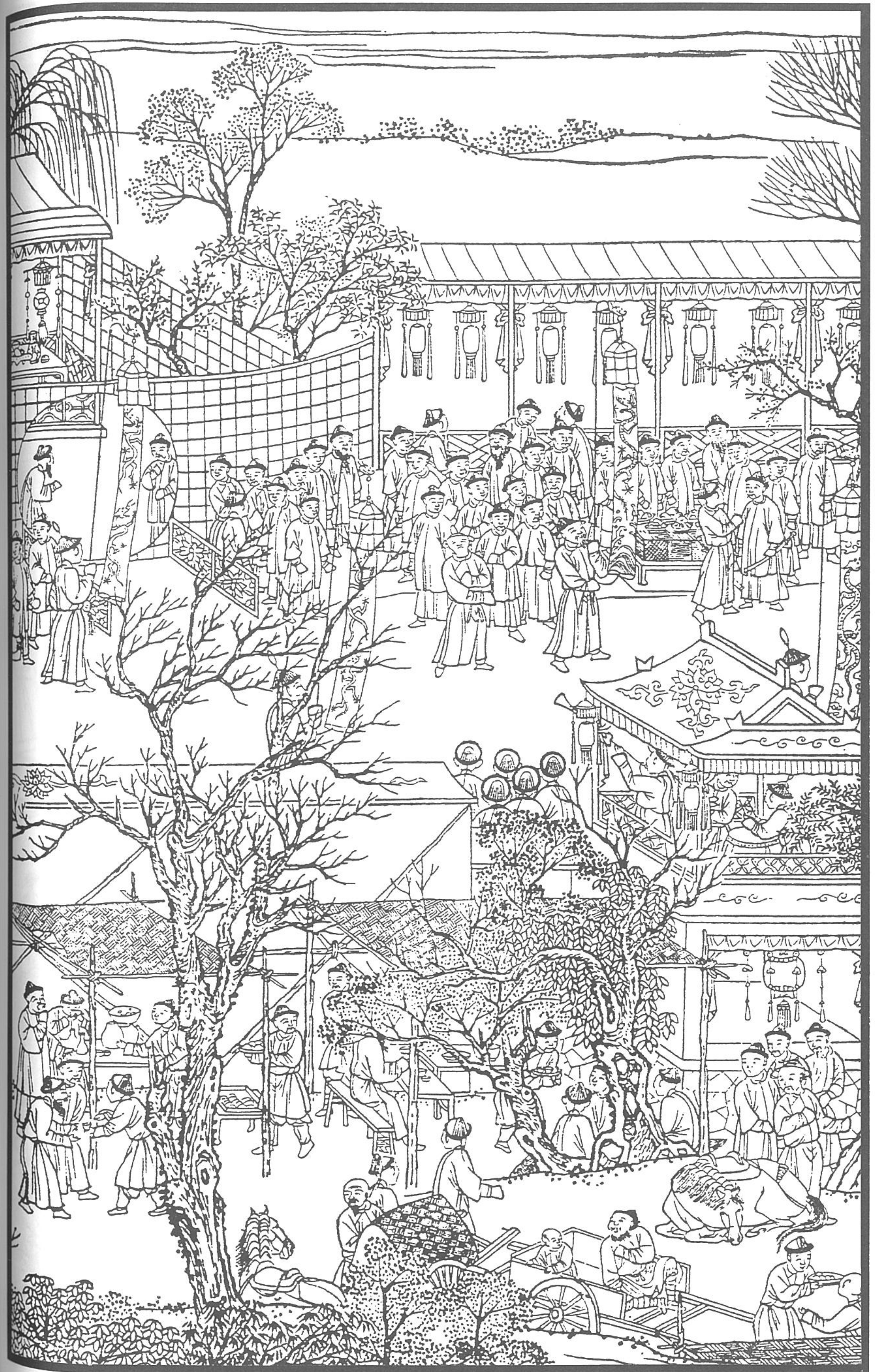


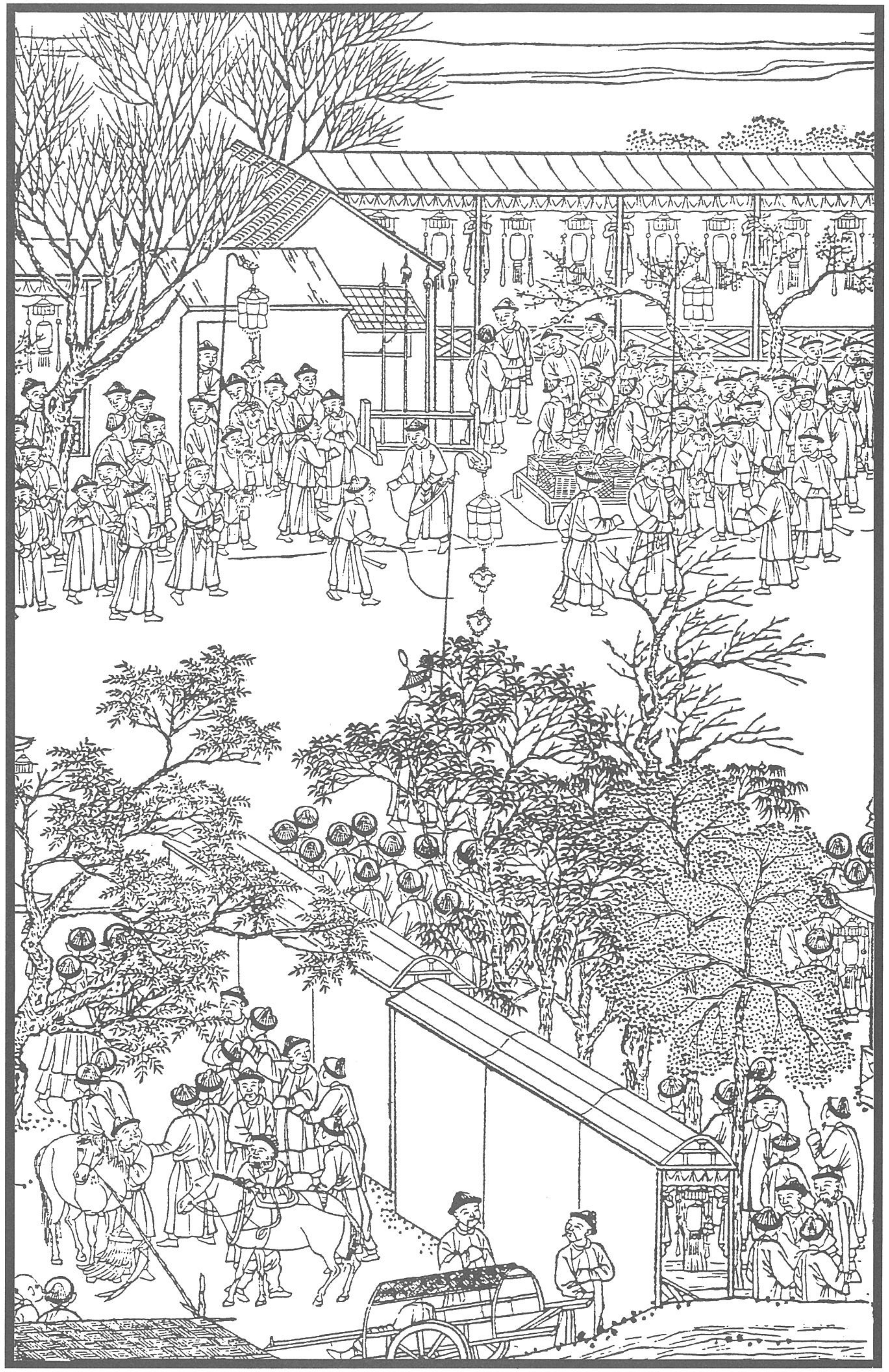

福建等六省戲臺
福建等六省戲臺

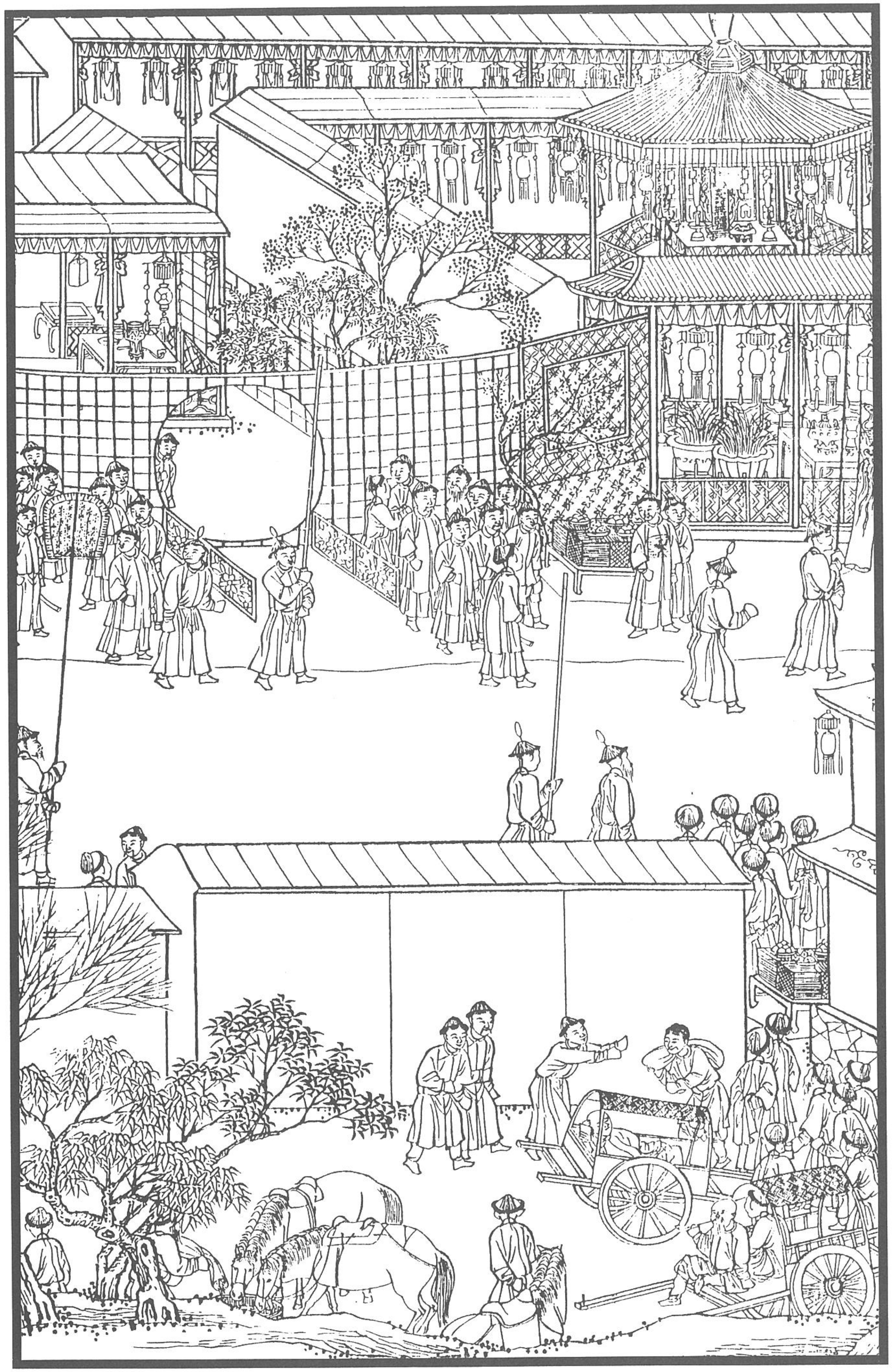


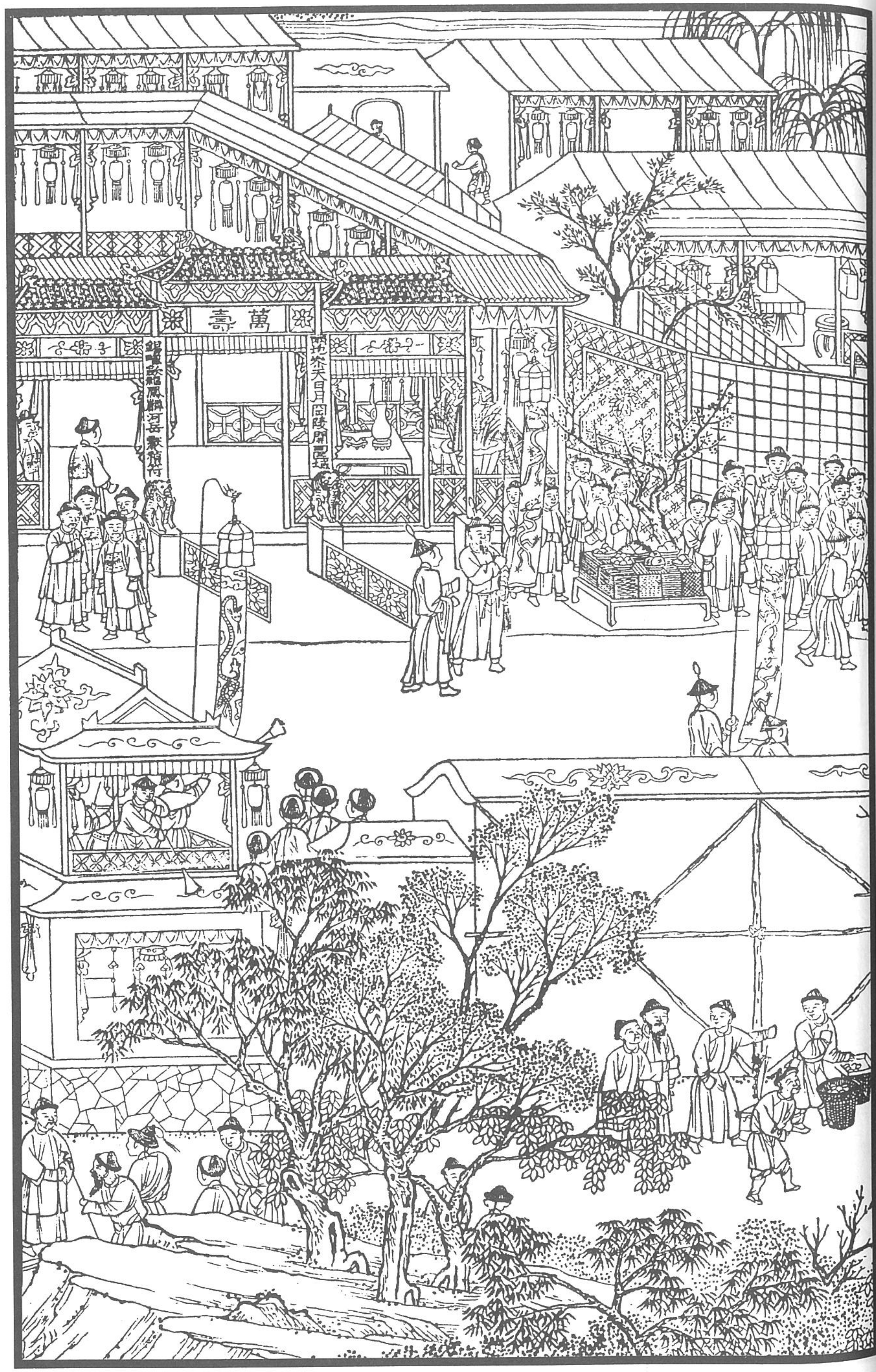


左ページ下には、満開の花を付けた樹木を描いている。桃であろう。

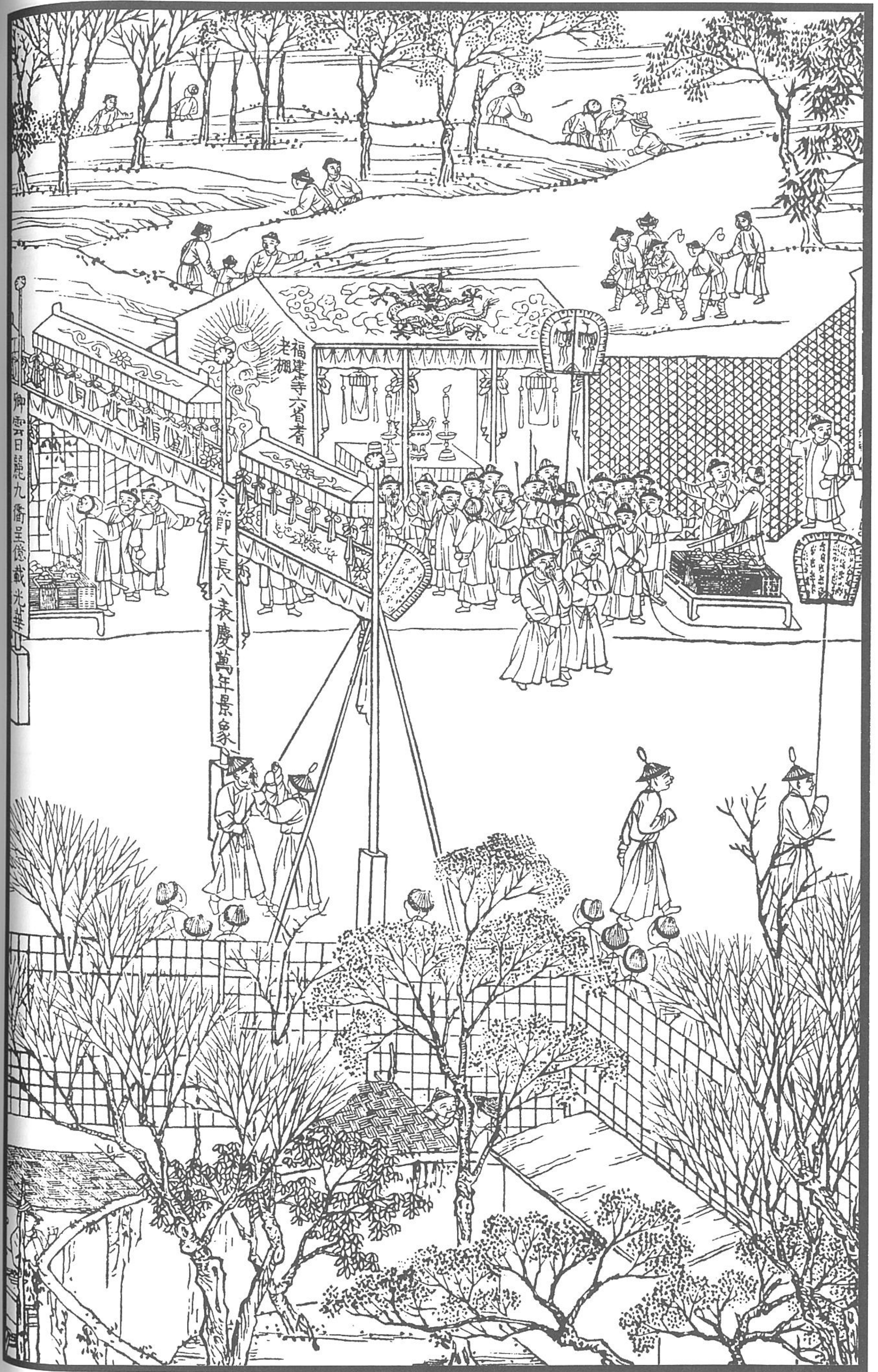


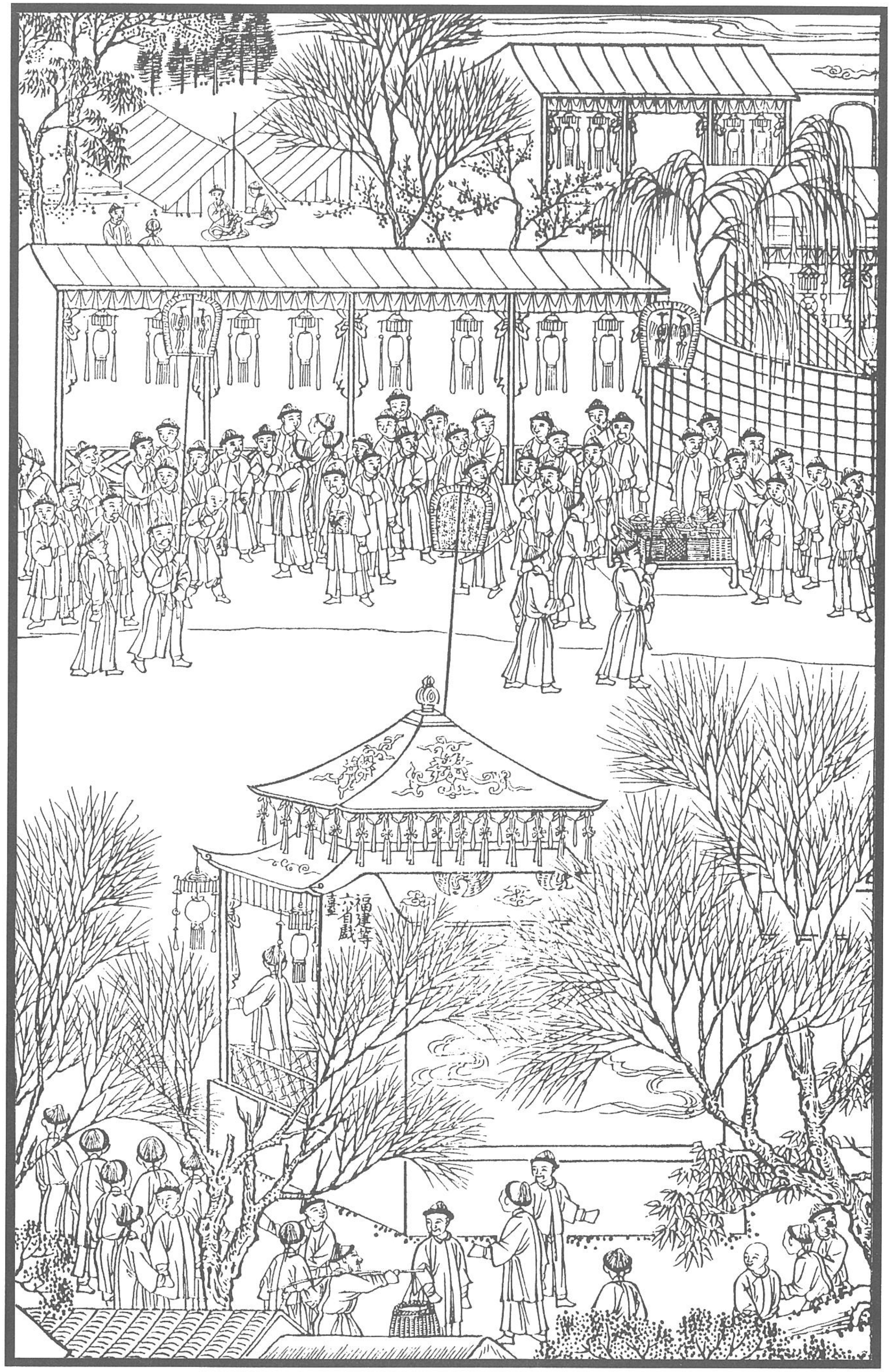


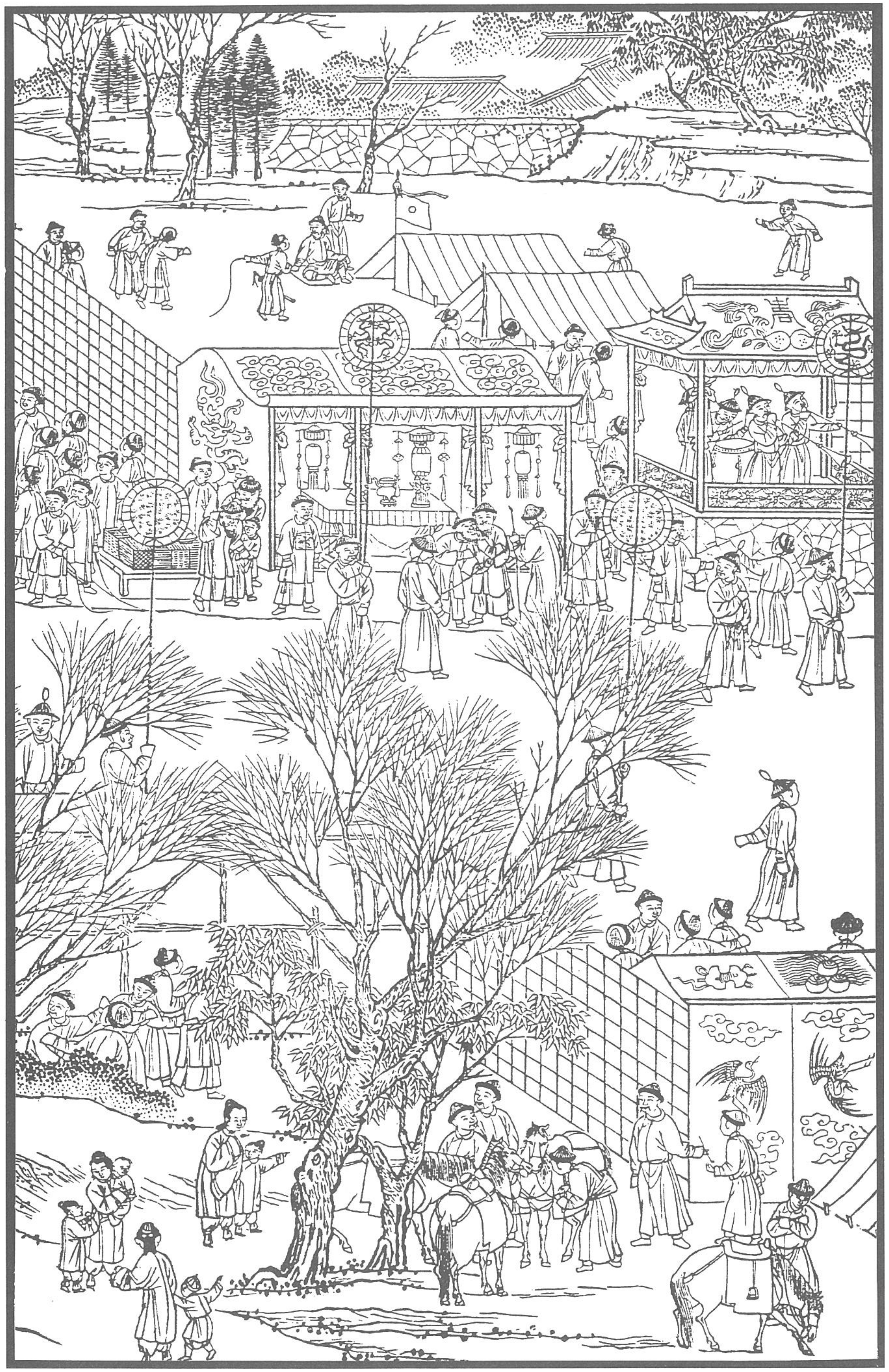


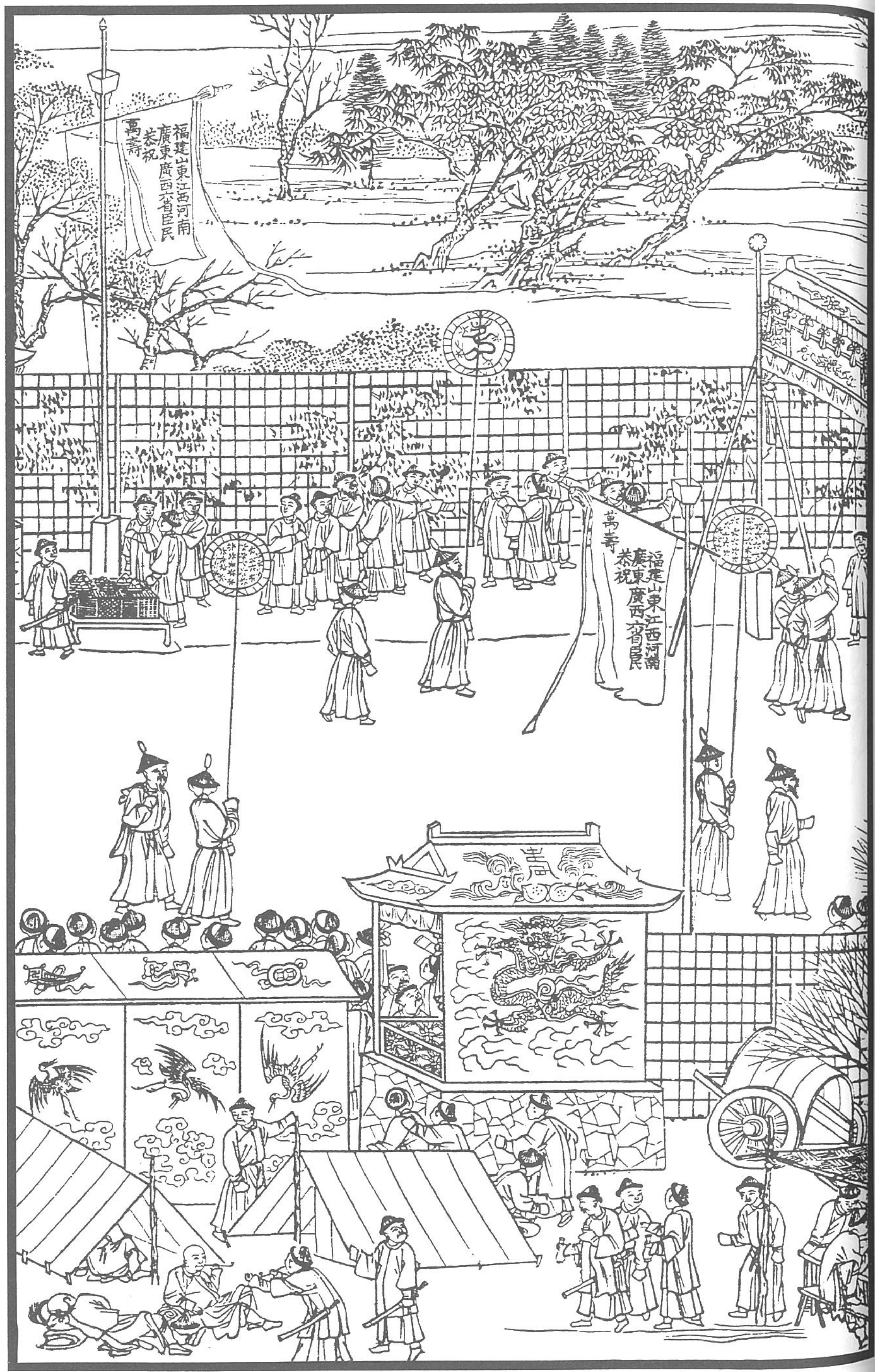


木陰に休む馬、食べ物を配る人々などの様子が細々と描かれる。表通りは、これから通りかかる鹵簿を待ちかね顔である。


福建等六省耆老棚
令節天長八表慶萬年景象
卿雲日麗九衢呈億載光華

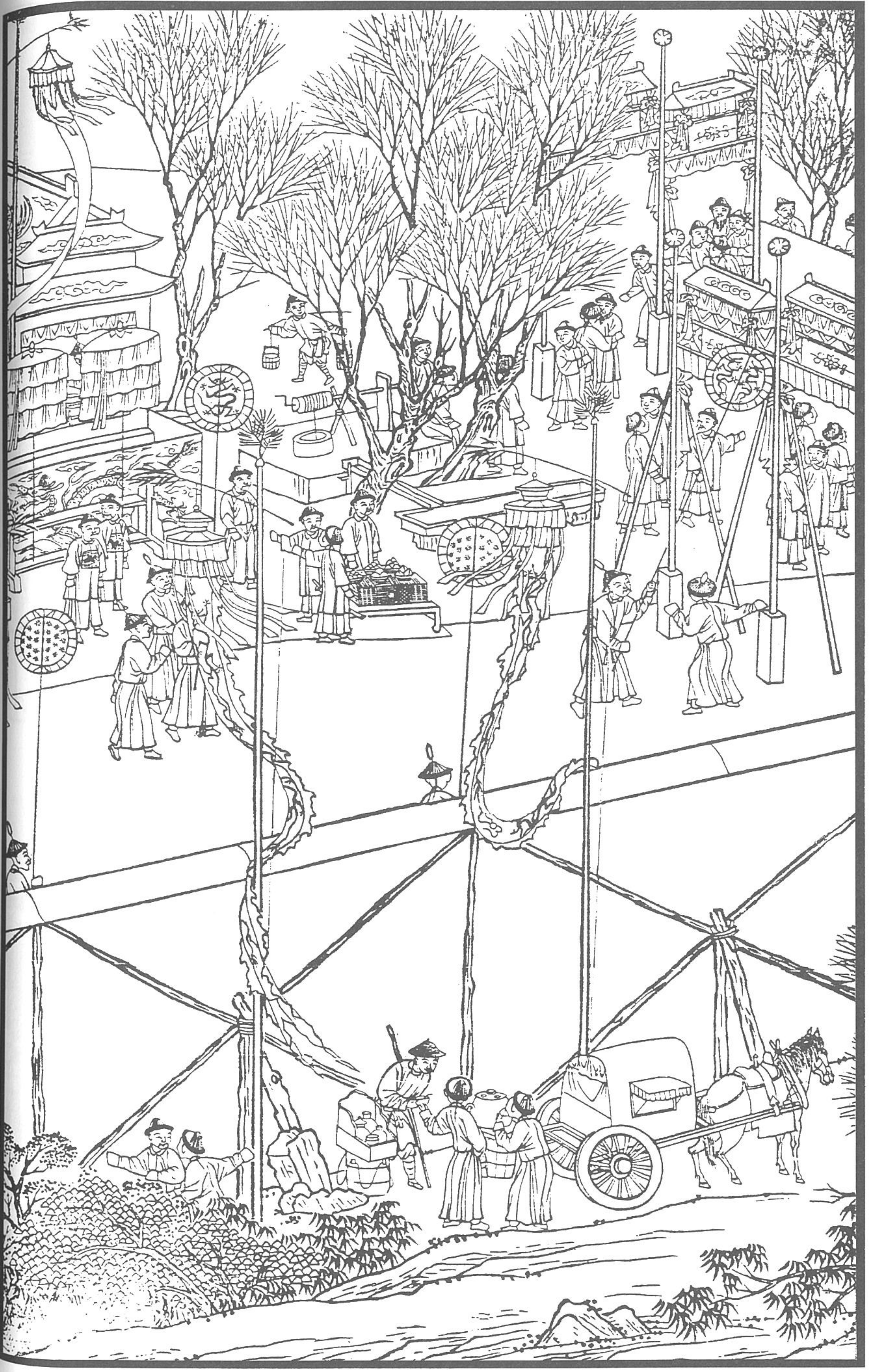

福建等六省戲臺

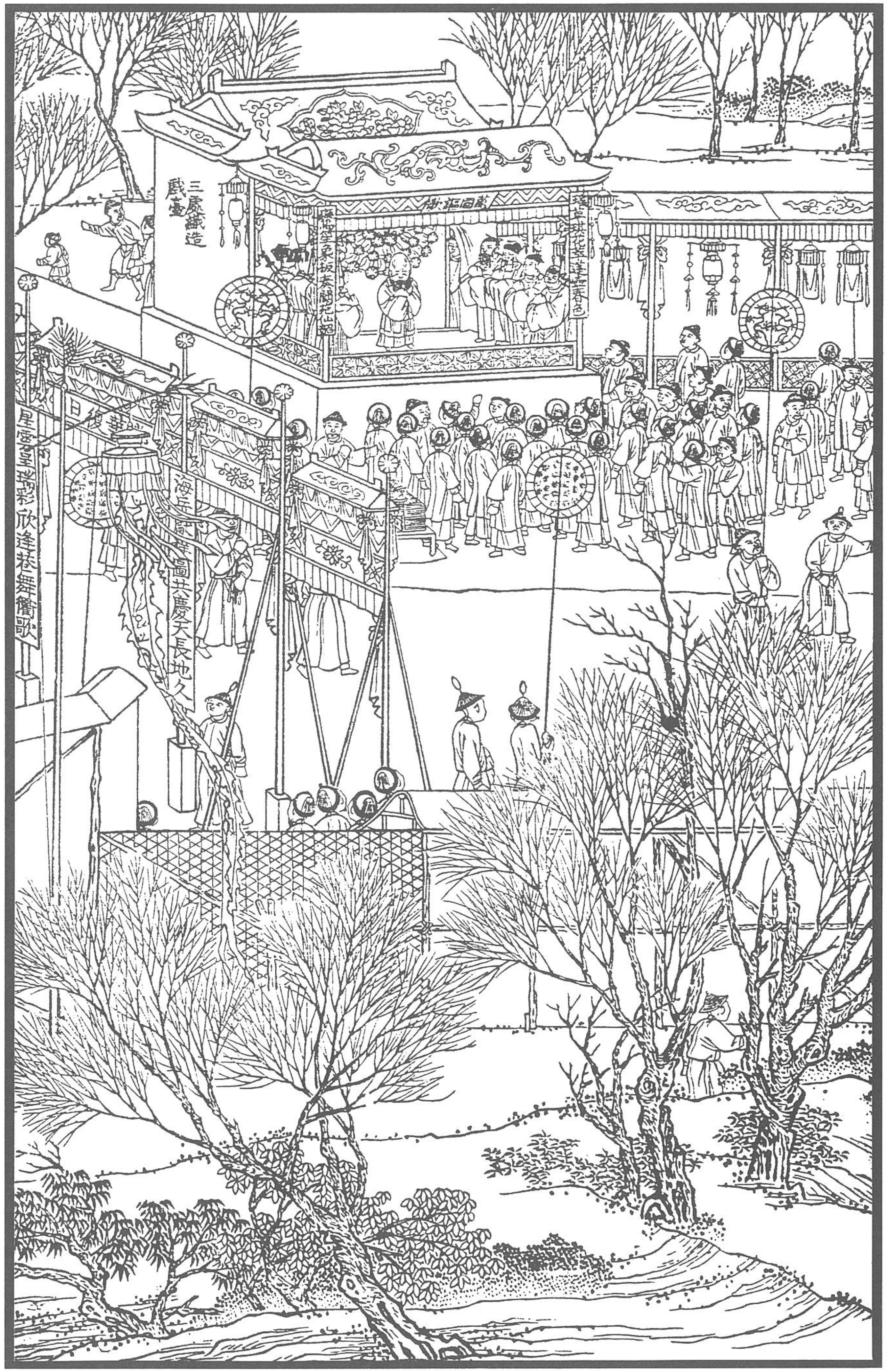


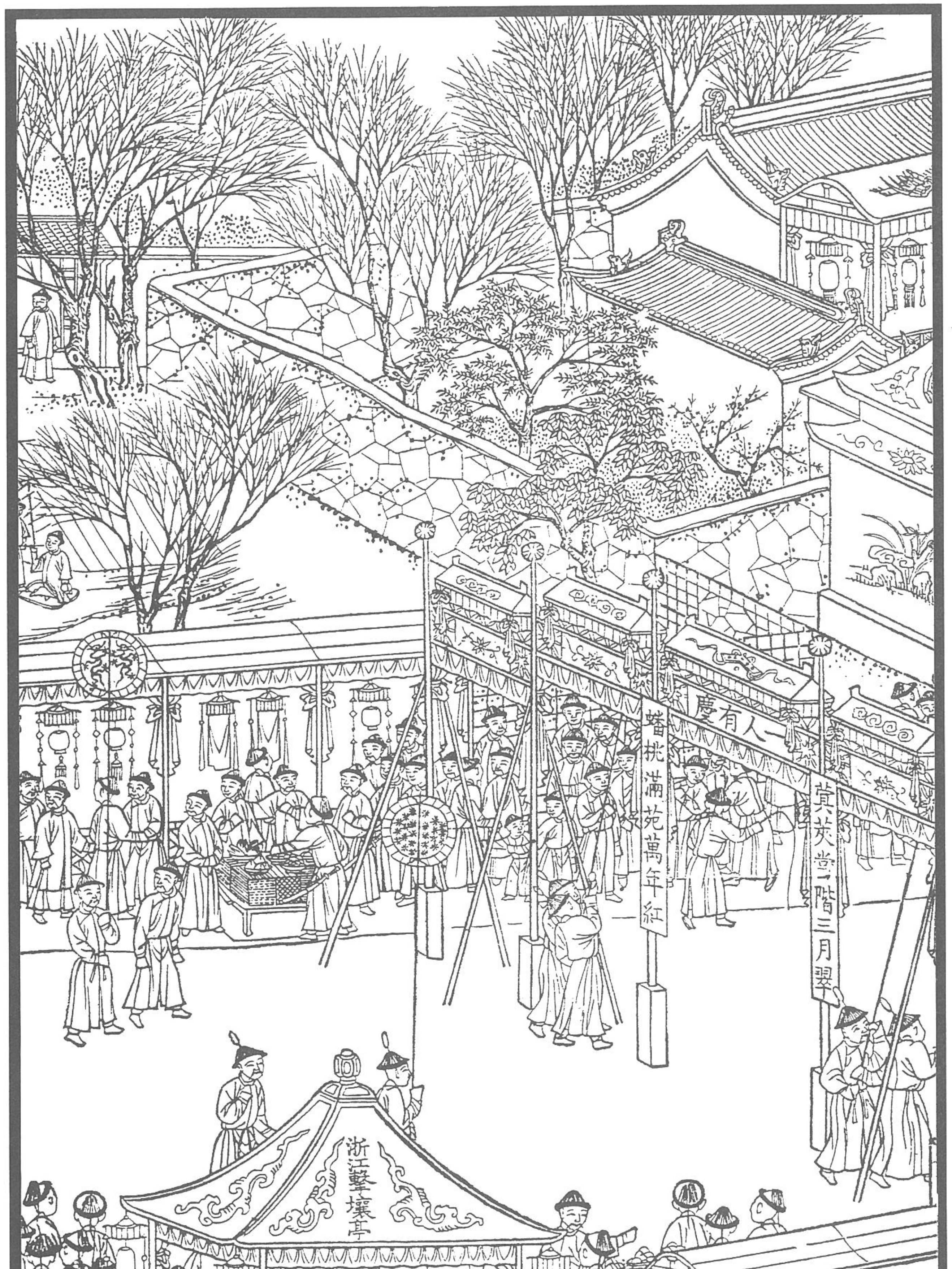


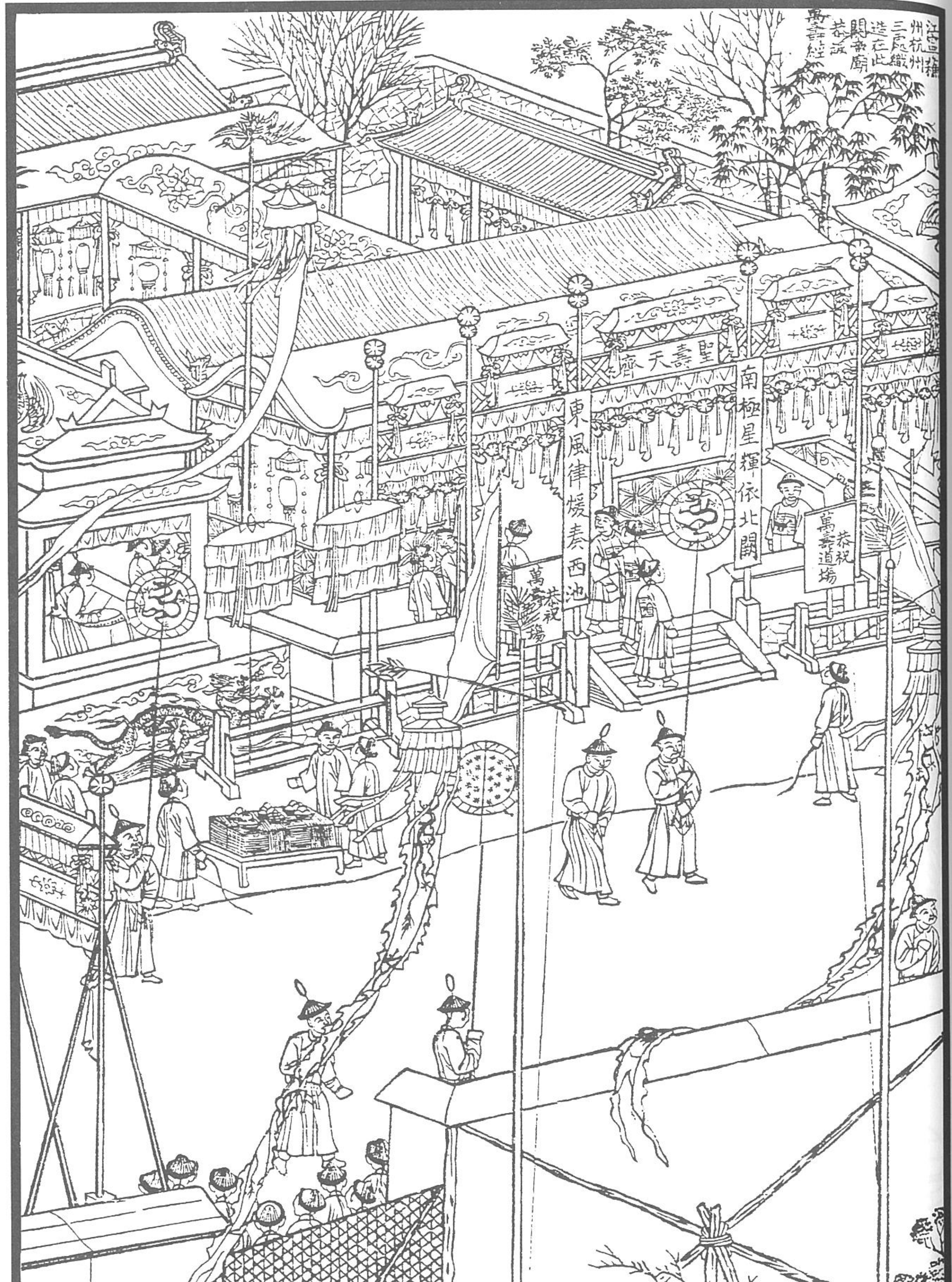
絹張りの台の裏には、皇帝を象徴する五爪の龍が描かれ、その隣の飾り台の裏側にも鶴が五羽、そして上には「八吉祥」のうち五つがかかれている。

天幕を張った裏側には、横になるものもいる。左側には数組の母と子が連れ立って馬を見物している。

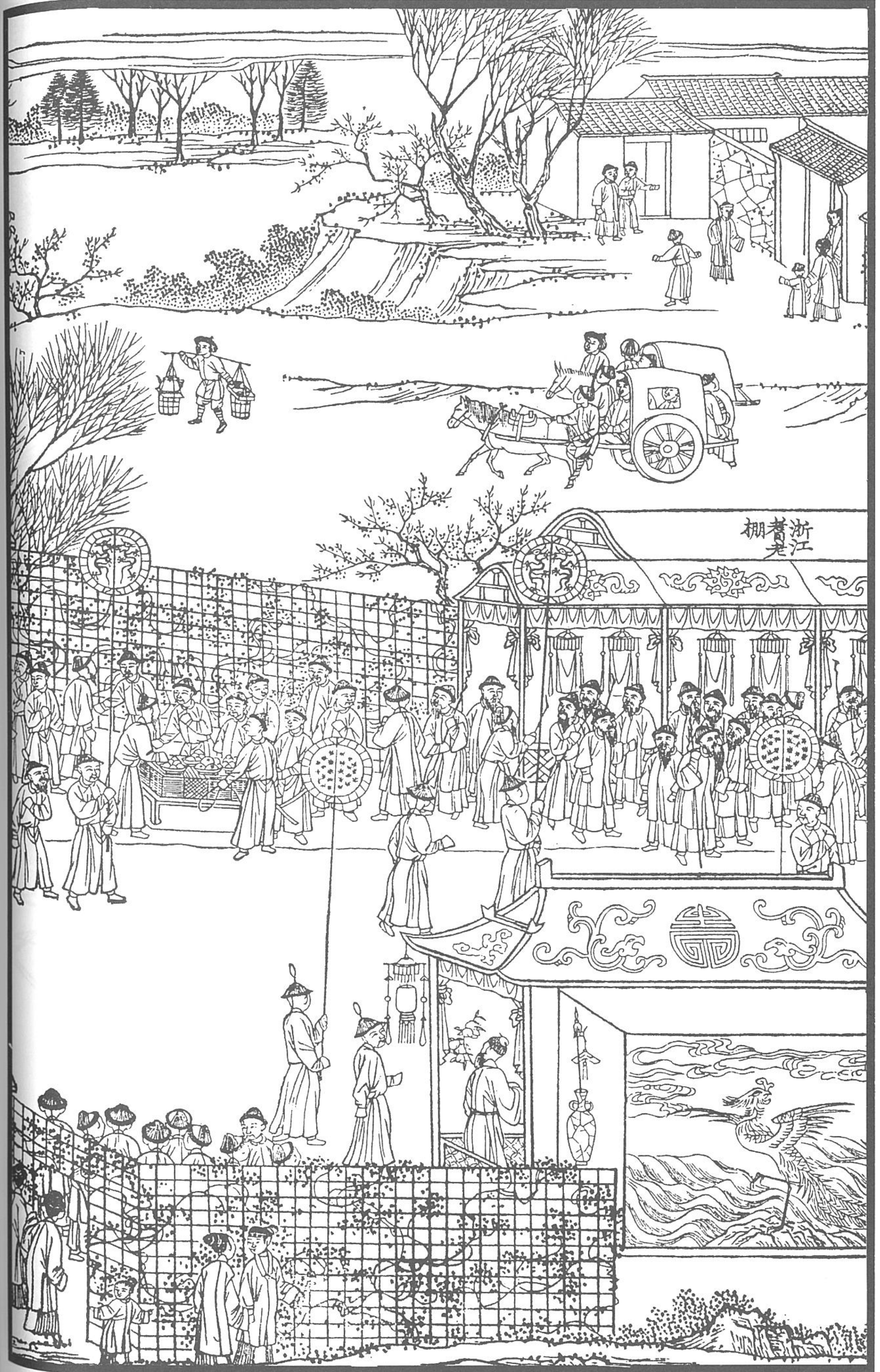


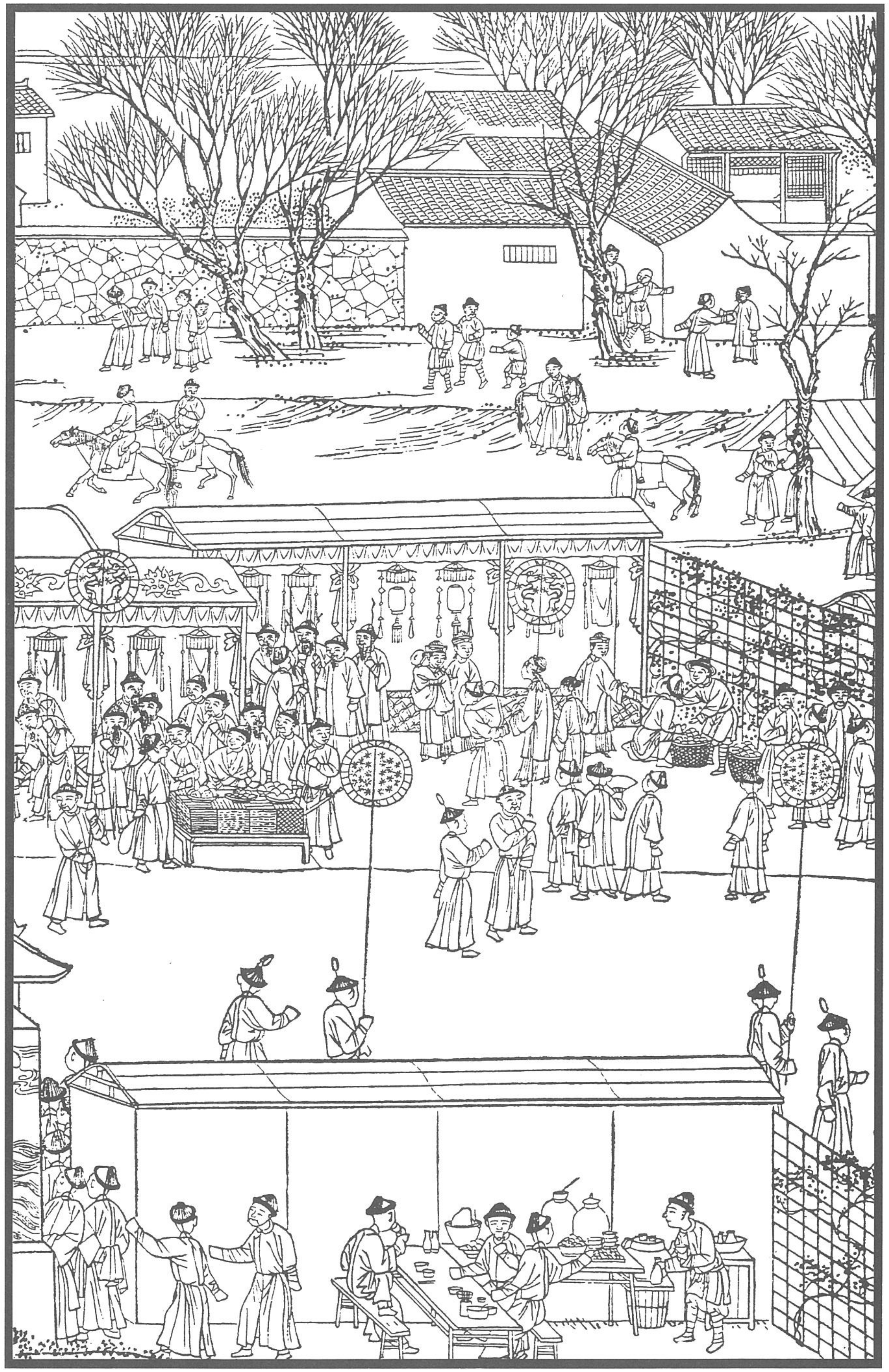

三處織造
戲臺
共慶天長地久





右手の関帝廟には、巻き上げ式の立派な井戸がある。「三処戯台」には、長頭の「福禄寿」すなわち寿星が登場している。「三処」は江寧（南京）、杭州、蘇州、いずれも江南の豊かな大都市である。したがって、ここの関帝廟の飾り付けも大変豪華に見える。

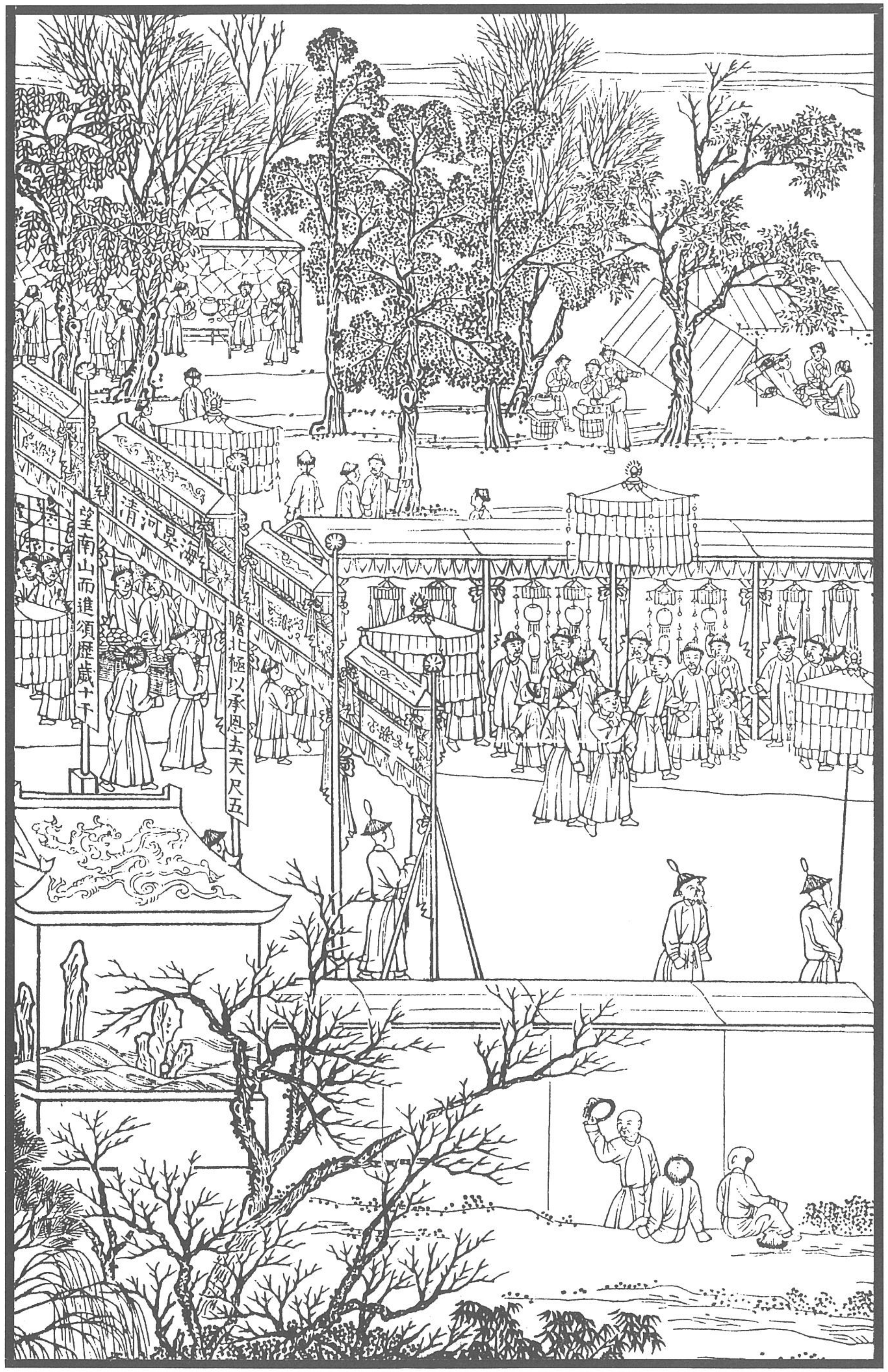

浙江耆老棚

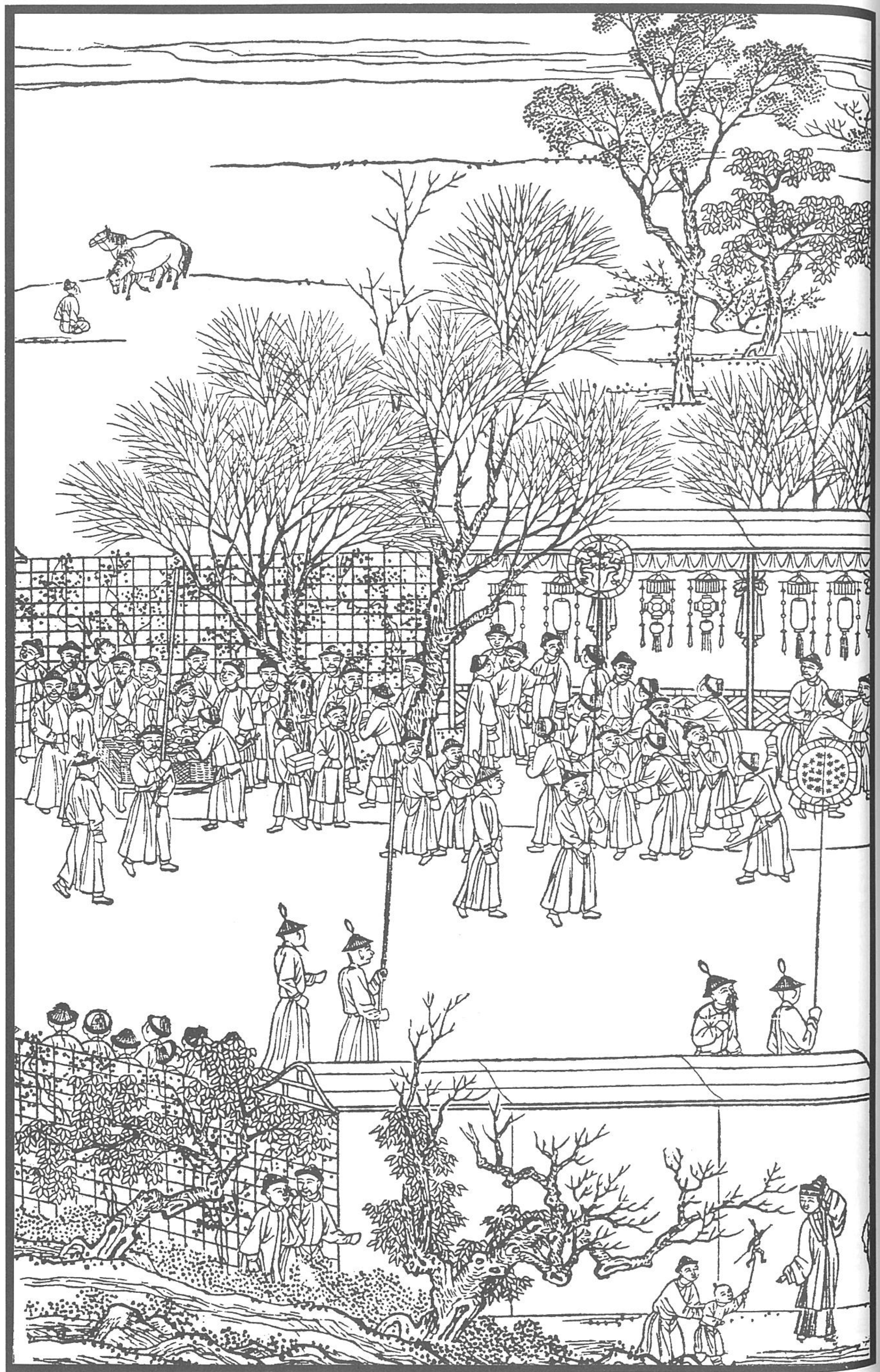


「浙江耄老棚」には、老人が大勢招かれて皇帝の鹵簿を待っている。「耄」は「八十歳または九十歳の老人」の意味である。

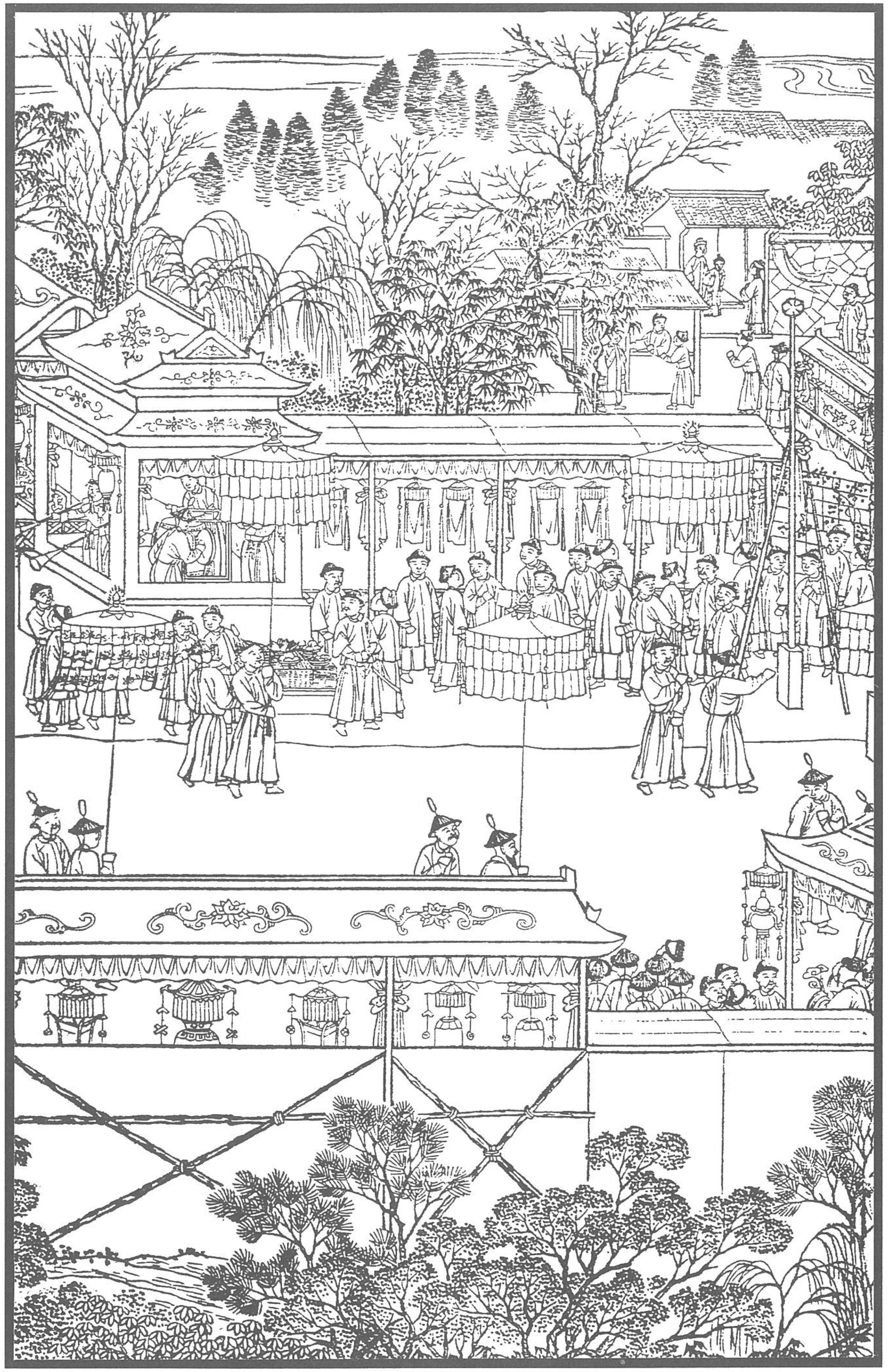
手前に「皮影」で遊ぶ児童がいる。この時代は児童の玩具としても大変普及していたのであろうか。

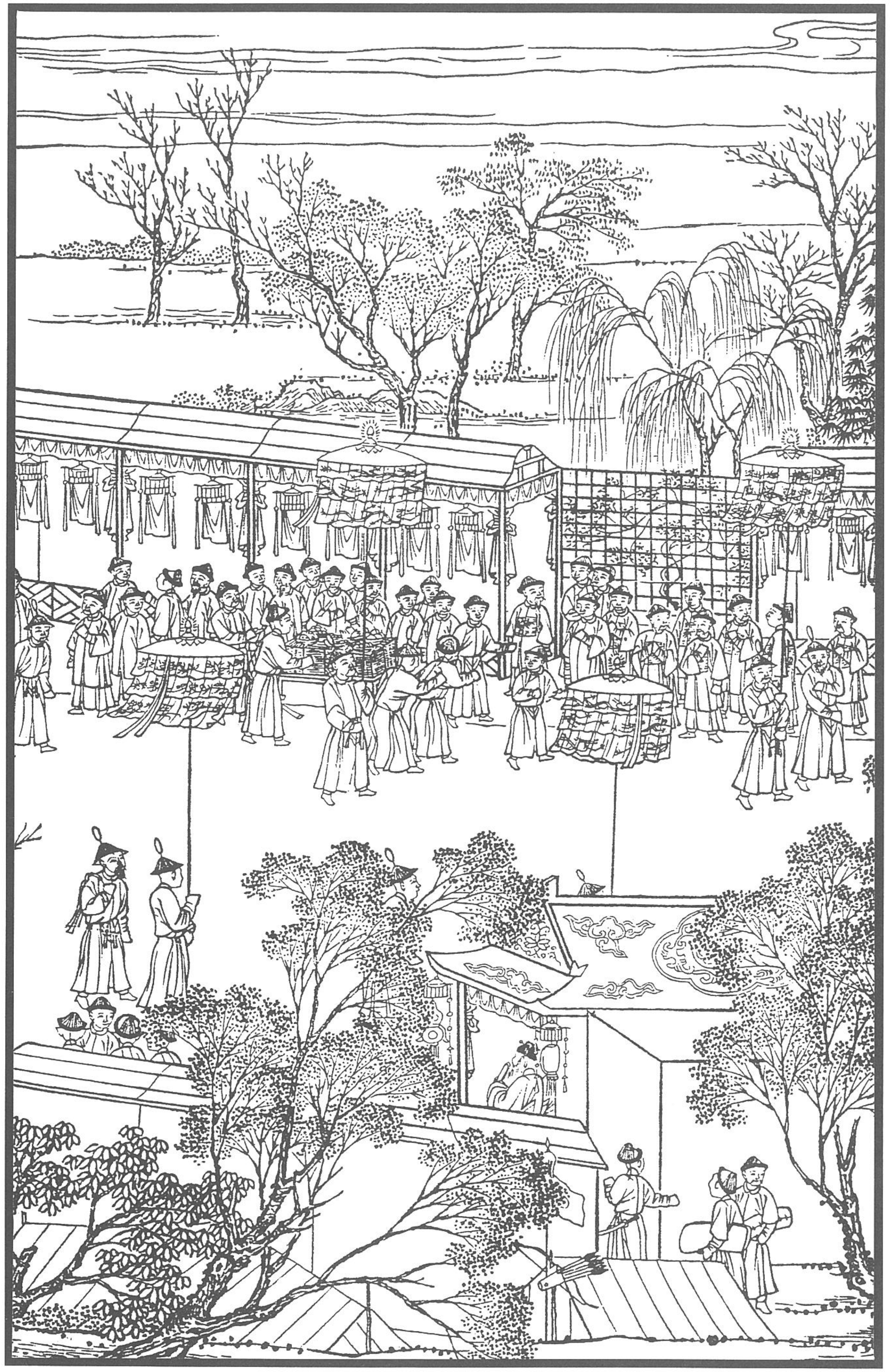
画家の視線は、次第に遠景を取り入れる画法に変化してきている。市街風景も、春の郊外らしき趣きを加える。

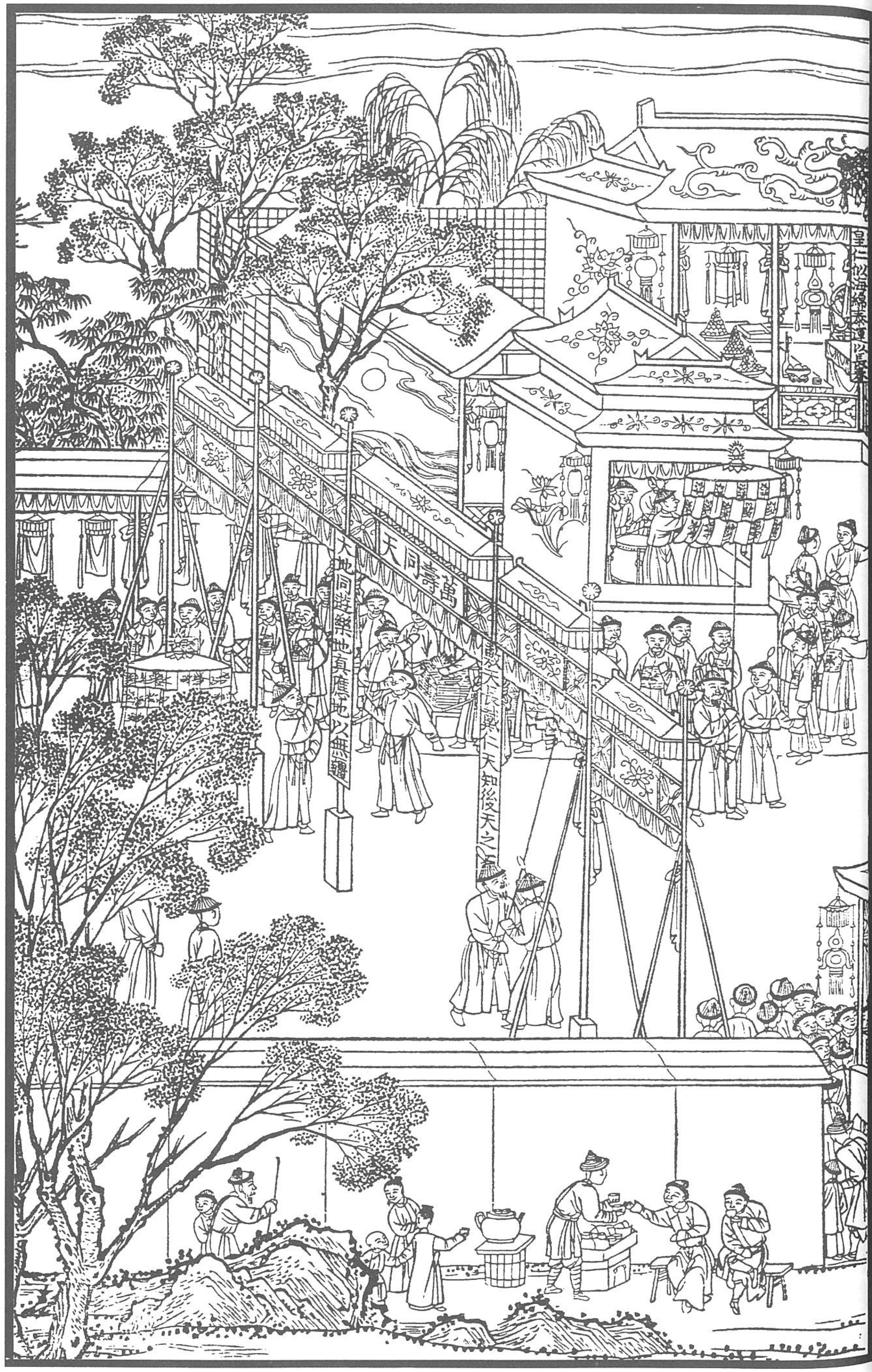




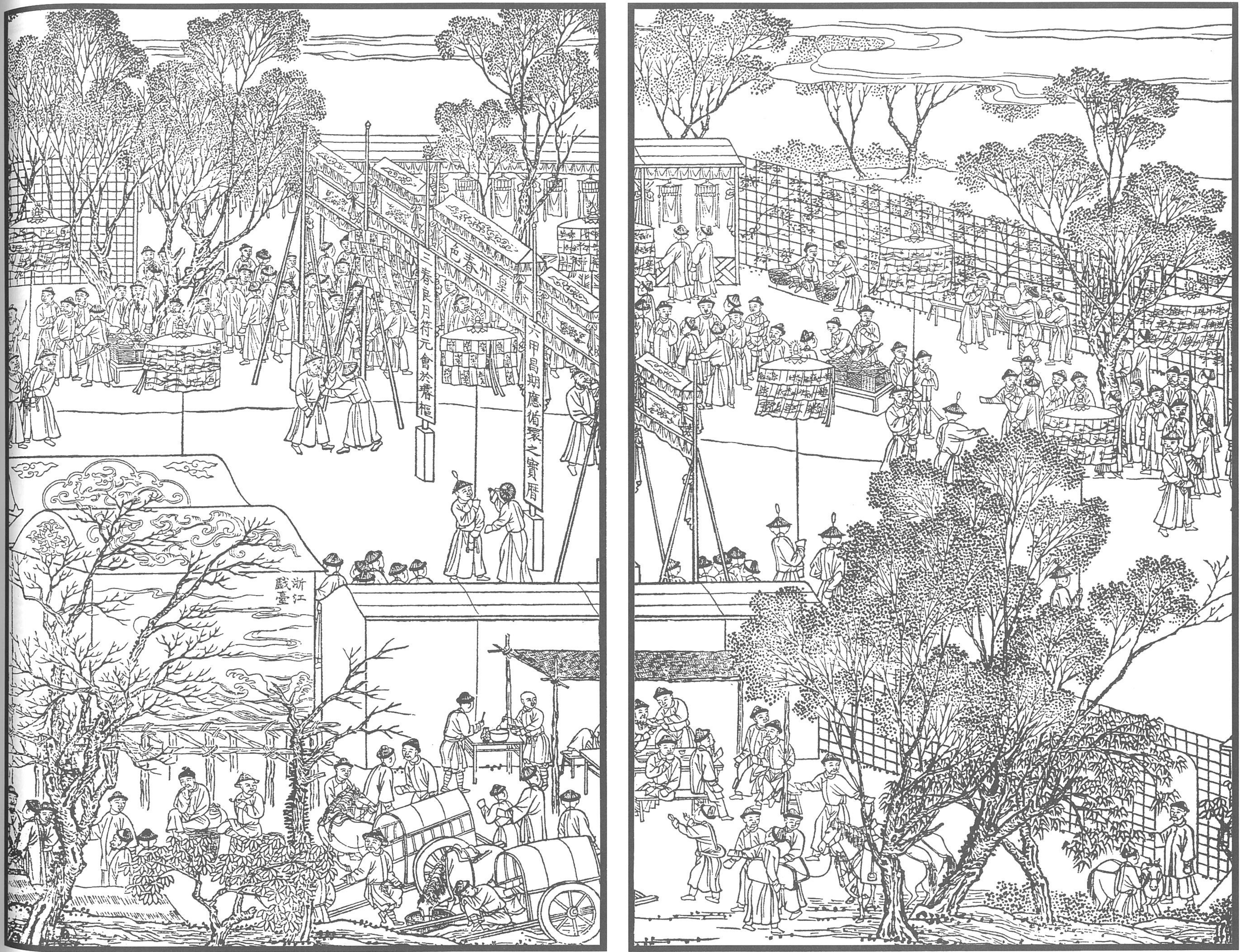

浙江龍棚
聖德同天體乾行而至健
瑞現星樞
四海咸寧
喜動龍顏日麗九天之彩

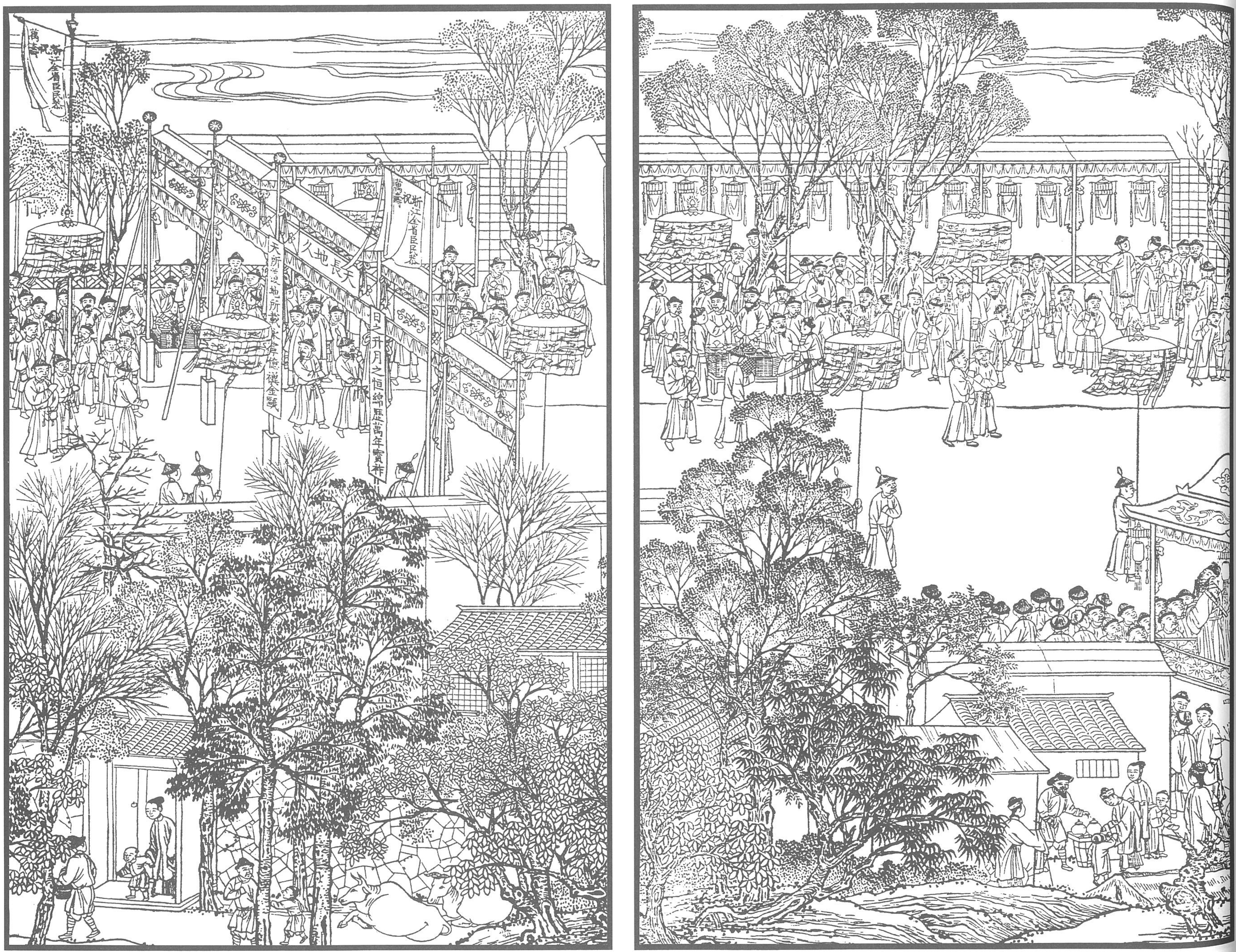




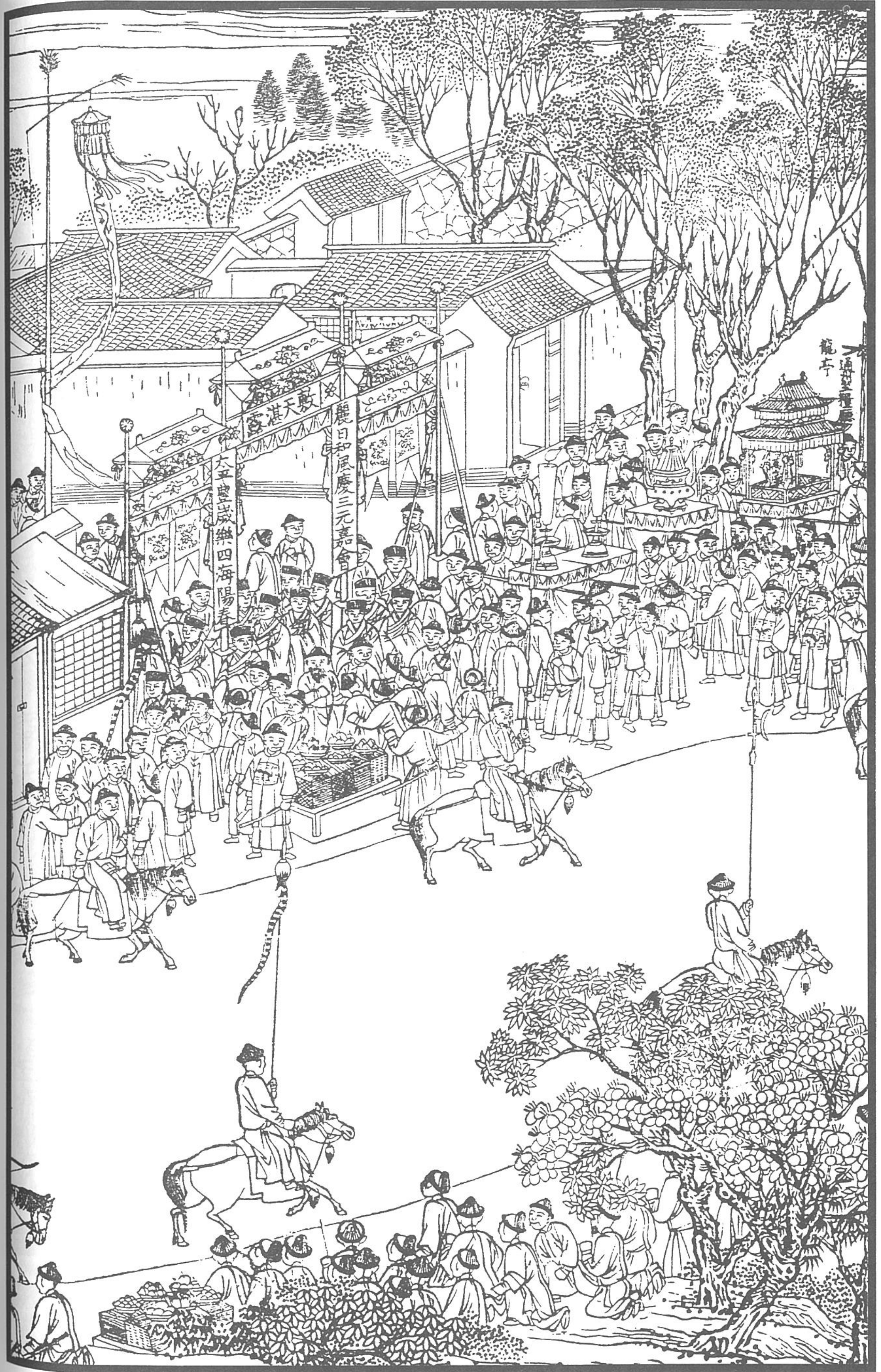


二人組で華蓋を掲げた従者が見える。帽子の形は、その他の従者と異なっている。
続いて鹵簿が現われるはずである。
「浙江龍棚」は四周を綵棚で取り囲み、両脇には音楽を演奏する楽台を備えている。ここは本来何かの寺廟ではないようである。

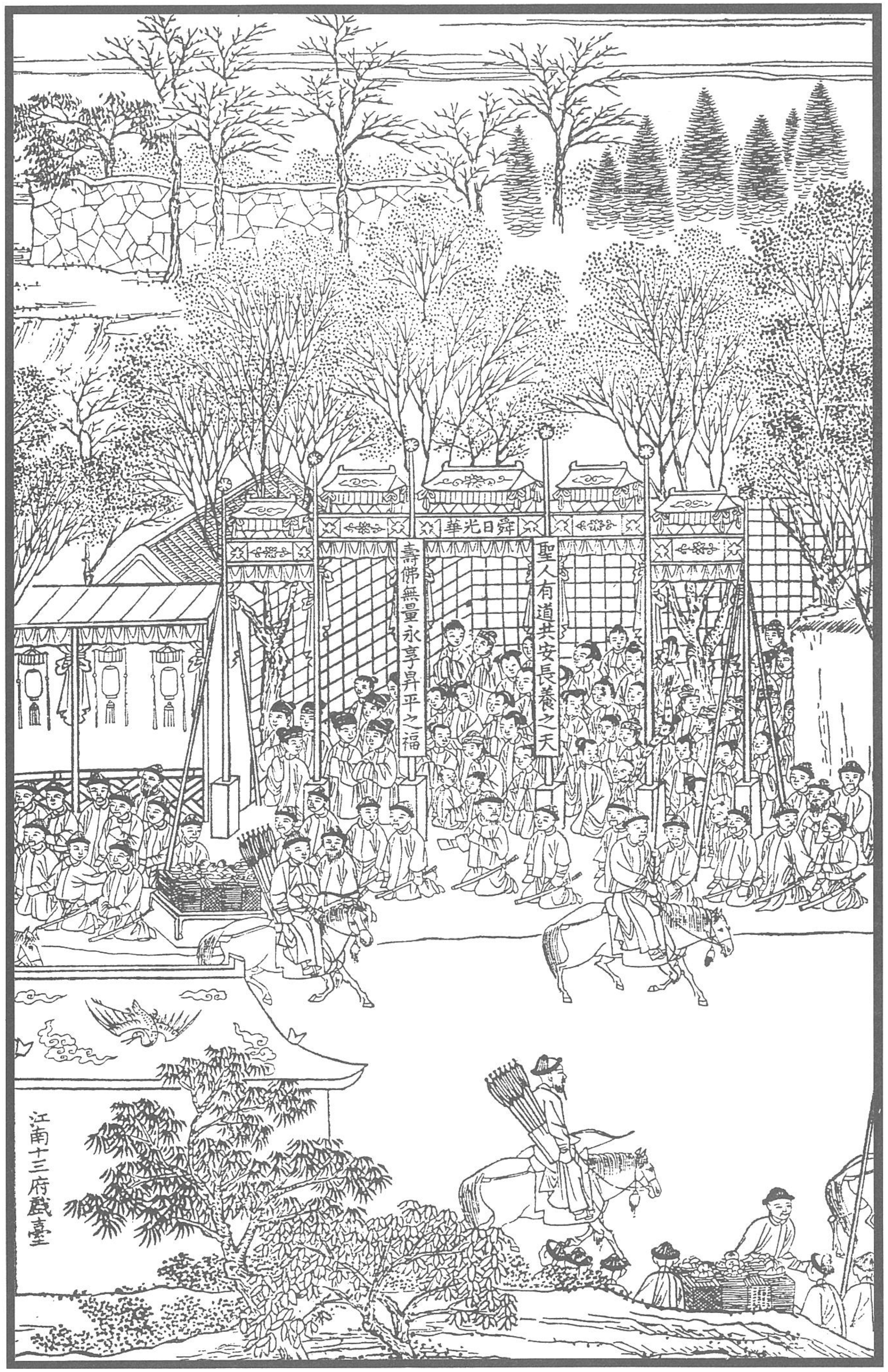

皇州春色
三春良月符元會於青樞
六甲昌期應循環之寶曆
浙江戲臺

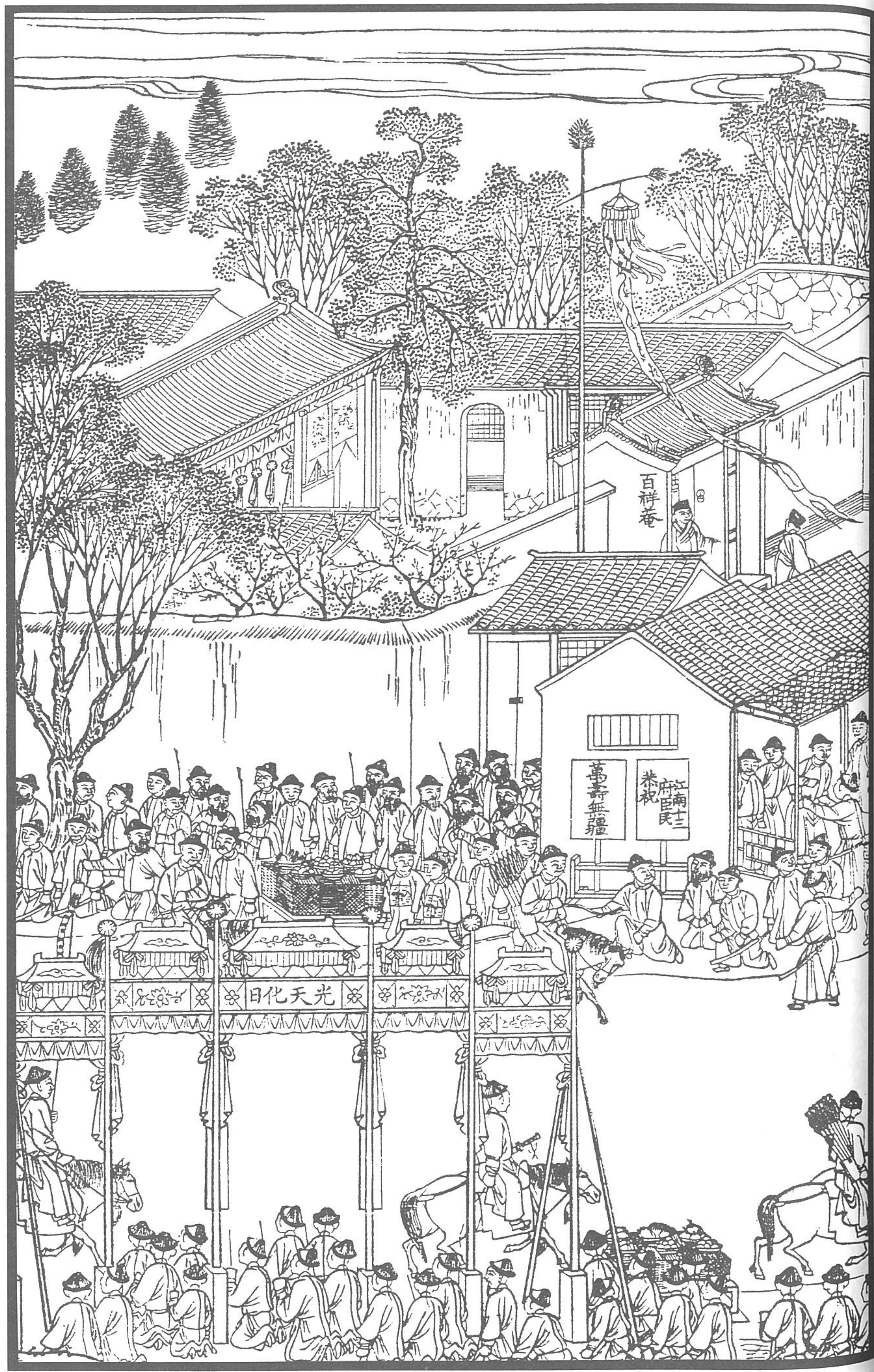


「皇州春色」「天長地久」など豪華な「綵坊」が続く。
左手前景に、はじめて牛が二頭登場している。郊外らし
さが良くあらわれている。北方の北京であるが、馬以外に
牛も飼われていた。ただし角の短い牛である。


敷天湛露
麗日和風慶三元嘉會

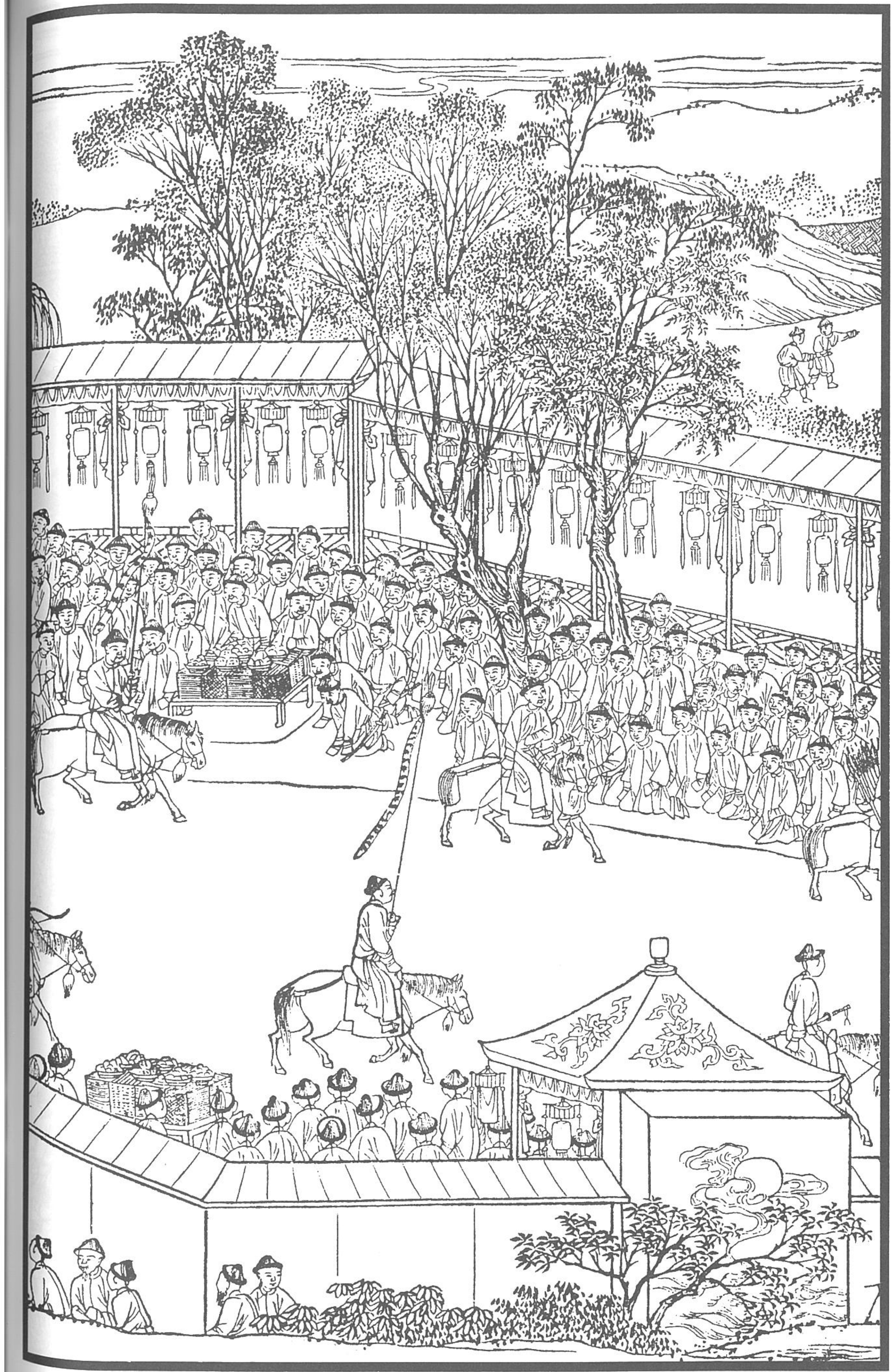


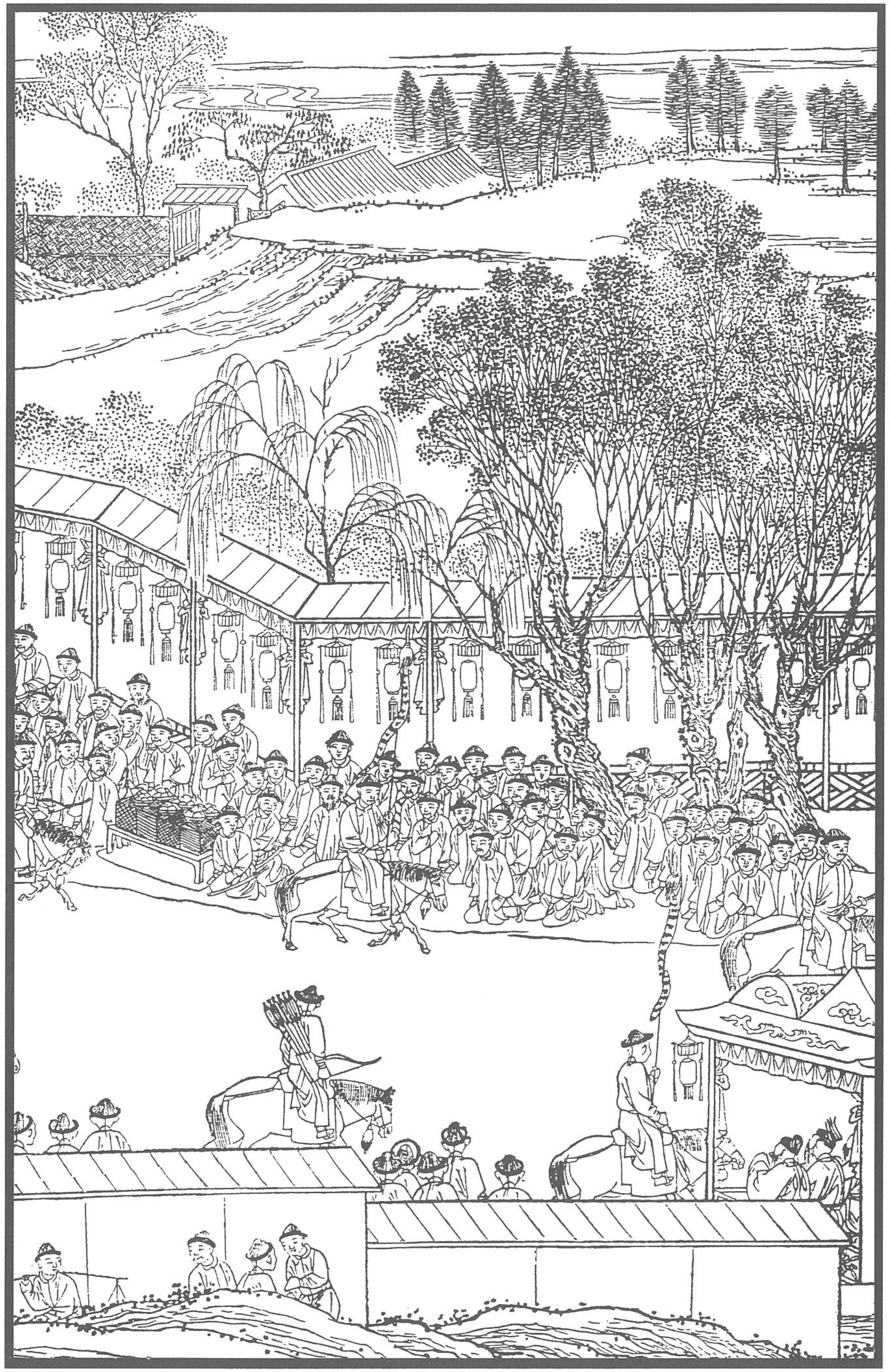


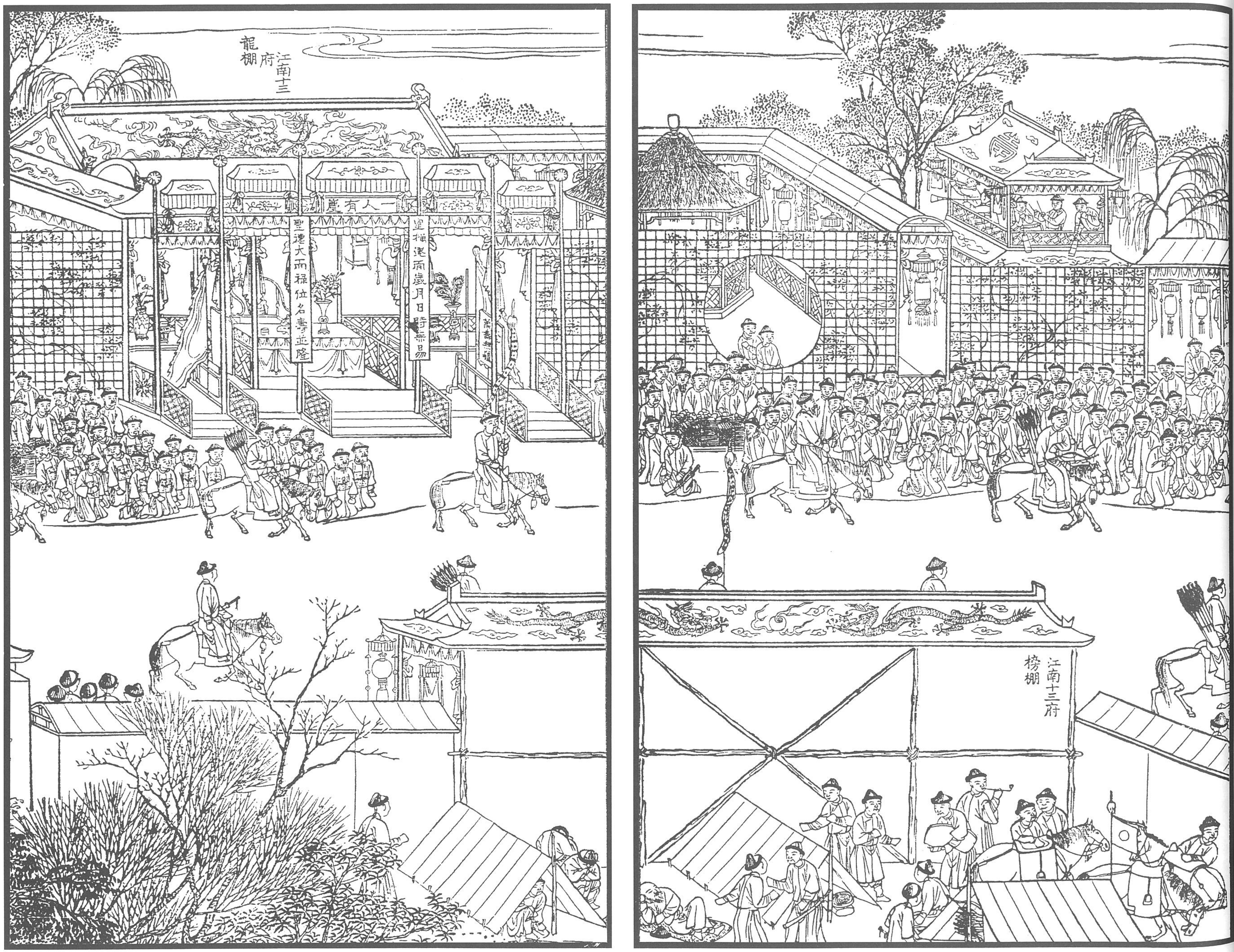


「百祥庵」と記されたこの寺廟では、道に面して大型の香炉を焚き、巨大な蝋燭が点されている。華蓋に続いて騎馬の従者が静かに粛々と進んでくる。道は緩やかに右に曲がる。右手前には、桃の花であろうか、枝いっぱいに咲き誇っている。

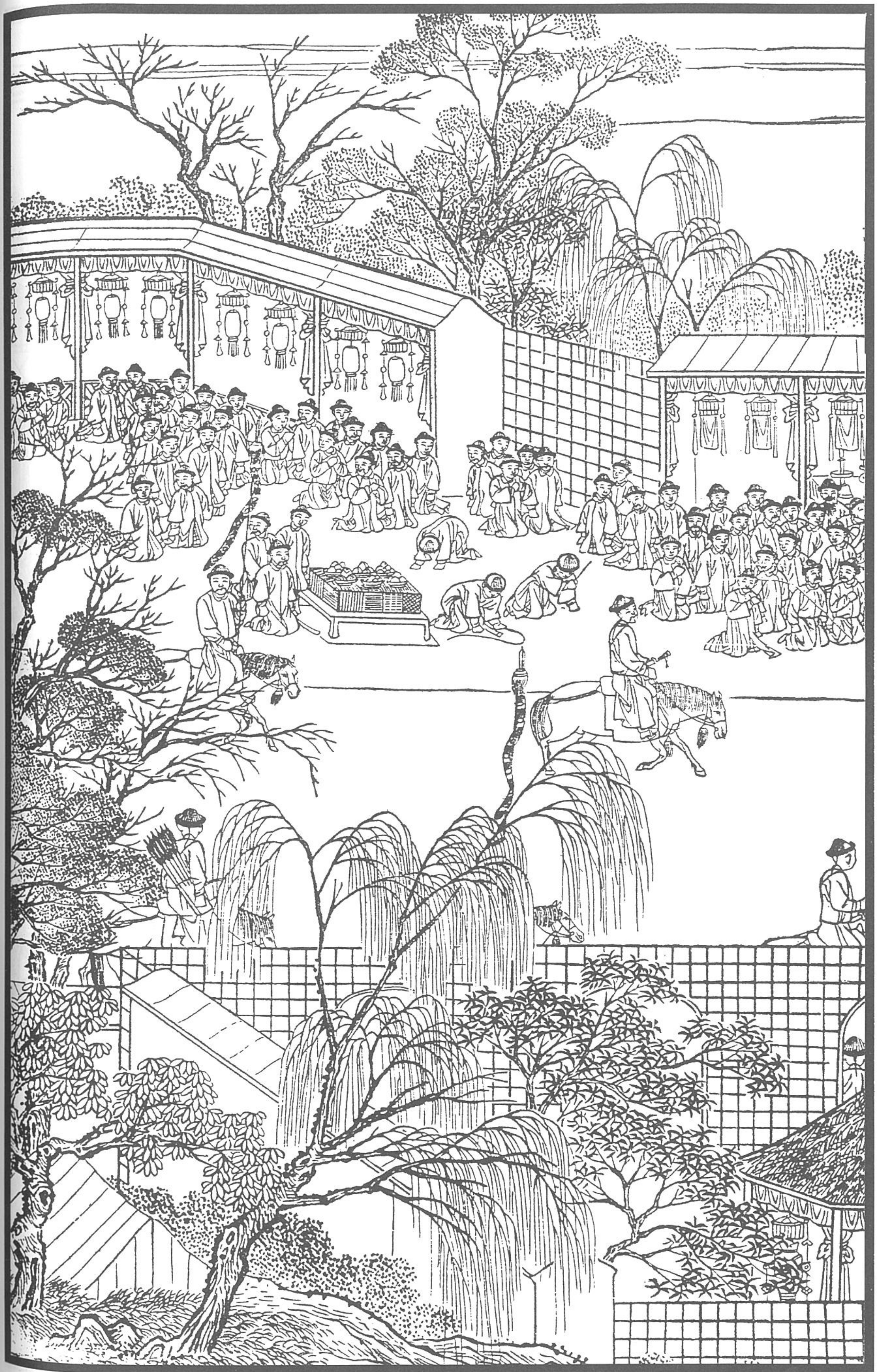
「江南十三府臣民恭祝」と立て札があり、「萬寿無疆」の表示の前に、線香を手にした臣民らが跪いて皇帝の来駕を待っている。婦人の居場所は別に設けられている。

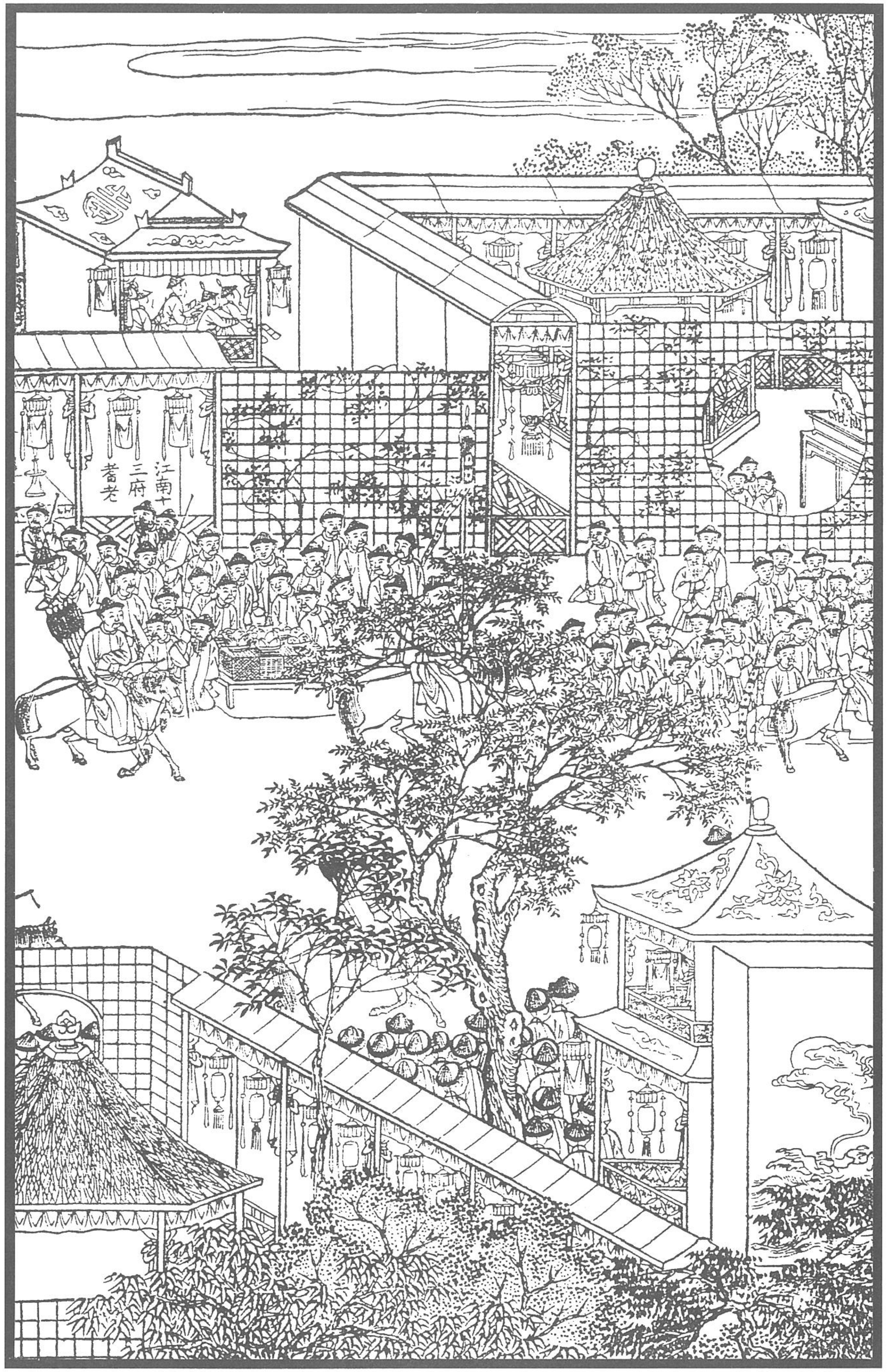


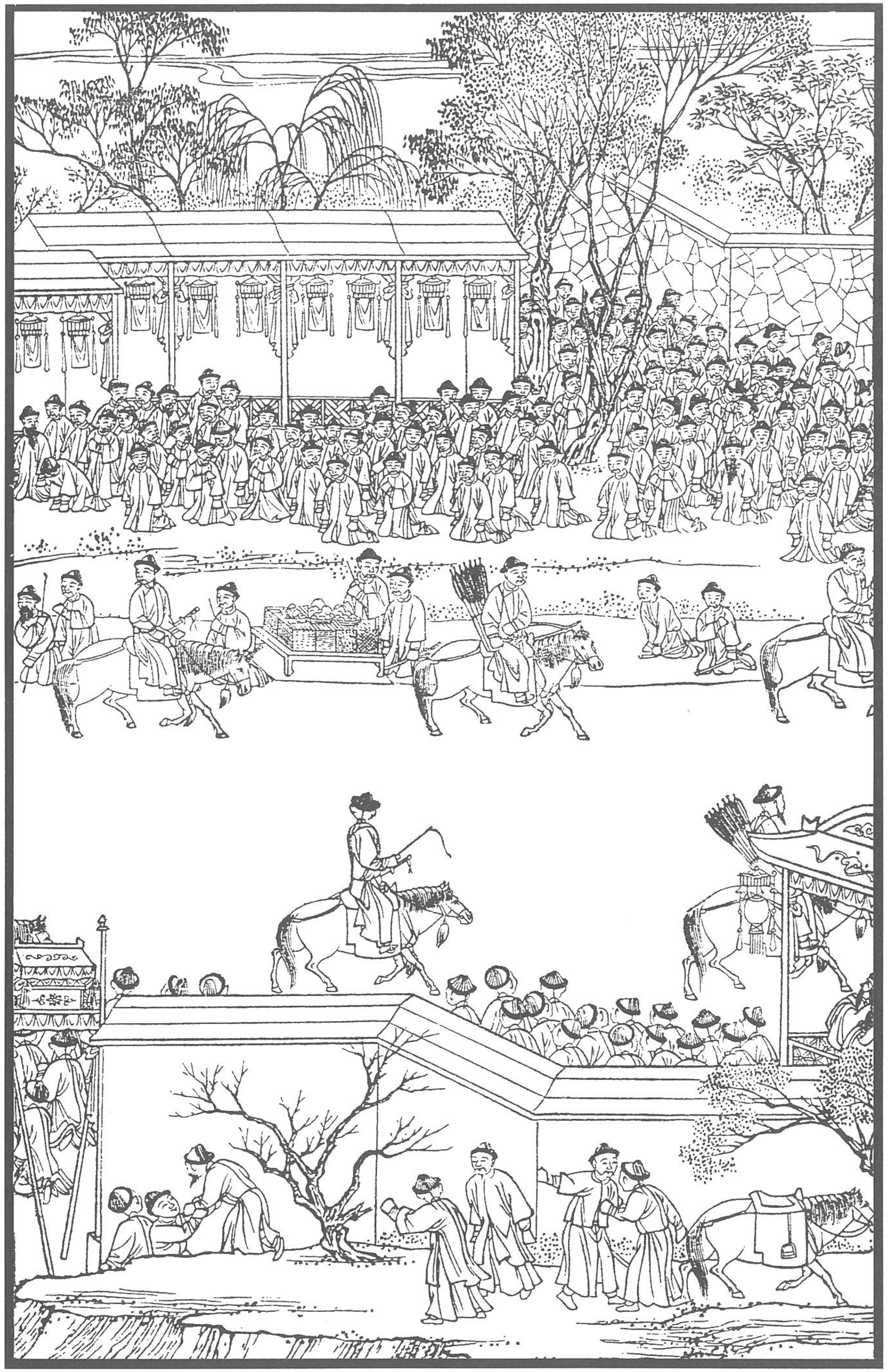




沿道に設えられた絹張りの長廊には、煌びやかな灯篭が下がり、皇帝の到来に備える。このあたりは全国でももっとも豊かな物産を誇った江南の分担した地区である。「江南十三府龍棚」には、「一人有慶」の額がかかり、手前には大勢が跪いて鹵簿を待っている。



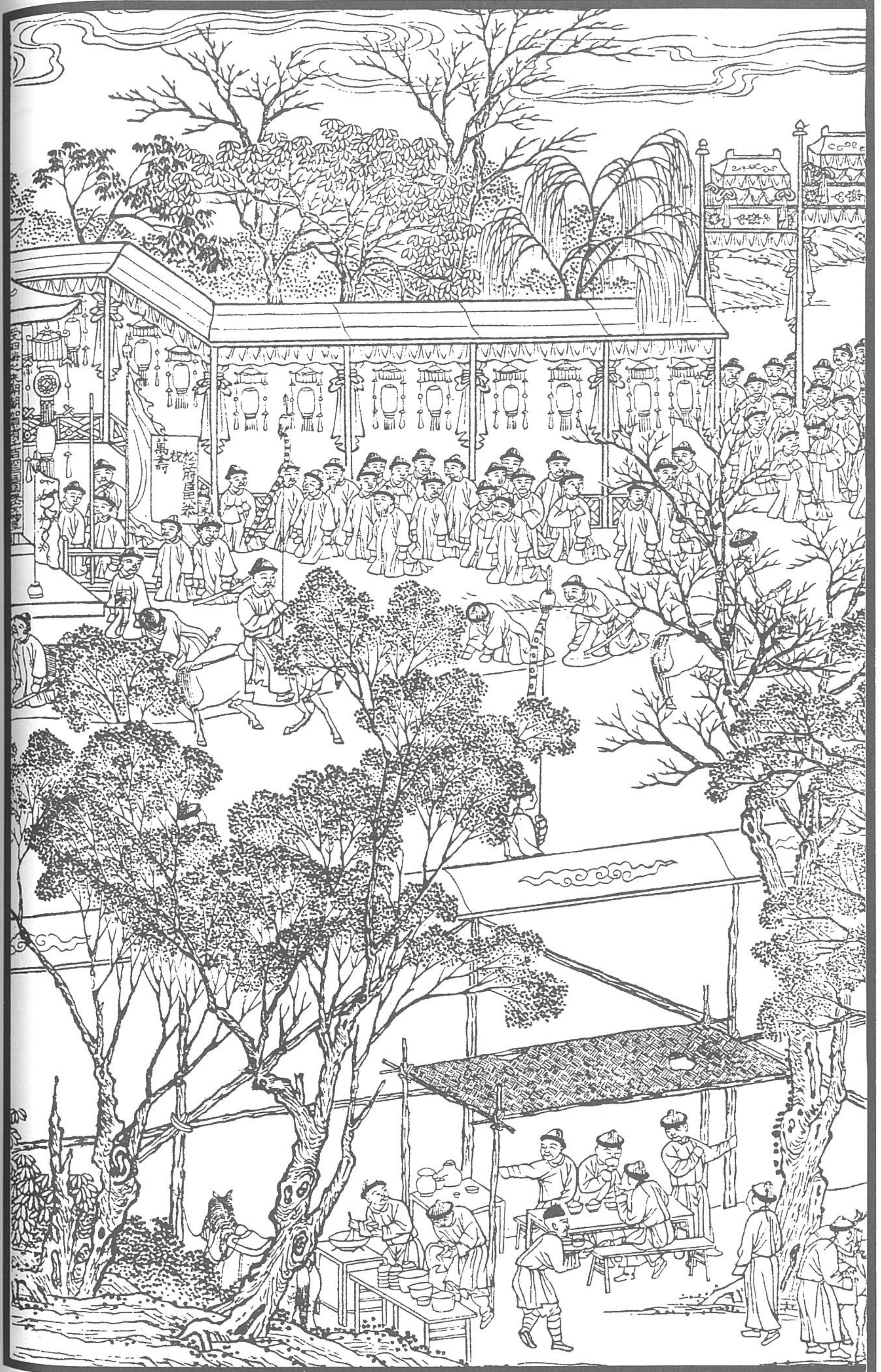

江南十三府耆老

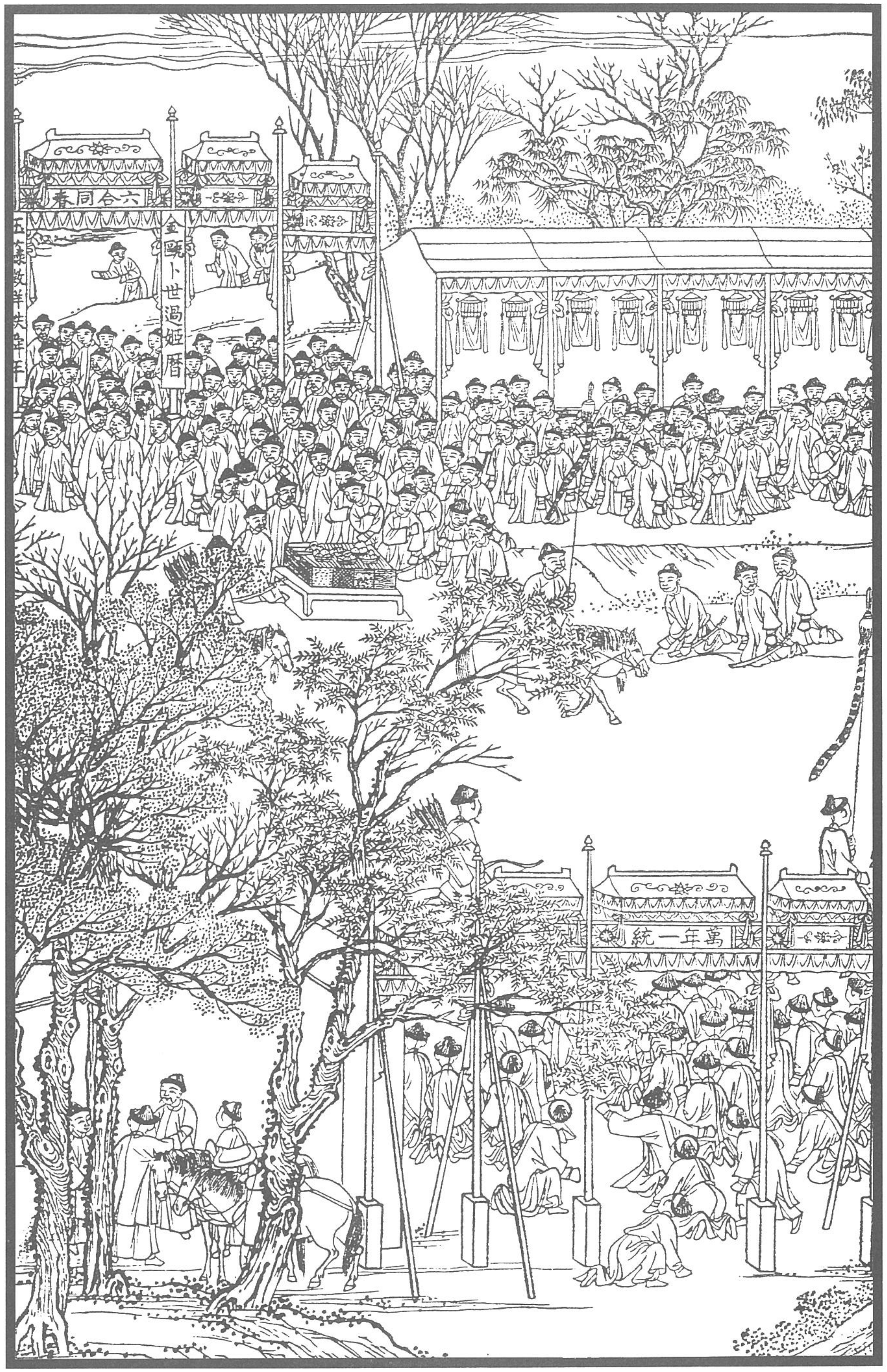


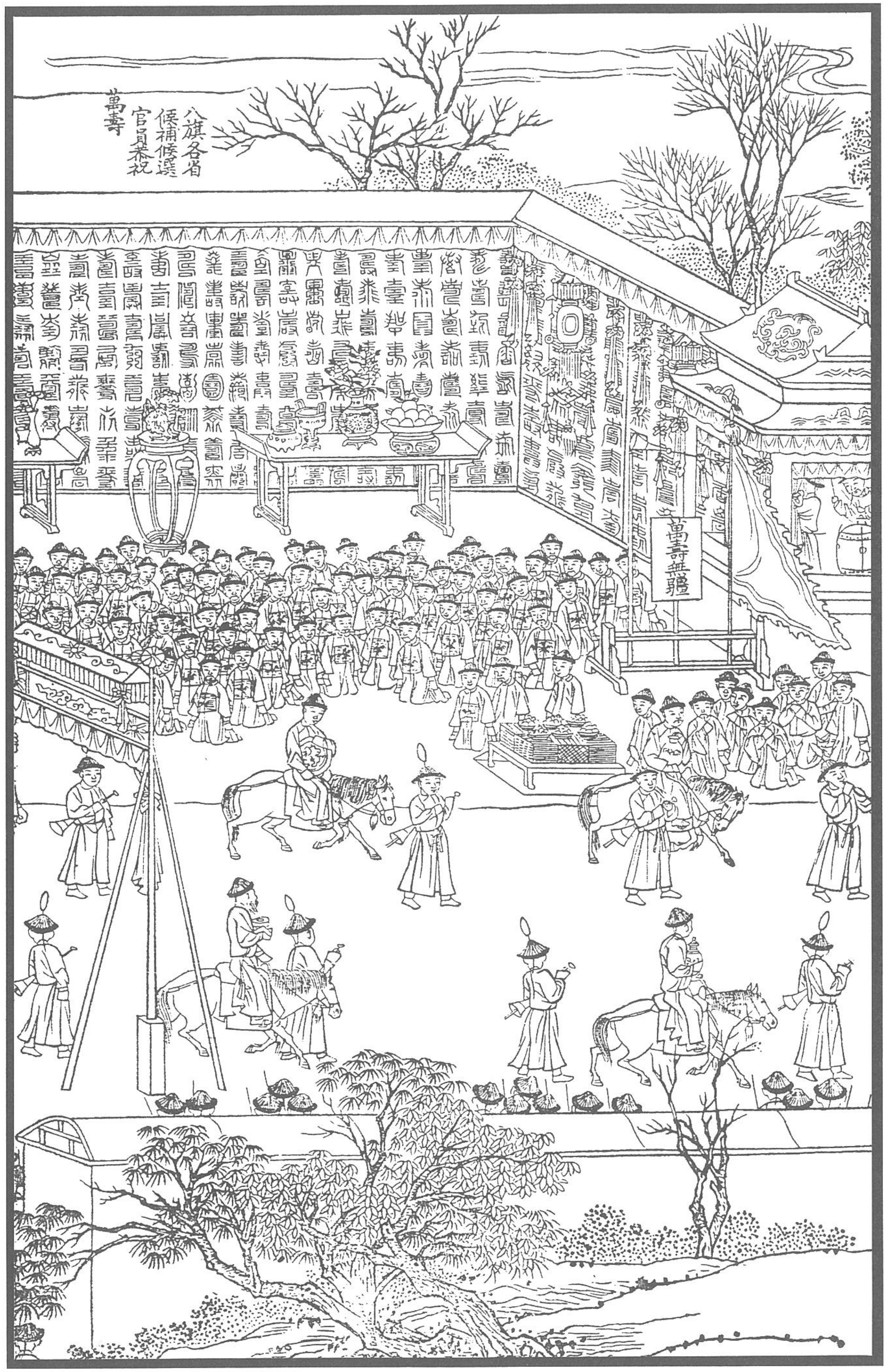


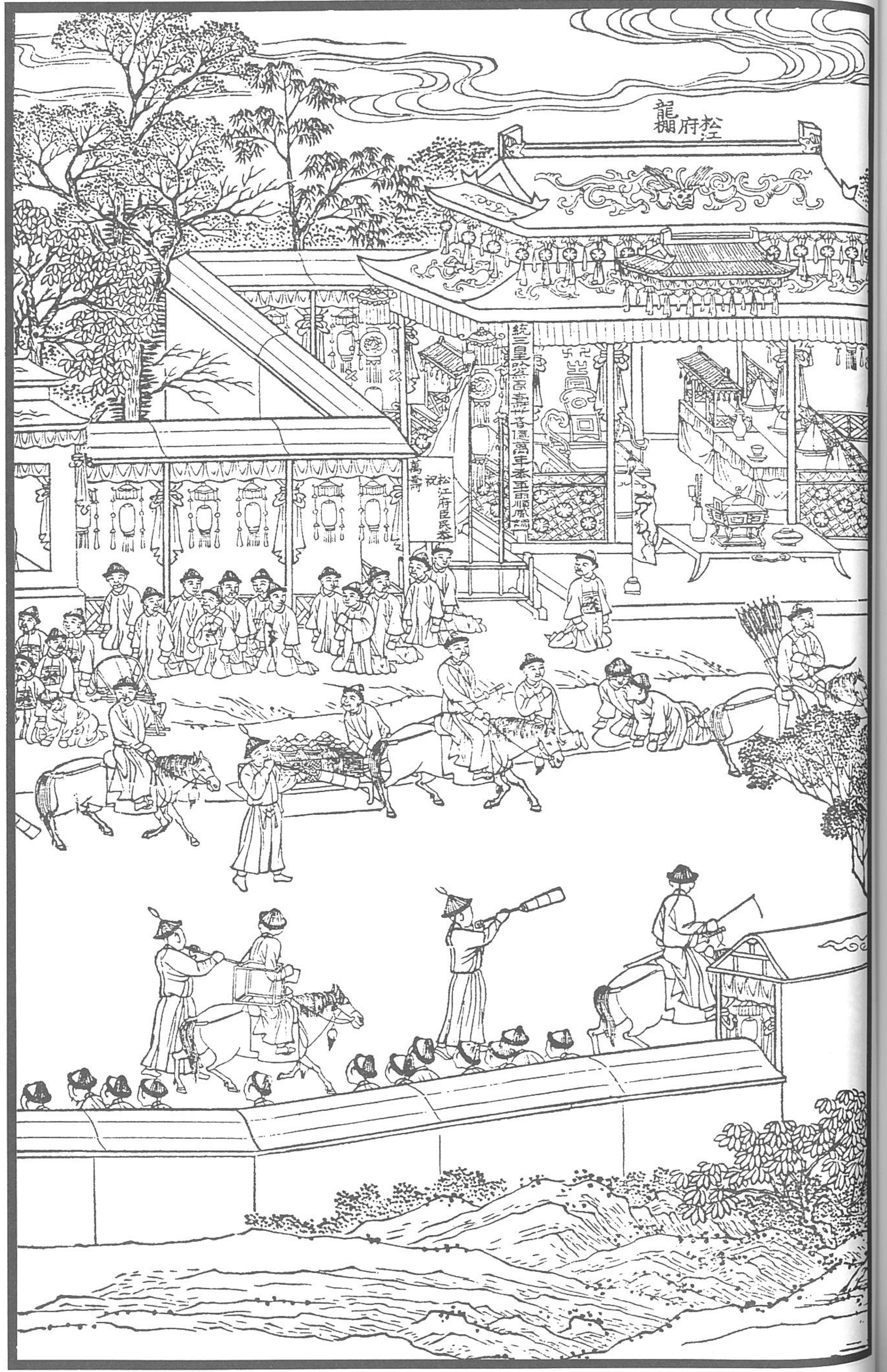
直前に鹵簿を控えて、全員が膝を地につけている。道には騎馬の兵士が、あるものは弓矢をあるものは剣を腰に手挟んで進む。

剣を腰に下げた警護の兵士が裏側にいる。天幕から出て鹵簿を見ようとするものなど、巧みに描き分けている。その前の戯台には、長寿を象徴する桃と、皇帝の五爪の龍が描かれる。

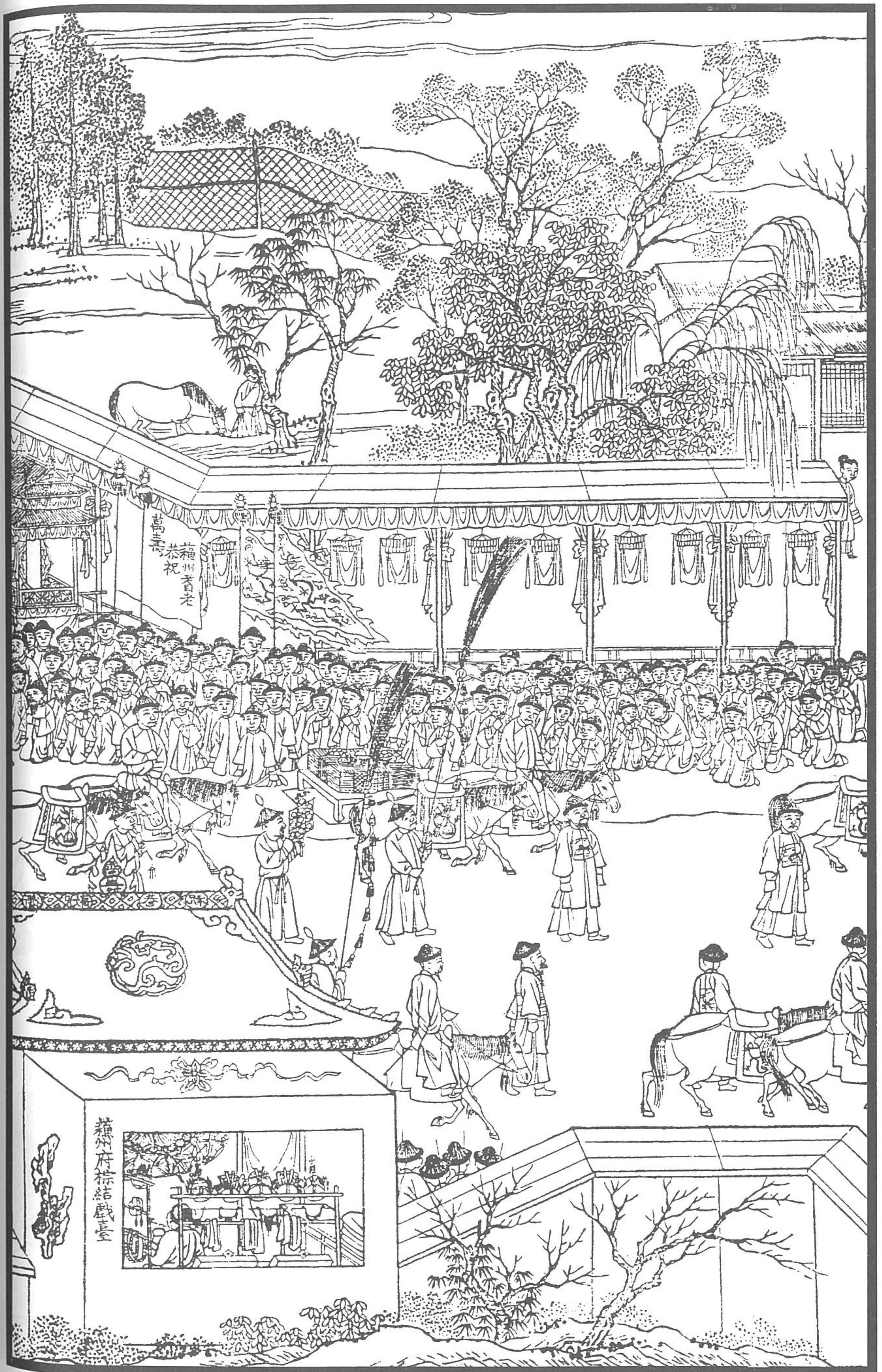

萬壽

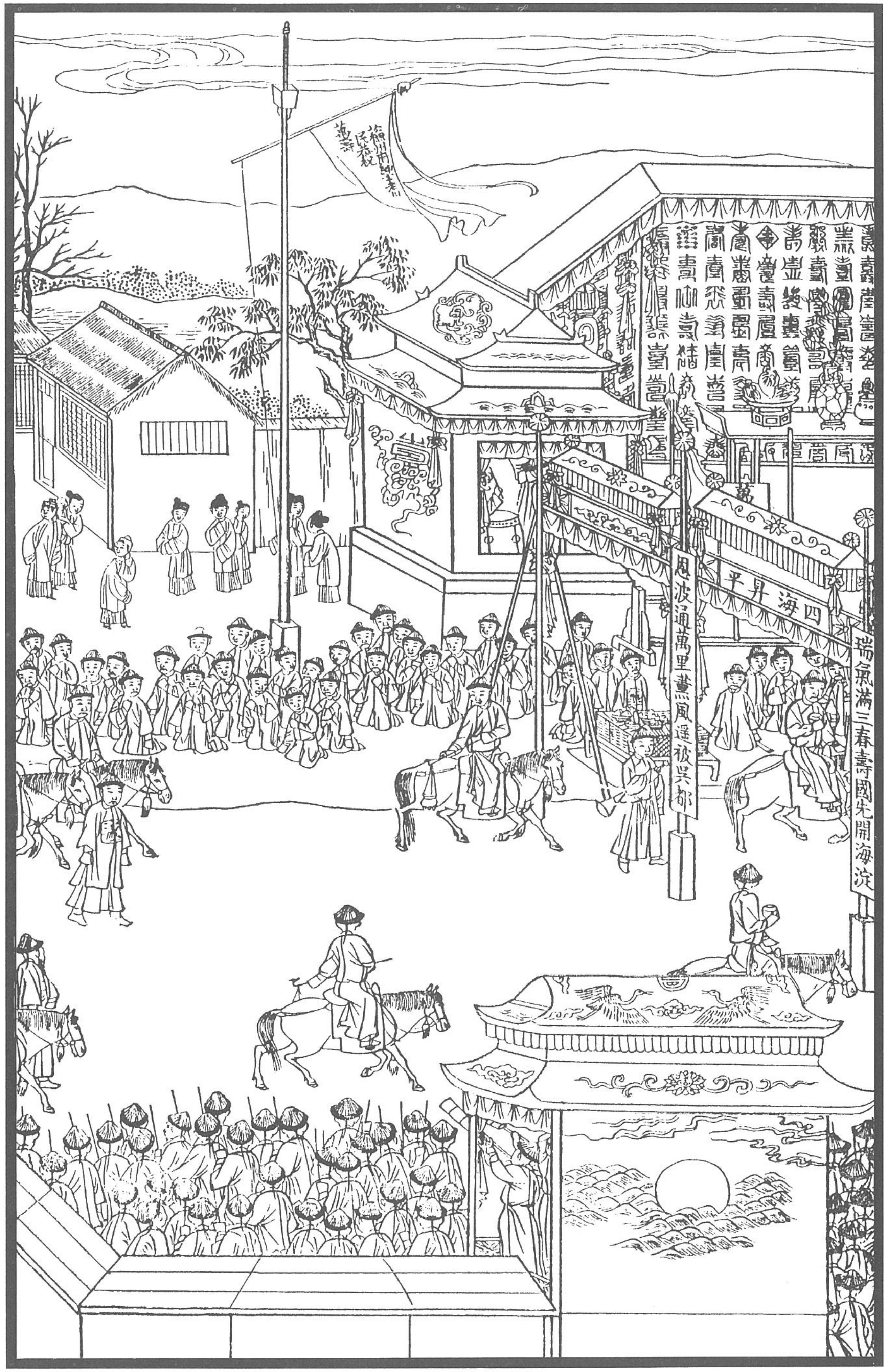

六合同春
金甌卜世過姬曆
萬年一統

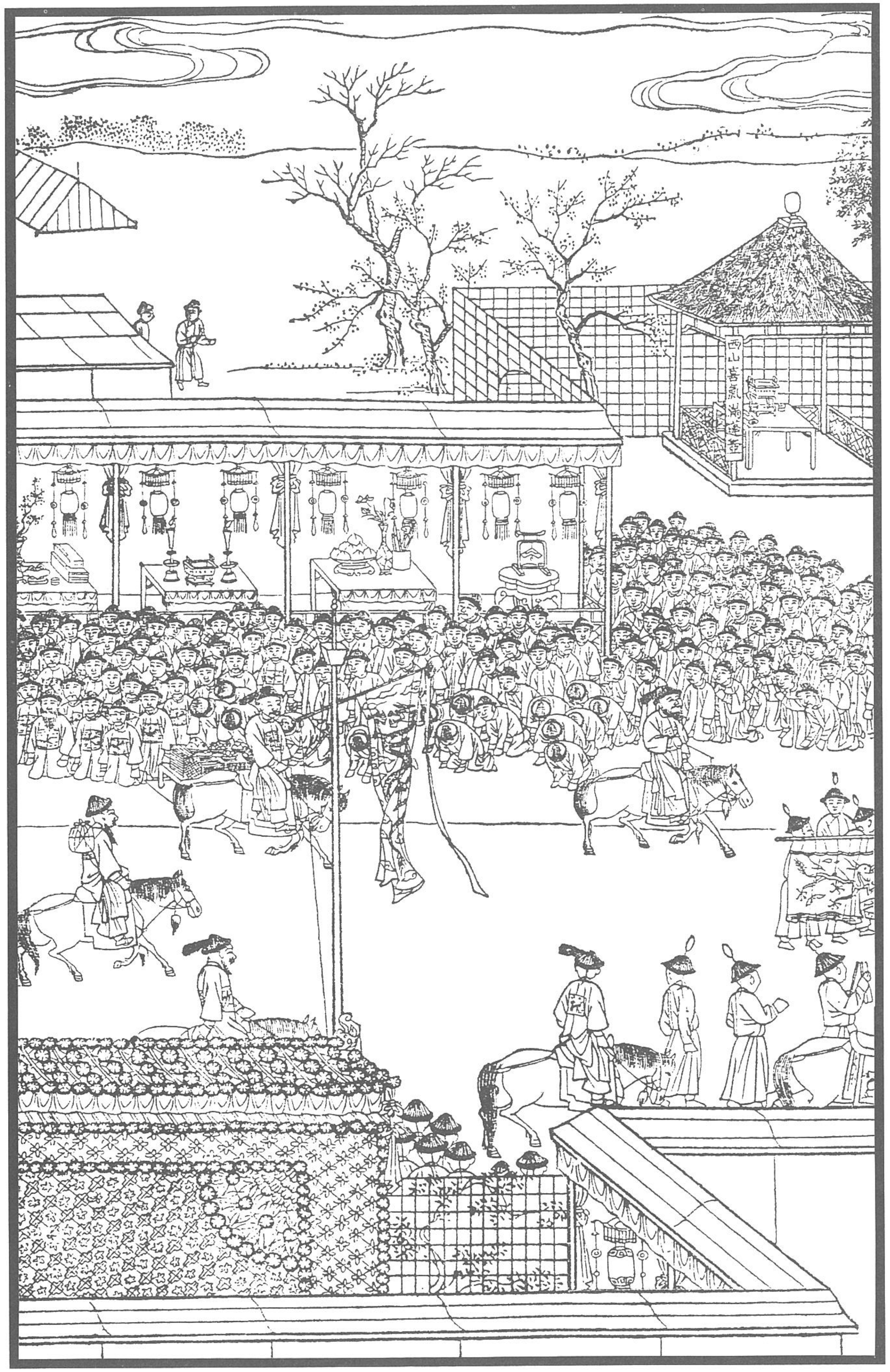


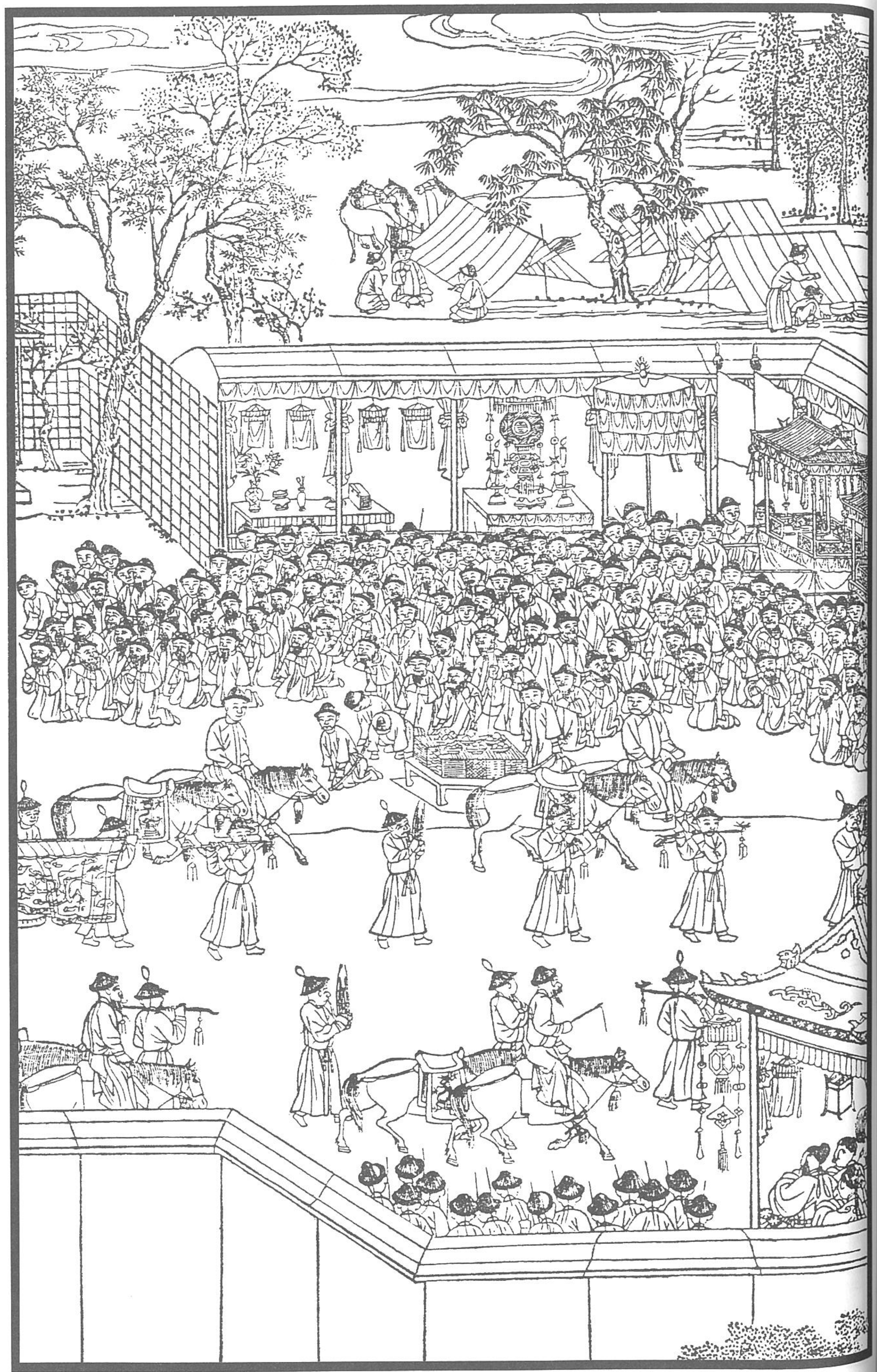


ここは上海の近郊に当たる「松江府」の龍棚がある。その左には大壁面の「百寿図」がある。百種類の「寿」を異なった書体で描く。手前には、桃や牡丹、佛手柑などの吉祥のものを飾っている。

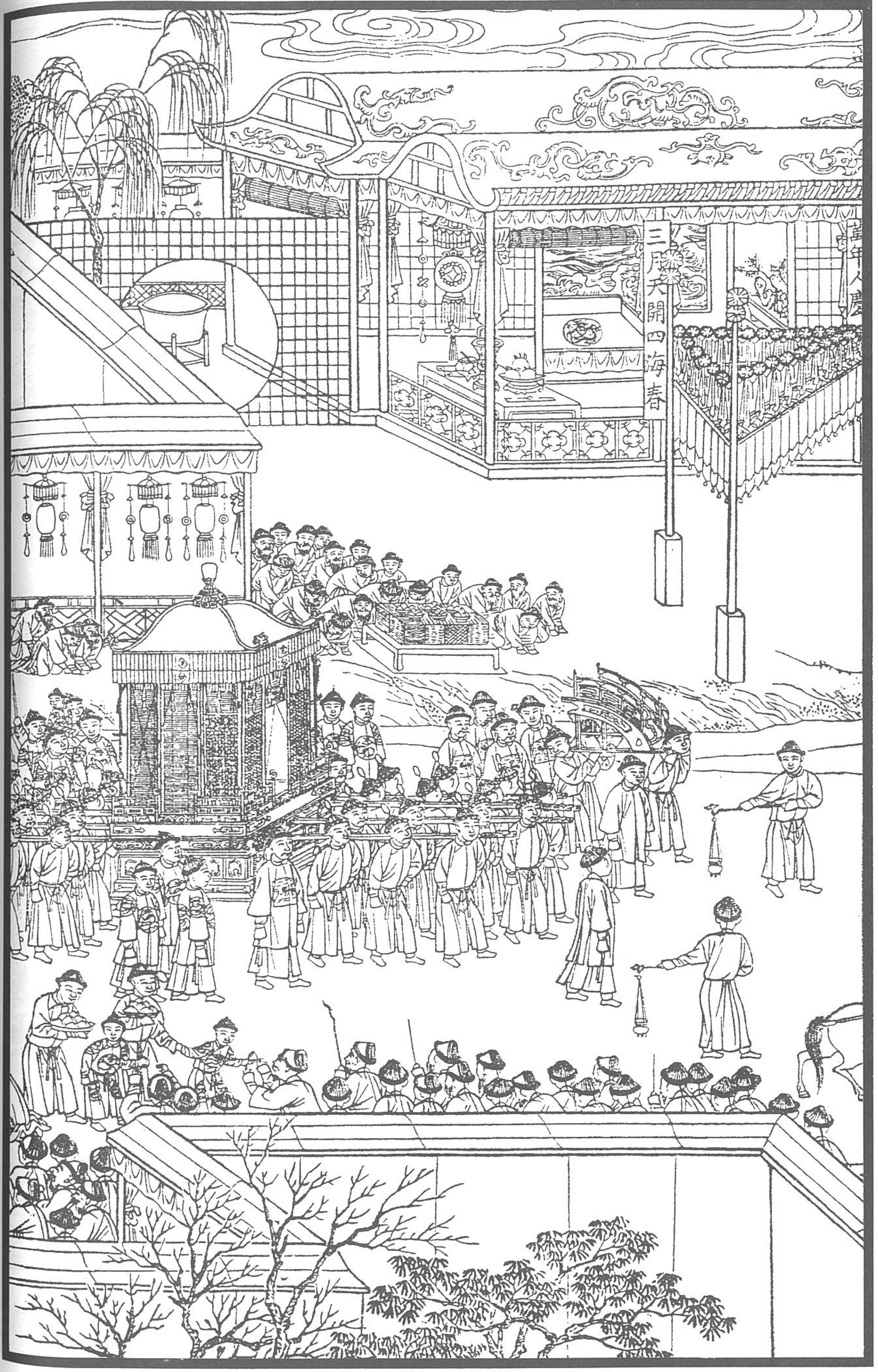

萬壽 蘇州耆老 恭祝
蘇州府綵結戲臺

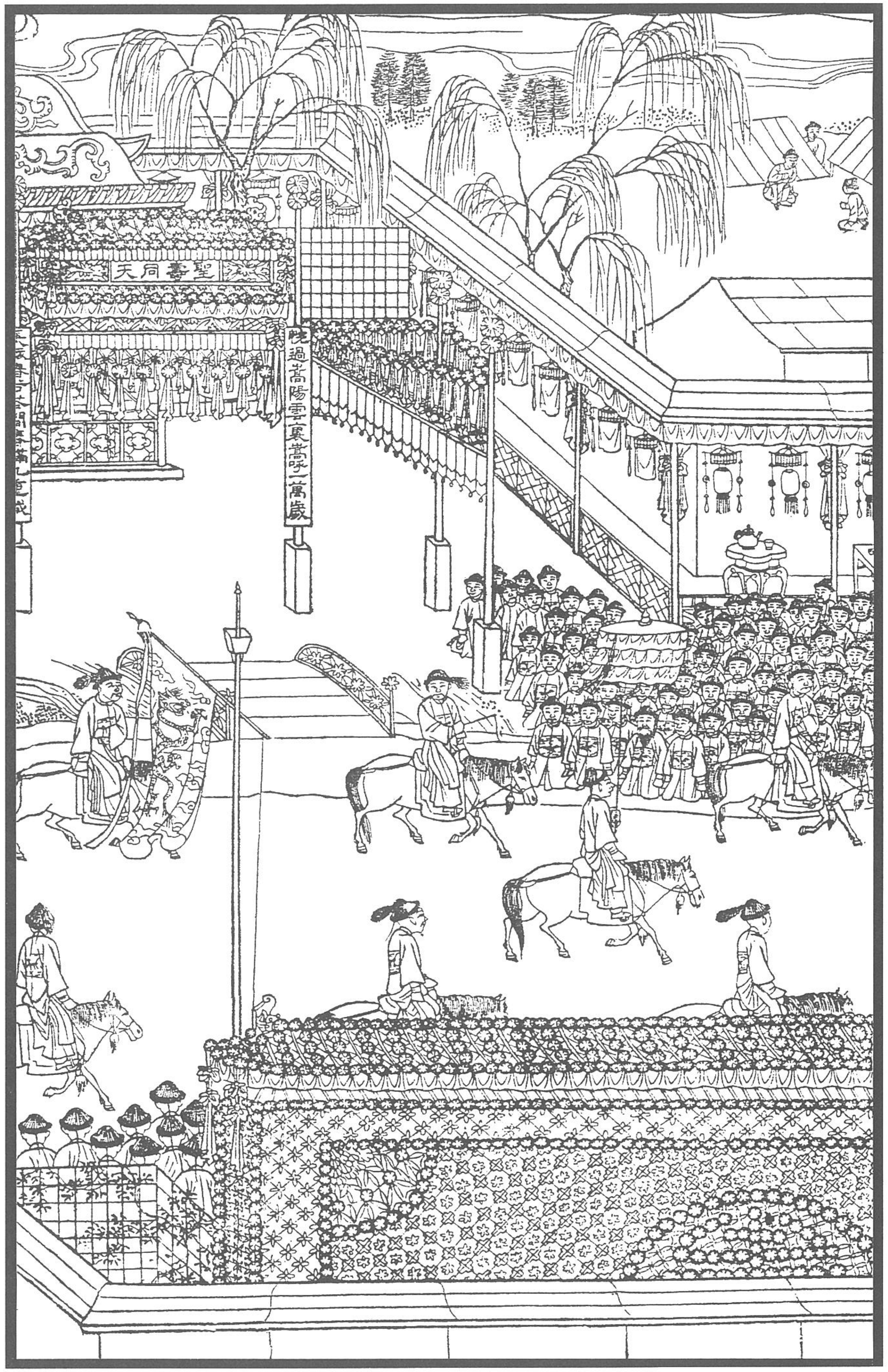

蘇州府紳耆 民人恭祝 萬壽
四海升平
風波通萬里 薰風遥被吳都
瑞氣滿三春 壽國先開海淀

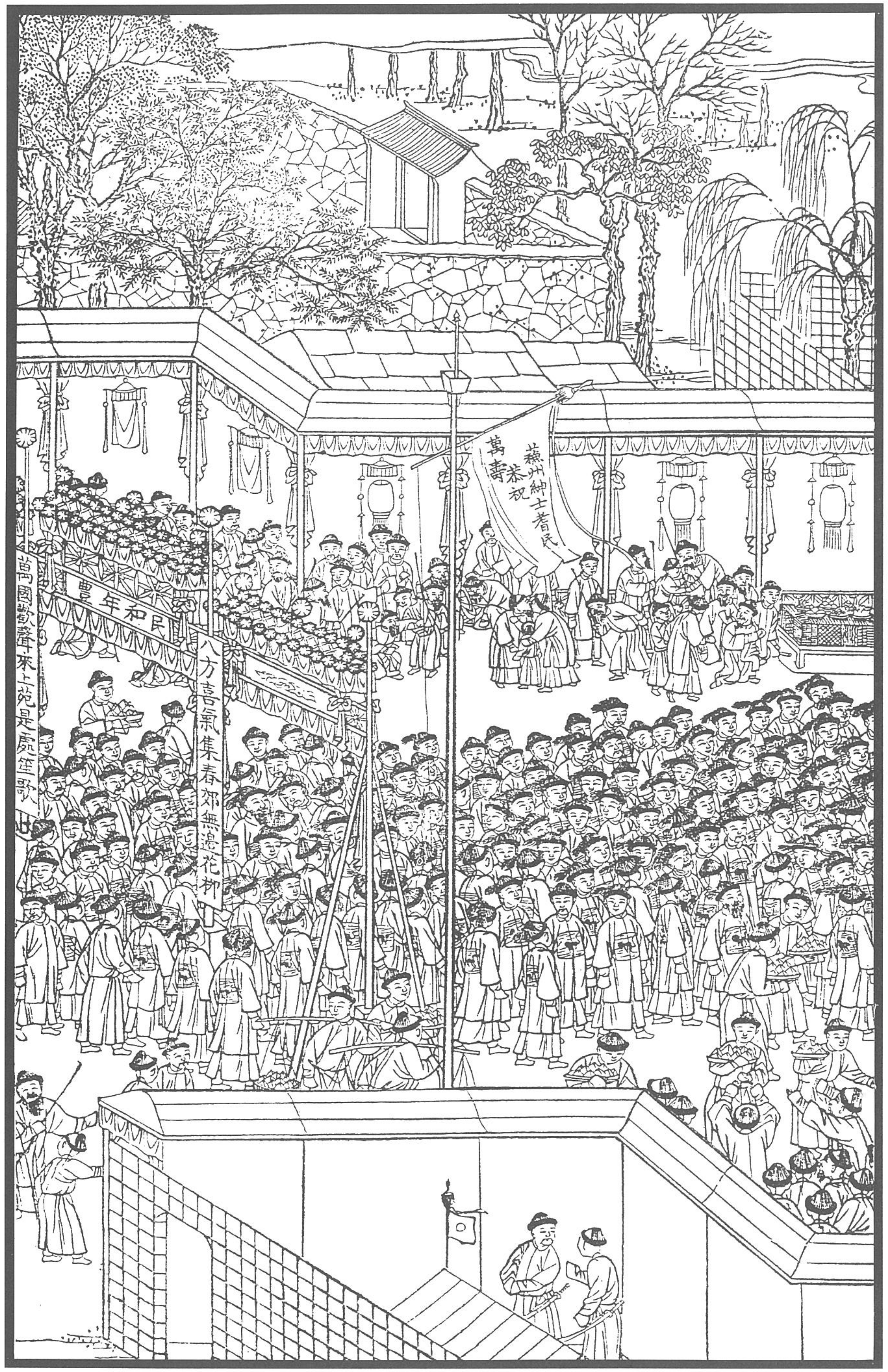


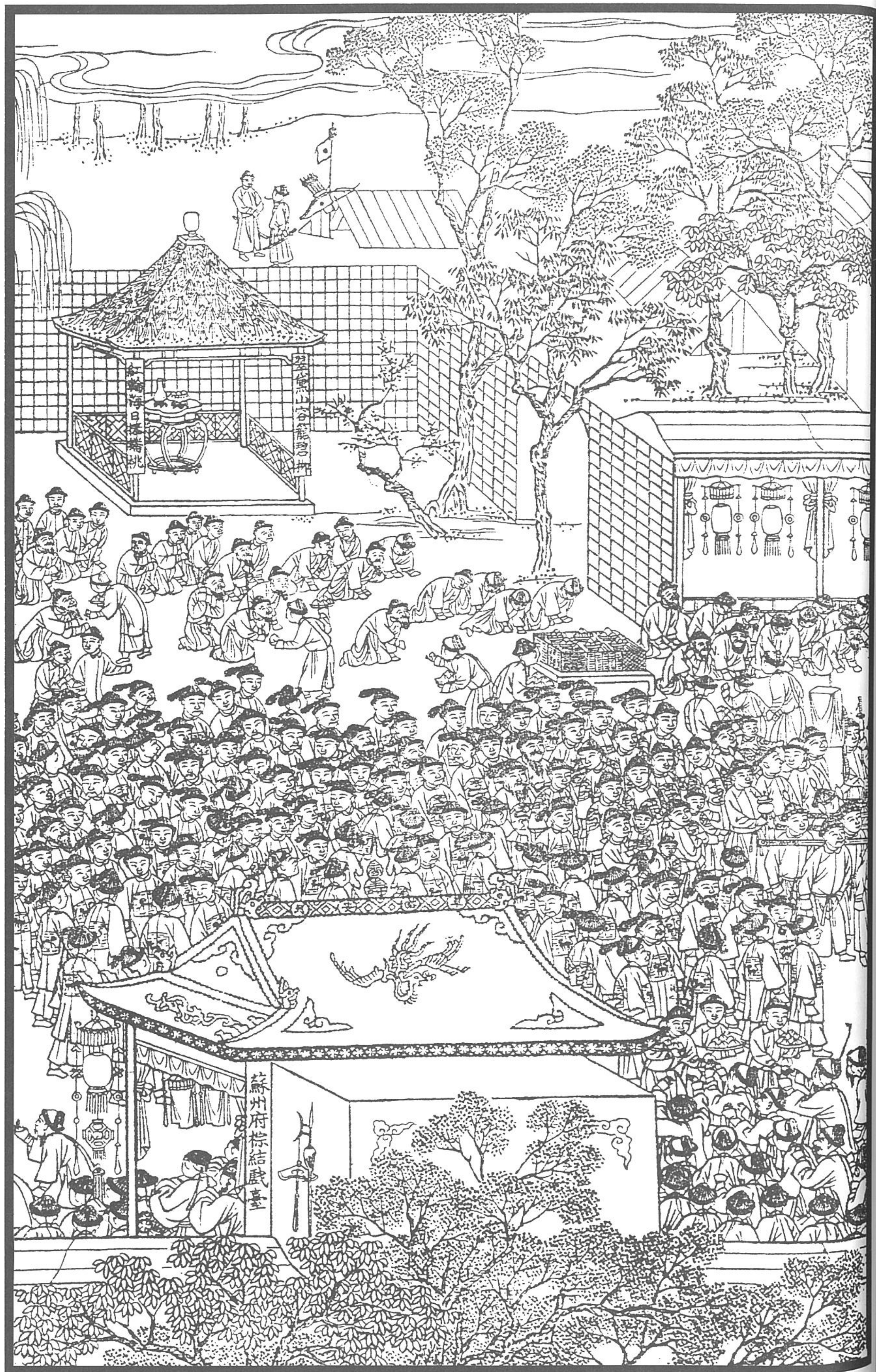


めでたい音楽を奏しながら歩む楽隊がいる。手には「拍板」「笙」「横笛」などをもつ。
このあたりは、全国一の繁栄を誇った都市蘇州の分担地域である。作り物の様子も、一段と豪華で派手に見える。

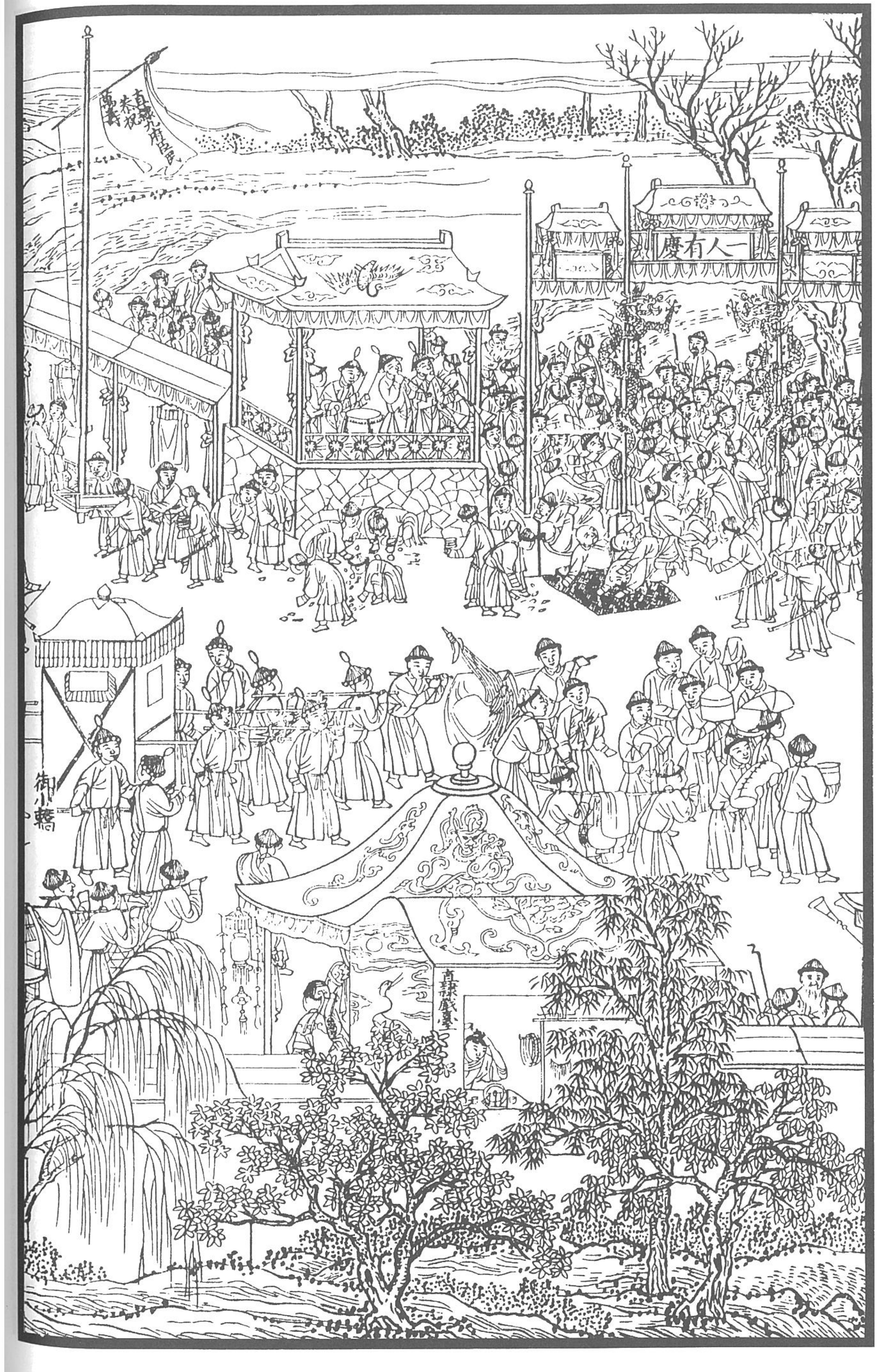


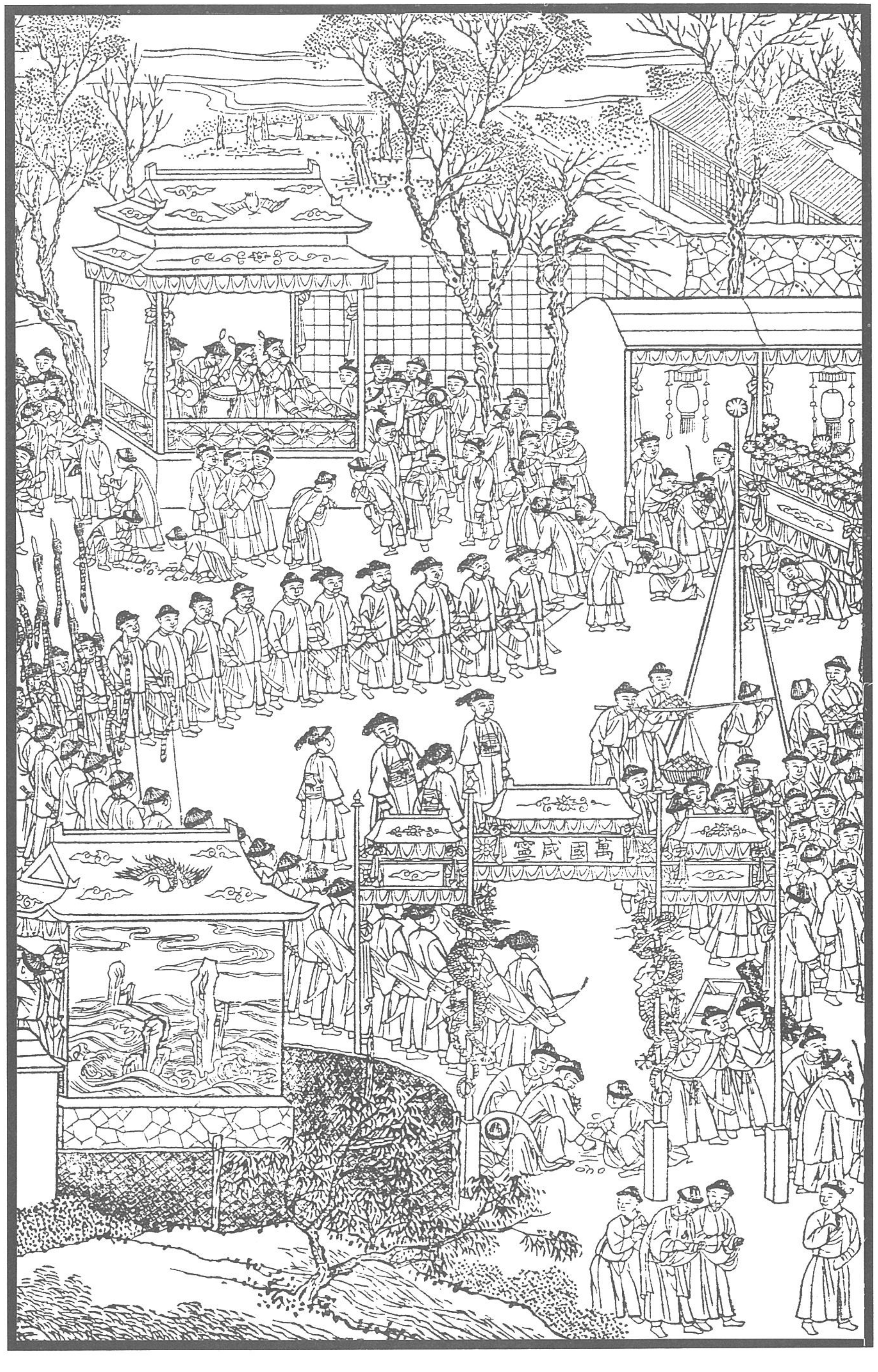

聖壽同天
曉過嵩陽雲裏嵩呼一萬歲

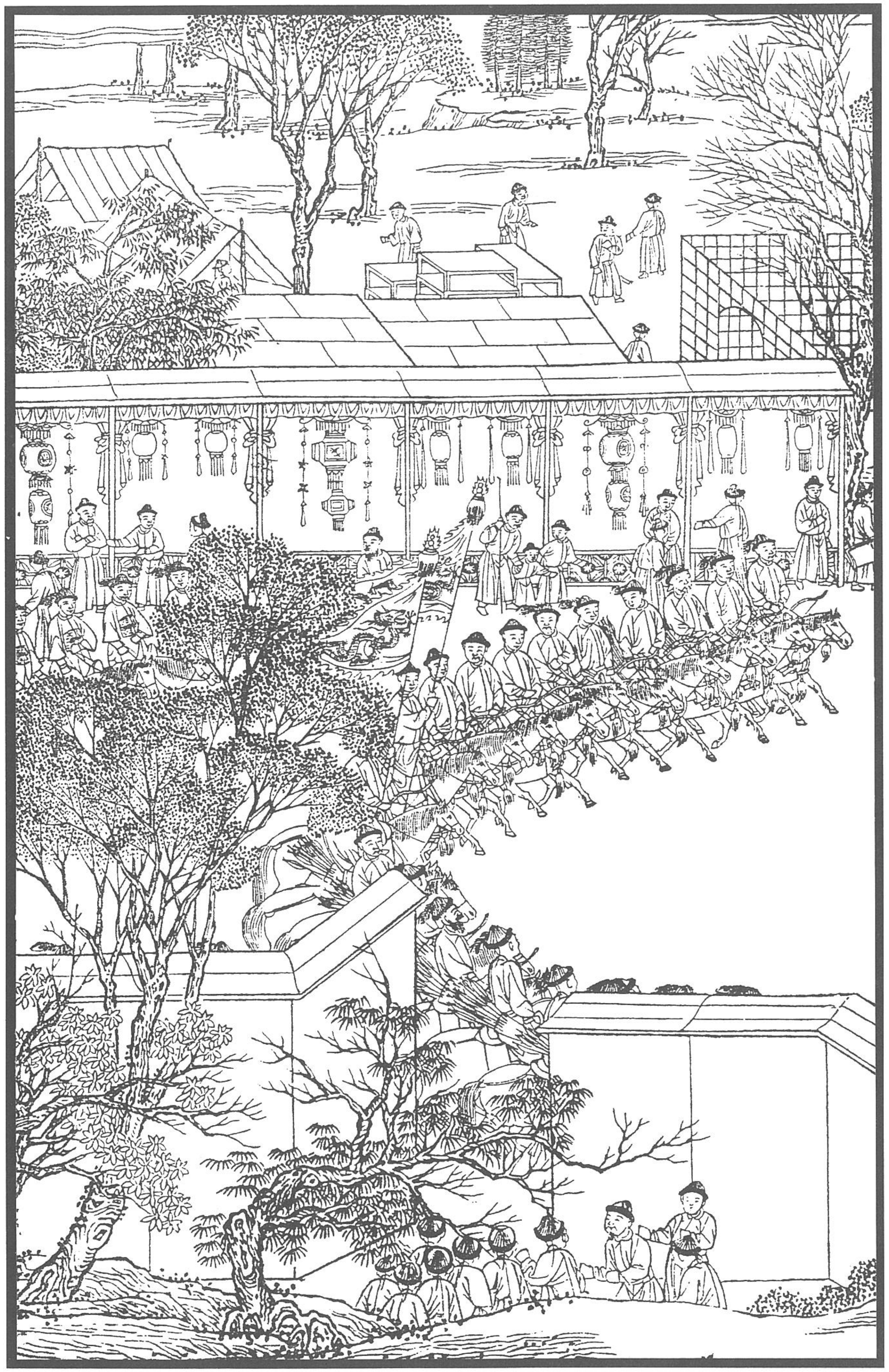


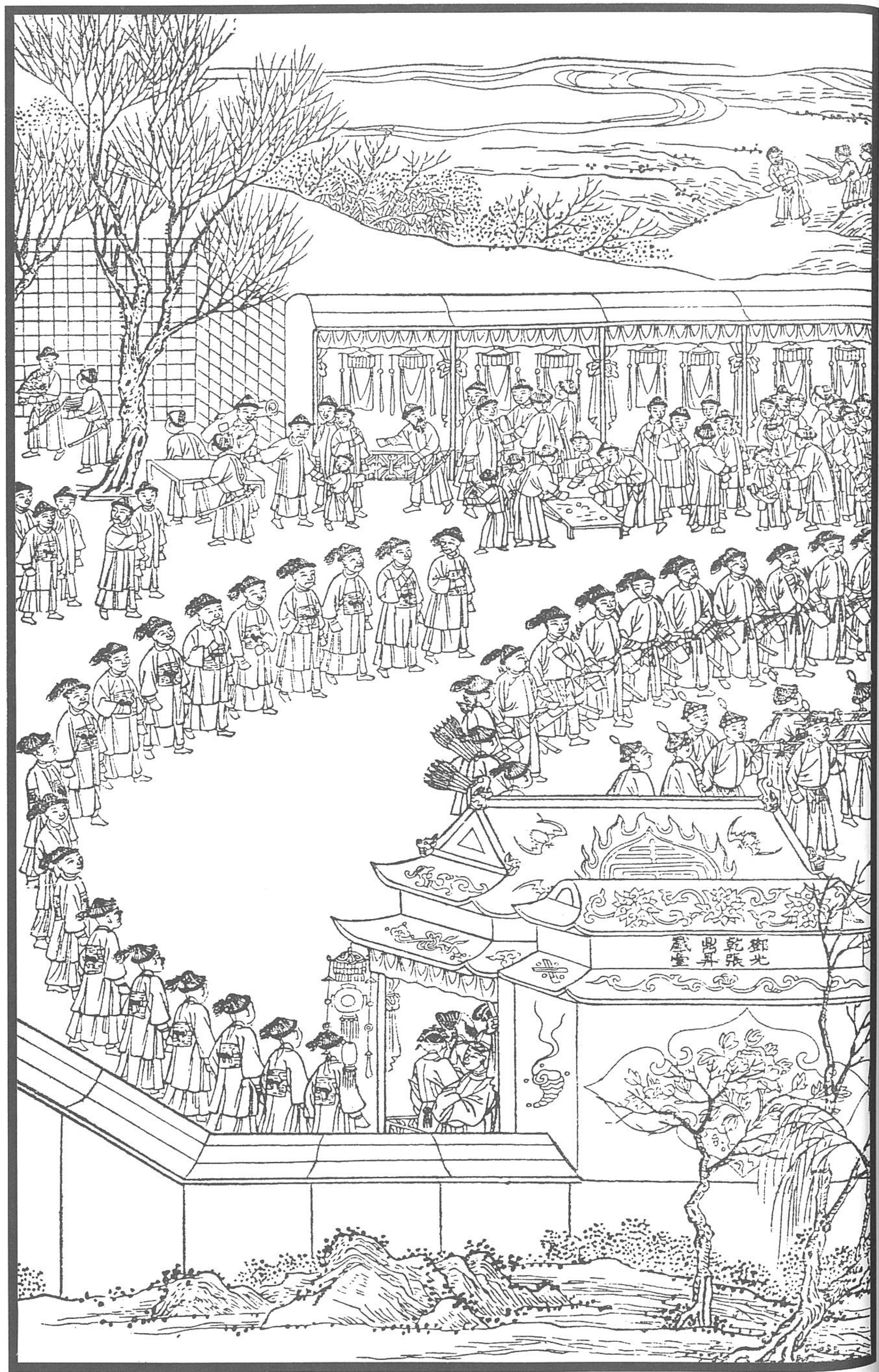


皇帝の轎の背後につく供のものの人数の多さは、驚くべき数である。行列の周囲のものには、従者が手ずから下賜された菓子を配っている。

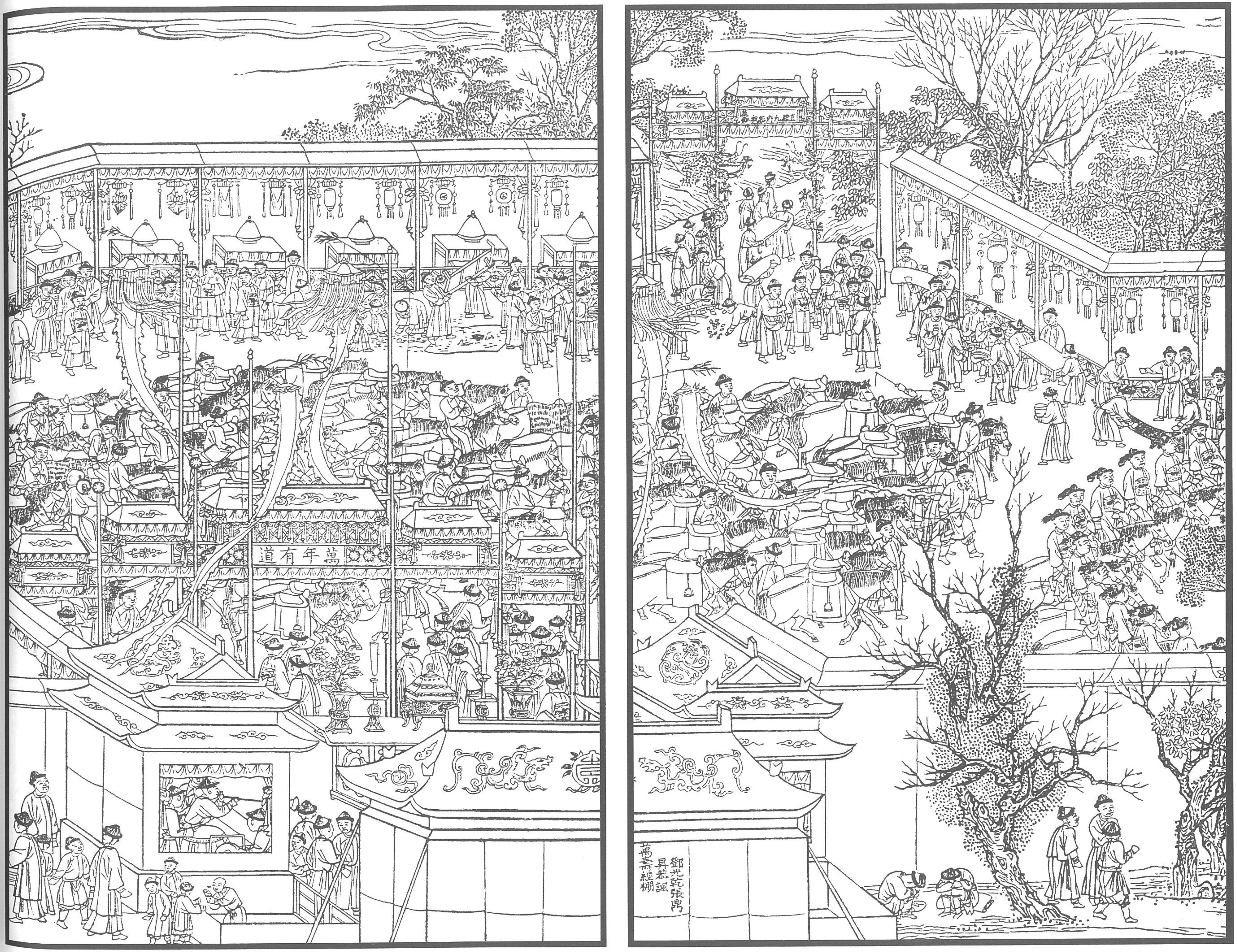

一人有慶
御小轎

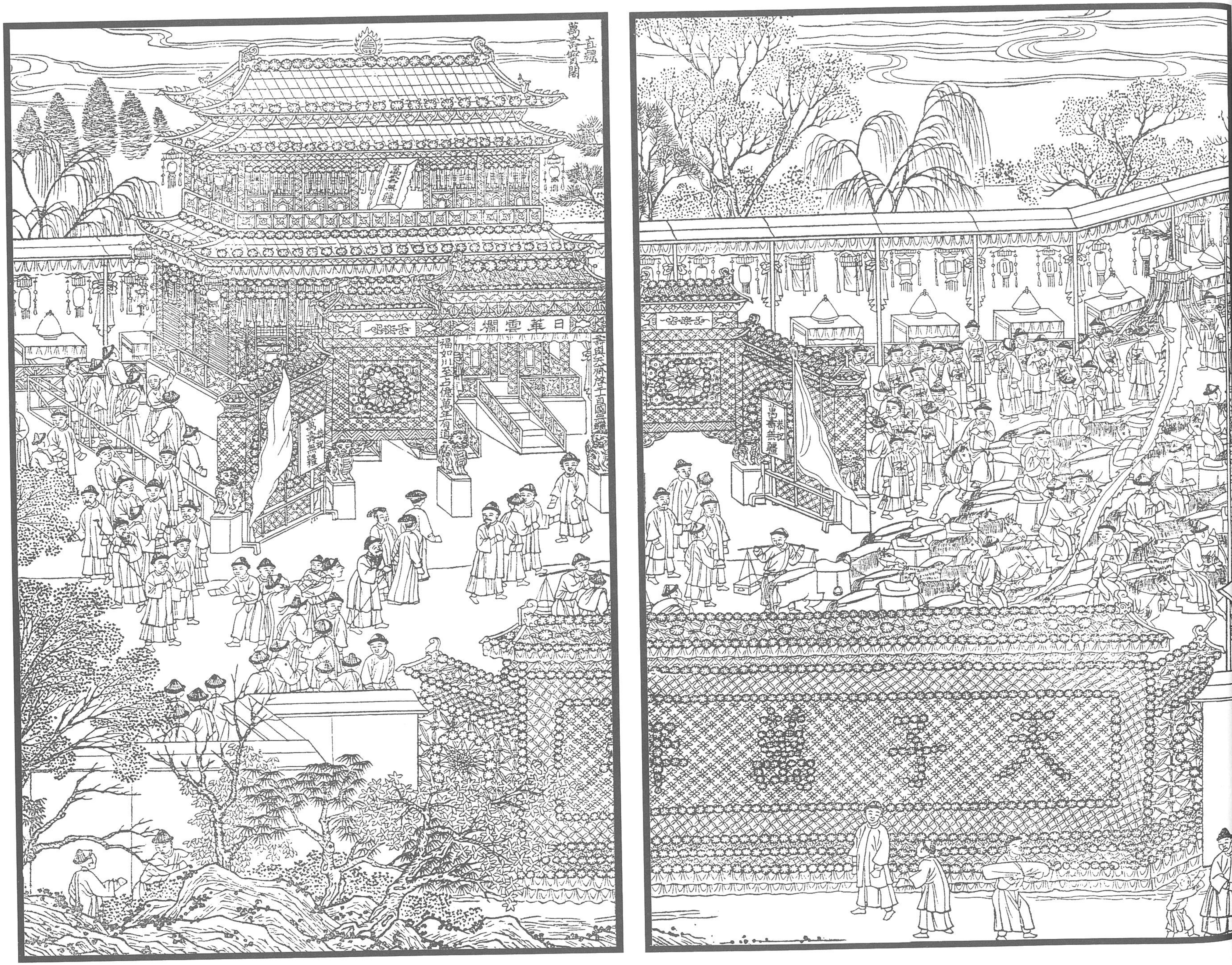

萬國咸寧



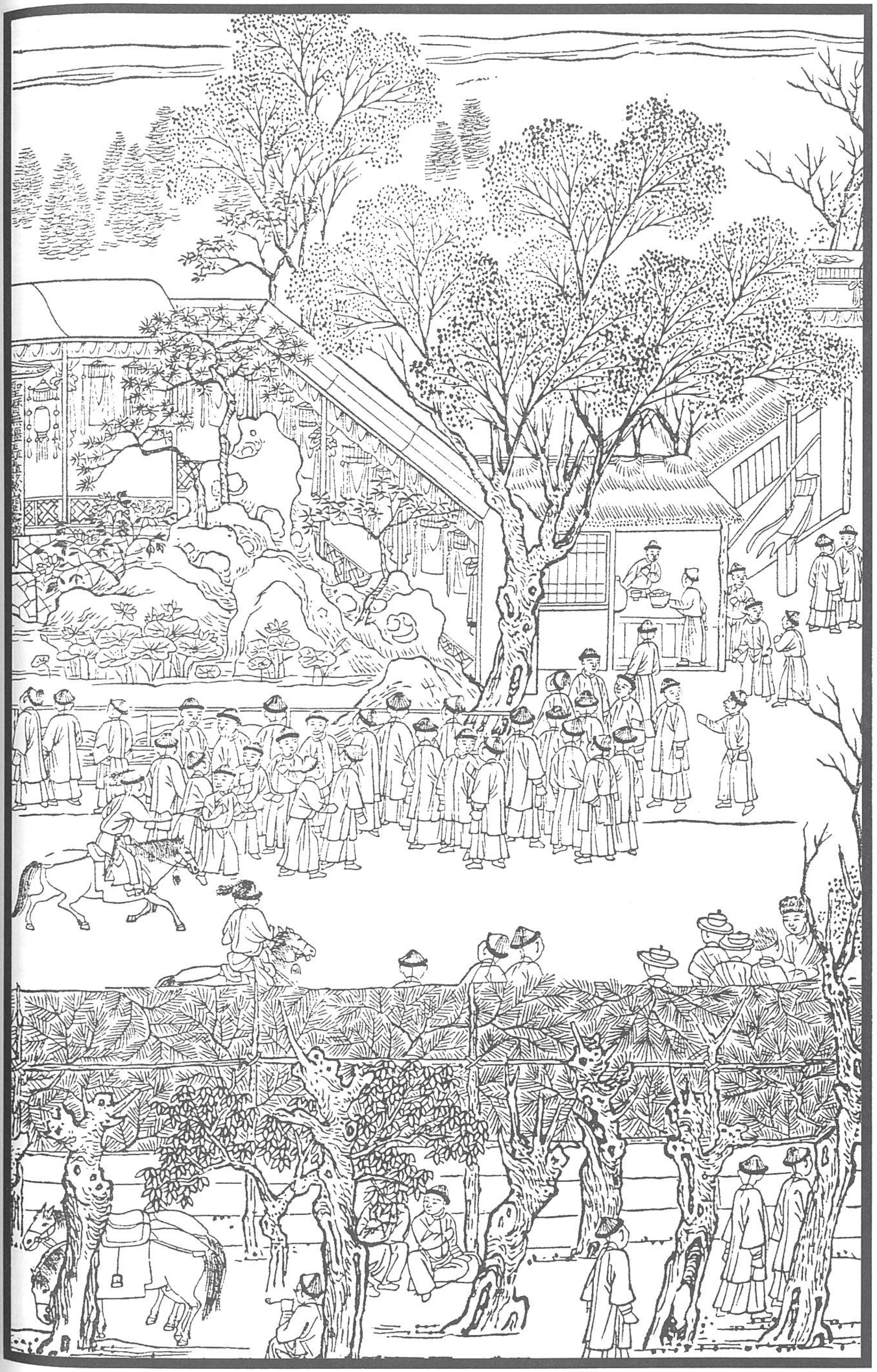


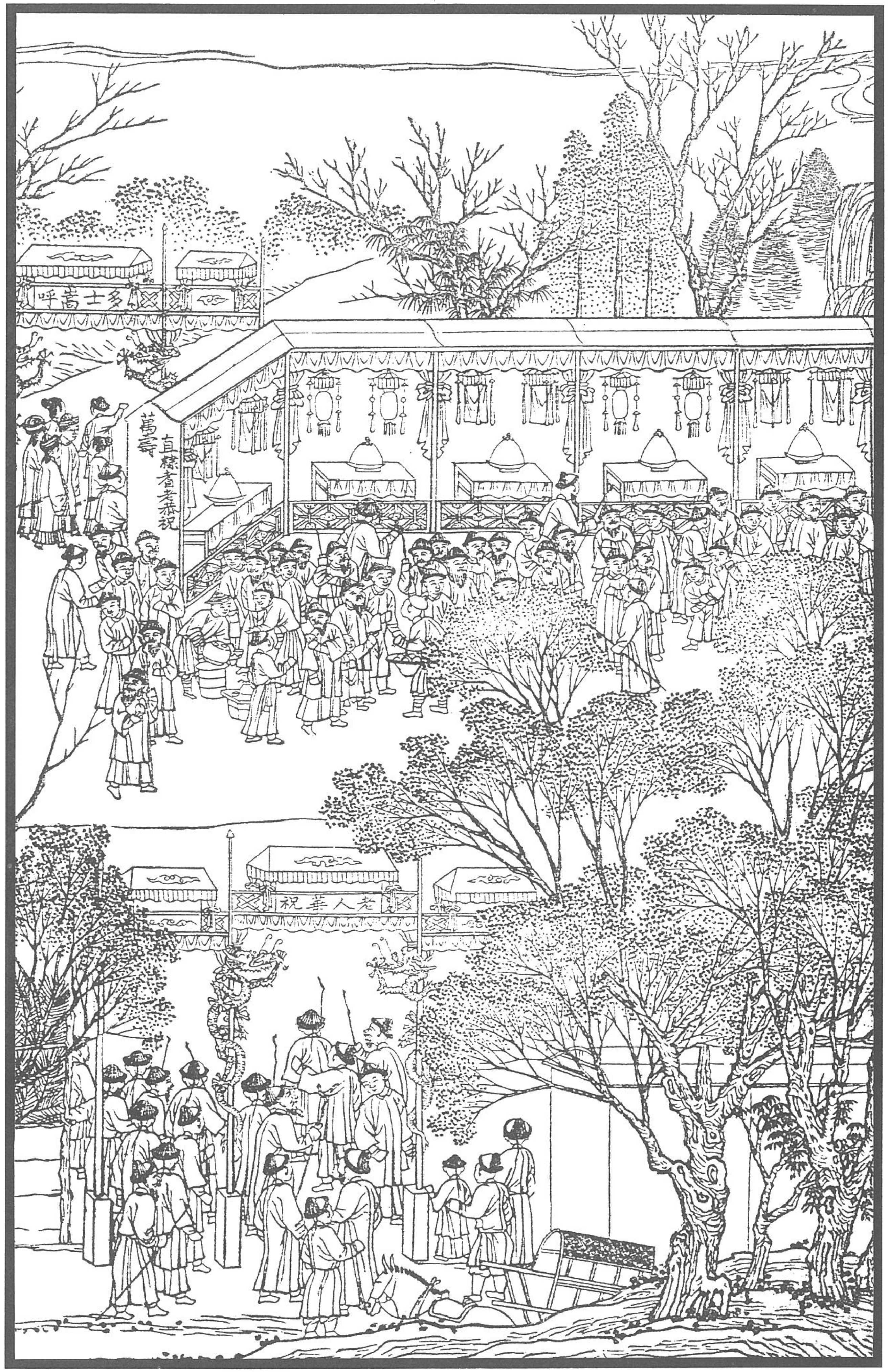
整然と半円形に整列した皇帝の背後の行列が、とりわけ威厳を見せる。その一方で「直隷戯台」には、鏡の前に化粧をする俳優が描かれている。


萬年有道
鄧光乾張門
昇恭誦
萬壽經棚

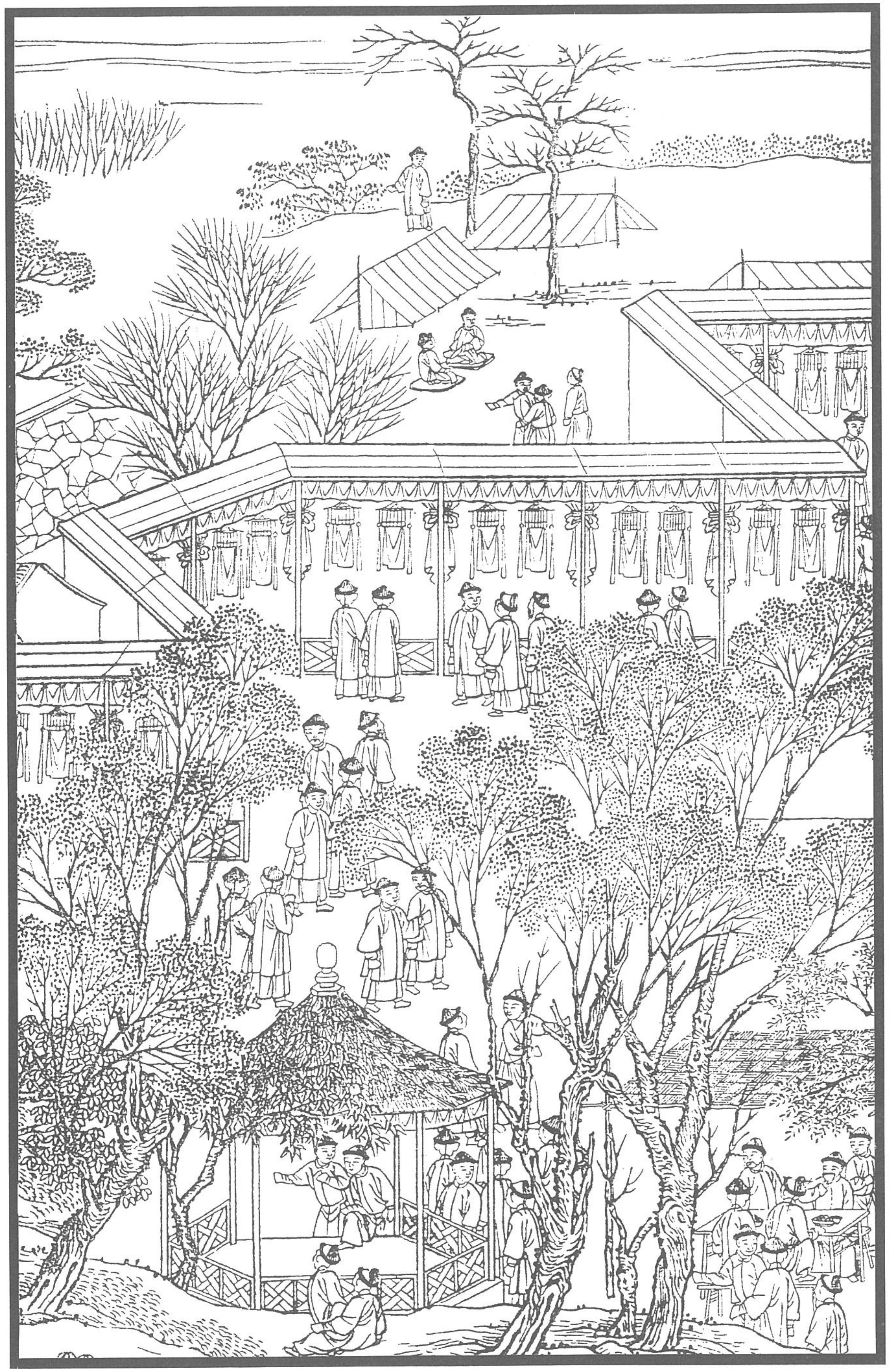


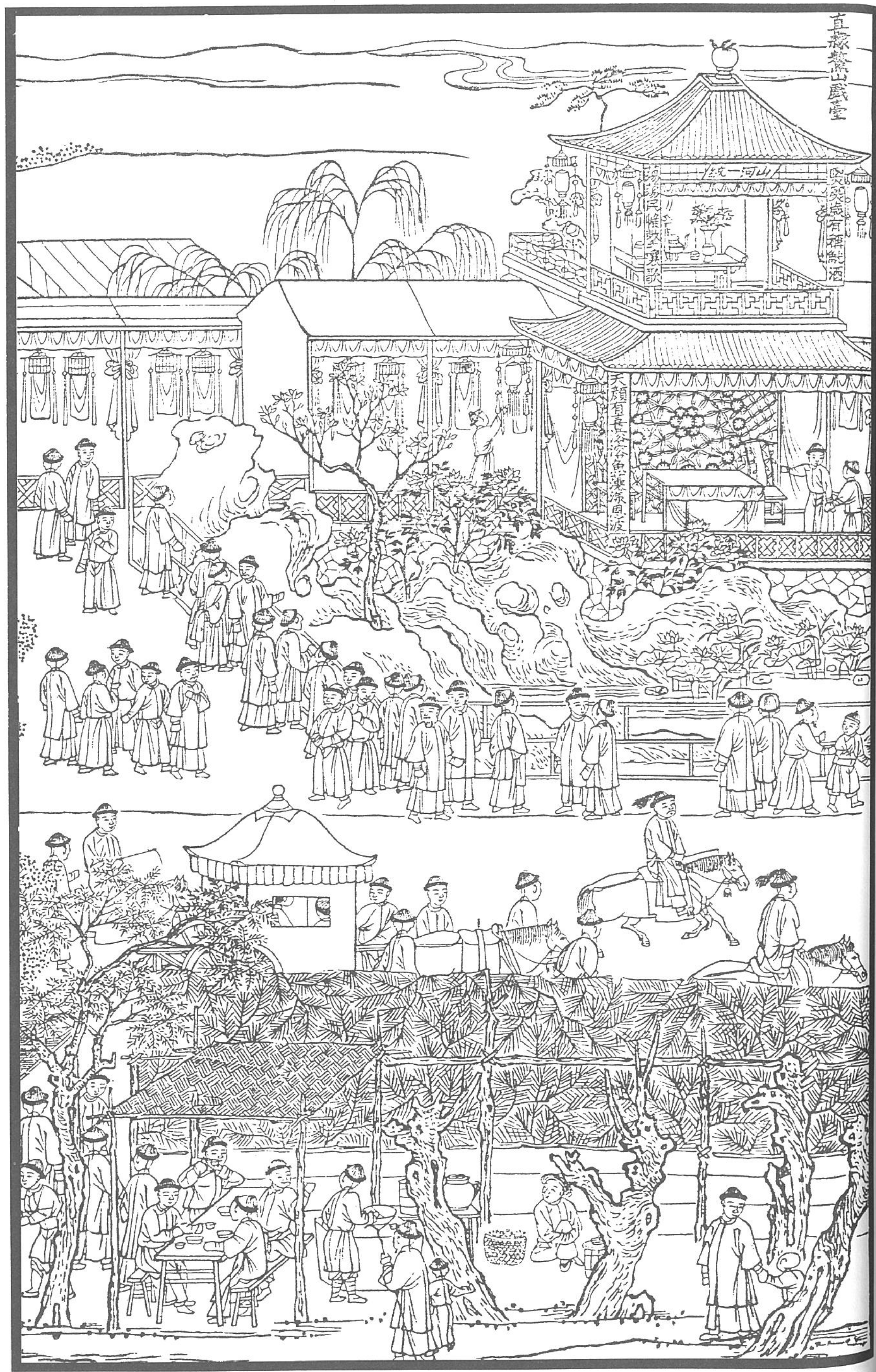
「天子萬年」と飾られた飾壁の対面には「萬寿無疆」と額を掲げた楼閣をしつらえた。これが「直隷萬寿宝閣」であり、首都北京の豪華さを誇示しているようである。
後ろに控えた老人たちの数ももっとも多いようである。
鹵簿のハイライトはここで終わりとなる。

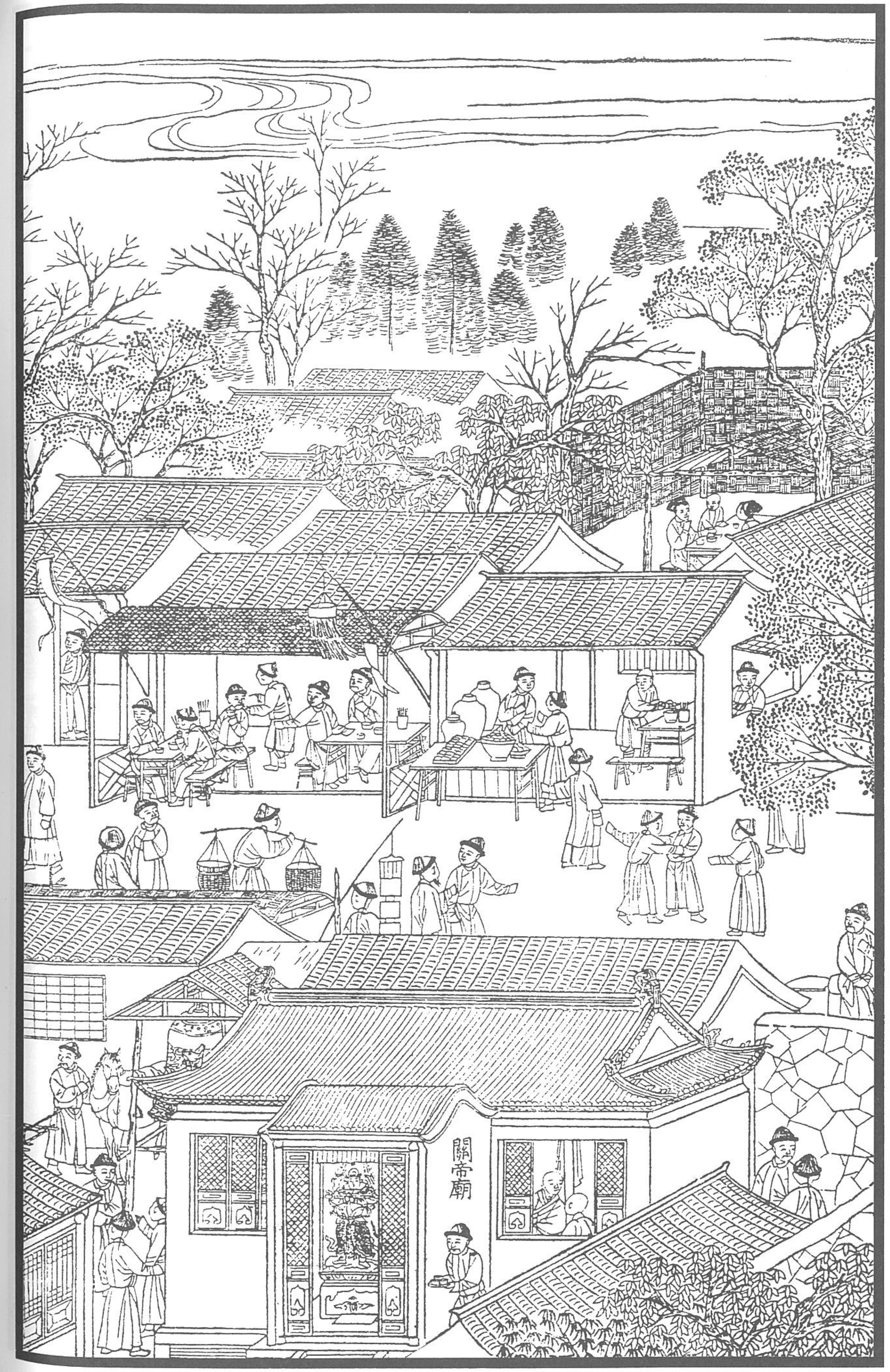


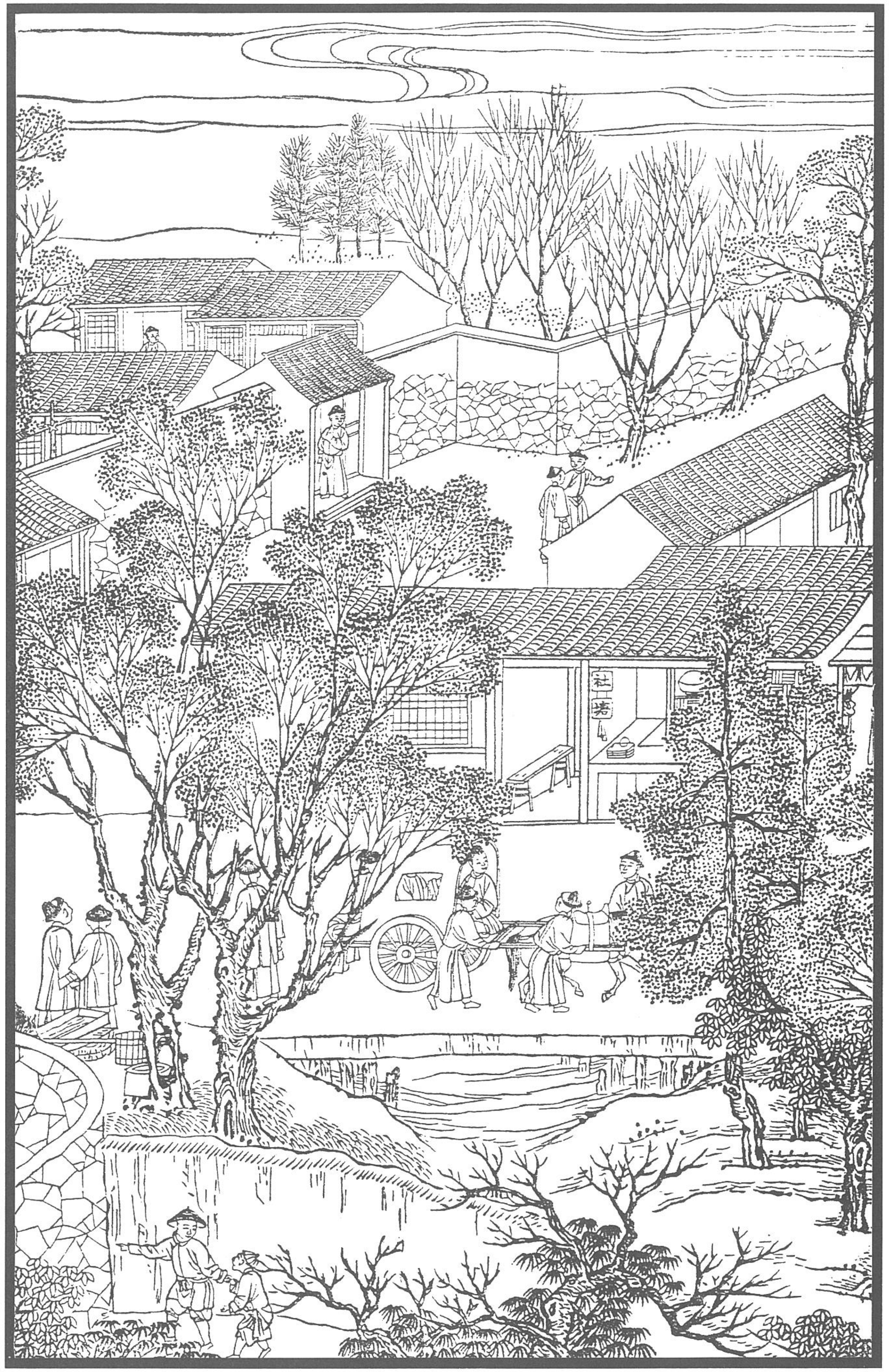

多士嵩呼
萬壽
直隸耆老恭祝
老人華祝

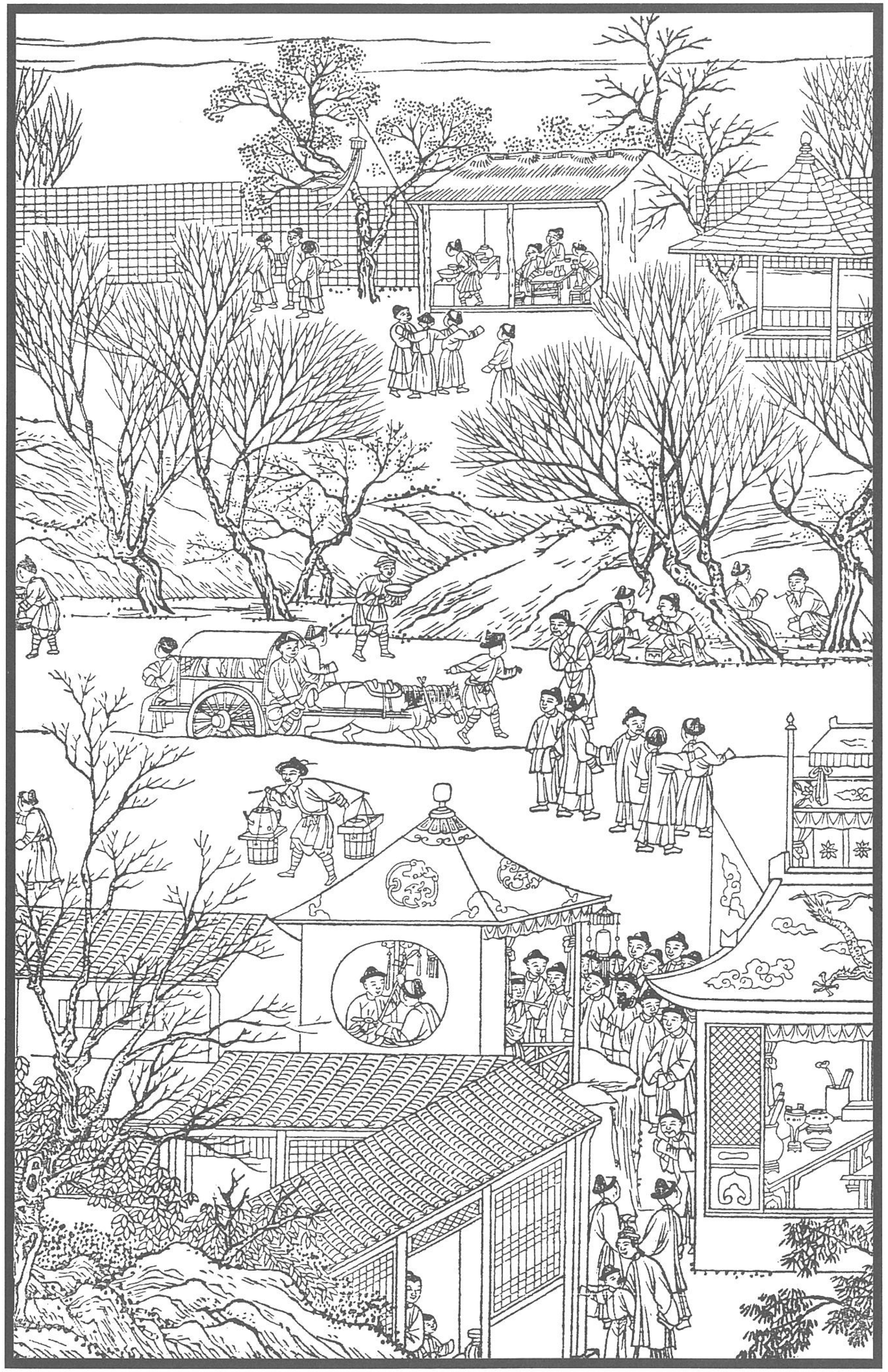
「直隷鰲山戯台」の周囲には、奇岩を配した築山を誂え、豪華な作りであるが、すでに天子の通り過ぎたあとの戯台には人影がなく、周りには興奮の後の静かな安らぎが漂っている。

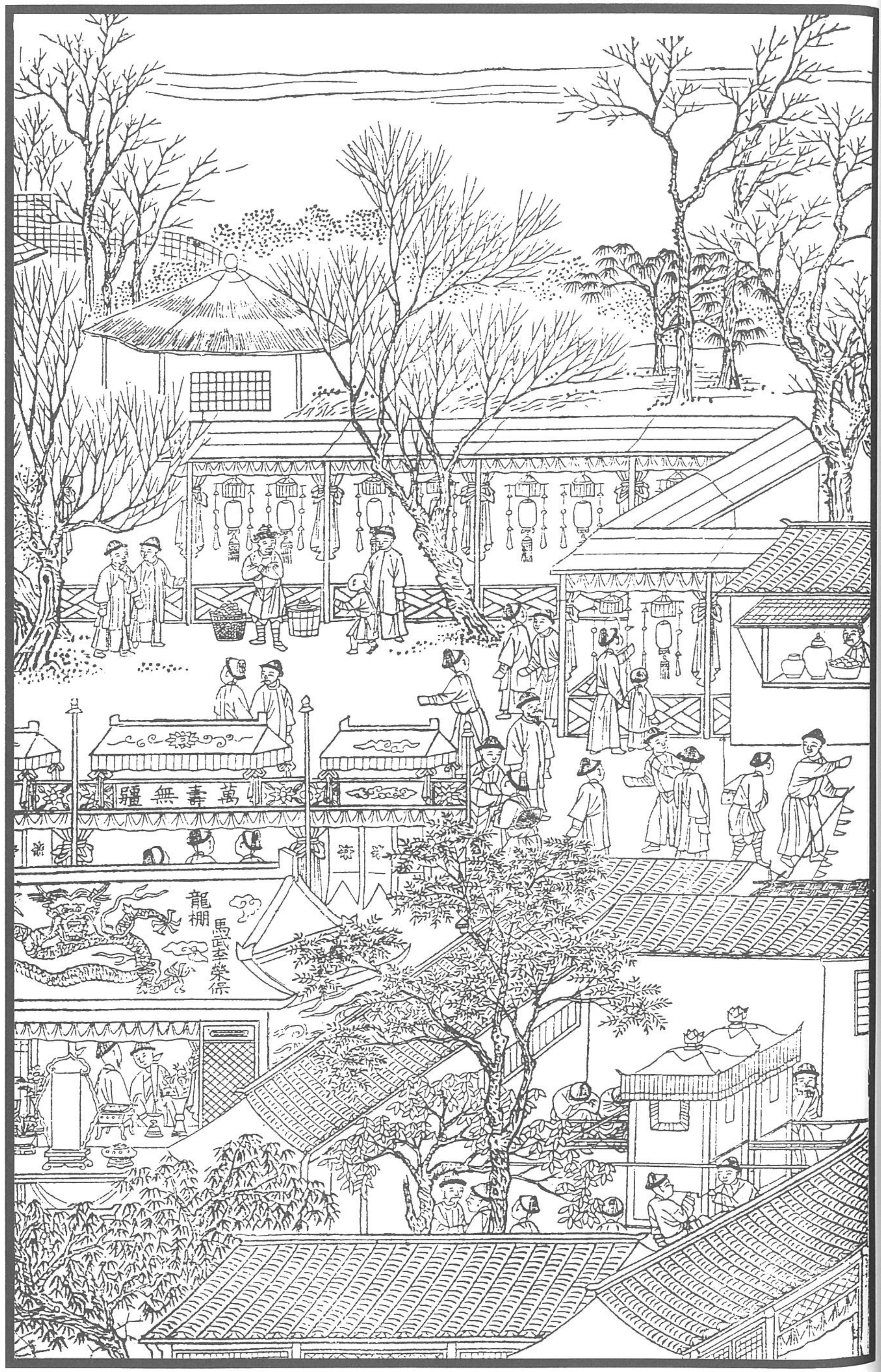




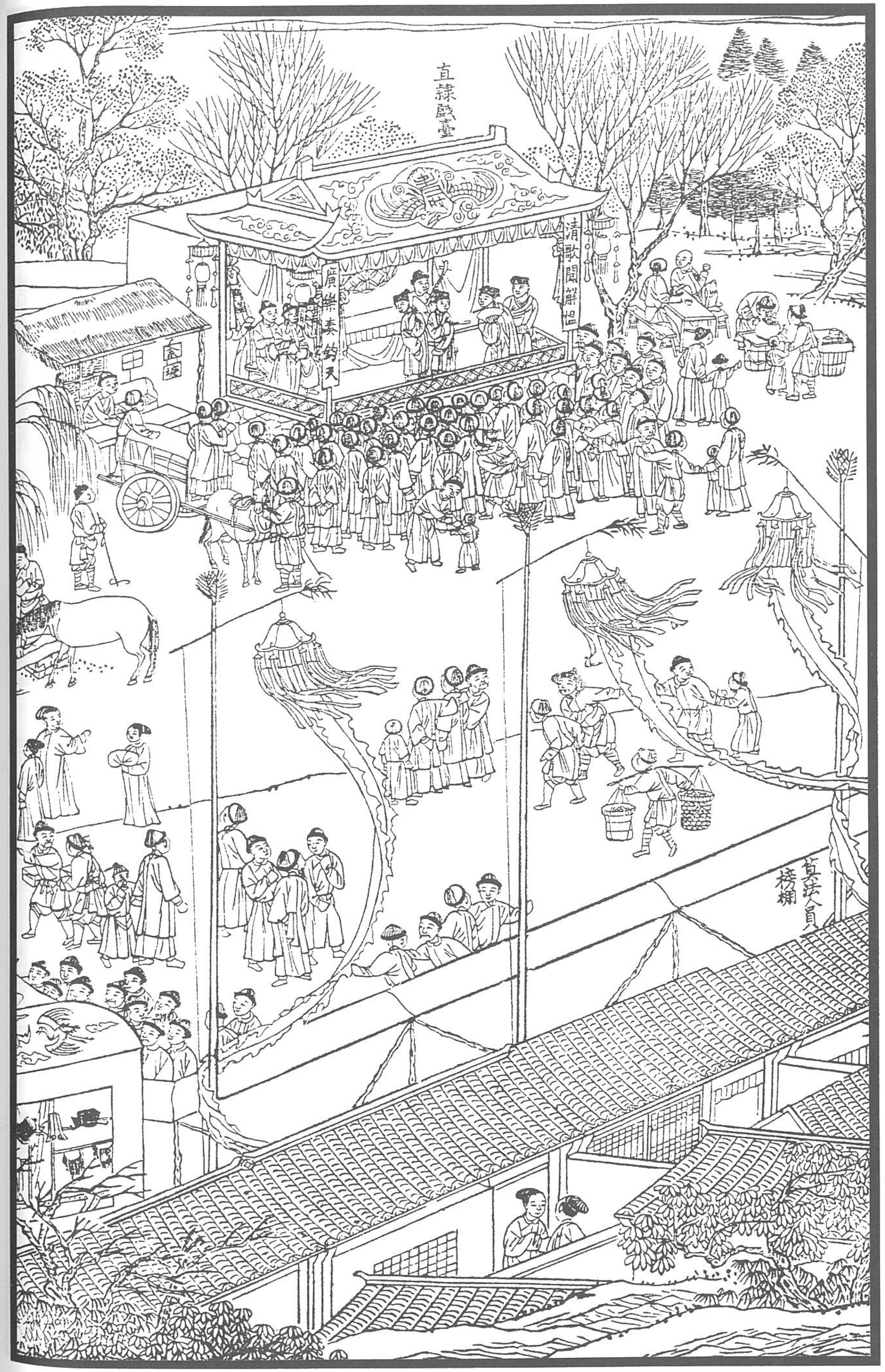

關帝廟

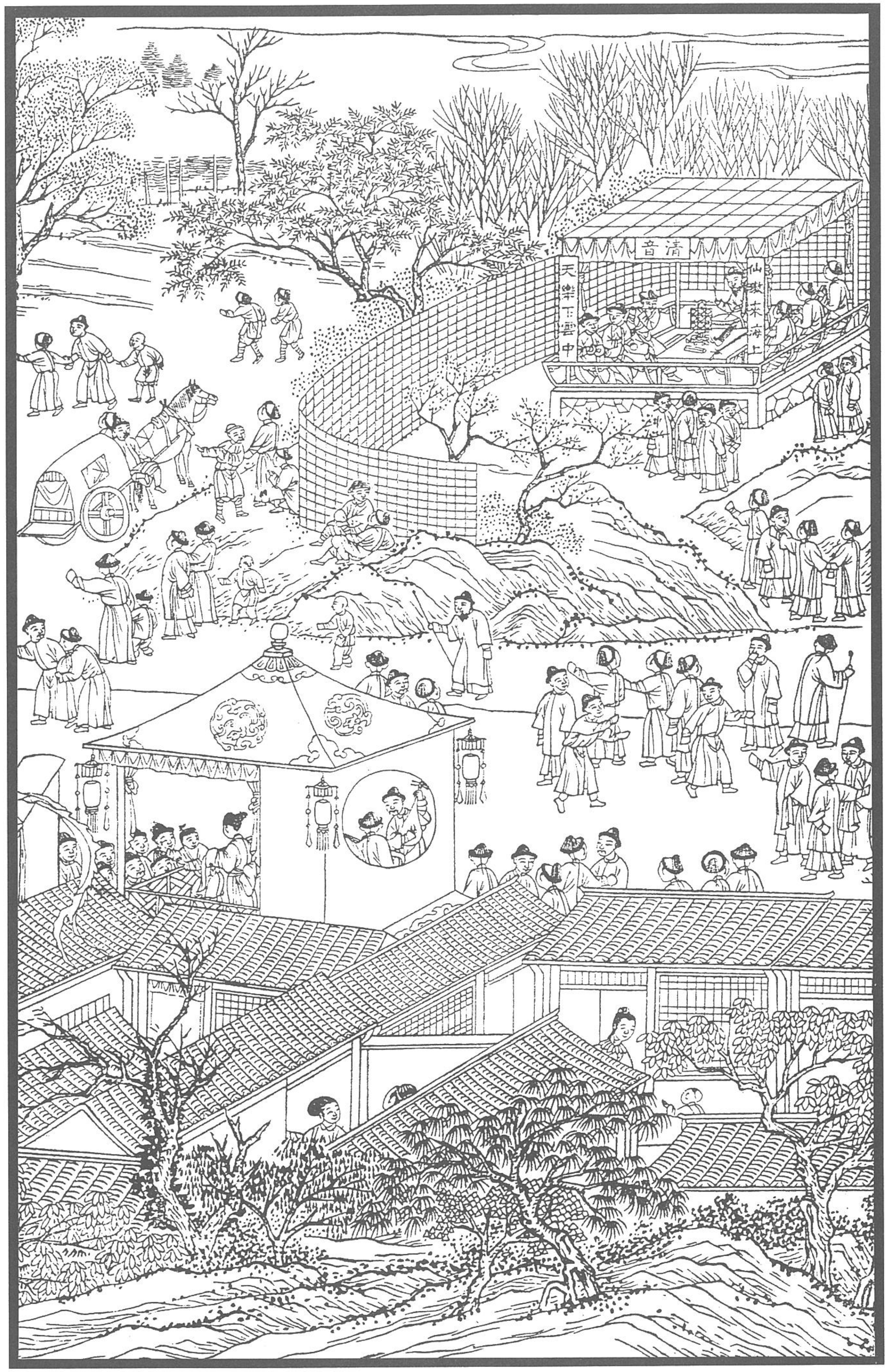

社

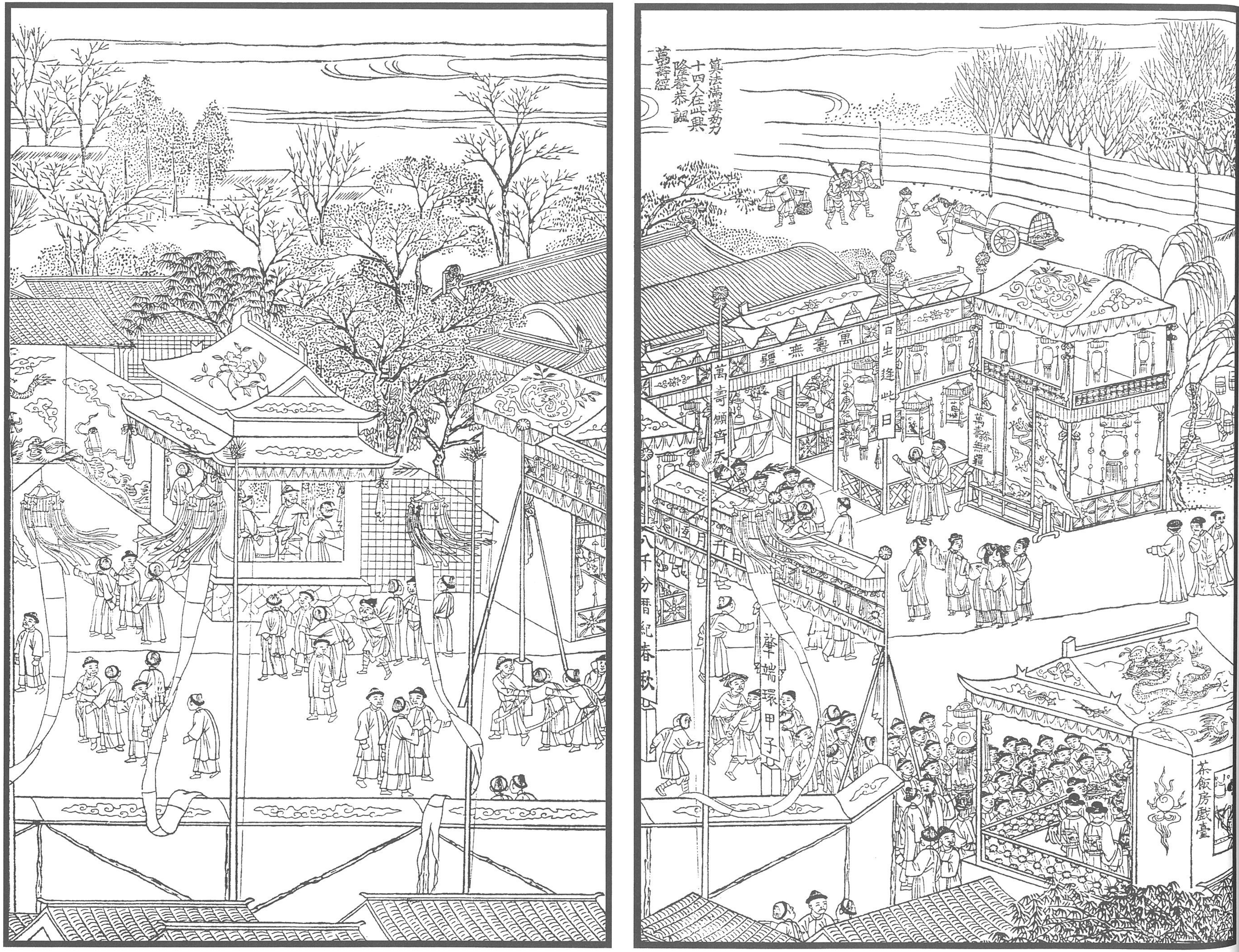




このあたり人家が建て込み、店も多い。道には、四、五人乗りの馬車が行く。関帝廟の裏側は開け放たれ、内側に描かれている「韋駄天」が外から伺える。


直隸戲臺
清歌聞解愠
廣樂奏鈞天
直隸人員


清音
天樂下雲中



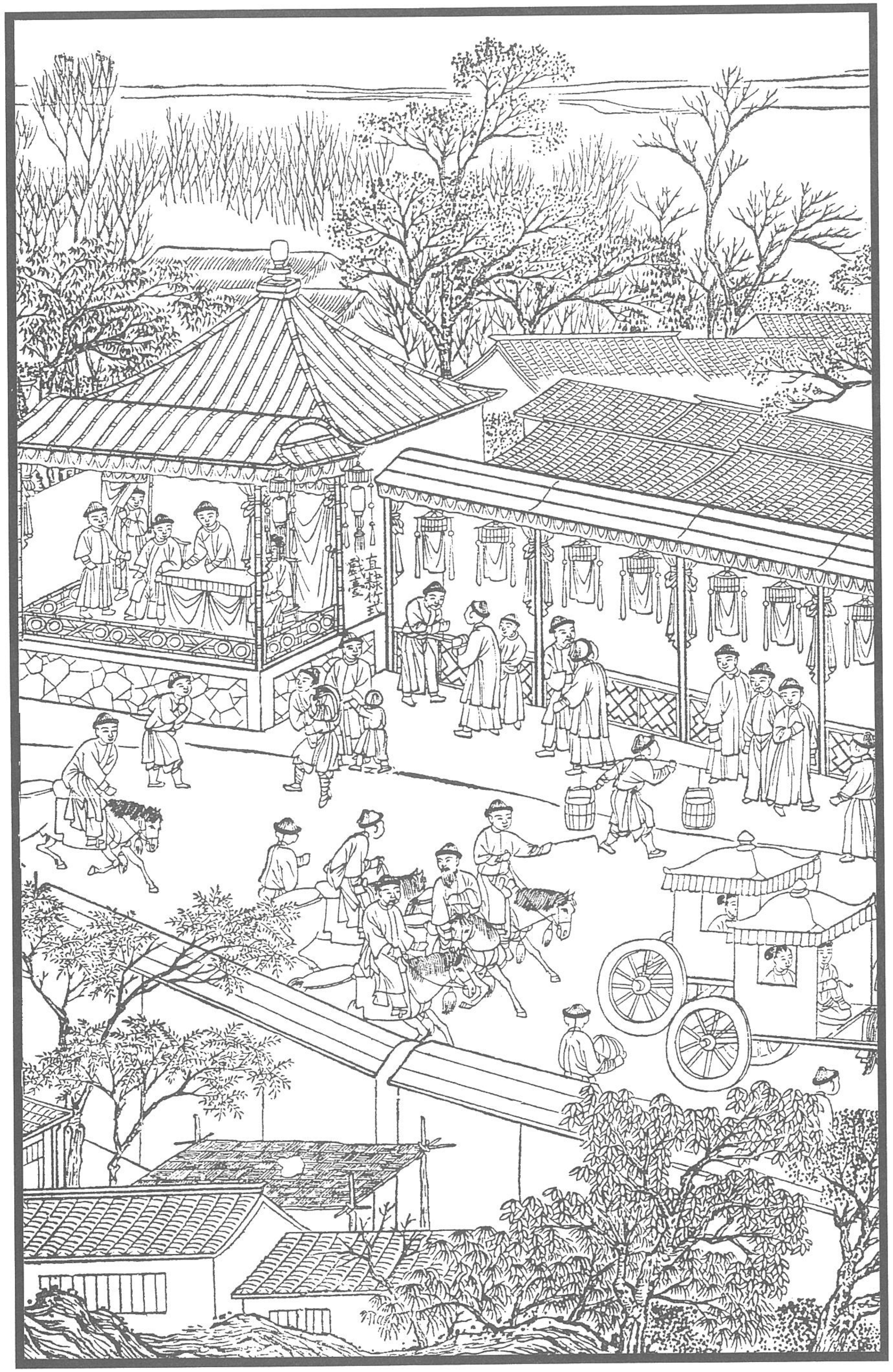
門前に五人の婦人が立っている庵は「興隆庵」で、建物の前に絹製の屋台を「コ」の字形に作ったさまが手に取るようにわかる。ここでも「萬寿経」を唱えていた。

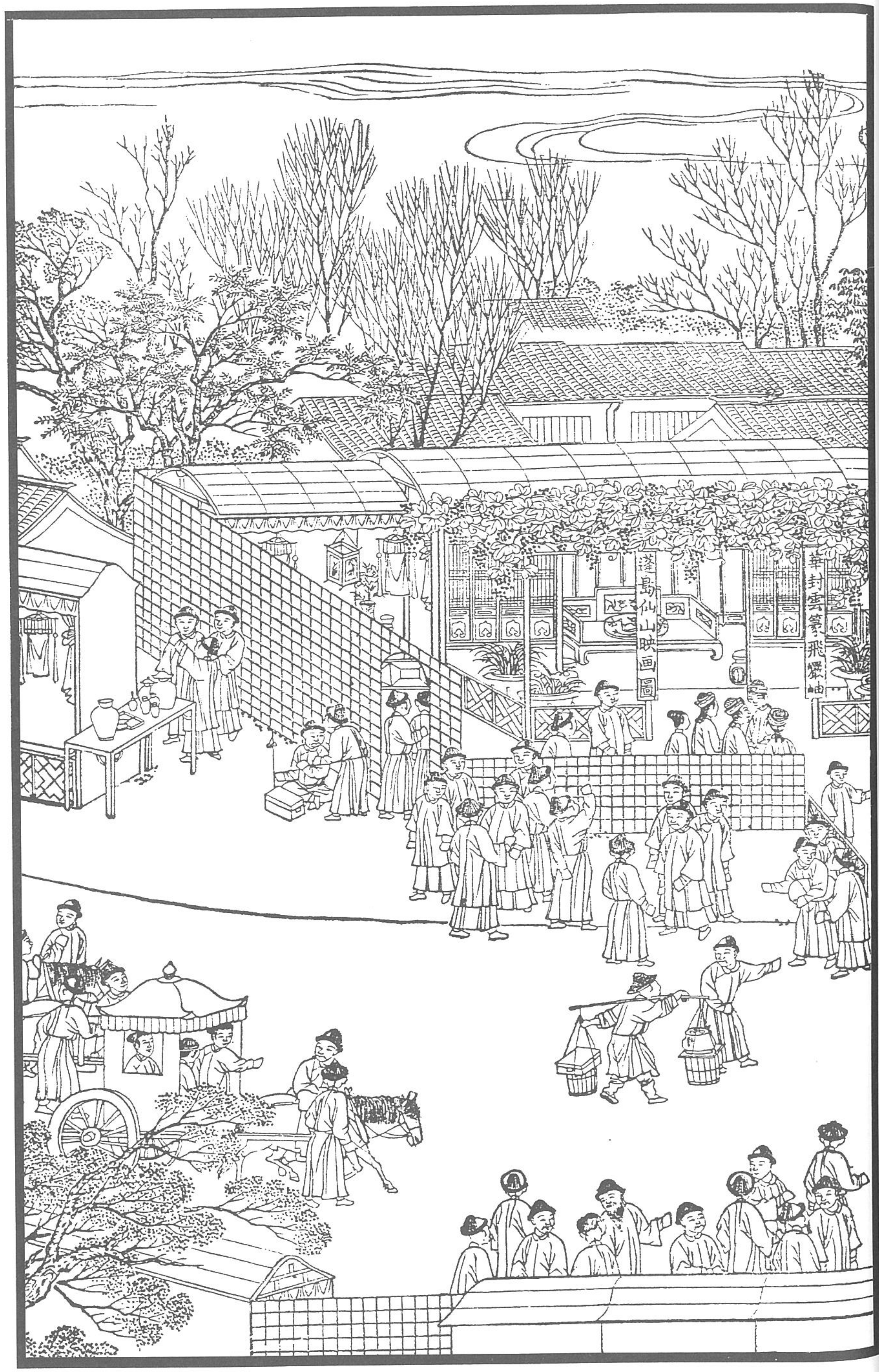


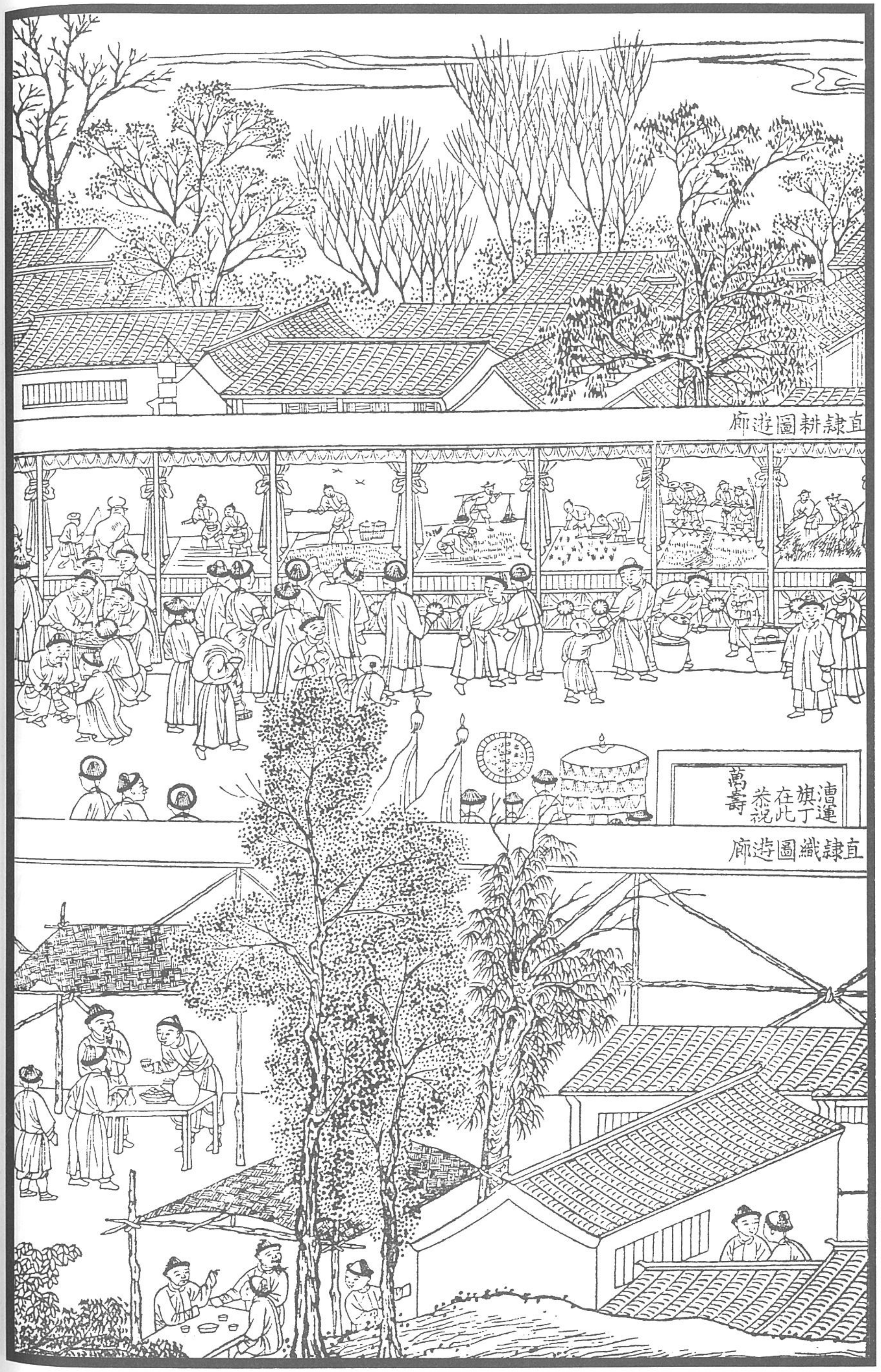

茶飯房官員人等在此關帝廟恭誦萬壽經
壽齊天地
宇宙長春共獻南山壽酒
西池
鸞翔鳳翥
五十二年安樂歲

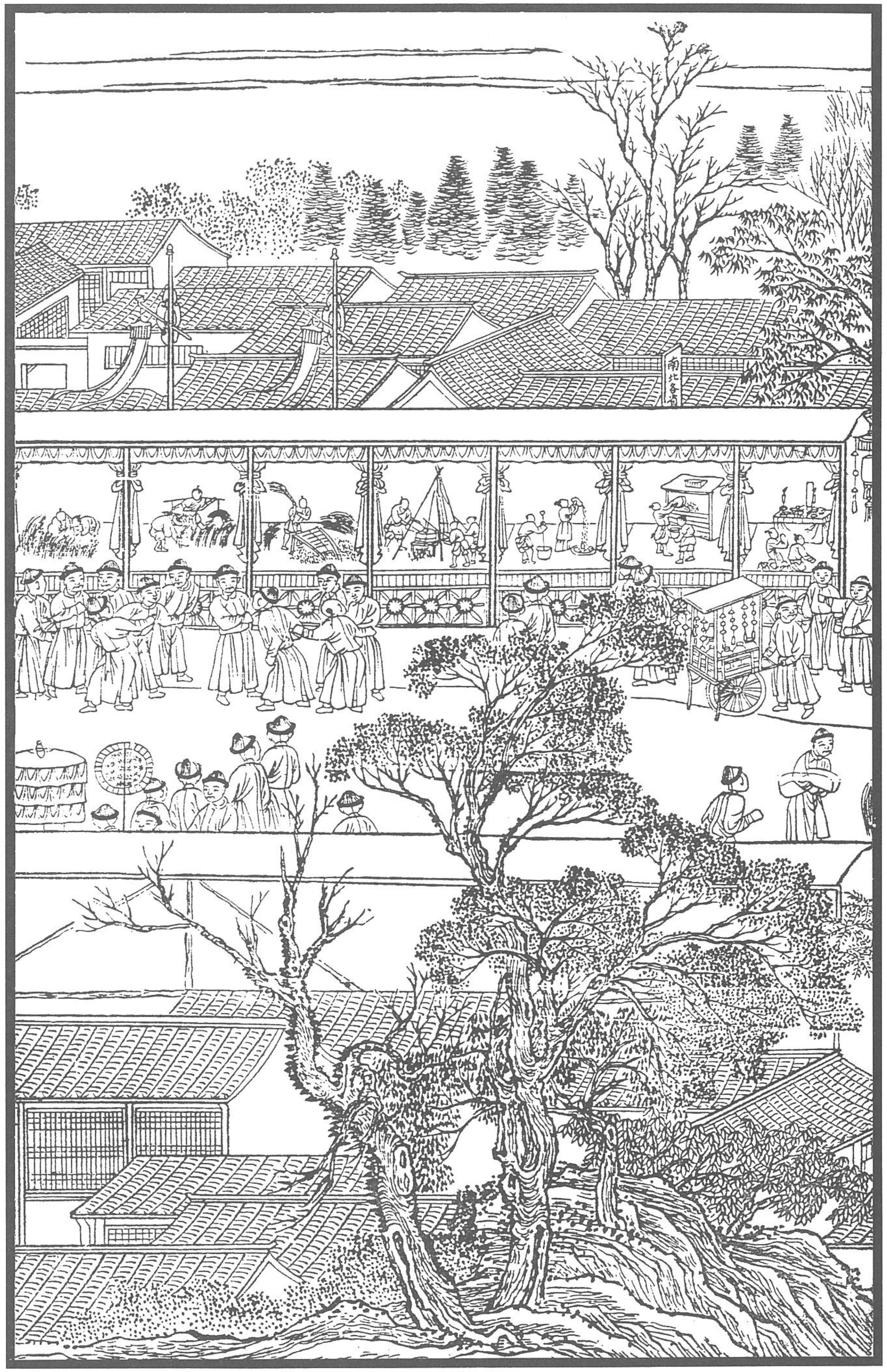
ここの「関帝廟」では「茶飯房」の官員が集まって「萬寿経」を唱えたとある。「茶飯房」は故宮の機構の名称である。

左手には「直隷竹式戯台」とあり、確かに見たところ竹製の戯台なのであろう。



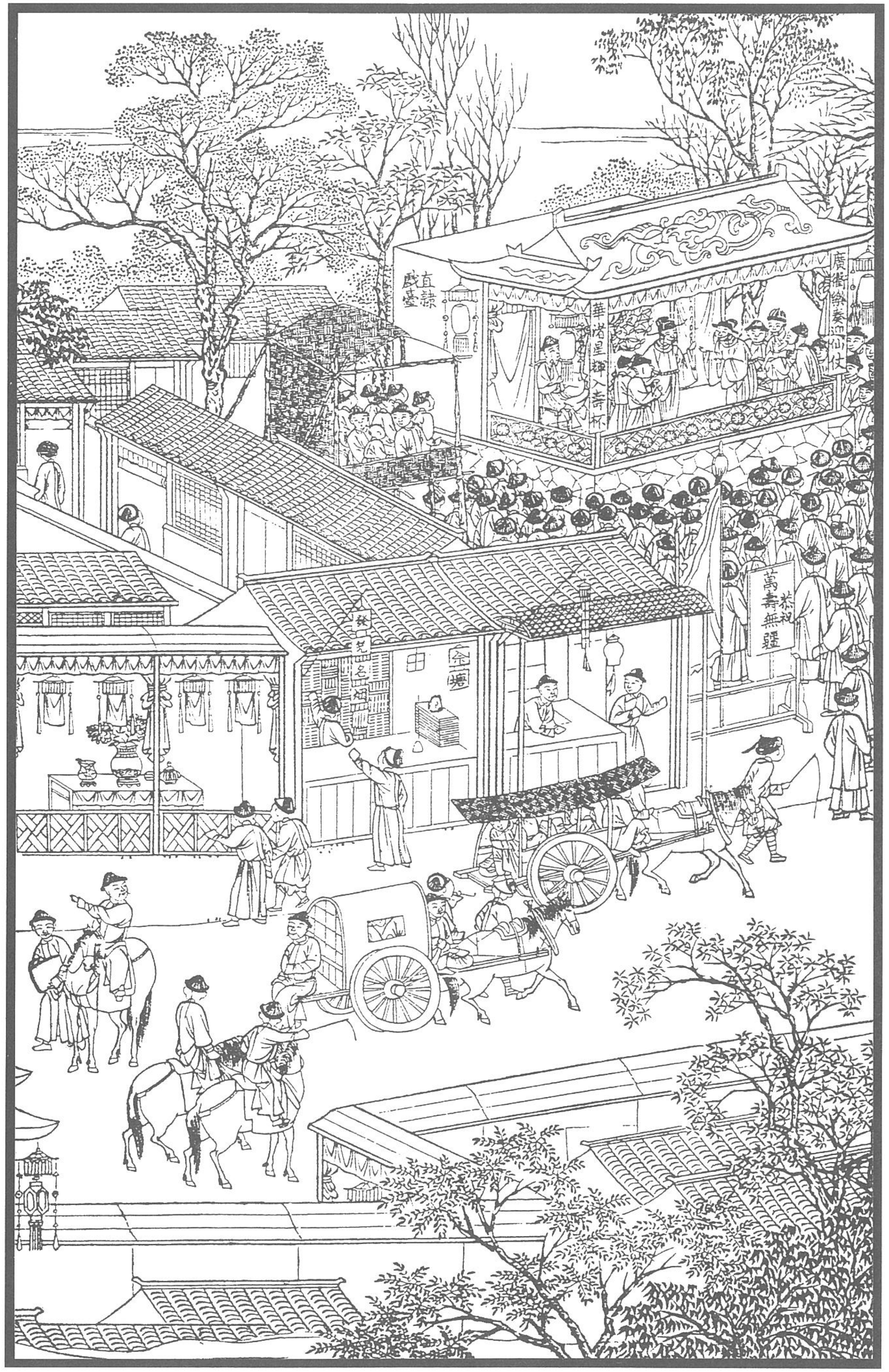


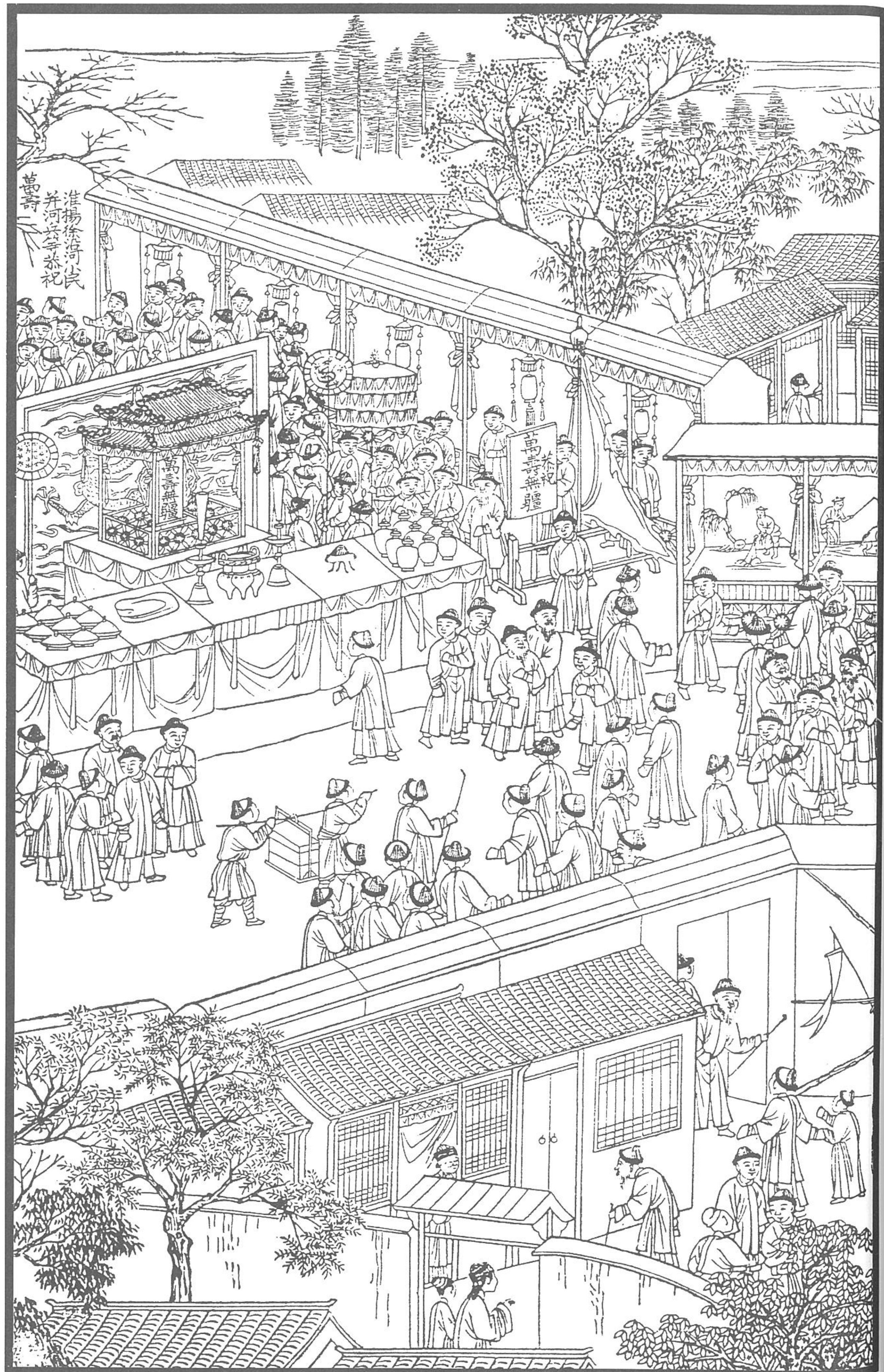

直隸耕圖遊廊
漕運旗丁在此茶祝萬壽
直隸織圖遊廊

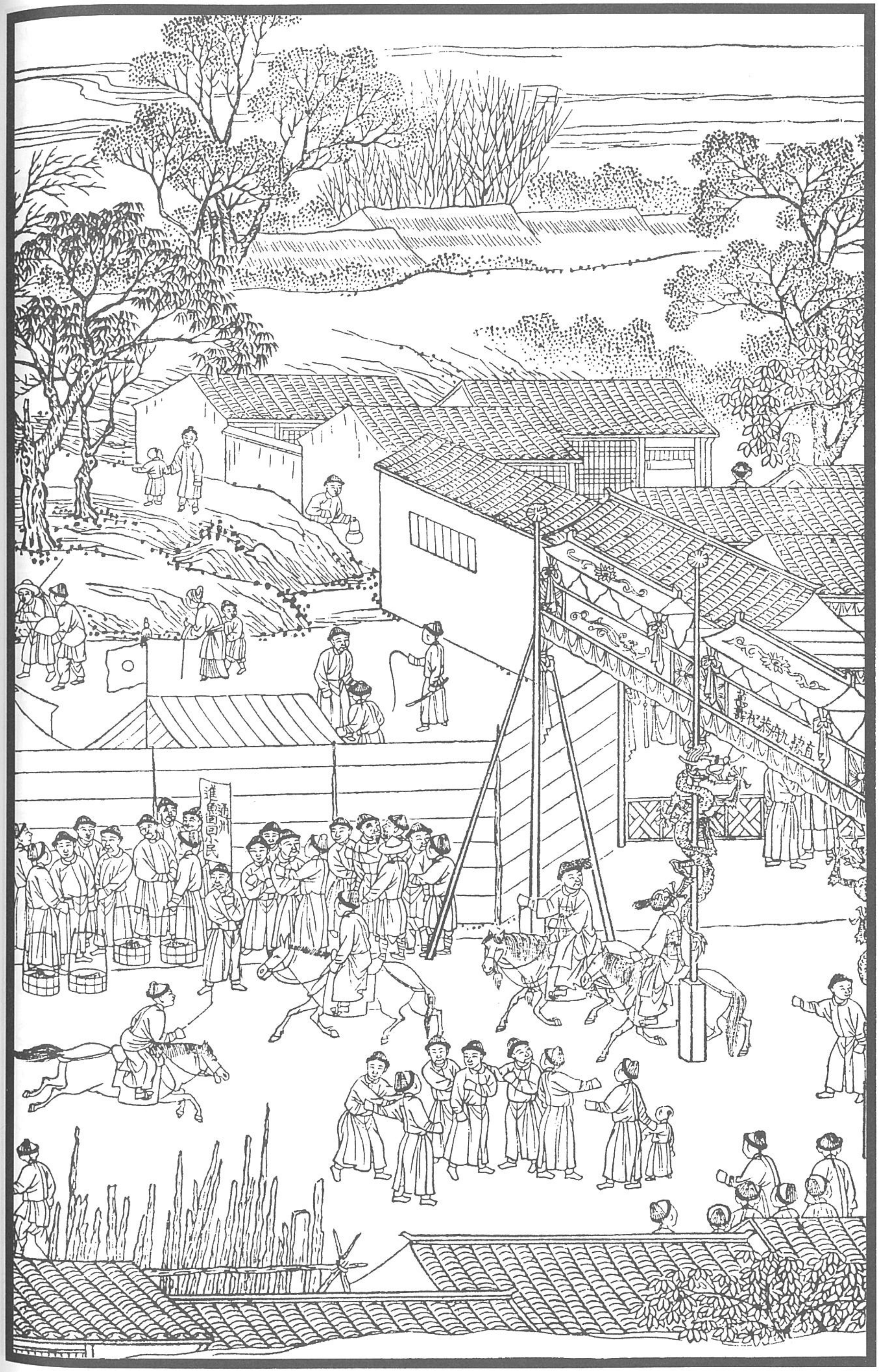

南北备

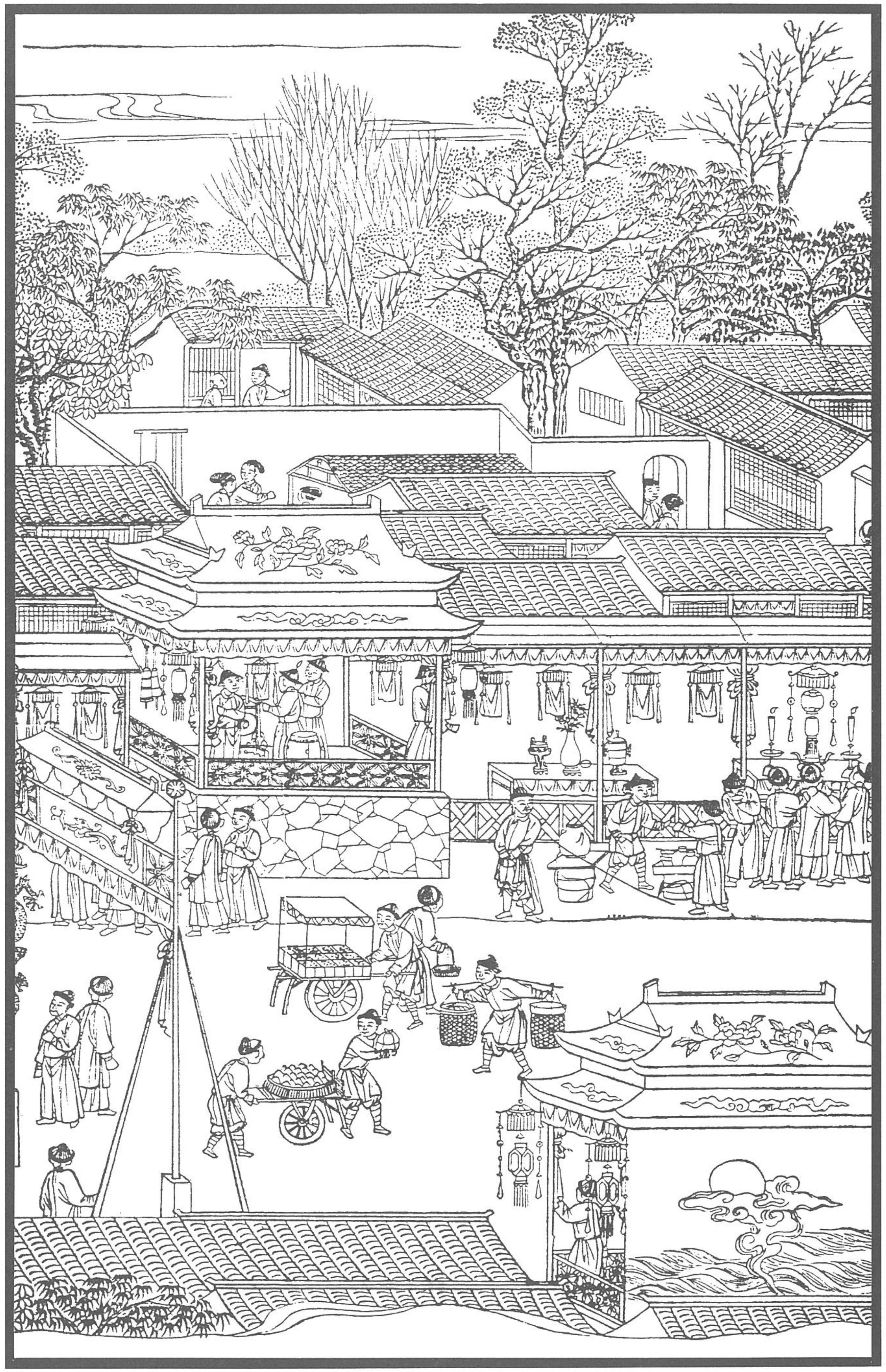
ここの「遊廊」は、向かい側を「耕」こちら側を「織」すなわち、両側に「耕織図」を小型の模型にして展覧するという極めて凝った造作になっている。
康熙三十五年（一六九六）に康熙帝が刊行させた「耕織図」が民間にも大いに流布していたことの証拠であり、またそれを模型にして皇帝に天覧していただこうという配慮が首都北京の地元である「直隷」らしさをにじませている。

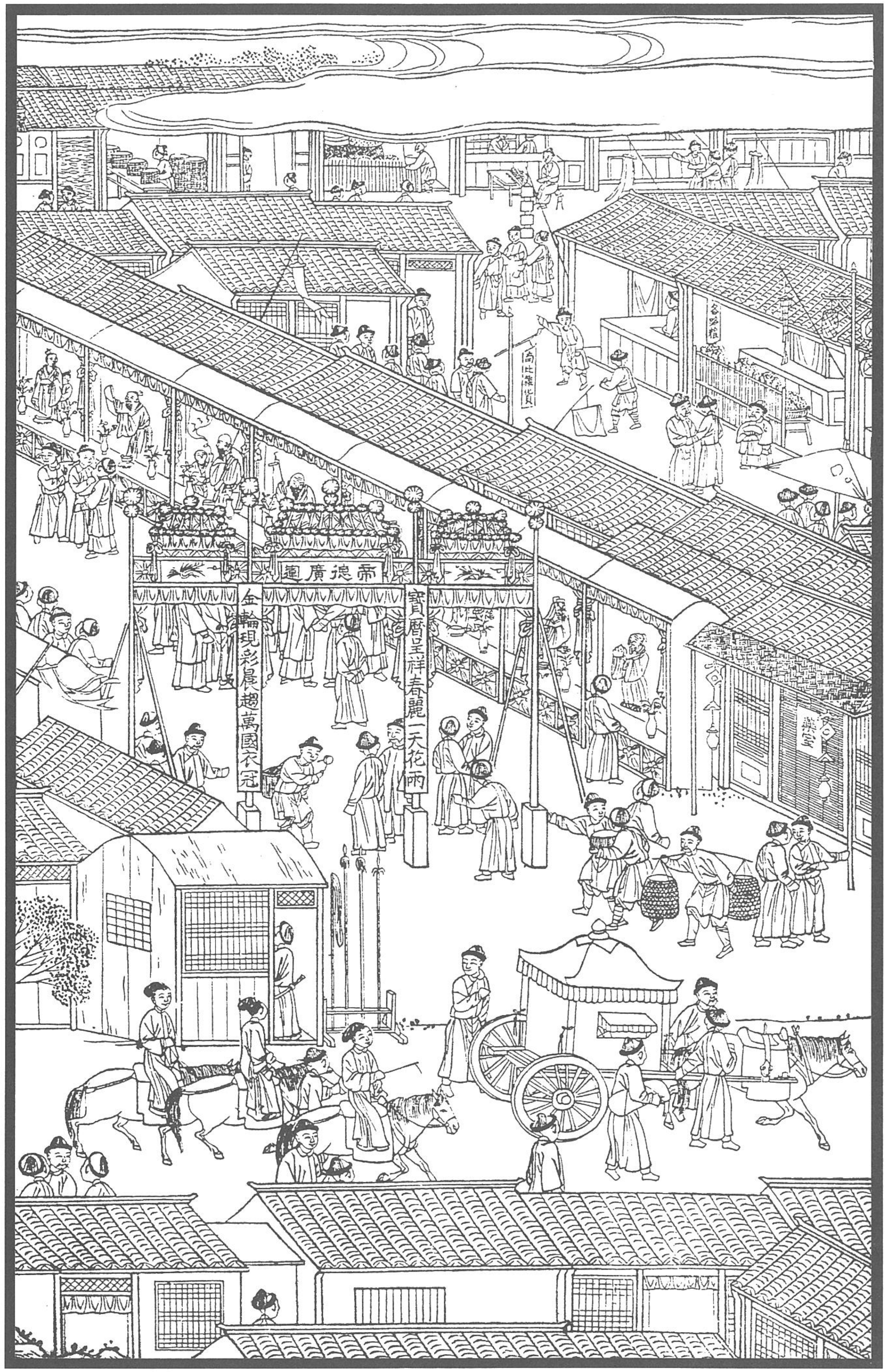
こちら側は裏になって伺うことはできないが、向かいの「耕」は正確に十六図を配して模型が創作されている。

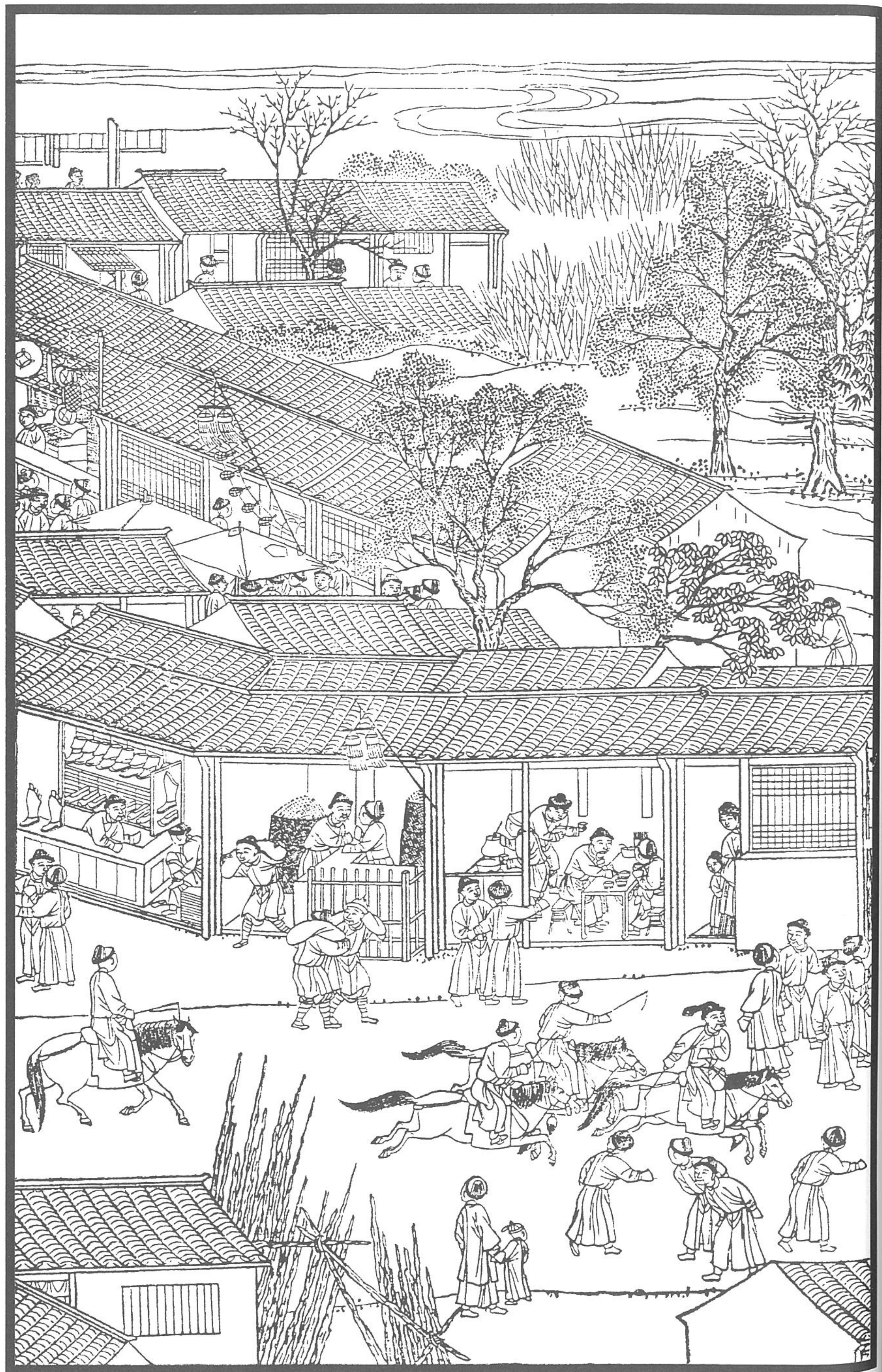




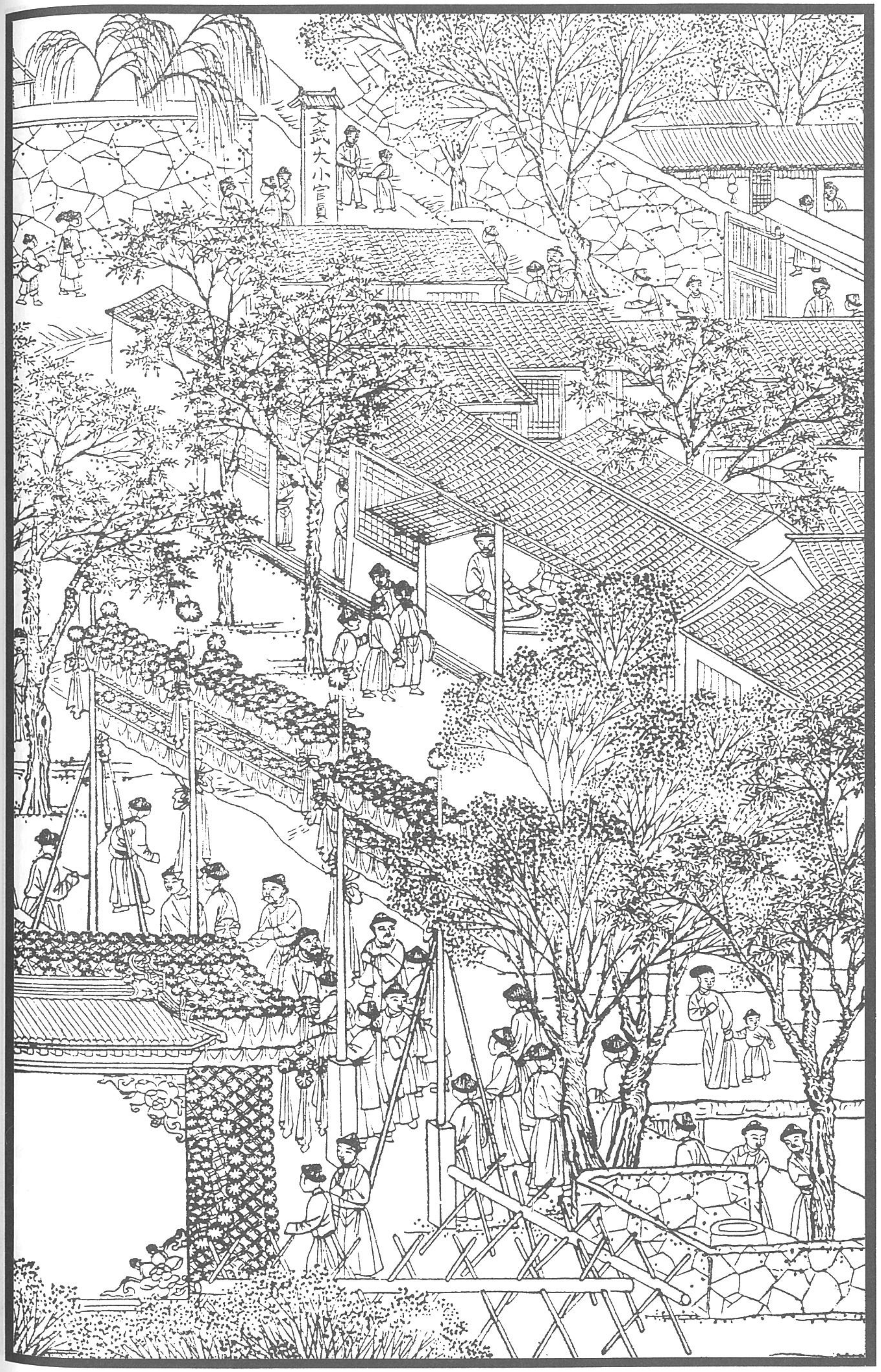

通州

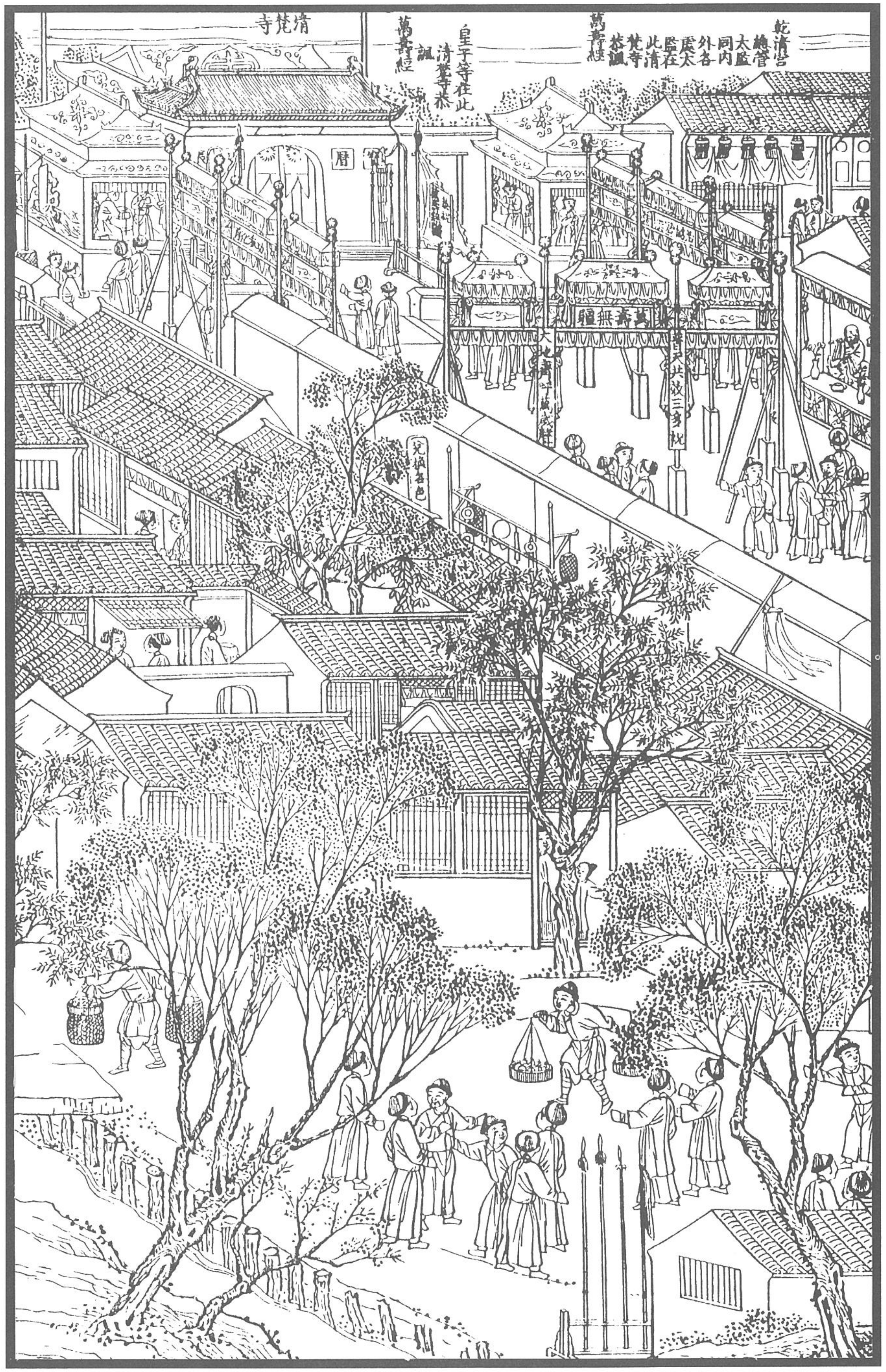




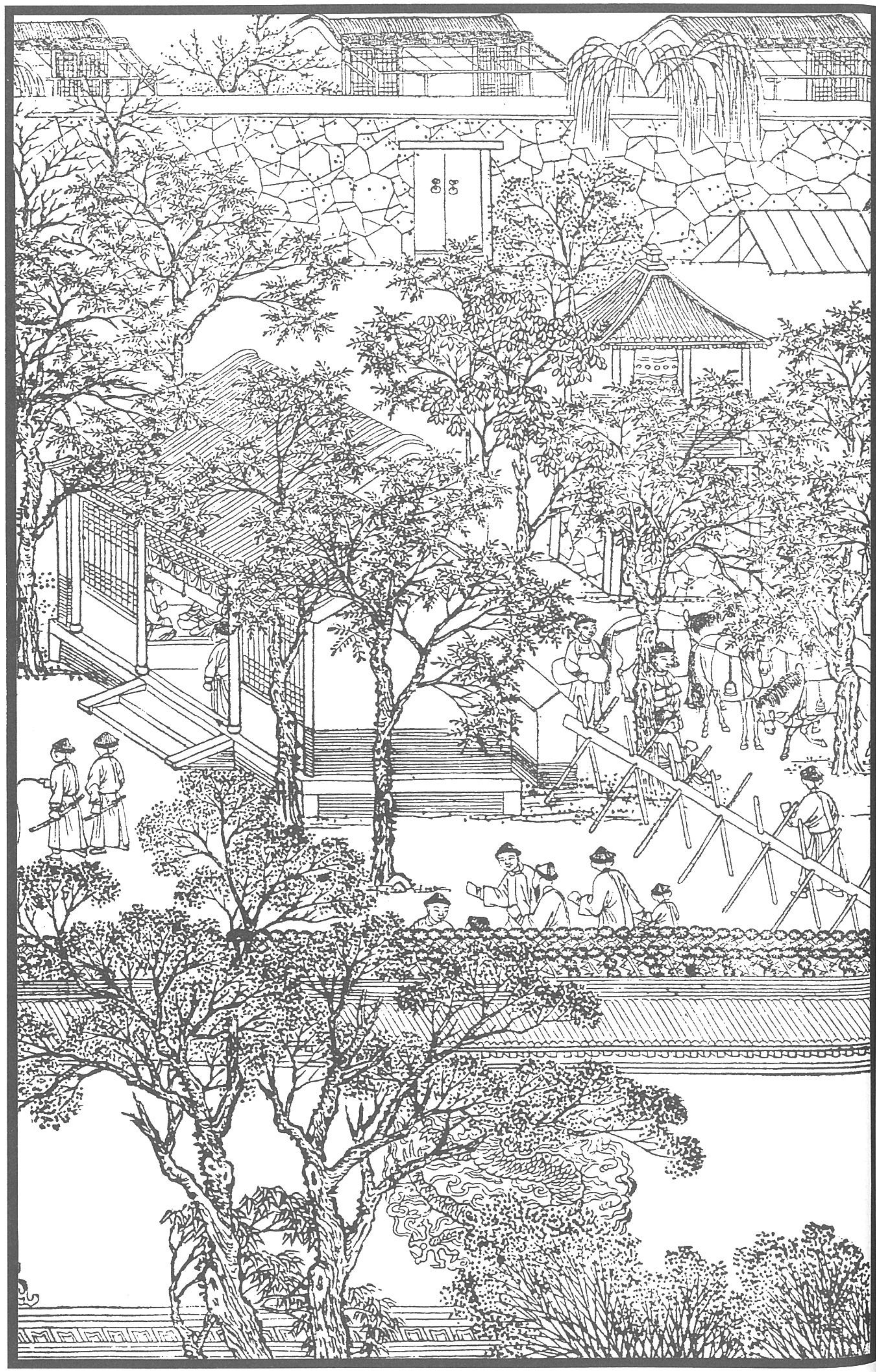


まもなく離宮の暢春園に至る。中央には「通州」の「回回小民」がいて桶の中に、魚を献上している。
漢族以外にもこの鹵簿を参観した「回族」が居たわけである。


文武大小官員

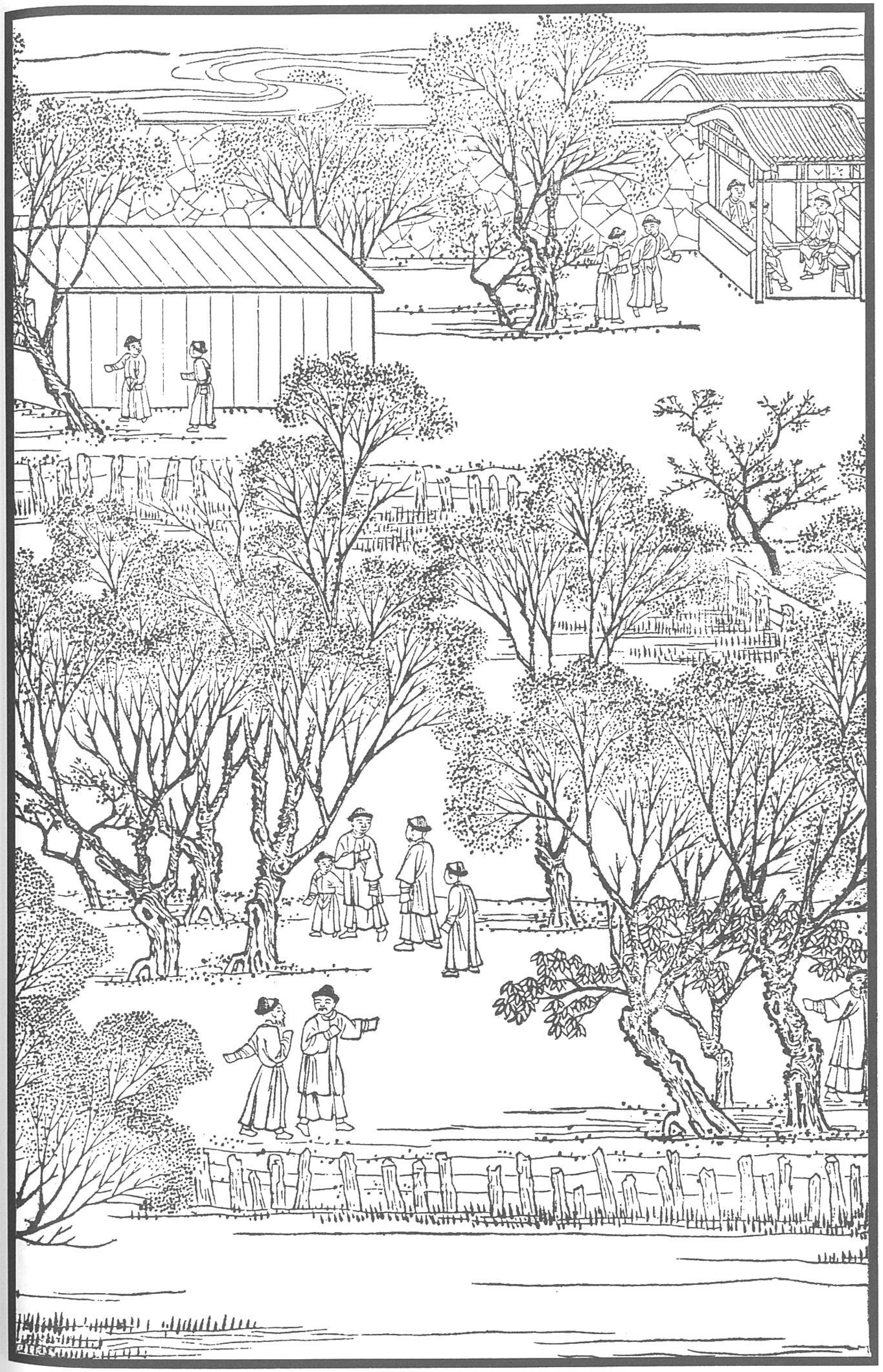

清梵寺
皇子等在此清梵寺恭誦萬壽經
乾清宮總管太監同內外各處太監在此清梵寺恭誦萬壽經
萬壽無疆

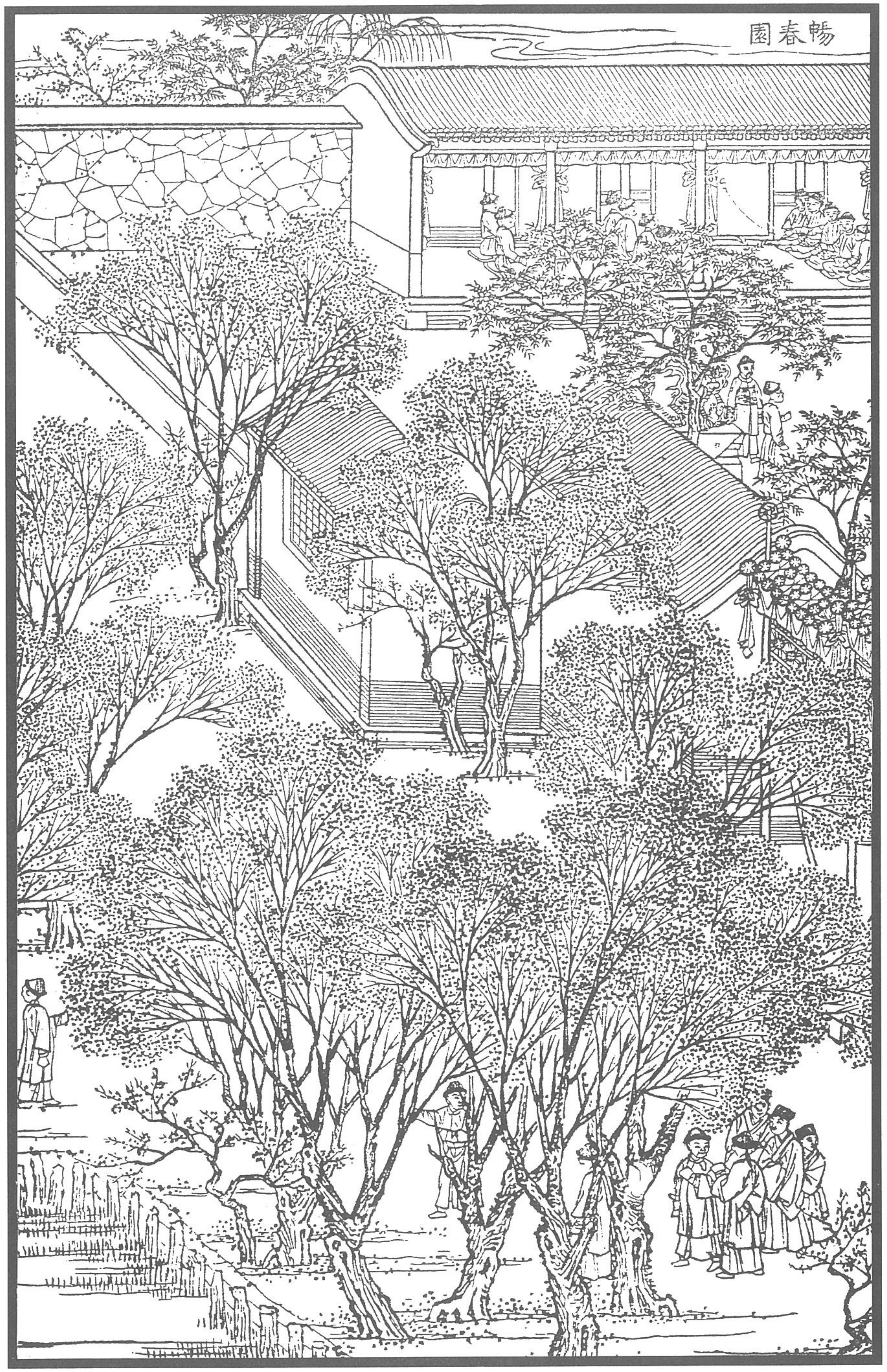


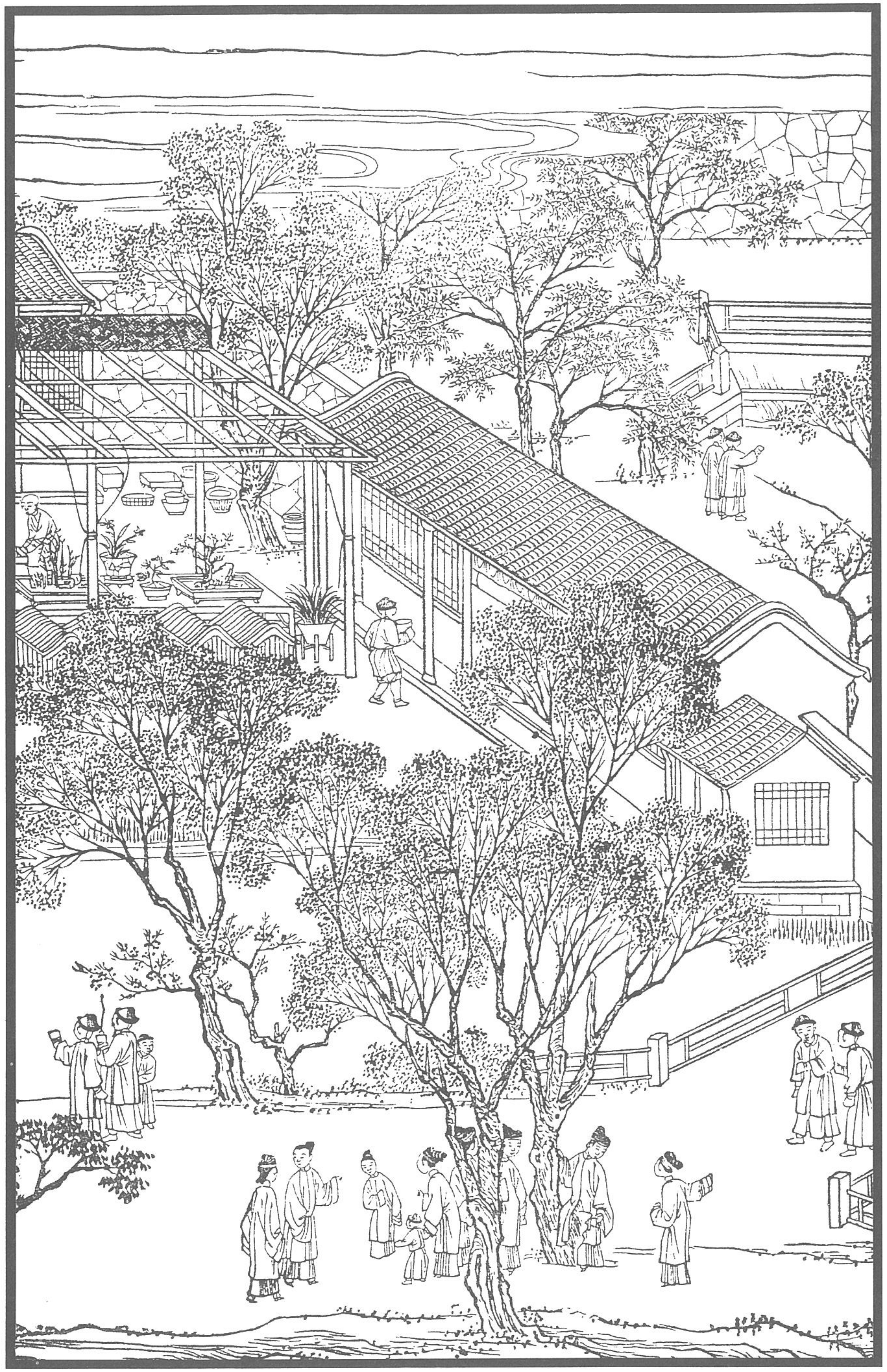


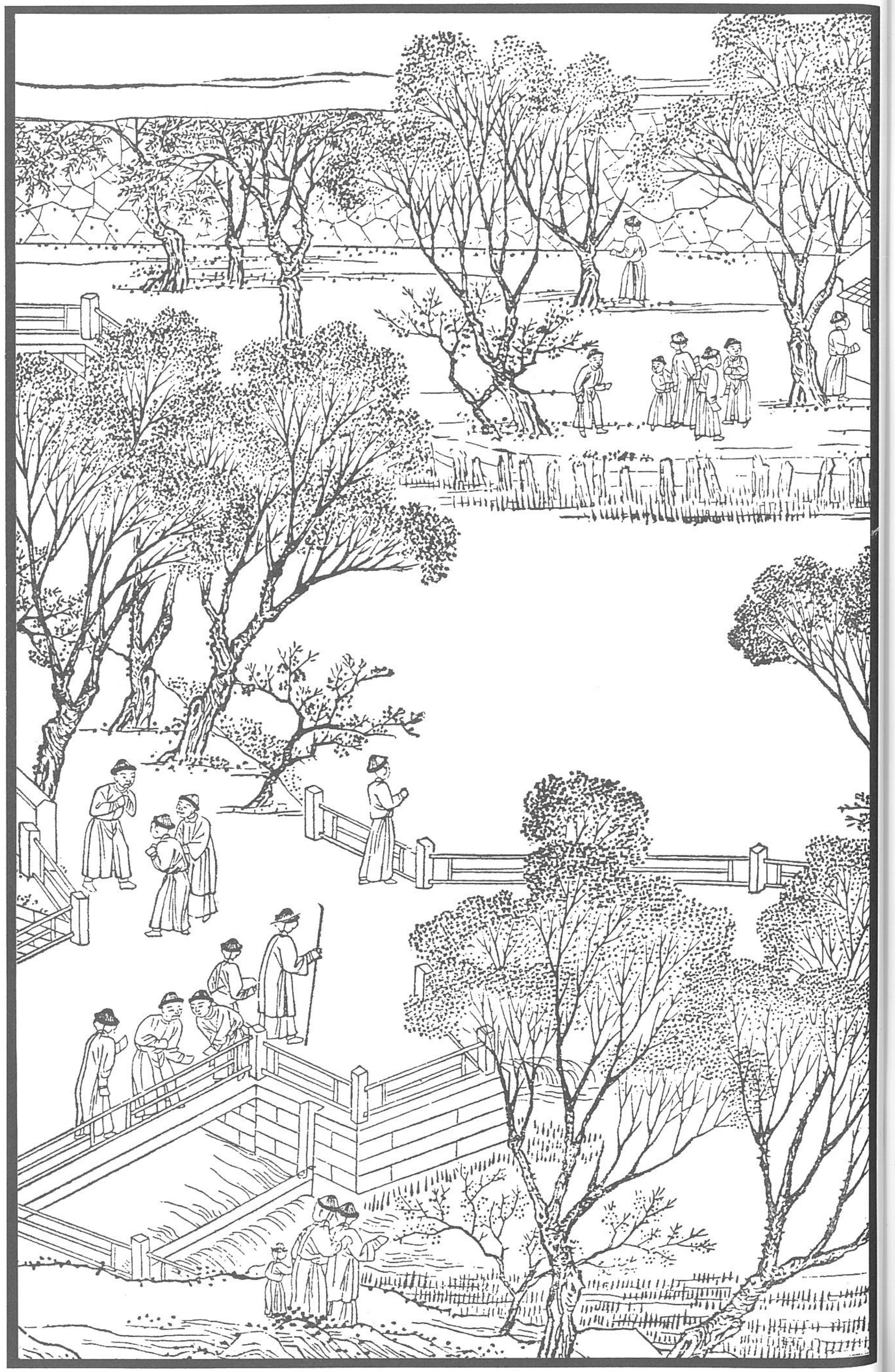
立て込んでいる家々は「清梵寺」の門前としての賑わいであろうか。参道の両側には、九種類の人物像を飾りつけている。

この寺では故宮の「乾清宮」の宦官や皇子らが「萬寿経」を唱えていた。

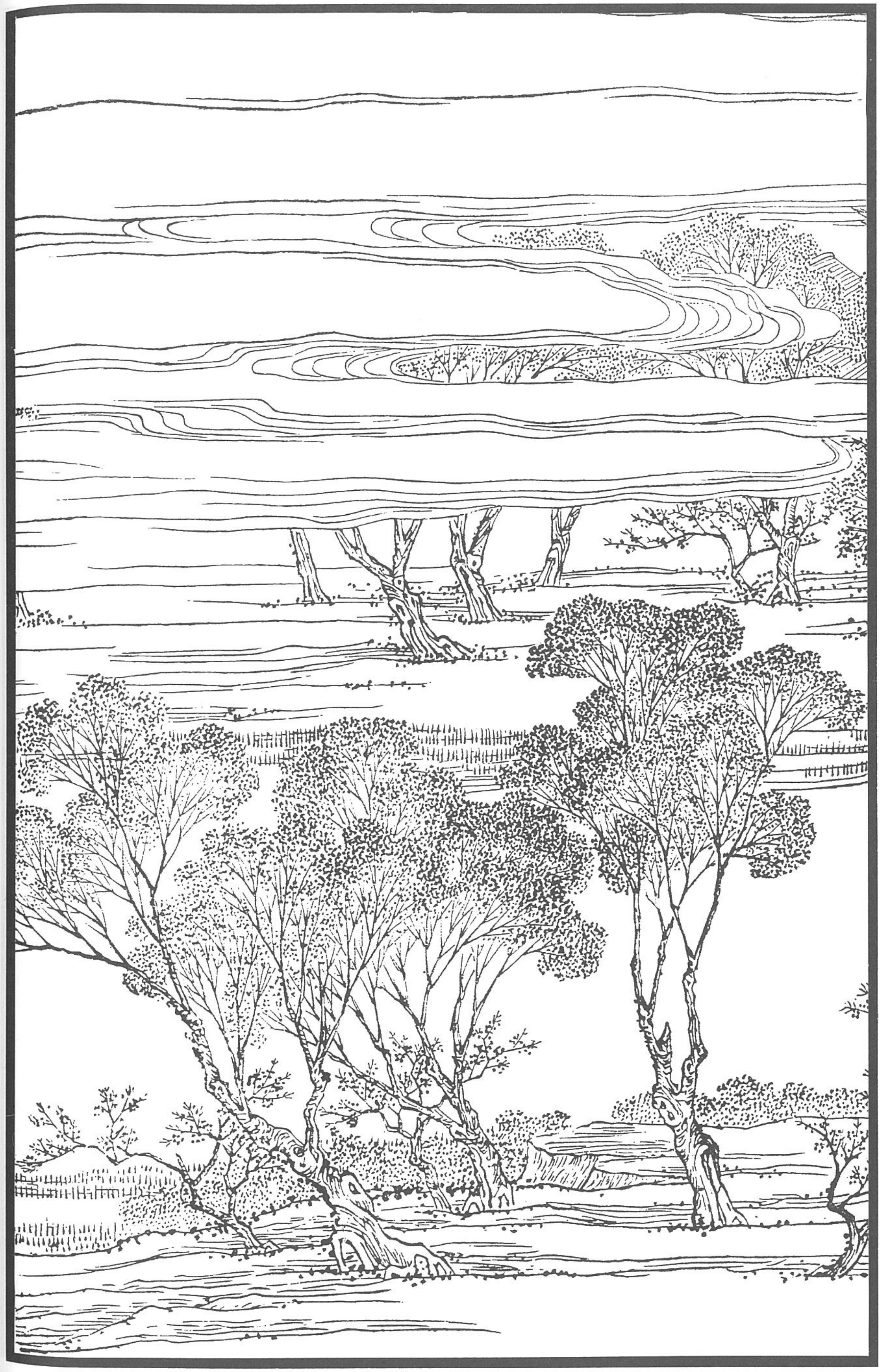


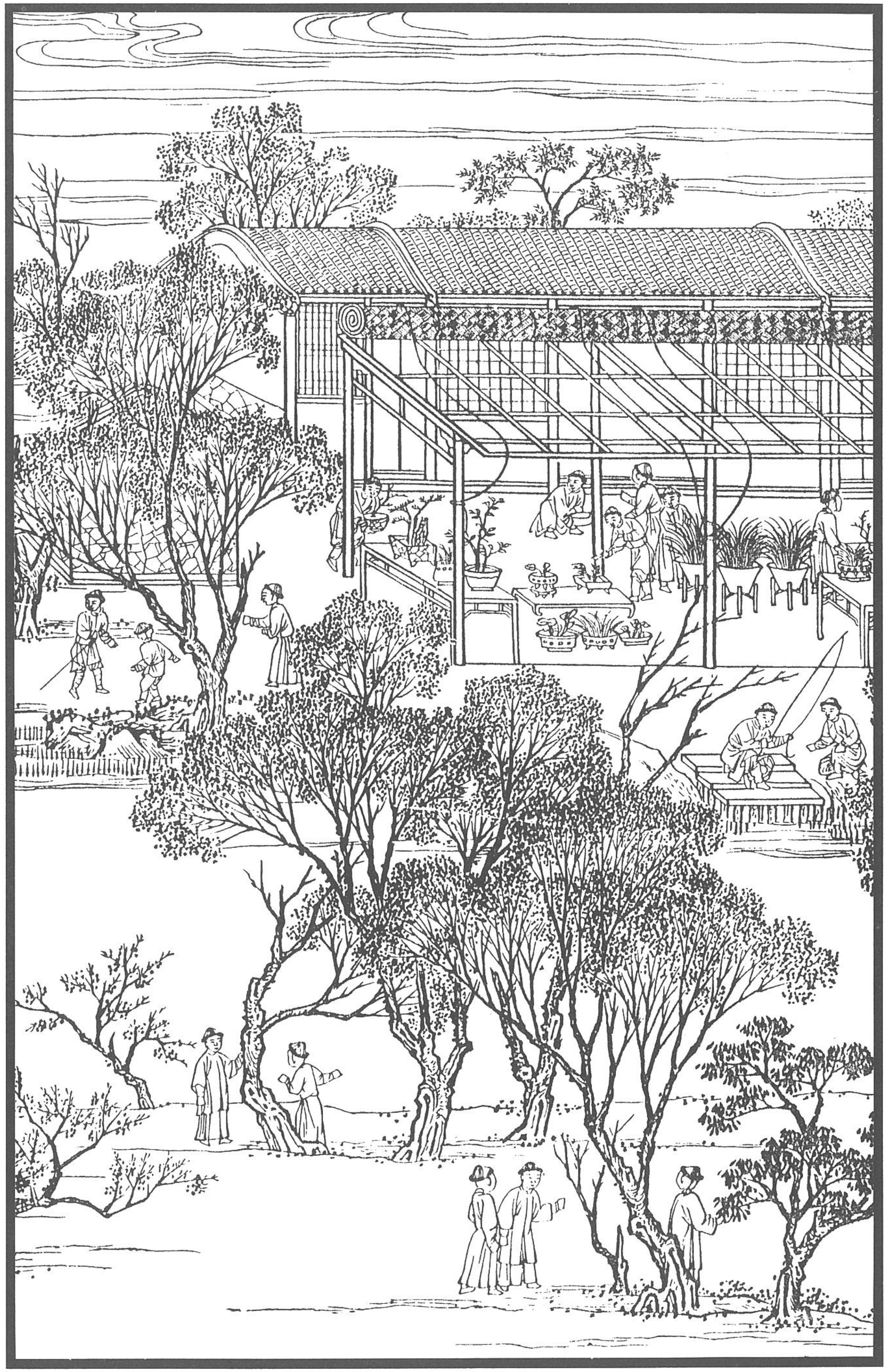

暢春園





一対の獅子が並んだ暢春園の入口が見える。康熙帝はここで一年の大半をすごしたといわれる。故宮には数か月をすごすだけで、ここに生活の大半をおいたという。

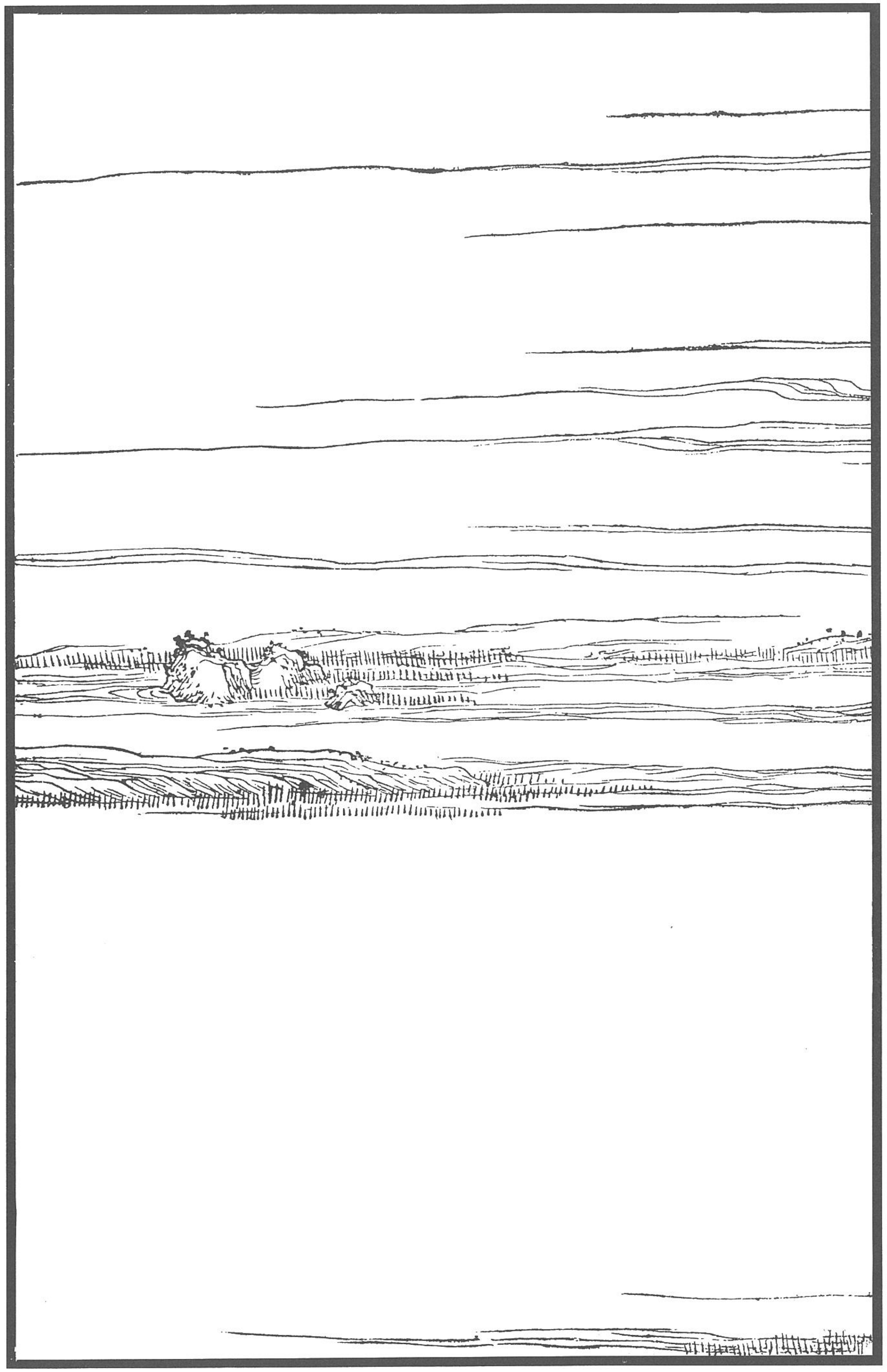


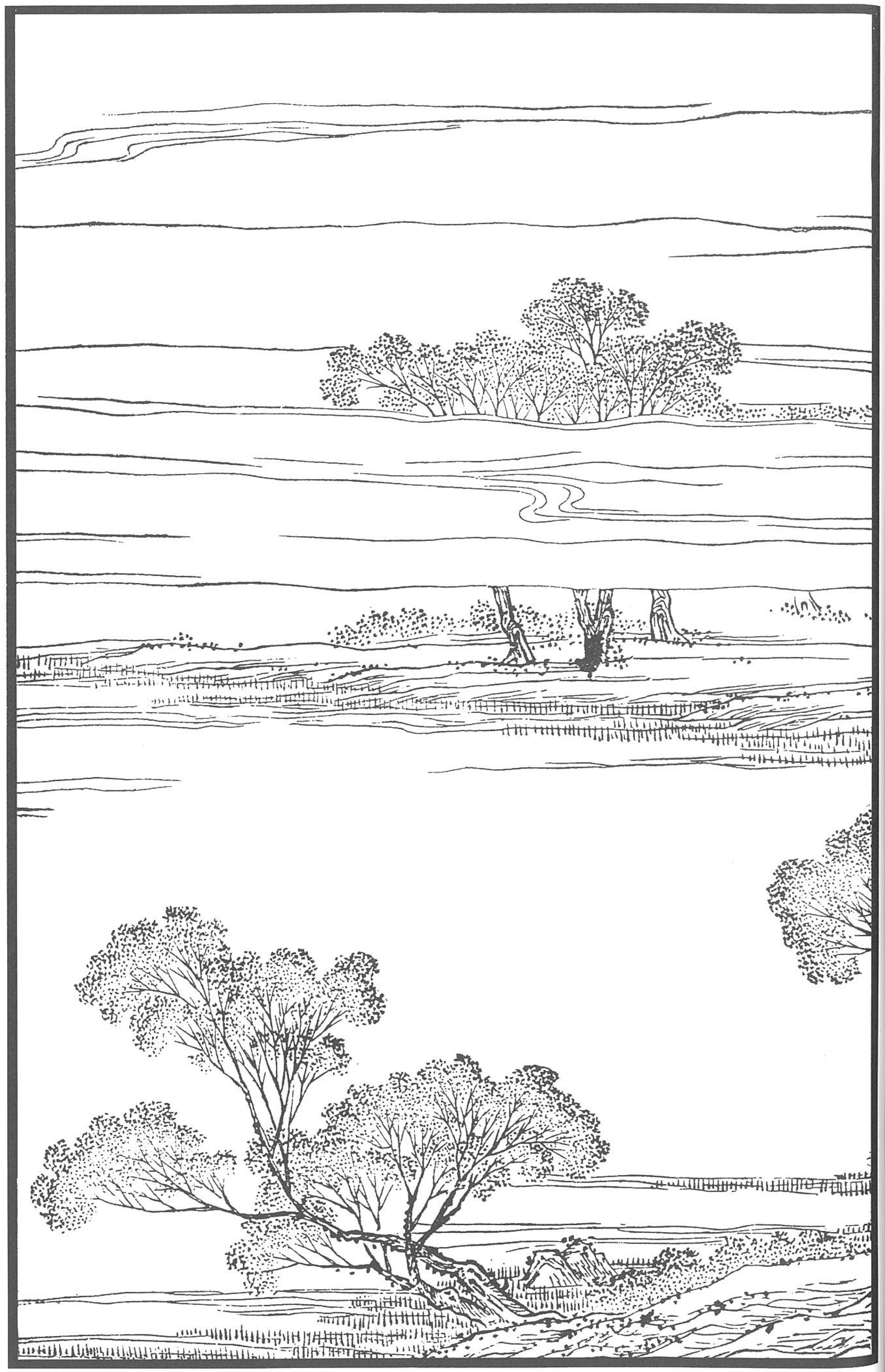


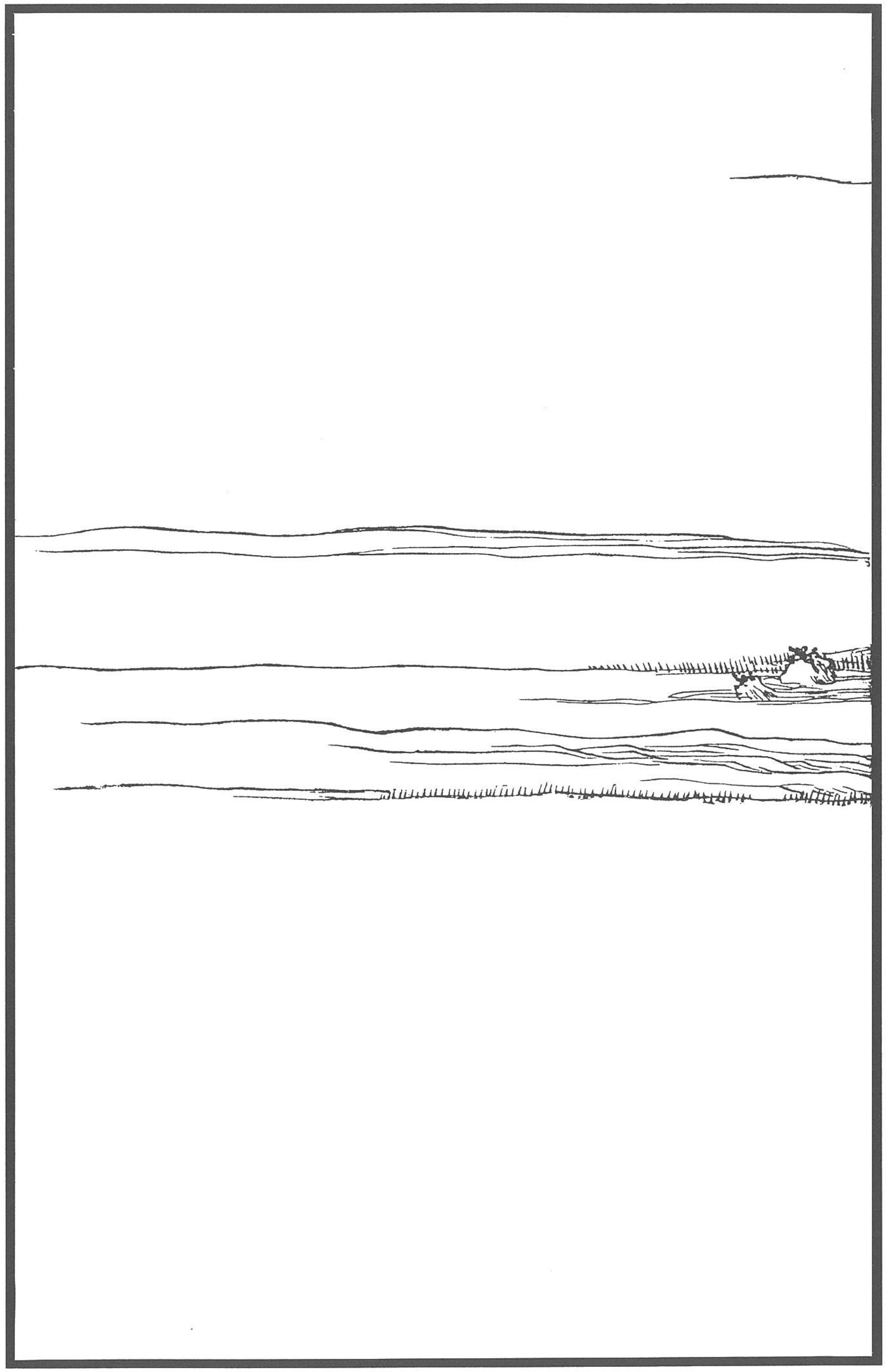
この付近に円明園が設営されるのは、雍正年間(一七二三〜一七三五)以降のことである。

暢春園は康熙年間に建造された皇室初めての園林で、元は明の皇戚李偉の所有していた「李園」であった。ここで康熙帝は「喧騒を避けて政を聴」いたのである。

これに対して円明園は、康熙帝が明代にここにあった庭園を改修後に雍正に賜ったものである。雍正帝は即位後にここを増築し、またしばしばここで朝政を垂れた。以後、乾隆から咸豊年間にかけて次々と新たな建築物を造修し、特に乾隆時代には大規模な西洋庭園が増築され、アロー号事件(第二次アヘン戦争)に伴う略奪(一八六〇年)で破壊されるまで威容を誇っていた。



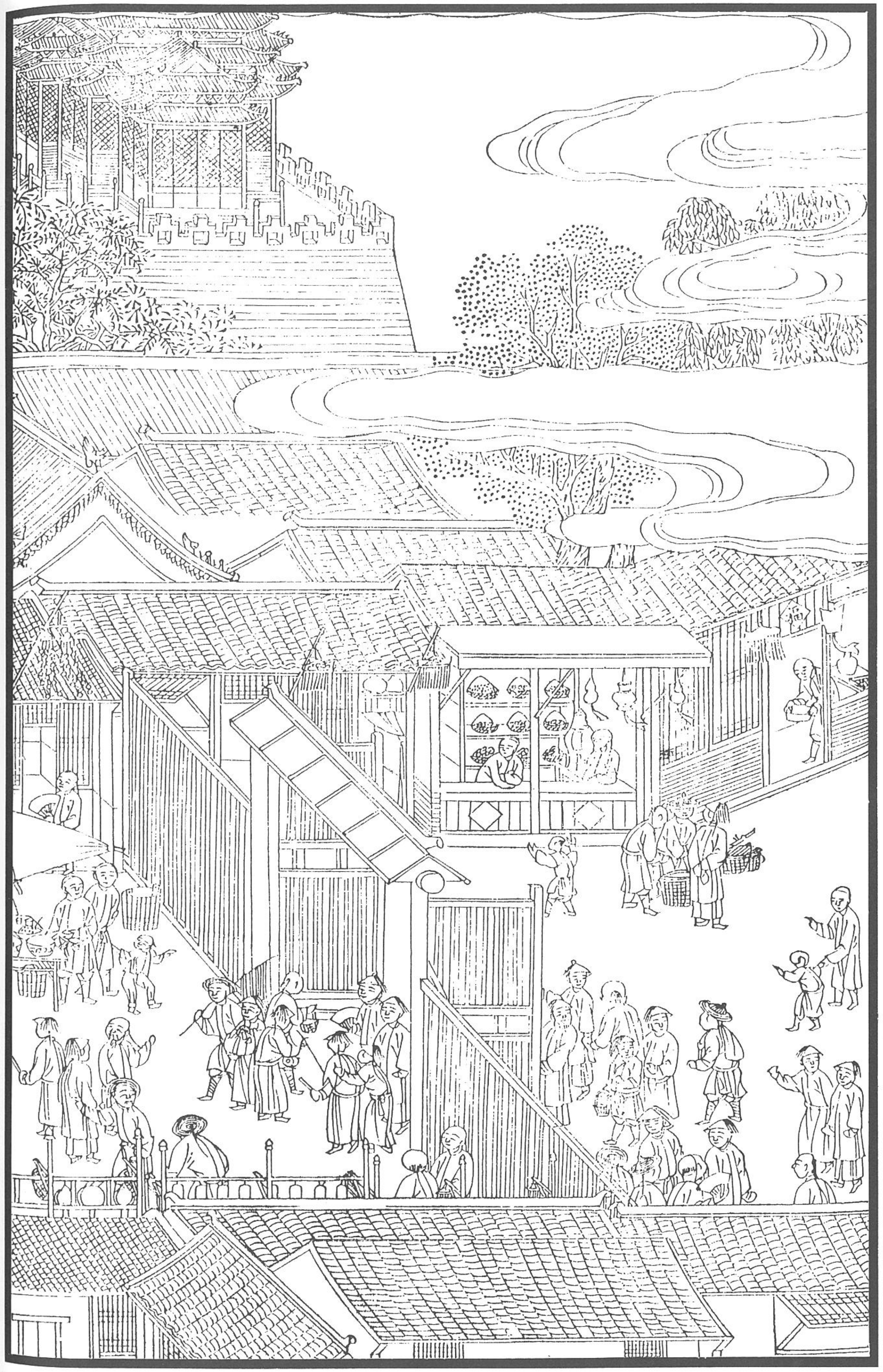


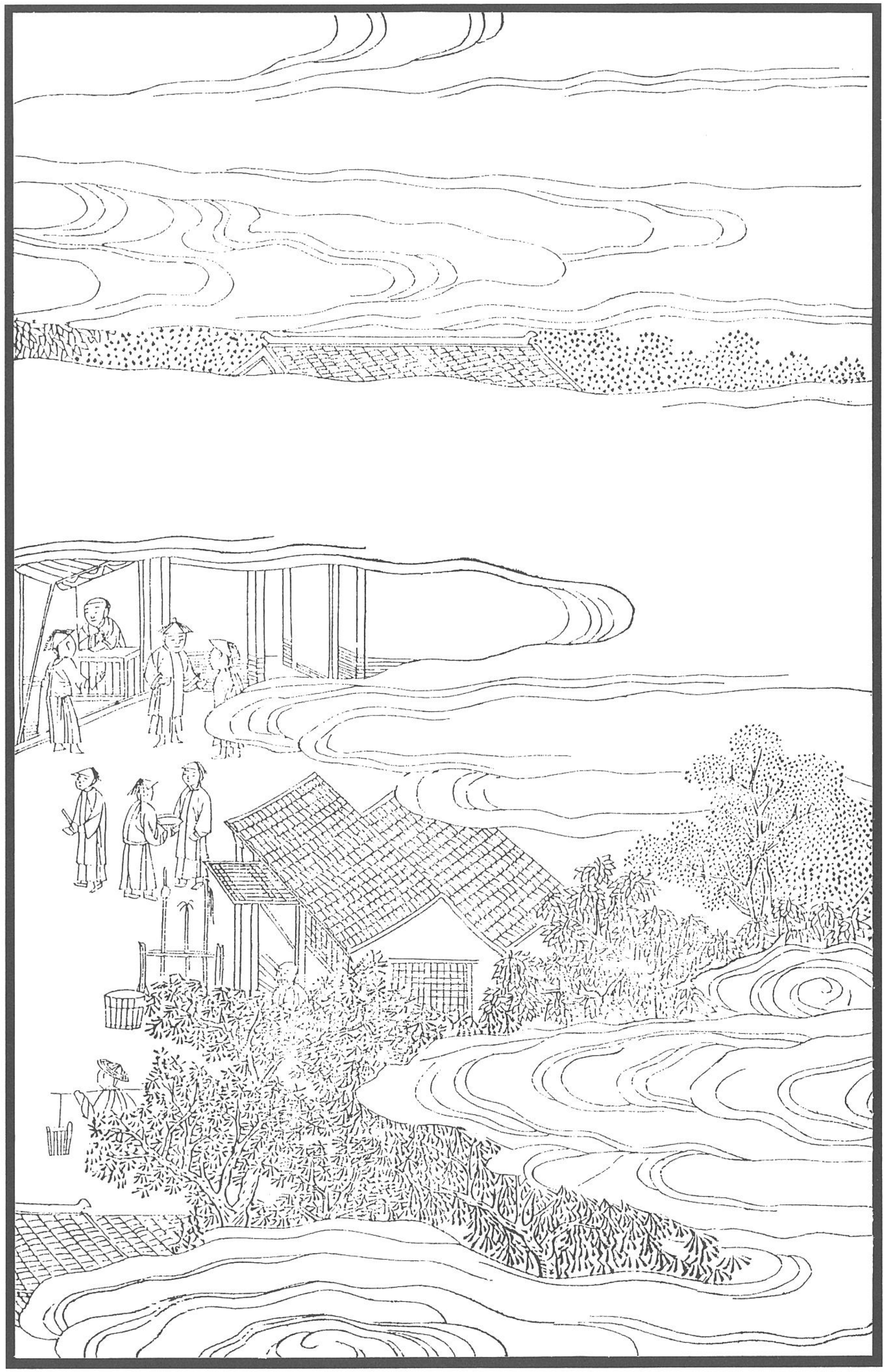


『康熙六旬萬寿盛典図』終

乾隆八旬萬寿盛典図

（一七九二年刊・参考図）



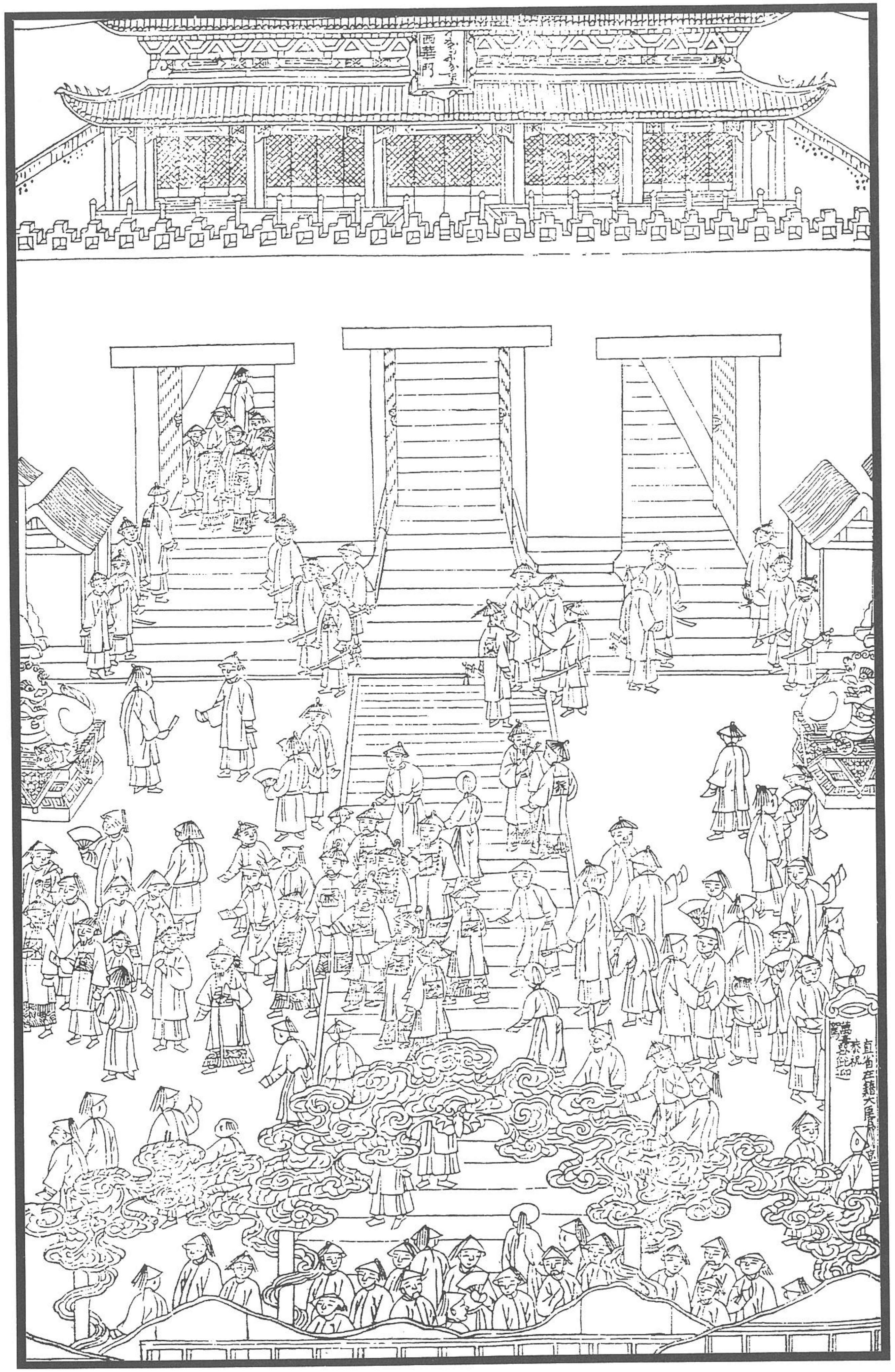


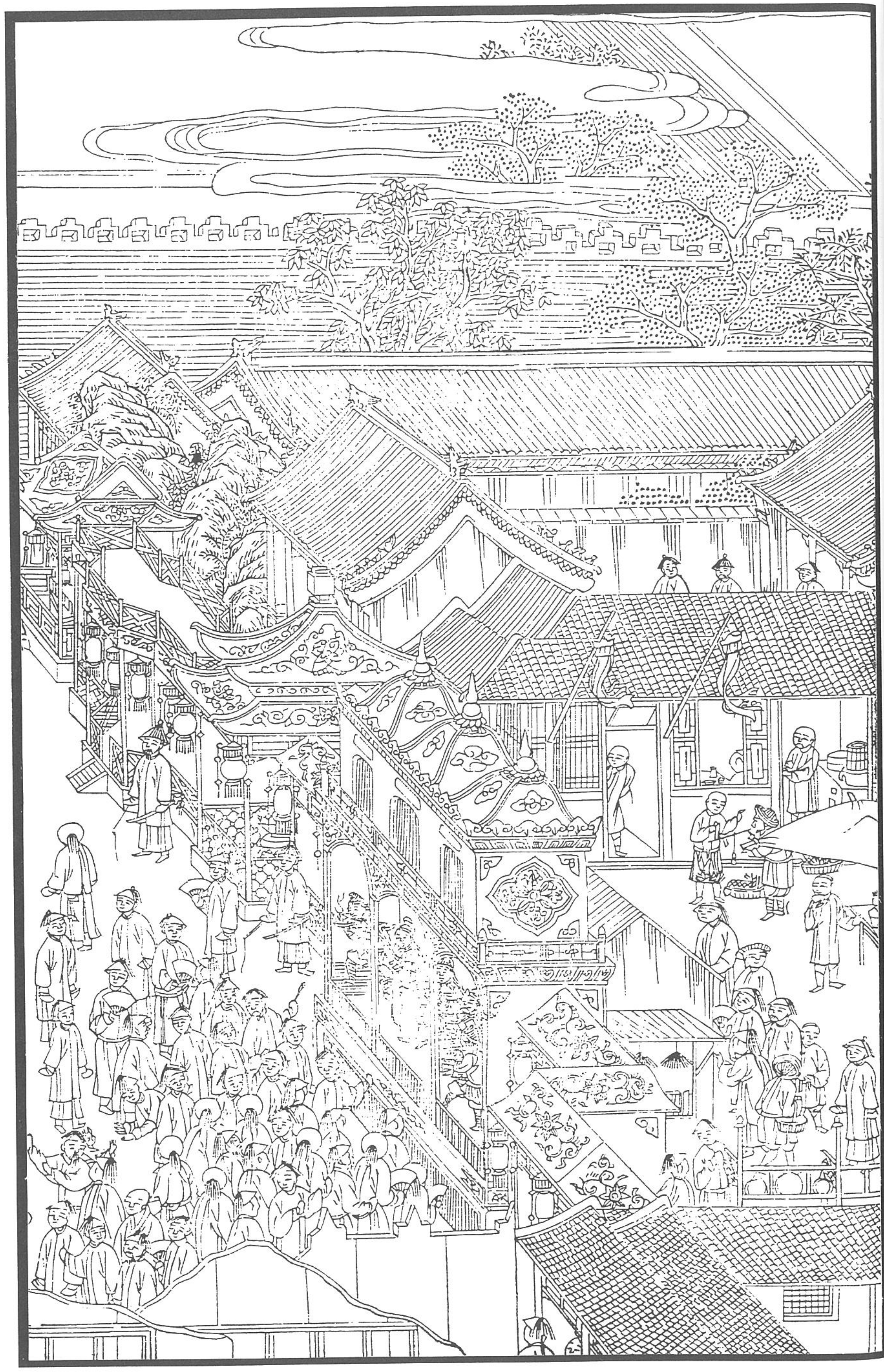
故宮の西側の門である「西華門」の歓迎準備風景である。やや南に寄った門の両側には一対の獅子が鎮座し、筒子河の上に張り出した入口部分に、北側に向けて様々な建築を仮設し飾り立てている。故宮四隅の角楼も描かれている。

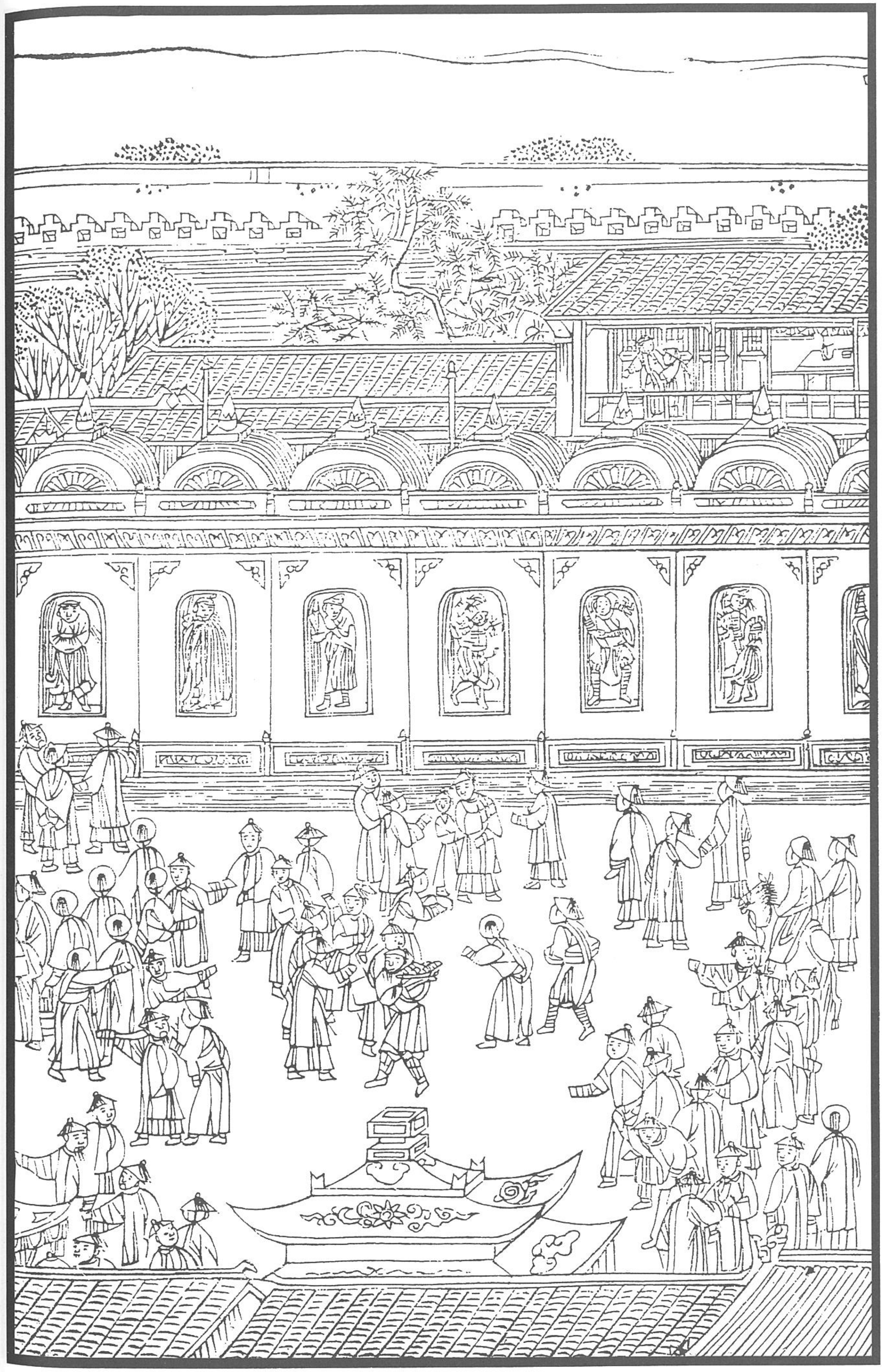
南正面には、西洋風の屋根をもった楼閣に人物像が見える。

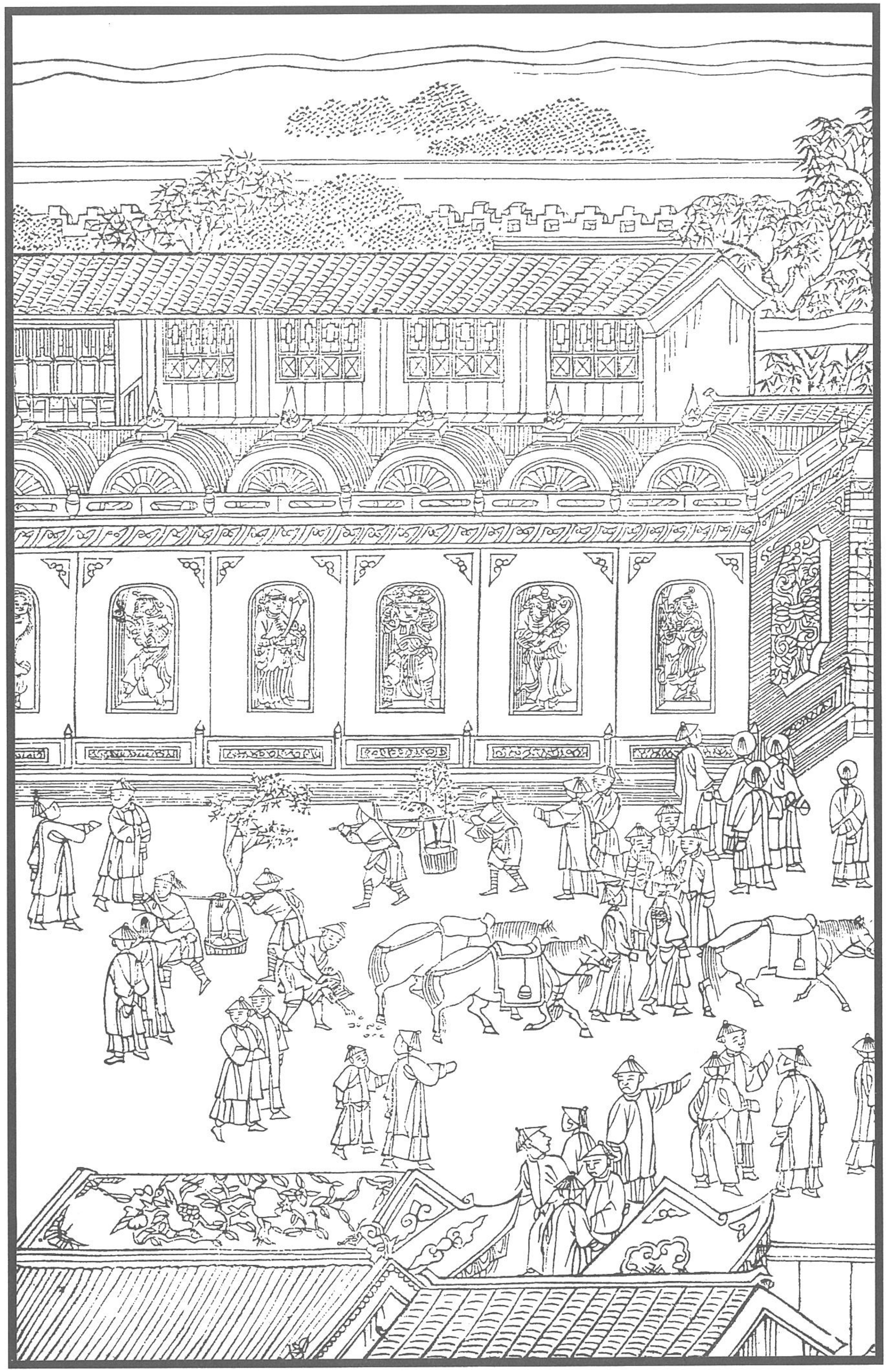
西華門に面した飾り付けは、上の部分に雲文をあしらい、裏側の方形の材料の補強が描写されている。

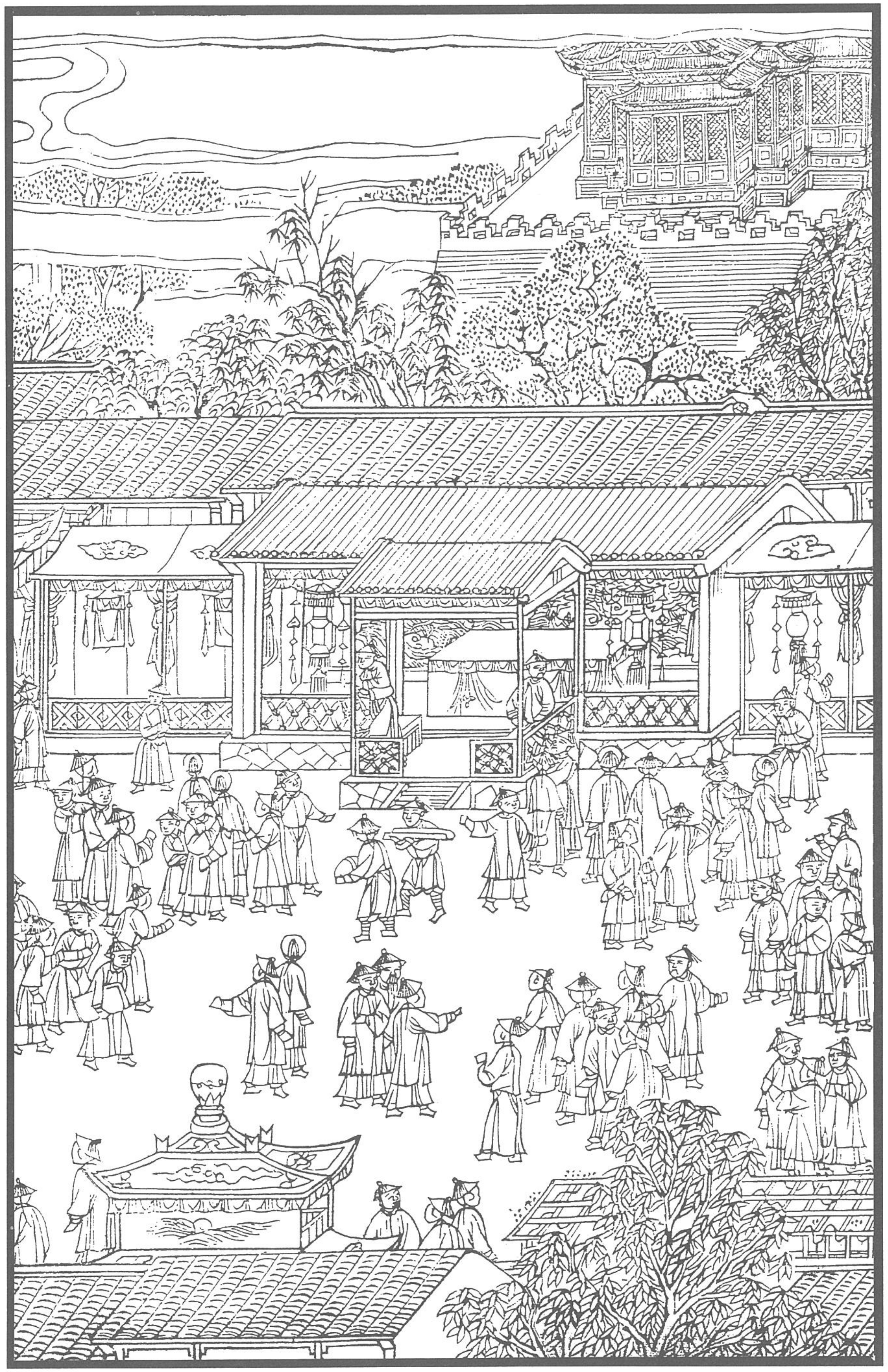
西華門から角楼までの部分の道を塞ぎ、ここに種々の模擬店を設置した模様である。

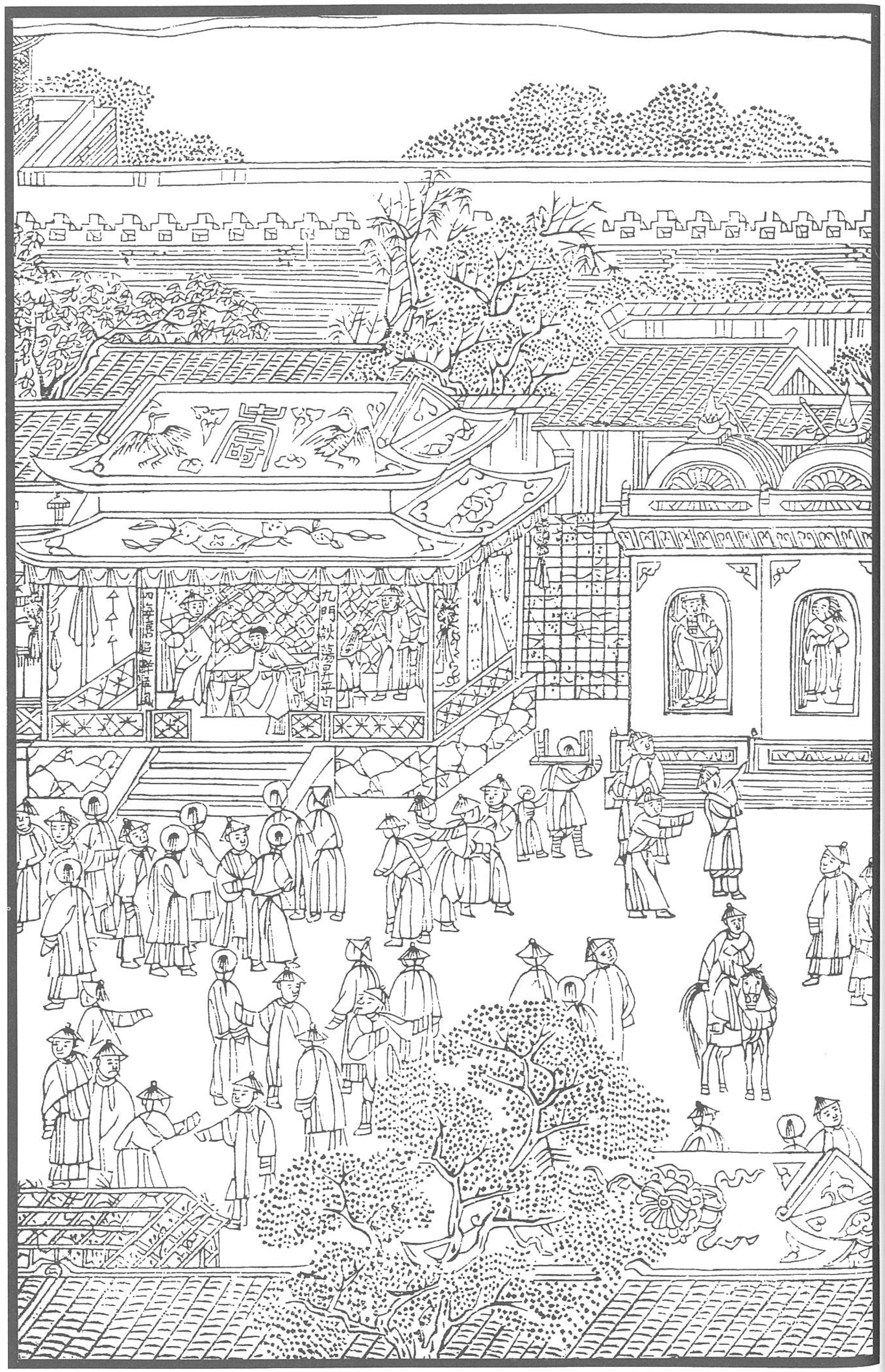






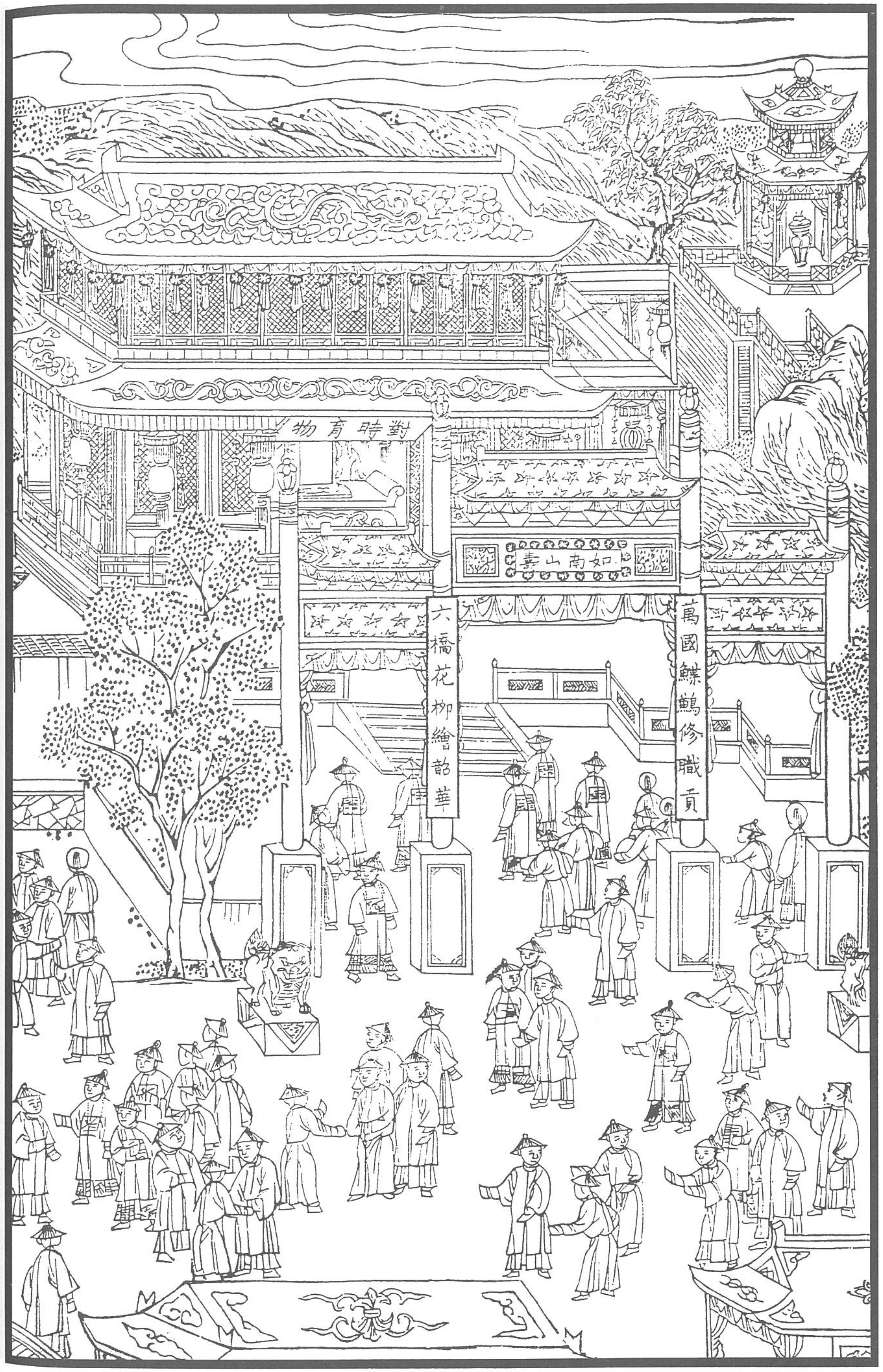


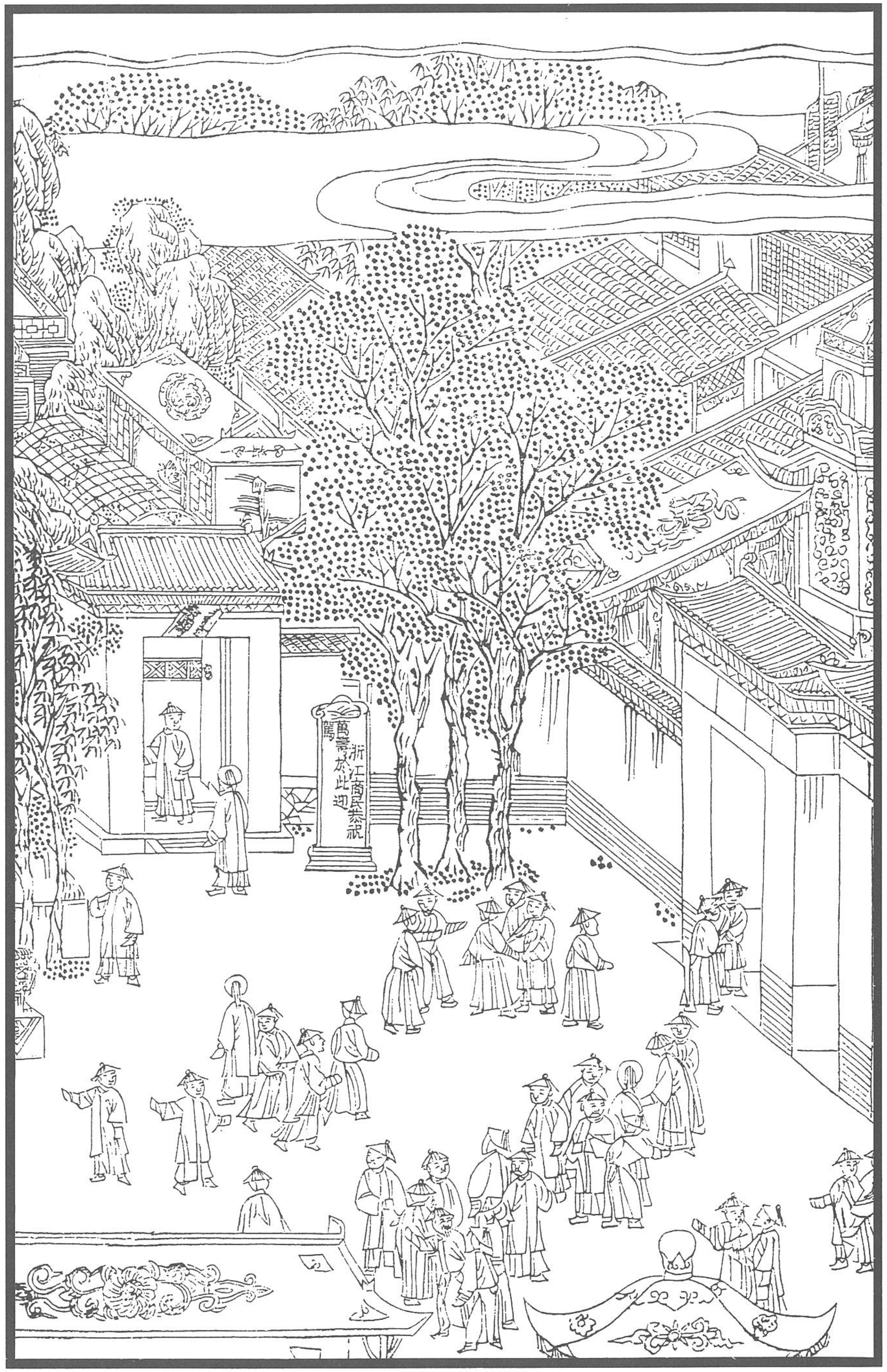


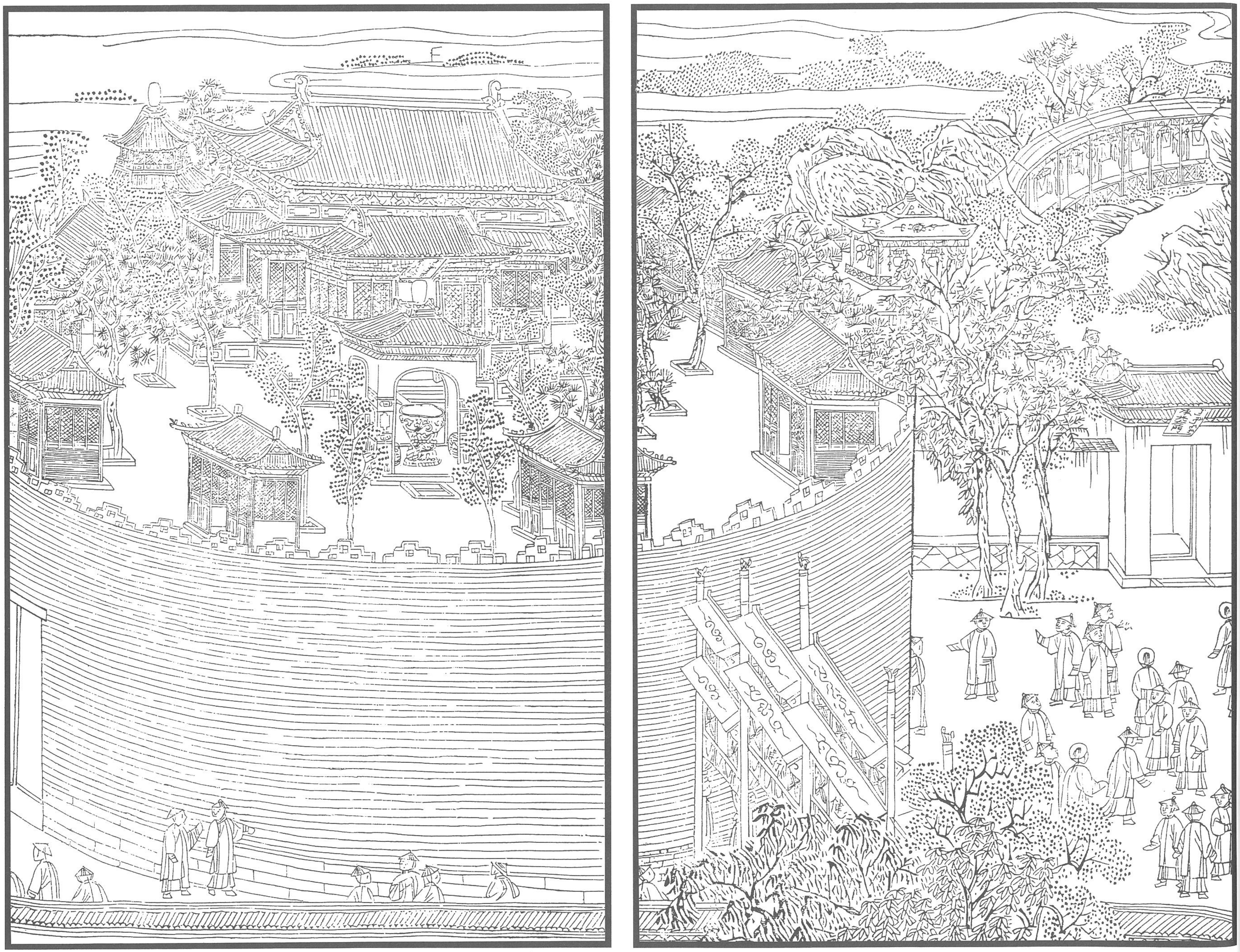


道は、故宮の西華門を出て右に曲がり、北上して西北の角楼に近づいている。正面に人物像を多数飾っている楼閣状のものは「西洋楼」の綵廊であり、十四名の立像を飾っているが詳細は不明。立像には明らかに西洋風の人物も複数見受けられる。

左奥には角楼が姿をあらわしている。手前に馬糞を拾って歩く人物、植木を担ぐ人物などが面白い。

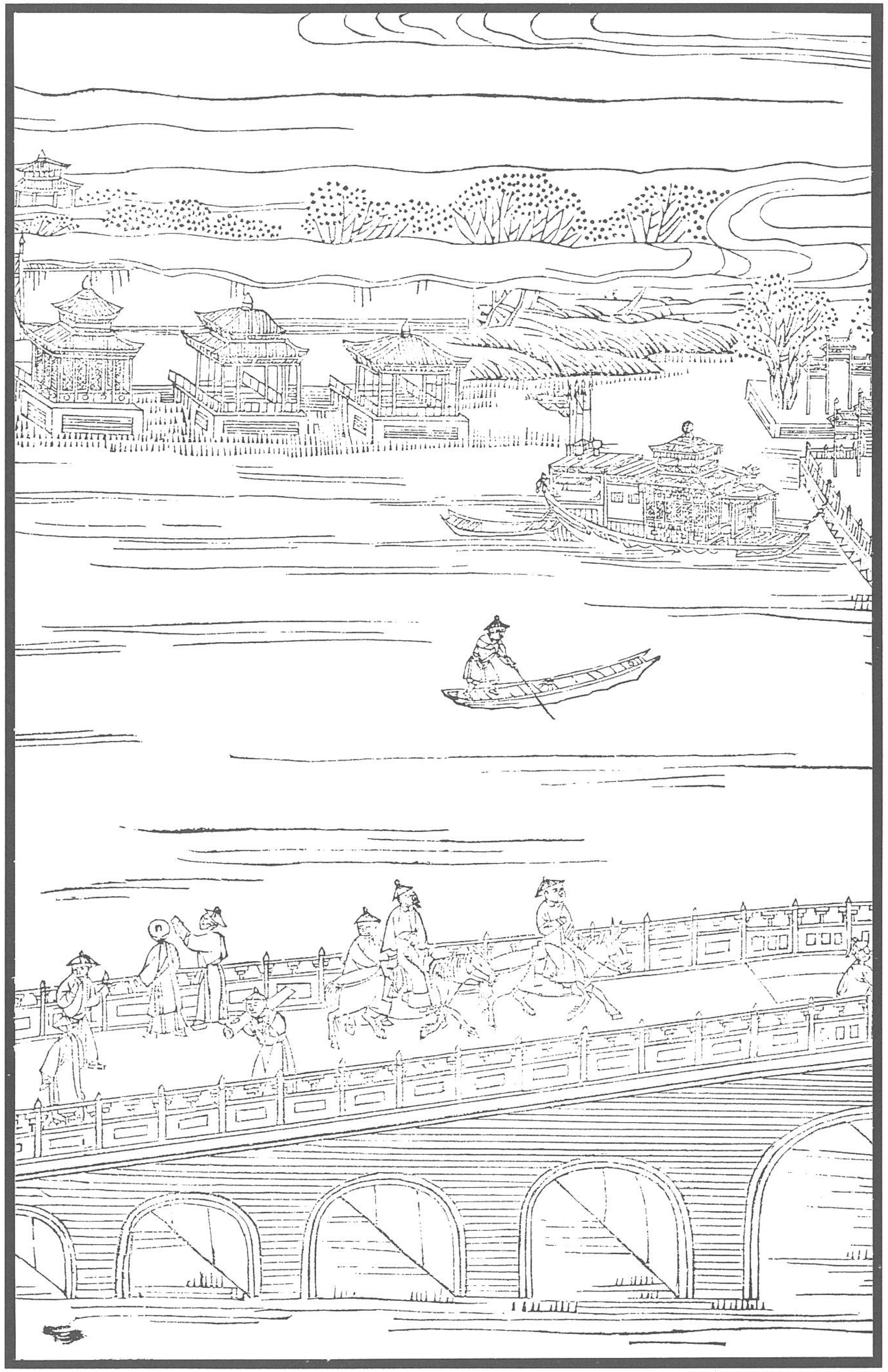

對時育物
如南山壽
六橋花柳繪韶華
萬國鰈鶼修職貢

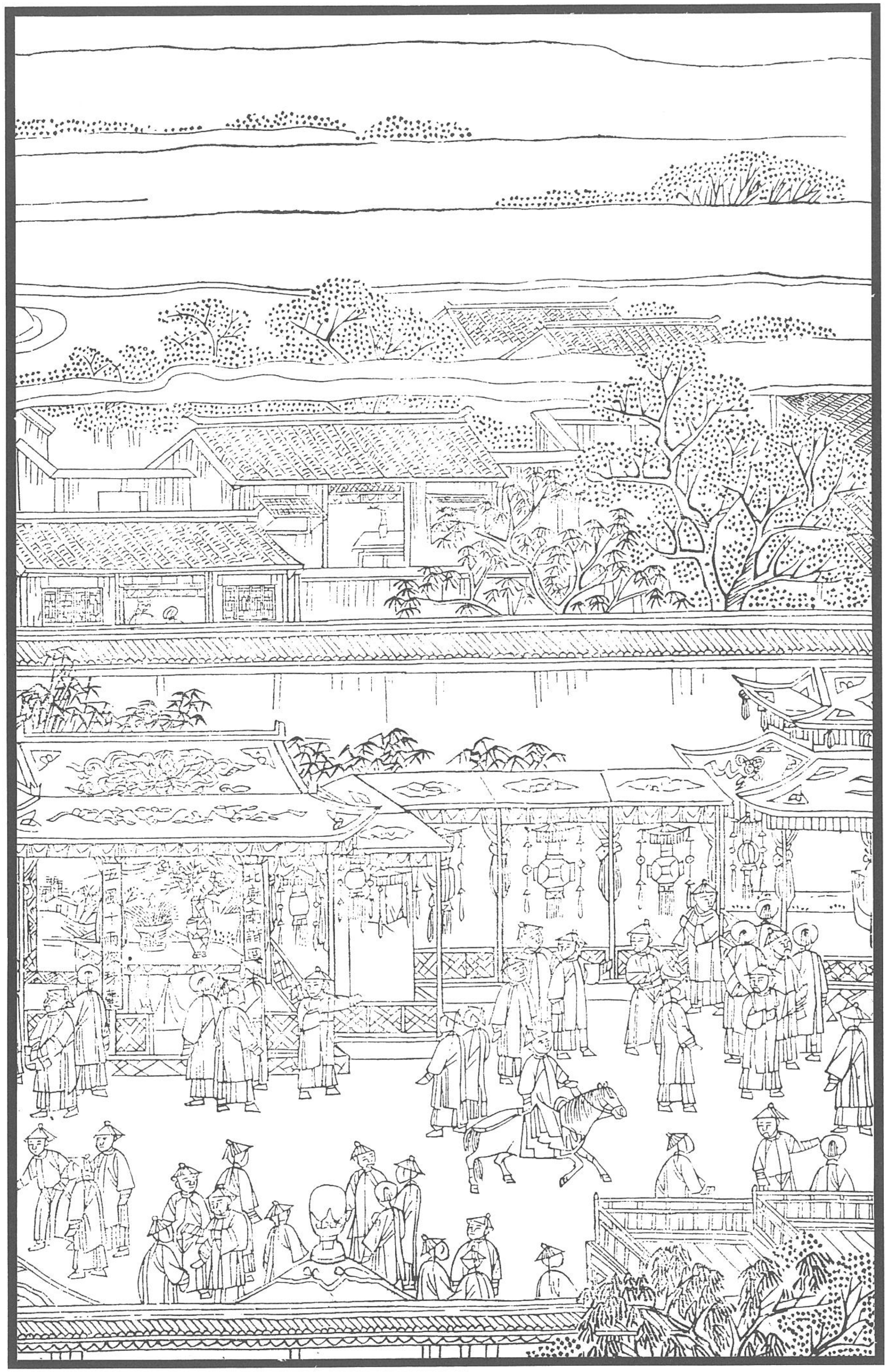

浙江商民恭祝
萬壽於此迎
駕

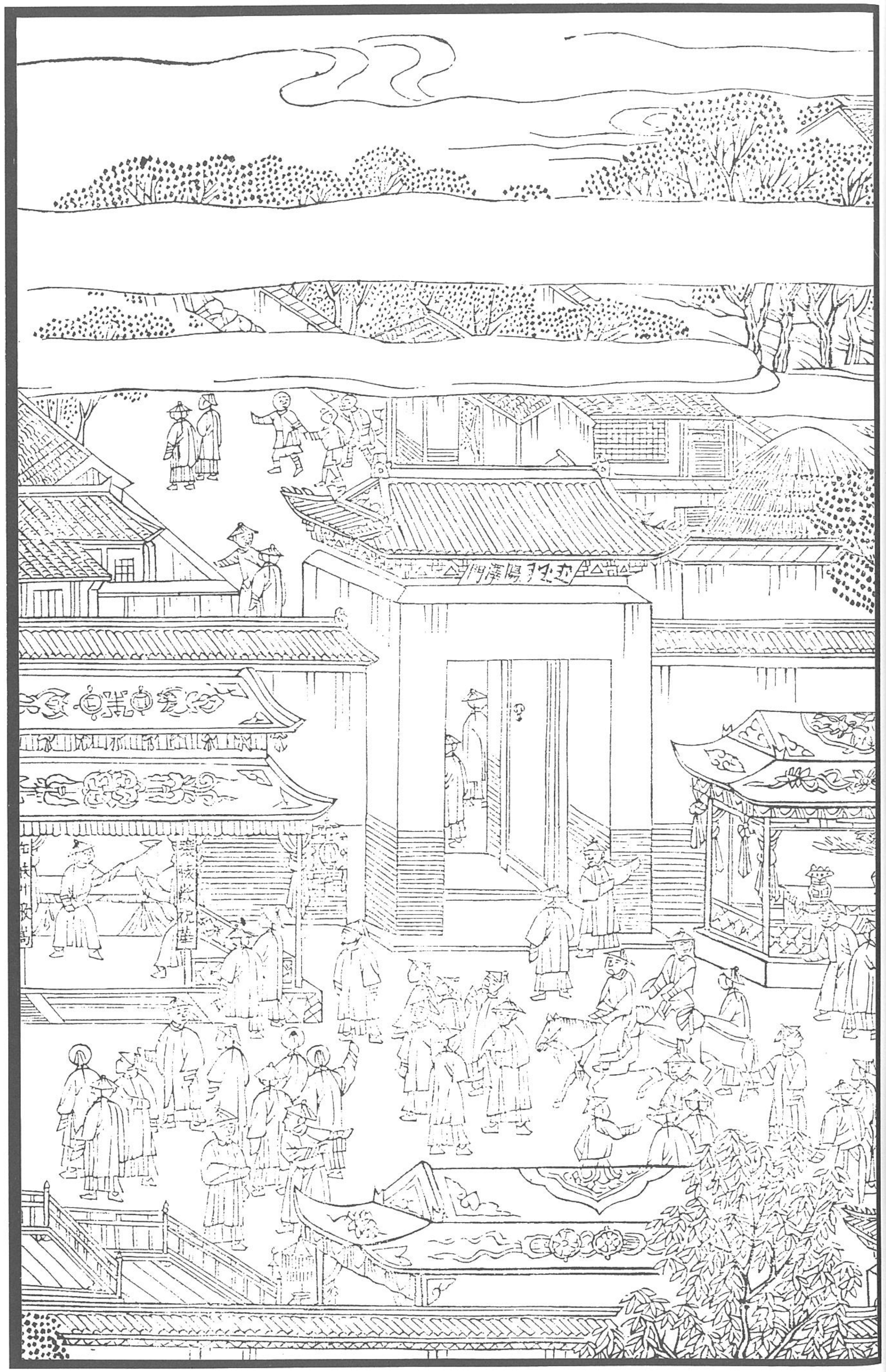


右端は「三座門」で、浙江の商民が慶賀する場所の横は「桑園門」、横の二層の楼閣には「対時育物」と扁額を掛けている。中央に「承光左門」が見え、その左は、団城の中央にある「承光殿」である。



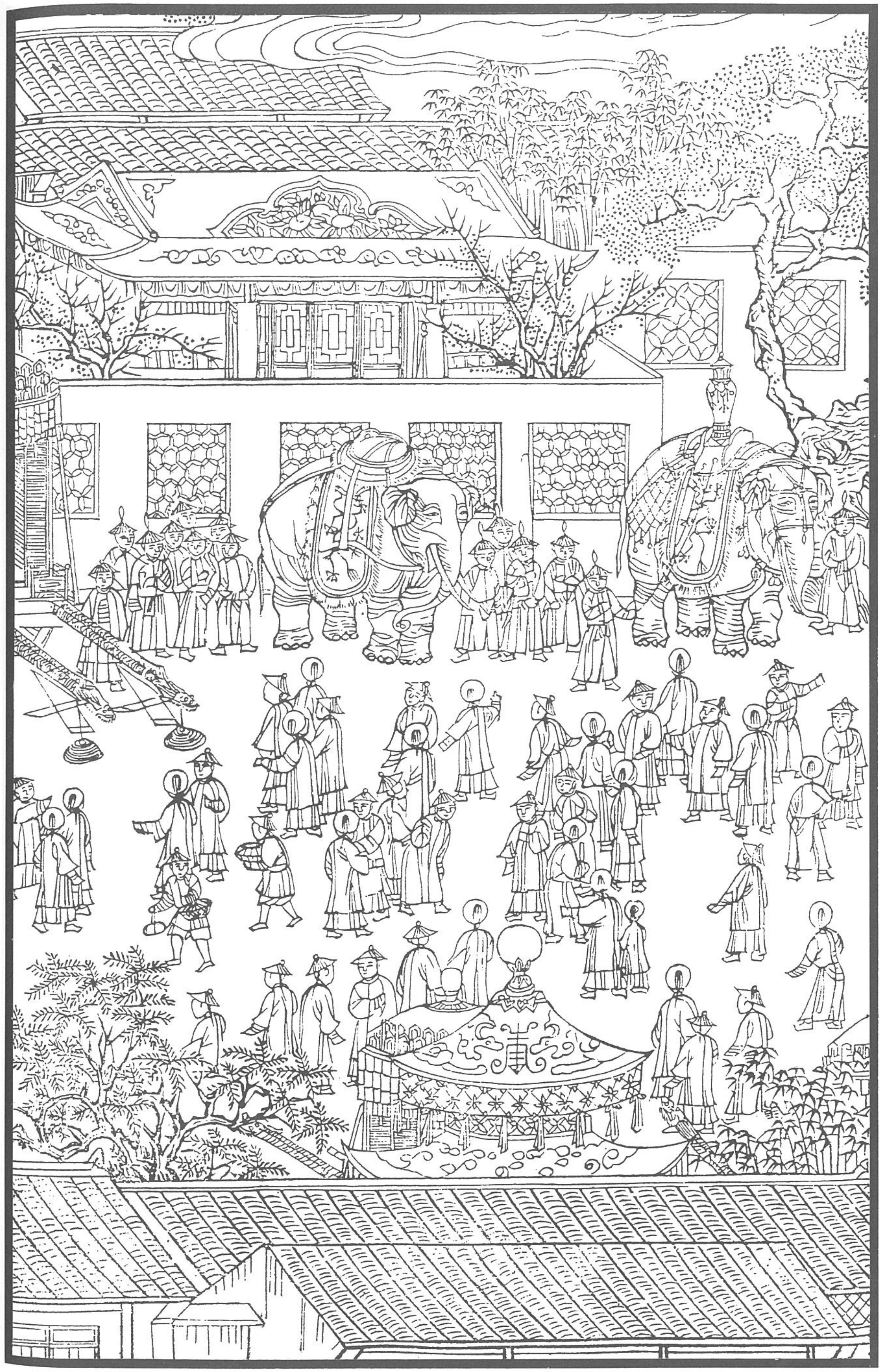


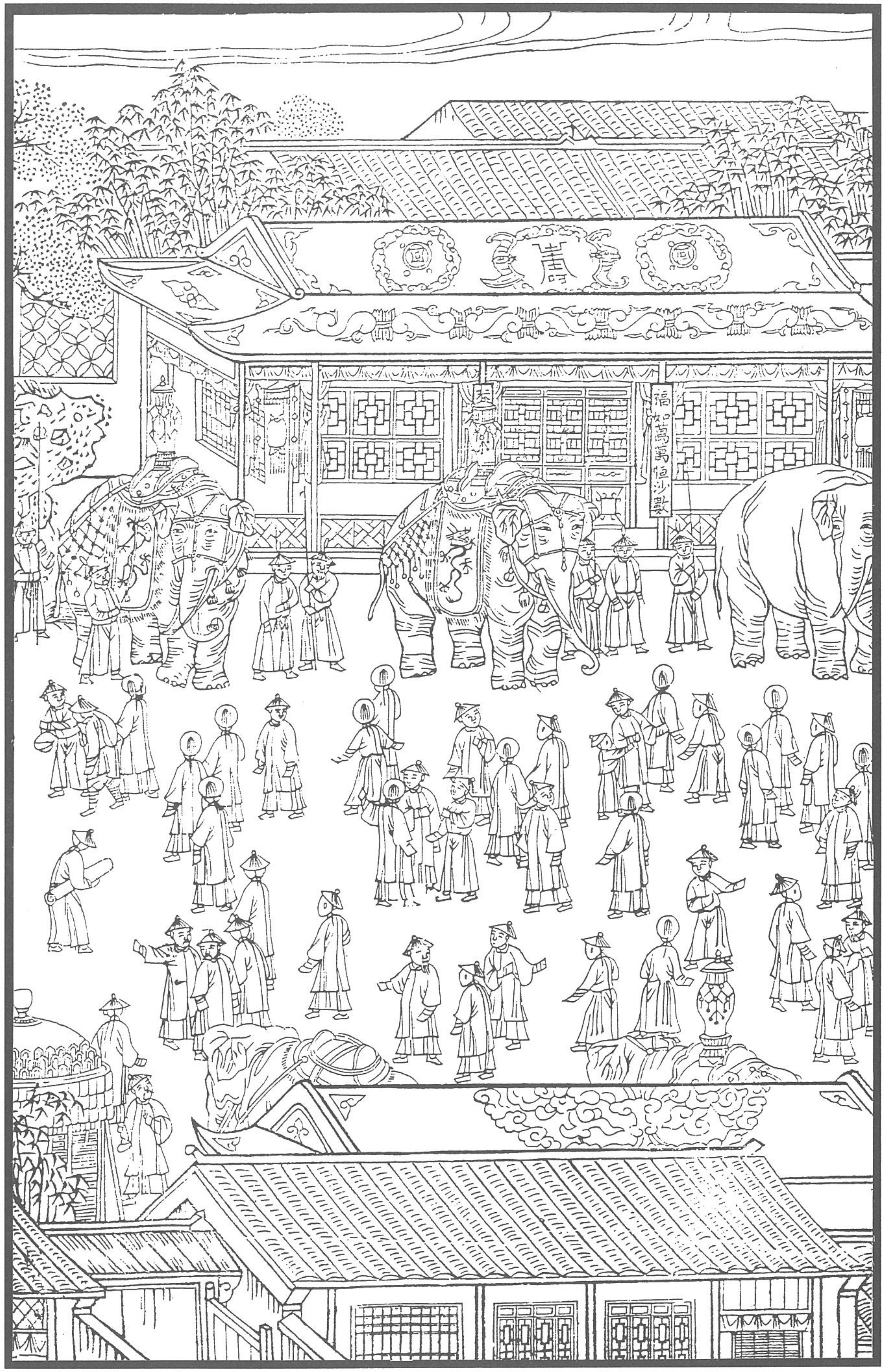


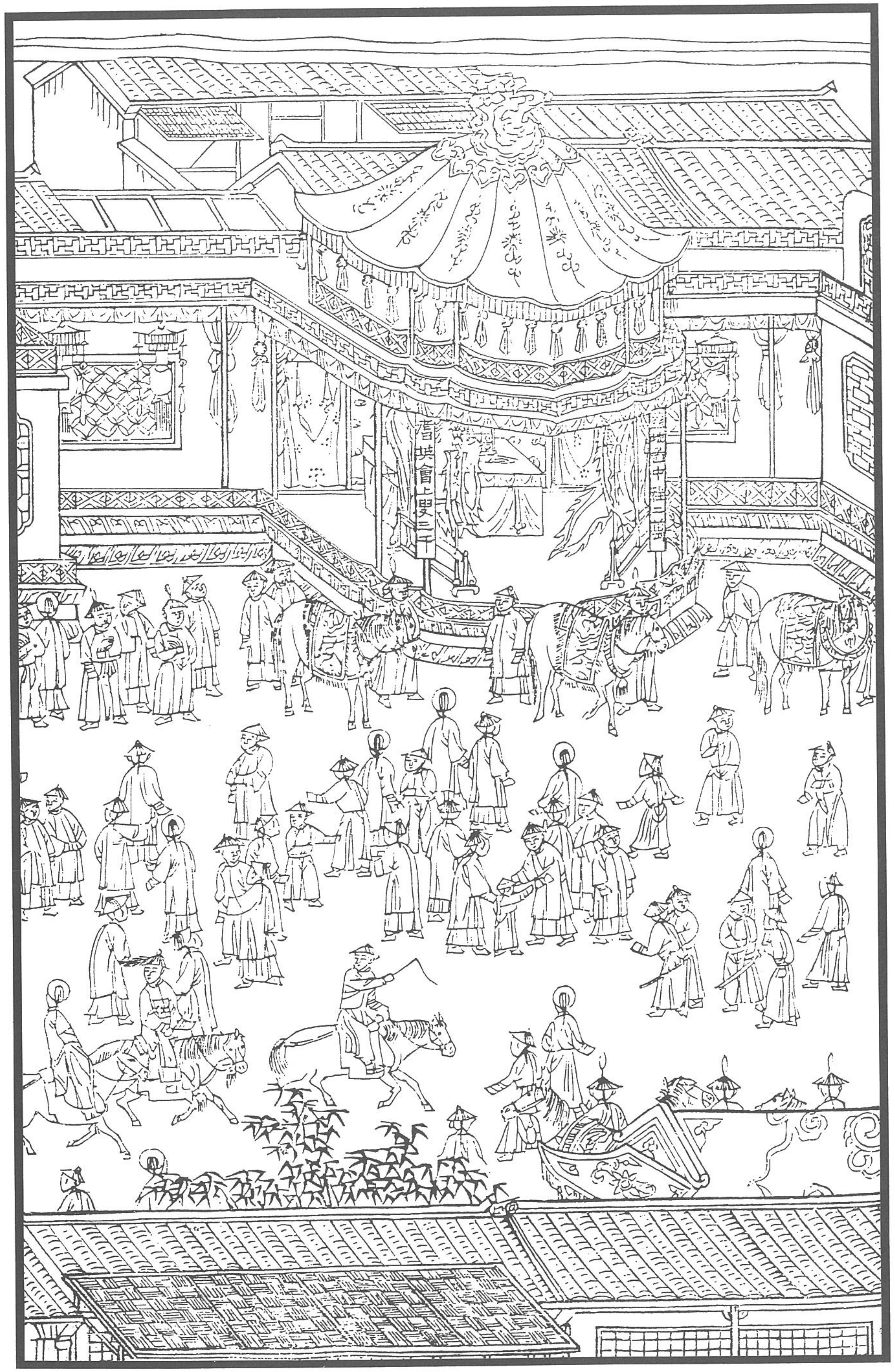


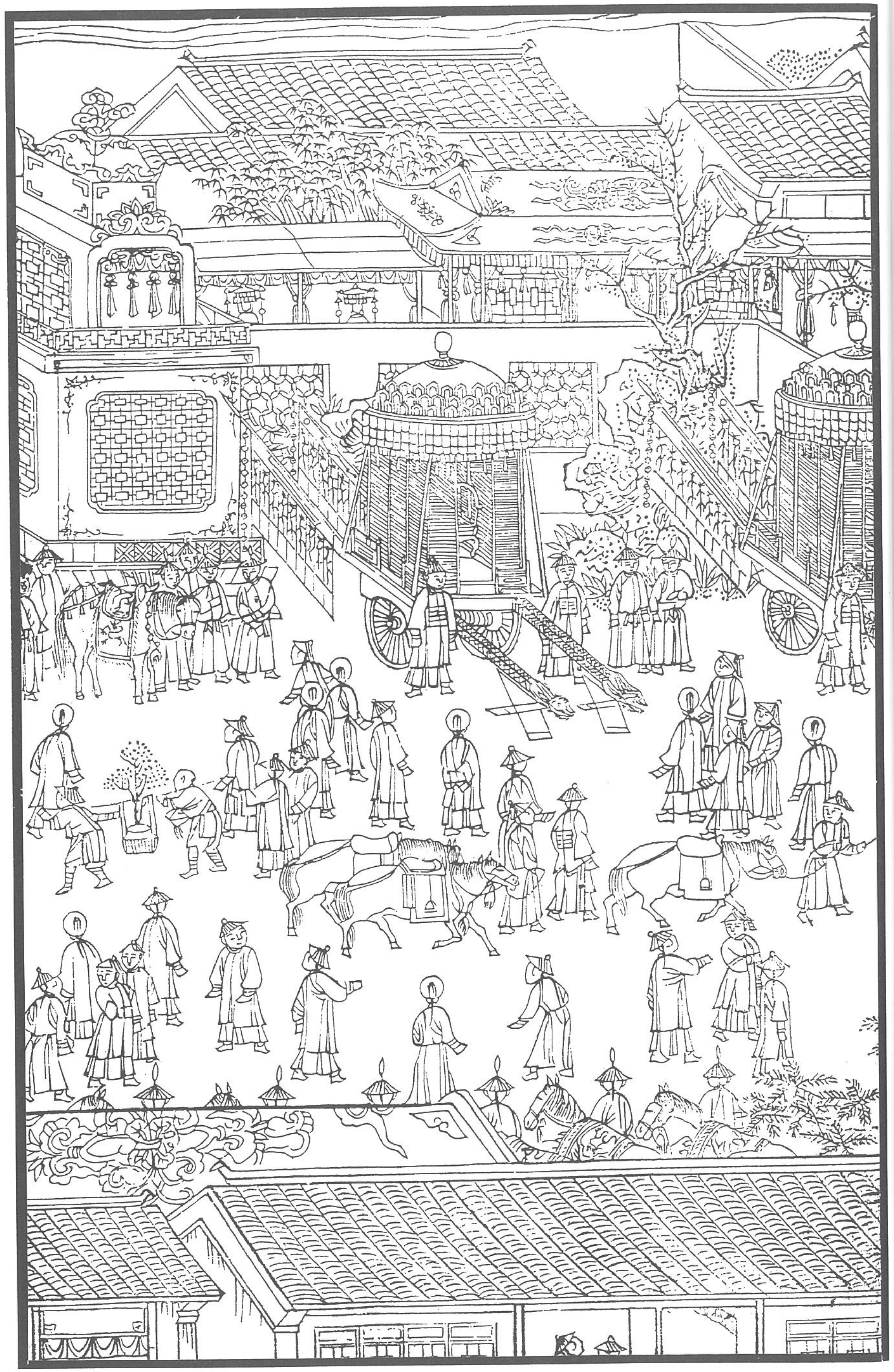
「橋」の掛った彼方には「五龍亭」が見え、舟をこぐ人もいる。

陽澤門の辺りは、康熙時代には「馬圏」があって「康熙版六旬萬寿盛典図」には描かれているが、乾隆時代には既に別のものが建築されていたわけである。現在は北京図書館の旧館がある場所と考えられる。通りは文津街である。

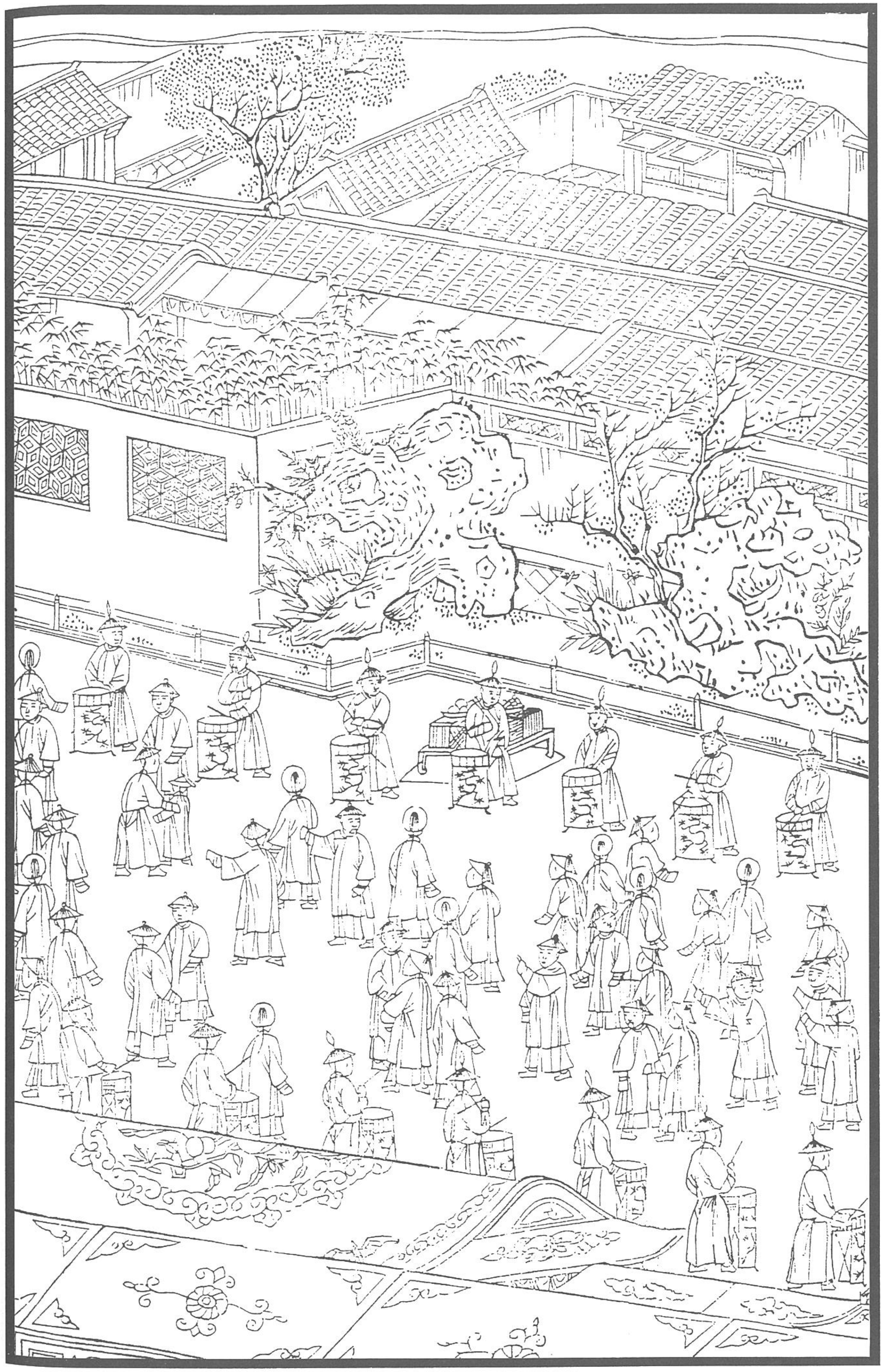


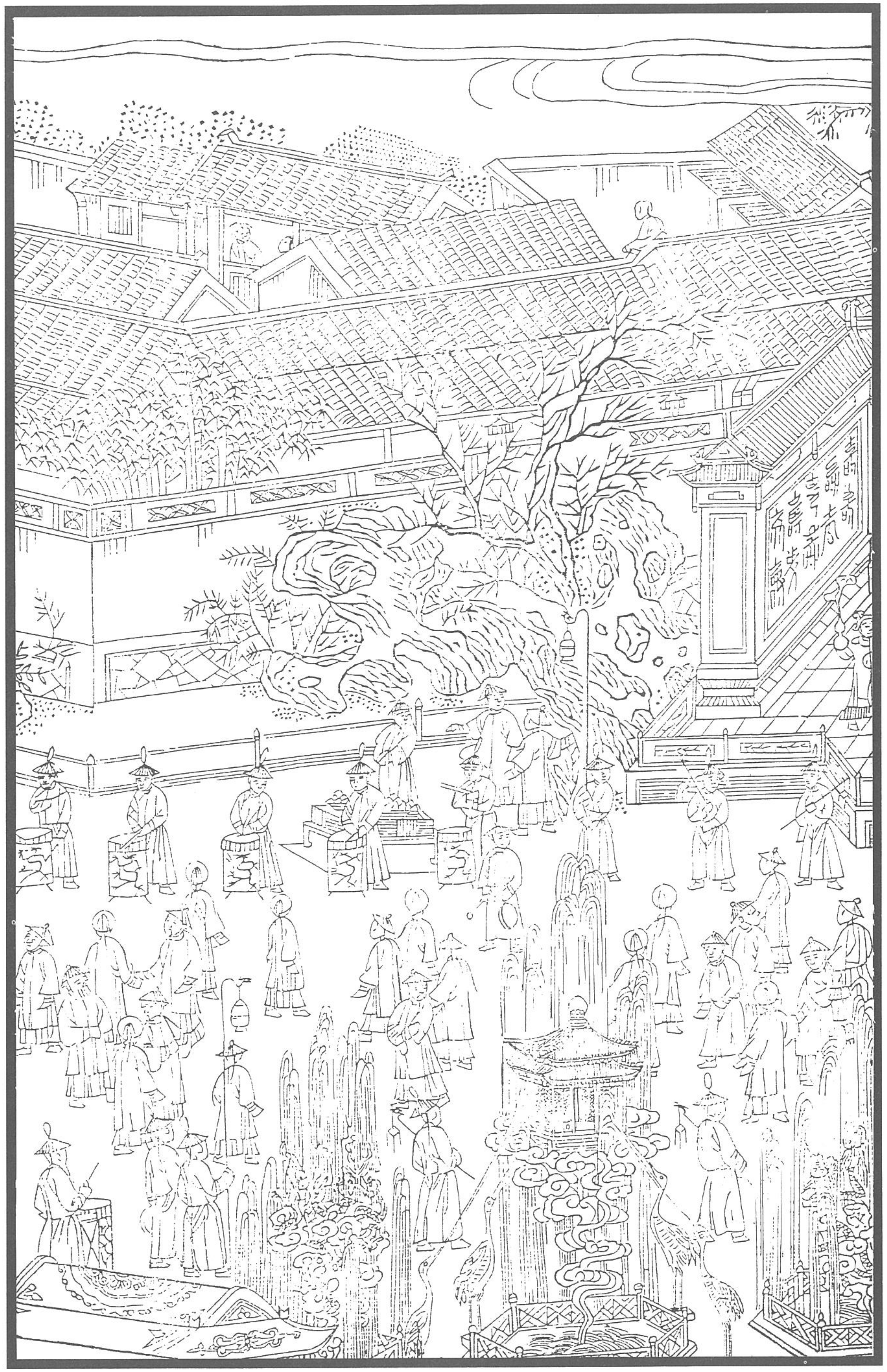

壽
福如萬萬恒沙數

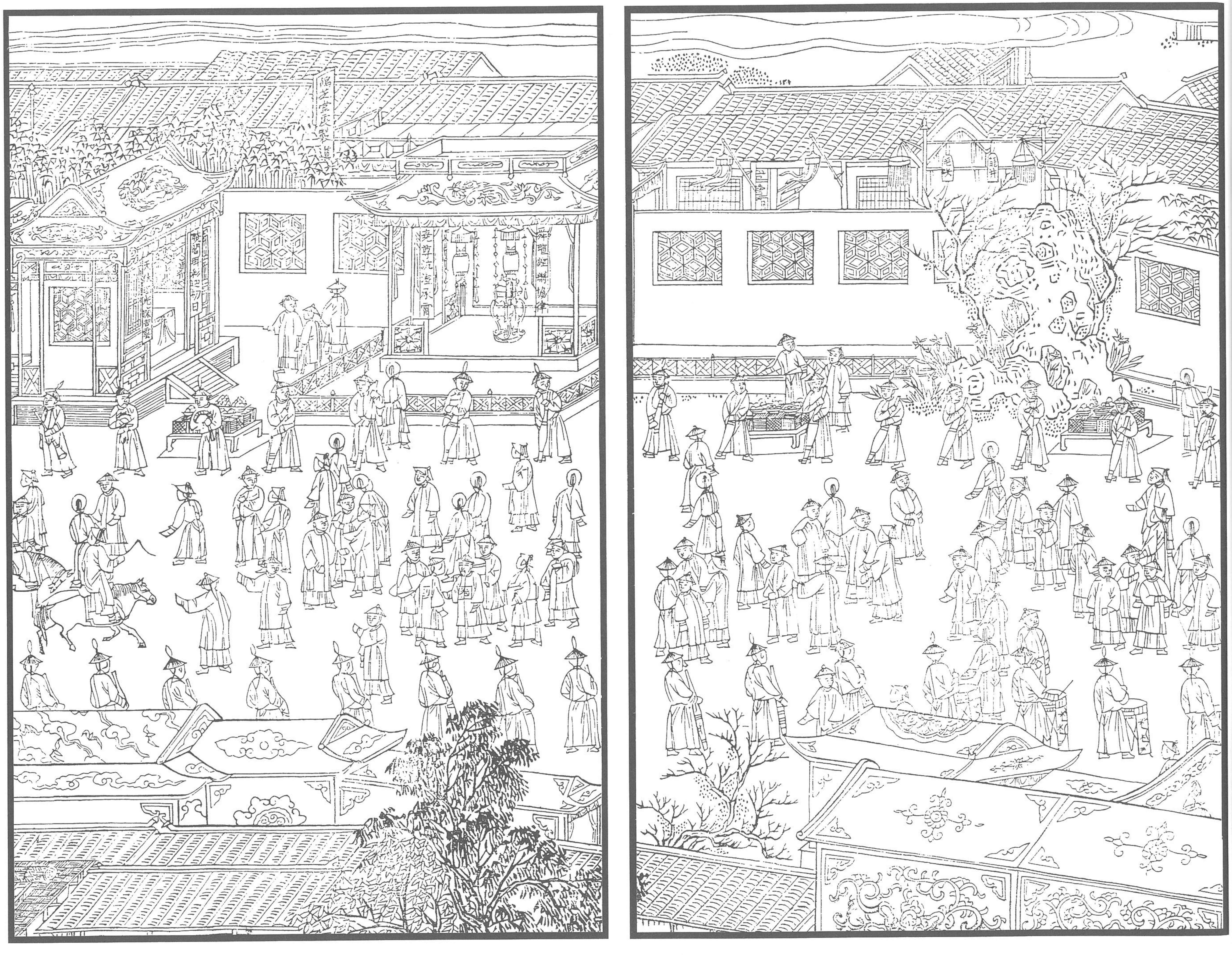




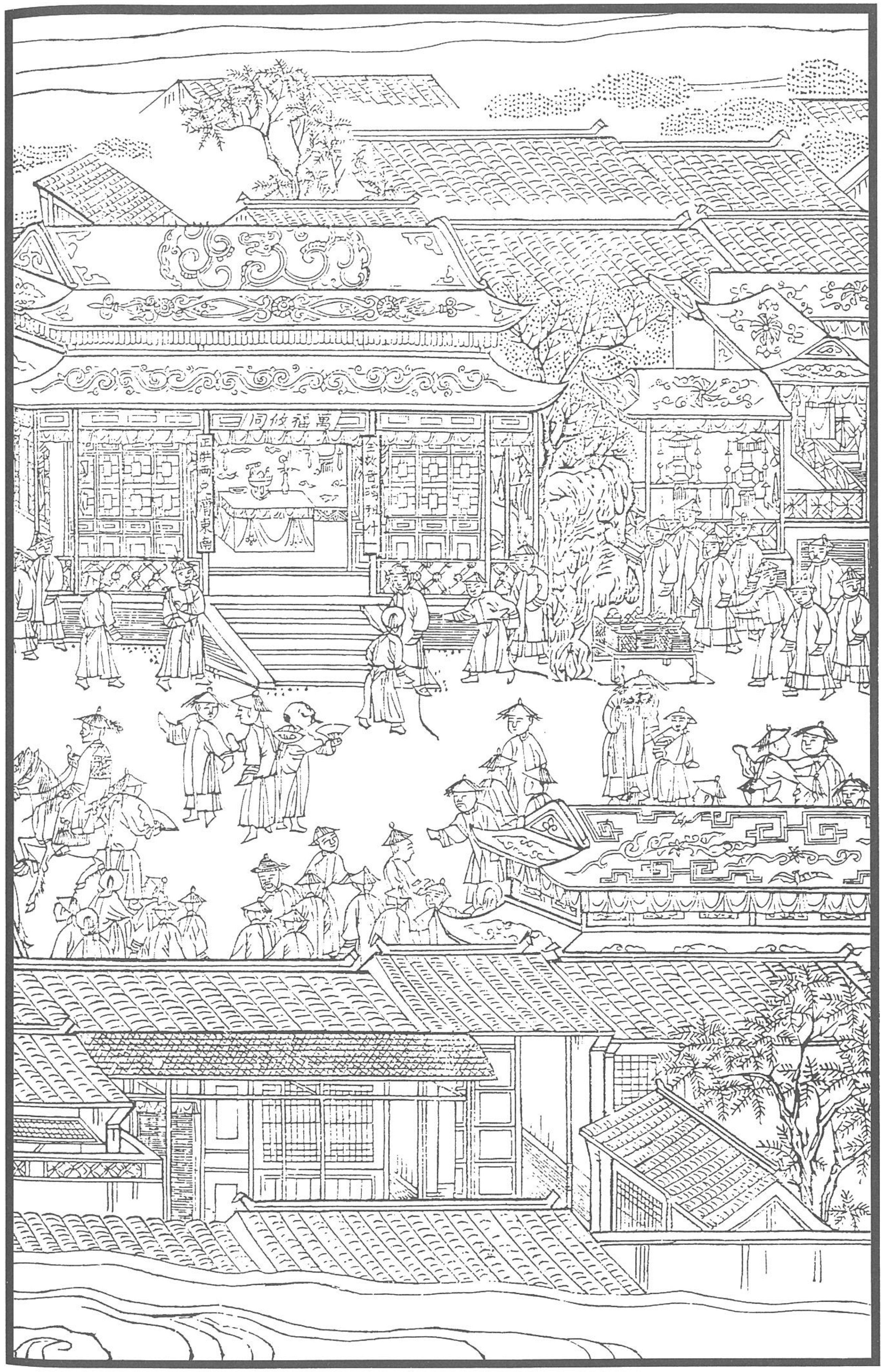
象は「大平有象」の寓意を表わす吉祥動物で、宮廷で儀礼のために飼育されていた。宣武門にそのための「象房」があった。この象は、安南から献上されたもので、今回の萬寿節には、安南国王も西華門で乾隆帝高宗を迎えている。

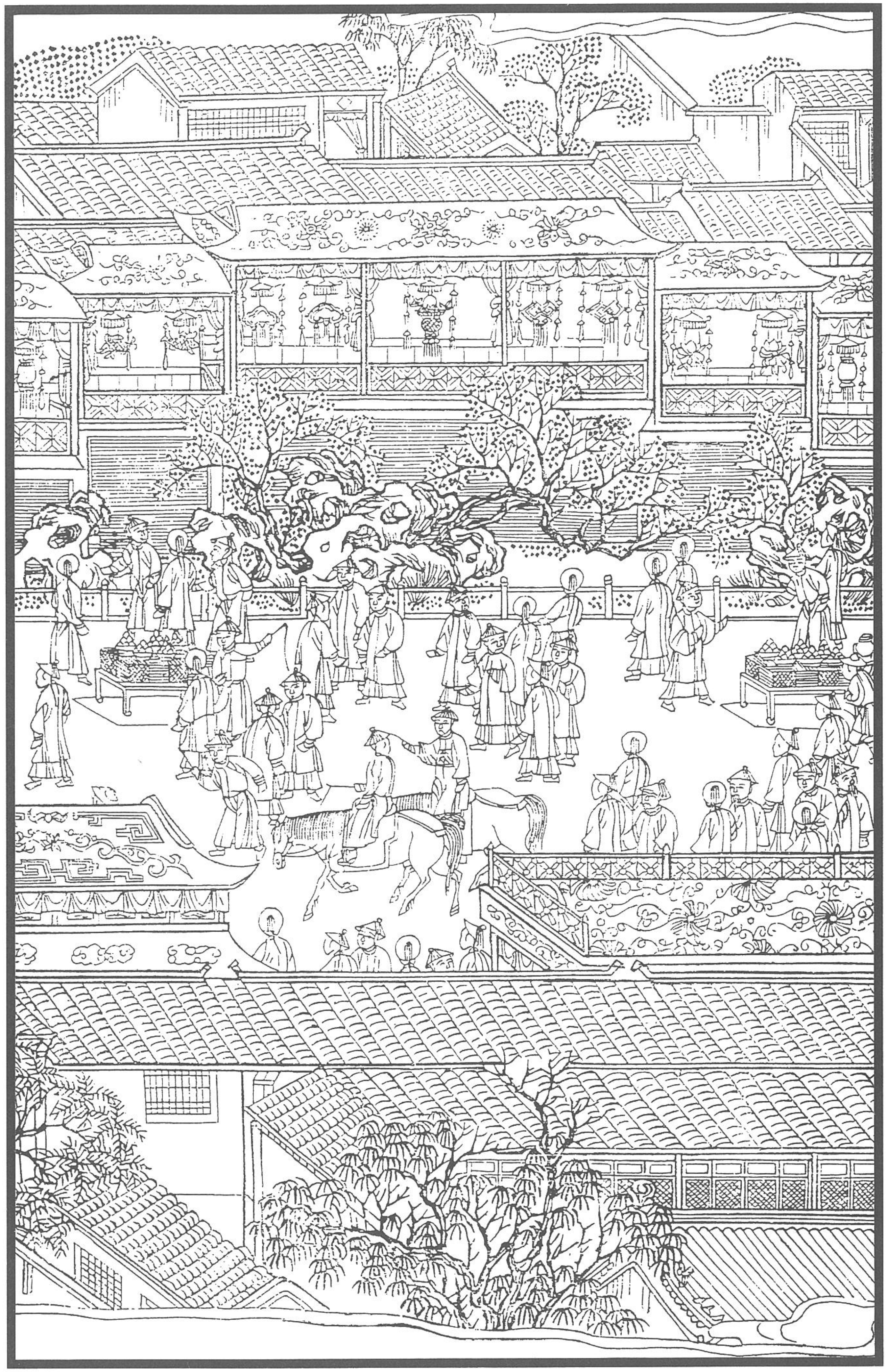




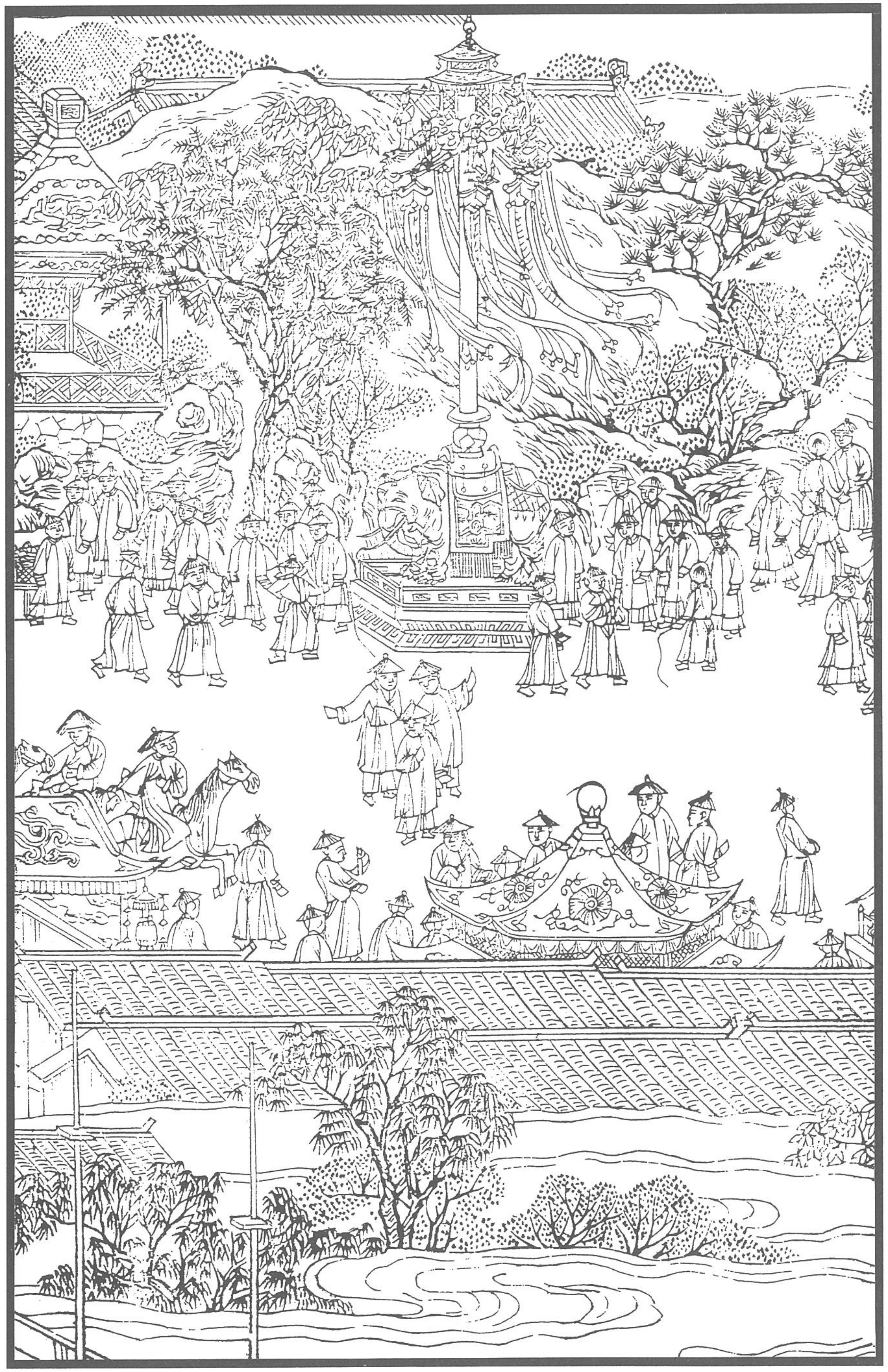


四つ角の手前に噴水が上っているのが見えるが、これは円明園で設えられた噴水と同趣向のもので、西洋風の作りである。鶴を象った鳥のくちばしから勢い良く水が撥ね出している。両側に羽帽子を被り、小太鼓を抱えた儀仗兵が並んでいる。正面の奇石の飾りも作り物であろうか。「綵棚」の裏側には「龍井」などの文字と共に「食事処」を表わす「幌子」が翻っている。

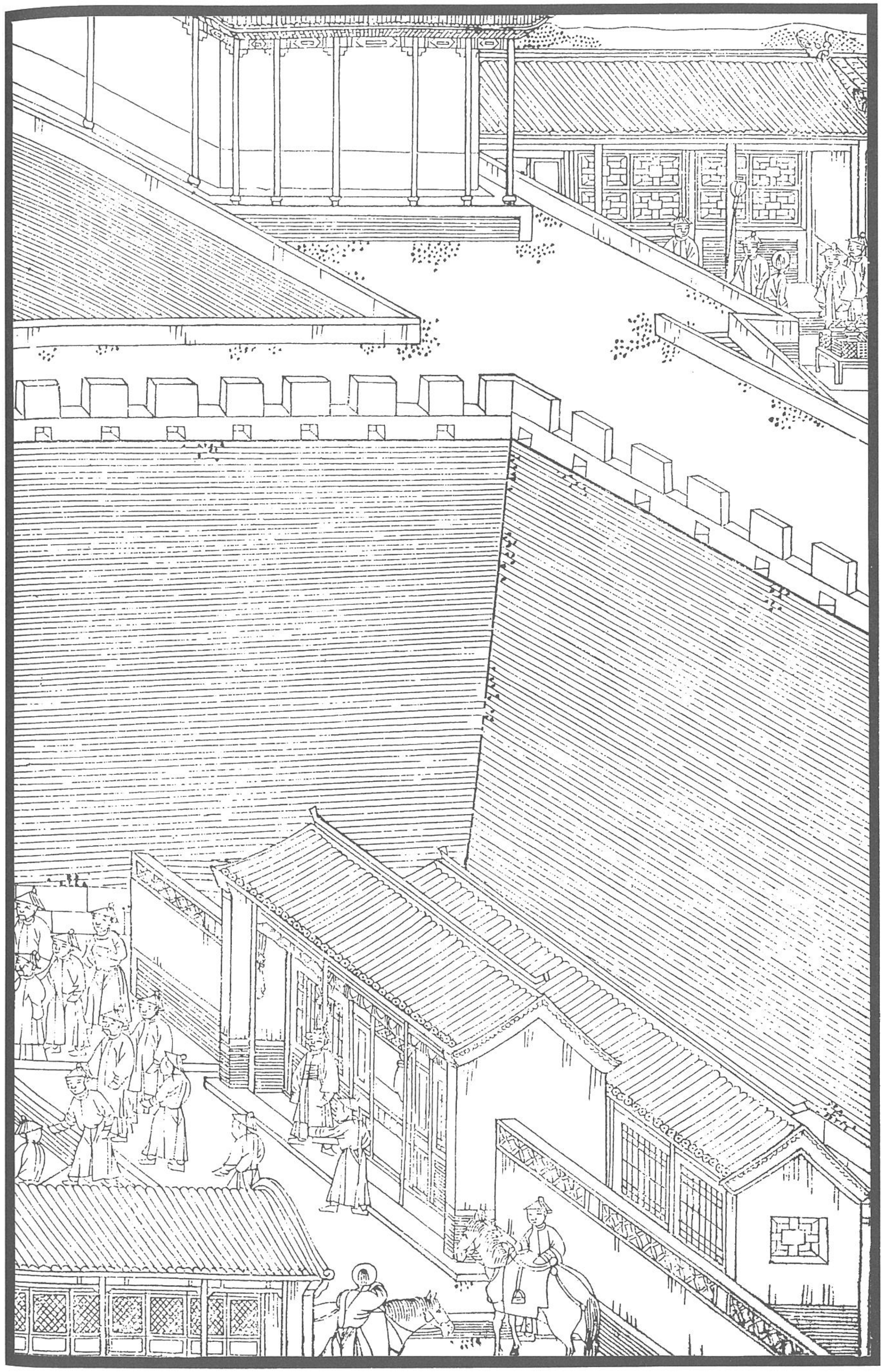

萬福攸同

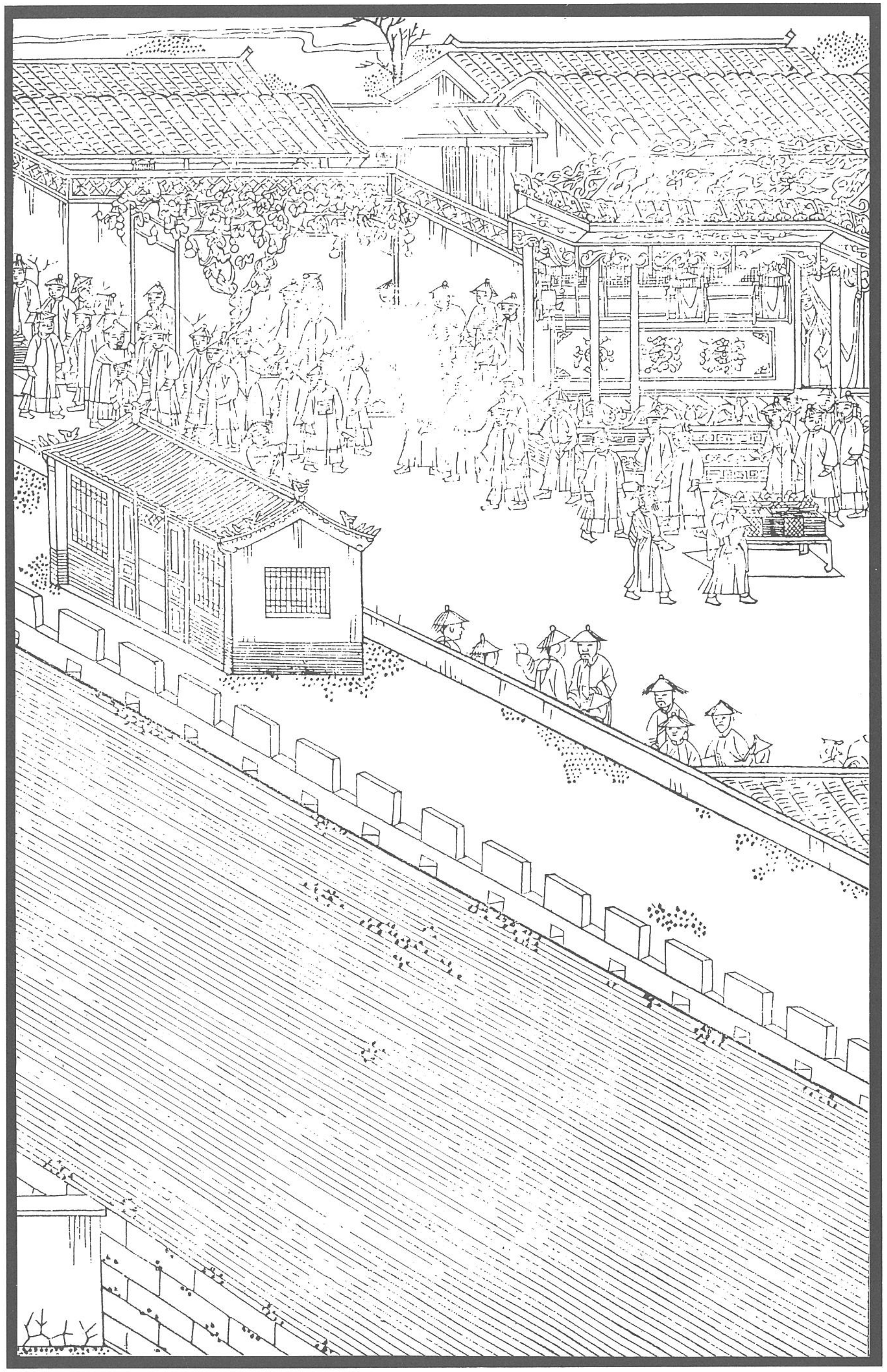


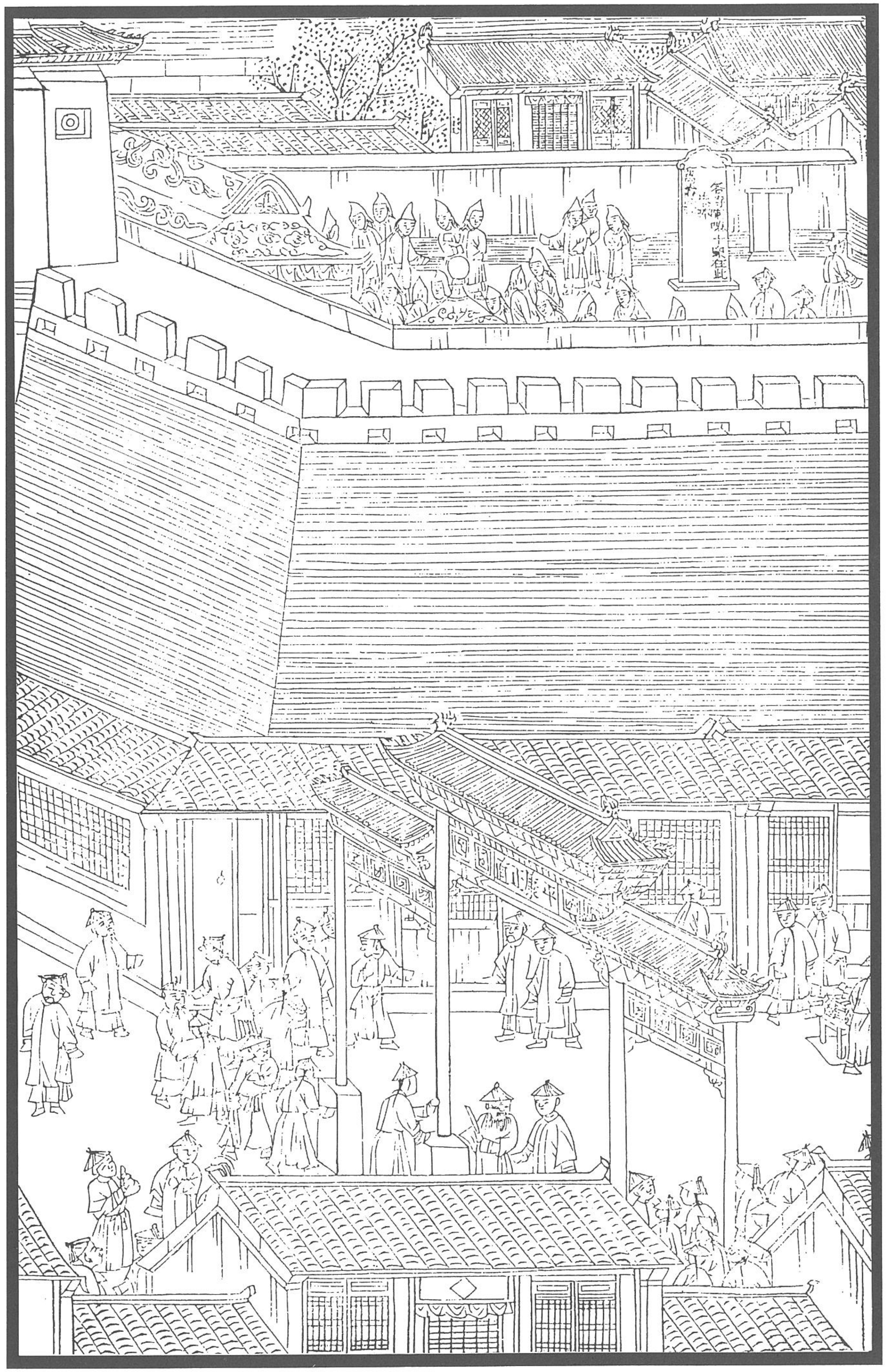
西直門から新街口に向かう道で、象の上に「幡」を多数繋げた飾り物を両側に設置した。中央の綵坊は「皇風四達」の額を掲げ、道の両側には段差を付けた綵楼が幾重にも連なっており、まことに煌びやかな様子が偲ばれる。

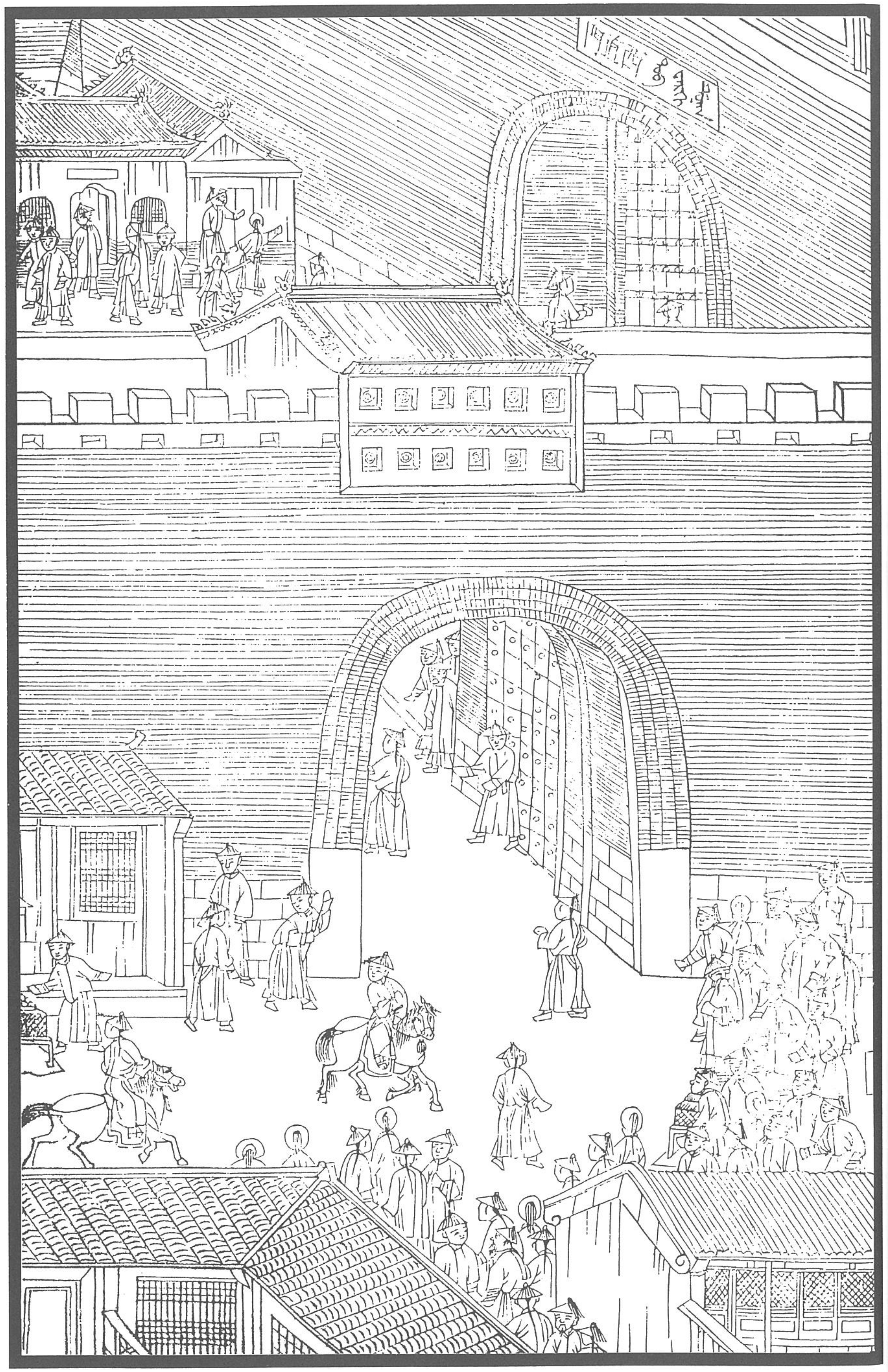




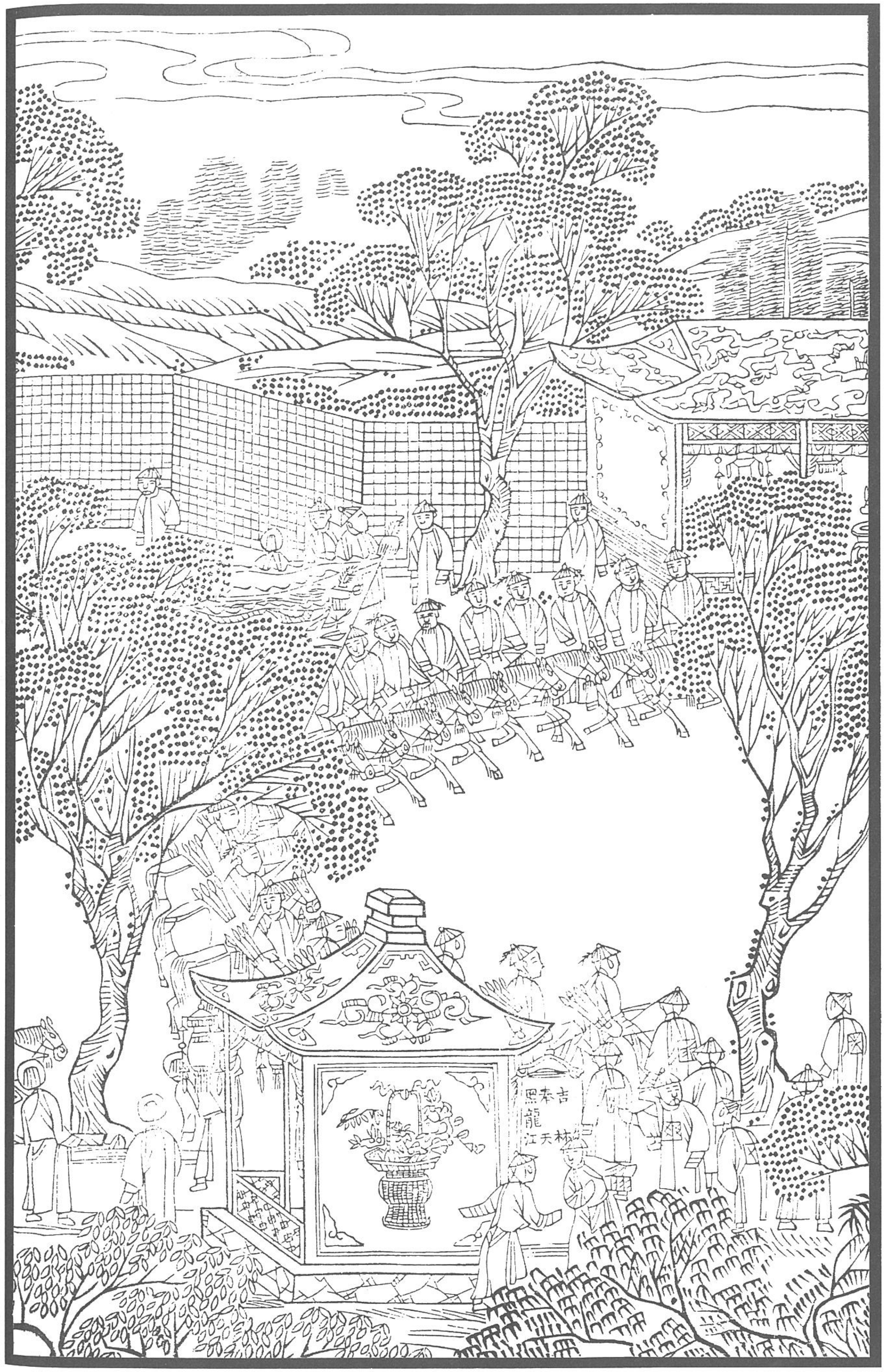


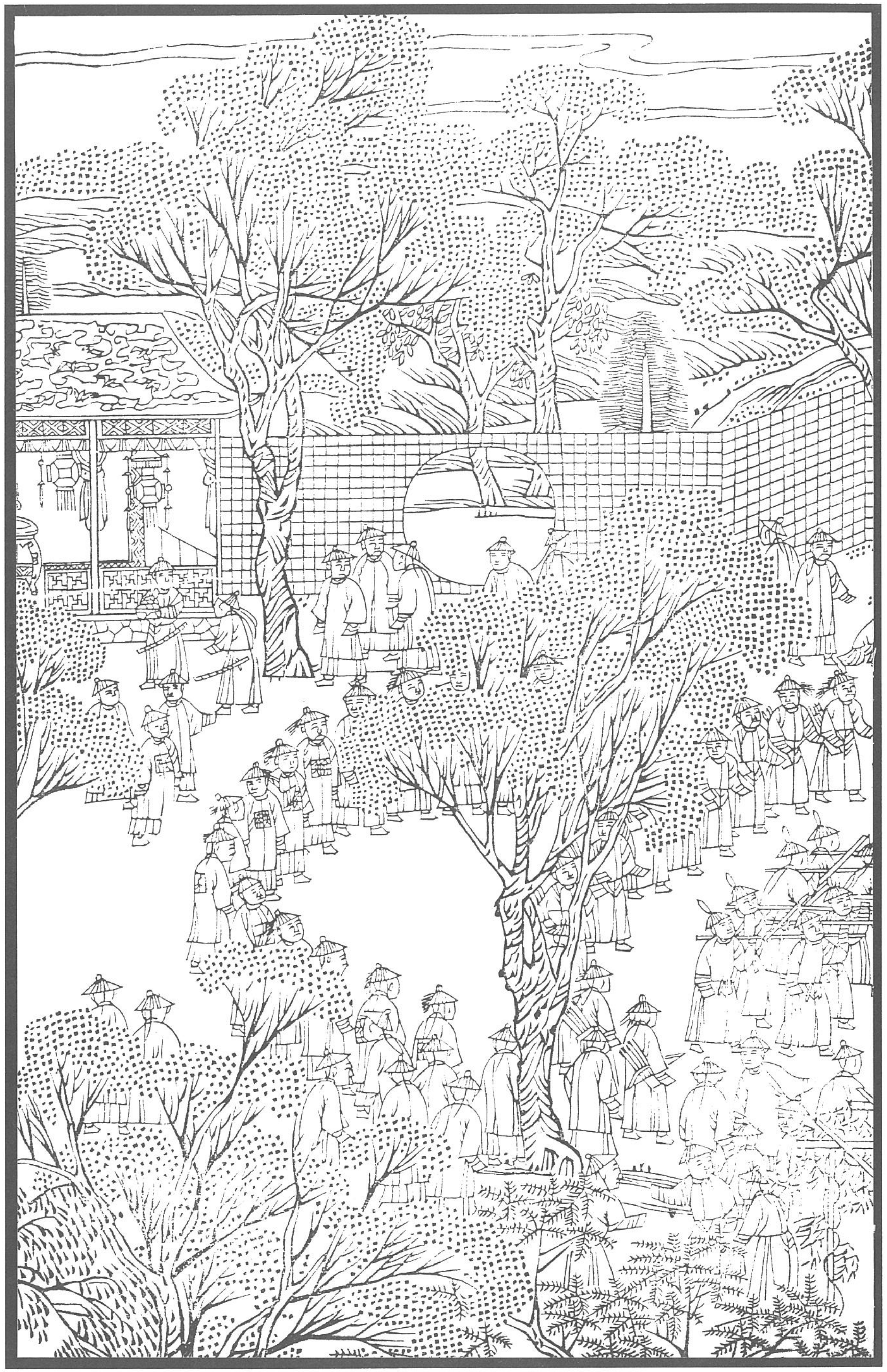


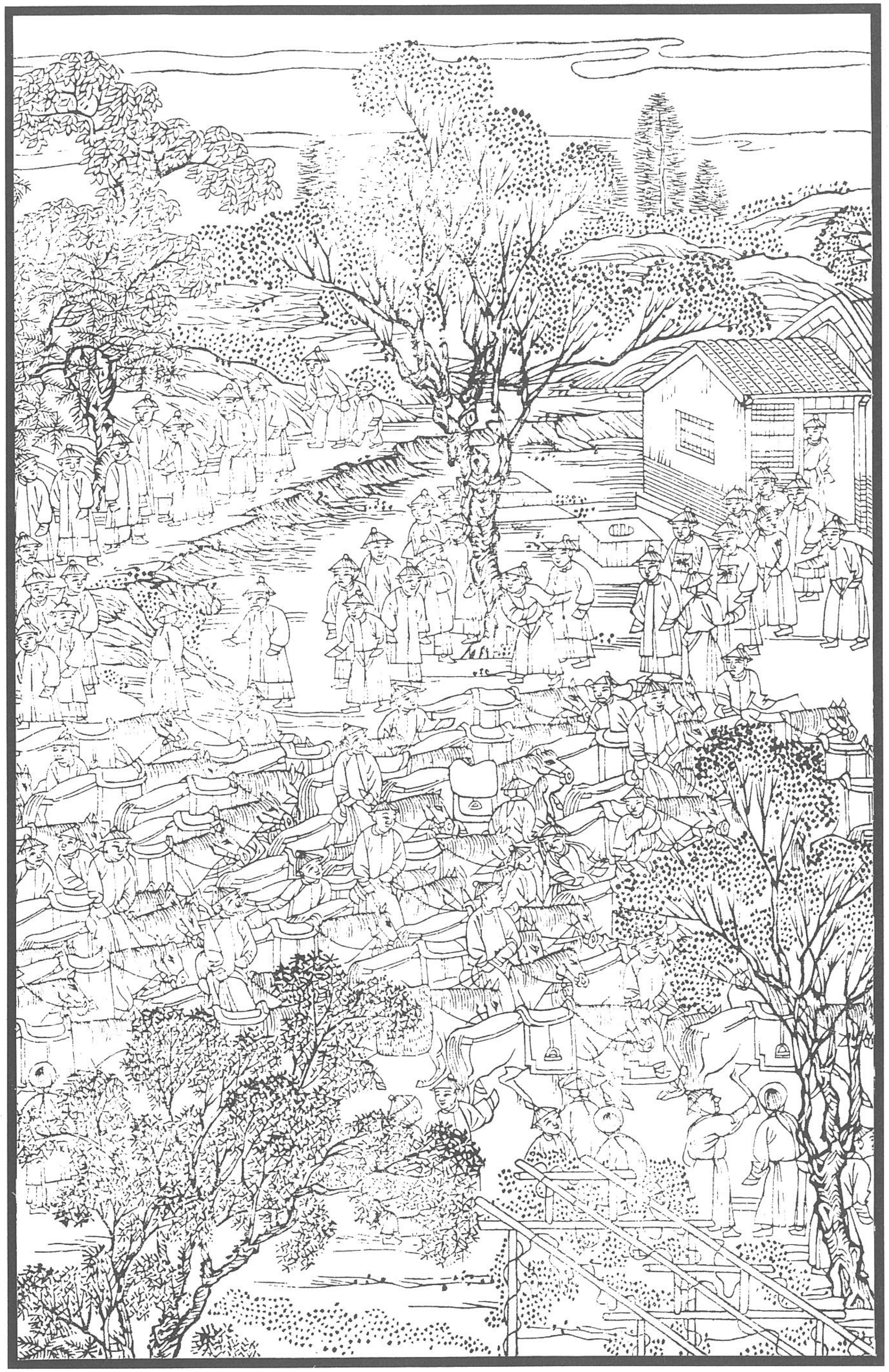


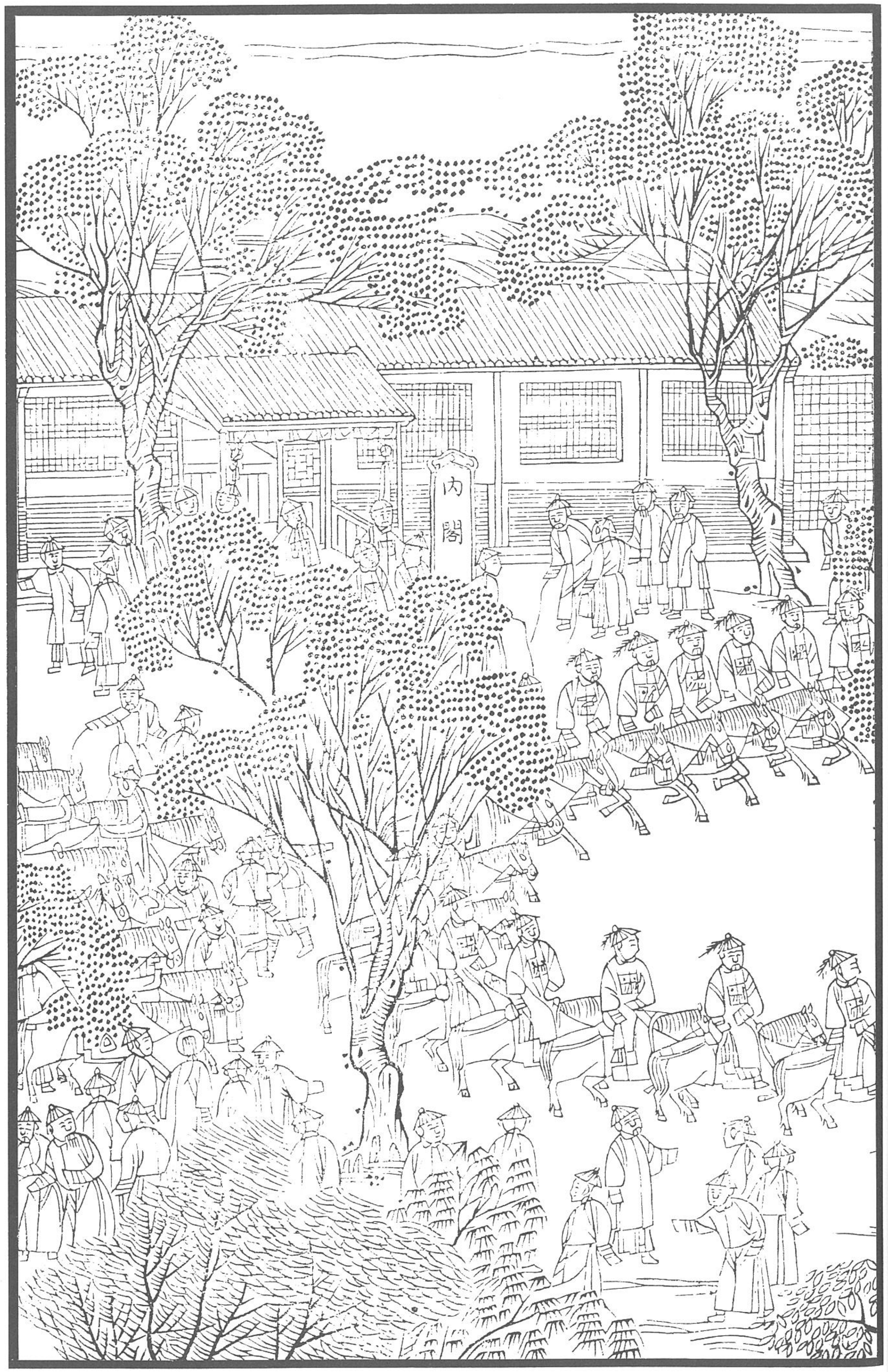


西直門そのものの描写であるが、比較してみれば「康熙版」を巧みに利用したことが理解できる。構図がほぼ同様であるが、手前に描き込むものを増やして、そのままの「写し」を避けていることが分かる。そして興味深いのは、門の内部に多数のラマ僧が見えることである。ここで乾隆帝を各寺のラマ僧が出迎えたとの文字も読み取ることができる。

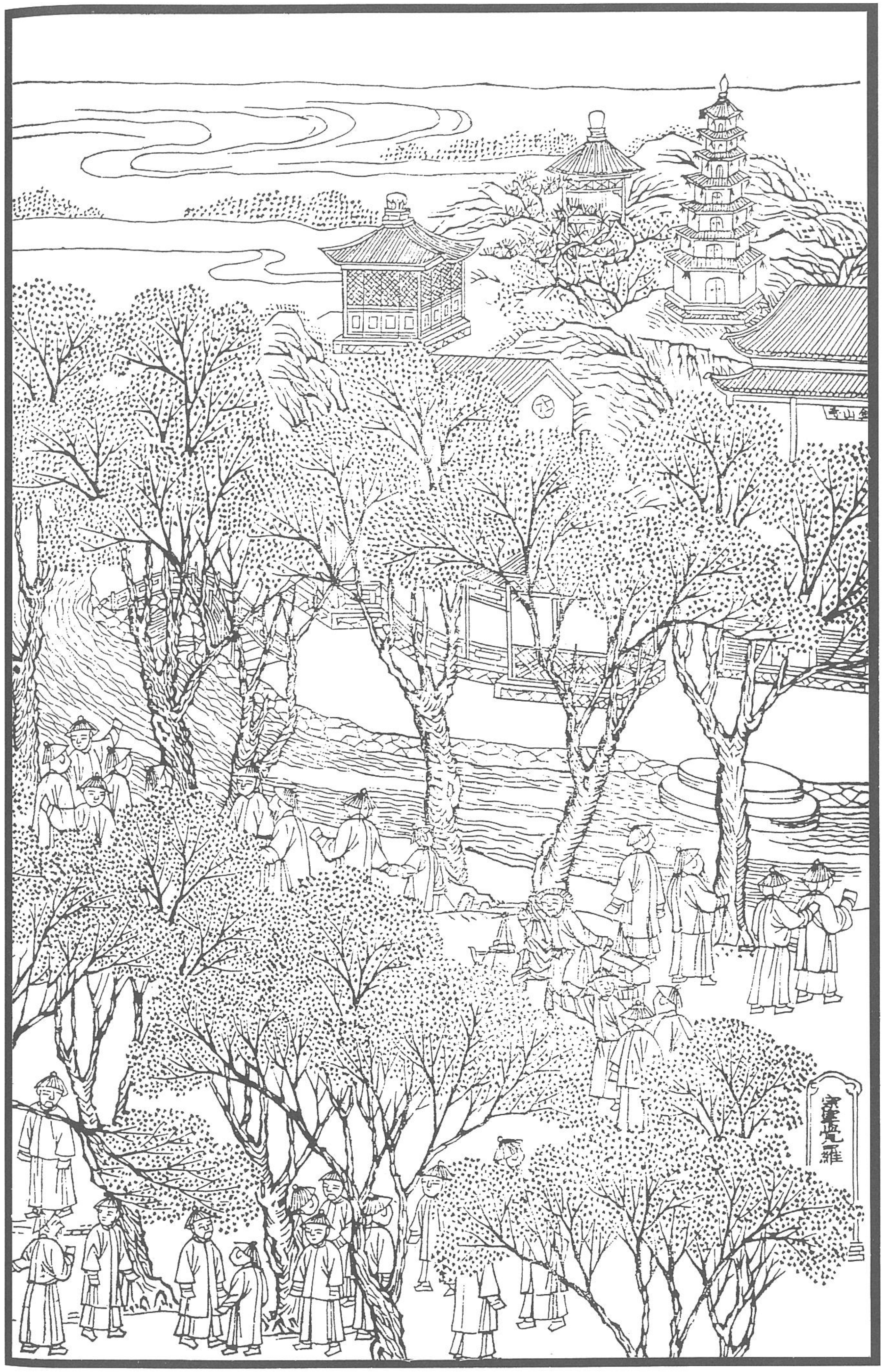

吉林
奉天
黑龍江

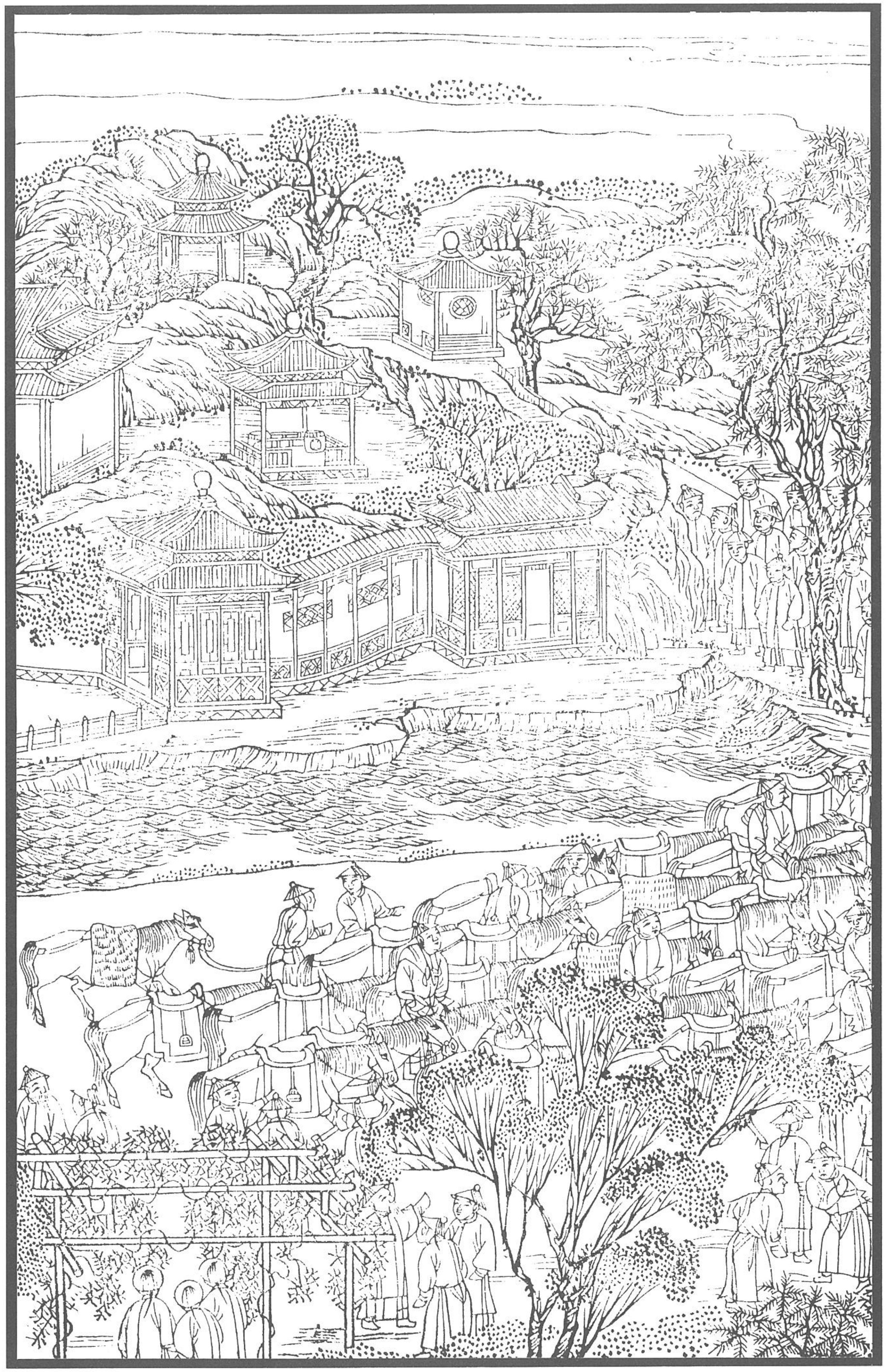






玉輦(皇帝の乗る車)に附く警護の隊列である。「奉輦鑾儀使」四名「扶輦冠軍使」二名を初めとして、「雲麾使」「治儀正」「整儀尉」「旗尉」「民尉」「後扈佩刀大臣」「豹尾班執豹尾槍侍衛」「佩儀刀侍衛」「佩弓矢侍衛」「後管散秩大臣」「前鋒護軍統領」などの仰々しい呼称の職名のお供が威厳を正して続いている。
乾隆版では樹木の描写が単調なことがわかる。

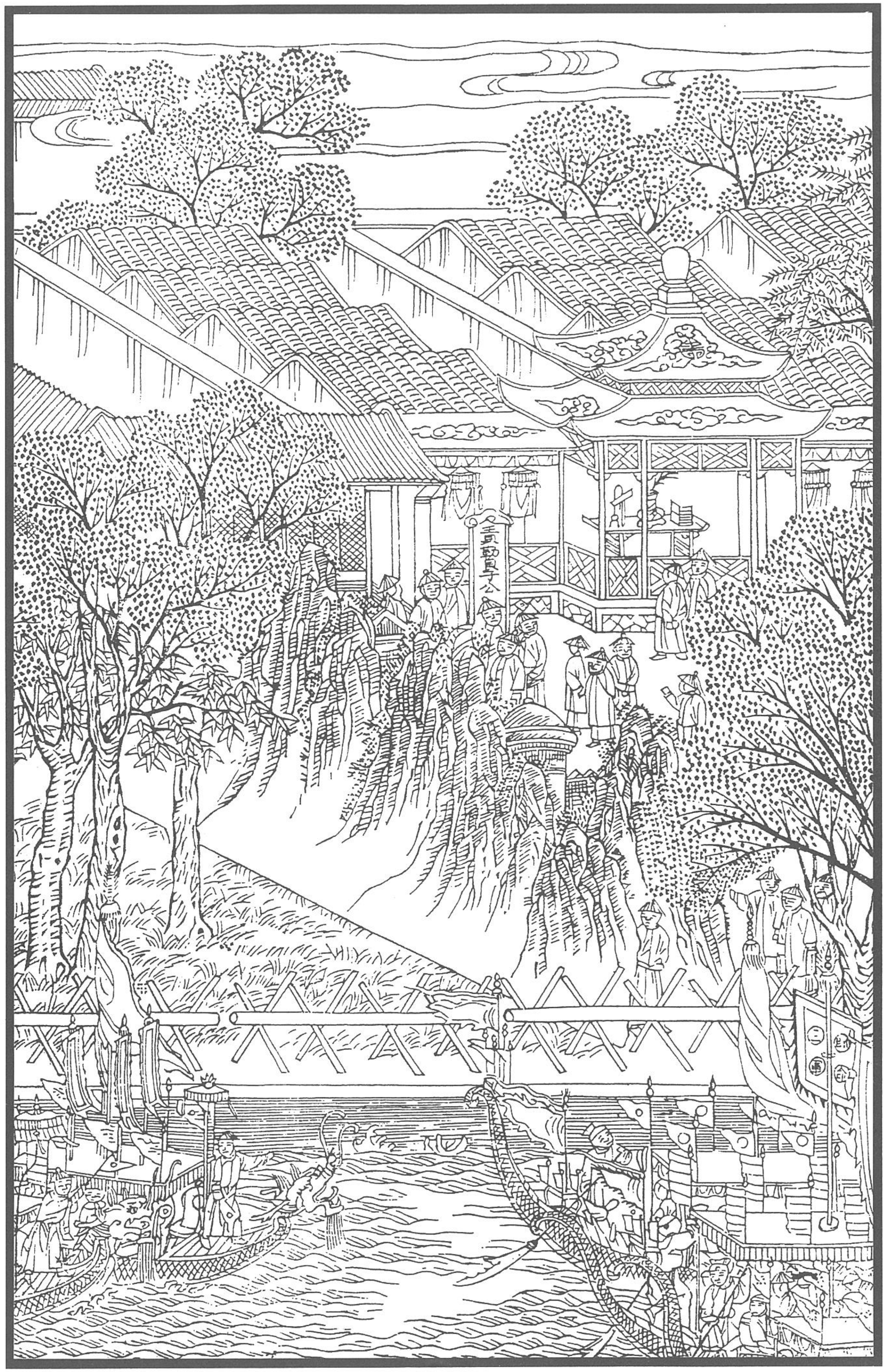


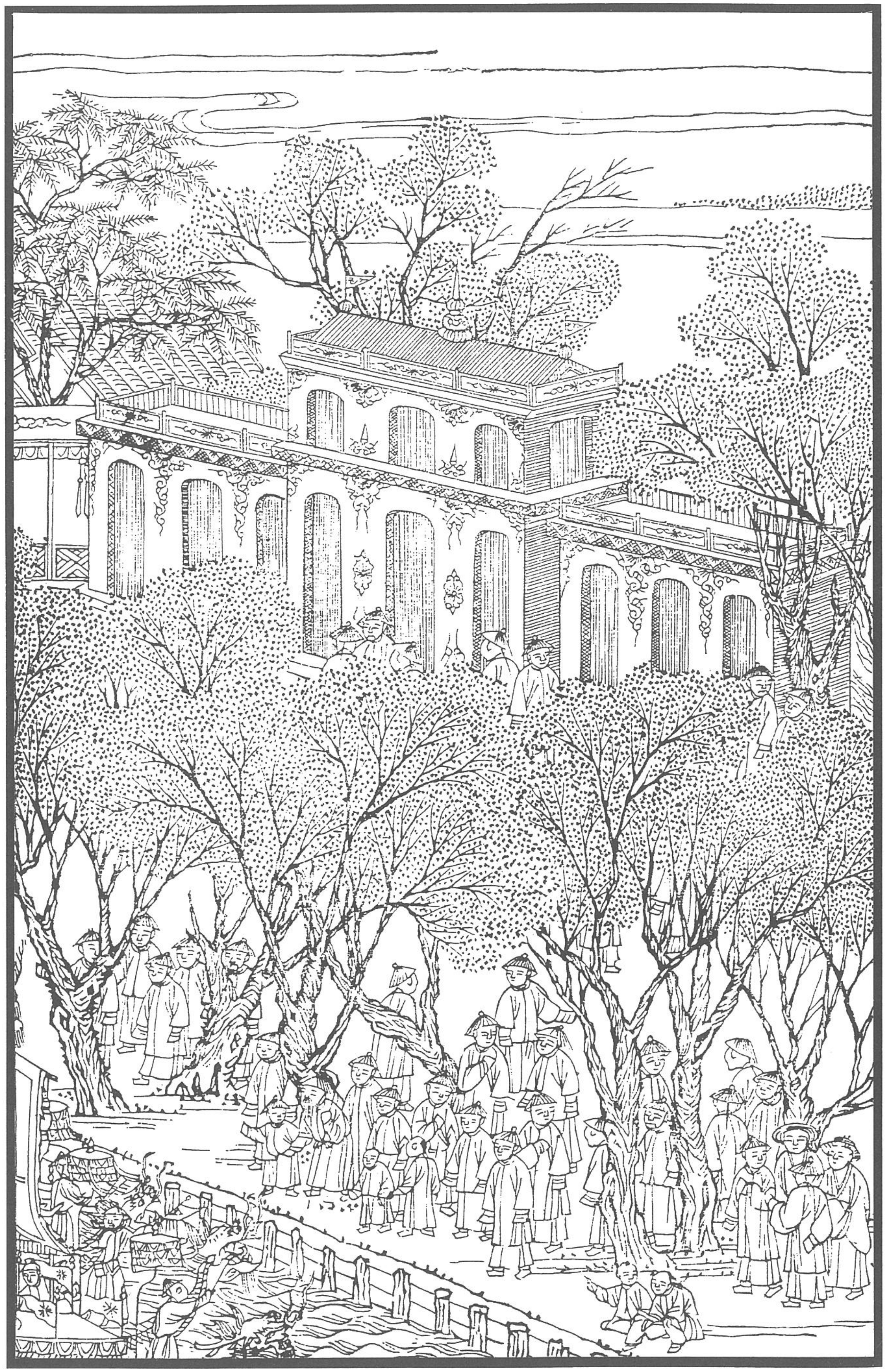


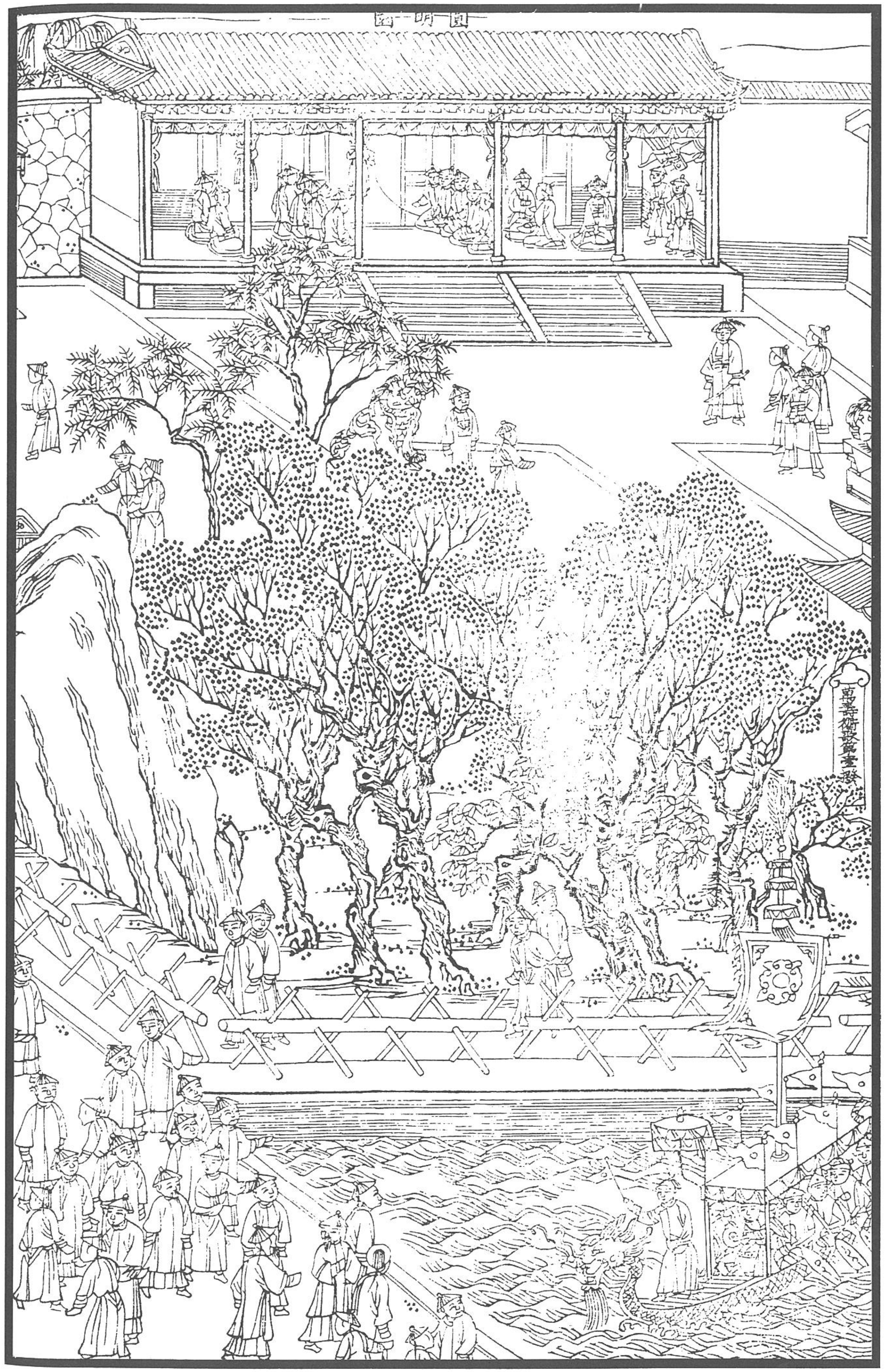
右側の寺には「金山寺」と額がかかっているが、これは「金山景」なのである。康熙帝が行幸して褒め称えた、江南の「鎮江四寺」のミニチュア景である。

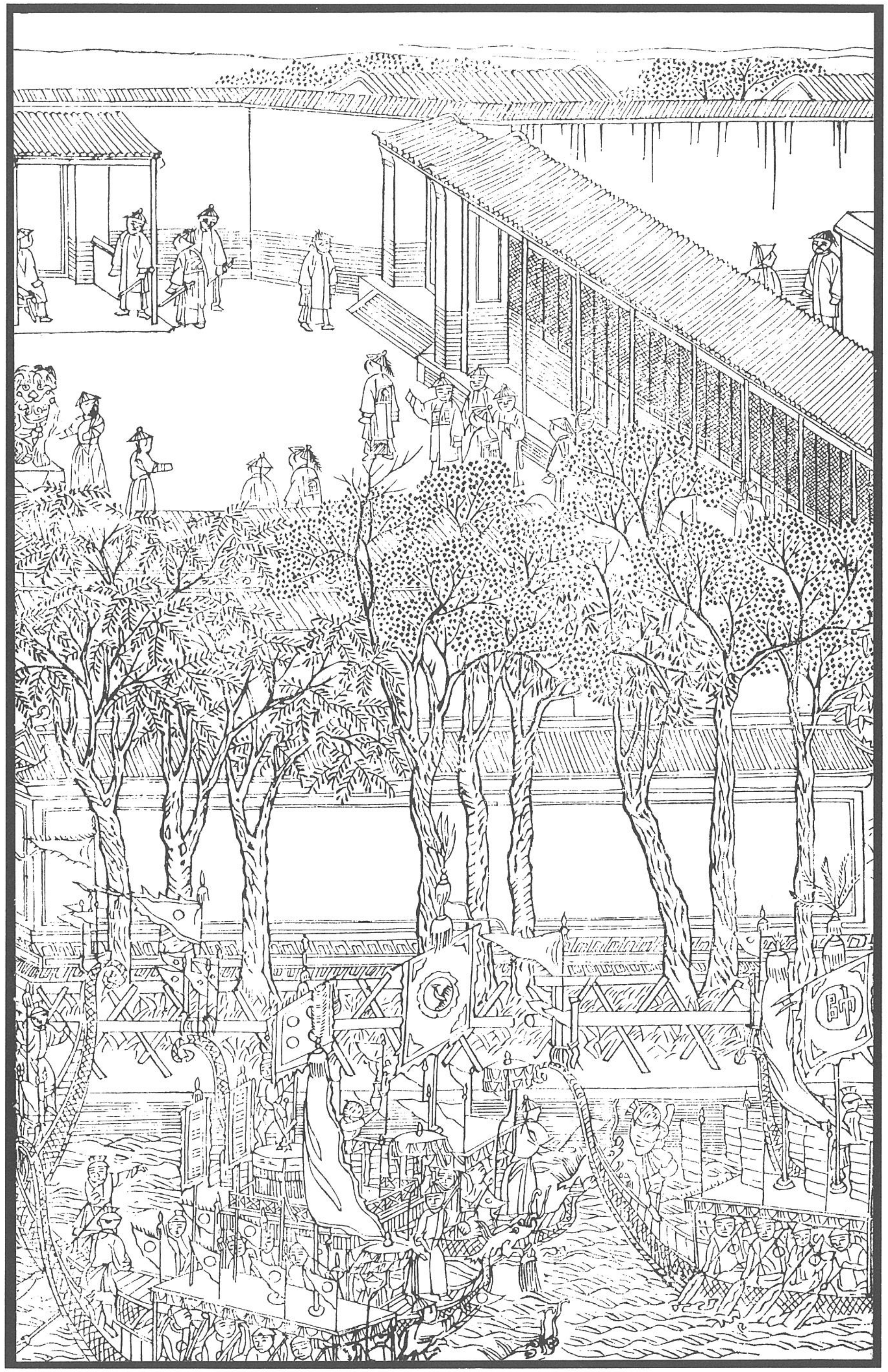
このうち長江に面した金山寺は白蛇伝などでも名高いが、鎮江には他に甘露寺、金山、銀山、焦山などの景勝が集中している。塔は最高峰の「金山塔」である。

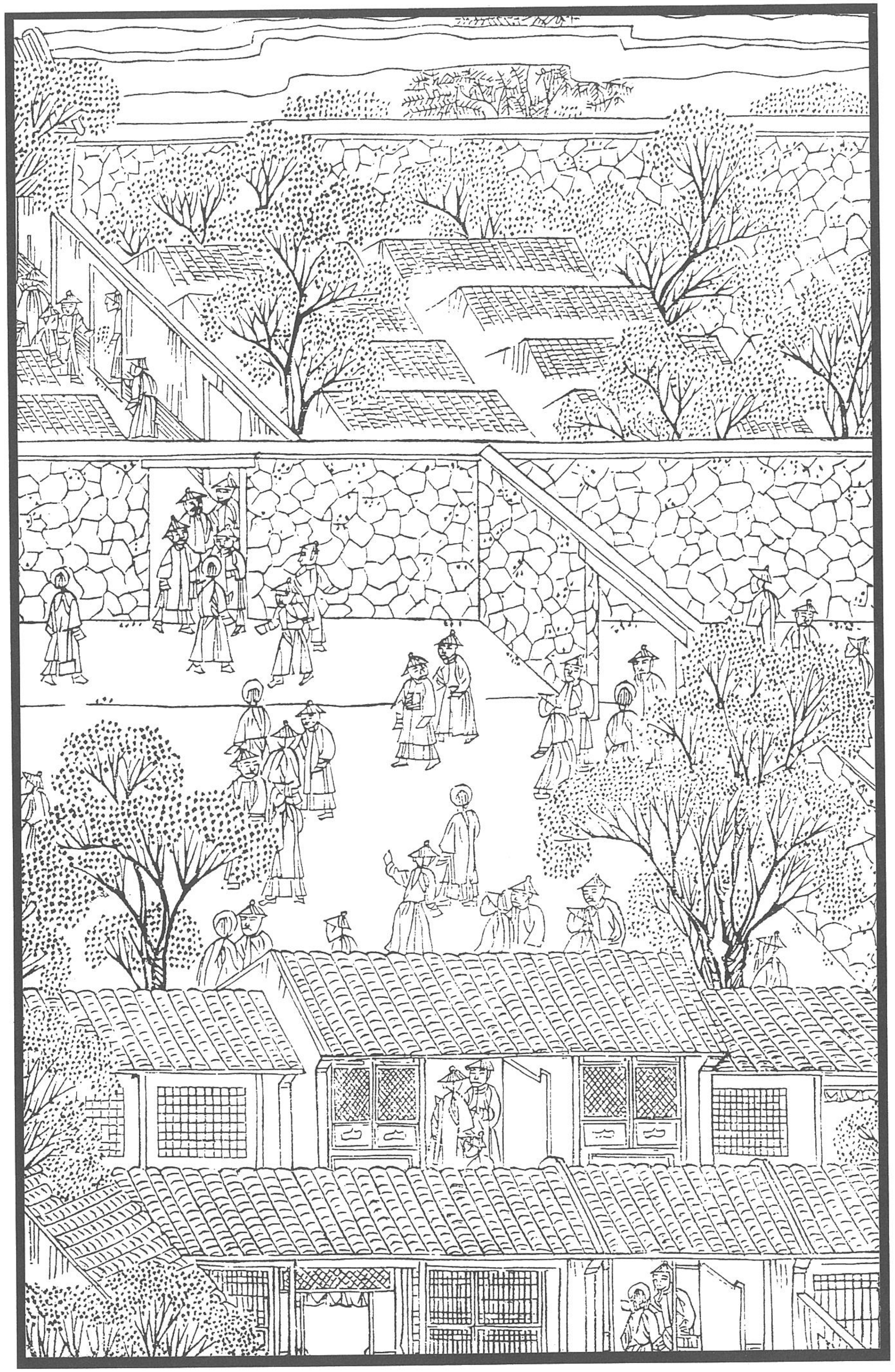
中央には、乾隆好みの「西洋楼」が誂えられ、左手の水の上には、龍舟が九艘並んでいる。九は皇帝に相応しい究極の数である。

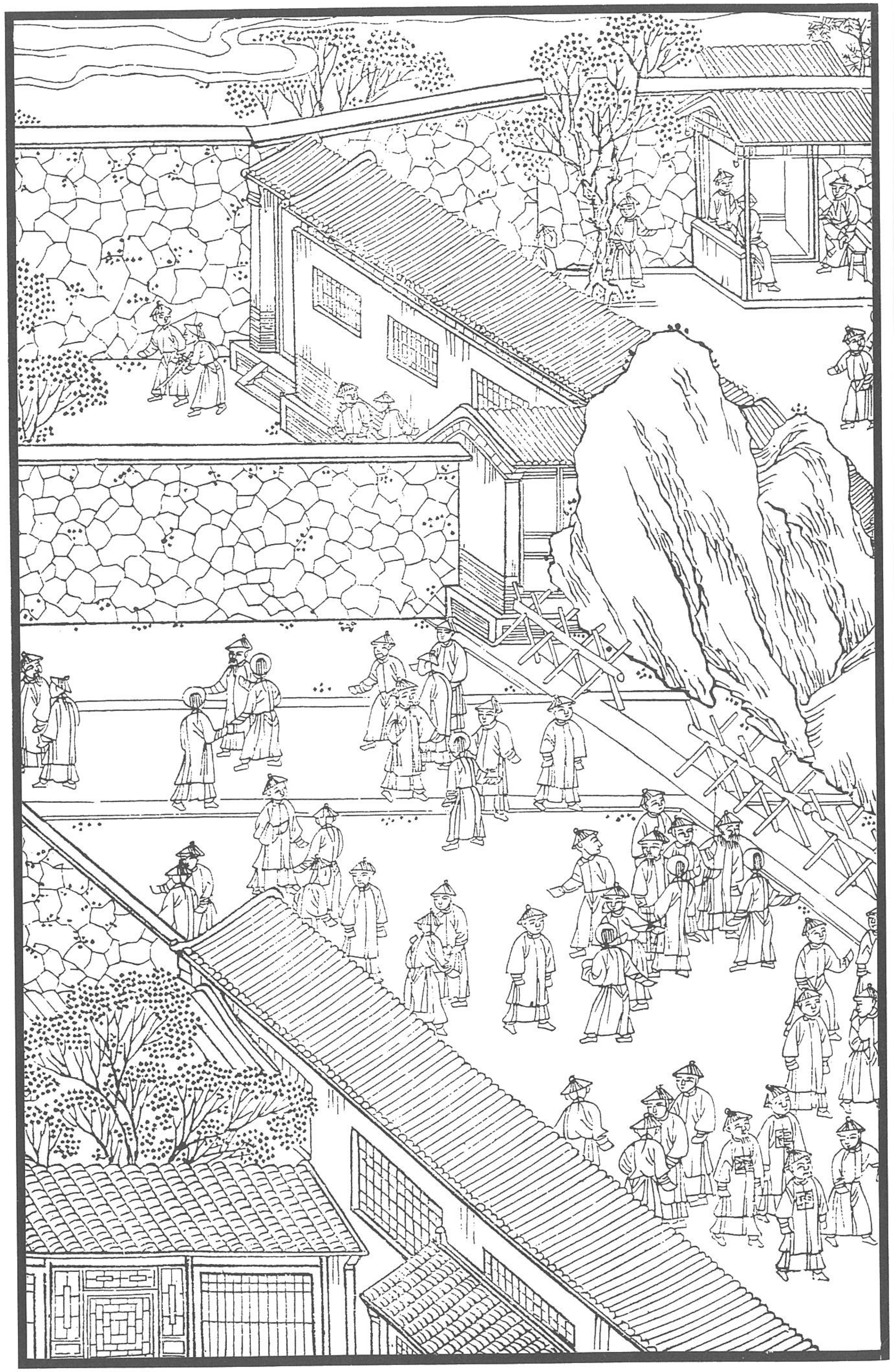




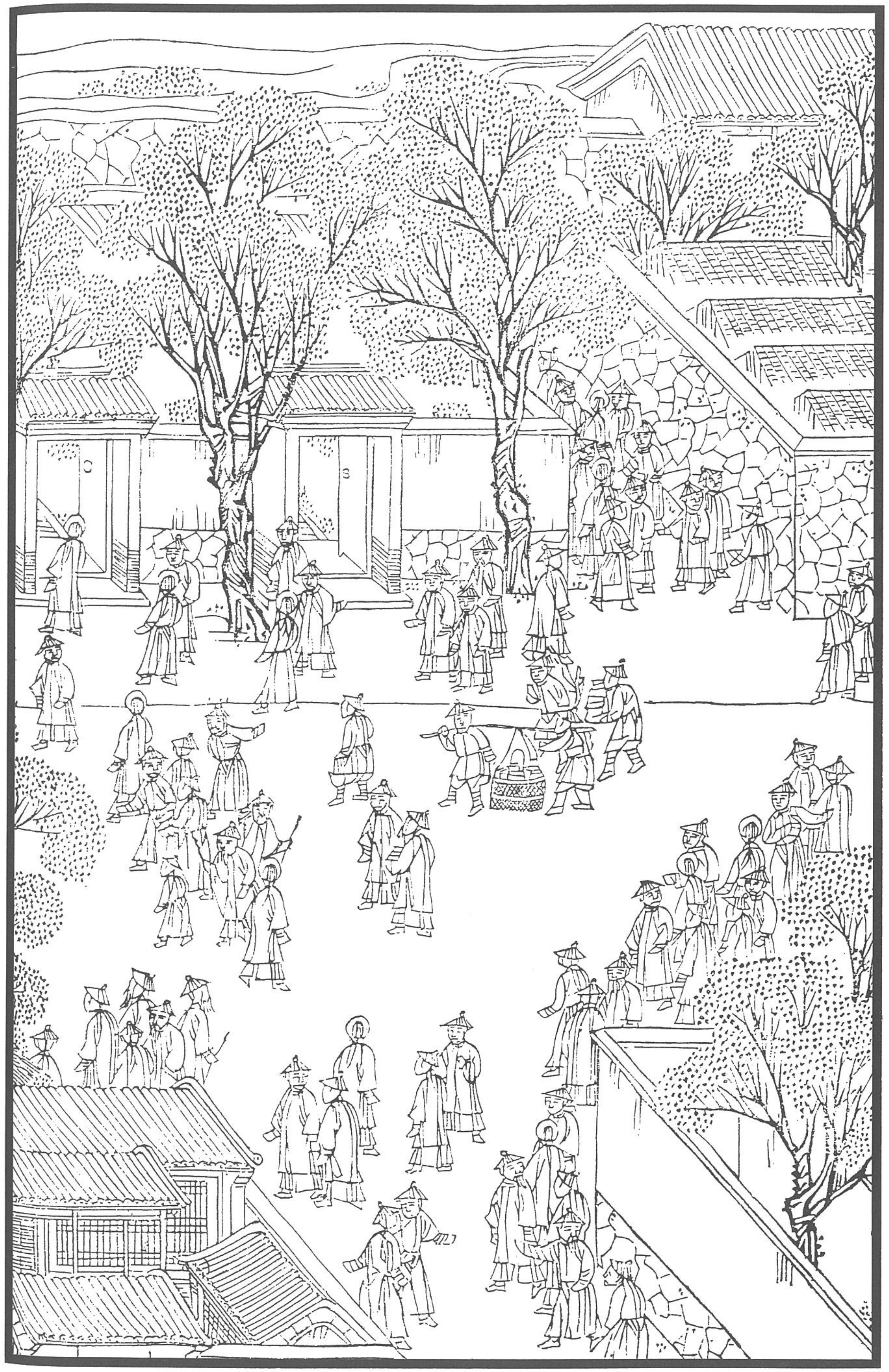

圓明園

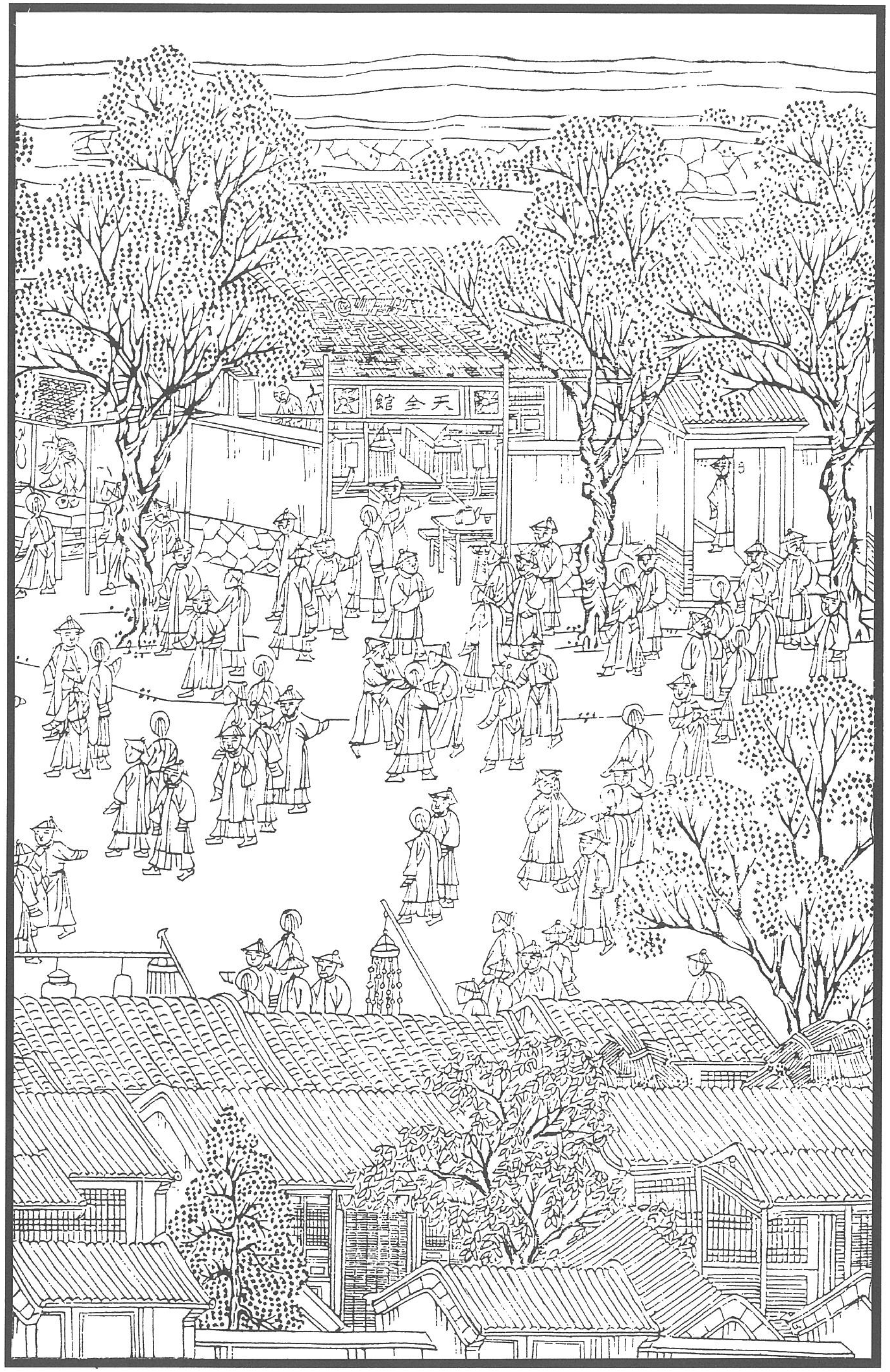

師





既に離宮の円明園の内部である。ここは長春園の宮門と考えられる。行列を送り出して、ほっとした人々が三々五々、出歩いている。




天全館

『乾隆八旬萬寿盛典図』（参考図）終

編者略歴

瀧本　弘之（Hiroyuki　TAKIMOTO）

一九四七年生まれ、東京都出身。著述家、中国版画研究家。研究誌『中国版画研究』（日中藝術研究会刊）主幹。日本民藝館共同研究員。上智大学外国語学部フランス語学科卒業。一九八八年「中国古代版画展」の企画を立案、その実現に尽力。この間北京、上海などで数百点の古籍善本を調査。日本国内でも二十個所以上の研究機関などで、中国版画史関連の古籍等を広範に調査。中国美術史、出版文化史などに幅広い関心をもって精力的に研究を続けている。

●編・共著書『中国古代版画展図録』（一九八八年　町田市立国際版画美術館）『中国現代版画展図録』（一九八八年　町田市立国際版画美術館）『中国現代版画展図録』（一九八七年　O（オー）美術館）『蘇州版画ー中国年画の源流』（一九九二年　駸々堂出版）ほか

●訳書『中国美術の流れ』（共訳　一九九七年　露満堂）

清朝北京都市大図典
―康熙六旬萬寿盛典図・乾隆八旬萬寿盛典図―

一九九八年四月二十四日発行

編　者　瀧本　弘之
発行者　遠　藤　茂
発行所　株式会社 遊子館
一〇七-〇〇六二　東京都港区南青山一・四・二八並ビル四階
電話〇三・三四〇八・二二八六　FAX〇三・三四〇八・二一八〇
印刷・製本　平河工業社
装　幀　中村豪志
定　価　本体七六、〇〇〇円＋税

ISBN4-946525-07-6　C3622